

# 奇譚クラブ

新しい風俗文献誌

6月号



6 - JUNE - 1967

奇譚クラブ

昭和四十二年六月号

定価 三五〇円

THE KIVAN ZUPH

COLLECTED BY THE KIVAN ZUPH

June - July



6月号 ¥ 350

緊縛美態代表作品一二〇葉

一部一〇〇〇円(千共) 略号「美11」

2120191817161514131211109 8 7 6 5 4 3 2 1

上神高首博布筆全引麗股拷猿後口展黒威初な立  
半紗々桜ら団筒裸き身間問ぐ手し示羅大々が樹に  
身なとめれにの猪回に柄柱つ縛ブはなしし目  
をる背のゆ無環宙さ痛りをわりでれ素乳き目  
五縛自深く理に吊れ々の見をの強た肌堅髪は縛  
つし身過に両りにし入上嚙裸縛縛を搏Sり  
にめたを程足に女き浴げま身し人い貴美男で  
くの後さをが首て下股ボるさ麗た形ろめ体で晒  
び掲手ら描せ吊悶レ間し奴れわ双のどる燃誘ら  
る身縛すくるりゆい縛づ黠るし丘美る手ゆうず

木長水山竹須伊川前花川伊四関愛津杉核四加梨  
村野本路野川吹端本坂端吹方谷川川井方茂花

424140393837363534333231302928272625242322

可水高猿美投黒遊背全両双両亀荒木柔柔豊汚哀  
情に々ぐしげ縄園後裸手丘手甲縄のか肌満想  
な濡とつきだに地での吊に吊縛が開きをなを  
目れ挙わ肌し身に両刺り喰り片の肌れ肌び縛け  
つたつにててて手書一の肌れ肌び縛け  
つき後たと映縛ゆ緊首女裸入足緊を陽に切美て  
て手後まらる縛交股身る挙縛強筋に体銀  
見縛手どう菱たれねされ縛間も股縛感熱緊る依を誇  
る麻縛う菱たれねされ縛間も股縛感熱緊る依を誇  
女纏り眼縄脚女るりりゆ縄り美り肌組りる美

花梨田津田竹加藤須山梨川松岡梨福益東松明  
本花中津原野茂川原花端共谷川田浦井川

雨ガシガシの女体  
 雨の中裸で両手吊り  
 豊かな裸の狼の手  
 雨に濡らした狼の手  
 コーソク貴めの狼の手  
 マダラの紐は狼の手  
 黒身立姿の狼の手  
 黒皮装束の狼の手  
 麗しの全裸股間情  
 憂顔の石抱きで情  
 首飾り石抱きで情  
 全身グルグルで情  
 前手縛り美体を情  
 美肌に美縄がかや情  
 裸目の痛に裸足指  
 後手柱縛りにも裸足  
 刺された着と後手縛  
 美貌は全裸で縄正坐  
 全裸股間縛りで正坐  
 誇らしう乳房で強調  
 破られた口もむせか  
 猿轡の口もむせか  
 淫らな裸に泣く諸団  
 泥中の裸に差ける縄  
 操査めの股間強烈縛  
 椅子開股縛りにも女  
 黒麗な美体縛りにも  
 黒麗な股間縛りにも  
 樹間に晒す緊縛身  
 フォレッシュに縛る全  
 真白な肌をなげける  
 全裸をぐるぐる縛る  
 縛りマニアの素人女

川端 水本 厚狹 若原 山路 村田 永本 絹川 絹川 関谷 大塚 熱海 木村 須川 大塚 絹川 山田 花坂 新井 須川 長野 東浦 竹野 愛川 川忍

髻部もち上げて投てもかく  
 美しき脚線に縛り出す  
 破れらるゝシユミ縛る  
 樹間に全裸身を縮めたる  
 逆エビ責めでいたぶる  
 瘦身に痛めた黒縄  
 片足吊りに反る足指する  
 拷問に責めぬかれた末  
 恋人との緊縛のプレイ  
 緊縛折りの撮影風景  
 木馬責めにうめく青景  
 カニ縛りに這いまわる雲井  
 豊かな縛り機身を誇る若原  
 後手割りの痛さ屋上を渡る  
 泥腸器のお宿を全裸女とぐ玉田  
 赤い腰巻の色を愉がめる女津川  
 Sマニ目は男を悩め股役  
 セゾーラ衣服で縛れる情る  
 全探り中股間縛る情る  
 両手つくる戸外縛る情る  
 猿ぐつわをさるる美女  
 白越生中白裸身麗しり  
 初問縛り全裸身麗しり  
 強々縛る女体燃ゆ  
 エキレスの苦悶の情る  
 アタリに苦しむ洗禮  
 始は乙女を美しのす礼  
 絶妙の悲愁を漂す鼻責  
 春丘

## 責められる美女百態

一部 一〇〇〇円(下共) 路号△美10▽

特アート紙グラビア印刷、女体緊縛百ポーズ写真集

〔出演モエル〕 ○一宮百合子○東浦ひかる○美木乃々子  
○増田みゆき○木村洋子○大塚啓子○絹川文代○山原清子  
○長野良子○玉田美佐子の十名の美女。

ビチビチとした若鮎のようなモデル達の素肌に驚しく掛った。これすべて緊縛女体のポーズの中で、とっておきのものはかり百態を選びました。いずれも未発表の力作ばかりです。この一冊にて十名の美女モデルの緊縛姿態一〇〇ポーズが、皆さまのお手元に届くのです。特製アート紙に対する極鮮明なグラビア印刷の女体緊縛のフォトを、心よりお楽しみ下さい。

◎美しき縛しめ「第十集」賣められる美女百態内容◎

15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1
全身緊縛首攻めの場面	縄でくびる豊麗な女身	足首で引回される女	ムチ打ちに悶えぬく	少女羞らいの緊縛裸像	剥がされたパンティ	豊將を無理に晒される	Pタイルに転がされる	逆さ吊りの緊縛女体	インナーベルト縛り	M女注の陶酔の表情	瘦身に縄にくびれる	脚襪美も露わな女体	松樹に晒された奴隷	立木の枝から逆さ吊り
(東浦)	(東浦)	(東浦)	(東浦)	(一宮)	(一宮)	(美木)	(美木)	(増田)	(増田)	(増田)	(木村)	(木村)	(木村)	(木村)
30	29	28	27	26	25	24	23	22	21	20	19	18	17	16

30 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16

色づいた乳首を晒す	(大塚)
全裸後手縛り豊満女体	(玉田)
二の腕に喰い込む紐	(木村)
鏡に写す縛られた裸身	(大塚)
目玉と装飾にあえぐ	(東浦)
全裸後手足首連繫縛り	(玉田)
長髪をアッポに	(長野)
華麗な刺青裸身強縛り	(山原)
後手縛りに空ろな表情	(木村)
柔肌に喰い込む細目	(山原)
後手網縛りの美女裸体	(稻川)
綺麗な若々しい裸身	(一宮)
片足吊りにあう女体	(大塚)
後手吊りに喘ぐ全裸身	(東浦)
緑の柱に晒された女	(玉田)

女ドレイの品定め（大塚）  
 強烈股間縛りに泣く女（東浦）  
 初めて縛りに恥じる（一宮）  
 浴室に見た驚異の縛り（大塚）  
 乳房の巨大なる縛り（山原）  
 尻りを嫌がるモデル嬢（玉田）  
 真紅の腰巻でポーズす（山原）  
 賢づかみにされた黒髪（東浦）  
 麻縄縛りにのびた女体（大塚）  
 開孔器による鼻責め（大塚）  
 エビ責めに耐えぬく女（東浦）  
 豊胸を黒帯に托して（長野）  
 雪白の美肌を晒す裸目（大塚）  
 人身御供の緊縛全裸像（大塚）  
 股間縛りに投げ出す脚（一宮）  
 エビ縛りに苦悶の表情（大塚）  
 伸びやかな二本の脚線（一宮）  
 滑車後手吊りの準備（大塚）  
 ゆみきの素顔と緊縛像（増田）  
 竹に拘束された洋子嬢（木村）  
 雑家の縁に縛られる（大塚）  
 裸く白肌を晒す全裸身（相川）  
 身動きできぬ後手縛り（大塚）  
 腰巻を剥きとられる（木村）  
 大の字逆さ吊り女体（増田）  
 美しい裸身からむ縄（美木）  
 若肌のすべてを晒して（一宮）  
 後手股間足首縛り（東浦）  
 浴室の荒縄縛りにあう（山原）  
 股間縛りと腰縄縛り（木村）  
 緑窓の庭を背景にして（大塚）  
 立木で両手吊りにあう（大塚）  
 縄の反応とその表情（一宮）  
 強烈縛りである弓反り（大塚）  
 麻縄は豊かな肌を抉る（東浦）

恍惚境のMの表情 (山原)  
 胡坐縛りでもたえる (須川)  
 股間縛り正面で立つ (大塚)  
 Mチ打ちを願うボーイズ (木村)  
 伸びやかな女性の細目 (一宮)  
 責めぬかれた股間縛り (一宮)  
 後手滑車吊りにあう女 (大塚)  
 縛られて歩かされる (大塚)  
 電甲縛りと股間縛り (美木)  
 正坐で放置する縛体 (木村)  
 夫から鼻責めを受ける (増田)  
 可愛い小悪魔の表情 (一宮)  
 徐々に吊られる片足 (大塚)  
 強烈縛りで受ける鼻責 (美木)  
 均斉のとれた美麗縛体 (大塚)  
 室の隅に逃げた女奴隷 (美木)  
 首縄股間縛り狼麁の表情 (美木)  
 可愛い裸身の鑑賞 (木村)  
 セーラー服の後手縛り (大塚)  
 後手股間縛りで引返し (一宮)  
 海老責めで耐え忍ぶ (木村)  
 縄でびった柔肌地獄 (一宮)  
 台上に晒す緊縛裸身 (山原)  
 火あふりにあう女囚 (大塚)  
 アグラ縛りで頑張る女 (大塚)  
 がっちりした後手縛りで (東浦)  
 柱縛りでもかく清子 (山原)  
 石橋の上に放置される (玉山)  
 Mチ打ちに悶える女性 (大塚)  
 狼麁を三連続に映す (大塚)  
 庭園を引き回される (山原)  
 首縄にあえぐ哀婉表情 (大塚)  
 太腿が柔肌をくくる (大塚)  
 大の字荒縄ハリツケ (山原)



△甘い鞭▽にもだえる関谷夫人の艶姿

両手吊りで悶える

大手札三枚一組 四〇〇円  
関谷富佐子 略号△もえ▽

両手を八の字に肩居に吊り上げられ更に片足を高々と一直線に吊られた夫人の臀部に激しく炸烈するムチに悶える感極まつた表情は全く絶妙といつてよい。

強烈なる甘いムチ

大手札三枚一組 四〇〇円  
関谷富佐子 略号△もゆ▽

柱に向きに縛られて前面に炸烈するムチにのけぞり、或は柱に前手縛りで尻に強烈な一打を受けて全身をビクビクふるわせて感動にむせび泣くマニア垂涎の表情。

狂い哭く美貌夫人

大手札三枚一組 四〇〇円  
関谷富佐子 略号△もよ▽

後手に縛られて床の上にとろろった夫人の裸身に雨あられと降る鞭にエビのようにびんびん跳ねて全身をふるわせ、感泣の表情はマゾ女性のマゾの極致を表す。

半吊りでムチ打ち

大手札三枚一組 四〇〇円  
関谷富佐子 略号△もす▽

全体重を細いロープにかけて吊り下げればズルズルと縋は伸びて僅かに足の爪先が床に着くところ

を革ムチをふるって背尻脚と乱打すれば揺れながら泣声を挙げる。

逆エビの味に感泣

大手札三枚一組 四〇〇円  
関谷富佐子 略号△もせ▽

うつ伏になつた後手縛りの女性の両足を持ち上げて逆エビに折り曲げ盛りあがつた豊満な臀部にムチをくれれば、その痛みに美しい夫人の顔面はツツツとゆがむ。

ムチの一打に反る

大手札三枚一組 四〇〇円  
関谷富佐子 略号△もれ▽

高手小手縛りの後手首を滑車で吊り上げ爪先立たせた女性の臀部を強打すれば、全身を弓のようにはね返えらせ、尻を突き出してエビのように前かがみになる。

関谷富佐子の陳列

大手札三枚一組 四〇〇円  
関谷富佐子 略号△もる▽

「関谷富佐子」という名札を前にぶらさげて後手縛りに立たされた女性体は愛用のムチを胸にして、その時の表情を顔面にみながら、美しい全裸の女性を陳列する。

尻立ての鞭撻姿態

大手札三枚一組 四〇〇円  
関谷富佐子 略号△もて▽

後手に縛られてころがった夫人

の臀部に痛打を加えると一打毎に臀部が上つてきて、やがて力まかせにめつた打ちすれば、真赤に染った尻を高々と突き立ててきた。

片足吊上げで喘ぐ

大手札三枚一組 四〇〇円  
関谷富佐子 略号△もな▽

口、咽喉、胴、腰と柱にきりぎりしと縛りつけられ、片足を前に差し出して水平にまで引き上げられた女性体に加えられる鞭の痛撃は彼女の全身を悦虐の極致へ誘った。

私をムチ打ってネ

大手札三枚一組 四〇〇円  
関谷富佐子 略号△もね▽

「私をムチ打って下さい」というタイトルのをぶらさげた全裸の女性体を八の字の両手吊りに晒して爪先を立たした夫人のお尻に悪魔のようなムチの快打が続けられる。

脂ぎった女体縛り

大手札三枚一組 四〇〇円  
関谷富佐子 略号△もむ▽

益々脂肪がのって豊かさの増した女性にきりきりとロープを掛けて夫人熱望のムチをふるえば、痛さに耐え、痛さに甘え、魅力的な姿態が脂ぎった肌をさらけだす。

鞭は柔肌に炸烈す

大手札三枚一組 四〇〇円  
関谷富佐子 略号△もろ▽

さあ、もうどのようなにでもして

と豊満な臀部を突き出してムチを待望する女性に対して、手もしびれるばかりに皮鞭をぶち当てれば最高の被虐の境地が展開する。

滑車吊りで甘い鞭

大手札三枚一組 四〇〇円  
関谷富佐子 略号△もき▽

滑車の後手吊りの女性に対してあくなき暴虐のムチは、その限りなき豊かな反応を築きみつつ、一打、狙い定めて適確に効果を求めて女性体の各所に炸烈する。

両手万才に鞭打ち

大手札三枚一組 四〇〇円  
関谷富佐子 略号△もこ▽

両手を万歳に吊られて爪先立たた女性体は、ここを先途とムチ打ってくれとはかり、無防備の尻をさらけだしている。一打又一打、激しい反応は全身を戦慄させる。

狂う鞭に哀切表情

大手札三枚一組 四〇〇円  
関谷富佐子 略号△もみ▽

ムチ打たれた時の夫人の緊迫感のある表情をこれほど新鮮にキヤッチした写真はないでしょう。マゾ女性の真髓を、この豊かな表情から受けとって下さい。

お申込みは大阪阿倍野局私書箱

第十四号——箕田京二へ——





新しい風俗文獻誌

KITAN CLUB

昭和四十二年六月号

〈第21巻第6号・通刊第228号〉

# 奇譚クラブ 6月号 目次

## ◇奇クサロン

「不美の美」藤原正義 8  
「(10) 愛のゆくえ」向子 9  
「(11) 愛のゆくえ」向子 9  
「(12) 愛のゆくえ」向子 9  
「(13) 愛のゆくえ」向子 9  
「(14) 愛のゆくえ」向子 9  
「(15) 愛のゆくえ」向子 9  
「(16) 愛のゆくえ」向子 9  
「(17) 愛のゆくえ」向子 9  
「(18) 愛のゆくえ」向子 9  
「(19) 愛のゆくえ」向子 9  
「(20) 愛のゆくえ」向子 9  
「(21) 愛のゆくえ」向子 9  
「(22) 愛のゆくえ」向子 9  
「(23) 愛のゆくえ」向子 9  
「(24) 愛のゆくえ」向子 9

## △本文▽

- 本紙自筆の徹底  
SMカメラ・ハント △関谷富佐子の巻▽ 編集部 (25)  
「甘い鞭」 辻村 隆 (26)  
「手記」かなわぬ夢 太木 淳 (44)  
私のマゾ雑記帳 馬場 好男 (46)  
連載サディズム小説△第三十章 女囚ミシュリーヌ(十)▽ 西条 操 (56)  
心傷たむ遍歴 井風呂秋於 (57)  
「あきこ登場」から 海野三津男 (72)  
浪花の夢の物語 能美 礼 (84)  
久男の結婚 (後篇) 千草 忠夫 (99)  
懸賞告白入選作品  
体験記「責め絵のある関係」 編集部 (25)  
縄のある蜜月△四▽ 編集部 (25)

## 懸賞入選作品

「蛇性の女」——女の刺青に魅せられて……小谷 和勝 (11)  
責め演劇見である記……横溝 仁 (11)  
日本婦人部隊奮進録

「辺城の謠」……黒淵 嬰一 (11)

原作・マゾヒスティック・ストーリー……芳野 眉美 (11)

「男性失格」……パイプカットに……黒淵 嬰一 (11)

「戯文」ある男たちの情……黒淵 嬰一 (11)

新種M態位考……保藤 久人 (11)

怪説・義仲をめぐる三人の女……黒田 寿 (11)

告白・手記△新妻の切腹……山岡 里江 (11)

舟田コンサルタント事件簿NO1

秘 東京情報 (後篇)……夜乃 探郎 (11)

M漫筆「馬のり娘」……鞍 良人 (11)

摘 性風俗資料入門 戦後篇(2)……齊藤 夜居 (11)

「好色文学批判」——「米蘭花」の解題……齊藤 夜居 (11)

「奇書」——「奇書」について……齊藤 夜居 (11)

或る派主婦の告白

「十七の娘に浣腸」……近藤 映子 (11)

鬼六談義 三文SM人生論……鬼六 (11)

カメラ・ルポ△笹原八千子の巻▽ 山本 一章 (11)

「この女」ひとと……山本 一章 (11)

連載S小説「花と蛇」続篇第三十一回……鬼六 (11)

映画にみる縛り……丸木戸佐渡 (11)

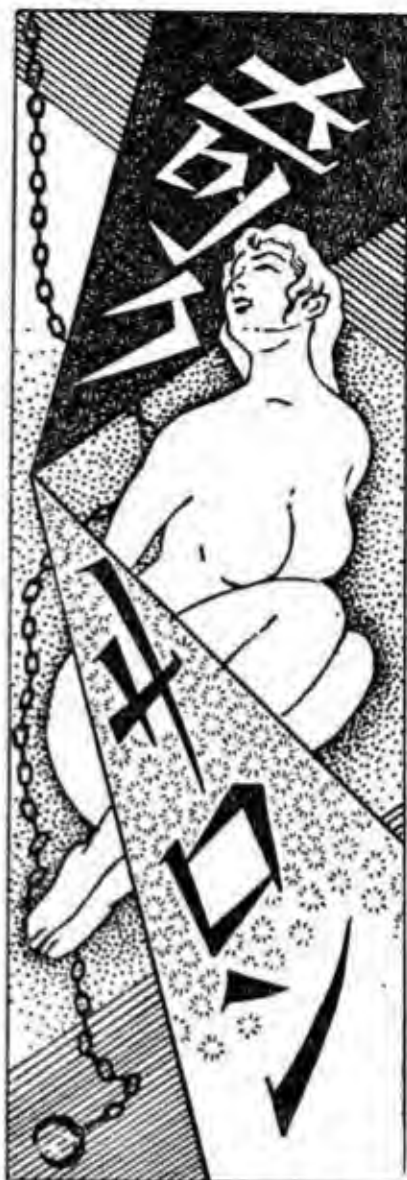
マゾ日記……早木 夢二 (11)

読者通信……編集部選 (11)









男性が思春期に達すると当然のことながら異性である女性を敏感に意識する。柔い曲線を描く美しい女性に対して言い知れない憧れをいだくものなのである。私も年頃になって、その頃氾濫した女性ヌード写真に対して関心を持っていたが、或る夏の暑い日、何の気なしに読んでいた『読切ロマンズ』という雑誌に、八縛られた女Vの写真が載っていたのを見て一八〇度の転回を遂げた。

その写真を見た途端、私の頭は血が上ったようにカァーッと熱くなり、心臓はドキッドキッと早鐘を打ち、自分の存在さえも忘れてしまう程のショックを受けた。私の胸の中に眠っていたSMの心が俄然このとき目を開いた記念すべき一瞬だった。この時から、私は「女性を縛る」ということに関連してあらゆる記事、読物に注意し

SMの痺れるような美しい世界、いな女性緊縛という不美の美に対して限りなく執着し離れることが出来なくなっただけである。

先ず手始めに、私は手近かな自分に「縛られた女」の分身を発見したのである。決して女装そのものに関心を持っていたのではなかったが、自分を縛られている美しい女性になぞらえて、そこに演技する者と観賞する者との二役を果すことによって、自己満足を得ていたのであった。

鏡の前で一人の女が作り上げられてゆく。そしてその女が縄で縛られて苦悶に身をくねらす女に変わってゆくのである。数人の男からいたぶられ、責めぬかれて恥かし

めを受ける美しい縛られた裸の女に対して別の私は歓喜の眼をもつて、じっと眺めているのである。

だが、しかし、前記したように私は女装そのものに関心はないし自縛もそれ自体好きではない。まして、自分自身が縛られて、本物の女性にいいめられたい等というMの気持は毛頭もっていない。私はやはり、八若くて美しい女性の柔肌を縄で締め上げて赤く染め上げ苦悶させることVに強い憧れを持っている。それも八責めるVというよりも、縛り上げられて、恥じらいと不安におののき、おびえる美女のポーズに、なんとも言えない魅力を感じているのだ。

従って、私の八女体緊縛美Vに對する執着は、当然のように「縛られた女」の絵や写真に指向されていった。単なるヌード写真では得られない最大の歓喜を私はそこに見出したのであったが、不思議なことに、私は自分で手を下して「女を縛ってみたい」とか「責めてみたい」とかいう気は起らなかった。「縛られた女」の姿に限り

ない憧れと痺れるような興奮を感じていながら、自らは行ってみないとは思わなかったのである。

私のコレクションは日増しに数を重ねていった。それらの絵や写真、決して他人に誇るような性質のものではなかったが、私は非常な熱意で倦きもせず、あらゆる新聞雑誌単行本などから切抜きを集め、求められる限りの手を尽して写真を購入した。勿論それは玉石混淆、その美しさに胸を躍らせる程のものも少くなかったが、中には直ぐにでも捨ててしまいたいと思う程気に染まないものも混っていた。しかし私は、それを丹念にスクラップブックに整理し、入手年月日順に、或は項目別に分類した。今では、そのブックが数十冊にも達し単に繰るだけでも大変な時間がかかるくらいに達している。妻も「変わったものがお好きなのですね」と言っていたのが、最近では私の熱意の影響を受けてか「貴方の好きなもの」といって時々発見してきてくれる。かくして私のコレクションは次第に数を増し私の目を楽しませ、心をなごませてはくれるが、他人や一般の社会に対して、何らの害悪を流すことはないのである。

## 不美の美緊縛美

藤坂正義



## サロシ楽我記

辻村 隆

(第三十六回)

箕田編集長の提案で、私と山本章氏の対談の運びとなったが、大阪キタのスーパー料亭Kでの初会合が二月十八日の夜のことであった。対談はテープレコーダーの中から、適当に取捨選択したが、

実際のお喋りには、箕田氏も随分活発にアレコレと喋っているし勿論私だって論をまたない。山本氏が一番おとなしかったのであるが、実際はもう一人、この料亭の美人ホステスが、私達の座にはべっていたのである。フオトが出始め、話が佳境に入るや、その彼女加代子さんは哑然として、酌する手も忘れて、時々ワケの分らぬ言葉が出ると、横から質問するほどに興味を持ち出していた。細っそりとした和服の彼女の眼は奨められた酒の酔いでないうるみを帯び出していた。話がモデルあれこれに移った頃、私は酔余に、加代子さんをフト縛ってみたくなった。「いっぺん、あんたも、このフオトのように縛ってあげようか」と冗談めかしていうと、

「あらッ、私とてもヌードに自信ありませんわ。それにいつ店の女の人が入ってくるか分かりませんもの。でもこの着物の上からなら、少しぐらいなら構いませんけど」と仰有る。

異様なブレイの行為を、私達三人がさも茶飯時のように喋るものだから、ホステスまでがその雰囲気にも巻き込まれて、縛るといって一見ブレイじみたことすら、何でもない様な気持ちになったらしい。何の準備もないから、丹前の腰紐を三人分集めて、加代子さんの手足を縛り、転がして、私達は酒をくみかわした。二度、三度縛り直して、腰紐ながらかなり強く縛ったが、彼女は酔いながらもあがらなかつた。私達はその酔いながらもあがらなかつた。私達はその酔いながらもあがらなかつた。

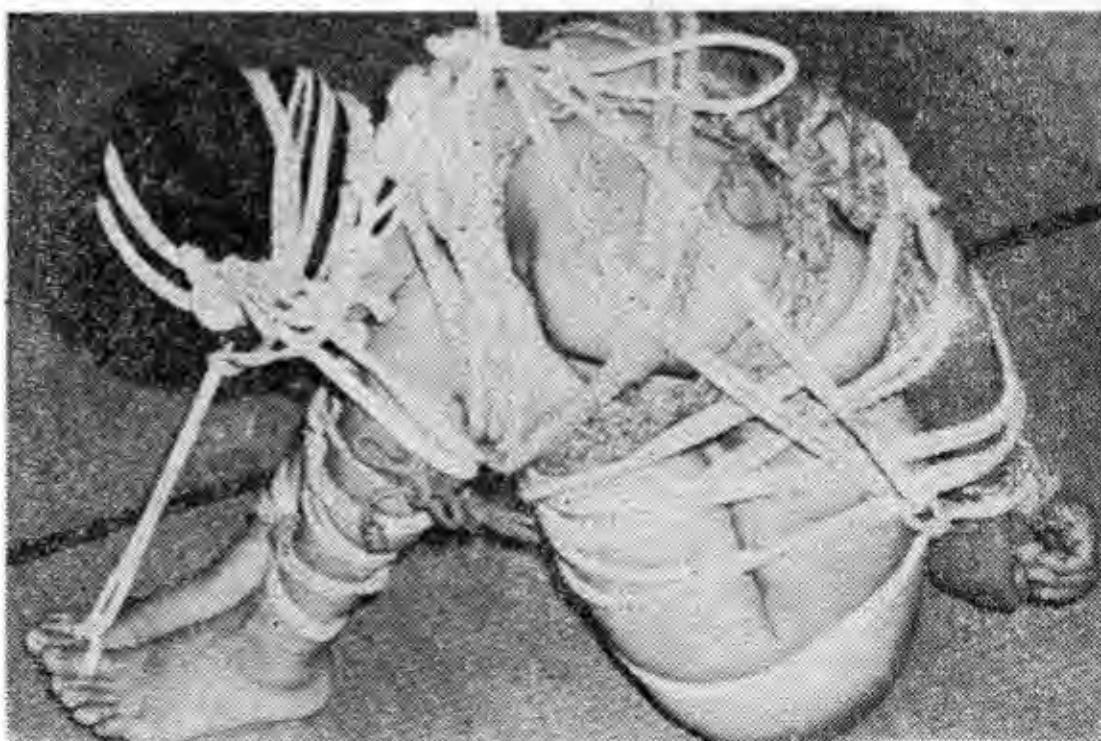
「こりゃ大いに脈があるぞ」と、箕田氏がいうので、打合せをかねて、三月二十日改めて、二人で参上、加代子を指名して、いよいよ本どきに入る。料亭内では、気分も落着かないし、店専用のおしきせの矢張り着物でも目立つので、午後四時までは体のあいてい

る彼女をやつと口説き落して、長襦袢程度の着衣で緊縛ブレイを承諾させることに成功した。これも謂わばカメラ・ハントの一種であるが、何れうまく成功の暁は、改めてSMのハントとして書くつもりでいる。

その夜は、あらかじめ数条の縄とカメラを準備してゆき、着衣の儘緊縛した加代子のフオトをものにしたが、何分にもすぐ分る料亭Kのおしきせの着物だけに発表は遠慮した。

× × × × ×  
最近のレコード界のトピックニュースをよんでいたら、興味あるタイトルが、眼についた。キングレコードの四月新譜で七人の歌手がニューボイスとしてデビューするが、その一人、鳴海靖子という女性の、新人歌手の歌う唄が「濡れにぞ濡れし」という題である。

ヒットするかせぬかは未定で、海のものと山のものとも分らないが、かつて、愛友の芳野眉美が延々と書き綴ったタイトルと同一なので、他人事でなく、その新譜がききたくなった。早速レコード店へ行ってきたが、訊ねた店が三店共、今の処届いていないという。どんな唄か、私は芳野眉美のためにも買い求めたい気持ち





愛妻ゆう子の両手吊り

新田 英雄



僕のイメージ画集「短刀と禪」

室井亜砂路

きりであるが、彼が近頃沈滞気味でもあるので、こちらで一つ、彼のためにも、この「濡れにぞ濡れし」が大ヒットして欲しいものだと思った。

× × ×

カメラ・ハントの日がよく雨にたたられる。三月十日に撮った関谷富佐子さんとの初めてのプレイの日も終日雨であつたし、三月十七日、大阪で出会った河森真理子

さんとの、初のデートも雨でたたられた。三月十九日京都で会った青柳千紗さんとのデートの日は久し振りのいい天気だったが、奈良のお水取がすんで以降、春を告げたというのに、もひとつカラッとしたいいい天気の日がない。しかしカメラ・ハントの方は大繁昌で、私の仕事も、今が比較的閑散なので、例年ながら、三月・四月にハントがよく重なる。次々とハント

してゆくのは実にしんどい。しかししんどいが又格別の愉しみもある。山本一章氏も「痴人の糧」の方をこししばらく一服して、専ら「この女と」に全精力を傾注で、期せずしてライバル意識をもち出すようになった。

私は彼の要請で、笹原八千子と例の魔子を再度紹介したが、さてどんな「この人」とになるやら、今から愉しみである。

彼は近々、彼がかつてのプレイに耽溺した女性と再会し、一度撮影したとのことで、その人を、箕田氏と私に紹介するといっていたが、フオトを見せてもらおうと、ステージ化粧と衣裳を纏っての素晴らしい美人である。

山本一章もいよいよカメラ・ルポに本腰をいれ始めた。奇巧のためにも競争相手のあることは楽しいことである。



## 最近の縛り映画

東山映史



最近の独立プロ作品は、強烈な刺激を求めるSMファンのため、セクシーなベッドシーンやサジズの緊縛シーンをふんだんに盛り込んでいる。

最近の作品では、やはり小森白監督の「惨鬼」が白眉だ。トップシーンからカラーで美女の惨殺、それに「さかさはりつけ」という惨忍シーンを見せる。

ヒロインは、山本富士子ばりの豊富な肉体をもつ松井康子（牧和子）。旅館を舞台にしたSM劇。芸者上りの後妻の松井康子が長襦袢一枚で変態老人のムチ打ちを受けたり、最後は地下室で半裸にむかれ、鉄の二つ折りのハシゴに四肢をきっちり縛られ、乳房を切られたり、なぶり殺しにあらう。タラタラと流れる血汐。一寸も

のすごい。それより前に、山中の立木に縛られ、責められるシーンがある。旦那が前に、半裸にむかれ責められているが、彼女は着衣のままである。縛られてはいるが縄一筋でたよりない。この二人を責めているのが若松。今度はやくざ者で、その妹が美矢かほる。彼女は、この宿の若旦那におかされ海中へ身を投じて自殺する。そのおかされるシーンがものすごい。その復讐のために、松井康子はなぶり責めにあらうというのである。その他の作品の目ばしいものを書いてみよう。

「媚薬の罌」最近売出しの美矢かほるが、農家の女で、その娘の復讐のために、まむし酒を飲ませ仇の男を殺すが、ばれて、その仲間のために空小屋に連れこまれ、半裸にされ荒縄で天井から吊り下げられ、ムチ打たれる。

「泥だらけの制服」（青春の暴走）若手スターの女子大生の真湖道代が母親のベッドシーンをのぞき見たことからパンパンに転落していく。仲間のズベ公からリンチを受けるが、その代役を買って出た貧乏洋画学生作品を入賞するためボスの洋画家の所へ頼みに行く。このボスがサジスチックな変態

## 編集部だより

○「アブノーマル演劇」と銘うった秋山夫妻のショーに対する感想や批評が各地の読者から次々と寄せられ、このところ俄然同好者の注目を集めたようだ。辻村氏からの報によれば四月一日から十日まで京都大宮劇場に出演の由で、機会があればインタビューを試みたいとのことであった。

○ショーといえば松坂宣夫氏がわざわざ三重県から来阪、OSミュージックの三月公演を見ないかと誘われ、一夜ともに観劇した。ヌードショーも、ここまで内容を過密させたかと感心もし、楽しいひとときをすごすことが出来た。

○先月号のこの欄で、大塚啓子さんを囲む会合、座談会の件に触れたところ、予想外の反響があつて多数の方々から出席希望の便りを頂き驚いている。中には種々と詳しい趣向を述べていられる方もあり、目下それらを参考にプランを練っているといった有様である。

○懸賞応募作品をはじめ一般の投稿作品も多数寄せられ、有難き極みなのだが、一つお願いしておき



男。彼女は一室に連れ込まれ、はだかにむかれ、手足を縛られ、ムチ打たれる。そこへ恋人が助けに現われるのは定石。

「異常な体験」ヒロインは内田高子。一卵性双生児で、一人は斜陽華族のお嬢さん。他方はパンパンガール。内田高子のパンパンガールが客と一室で事を行っている。令嬢の方が同じようにフトンの中で身もだえるという双生児の異常な状態を示す。

これを知った成り上り実業家が彼女に求婚し、結婚するが、こぼまれ、パンパンと双生児であることを知り、熱海の別荘の彼女の所へパンパンを呼び寄せおかし。パンパンの高子が椅子に縛りつけられ、ムチ打たれる。猿ぐつわをはめられている。令嬢も同じ姿態を示す。そして、ついに二人は対面する。縄とムチの異常な双生児奇譚である。

・同じ内田高子が「夜の悦び」で

も、芸者姿で縛られ責められる。「柔肌の掟」では、新高恵子がはだかにむかれ、乳房の上を緊縛され、二の腕まで縛られ、情婦にムチ打たれたり責められる。

その他、「情欲の黒水仙」で向井まりが前手縛り、足を縛られ海岸の巖上で「死にたくない」と絶叫したり、「裏切りの季節」の谷口朱里が椅子に縛りつけられて熱責めにあったりなかなか多彩である。

### 春川ナミオ画集

「これを食べ終るまで

じっとしてゐるんだよ」

女の逞ましい尻の下に、押しひしがれた男は、口をばくばくさせて、その重圧に喘いでいた。

「このソバを食べ終るまで、じっとそのままで辛抱してゐるんだよ。動く、あとがひどいよ」

そう女に命令されると、もう男は不動金しぼりにあったように、身動きも出来ないで、女の尻の下敷きになったままだった。女は時々その大きな尻をにじるので、男の顔は、まるでアンコの出たボタ餅のようにゆがむのだった。

たいことは、折角原稿用紙を使用しておられながら、マス目に一字一字きちんと書かなかったり、判読されないような乱雑な文字、或は凄く大きな文字で用紙一面に書きなぐったような原稿が案外多いということである。折角内容が面白いと思いつながら、書き直すのは時間がないため、保留になっている原稿が意外に多い実状だ。活字にするというのが前提の原稿なのだから、必ず楷書で一字一字確実にマスを埋めてもらいたい。

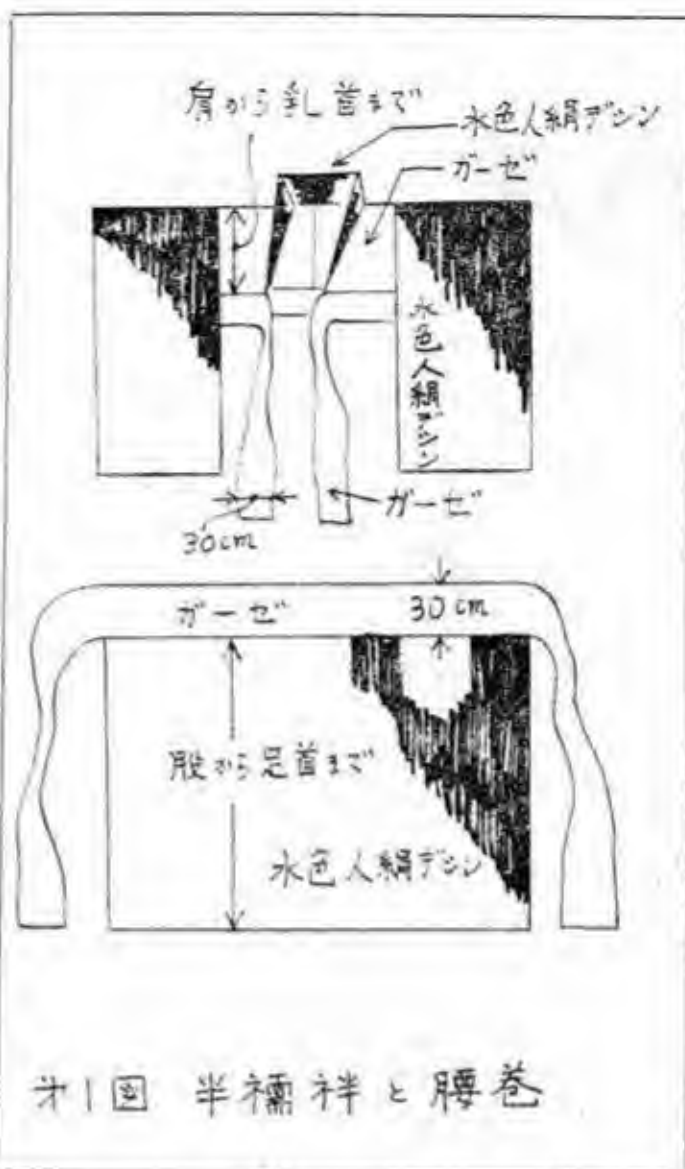
○毎月誌上に広告してある「女性モデル募集」に対して勇敢に応募してこられる女性読者の方々があとを断たないのは嬉しい。条件によって必ずしも希望条件通りにいかないかも知れないが、報酬の点については、出来る限りご期待にそいたいと思つてゐるので、関心をお持ちの方々は遠近に拘らず是非ご一報を頂きたくお待ちする。

○本誌グラビア頁の再開を熱望される向きも少くないのだが、実情は更に内容の自粛を要望される四囲の情勢なので、今後は一層の自粛を徹底させながらも、皆様の期待にそうという困難な努力を編集スタッフの充実と研究とによって果してゆきたいと思う。



# 秋の和装下着

山本和子



オ1図 半襦袢と腰巻

最近、若い人達の間にも和服が見直されて来たようですし、私も今年成人式を迎えた年令ですが和服が大好きです。このような和服の流行に従って和装用の下着も売り出され、若い人向きの和装用パンティ、ストッキングなどが出廻っています。若い人は大抵和装の時でも、洋装の時の下着を使っているようです。たとえば私のお友達の場合ですと、パンティ、ブラジャー、スリッパを着、その

上に今度は和装の下着と云うように洋装と和装の下着を二重に着用しています。私は年が若いくせに昔の人みたいな考え方をもっていて、和装の時は和装の下着だけで良いのではないかと考えています。経済的にもあるし、第一夏の暑い時など洋両方の下着を重ね着するなんて暑苦しいと思います。それに、和装の下着も、それなりに洋装の下着と同じ機能をもっていると考え

られます。たとえば、

パンティ || 腰巻  
ブラジャー || 半襦袢  
スリッパ || 長襦袢

と云う対応をつけられます。こんな考え方をしている私は、和装の時は洋装の時の下着は全く使っていません。

でも、私が一寸、不満に思うのは、スリッパやパンティ、ブラジャーには種々変ったデザインのものがあるのに、和装下着は全く昔から変わっていません。下着きがズ

ロースからパンティ、さらにはビキニパンティと段々露出的になってきているのに、腰巻、半襦袢は昔のままで、この二つを身につけただけで体が全部覆われてしまいます。

ところで女性には多かれ少なかれ露出症的な性格があるのではないのでしょうか。私は特にそれが強いのかも知れません。そんな訳で異常なくらい露出部も多くした腰巻と半襦袢を作って去年から愛用しています。第一図にはその寸法を、第二図にスケッチを画いてみ



オ2図 着用したところ

## 悲愴美の乙女達

## 「落城哀譜」

桐原紫門

&lt;美少女武者の集団自刃絵巻&gt;



嘗て仙台に美少年の切腹の絵ばかりを描く人があつて本誌をはじめ他の風俗誌に載ったこともあったし、人間探究かで高橋鉄氏がとり上げておられた。この桐原紫門氏は終始一貫、美少女の集団自決の絵を描いて来られる注目すべき人である。今後少し宛とりあげてゆきたい。



ました。  
半襦袢の胸は乳首までしかなく、衿は胸のあたりで細くなるような三角形とし、胸周りに縫いつけたガーゼで丁度乳首を覆い前で結んで着つけます。きつく結ぶとガーゼが絞れて乳房全部は覆うことができず乳房の乳首から下は露出してしまいます。  
腰巻は丈を思いきりつめてしまひ腰布にはガーゼを使いました。

ガーゼの方がきつく締められ、ゆるまないからです。この腰巻は思い切り下にずり下げて締め、ビキニパンティならぬビキニ腰巻になつていきます。私は時々お尻がすっぽり飛び出してしまふくらい下に締めます。こんな時はうっかりすると、前の方では腰布のガーゼから黒いものまではみ出してしまいます。こうなると腰巻と云うよりは、腿巻とでも云わなければなり

ませんね。  
冬はこの上に長襦袢の重ねを着して寒くないようにし、シャツ、パンティは一切身につけません。夏はこの下着だけ、お乳からお尻までの間は素肌に直接着物が触れます。もっとも私はそんなに汗をかかないので、こんなことができのかも知れません。  
こんな下着を着ているのを母に見つかり大変叱られました。私

が強情にこれを着続けているのであきらめたようです。  
こんな下着を着てよろこんでいる私は、どこか異常なのかも知れませんが、実行するかしないかだけの話で、世の中の多くの娘さんではないでしょうか。同好の方々からのお便りをいただければ幸いに存じます。



## 鉄のブラジャー

千葉青鬼



このブラジャーは「鉄製本体」「ガラス製カップ」「責め用アタッチメント」の三つの部分から成り立っている乳房責め専用の責め具であって、八鉄のブラジャーVと名づける。

## (1) 本体

丸棒の内側はスポンジでカバーしてあって、女体の肌を直接傷つけないようにしてある。吊り鎖は後部の施錠で自由に長さを調節出来るように工夫されてある。

ベルトは後部の歯止めで適宜の長さに締め上げることが出来るようになっていて、締めるときは、

いくらでも引っぱって自由に締めることが出来るが、一旦締めてしまつと、緩るめようと思つても鍵を使わないと緩るめることは出来ないようになっていて。

## (2) カップ

「鉄のブラジャー」を装着される女性の乳房の大きさに応じてサイズを決める。熱湯責めなどで責める場合を考えて、透明な耐熱ガラスを使用しているの、内部を観察することが可能である。

## (3) アタッチメント

A、バキューム・バルブ  
真空ポンプに接続してカップ

## 「下着泥棒」

「事実は小説よりも奇なり」の珍事件を公開しよう。先日、二月十五日のこと、僕の住んでいるアパートの物干場から、それも女性の下着ばかりが、ゴッソリと盗み去られたのである。然かも驚くべきことに、白昼堂々の犯行である。これまで、種々下着泥棒の話は聞き及んで居たものの、実際に被害に会ったのは、これが始めての事であり、呆然とした。実際に被害に会った……とは云う迄もなくこの僕自身も被害者の一人であることを申し上げておこう。従つて、女性の下着と共に僕のもの、と云った方が正確かも知れない。成程、カラフルな女性の下着が、男の魂を眩惑させることは、何も性的異常者ならずとも、秘かに覚えのある男の好奇心を甘酸ばくゆさぶるに足りる、魅力溢れるものに相違ないのだから。さしずめ、久米の仙人等ど、その元祖とも云えよう。スリッパやブラジャー、パンティーに至る迄で、色彩豊かな最近の下着、肌着等、それらが

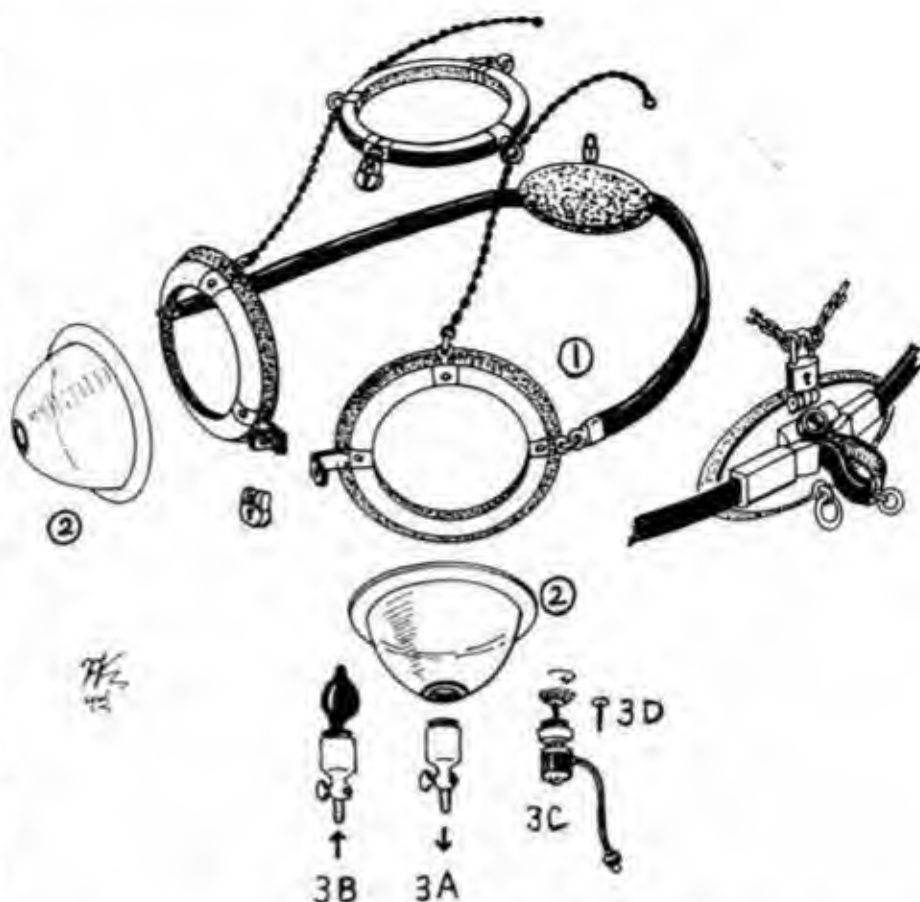
## サロン展望台

目出鯛三

男の目には、何れとも妖しく、やるせなく誇示されるに及び、世の男達は日夜悩殺され放しではなからうか。ましてや、女性に限らず、昨今の男性用下着についても女性に劣らず色彩豊かな傾向にあり、従つて今回の盗難事件も、そんなところの要因が引き起こしたものと考えている。つまり、僕のブリーフが、女性の下着と共に紛失していたのは、カラーブリーフを着用している僕のを、あやまつて持ち去ったことに、なるのである。もっとも、泥君にとつては、これが男物か女性のものか、ゆっくり判別するだけの余裕があるわけはなく、その点、何かと申しわけなく同情したものである。道路に面した方に「前開き」のある方を出して干してなかったのが、運の尽きでもあろう。恐らく、持帰ったあと、こっそり点検に及んでさぞかし口惜しがったろうと思うと、何んだかこっけいな無言劇を見たようで、苦笑を禁じ得ない。それにしても油断大敵、おそれ入りました。同住の女性曰く。「イヤーネ、お洗濯して干してから、

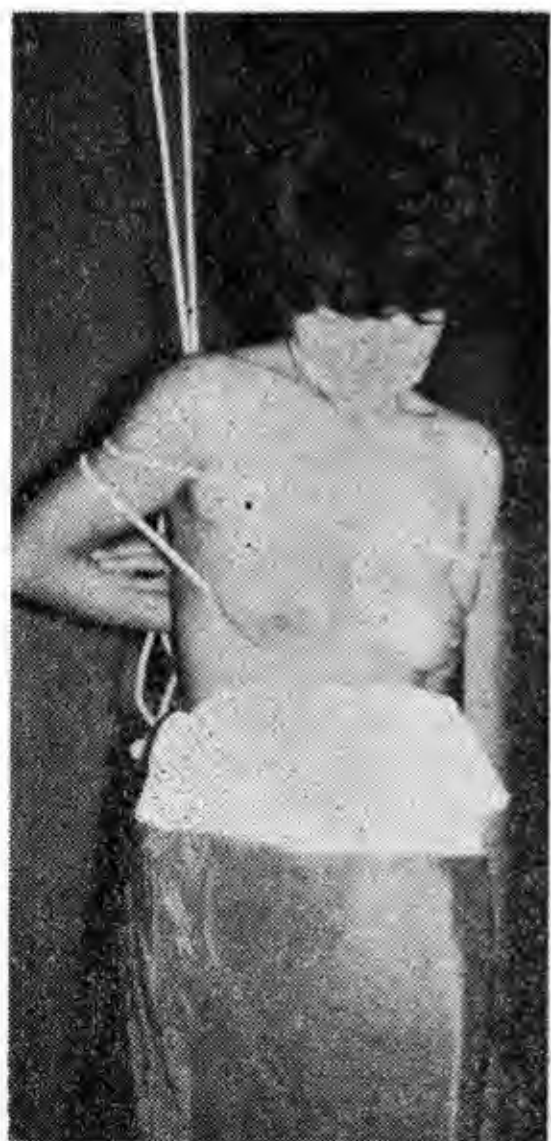


を吸いつかせ、乳房を引っ張ることが出来る。  
 B、圧力バルブ  
 丈夫なゴム風船をとりつけてカップの中でふくらませ乳房を圧迫することが出来る。この他冷風、熱湯、糞尿などを注入することが出来る。  
 C、ブラッシュ  
 柔かいブラッシュを回転させて、乳首をくすぐるのに使用する



れることも面白いアイデアである。  
 このほか、いろいろの責めが考えられるであろうが、平常はアタツチメントだけ取り外して、ベルトをゆるめてやれば長期間使用しても問題ないであろう。透明なカップの真中の小穴から可愛い乳首だけがふるえながら覗いているのも、又風情があるというものはなかろうか。

る。この他ゴムの小球を回転させて乳房全体をアンマすることも可能である。  
 D、電気刺激  
 弱い電流を流して、乳首を責めるのに用いる。  
 E、その他  
 カップの中に、毛虫や蟹、トカゲなどを入



ものの一時間も、たっていないのよ」「いったい、どう云う気持ちなんでしょうね」「あたしなんか、前にも、盗られたことあるのよ」と、  
 洋裁学校の講師をしているK子嬢、と他に二人、気味悪気に、あとはヒソヒソ。そう云えば美人のK子嬢、意外と汚れたのを時々干してあるのを隙間見たことのある僕である。いつかも、或る週刊誌に「美人ほど汚れた下着をはいている」と云う記事を読んだ覚えがある。マニアの僕にとっては、何物にもかえがたい逸品として、K子嬢のものを何んとか……と不ちな考えを秘かに抱いていた矢先のこと、天晴れな泥君を弁護するとも、否定するとも、まことに複

雑な心境である。然し他人の物品に手を染めることだけは許しがたい。いつか、法の前に裁かれる日もあるう。さて後日譚がある。K子嬢始め二人の女性のスリッパやパンティーは、とも角、翌日僕のブリーフだけが、干場の片すみに丸められて返えされていたのである。何んとも、ご苦労さま。まったく、とんだ珍事件である。洗濯物には充分注意が肝要。出来るだけ、人目につかぬところへ干すことが盗難予防の第一策。盗られて泣くより、盗られるな。これからは一日、水ぬるむ陽春の訪れと共に、下着泥君の暗躍する時候でもある。寒中でもかくの如くだから、花咲くこれからは、下着は、控え目に干してチヨウダイッノ



# 女子コビトプロレス大試合観戦記 長崎三郎

東京の大田区にあるムサシ小山プリンスというストリップとピンク映画をやっている劇場で、コビト・女子プロレス大試合という看板が出ていたので入ってみた。

私が入った時は「玉ころがし」というピンク映画をやっていたが約30分ぐらいでプロレスが始まった。メンバーは女子が四名にコビトが二名である。女子レスラーの服装はセパレーツの水着が三名、あとの一人は日本の女子体操選手のような服装だった。

初めに二人の女によるシングルで20分一本勝負で始まった。一人の女(A子)は身長一五〇ぐらいのグラマーといったタイプ。もう一人の相手の女(B子)は一四五ぐらいのやや痩せ形のタイプ。

ゴングが鳴るなりグラマーなA子はやせたB子の首を抱えて、首投げでマットに叩きつけた。B子は尻からドスンと落ちた。B子の尻から太股にかけて赤くなっている。更にA子は腰投げでB子を四回、五回とマットに落し、沈んだ

ところを押さえ込もうと飛びついたが、下からB子に足を持たれ、股裂きにされる。

A子は痛そうな顔をして「痛い痛い」と声を出す。そばにいたレフェリー(男)が「どこが痛いのか」と聞いたが、A子は「そんなことは言えない」と言っていて盛んに痛がる。二分ばかりでA子がB子の髪の毛を掴んで引き落し股裂きから逃れる。するとB子はA子の鼻をひねり、レフェリーに反則のカウントをとられて二人は離れて立ち上る。そこで組み合せて、背負い投げ、腰投げ、巴投げと投げ業の応酬をくりかえす。最後にA子がB子を最上段から三回、四回と体落しをして、グロッキーになったところを押さえ込んでホールをしてA子が勝った。

二回目の試合はダブルで、女性とコビトが各々組む。はじめコビト同志の試合があり、タッチして女レス同志の対戦となる。二人共身長一六〇近くあるグラマー。赤のコーナー(C子)青のコーナー

(D子)とする。マットの中央、近寄りざまC子はD子の左腕をとり捻じ上げたが、D子はそれを解くため自らマットにころがって逃れるが、立ったところを更にD子はC子に腕をとられる。こんなことを数回くりかえした上で、今度は隙を見てD子がC子を巴投げにきめた。これはD子がC子の腕とオッパイの所を持って片足を股の上にのせて自ら仰向けに倒れて投げたのである。C子は三米ばかりとんで尻と背をマットにどすんと打った。今度はC子が逆に、D子を首投げでいためつける。D子は何度もマットに音を立ててころがり痛そうな声を挙げる。

そこでC子がD子を逆エビで攻め立て、二、三分でギブアップさせる。

二本目は、赤コーナーのコビト(E)とD子が対戦した。先ずコビトEがD子の股の下をくぐって



後にまわった。そしてカニばさみにして足逆エビにもっていった。D子はEの頭の毛をつかみ、ひき寄せヒップでEの顔を下敷きにした。EはD子の尻の下でもがいたが駄目だった。この時コーナーか





## 「後手吊り」

津山愛二

握りしめた拳の表情がカラーでうまく捉らえているのだが、白黒でしか出せないのが残念である。

ら飛び込んだC子がD子を蹴とばしたのでEはやっと逃れた。

ここで互いにタッチしてC子とコビトFの対戦。でもコビトと女とは全く体の大きさが違う。立つと女の半分ぐらいしかないのでも力ではかなわない。FはC子に蹴とばされマットにパレーのボールのように叩きつけられた。しかしFはC子の腹や尻を蹴って反撃、倒れたところを体の上に跨

った。C子が起き上ろうとするがバストや股を蹴ったりさわったりして悲鳴を挙げさせたが、やはり体の差異には勝てず、マットに落されたが、FはD子とタッチ。

再びC子とD子の女同志の試合となる。D子は先ずC子の脚や太股を蹴ってマットにころがし、C子を股裂きにもってゆく。C子の股は今にも裂けそうに開かれた。この時コーナーからFが股から毛

が見えると言ったのでレフェリーや他のコビトが覗いてD子にどなられ、その隙にC子がD子の首を持ってマットにころがし、D子がC子を蹴り倒して起き上る。C子は起き上りざまにD子の股に手をかけて担ぎあげてマットに五、六回投げつける。グロッキーになったところを押さえ込んでしまう。こうして二本目も赤コーナーの勝て試合は終わった。とても迫力の

ある凄惨試合で満足した。東京では三月六日までの一週間興行で、次は九州へ行くと言っていた。三月いっぱいスケジュールを尋ねたが九州からの予定はわからないと言っていた。  
読者の方でごらんになられた方があったら、感想などお知らせ下されば幸いである。

ハカット・室井亜砂路

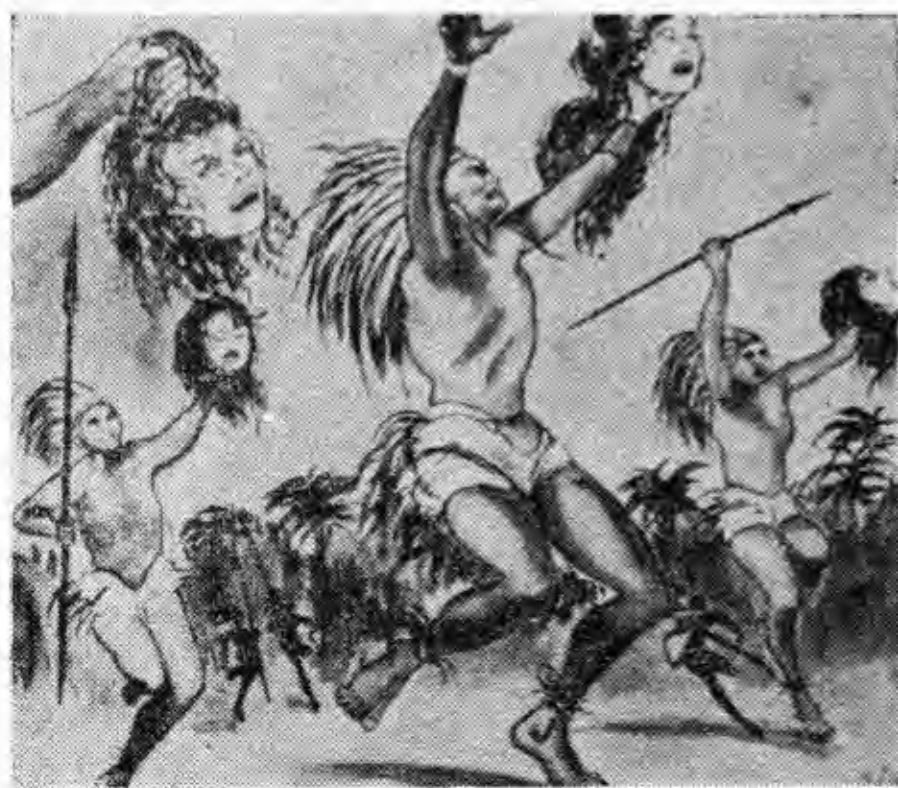
私の

## 「汝魔苦美帳」

より

前川成雄

土人部落に迷い込んだ若い女数人は、神のいけにえとして首を斬られた。血のしたたる女の生首は土人たちの手に手に掲げられて、踊り狂う土人の列の中で、人身御供に供されさんざ弄ばれたのであった。





# 映画 「縄と乳房」 を見て

早木夢二



責めの映画となると、お客の入  
りも上乘のようだ。入場料金も三  
百五十円（新宿）。随分高くなっ  
たものだ。

併映の「ダブル処女」に面白い  
場面があった。抵抗する女を裸に  
して、両手を縛り、煙草の火を乳  
房に押しつけたら、裸の尻をぶつ  
たり、果ては白粉の刷毛で全身を  
隈なく擦って責める、その間には  
女の股間をのぞき込んで、もう男  
を知っていることが判ったりする  
場面だった。

「縄と乳房」のストーリーは、既

に奇ク誌上に発表されているとお  
りだが、然しこの種の映画として  
は、しっかりしたストーリーであ  
り、団鬼六先生のシナリオと来て  
は、安心して見ていられる。

縛りの場面も奇クで紹介されて  
いたが、柳田くに子は、体もいい  
し、顔も時代劇風なので、縛りも  
仲々雰囲気があってよかった。鞭  
打ちの時は、肩から腋の下にかけ  
て縄が廻ってあって、面白かった  
し、湯文字を剥ぎとる場面もハッ  
とさせてよかった。

然し、私が一番嬉しく思ったの

は、浴場での水責めの場面であっ  
た。この映画は、情事の場面など  
がパートカラーになっているが、  
これは、成功しているとは思えな  
い。むしろ責め場、特にこの水責  
めの場面をカラーにした方がよか  
ったのではないか。

新高恵子（又熱演）が柳田くに  
子の髪を掴んで、何回となく顔を  
湯舟の中へ漬けて責める。柳田く  
に子は、今迄腰に巻きつけていた  
タオルも取られ、文字通り一糸纏  
われない姿で、両手を後できっちり  
縛られている。そして、責められ

## 「美酒」の統計数学

並木新一

現在、我が国の人口を約一億と  
して、その半分が女性であるが、  
そのうち十五才以下と四十六才以  
上の方々は、しばらく御遠慮願う  
として、すなわち、女性として最  
も爛熟した成熟期にある女性の数  
を凡そ三千万人と推定することが  
できよう。

さて、これらの活動期にある御  
婦人方が一日に製造放出される美  
酒（ネクター）の量を、平均一  
人・二リットルとして、全国で  
放出される量は、一・二リットル  
×三千万で、三千六百万リットル  
の多きに達する。これを一八リッ  
トル入りの石油缶（一斗缶）に詰  
めると、実に二〇〇万缶の多きに  
達するのだから、全く驚くほかは  
ない。

このように多量の美酒が無為に  
捨て去られていることは、その筋  
の美酒愛好家にとっては、何とも  
惜しまれてならない。十八才から  
二十四才ぐらいまでの結婚適齢期  
の娘さんばかりの集っている花嫁  
学校のトイレで放出される美酒を





「井戸吊り責め」

倉 真 砂

て、全裸の豊かな体を、あちらこちらと揺がし、悶え苦しむのだ。唯、後手に縛られている丈の姿が、この上もなく艶めかしく、色っぽく、そして責められる女体の哀れさを滲み出させているのに、私は眼を見る思いがした。シンプルなもの、美しさ、と簡単にいってのけられるものではない。

女体緊縛の美しさは、実はここ

から始まるのだ、と改めて思い知らされるような、鮮やかな美しさなのだった。

長い間、妻や愛人の裸体を縛ることに、生き甲斐を感じて来た私は、この背後からだけ写されている、全裸後手縛りの女体の揺れ動く姿に、更に新しい縛りへの情熱を掻き立てられているのだった。尚この映画では、水責めという拷問が登場しているが、この種の

映画も、今後色々な新しい拷問姿を見せて貰いたいと思う。

さしずめ、海老責めなど、女体の張り切った美しさが窺えて、いいのではないか。

香取環や松井康子の肉体派から新高恵子などの美人たちが、全裸で海老責めの拷問に悩んでいる姿は、大変素晴らしい見ものであると思う。

## 〔短歌〕

## 「女のさが」

高村 初子

二筋の縄にはさまれ二の腕のふくらみし肌あかく色づく  
足首をくくらむとする彼の手がくすぐったくも触れ離れする  
足指の間を通る縄ありてくすぐったさに身もだえぞする  
ぎらぎらと光る彼の目迫りくる  
我が肌ほてる縄にくびれて  
うしろ手を高く吊られて知らぬ  
うち爪先立ちて悶えいるわれ  
マニキュアのはげし爪先力こめ  
悶えいる我哀れなるかな  
人恋し男恋しとしのび泣きころならずも従いるわれ

集めて売出したら、相当の希望者が殺到するのではなからうか。

こんなに沢山の美酒愛好家が夢にまで見て渴望しているのに、徒らに浄化槽の中に放出されっぱなしになるのは惜しいものである。

次に、これらの女性によって使用される後始末用のチリ紙の量をしらべてみよう。

前記人数の女性で、一人が一日に平均五回排尿するとして、拭くのに使用されるチリ紙を一回に三枚とすれば、一日に一人で十五枚となる。これに三千万人をかけると、実に一五枚×三千万人で、四億五千万枚というぼう大な量になる。この量を一束二千枚として換算すると、二十二万五千束という一寸想像もつかない程のかさになる。

これらの女性の使用されたチリ紙の山に埋もれ、その芳香に酔いそのしっとりとしたしめり気を思う存分賞味したいものである。

しかるに、この女性の神酒をふんだんに含んだチリ紙も、徒らに闇から闇へと葬り去られているのは、まことに、勿体ない限りである。何とか我々神酒愛好家のために、それらを提供してもらえないものかと思う。



## 僕はこうしてMになった

## 「療養所での体験」

岡野敏夫

僕が十八才の時です。無理な受験勉強がたたり、肺浸潤と診断された結果、父の田舎の療養所へ入院しました。安静度1から5までのうちの4ですから、大した症状ではなかったと思います。5になると退院ですから極く軽微だったのでしよう。毎日三回の検温がある位で殆ど近くの池で魚釣りをしたり、手製の弓で小鳥を射たりして遊んでいました。

午前中は外来患者の診察がありますが、午後二時から入院患者の他科の診療があります。ここは総合病院で全科がありますので、内科で入院している者も入院中に歯科へ通ったり、水虫の治療を受けたり、鼻の洗滌をして貰ったりすることがはやっていました。そんなわけで僕も退屈なのと、入院中に治しておけば得だという考えから、その頃軽いイボ痔があったので、或る日、昼食が終わって暫くしてから泌尿器肛門科の診察室を訪ねたのです。いやに静かな待合室で待たされている間、三人

の若い看護婦が一人宛僕を覗きに来て、意味あり気に笑って帰ってゆきます。五分ばかり待たされて隣の治療室へ通されました。

ツイ立の蔭から黒いレザー張りの台を引っぱり出してきて、三人の若い看護婦は僕にその上に横になれというのです。診て貰うのは痔ですからパンツだけ脱げばよいと思っていたのに、着ているものを全部脱ぐように言うので、寝台の上で脱ぎ僕と同年輩ぐらいの一番若い見習看護婦の差し出す乱れ籠の中へ入れました。彼女はそれを隣の部屋へ持ってゆきましたので、僕は言われるまま、仰向けに台の上に寝ていました。

二人の看護婦も出てゆきました。が、五分経っても十分経っても誰も入って来ないので、手術でもあって先生の手が離せないのかと思っていました。隣の部屋では看護婦たちの笑い声がするばかりで、僕はハダカのまま部屋の中央に寝かされているので、一向に落着きません。一しきり隣の部屋で



女たちの笑い声が高くすると、どやどや、数人の看護婦が入ってきました。さっきの三人よりは年輩らしく、二十二、三才ぐらいの人たちで、治療して貰えるのかと思っていたのに、きやっきやっと笑いながら、眺めたり、さわったりするだけで出て行きました。

人一倍早熟な僕だけに、本当に恥しい思いをさせられました。が、辛抱するのと、辛抱できなくなつたときの気持は、またたまらないものがありました。しばらくすると、変った新しい看護婦が二、三

人入ってきて、さっきと同じように見たりさわったりしてゆきました。一向に治療をしてくれる気配もないので僕は帰ろうと思いましたが、着るものがないのです。恐る恐る待合室を見ましたが、そこにはありません。勇気を出して、看護婦の控え室を覗いて、「僕の洋服はどこですか」と聞いたのです。なにしろ、素裸ですから、腰をかがめて前を押さえた恰好たらありません。

十数人もいた看護婦たちが、わっと笑ったので、僕は思わず顔を





## OSミュージック三月公演

## 「ヌード千一夜」を見る

松坂宣夫

真赤にして立ちすくみました。一番若い看護婦が乱れ籠を持ってこよう。奥の部屋へ行きかけました。が、意地わるく皆が止めたので、僕は看護婦たちの坐っている間を、通ってハダカのまま歩いて行かなければならないのです。その恥しさったらありませんでした。皆の

嘲笑を浴びながら、僕はほうほうのていで病室へ逃げ帰りました。しかし、日が経つにつれて、その時のことが忘れられなくて、思いつく度に痺れるような快感を覚えるのです。それで又、十数日して意を決して治療を受けに行つたのです。その時は担当医師も婦長

さんもいたので、簡単に軟膏を塗って貰って帰りました。パンツを少しずり下げるだけで、この前のようなことはなく、物足りませんでした。あの時は医師が会議とかで出張だったし、婦長さんも留守だったので、他の科の看護婦たちも呼び寄せて、僕をおもちゃにし

たのだと後でわかりました。それ以来、僕はもう一度、あんな目にあつてみたいと願っているのですが、機会はありません。あれから五年。今では、僕の心の中に、あの時のショックが大きく巣くってしまつて、離れることがないのです。

三月一日から三十日まで、OSミュージックホールにて公演された「ヌード千一夜」全21景の中にはSMの趣向が多分に加味されていた、というよりも、サディズムとマゾヒズムを前面に押し出して変った味を盛り上げていた。

岡田憲幸、構成演出となつていたが、私の見た範囲では、この演出家は、殊更SMに強い関心を抱いているとは見えなかったが、全21景（といっても最後の1景はフイナレなので実質は20景）の中で四分の一の5景にSM劇を持つてきているのだから、この種のマ

ニアにとつては、有難いサーピスといつてもよいだろう。先ず第4景の「歓喜」では、久美エリカ扮する女王カマキリが甘い愛撫のうちに雄カマキリを喰ひ殺してしまうという設定でシュールなタッチの舞踊シーンが展開されてゆくが、マゾヒスチックなムードの迫力に乏しいのは、この程度の劇場としては、やむを得ないだろう。

次に第6景の「女王と豹」では、奈良あけみ扮する女王、それに三人の美しい侍女、奴隷と牢番というメンバーで、幕が開くと、豹の毛皮を敷いた長椅子に女王が横になつてゐる。檻の中には鎖つき手錠をかけられた奴隷が入れられてゐる。女王の命令で牢番が奴隷を引き出してくる。

女王は手にしたムチで奴隷をムチ打つのだが、この時の演技にも少し工夫と技巧がはしかつた。何にも実際にムチ打つ必要もないが折角の狙いをつけたシーンなのだから、女王のムチを揮うポーズに迫力を持たせ、奴隷に身悶えさせたなら、更によくなつたろう。

第11景の「奴隷」は、大城美紀扮する女ドレイがバックに流れる音楽に混じるムチ音に合はせてムチ打たれ苦悶するところを一人で演ずる。しかし、これは僅かな時間で暗転すると幕が開き、第12景「セムシと女王」となる。そこは宮殿の寝室でミッチー佐藤扮する女王が二人の侍女を従がえ、セム

シ男をさんざんにムチ打つ。やがて侍女の去つた寝室でセムシ男は睡眠薬入りの酒を女王にすすめて、睡りに落ちた女王の衣裳を一枚一枚脱がしてゆく。といった設定だが、女王に扮するヌードスターのミッチー佐藤が、むしろ可愛い感じの美女なので、女王としての迫力には乏しいようだ。

最後に第15景「業（ごう）」では花魁に扮した奈良あけみが熱演している。これが一番マゾヒスチックなムードを高めていたように思う。女の肉体の魅力にひかれた男がはねつけられても、すげなくされても慕い寄つてゆく有様を舞踊化して成功している。女の美しい素足に唇を寄せてゆくところ、ラストで倒れた男の顔を素足で踏みつけるところなど、その時の女の表情と共に、最も熱演しているシーンだった。



## 「雪国からの春の便り」

藤川伊佐男



## 「大塚啓子お姉様へ」

一雨一雨ごと、春らしくなってきましたが、編集部の皆様として大塚のお姉様、その後お変わりございませんか。もうこちらでは梅のツボミも暖かい春の陽ざしを受けて可憐な花ピラを今にもほころばそうとしています。

僕達の住んでいる町は京都府の北部、豪雪で少しは知られている所です。冷たい北風が荒れ狂い、野原も畑も一面の銀世界の中で暮してきました。町へ通う僕達も雪のため通勤の足を奪われ困ったことがあります。今、長い冬からさめて家の裏の庭園に力強くツボミを開こうとしている梅の花を見る

と、一入雪国に生れた者のフアイトと勇気を燃やしてくれます。

野原には路のトウ、タンポポ、そしてツクシなどが人一倍、春を待っているのです。僕自身、未だかつて本当の恋というものを知りません。でも私には学生時代にガールフレンドがいました。いい人ですが今では只のお友達にすぎないのです。春風にのせて僕の思いは、きつと素晴らしいだろうお姉様の上にはせています。それは、心秘かに思っているオオツカケイコサマ。僕の片思いかもしれませんが、でも……。

心の中に住んでいるお姉様！

梅の様に美しく可憐な花ピラを持ったお姉様、どんなに遠く離れていても、決して忘れることのない人。こんなお姉様に一目だけでも雪国の春の雰囲気を見せてあげたいと思うのです。長い長い冬の寒さを生き抜いてきた可憐な花。大阪では決して味わうことのできない春の景色です。畑一面に菜の花が咲き乱れ、蝶々が飛びまわっているのを見ると、心が思わず和らいでくるのです。

僕の願いは、啓子お姉様と是非一度一緒に仕事がしたいのです。かなえられるなら、僕は本当にうれしいと思います。失礼ですが、一緒に、という言葉は、例えば写真真の真中の八女王様とドレイヴとか、こういった関係の意味で書いたものではありません。お許し下さい。せめて、一目だけでもお逢いしたい、という僕の切ない願いなのです。

「幸福とは、後悔のない満足である」(トルストイ)の言葉にして僕はその感銘を自分の生涯に後悔のない満足な仕事と望んでいるのです。編集長さま、啓子お姉様、ここに一人の哀れな仕事に飢えた一匹狼がいます。この哀れな一匹狼に何か仕事を下さい。僕は

編集長さまの様に自分の個性というものを力一杯出しきったスバラシイ仕事をしたいのです。

何をすることも厳しい現実があることは、僕もよく知っています。でも、やはり、この夢だけは胸の中にしっかり持ち続けてゆくつもりです。出来れば今すぐにでも飛んで行って編集長さまの下で働いてみたいと思う気持ちで胸が一杯になります。編集長さま、啓子お姉様、僕の考え不足でしょうか。でも、絶対に僕は自分の考えを変えないつもりです。

世に出れば口では言い表わせない苦しみ、悲しみというものが自分の前途に立ちふさがっていることとでしょう。それも承知で全てから心機一転し、心から本当の自分の気持ちのまま歩み、進んでゆける道に入り込みたいのです。今、僕の頭の中には、これに託す夢がいっぱい、こぼれそうになっています。どうか、限らない夢をカメラに託した僕に、一日も早く明るい希望の持てる言葉を与えて下さることを、遠く離れた自宅にて待っております。

三月十九日(日曜)晴

京都府××郡○○町△△14

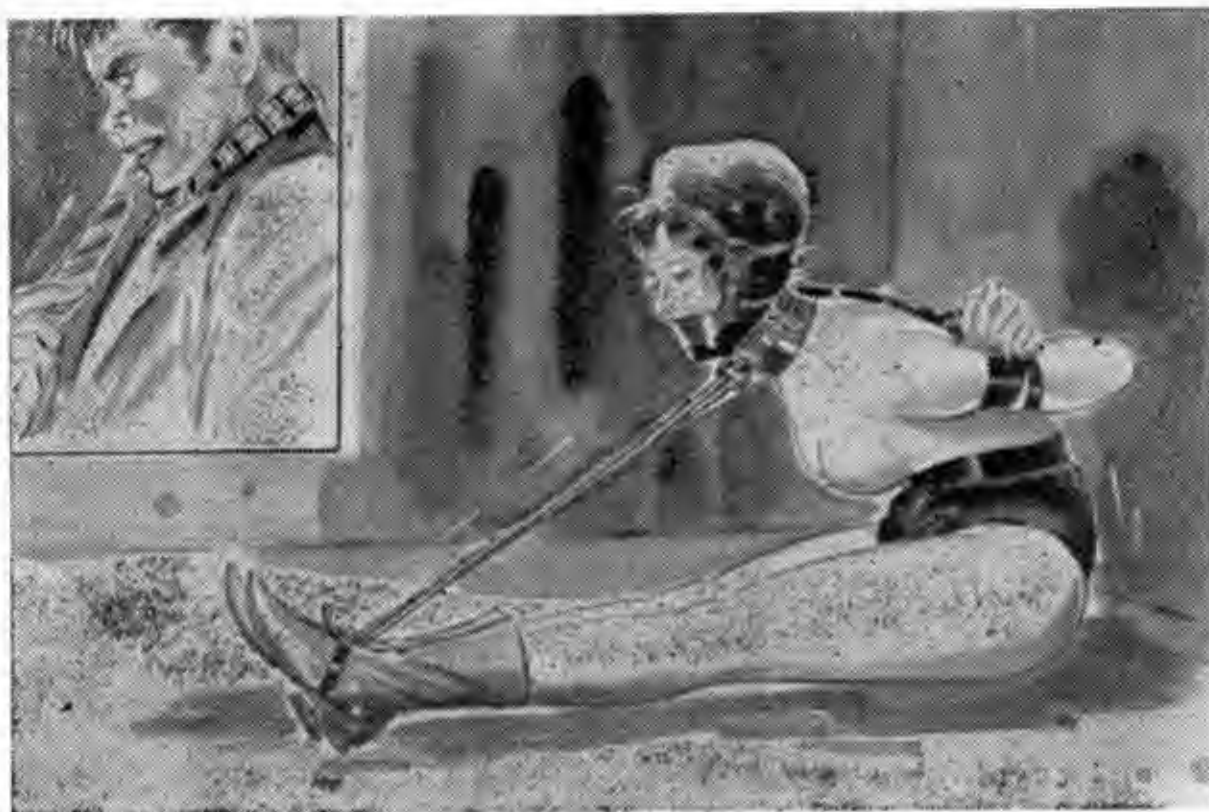
藤川伊佐男



# 奇譚クラブ

昭和42年6月号

(1967年・6月号<第21巻第6号・通刊第228号>)



## 本誌自粛の徹底

一、本誌は特殊な風俗文献を研究する平和で  
 穏健な社会生活を営む真面目な成人を対象  
 として編集しておりますが、青少年の保護  
 育成に関する条例には抵触しないよう、十  
 分な配慮を今後更に徹底いたします。

一、本誌では従来巻頭を飾っておりましたグ  
 ラビア写真並に口絵を全廃し、文中の挿絵  
 の削減に努め、読む雑誌としての体裁を順  
 次整えて参りましたが、更に挿入写真の減  
 少及び見出し、キャッチフレーズの改訂な  
 どによって煽情性を排除してゆきます。

一、本文の内容についても、刺戟の強いもの  
 は極力掲載しないようにするのは勿論、掲  
 載した文章は十二分に検討を加え、いやし  
 くも青少年の健全なる育成に支障を与えな  
 いよう努力いたします。尚、本誌の発行部  
 数は最低限度にとどめ、その増大を企るた  
 めの努力はいたしません。



「甘<sup>あま</sup>

い

鞭<sup>むち</sup>」

辻村 隆

「甘 い 鞭」

鞭が真赤に染った臀部で、発止と音を立てると、声もなく微かな呻きを殺して、白いたおやかな女体がぐねり揺いだ。

もう百回以上……いや、何百回を越しているかも知れない。鞭は断続して彼女の背に、肩に、胸に、下腹部に、双丘に炸烈した。陶磁にまがう真白い柔肌は、私の鞭の擗のもとで、喘ぎ、身をくねらせ、のたうち、桃色の条痕をくまなく彩らせて、私の眼前数十センチの至近距離に、関谷富佐子は、今、紛れもなく、悦楽と歓喜の呻きを迸はしらせていたのである。

それは夢想でも幻影でもない。現実に関谷

富在子は、私の汗みずくになって振う鞭を、甘い疼痛と、愉悦の涙に赤くうるんだ恍惚のまなざしで、甘受していたのだから——。

私の激情は頂点に達していた。弾む息も苦しく、握りしめた鞭の指先は痺れ、手首はうずくようにだるかった。

緊縛した女体の種々相に、鞭は必須条件のように唸り、もうかれこれ二時間以上も鞭責めは、絶え間もなく続いている。

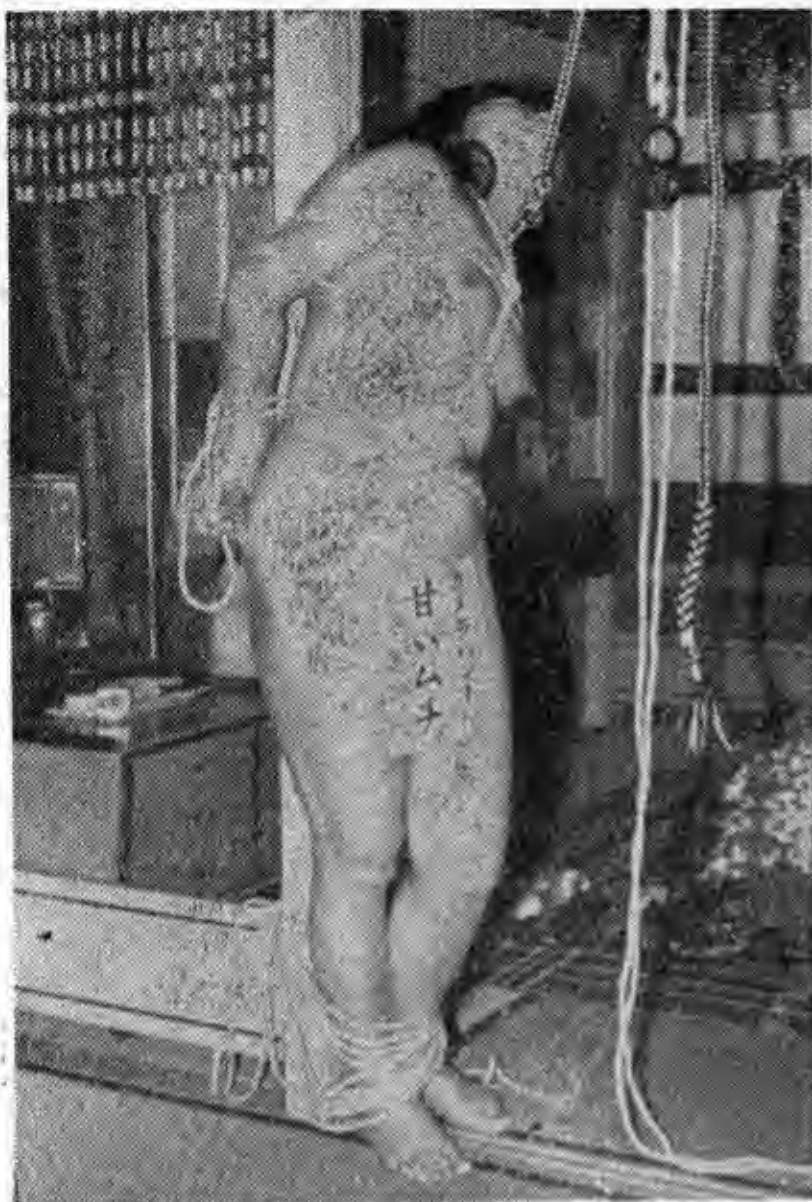
——これでもか、これでもか。この人はどこまで打てばいいというのだろう。私の腕の続く限り、打って打って、打ちまくっても、この人は、息も絶えだえになっても、止して

くれとは言わないのだろうか——

鴨居に吊された両手の、左右の手首は、彼女のたうつ女体の重みと、拡げて挙げた疲労のために、冷めたく蒼白く、静脈を浮き上らせ、ロープは深々と喰い込んで、無情にも痛々しかった。女体の白さを増すように、体毛はすべて剃られてあり、豊かな黒髪のみが鮮やかなコントラストを描いて、空間に波打って揺れていた。

既に限界のあがきを私は、彼女の肌を感じた。一入激しく鞭が彼女の円い脚を撃つ。ウーッと声を殺して肌がけたたましく屈折し、もう一鞭が、すべすべした下腹部に飛んだ刹





那、肌は激しく身震いして、首がガクリと垂れた。ハッと鞭を捨てて駈けより、首を起すと、真赤にうるんだ瞳の底は、神秘的快楽を一杯にたたえて、満足の微笑みを洩らし、乾いた涙痕が、眼尻に尾を曳いて、うすく残っていた。失神寸前の関谷富佐子は、慌てて解いた両手の縄を、手首に巻きつけた後、私の胸にぐったりと倒れ込んできたのであった。

この愛しい人を、何故私はかくまでも叩きのめさねばならないのか——。答えは簡単である。関谷富佐子自身、鞭打ちの非情に、身も世もあらず、惑溺し、恍惚のブルースを奏でていたのであったからに外ならない。「いいのよ、もっとぶっつけていいのよ……もっと……もっと……」

きれぎれに彼女は呟やいていた。縄の巻きついたままの手首が、私の肩にかかった。深い陶酔のあとの気懶るい恍惚感が、関谷夫人の裸身をとりこにしているかのようであった。

私の重く垂れた両腕は、いつしかしっかりと彼女の体を抱え込んでいた。得も言われぬウビガンのかぐわしい、芳醇な香りが、甘く柔かく私の鼻孔をくすぐった。

何かを求めるように妖しくくろぐろと光る夫人の双眸を、痛いほど皮膚に感じて、私の心は危うく崩れそうになっていた。プレイという厳たる一線がまさに

切れかかり、肉体の倫理が、脆くも瓦解しようとしている。背信と背徳のぎりぎりの瀬戸際に私は追い込まれ、私のハイドとジェキルが、懸命に相剋していた。

——いけない。この麗人は、理解ある関谷氏の溺愛する人妻なのだ。今ここで私が理性に負けた時、私は彼に顔向け出来ないではないか。私は、彼の信頼を裏切ることには出来ない。すべてを承知の上で、最愛の妻をこの場によこした関谷氏の度量の前に、辻村隆は一生涯が上らなくなるではないか。今日のこの一夕を、見ず知らずの私のために、つくってくれたそのためにも、絶対フェアでなければいけないのだ。SMのプレイは、所詮プレイに終始しなければいけない宿命にあるのだ。それがプレイ同好仲間の仁義であり、騎士道というものではなからうか——。

しかし紛れもなく、関谷夫人の女体は、甘い鞭の反応で濡れにぞ濡れている。鞭打ちを前戯とした、そのてきめんの終着を希んでいるかに見えた。くねる白い肌に点在する、数限りない鞭の条痕が、赤く息づいて、前後のわきまもなく崩れようとしているかに見える。一対一、男対女の密室での激しいプレイの結末は、余りにも悦楽を呼び刺激的であり



過ぎた。謂わば蛇の生殺しにも以た状態である。すべての思慮分別を忘れ、なるようになりたい私の心と、関谷夫人のさめての悔恨とが交錯して、私の心は妖しく揺れていた。

首に巻きついていている夫人の指先に力が籠り私の肩に尖った爪がするどく突きささった。

ウンと呻く痛さであったが、それが反射的に快楽に変化していた。

「もうおやめになるの。ぶって、もっと思い切りぶって欲しいわ。夫が申しましたの、辻村さんにウンとあざをつけてもらってこいて——。私、余り沢山縛られるの好きじゃありません。縄の痛みより、鞭の痛みが、疼くように私のハートに突きささるのですわ。何故、おやめになるの？」

「怖いのですよ。この上、鞭打ちをつづけると、私自身、自制心がきかなくなる様に思えるのです」

「怖い？」

「そうです、そのあとが怖い」

夫人は妖しくニンフめいた微笑を浮べた。

私は優しくいたわるように、とりもちのうにネットリとへばりついた彼女の両手を、かなりの力を籠めて、肩から外した。

私はスローモーションフィルムのような動き

きで、ゆるゆると体の姿勢を立て直し、おもむろにピースの箱をとった。のどがカラカラに乾いていて、口中はニチャつき唇までがカサカサしていた。

「お吸いになりますか？」

箱から一本をぬき出してすすめると、夫人は無言で首を振った。うつむいたうなじに薄赤く縄痕が首縄の名残りをとどめ、乱れて汗めいた黒髪が妖しくへばりついていて。徐々に顔が上り、万感を秘めた瞳が、やや恨めしげに私の眼を凝視したが、視線が外れると、唐突に羞恥が湧いてきたのか、面映ゆげに音もなく立ち上ると、かたわらのかたい浴衣をそっと纏った。

プレイは終り、冷静が二人の間に蘇がえった。何事もなかったように、私達はホームゴタツを挟んで向き合っていた。密室に投げこまれた情炎の爆弾は不発に終わった。それでいい、それでいいのだ。私は物悲しくも心に言いきかせていた。

乳牛が、与えられた飼料を、ゆるやかに改めて咀嚼するように、彼女を始めてグラビヤで知った頃から、今日のこの日の出逢いまでを、私はもう一度ゆっくり復唱するように憶い浮べていた。長い長い三年有余の空白を。

プレイのショックが、余りにも強烈な印象を植付けたためか、私はいつになく本末を顛倒していた。

カメラ・ハントは、これから始まるのである。

× × ×

塚本鉄三氏の『緊縛フォト撮影の実際』という名文と相俟って、鮮烈なムチ打ちに悶絶する、絶品の数々のフォトを、グラビヤや分譲フォトに烙印した関谷富佐子が、昭和三十九年四月号の、第一グラビヤの巻末に、『法悦境の縄プレイ』と称するうしろ姿二枚のフォトを僅かにとどめて、私達憧憬の視野より姿を没してから、はや丸三年間の歳月が流れていた。

奇クには引続き、こうして彼女のグラビヤはのったものの、事実、関谷富佐子は昭和三十七年の十一月二十日を最後に、急に消息を絶ってしまっていた。その後、沓として連絡はなかったのである。

当時、私は『奇譚三十九夜物語』を連載執筆していて、SMカメラ・ハントには未だ着手していなかったが、過去にも枚挙にいとまなく、箕田氏や塚本氏と行動を共にして、緊縛モデルを構成し、私自身も撮ってい



たから、編集長の尻を叩いて、しきりに関谷夫人との会合をせがんだものであった。

ところが塚本鉄三氏が、彼女を独占してなかなかウンといわない。恬淡な彼にしては、よくよくのことであつたが、それだけに塚本カメラマンの力の入れようが、他の女性と違つていたとでもいうのであろうか。

昭和三十七年十二月号から、翌三十八年三月号まで、毎月載せた彼の『緊縛フォト撮影の実際』は、彼の執念が籠つているとでもいうのか、誠に迫力があつた。

一度辻村隆にも撮らせてやってくれと、箕田編集長が塚本鉄三をやつと口説いて、いよいよ、次の番は私という待望の段取りになつて、今度は肝心の関谷富佐子自身からの、転々と居を変えた局留の便りがパタリと止つてしまつたのである。

無念残念やる方なく、当時は私も塚本鉄三を恨んだものであつたが、胸の疼き、心のしこりを残した俚、関谷夫人からの、その後の便りは煙の如く絶えてなくなつてしまつたのであつた。

「だから、消えないまでに、早く紹介してくれればよかったのに」

私はしばしば愚痴をこぼした。正に鞭声肅

々、長蛇を逸すである。鞭声をききたさに随分と懇請したのに、箕田氏がやつと手配してくる氣になつた時は、惜しくも手の届かぬ人になつていたのである。彼も私の愚痴に大分辟易したらしいが、肝胆相照した塚本鉄三にしてからが、この素晴らしい抜群の佳人をゆっくり独り愉しんでプレイし、撮つてみたいと言ふ氣持を持つていたに違ひなかつた。

海千山千のベテランの彼にして、尚且つ、その様な氣持を抱かせたのだから、関谷富佐子の底知れぬ深い魅力は、測り知れないものがあつたに違ひない。

昭和三十七年の十二月号に、始めて関谷富佐子のフォトが登場して以来、矢継早やに、三十八年になつてからは、一月号から六月号まで、連続彼女の、妖しい魅惑を秘めたグラビアが巻頭を飾つていた。七、八月号はぬけて、九、十月号に再び登場し、三十九年の四月号にポツリと背位がのつて、それで終止符が打たれたのである。

この一年数カ月間、断続して載つたフォトは、塚本鉄三のルポでも分る通り、第一回は三十七年の九月二十一日。第二回目は十月六日。矢継早やに第三回目は十月九日。そして最終回となつた第四回は少し飛んで十一月二

十日であつた。

私は、彼女に対して、すごく關心をもつていただけに、こうした記録を止めておいたのだった。そして関谷夫人の転々とする宛先さえも。

彼女が奇クに始めて水茎もうるわしい便りをよせたのは、昭和三十七年――。

●九月十五日。兵庫県西宮市甲東郵便局留。

ついで第二回は、

●十月二日。兵庫県西宮市西宮郵便局留。

三回目のフォトは、その時口頭で約束。

最後のフォト行の時は、

●十一月十二日。兵庫県芦屋郵便局留。

以上のようになつてゐる。私の彼女に対する執念は、こうして、その手紙の差出先すら克明にメモしておいていた。

その局留先からして、私の想像は、芦屋マダムか、ハイソサエティの西宮市の夙川辺りに居住する上流家庭の若妻を想像させた。事実、塚本鉄三のフォト・ルポからも、その匂いはひしひしと察しられた。

箕田氏も塚本鉄三と二度許り同行したといふが、

「フォト向きなプレイとして、又、或る程度手加減してムチ打ちしたモデルは沢山あるが

真底それを望んだ女性は、関谷富佐子をおいては先ずは見当らないよ。刺青の山原清子のムチ打ちも強烈だったが、彼女の場合は、SとMを兼ねていたからね。被虐一辺倒の夫人とは、何ていうかセンスが違うんだね」

編集長は当時を懐古すると、よくそう言ったものである。

「関谷ファンが、やいのやいの言ってきて困ったよ。辻村さんもその一人だがね、兎に角彼女ほど後味の爽やかな人は、一寸モデルの中でも珍しかったね」

箕田氏が語る通り、奇クファンの彼女の望む声は、かなりあとあとまで尾を曳いたが、箕田氏自身すら、掴み得ぬ彼女の隠遁であったから、讃嘆と惜別の声も日と共に消えてゆき、私の脳裡からも、いつしか忘れるともなく、忘却の彼方へと消えていたのであった。

未だ当時、カメラ・ハントに着手していなかったから、洩々は諦めたものの、若しその頃、SMカメラ・ハントを書いていたとすれば、むざむざと塚本鉄三の手にのみゆだねることもなく、どんな無理押ししてでも、関谷富佐子と相見える機会を掴んだに違いないと思うのだが——。勿論編集長にしても、もっと積極的に協力してくれて、塚本氏よりも、

むしろ私の方へ紹介してしてくれたのではないかったであろうか。

その塚本氏も、あれ以後すっかり情熱をなくし、奇クのグラビヤ廃止の方向もあって、今は他に転職してしまったが——。

とあれ、その謎を秘めた抜群の佳人が、突如として、三年数カ月振りに、何の前触れもなく、始めて箕田氏の許へ電話してきたのだ。彼も最初は、咄嗟には憶い出さなかったそうだが、電話の主が関谷富佐子夫人だと分った途端、電流を受けたような感激のショックをうけ、雀躍りしたような気持になったといっていた。

主人の許可が出て、事情が許せるようになったから、もしおよろしかったら、一度お目にかかりたいという話であった。

彼女の消え入るような、そのくせ鈴を転がすような澄んだ爽やかな声は、箕田氏にとっても夢寐にも忘れることの出来ない、懐かしい響きを伝えた。

——ムチを、お忘れにならないでネ……

最後に念を押すように、羞恥で消えも入りたげな声が伝わった時、箕田氏自身、未だ嘗つてない激しいブレイへの情熱が、にじむように体内に充満したということだった。

三月一日、箕田氏は单身、関谷夫人と数年振りの会合を遂げた。夫人も自身で車を運転してきたことに、彼は歳月の流れを感じたというが、二台の車を連ねて、六甲の麓の、御影辺りまで飛ばし、夫人の要請で『白鶴美術館』の中国古代の酒器や唐磁器を観覧したあと、あわただしい寸暇に、激しいムチ打ちのブレイをカメラに納めてきたということであった。律気な箕田氏は、三年前、私に紹介すると約して、その俚になつていたことを果してくれた。その日に関谷夫人の応諾を得てくれたのである。

雑文書きの私のようなものでも、せっせと毎月飽きもせず書いていると、その書いたものの、どれかが関谷夫人の眼に止まっていたらしい。辻村隆という名を知っていたくれたことは、私にとっては誠に有難い極みであった。あとでイザコザの起るような人では困るという夫人の言葉はもっともなことであり、それが上流社会に住む佳人程別してそうであって見れば、名のみは知っていても、辻村隆という人間を知らぬ夫人の杞憂は当然であった。箕田氏は私のために随分骨を折ってくれたらしい。私という人間の説明は、箕田氏の言葉一つで左右出来るのであるから、夫人に





対し、信頼を植えつけてもらったのは、偏に彼のたまものに外ならなかった。

「あんたに又一つ借りが出来たネ」

「いやいや、辻村さんに喜んで貰えればそれでいいのさ。まあ兎も角、百聞は一見に如かずだ。会って見給え、あんたのハントする女性群とは人種が違うよ、人種が——」

「という、私のハントした女性とは、どうもつまらなく聞こえるが——」

「つまらぬ、つまらないの問題じゃないのさ。何ていうか、ハイソサエティの佳人なんだ。

言って失礼だが、あんたのハントは巷から拾

った人が多いだろう。少くとも過去に上流社会の人はなかったヨネ。そういう意味」

「人間バーバリズムに出来ているのか、その方のつき合いは一向になくてネ。つまり何だネ、『甘い生活』人種とでもいうのかな」

「そうそう『甘い生活』を愉しんでいる人だネ。あんたが股引のようなズボンをはいた騎士スタイルで中世風の館で鞭を振る、楚々として優雅なる西欧風スタイルの関谷夫人の、柔かいむき出しのおしりを打ち据える光景を想像して見給え。

その外、フランスの爛れたルネサンス時代に通用する図だよ。そんな夢を持てる女性なんだよ、彼女は——」

現実派の彼が、いつになく耽美的になって、そんな幻想を描いて喋べるものだから、私の夢は無限に拡大してゆくばかりで

ある。

「で、いつ会えるの？」

「ウン、三月十日が都合がいいっていった。あんたも、折角モデルを紹介しようと段取りしても、近頃は忙しいとか、用事があるとかで、仲々腰を挙げないだろう。十日をダメにしたら、もう知らないよ。とに角積年のあんたの希望を叶えられるよう、コトを運んできたのだからね」

「ああ、四十度の熱が出たって、税務署の呼出しがあったって、何を放っておいても、とんでゆくよ。絶対ゆくよ。しかし、困ったなあ、実の処、本格的なムチがないんだ。本格派の夫人に、まさか腰のバンドでは間に合せも出来ないしネ」

「そんなことだろうと思って、ぬかりなく、先日買っておいたよ。しかしムチはないものだね、なかなか。やっとデパートを三つばかり廻って手に入れたシロモノだ。こんなあっさりしたもの、二千二百円だぜ。すっかり足許を見ていやがる。俺の顔をジロジロ見やがってネ。これと、刺青のキヨコに使った、ムチと二本あるから、御自由に、いる方を使えばいいだろう。吊りが好きなあんたのことだから、よかったら、デッカイ滑車もあるか

ら、二つばかり持ってゆくかね。猛犬用の太い紐もあるし、竹も五本許り、ほどほどにきって準備しておいた。どうだい至れり尽せりってところだろう？」

「どうも——何とっていい分からない。御好意に甘えて、ごっそり、その大きいバッグごと拝借してゆこうかしら」

「こいつ、すっかり甘えてやがる。まあいいだろう」

箕田氏も頗る気嫌がよかった。言うまでもなく、彼の応接間での対話である。

「その代り、つまらないハント書いたら承知しないぞ。ウンと張切って、辻村隆一世一代というやつを頼んまっせ」

「シンドイ話になったなあ。まあ、例によっていつものような辻村調しか書けないと思うが、精々、プレイで張切って努力しまっさ」

箕田氏は貰いものだという、ジョニーウオーカーの黒と、グラスを一つさげてきた。酒は肝臓に悪いと言って止めたし、煙草は肺ガンの恐れありと止めた、意志鞏固な彼に比べて、糖尿の病持ちであり、腎臓もいささかよくない私の方は、至って意志薄弱で、酒も相変らず飲み、一時絶っていた日本酒さえ、近頃は毎夜かかさず晩酌とゆき、日に三十本近

く煙にする私は、少しは箕田氏の摂生法を見習わなければと思いつつも、今こうして、ジョニ黒を眼前にすると、早くも舌なめずりしている情なさである。後頭部のブツブツが近頃又メッキリ殖えた。体調の悪い証拠だ。そういえば女房少々ヒステリー気味は欲求不満なのかも知れない。糖尿が出ると忽ちハッスルしないからね。

出合いの場所、時間、夫人のスタイル、その日のプレイの構成、分譲フォートの依頼など細々と打合せて、彼の許を辞去したのは午後九時に近かった。彼の、眼に入れても痛くない可愛いお嬢ちゃんが二人、小さい手を振って見送ってくれた。二人のお嬢ちゃんの肩に手をかけた箕田氏の円い童顔は、世の子煩悩の父となんら変るところはなかった。

x x x

妙なことを口走るものじゃない。箕田氏邸で冗談に、税務署の呼出しがきたってなんてことを言ったのが、ドンピシャリ図に当って三月十日、確定申告の呼出しの葉書が舞い込んできた。しかも午後一時面談とは、何という皮肉——。

しかし、事ここに至っては行かざるまゝ意馬心猿の私である。わけを話して午前中

にしてもいい、それも開庁早々に駆けつけるという熱心さであった。

三月十日は生憎の、朝からの小糠雨であった。早く来たつもりなのに、税務署の待合室はぎっしりの満員で、皆一様に笑いを忘れた顔・顔・顔である。これからの交渉次第で、ドッサリとふんだくられようというのに、にこにこしてもいられないに違いない。

私の心は、税金のことより既に関谷富佐子に走っていた。もう何でもいい、一時も早く終って欲しかった。私の番号の係は比較的すいていて三番目に呼出してくれた。

脱税する程儲けてもないし、少々のおぼれがあったとて、雑魚に近い私の所得では、混然と濛々と騒音渦巻く署内では、さして問題にもならぬのか、思ったよりあっさりと取調べ？は終り、署員は申告書を皆書いてくれた。所得はあったが控除がかなりあって、妻と子供四人で、もう三十八万円ぐらい引かれる。生命保険、社会保険、厚生年金、源泉徴収分、損害保険と差引くと、幾許にもならない。無事半時間後放免されてやれやれ。私の胸算用より税額は少なく、今日の幸先きのよさを思わせた。気掛りな申告を済ませただけでも肩の荷が軽くなるというものだ。



これで心おきなくプレイに没入出来そうである。

箕田京二のバッグは重かったので、当然車でゆくつもりだったが、関谷富佐子が自身運転してくるとい話なので、バッグの不必要なものを除き、私はウンウンいい乍ら、抱えるようにして阪急電車にのり込んだ。

私の持っている、このなめし皮の黒バッグの中味は怪しきもので一杯である。万一中スリなどいて、その巻添えを喰って、バッグの中味でも調べられることになったら、何とも弁解しようのないものがつまっている。

滑車・鞭・縄・手拭・ライト・カメラ・ストロボ・犬紐・竹棒・赤いパンティ etc. : しっかりと膝にかかえているが、無事に到着を願っている。こんな時に限って妙な事件が往々にして起るからである。車の場合にしても一斉臨検なんか引掛くと弱い。

しかし車中何事もなく、神戸行特急は十分にして忽ち西宮北口に到着し、そこで乗換えて、宝塚行の支線にのる。

彼女の待つ、目指す『甲東園』はここから数駅目だ。午後一時半の約束で、それには充分間に合いそうであった。

小駅に降り立つ。六甲山系に連なる甲山が

雨に煙って定かでない。霧雨はひとしきり激しくなり、駅で私は折たたみ傘を開いた。

赤土の点在する辺りに、造成地がぬれ、今様建ちの、恰好いい小家が立ち並んでいる。

芦屋に住んでいた関谷富佐子が、夫の両親らと別居して、夫と二人、この辺りに新居を構えたという箕田氏の話であるが、地理不案内の私にとっては、優雅な佳人の住む辺りが奈辺かは、皆目見当もつかない。

午後一時二十八分——。定刻二分前に、雨足をついて、セドリックが一台、駅の前にピタリと止った。運転は赤いスカーフを頭からスッポリかぶった、黒いグラスの女性であった。黒と赤のコントラストで、そこからのぞける顔はむしろ白くうつった。

その人は私の方をじっと見守った。私も彼女を凝視した。まぎれもなく関谷夫人に違いないと直感した。私は重いバッグを地面においた俁、雨の中に数歩出た。その人は窓を開いた。

「辻村さんでしょうか？」

女性の方から私にといかけてきた。

「そうです」

私は改めて関谷さんですネと、きき返す必要はなかった。

「遠くまでお呼び立てして、雨の中、さぞ大変でございましたでしヨ。さあ、どうぞお乗りになって——」

凡そ、カメラ・ハント多しといえど、女性に車で迎えてもらったのは、関谷夫人をもって嚆矢とする。最初からすっかりのまれてしまった私はバッグを抱え、助手席にのり込むと、車は滑るように前進した。

「どちらへ参りましょう？」

「さあ、分りません。奥さんの御存知のところへどうぞ——」

「困りますわ、私」

彼女は軽く微笑んで、車をニュートラルに入れて道端で止めた。

「でも全然不案内なんです。何なら先日、箕田さんへ行かれたところへでも……」

「いやですわ。数日経って違った男性と、同じホテルの門をくぐるなんて、変でございましたわ」

それもそうだろう。関谷夫人にとって、それは堪えられぬ現象であったかも知れない。私が運転するのなら、又適当に走るが、すべてはあなた任せの今日である。私は少々困惑した。

「辻村さんは、案外に世間知らずでいらっし

やるのネ。カメラ・ハントを読ませていただくと、相当のプレイボーイを想像してしましたのですよ」

「文の綾ですよ。本人は、このように至って内気で碌に返事も出来ません」

「ウンばかりおっしゃって。徐々に本心をむき出しになさるのじゃありません？」

関谷富佐子は、からかうような口調で言った。赤い唇が心持ちほころんで笑っている。

車中に入った時から、すぐ気づいていたが夫人の体からは、えもいわれぬ快よい香りが漂っていた。ありきたりの安香水でない、それはかぐわしく妖しいときめきをもたらす媚薬のようにも感ぜられた。

「すごくいい匂いですね。何ですか？」

無粋な質問に、夫人は軽く笑った。切長の晩につぶらな黒耀石の輝きをもつ瞳が澄んでいた。笑えばよく揃った、一本の義歯や金歯もないととのった白い歯が、清潔そのもののように真珠さながらにキラキラと光った。

「それほどものじゃありませんわ。ウビガンですわ」

名はきいたことのある、高級仏蘭西香水である。この匂いか、ウビガンというのは。

女房につけさせて、関谷富佐子の匂いを偲

びたいが、一寸手の出る値段ではなからう。

「雨の中で止っていても仕方ありませんわ。

じゃあ、思い切って有馬へでも走りましょうか。芦有道路を走れば一時間とはかかりませんことよ」

「お任せします。あなたとなれば何処までもです。奥さん」

「ホホ、そろそろ辻村さんらしい御冗談仰有いましたわ。じゃあ、まいりましょう」

爽やかな声は弾み、私はすべてに気圧されていた。今の立場で見れば、夫人はさながらS的な女王のように思えたが、この夫人が、甘い鞭の握のもとで、悶絶するまで打たれ続けるその人であるとは、今の環境からして、想像も出来ないことであった。

雨は小止みもなしに降りつづき、いつしかミゾレ交りに交っていた。六甲山系の山並は灰色に閉ざされて、雪めいた気象を憶えた。

カーラジオをひねると、場違いな勇ましい軍歌がいきなり飛び出した。憶えのある「父よあなたは強かった」をボーカルグループが力強く唄っていた。引続いて「露営の歌」が流れてきた。甘い雰囲気を引き出そうとしたラジオの曲が、およそムードをこわす曲許り流していた。

「今日は昔の陸軍記念日なんですわ」

「ああ、それで……」

「私の幼い頃、私の里の父が軍人で、この日によく赤飯を炊きましたので憶えています」

「私はすっかり忘れていましたよ。そう言えば軍隊当時、この日になると下給品として、兵隊に一合ずつ酒を配ったものです」

「辻村さん、軍隊で何なさってましたの」

「配ったところはW島で陸軍主計軍曹でした。一個大隊の分任官で、大隊本部の炊事軍曹もかねていました」

「私の父は連隊長でした。陸軍大佐——」

「神様の存在ですよ、それは」

「陸軍記念日というと、昔の奉天大会戦の戦勝の記念なんですってネ」

「そうですか、私は精しく知らなかったが、そういうば、確かそんなことでしたネ、主計軍曹を志願したくらいですから、戦争や軍隊は至って嫌いな方でして。話題を変えましょう。今更昔の徴の生えた記念日を憶い出しても仕方ありませんよ。ラジオも近頃はどうかしていますネ」

無言で夫人はカーラジオのボタンを押して換局した。柔かいメロデーがこの局で流れていた。車は私の見知らぬ道を折れ、いつしか





阪神国道を走っていた。芦有ハイウェイの大きい掲示が眼につくと見るや右折している。

「遠出して時間は構わないんですか」

「夜まで主人の許しを得ているのです。おそくなるようでしたら、そこから電話いたしますわ」

屈曲するハイウェイを、関谷夫人は巧みなハンドル捌きで上昇していった。

白いものがフロントグラスにまとわりつき忽然として春の雪が白く、前面を遮り始めた。吹雪に近い激しさである。

中腹にかかる既に積雪が始まっていた。

「三月になって、まさか雪がこんなに降ってこようとは思いませんものですか、わたくしチエンを準備してまいりませんことよ。どうしましょう？」

夫人はやや心細げな声をかけてきた。正に春の珍事といえよう。雪は絶え間なく紛々と降りつづけ、前面の透視は閉ざされている。

「危ないですね。すぐ引返しましょう」

三月十日の雪に、予定はすっかり狂った。夫人と同乗する私は、どんな珍事に遭遇して

も心優しいが、プレイの時間は容赦なく延びてゆく。

夫人は真剣な顔付で、ともすれば滑降りそうになる車を、辛うじてUターンさせた。上りには積っていないかった路面が、既に下降では薄く白かった。料金徴収所に、チエン携行の貼札が急拠、墨

あとも新らしく、書いて貼りつけられてあった。

「いっそ、芦屋のこの辺りのホテルへもぐり込みましょうか？」

「わたくし、芦屋は困ります。どこで知ってる方にお目にかかるか分らないですもの」

「そうでしたネ。じゃあ西宮あたりは？」

「知りませんが、余りいいところないのじゃないかしら。遅くなりついでに、もう一度バックして宝塚へでも出て見ませんか？」

「おやおや、とんだ骨折損のくたびれ儲け」「失礼なおっしゃり方ね。それじゃ辻村さん最初から指定なさったらよかったのに」

関谷夫人は少し気に障ったのかツンとした口振りだった。まさに私の失言である。彼女はよかれと雨中を努力し、積雪の芦有道路を必死で下ってきているのだ。一寸怒りたくないのも無理はない。

「御免なさい、うっかりお気に障る冗談を言ったりして——。私もうずうずしていたものだからつい。何しろ箕田さんから、奥さんとの今日のことをきかされて以来、まるで仕事の手につかず、一日千秋の思いだったものですからネ。植木等じゃないが、その一言が多かった」

パーバリズムのズケズケ喋べる私と、上流社会の芦屋育ちの奥様とでは、住む世界が違うのか、どうも喋べていても、も一つシツクリゆかない、或いは夫人は私に、輕蔑の念を抱いたのではあるまいか。私は内心氣圧されて忸怩たるものを感じていた。

夫人は私の弁解を軽く聞き流して、雨中をついて一心に前面を凝視しつづけていた。

「わたくしだって早くくつろぎたいですわ」  
 忘れた頃、ポツリと夫人はつぶやくように言った。

宝塚にもう三キロ。プレイの時間は刻一刻と近づきつつあった。

X X X

近頃新らしく建ったホテルは、殆んど駐車場を設備していた。マイカー族がふえてくると駐車場なしでは商売にならないのだろう。

ミンクの襟巻に、オレンジカラーのオーバーコートといういでたちの関谷夫人は、二間続きのホテルの和室に通って、始めてサンングラスを外した。アイカラーの隈どりもない、ぱっちりと弾けるようなすずしい双眸である。赤いスカーフをとると、さりげなく巻き上げたアップスタイルのヘヤーが、少し乱れていた。私は夫人の背後に廻ってオーバーに手を

貸す。ウビガンの香が入はげしく鼻をついて、その薫りに眼眩みそうになる。手にもったオーバーコートは綿のように軽々としていた。女中が当然の様に、風呂のカラーをひねって、型通りの茶菓子とポットを置いて去った。部屋の右側の模様硝子ごしに、湯舟の中が透けて見える。

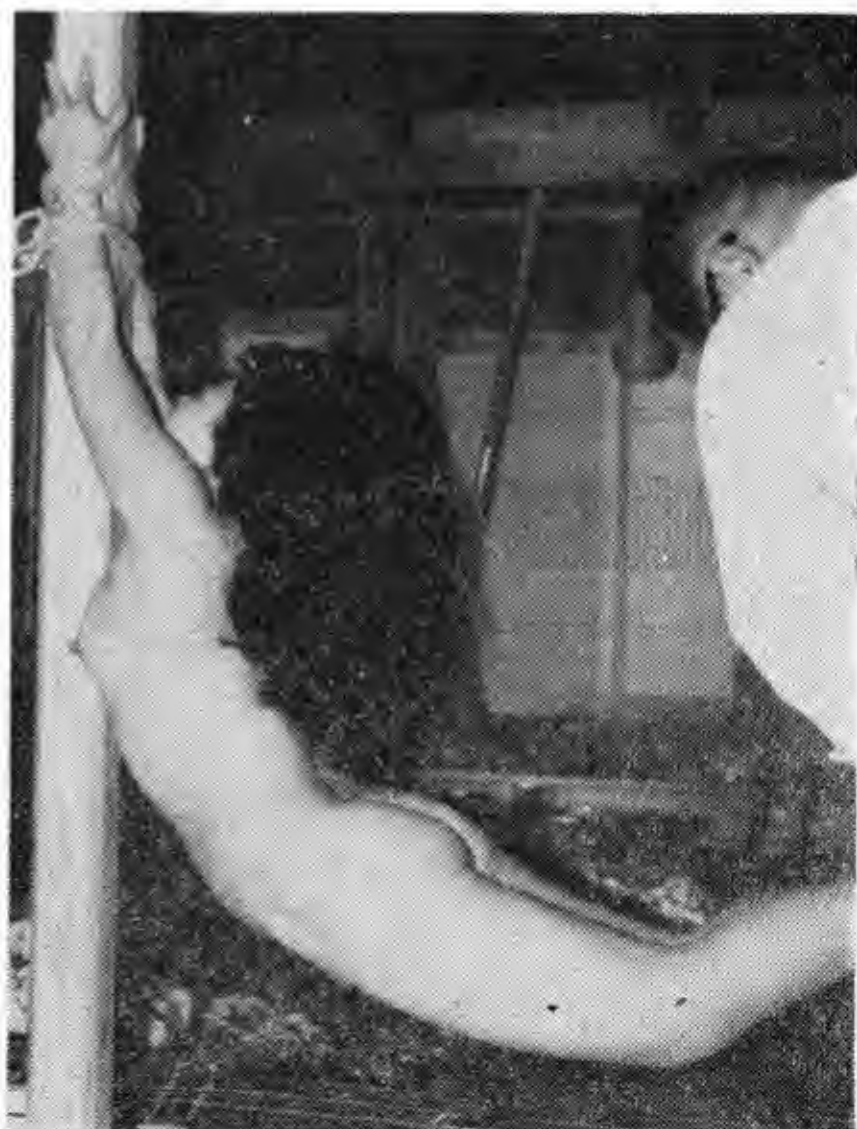
「お風呂へ入られませんか？」

「いいえ、私なら結構でございますわ」

殆んどモデルなら、風呂で温まり、且つは体の汚れを潔めるのが定石であったが、彼女はその型を破った。既にその心構えで出掛けて来たのであろうか。

彼女は部屋の三面鏡に向って、惜しげもなく結い上げた黒髪を素早く解き出していた。

私はバッグを開き、箕田氏より提供してもらった、一見この木の香も新らしいホテルの



和室にはふさわしくない、オソルベキしろものを次々と採り出していった。鞭に滑車、麻縄、竹棒、一塊の縄など、それは始めて見るものにとっては身の毛のよだつ責め道具の数々であった。私自身も彼女を鞭打ちするシーンに入らねば、鞭打った瞬間の緊迫のポーズが撮れないのでストロボ装填して、三脚にカメラを据え、長尺レリーズをセットする。急速に迫りつつあるプレイへの開幕に、私の胸はしめつけられるような疼きを覚えた。



そらしていた視線を彼女に向けると、いつの間にか、備付の浴衣に着換え終り、豊かな黒髪を長く垂らして、彼女は次の間のホームゴタツに行儀よく坐っていた。

クドクドしい説明も、誘導も何も要らなかつた。関谷富佐子は迫りくる私とのプレイの開幕を平静に待機しているかの様であつた。

既に機は熟していた。寝室と二の間のふすまを外し、入口の錠を確かめ、寝室一杯に敷いてあるダブルのマットレスを、洋布団のまま折り曲げて部屋の隅に折りたたんで、出来るだけの空間を作ると、私は縄の一本を持って立ち上った。

近寄って会釈する。

「じゃあ、構いませんか？」

富佐子は微かにうなずいて立ち上った。

ふすまを外したあとに立柱が残る。それを背にしてもらつて、私は彼女の浴衣に手を掛けて一気に剥いだ。柄ものの、恐らく彼女の手製になるブラジャーとパタフライだけの裸身が、突然にそこにあつた。

ふっくらと豊かで、臍たけた肉づきと、真白い均整のとれた素晴らしい肌をそこに見出して、私は吐息に近い嘆声をもらした。

ブラジャーに包まれた胸の隆起と、くびれ

て彎曲するヒップのカーブ、そのどれをとり上げて、人妻らしい崩れはなく、三年前、グラビヤを通じて知った彼女の肉体よりは、遥かに生々と、若々しく息づいているかのようであつた。

裸身から匂うウビカンの香は、彼女の身だしなみのよさを、そこはかとなく漂わせていた。

この端正で楚々とした佳人を、今、心ゆくまで緊縛できる果報者は、燃えさかる期待に胸を弾ませ、縄をもつ手も心なしか震えて、薄桃色にマニキュアした、白魚のような、柔かい手を、立柱のうしろにぐいと握り上げたのである。

愛撫と折檻という、両極端の行為の矛盾に私は思考を迷わされていた。

縛と搔き抱いて愛撫したい慾望に身をわななかせながらも、それはタブーの行為であつた。それでいて一見非情に見える、緊縛ならそれは許容されるのだった。

私は関谷富佐子にいただいた、激しい恋情を振り払うように、むしろ粗暴な態度で、柱にひしひしと彼女を縛りつけていった。

ブラジャーをむしりといった刹那、彼女にハッとした表情が浮んだがそれはすぐ消えた。

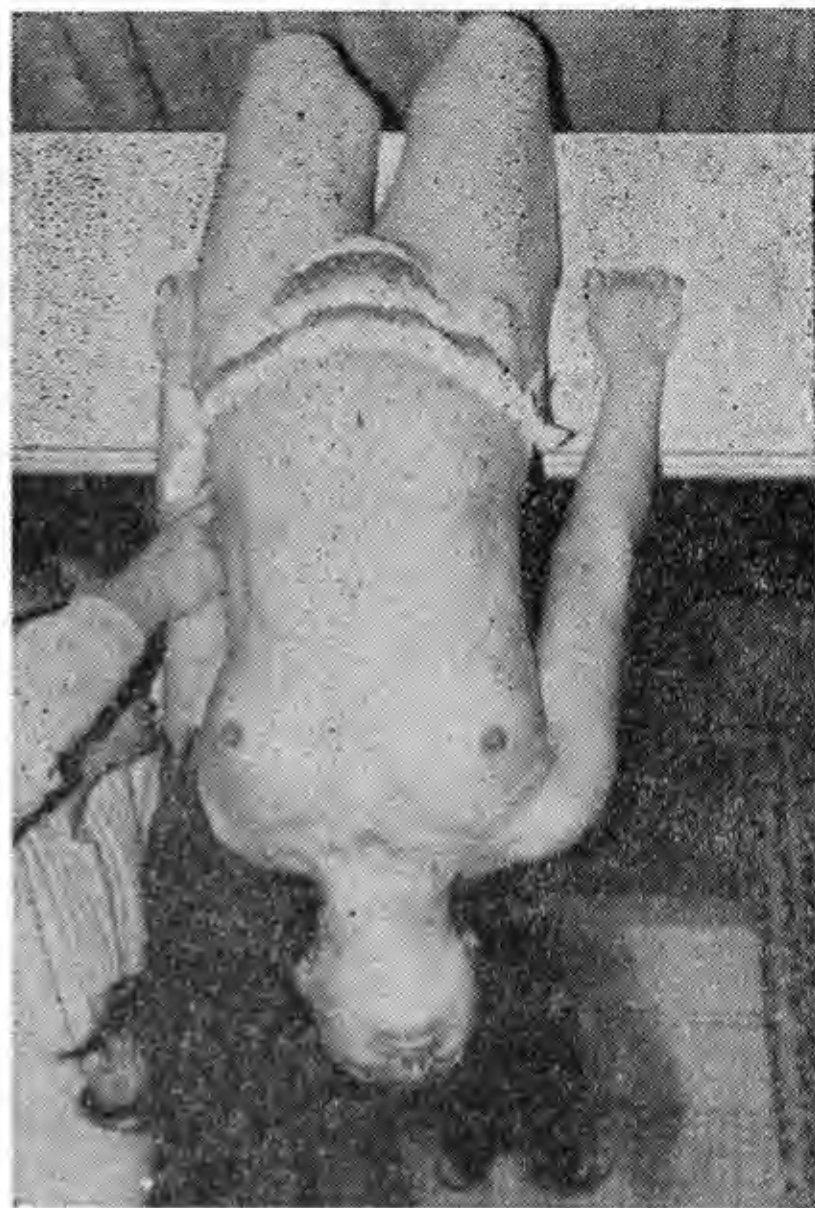
太腿から足の方へ縛って行く時、パタフライの奥にウビガンが匂った。高価な香水を、彼女は惜しげもなく体一杯に撒きちらして来たのだ。私はパタフライを一気に引きむしりたい衝動にかられた。それは誰しも抱く、神妙な女体を探求しようとする切実な現われであらうか。

パタフライの腰の両側で結んだ紐を、息詰るような緊張で解いてゆく。太腿の肉づきが露わになり、私はそこに目をやった時、思わず「ウーン」と嘆声を洩らしてしまった。

すべすべとした肌が、見事に形よく、それは、ミロのヴィナスの彫像のふくれさながらに、清潔ですがすがしかったからである。富佐子夫人は頬を赤らめたが、動ずる気配もなく、身動きもしなかった。剃毛がかくも愛らしく、ふくよかなものであることを私は始めて知らされた思いであつた。いや彼女なればこそ、この肌の白さなればこそ、それは最もふさわしいのであつたのかも知れない。

炸烈する鞭の雨に、甘く耐え得る彼女の双丘も、見事な曲線を描いてみずみずしく、眩しいまでに白く輝いていた。

長尺レリーズの球を、足で踏みつけるように置きかえて、私はしなやかな、数条に先を



刹那——おしりは、見事なけいれんを起して、ビクリと躍動し、欲びともとれるような小さい呻きが、彼女の口からハア——と流れた。次の鞭を待つかのように、彼女の臀部は左右にのたうち、揺れ始めた。

それが、一挙に私の嗜虐心に火をつけたのであろうか。

私はもう、夢中で鞭をふり上げ、激しく音をたてて彼女の臀に、腰に、肩にふり下していたのである。

衝撃のたびごとに、柱にしばりつけられた彼女の体は、伸縮し、けいれんし、閉じた眼尻に、眉間に、歓喜とも愉悅ともつかぬ、強烈なショックの陶酔が、ありありと浮かび上っていた。

しかし、いきなり、この貴婦人に、激しいムチを与えることが、何故ともなく私にはためらわれた。

謝りたいような気持で、鞭を振り上げるとほんの撫でるように、音もなく彼女の臀部を擦ったのであるが——

痛くない程度なのに、その反応は激しかった。

忽ちにして真白な雪の肌は桃色に染まり、数条のみみず腫れが、浮き上った。波のよう

などよめきが胸を打ち、あえぐ呼吸は甘く私の鼻孔をくすぐった。

寸時にして、鞭打ちのプレイは、前置きもなく始まり、一気にエクスタシーの境地へと駆け立てていったのである。

私はこの場の雰囲気、更に効果的なものにすべく、一旦鞭を投げすてると、おぞましい滑車や、太い縄を鴨居に吊り下げた。犬紐の茄子環を、富佐子夫人の胸に嵌め込み、これと滑車をつないだ。二人っきりのアベックムードの密室は、数々の責道具の配置で、一変して責めの密室にふさわしくなった。私一人では大変だろうが、出来得れば、鞭打ちが最高頂に達した頃、この滑車で、この絶世の淑女を逆吊りにし、鞭の快楽に仮死状態になるまで、打って打って、打ち続けたい衝動と野望に燃えていたのである。

既に彼女の顔はほの赤く上気して、私のそうした小道具の装置を間だるっこく感じていたかも知れなかった。心持ち眉間にしわをよせ、眼を閉じてうっとりとした表情は、私の次の鞭打ちの動作を早く早くとせかすようにさえ見てとれた。三年数カ月の空白——、そして今、見知らぬ始めての男——辻村隆——に鞭打たれようとする彼女の心底は既に疼い



ていた。

最初の一曳で、演技かと思まごうた彼女のけいれんと躍動も、鞭打ちを待機していた瞬間に走った、ジーンと来た衝撃が、思わず知らず、甘い鞭をうけとめる媚態となって現われたのかも知れない。パツ、パツとめくるめくストロボの曳光が、彼女の体に鞭がはねかえる寸秒に光り、私は我を忘れて、同じポーズの鞭打ちシーン許りを、十数枚も撮っていたようであった。

夫人とのプレイでは、どうしてもフォトが少なくなるんだと、こぼしていた箕田氏や塚本氏の言葉が、今、はしなくも私に理解出来た。

夫人に対してプレイを行ったもののみがしる、これは感懐である。フォトを、とることより、関谷富佐子の耽溺のムードに巻き込まれ、思わず知らずムチの数を数多走らせるため、カメラの方はすっかりお留守になっしまったからであろう。私はかなり撮った。しかしそれとても、鞭を甘受する夫人の、恍惚のプロフィールを、同じシーンで余計とったに過ぎないということであった。

柱が邪魔をして、彼女の豊かな臀部への鞭打ちは、しばしば外れて腿へ去った。正面切

ってのこの立ち縛りは、どうも鞭打ちには不似合なポーズであった。

私は咄嗟にカメラ・ハントのフォトのことが頭に浮んだ。削除しなくてもよい程に綺麗にすべらかな前面であっても、万一を慮んばかって、私は、そこへ一枚の紙をセロテープではりつける。この日のために昨夜書いておいた（カメラ・ハント、甘いむち）という、富佐子のためのタイトルである。遮蔽物として、その他（関谷富佐子）だの（むちにもだえる夫人）だの（私をムチ打って下さい）だの、思いつくままに書いてきたのである。

そうしたフォト用の技巧に、感興を中絶された関谷夫人は、心持ち、顔にかげりを見せた。彼女にとっては、そうしたフォト的行為より、純粋にマゾの極致の、鞭打ちプレイに耽溺したかったのかも知れない。

急拠、私は解く手も慌ただしく柱から夫人をとき放し、息つく間もなく縛り直しに狂奔していた。柱に両手を縛りつけ、唯手の自由を奪ったのみのポーズで私は鞭を握った。

鞭は肌に無惨に縦横に飛んだ。鞭は唸り風を切った――。

忽ちにして、臀部は桃色から赤に染まってゆき、憂血の個所が、赤を更に紫に変えてい

った。

声も立てず、息をのみ、吐息は激しく夫人の唇から洩れ、躍動し、挑躍し、伸縮する女体に、鞭の痕は次々と烙印を染め出していった。両手を縛った縄が手首に喰い込み、深みぞをつくって、手首はこすれて赤く痛々しい色に交っていった。

鞭打つ手が快よい疲労を覚え、私は鞭を投げ出すと、両足を揃えて縛り、鴨居に吊るべく持ち上げようとした。両手首がそり、柱にそってジリジリと下ったが、たたみすれすれに、夫人の体は空間に逆弓ぞりになって静止した。角柱を爪を立てて掴まえているが、皮肉に縄を深々と喰い込ませたまま、ジリジリと両手は柱にそって下っていた。私の嗜虐性は頂点に昂揚した。

一撃――、力任せの鞭を真赤に腫れ上った臀部にくれると、

「あッ、いたい、ヒーツ」

と始めて遠慮し勝ちなかばそい、殆んどききとれぬような言葉が口について出た。

鞭を甘受する彼女にして、この一撃はよくよく強かったに違いなかった。

空間にのたうつ美しい肌は、ヒクヒクとけいれんし、矢継早やの一撃に、「あッ、イタ



「イー」と続けて叫んで、流石に強じんな弾力のある女体も、ズズと柱を伝って両手が下り、腹部がたたみすれすれについた。両手首の皮膚は柱面でこすれて擦り傷をつくり、手首はねじれて歪曲していた。

やっと私は両足を吊った縄を解いた。彼女の体はぐったりと、その場に崩れ、しばし起き上らなかった。鞭打ち以上に、この不自然な恰好の縛りが、彼女にとって苦痛であったかも知れない。黙々として柱から両手を解き

放すと、数条の縄痕が、深い溝となって彼女の手首を真赤に染めていた。うっすらと血さえにじんでいる。

くず折れた俣、ぐったりと打ち伏した夫人の、うなじの辺りが荒い息づきに揺れて、乱れに乱れた黒髪は、夫人のうつぶせの顔をすっかり包み込んでいた。

抱きしめたい衝動が、激しく私に堪えがたい力で湧き上ってきた。私は抑圧で必死であった。無抵抗でまばゆいような裸身を惜しげもなくそこに曝して尚も男の強い愛のムチを待ちうけている彼女の、ありの俣のポーズに、私は刹那、関谷氏の鞭打ちの恋情を轟々と痛いくらいに分かる気がしたのである。

鞭打ちで熟し切った愛情のはけ口が、すさまじい迫力で、夫人の体内で爆発する時、そのエネルギーの強烈さに、彼女はしびれ、う

めき、夫の胸中でのたうち、甘い吐息と共に恍惚とした境地に、我を忘れていたのに違いないのだ。

鞭打ちのあとにつづく、その陶醉と恍惚、それが富佐子夫人を敢えて鞭打たれるプレイにかりたてた直接の原因であることを、私は今、膝下に身じろぎもせず、燃える情熱を胸に秘めてうち伏す、彼女の女体に発見したのだった。

その特権は、唯一の愛する夫、関谷氏のみが行行使し得る特権であった。私はそれを確かめたかった。

心を鎮めるようにピースに火をつけ、依然としてうつぶせになった俣の夫人の背に、そっと浴衣をかけてから、私はきいた。

「どうして三年以上もブランドをつくったのですか。なのに急に又、こうしてあなたが出掛けてこられたのか、そのわけをきいては、いけないでしょうか？」

「三年半ばかり外国に駐在しておりました主人が帰ってまいったからです。よ。主人の留守の間、あの人の許しを請わずに、このようなことをするのは、私の氣持が許しませんし夫に対していけない事だと思いますもの」

「夫の長期に亘る不在中に、或いは浮気めい



た行為の人妻は多いですが、奥さんの場合、その逆だったわけですね。外国はどちら？」  
 「パキスタンのカラチでございます。インダス河の夜景はすばらしいから、一度来い来いと申してまいりましたが、とうとう行けずじまいでしたわ」

私には皆目見当もつかない国である。

「御主人の鞭打ちは、もっときついのでしょうか」

「ええ、息もたえだえになる時もございますが、時間は割合短こうございますし、そのあと……」

夫人は言葉を濁したが、言わずとも分っている。力強い、激しい愛撫が待っているというのだろう。

「よく、御主人は愛する奥様を、私達のような者のところへ、こうして独りでこさせますね。その心理がどうも——」

私の一番知りたい疑問である。

「いつか主人にお目にかかっていただいて、あの人の口からじかにおきき下さいますといのですが、とても忙がしい人でございますので……」

「私の推測ですが、御主人は御自分だけの鞭打ちがマンネリズムになった。奥様は嗜虐的

な御主人に献身的に仕えられた結果、いつしか知らず知らず、奥さん自身、鞭打ちに甘みな快楽を見出すようになった。その甘美な悦楽が、果してどの程度まで本物であるかを御主人は他人の、誰か安心出来得る人に奥さんを托されて試して見たいと思われた。プレイのありさまを、御主人は奥さまの口から細大洩らさずおききになり、それを自身のプレイにとり入れられると共に、奥さんが口を濁し、或いは応答を渋ると、その行為を鞭打ちの代償として、御主人は沈滞しようとする嗜虐心をかき立てられて、鞭に力が入り、お二人のエクスタシーの境地は更に深まる。奥さんの心を確っかり堅く掴んでおられる御主人は、例えばあなた一人を、何処に放置しようとも、絶対大丈夫との確信をもっておられる。その結果は、奥さまの三年間有余の空白となつて見事に実証された。どんな環境におかれようと、奥さん自身崩れられる人でないことを御主人は確信していらっしゃるのです。こうして寄越されること自体、確信の上に立っての行為だと思ふのです。如何ですか、私の推察は——」

「全部が全部では御座いませんが、大体当たっているように思われます。或る一点を除きま

しては——」

「その一点とは……」

「それは心の秘密でございます。誰にも申せませんわ。私ひとり、そっと心の奥底深く秘めていることでございますもの」

関谷夫人は妖しくも又、男心をそそらずにはおかぬようなアルカイックな笑みを頬に浮べた。その謎めいた微笑の底に、私は夫人のその秘密が、Mの本性に帰するものであることを、ヒタと感じとったのである。

「少し鞭打ち以外のプレイや、縛りをしてもよろしいでしょうか」

「私、本心は、余り沢山に縛られることを好みませんが、別段構いませんことよ。主人も縛る方は案外単純なんですの」

関谷夫人は稍々、関心薄気だったが、それでも気軽に応じてくれた。

「本当は逆さ吊りして、鞭打ちしたかったのですが、今の私の力じゃ、ひとりでは、とても無理です。だから諦めることにしますが、この鴨居の上の長押に、逆さに懸垂のようになつてぶら下っていただだけませんか。縛らなくとも結構ですから」

「さあ、出来ますかしら」

「私がかつぎ上げて見ます。足の方から鴨居

の上にのせて跨がし、サーカスのブランコのりのように、膝のうらでしっかりと体を支えるんですよ。いいですか」

私は富佐子夫人の背と腰に手をあてがい、力を入れて抱き上げると、頭を下にして、両脚の方を持ち上げていった。夫人の脚が鴨居の上にかかり、じりじりと押し上げてゆき、膝の裏で、しっかりと体を安定させたのを見すまし、私は体をかかえていた手を離して、夫人の両足先を強く押えて握った。

軽業的な瞬間の逆さポーズである。矢継早やにレリーズを踏んで、数回閃光が走り、夫人は体をくるりと一回転させて、私の背におぶさる恰好になって降り立った。

「私、高校時代、体操が得意でございましたが、さすがにもうダメですわね。すっかり体がかたくなっちゃって」

「いやいや、とても出来ない芸当ですよ。恐れ入りました。ご無理ついでもう一つ。今日実は竹棒を五本許り持参したのですが、折角の品物ですから、一ポーズだけ、これを使った緊縛をとりたいのですが」

「どうぞ、御遠慮なさらないで」  
気易く応じてくれる言葉に甘えて、緊縛の体に、胸にX字形に竹棒を通し、首の下、両

脚、更に残る一本を腹部に当てて、一見何ともゴテゴテした、パツとしないポーズだが、一応五本の竹棒を使った緊縛のフオートをものにした。

「お疲れになったでしょう。もうこのくらいにしておきましょうか」

私は至極協力的な夫人の態度に、一応満ち足りた思いで、いたわるように声を掛けた。

あにはからんや、夫人の表情に意外という瞳が泛んだ。

「ええ、でも私ならいいんですよ。そんなにお気になさなくても。余り疲れていませんから……」

「そうですか、それじゃ最後に……」

さて、次は何をやるべきか、やりたいことは多々あれど、いざとなると、ありきたりの緊縛では、夫人の感興をそそらぬようにも思われたのである。富佐子夫人の眼は鴨居に走っていた。呟やくように、

「主人の縛り方は、両手を拡げて、棒縛りしたり、鴨居にうんと左右の手を拡げて爪先立ちに吊しておいて、鞭をうつのが好きなんですのよ」

私は聞きのがさない。すぐさま言葉尻に尾を曳いて、

「じゃあ、この鴨居に両手を拡げて爪先立ちに縛って見ましょう」

と縄を握って立上った。

両手首を鴨居に吊して縛っただけの、全身何一つ蔽うものとなない、輝やくような美肌に、幾分赤味のうすれた鞭痕が、新たな縞を誘うかのように色づいて映えていた。

夫人の瞳は、俄然いきいきと輝やき、爪先立ちの指先きに、鞭を待つ、力強さが感じられた。確かに今、関谷富佐子は、いそいそとしている。

「こうして打つんですか」

鞭を握るや、全身に一本の縄の邪魔もない美肌の背中に一鞭、発止と振った。

その一打は、忽ちにして、夫人本来の、あの激しい反能を示して、彼女は大きくのけぞり、爪先は空を切ったたらを踏んだ。

皮下脂肪は躍動を開始し、薄桃色にあせかけた彼女の臀部は、私の数撃で、再びいきいきと赤く色づき始めた。

私は豊かな胸のふくらみに、くびれたウエストに、すべっこくなめらかな下腹のふくらみにと、なめる様に鞭を這わせていった。

恍惚と快感が全身をつらぬき、呻く甘い吐息は、悩ましく私の耳朵を打った。



所嫌わず当る鞭に、女体はふるえ、おののき、時としては、「あッ、イタ……」という控え目な絶叫が洩れた。洩れる呻きと共に、

「あッ、あなた——もっ……」

と、その切れぎれな唇をついて出る言葉のはしばしに、（あなた）というなまめいたコトバに私は、私のことだと思った。直撃が飛来し、咄嗟に口をついて出るその（あなた）と、又しても甘く口にした言葉は、それが私に対しての呼称ではなくて、夫恋しさに（あなた）と叫ぶ夫人の、途切れ途切れの甘美なる嬌声であったことを私は、やがて知らされたのである。

力任せに撃つ鞭が、強い手ごたえと共に臀部にはげしくはじけ、彼女は全身を浪打たせて弓なりに背をのびしてそり返り、その時、

「あーッ、あなたあー、あッ、あなたあー、あーッ、はやく……。抱いてえー」

眉間に苦悶と悦楽の交叉した限界の陶酔が流れ、眼尻に甘い露が走って、夢うつつの如く、のたうちながら夫人の口をついて出る媚声は、夫の愛撫を待つ、妻の激しい求愛の呻きに外ならなかったのである。

憑かれたように私は夢中で鞭を振った。しかし次第に彼女の鞭に対する反応は緩漫にな

りつつあった。体の揺れの振幅は小刻ぎみに小さくなり、甘い鞭に身も心も融和した渾身一体の感があった。

鞭を変え、箕田氏が新たに買い求めた、長い靴べらの先を切り裂いたような革鞭で、ペタリ、パチリと舐めるように叩くと、鞭をかえた反応はこだまのように撓ね返って、その一撃、一投足のたび毎に、夫人の体は、再びはすみ、うねり、もだえ、はねた。それは彼女の全身全霊が鞭によって活動しているかに見えた。

飽くことなく、私の鞭は唸り、空を切り、女体に炸裂している。

陶酔と恍惚の交錯した苦悶の表情は、美の極致であった。私は関谷富佐子に始めて、被虐に陶酔し歓喜する姿を見出した。

それは折檻とか、責めや、苦痛という言葉からは、凡そかけはなれた、エクスタシーそのものの境地であった。鞭打ちがかくも愉しいものであることを私は知った。夫人にとっでは、交錯し、飛来するムチの一撃、一撃が甘美であり、甘い鞭であったのだ。

私は無我の境地をさまよっていた。刻々様相をかえ、気懶るく静止すると見るや、忽ちに又してもけいれんし、齒を喰いしぼる。

鞭のポーズの千変万化に、この万華鏡を私はいつ果てるともなく、飽きもせず覗いている自分を、そこに見出していた。

……………

鞭が真赤に染まった臀部で、発止と音を立てると、声もなく、微かな呻きを殺して、白いたおやかな女体がぐねり揺いだ。

もう百回……いや、何百回……

（ドグラ、マグラだ。鞭に幻惑された私の頭はおかしくなった。冒頭に戻っているではないか——。私のカラッポの頭脳は、ただこの甘い鞭にのみ凝固しているというのか）

× × ×

全身真赤に彩どられた、熱っぽい鞭打ちの肌を、両手で撫でさすり乍ら、既に彼女は帰宅の身支度を慌ただしく整えていた。

乱れに乱れた黒髪が、彼女の巧みな手捌きで、最初のようにまたたく間に結び上った。

「お風呂入らないのですか——」

「ええ、主人が待っているものですから——」

そっと鞭打ちの肌をこの俤にしておいて、今日の成果を関谷氏に見せようというのである。気もそぞろに、既に彼女は帰心矢の如くであった。

「随分、乱暴にぶって御免なさいね」

私は三面鏡に向って頭を下げた。

不発に終わった情炎の爆弾——。それでいいと思う反面、私は物悲しい満ち足りぬ感懷にひっそりとひたっていた。白昼夢と幻想のないう交ぜたような二時間、私は鞭を振り、存分に関谷富佐子を撮り、何ひとつ満たされぬものはない大成功のハントであった筈なのに、どうして斯くも、心淋しく物悲しいのである。プレイの恍惚の刹那叫んだ、彼女のあの絶叫の谷間から洩れた（あなた）という言葉が所詮、夫の代替者としての、関谷富佐子のM性を十二分に満足させた、あわれなピエロに過ぎなかったことを、今更いやという程、思い知らされたからであろうか。

鞭打ちによって凝固し、結集された、彼女の肉体の昂揚は、彼女の帰宅と共に始まるのかも知れない。甘い鞭のあとにつづく、真の「甘い生活」が大きく口を開けて、彼女の帰りを待ち構えているとしたら——。

存分に鞭打たれ、ヴィナスのような美肌を余すことなく曝し、無抵抗のポーズをとりながら、関谷富佐子は一分の隙も私に与えなかったのではなからうか。

私の胸に凭れ込んで、濡れにぞ濡れし夫人の、何かを求めたあの眸は、何を物語っている

## △手記△ かなわぬ夢

大 木 淳

私は四十五才になる、ある公社の課長。

私は妻よりも、職場の女性たちよりも、何よりも美しい少年を愛します。十七、八才から二十二、三までの清純な少年を、いろいろな形でオシオキしたいのです。

私は駅のロッカールームに中型のポストンバッグをあずけています。もし誰かが、その中を開いたら驚くでしょう。いろいろな女装の道具、特に女性の下着類、それにオシオキ用の小道具がいっぱいつまっています。週に一、二度、私は出張とか残業とかいって、そのポストンとともにホテルで私のひそかな夢にひたるのです。

☆

恥かしがる男の高校生を裸にして、真白いズロースを穿かせたい。私の命令は絶対です。男の子はふるえる手で、おそろおそろやかなレースのフリルのついたズロースに足をとります。そのバツの悪るそう、しかしピンクにもえてくる肌。そして黒いストッキングと赤いガーターをはかせたい。そしてピンクのシュミーズをつけ

させたい。

それから私は大きな二〇〇CCの浣腸器をとり出して、たっぷり三回、かなり濃い目のグリセリンをズロースを下げてベッドの上で注入しよう。少年はすぐにベッドの上で叫び声を挙げそうになる。口には古いメンスパンドで猿ぐつわ。大交、大交、白いシャツの上でお粗相されては。広い黒のビニールシートを腰の下にあてがって、両手、両足ともナイロンのロープで縛ってしまう。しかし、私がやっと縛り終えるのを待ちきれないで、下半身で悪魔の音がしはじめる。

かわいそうに、ひたいにびっしょり汗をにじませて、ピンクのシュミーズの裾を乱して男の子が身もだえしつつ、全身をがくがくふるわせながら、次の瞬間、男の子はぐったりと虚脱したように、黒いビニールシートの上でのびてしまう。ああ、せっかくの、レースのズロースもなにも、ぐしょぐしょに汚してしまっ

☆



たのだろうか——。夫ならぬ私に、刹那、めくるめく鞭打ちの洗礼による、結実を求めたのであろうか——。私は遂に彼女の本心を知らずにすべてを終えてしまった。

彼女は既に変身して、ミンクの襟巻に、オレンジカラーのオーバーコートを纏い、極めて淑やかな、高級社会の貴婦人に還元していた。

「本当に有難うございました。お蔭でとてもたのしいひとときでしたわ。いずれ又機会があると存じますけど……」

貴婦人は軽く会釈すると、床の間の電話をとった。

宝塚は夜だった。まばらなネオンが夜霧に包まれ、川の流れの音が一きわ耳をうった。

「西宮北口までお送りしますわ」

爽やかなかおりをまいて、車に乗り込み、悠揚迫らず、キーを挿入した。

(昼は淑女の如く、夜は娼婦の如し)

そんな文句がフト浮かぶような変り身の早さだった。

暗黒に包まれた舗装路を、一条のライトを頼りに、時速六〇キロ近いスピードで、関谷富佐子は端麗なプロフィールを、私の脳裡に灼きつけながら、ひた走りに走っていた。

二十才ぐらいのスポーツマンの逞ましい青年をいじめたい。私の命令で、ビールの大ジョッキを三杯飲まされる。そして裸にされたあと、ピンクのメンスバンドを穿かせよう。お洩ししてもいいようにパットを幾重にも重ねて。しかし、こぼれないかどうか私は知らない。その上から黄色のナイロンパンティ、コルセットもびっちり。シームレスのストッキング、スリッパ、そしてブラジャー。これで下着はでき上り。青年はぶかっこうに立っている。そこで花柄のワンピースを着せよう。ハイヒールもはかせよう。カツラはないので、水玉のスカーフをかむらせる。

さあこれからオシオキの山場にかかる。私はバスルームのタイルの上に青年を転がし、エビ責めの姿勢でかく縛り上げてしまふ。ストッキングで猿ぐつわ、私の哀れなドレイは苦しい姿勢でそり返ったまま、屈辱にたえねばならない。私はわざとドアのカギをあけたままで、ロビーで一服。その間にメイドがベッドの支度部屋に入るかもしれない。バスルームのタイルの上で美しい青年が、つきあげてくる尿意にうめく。固く締められたコルセットが下腹を圧迫して、もう我慢できない。パタパタとベッド作りをしているメイドに気づかれたら

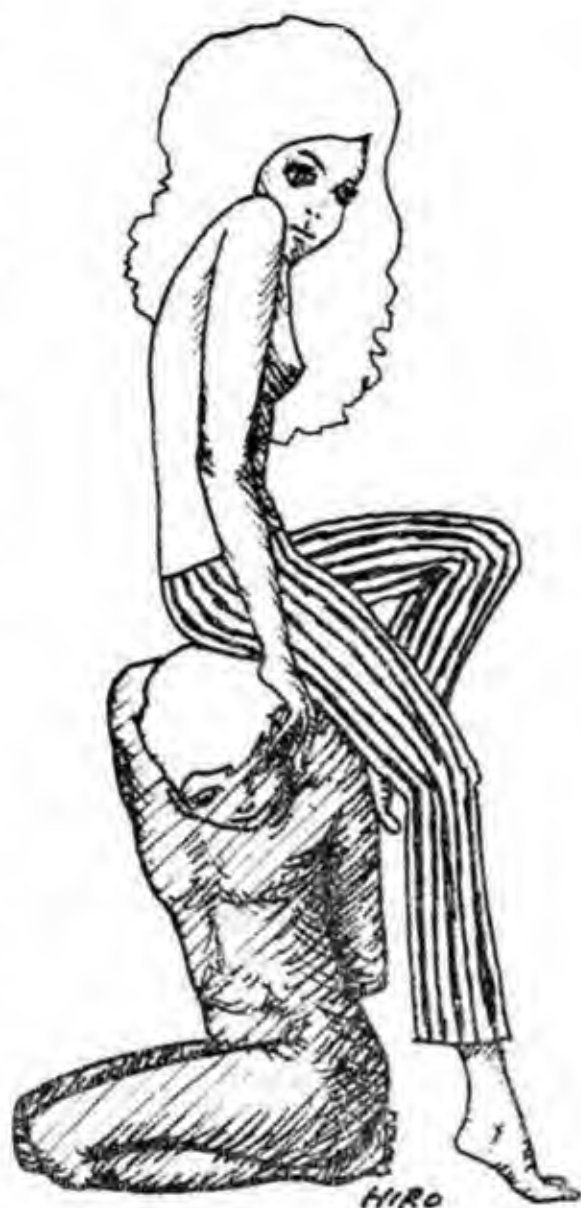
！御主人がオシオキの縄をといて下さるまで、いっちょうちの盛装を汚してもした。しかし、三リットルのビールは生理的な極限をこえてしまう。

ジョーッと音をたてて一気に溢れてくるものに身をまかせながら、青年の目に涙。メイドはふと変な音に手をやすめるが、また仕事をつづける。生暖かい芳香がバスルームにたちこめて、バンド、パンティからコルセットをあふれた黄色い液体がワンピースの腰をびっしょり濡らして、タイルの上に流れをつくる。青年はじっとメイドの去るのを待つ。あとで、その青年が頭の上からシャワーの熱い雨をかけられ、全身洗い清められた上で、裸にされピンクのパンティ一つで自身が汚したものを、すっかり洗濯させられるのは、いうまでもない。

こんないじめ方もしてみたい。高校生の青白い女性的な体つきの男の子。白の運動シャツに紺のブルマースを穿かせる。その下には白いサポーターをあてておいた方がいいかもしれない。それとも生ゴムのオシメカバーがいいかしら。一〇〇〇CCのイリガートルに石鹼液。かわいい女子学生さんはふるえている。バスルームの天井の金具に両手を吊り上げられて爪先でやっと立てるくらい。私はそれを眺める。

## 私のマゾ雑記帳

馬場好男



(1)

フェミニストとマゾヒストは、勿論文字の

示す意味は違うが、共通しているのは女性を尊重し、大事にすることである。

フェミニズムという言葉を、辞書で引いて

みると、男女同権主義、女性解放論、男女同権を目標にして女性の社会的、政治的、経済的、法律的、精神的その他あらゆる種類の権利を拡張しようとする説である。たんに女性尊重、または女性崇拝の意味でもつかわれることがある。欧米的、キリスト教的、ないしは反封建的な発想によるもので、イブセンの「人形の家」は、女性解放の意味でのフェミニズムの代表的な作品である。(世界原色百科辞典)——と出ている。

女性を崇拝し、尊重する——これはマゾヒストとして一番の美辞であるが、往々にしてマゾヒズムとフェミニズムを信奉するお互いの者が案外、身勝手な考えでの上であることがしばしばある。

にやけた紳士が色事師でありながら女性を口説くためのフェミニストであったり、若く美しい女性だけのドレイでありたいマゾヒスト達である。

私にも経験があるが、かつて私の部下に二十代になったばかりの女性がいた。はじめはそうも思わなかった彼女が、いつのまにかすっかり女性らしい身ぶりを示し、社内の誰もが彼女を美人だと評判した。私も彼女のドレイとしての立場を夢みることはないでもなか



ったが、会社内における二人の関係が余りにも近すぎた。部下の女の手につけて、窮地に追いやられた諸先輩の話を嫌というほど聞きまた実際に見ているので、どんなに彼女に惚れても、手を出すことはおろか、自分の性癖は、君の足許に伏すことだ。馬にしてくれ、ムチで叩いてくれとはとてもいえなかった。

あくまでも第三者的な立場に立っての批判であり、彼女の意見に従うことで満足するより方法はなかった。すると彼女は日常の態度が、非常に安易になって仕事上でも私に自己流の意見を出し、自分の非をなかなか認めないどころか、私の思い忘れたり、記入もれなどのミス徹底的に追究してくるようになって来た。こうなると、始めはこの女性が自分の顔や胸の上に馬のりになってくれて……等と考えていた甘い夢は消えて、仕事上では全くの敵味方となってしまった。私は相手の出かたに対して、彼女のミスをどこからでもひっぱり出すことが出来る立場だ。あれこれと口から出まかせに彼女を弁解の出来ない窮地に追いやってしまう。彼女は上眼づかいにもうこの辺で許してくれてもよさそうにと哀願まじりの顔色だ。しばらくして彼女は泣き出

し、私もそこで追撃の手をとめる。

自分はマゾヒストでありながら、この女に對しては、それが出来ないということがよくある。夫婦仲よく、アブプレイに励んでおられる方が本誌にもよく出ているが、殆んどが奥さんがマゾの場合である。

マゾを愛好する者が、自分の女房に自分の性癖を見せるのは、社会人としての立場ではなかなかむづかしいものだと思うのである。そこで勢い、マゾを満足させるためのものは相手が必ず余り自分に関係のない者を見つけてくる。トルコ風呂でためしたり、キャバレーのホステスであったり、旅に出ての恥のかきすてであったりする。

## (2)

本誌四月号での、姫島痴人氏の『マゾ年代記』を読んで私はひとり頬笑んでしまった。それは姫島氏と同じことに私も経験があったからで、何だか旧來の知己であるような錯覚を覚えた。それは酔っぱらったいきおいや、そのふりをして、夜の道など誰も見ていない所での女性に対する平伏や、馬にして下さいと、頼むくだりである。

姫島氏は一度も成功していないと仰言っ

いたが、私は一度だけ成功したことがある。山手線の繁華なS駅から終電車で一緒に乗りあわした、キャバレーのホステスらしい女性で、相当に酔いのていで歩くのにも、ふらついてゐるのだ。

S駅で電車を待っている間、ベンチに腰をおろし、片足の靴を脱いで自分の腿の上のせ、足のツメを一生けんめい、指先でさわっていたのを見たのである。ツメ先が割れたのか、どうしたのか判らなかったが、自分の胸にまであげた脚のスカートをはだけて、くつきりと白い太腿の裏側をみせているのは、大胆でもあり酔っているからともみえたが、案外このような姿態の女性に関心がないのか？誰もチラとはみるが、そしらぬ顔である。

私は電車に乗ってから、彼女から目を離さなかった。彼女は空いた席に坐りコックリコックリ眠りはじめてしまった。私の降りる駅は来たが、ままよとばかり私はそのまま乗りすごしてしまった。M駅で、はじめられたように彼女は眼を覚ますと飛びおりたが、勿論私も一緒に降りた。三月はじめの気候であったがまだ夜更けは寒く、彼女はハンドバッグを左手にかけたまま、ふらふらと階段をあがって外に出た。タクシーを待つ客の中に知り

あいの女性がいて、二人は立話をはじめた。タクシーを待つふりをして私はその会話を聞いたが、やがてくだんの女性はタクシーを待つ女性に「じゃアバイバイ、私も帰って寝な」と、もうフラフラよ」と別れた。

「すぐ寝ないとダメよ、あんまり飲みすぎるわよ」とその女性は声をかけていたが、先刻の女性は、気のない通りの方にフラフラと歩いて、街角をまがった。私はしらぬ様子でタクシーを待つのにあきたフリをして今の女性を追った。角をまがって街灯のあかりにすかしてみると、その女性は相変らずフラフラと歩いている。足早に追いかけて、私は誰もいない暗い道で、その女性に声をかけた。

「あの、お嬢さん、すみませんけど……」

女性は立ち止って、眼をひらくようにして私を見る。私は口早に静かに喋った。

「私は明日、ウマに行きます。エンジをかついでどうしても勝ちたいのです。貴女のようにきれいなお嬢さんからウンをつけてもらいたいです。お願いします。私に勝たせて下さい。エンジをつけて下さい」

私はその場に四ツ這いになった。勿論あたりを見廻してからのことだ。

「私の背中に乗って下さい。ちょっとでいい

のです。そうしたらエンジがつくのです」

「……」

その女性は、ポカンとしていたようだが、「ふうん、あんたの上に乗ればいいの？」

という、すうっと私の背中に跨った。ぐっと背中に、女性の体重を感じて私は、二、三歩歩いたが女性はよろけて私の背から降りた。私はさっと立ち上ると、「有難うございました。おかげ様できっと明日はエンジがつかまりました」と丁寧な頭をさげ一目散に駅の方へ駆けた。その女性をふり返りもせず、夜半十二時を過ぎて「明日」などといったことも考えず、夢中でタクシーを拾って席についてから、たった今、自分の背中に馬のりになってくれた女性への思慕を新たに、マゾの感激にひたったのである。いいしれぬ後悔の気持ちも少しはあったが……。

また、姫島氏は映画をよく見ておられるようだが『痴人の愛』については、昭和三十六年大映が作成した二度目の作を、ご覧になっていないのではないかと思う。

これは監督は前作と同じ木村恵吾で俳優はナオミに叶順子、譲二に船越英二がなった。

前作の原作と違った筋に反して後作は、正

に原作に忠実に、特に最後の馬のりシーンは圧巻で、叶順子は船越英二の馬を、ハイドウハイドウと部屋中を這い廻らせ、足にキスをさせてエンドとなった。天然色ワイドの、我々マゾ愛好者をタンノウさせてくれた大作であった。同時上映は市川雷蔵の「ぼんち」でこれをさかさに読んで笑ったのでよく覚えてる。この「痴人の愛」のポスターは、叶順子が、船越英二を馬にして、にっこり笑って跨っているポーズをみせていたが、余り刺激的ということで掲示を自主的にとりやめたようで、映画館内では、貼られていたようである。

都内でも品川、大田区あたりでは、堂々と街に掲示されて、道ゆく人の眼をとまらせていた。私はこのポスターが欲しくて、ムリにもらって現在、蒐集品の一つとなっている。

それから二、三年前、国映で橋桂子主演で作った『激しい女たち』がよかった。文字通りはげしい女達が男をやっつける映画だ。

映画の中にも、ベッドの上で若い女数人が裏切った男のリンチに、仰向けにした男の身体の上にむらがり乗って、精気をしぼりあげるシーンがあるが、大寫して男の顔の口の辺に、水着をつけた女性の内股で、またがった



ままおしつけているところがあった。これもワイド映画で圧巻なものであった。

この外、『狂った本能』『乳房の仁義』には男を馬にして、乗り廻すシーンが両方あり、特に後者の馬は、かつての名優、佐伯秀雄であったのには驚いた。

去る三月一日、フジテレビのテレビ名画座で一九五二年に出来たアメリカ映画『無頼の谷』を放映した。アーサー・ケネディ、メル・ファーラー、マレーネ・ディートリッヒの三大スターが主演する異色西部劇で、日本公開は一九五五年だった。

この映画の中に、男達を馬にして、酒場の女達が競馬をやるシーンがながとある。特に、ディートリッヒの美しい肢体が馬のりになっているのは印象的で、姐御を演じる彼女を生き生きとさせていた。午後三時すぎから、お茶の間に放映したこの映画は、往年のものにしても面白かったし、たまたま一緒に見ていた若い女性が、馬乗りのシーンで「あらア、女が男を馬にしてすごいわねえ、アメリカはいいわね」といった言葉は私の脳裏に焼きついてしまった。

## (3)

毎年、暮に行われるNHK紅白歌合戦に、心ひそかに紅組に応援している私だ。昨年は女性軍が二十二対三と圧倒的リードで優勝したが、私には快い除夜の鐘となった。

こんなものにまで女性が勝たないと、私は気持が悪いのである。十人抜きのもど自慢などで若い女性が勝ちぬくと思わず快哉を叫んでしまう。だから映画でテレビで、女性がなぐられるシーンは大嫌いだし、まして犯罪をおかして最後に手錠をかけられたりするものは好きでない。こういうものに対しては何が何でも女性がいつも善であり男が悪でないといけない心理は面白い。最近、流行の悪女など、最後まで男を手玉にとって終るようなものなら大歓迎なのである。

子供の番組で、チャコちゃんというテレビドラマがある。先達って、このチャコちゃん達が、男が偉いか女の子が偉いかで、子供同志が争うところがあった。

結局は実力行為とばかり、チャコちゃんが男の子を相手に相撲をとったり、力くらべをしたり、かけっこをする。チャコちゃんは散々男の子を負かしてしまうが、このような他愛のないものに対しても、私はみていて胸がスラッとするのだから、我ながらいささか情

なくなることもある。

ひと頃と違って、この頃は余りに女性が強くなりすぎて、週刊誌や諸雑誌などで、女を征服する方法とか、男が上位にたてとかへんな極をとばしている。男は先ず女(妻)をなぐれと、大きな見出しをつけているのを見るが、噴飯物であり、世相が余程、女性の支配下に徹底して来た証拠といえる。

## (4)

オリンピックが東京で開催されていた頃、私はある用事で代々木の選手村に特別に入ったことがあった。

青々とした芝生の上に、今日は競技のない組なのか若い男女の外人が何か興じあっていたが、赤いブラウスに黄色いショートパンツをはいた金髪の女性が二人、矢庭に一人の男にとびかかって芝生の上に倒し、二人共笑いこけながらうつ伏せになった男の背に馬のりになったのを偶然に見てしまった。

カメラマンがバチバチとこの光景を撮っていたが彼女達は平気で、通行人にも知らぬ顔でおさえつけていた。

おさえつけられた男も、手ぶり、表情よろしく、「おう！ おう！」とさかんに負けた

ことを示していたが、三人の表情はクツタクのないもので、全くうらやましい限りであった。

## (5)

私は、全く突然に初恋（といってもSMに關しての初恋ではあるが）の女性から電話をもらった。

会って話しあったが十数年ぶりである。

その頃私はまだ結婚をしていなかったが、この初恋の女性は私とはじめて逢った十五、六年前には、既に結婚済みで、ただ性格の違いから二才になる女兒をひきとって別居中であった。当時、既婚の女性であると知ったのは、二、三年あとのことであったが、二十三才になっていた彼女（名前を美代といった）は、美人でグラマーで八方美人的であった。私はこの美代に、惚れて惚れて惚れぬいてしまった。今、考えてみると、別段惚れぬくほど夢中になることもなかったが、何となく美代の手練手管に参って、私はがんにがらめにされていたようである。

私が美代と肉体関係を結んだのは、美代を知って、三年半位経ってからのことであったが、私のライバル連中は、早くから美代の身

体を知っていたらしい。美代は常に自分が、誰からも愛されて、とりまかれていないとならない性格だったようで、はじめは自分の若さと美しさで私を惹きつけ、既婚ということが判れば涙で、子供のいることが判れば接吻で、それでも遠ざかろうとすれば最後に肉体を誇示したのだ。

そしていつも決まっていたセリフは、「私は貴方とは結婚しないわよ。だって考えてもごらんさない。出来るわけないわよ」の一点バリ。結局、私自身が、おおらかな気持で、遊び相手とすれば、こよなく楽しい女性であった。私と美代は全くおかしな恰好で結ばれた。

ある夜ふけ、といっても、十一月半ばの十一時頃だったと思うが、寝入りばなの私は、美代の来訪で起されてしまった。むかしドイツ人が建てたという洋館建ての離れに下宿していた私は、窓ガラスをコツコツと叩かれて目をさましたのだ。美代は、私のあけた窓から、私のさし出す両手につかまって這いあがって来た。窓のふちに、フレヤーのスカートをひるがえして跨がりながら部屋に入った美代の白い太腿が今でも忘れられないほど魅惑的であった。

「ね、お酒ない？」

美代は私が二つ折りにして部屋のすみにおしやった布団の上に、よりかかるようにして横ずわりになっていった。

「ウイスキーならあるけど」

「それでいいわ」

美代の、飲みっぷりは、その夜は違っていた。グイグイと飲み干してしまうのに、私はいささか驚いて

「ね、どうかしたの」

と訊ねると、それには答えずなおも飲みつづけるのだ。

「ねえ、貴方も飲みなさいよ。一緒に酔っぱらってしまうのよ」

私はその時、ひそかな期待が突然感じられて一気にウイスキーを飲み干した。

キスだけで、体は絶対にまかさなかった女だったが、ほかの誰彼とは適当にやってたぐせに……と思いながらも美代の艶然としたほほえみの前に黙ってしまった私に訪れたチャンス。日頃は、私はドレイのように美代にくしたものだ。会社で昼食時にパンや牛乳を買って来てやったり、掃除を手伝ったり、給料が入れば美代のよろこびそうなものをプレゼントしたり……。私としては美代は多くの



男がいるから自分はいくらでも、ほかの女とつきあったほうが身のためだと判っているが、男を幾人も持つ美代に喜々として尾をふっていたのは案外、マゾの心理かもしれなかった。

その夜、私は美代と抱きあって熱烈なキスをした。歯と歯がカチカチとふれて私は荒波のように胸をふるわせた。そして……たかぶる感情とは別に私にふつと不安な気持がよぎった。このまま美代を自分の女にしてもいいが、美代は果して自分をうけ入れるのだろうか……とつまらない臆測をこきざみに出しながら私はそつと美代の顔をうかがい大膽な行動に出ようとした時、突然美代が私の顔を見ていった。

「嫌よ、体だけは、そのままにしておいてね、お願いよ」

私は心中、女の「嫌よ」は承諾だという言葉葉を思い出したが、どうも日頃、ドレイのようになつものになって、美代に仕えているせいか、強引な行動がとれない。酒の酔いと、そのいらだたしさが、私のいつも考えている望みの動きと逆になって、私は自分の膝の下に美代の両腕をふみしき、腿の間に美代の顔をはさんだ。

「嫌よ。おりて、苦しいわよ」

美代は顔をゆがめてもがいたが、私は許さない。どつしりと力をこめて抑えつけながら振り返ってみると、美代の両脚は大きくはだけて膝をたてたり、のばしたりしてもがいている。

「じゃ僕のいうなりになるか」

そつと低い声でのぞきこんだ私の眼を、下から見上げて晴れやかに美代が笑い出した。

「ほほほ、イタズラっ子ね。貴方って」

美代はそういつて私の脚におさえられている腕をまるめるようにして両手で私の脚を抱きしめた。私はもう何も出来ずに、そのまま美代の横に一緒に寝こんでしまった。

ところが、その後、私と美代が逢う時はいつも、意に反して私は美代を苛める立場になった。判りやすくいえば、昼は私がドレイであり夜は美代がドレイであった。

いつともなしに私は美代の両手を後手にして縛り二の腕にも縄をかけた。

「ごめんなさい、ごめんなさい」

美代は悲鳴のような声をあげて赤くなった頬をふるわし大きく口をあける。私はゆっくりと、美代の口にパンツをおしこむのだ。

「む、む……」

苦しそうにもがきながら

「ゲエッ」

むせかえると口からパンツを出し、一呼吸させてまた、おしこむ。それを繰返しているとはげしく顔をふりながら美代は叫ぶのだ。

「ごめんなさい、ゆるして。手が、手が痛いよ。折れそうよ」

そのはずだ。後手に背中に廻された手首を自分の体でふみしき、更にやせているとはいえ男の体がその上に乗っているのだ。三十分近くもおさえつけられていては、悲鳴をあげるのは当然である。

私は意地悪く、馬のりのままでいう。

「縄を解いても逃げないか」

「ええ、逃げないわ、だから解いて……」

この時、美代はまた白い歯をチラッと出してニコツと笑うのだ。

私は美代の上からおりと、美代を抱きおこし、縄を解く。

「ああ、痛かった。ひどい人ね。手の感覚がなくなったわよ」

美代は髪を直し、コンパクトを出して唇に紅をつけながら唇を動かす。その白い頬と赤い唇の色が女神のように思えて私は両手をついてしまう。

「乱暴してごめんね」

美代は私に「べつをくれると

「いいわよ、あやまらなくても。でも今夜は帰るわ」

と立上る。私は送るために急いで美代の靴をもって部屋を出るのだ。

こんな繰返しを行って、私は結婚し、美代も別の男と再婚した。そして十数年を経たのである。

私と美代は昼間の喫茶店に向いあった。

お互いが年をとったせいか、むかしと変らないままに見えた。いろいろと話がはずんで美代がいたずらっぽく笑った。

「いまも奥さんをしばっているの？」

「ううん、そんなことをしないよ」

「ほほほ、貴方には随分、苛められたわよ。」

「しばられたり、ぶたれたり……」

「いや、どうもすみません。でもあれは君だけにやっただよ。君にはどうしてもあしたくなつてね。本当は僕がああされたかったんだけど……」

「なにをいってるのよ。調子のいいことばかりいって」

と眼を白黒させられたり、冷汗をかかされたりだったが、別れぎわの一言が、また私の

心をかきたててしまった。

「でも私、あのときのことになつかしいわ。」

私ってスケベなのね。ほほほほ」

## (6)

『週刊読売』の三月十七日号(四十二年)。

異論時評の十一回目として李 嘉(中華民国中央通信社)の書いた「王道」ゆく日本女性」は面白い。

冒頭に外国人が日本女性に関する最初の観察と記録として、約三百二、三十年前にオランダの平戸商館長カロン氏(一六〇〇—一七三)の書いたものをのせている。

「日本の婦人は、男子の出入りが禁じられている家内にとじこめられ、社会的の事件を知ることさえ許されない。女は主人に仕え、主人を楽しませ、子供をあげ、そうして教育するものである」

これについて、もしカロン氏が生き返って今日の日本女性の生態をみたら何といい、何と思うであろうというのだ。

外人記者同志で話題が近代日本女性論に発展したとき、三年以上の日本在歴経験者の観察によると、まず第一に彼らは、日本の女性の驚くべき変貌を指摘した。今まで外国人の

観念を支配してきた、伝統的な日本女性論は徹底的に修正されなければならないというのだ。言葉を変え、日本女性に対する再認識という時代に到達したとの結論である。

英国出身の記者兼作家のクルド氏は、日本女性の転換期は、だいたい一九五五、六年ごろから始まって、一九六四年のオリンピックの時に、その転換は、いろんな面で、もっとも顕著に現われてきた。そして今の二十代の女性達は、いわゆる新女性層の代表者としていちばん個性があつて、おもしろいのではないかとっている。

更に、英国のロイター通信の東京支局長ガリー氏は、日本の女性は神様がつくった、もっともやさしい動物で、欧米の女性と違ってどなられても怒らない、説教されても反論しない、と印象をのべ、しかし日本の女性は反面、同年輩の男性とくらべて、もっとも早く成熟し、また責任感も、強いとつけ加えている。そして最後に、パシフィック・プレス・サービスの編集長カリッソン氏が、愉快な一言を吐いている。

「いままでの一般の人々の日本女性に対する見解と評価は、だいたい間違っている。もし日本の社会が、男性中心の社会だとすれば、日



本の家庭は女性が支配する天下だといってもいいんだ。日本の女は、けっして、一般の外国人によくいわれているような弱いものではない。しかも、彼女達は、家庭観念が非常に強く、そして家において、事実上、実権を握っている総理大臣、兼大蔵大臣、文部大臣、労働大臣、厚生大臣、経済企画庁長官だ。だんなさんは、家庭の面からいうと、ただの外務大臣だ。彼女たちは、自分の夫を年下の弟のように甘く取り扱い、また中国とマレーシアの婦人と違って、男に出て歩く自由を与えたまにはうわ気の余裕さえ黙認する。男はそれだけの余裕と自由があるからこそ、自分の家庭と妻に対する抵抗もおこらず、夫婦と家庭の危機もつい少なくなるんだ。とにかく私が知っている限り、世界中に、日本女性のよくな協力的、かつ遠見と寛容をもつ女性はじつに少い」とベタばれでのべている。

そしてこの筆者は、日本女性に限らず、世界の女性の共通として子供達の遊びが、十いくつの男の子供たちが、まだ剣や大砲のおもちゃを手にして、バカな戦争ごっこをして遊んでいるのに対して、三つか四つの、女の子が、すでに小さな人形を抱いたり、おもちゃのキッチン・セットをいじったりして主婦ごっ

こなで、いかにも現実的な遊びに目ざめている。すなわち、三十、四十になって、おとなになっていない男はさらにいるが、女はかわい人形を胸にだきはじめる、幼いころから、すでに精神的に成人しているのだとっている。

筆者の友人である日本人が

「オレは、いままで女房というものは、いてもいなくても、いいもんだとばかり思っていた。が、しかし、このあいだ、家内が一週間の予定で里帰りをしたが、二日も家にいないと、オレはほんとうに困った。毎朝、着替のネクタイとクツ下とワイシャツとをダンスからさがし出すのにひと苦労だ。朝めしもろくに食えない。それで三日もたたないうちに、オレもガマンが出来ん、とうとう電報で女房を田舎から呼びもどした」

と話したことに対し、そのえらそうな日本人の友人について、一種の敗北者の告白とか聞きとれなかったと評し、その告白から、妻としての日本女性が持っている、見えない力の強さがはじめて判ったような気がした。つねに野性をもつ男を、知らぬまに馴服（じゅんぷく）する日本女性が歩む道は、むかし中国の「王道」の道であるとのべ「王道」

とは、すなわち人を愛す道であり、また人に愛される道であると、結んでいる。

我々の望むマゾというもののにも、この王道の精神が多少なりとも入っているのではないかとうめばれてみる。

いや、やはりヘンタイと片づけられそう。ついでにこの週刊誌にもう一つ、男の悪口、女の悪口で佐藤愛子なる女性が男に対して「自分を忘れている」と次のように悪口をいっている。

「この頃の若い女は、困ったもんだねえ、男を尊敬することをしらん」

とおっしゃる男性よ、男と名がつくだけで実力なきものが尊敬をうける時代は去ったのであります。

「いやんなっちゃうねえ、このごろの女子学生の八割は非処女だよ」

とおっしゃる男性よ。非処女というものはあなたがた男性ありてこそつくられるものなのであります。いろいろとお困りの多い男性よ、女性がいま一番困っているのは、そういう男性が多いことなのであります。

(7)

ある夫婦の会話

「あら、いやねえ、あなただったら、もうこんなにお腹が出ている。まだ三十を出たばかりよ」

「肥満体サラリーマンがふえてるんだよ。でもカンロクがあるだろう」

「ご冗談でしょう。カンロクどころか、グロテスクよ。あなた、かえるに似てきたわよ」

「カエルとはひどい！」

「何か体操をなさいよ。私、これからいっしょに歩けないわ」

「腹の出た男って、そんなにいやかい」

「当り前よ、まだ若いくせにハラだけつき出して歩いてる夫なんて、第一健康にも悪いというし、スマートさがないわ」

「いや、実はね、先輩の〇〇さんが体操の方法を覚えてくれたんだよ、でもこれは、夫婦でやらないと出来ないんだ」

「どういう方法？」

「これはね、男のほうは出たハラがひっこむし、女の方もお腹のぜい肉がとれて、さがったお尻があがるといふんだぜ」

「あら、いいわね、あたしもするわ、ねえ、どうするの？」

「まず男がこうして四つ這いになる。姿勢を正しくしないとダメなんだ、どうだい、ちょ

うど立派なサラブレッドなみだろう」

「そうね、ニンシンしたウマね」

「まぜかえしちゃいけない。こうした僕の背中の上に、君が騎手のようにのるんだよ」

「ヘンなの？」

「さあ早く」

「だってヘンよ、こんな体操ってないわ」

「平均力を養う大事な体操だよ。僕のハラが早く引っこまないと困るだろう」

「一体どうするのよ」

「だから早くのってみるよ」

「イヤねえ、スカートをあげないとまたがれないわ。さ、これでいいの？」

「もっと前にのれよ、そうそう、うーん、案外、君は重いなア、人のことはいえないよ」

「おきるわよ」

「ダメだよ。いいかい、僕の上にのっても、君の両手は僕の肩においてはいけないよ。またがったまま上背をのぼして、足もきちんと僕の両手のわきにひろげるんだ。両手は腰にあてて、いいかい、その姿勢をくずしちゃいけないよ。こうして僕は君をのせて歩く。君は倒れまいと重心をつけてあんばいすること

が一種の運動になる」

「そうね、ほんとうに運動になりそうだわ」

「そして僕のハラは腹筋運動の要領でひっこむってわけさ」

「じゃ歩きなさいよ」

「ただ、いくら体操といっても、真けん味がないと効果がないよ。この部屋を今日は三回廻ったら、明日は四回というふうにして、それに……」

「ハイ、わかりました。あたしも、協力するわ。さア、始めて下さい。あなたがつぶれても、責任を果すまでは許さないわよ。さア出発、進行！」

「ダメだよ、尻をぶっちゃ。馬になったみたいだ」

「アラ、こういうことは面白味もなければだめよ、さア競馬、競馬」

「ウーン、重いなア」

「ハイドウ、ハイドウ」

「余りはしゃぐなよ、つぶれるよ」

「とても競馬のウマじゃないわね」

「じゃ何だ」

「バシャウマ！」

(8)

もう五、六年も前かと思うが、私は一軒の小料理屋へ入った。



はじめてだったが、向うで新しい客は大事にしたのかすぐもてて、案外、値段も安かった。七、八名の女がいて、殆んど年増ばかりだったが、一人だけピチピチした肌をした若い子がいた。

私は当然のように、毎夜そこへ通いはじめた。そして、その若い子とカンバン後、つきあった。

三回ほどつきあって、ある夜、その夜も当然彼女とつきあえるつもりで家の方にもうま

### 臨時増刊号

小説絵画「花と蛇」 特集号

サディズム文学の傑作、完成！

目下発売中、乞うお申込み

注文殺到！売切れぬうちお早く

一部 定価 五〇〇円

(送料30円 但し当分の間当社負担)

団鬼六の名作、長篇小説「花と蛇」千数枚の大作一挙に登載。三三〇頁。四馬孝描く八花と蛇Vテーマ画集、十六葉の口絵収録。今すぐお申込みは、大阪市阿倍野局私書箱第14号天星社へ――。

く徹夜残業のようなことをいって出てきた。いつもの待ち合せ場所に、私はコーヒーをのみのみ待っていたがなかなか来ない。

まさか？ と思ったら、その店の女が私をみつめてやって来た。「健康優良児」と私がアダ名をつけたが、全くよく肥った女で、年も四十五、六位だった。水商売が長いせい、つくりと外観は若くて見られたが、笑うとやはりかくせないシワが出ていた。

その女が私の前に来て

「今夜あの子は来ないわよ。外の若い人と出かけたよ。私、そばで聞いていたからね。ひよっとしたらと思っただけで来てみたんだけど、あいう子なのよ。若い子はどうしてもねえ」とペラペラ喋り出した。

私も、そんな予感はいっていたので、そんなに執着をもって待っていたのではないと弁解したが、結局、その大型年増女性とつきあうことになった。

彼女はなかなか親切で、風呂に入れば体はすみからすみまで洗ってくれた。交替して私が洗おうとすると、トノ方は先に上って床に入るものよと、洗わせない。こんな超大型でも、女性は女性とばかり、その場にうずくまって足の先にキスをしようとしたら、パー

ンと、頬をひっぱたかれた。

「いたいッ」

私は体をおこすと、その女は私の前にピタッと、ハダカのまま坐った。そして

「何てことをするの、あなたは男でしょう、女の足なんかナメる人がどこにあるの、いいたくないけど、あなたはあの子に、顔の上にお尻をのせてくれてきかないそうね。あんな小娘の、お尻の下に大事な男の顔や頭をしかれて、君は可愛いものだ。あんたって人は性根がくさってるわよ。私が、立派な男にしてあげるから、私のいう通りにしなさい。私が男のとる態度を教えてあげるから早くゆきなさい」

と、こんこんと説教をされてしまった。

私は、若いあの子が、店でみんなにマゾ的な私の行為を喋ったらしいことにハッとし、それでも私の顔の上に馬のりになって、「うわア、男を征服するなんていい気持ち」

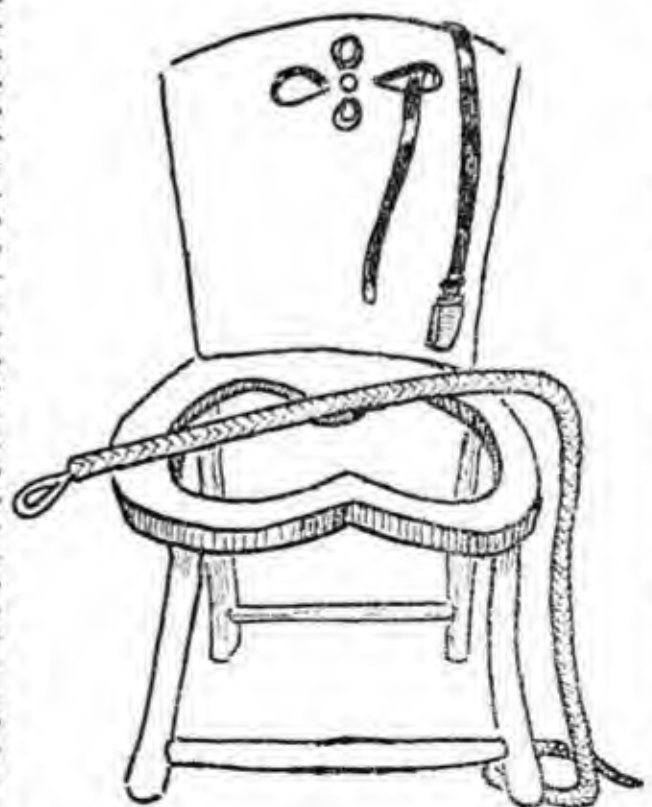
なんていってたくせに……とあれやこれやと後悔や恥ずかしいやらで、放々の態で逃げ帰って、二度とその店には行かなかった。

(おわり)

# 心傷<sup>こころ</sup>たむ<sup>い</sup>遍<sup>へん</sup>歴<sup>れき</sup>

△第三十章 女囚ミシユリーヌ (十) ▽

## 西 条 操



その日の夕方、ミシユリーヌとミルドレーヌは散々に油を絞られた末に漸く「おしめ」の罰を赦して貰えた。

身検たけなわの広間のどまん中、椅子にふんぞり返るベルディーヌの足許に畏まって、云いたい放題のお説教を浴びた二人だった。不恰好なゴム引きブルマーは妙な具合にふくれあがり、その内側のものを想像させるに充分だ。それだけを身にまとった二人は床に脚を折り、両手を前につかえて身じろぎもせず、並べた頭を垂れて支配者の靴先を見詰める。罵倒三昧のお説教の区切りごとに、タイ

ミングよく「はい——」と恐れ入るのだ。ベルディーヌの太い脚は高々と組まれ、返事に性根が入ってないとか、間が抜けているとか因縁をつけて、その靴先がしょつ中頭に飛んで来るし、その靴底が手の甲を床に踏みつける。二人の女囚は胸熱くしながら、ひたすらに赦しを乞うた。ともかく、すみませんと詫び、恐れ入りましたと低頭していれば、みじめにも口惜しいこのお説教もいつかは終るというものだ。

広間の裸祭もあらかた済み、ベルディーヌはあくびして立ちあがった。

「分ったかいッ」

「は、はいッ」

「お教え、ありがとうございます」

「ふん。アゴがだるくなっちゃったよ」

「もうしわけございません」

「も、もう、今後は決して……」

ミシユリーヌたちは、必死に額をすりつける。ご機嫌を損じて、もう一日などと云われては堪まらない。

「立ちな。さっさと立ってシャちほこぼる。脚を大きくひろげて見せるんだよ。ふむ」  
ベルディーヌは仔細に観察し



「洩れはないようだね」

と、ブルマーの気密性を讃えた。

「ま、あれだけ当てがってあるんだし、カバ—の締め方が上手なもの。お前たちみたいに育児の経験がない出来損ない女たゝわけがちがうわね、私は。え？　そうだろ」

「——は、はい。おっしゃるとおりでございます」

ミシユリーヌとミルドレーヌは胸掻きむしられ、涙声で答えた。ことに、ミシユリーヌの瞳には熱いものが溢れる。ミシユリーヌの身許調査は未婚産婦となっているし、体の隅々まで調べているとはいえベルデューヌも医者ではないから、この小柄で美しい女囚が赤ちゃんを産んだ女とは思っていない。吸われたことのないその乳房は若々しいし、ミシユリーヌ唯一度のお産はいとも軽かったのだ。ミシユリーヌの未婚産を疑う者はドロレス女医とベテラン看護婦と、そしてミルドレーヌぐらいのものだった。イヴェットは元看護婦とは云え、産科ではなかった。

ミシユリーヌの胸は痛んだ。おお、ジュヌビエーブ——。産み落としたまま、むつぎの世話はおろか、遂に乳房さえ含ませず仕舞いで人手に渡してしまった我が産みの子——。

ベルデューヌさんのおっしゃるとおりよ。

この私なんか、お腹を痛めたというだけなんだわ。ああ、ジュヌビエーブ。もう一度赤ちゃんに還っておくれ。私に育てさせて欲しいのよ。どんなに可愛らしい赤ちゃんだったのかしら？　このお乳を、お前の小さな口で吸っておくれ。ああ、でも、もう——

女囚ミシユリーヌは痛恨を噛みしめ、背にゴムホースを喰って我に返った。四つ這えと高々と持ち上げたゴムブルマーに、後ろからホースの雨が降った。おしめカバーの使用試験と称して、ベルデューヌは念入りに打ち据える。厚くボツテリと当てがわれているので全然痛くはないが、鈍い音のたびに何とも云えない感觸がひろがり、二人の女囚は腿を合わせて悲鳴を洩らした。思わず腰が低くなり、蹴飛ばされてウツと呻く。両膝がわなないて離れ、のろのろと延び、内腿の素肌がシバきあげられた。

「どう？　あれだけ搗かれて煉りあげられや、さぞかしい味のペーストになったろうねえ」

素肌すり合わせて並ぶあばずれたちが囁き合う。

「ぬるま湯の温度も量もピッタリ。マキシムで出すオードブルのカナッペにだって大威張りで塗れるわ」

「なかで、ピチャッていうのが聞えない？」  
「地獄声だね、あんたは。でもさ、いくらこね回したって無駄だよ、絞り出したものがチューブに戻るもんか。フッフ」

イヴェットは怒心頭に発して、駆け寄りざまに、あばずれ数名の頬を手が痛くなるほど撲って回った。やりばのない怒りと悲しみのけ口だった。

ゴム引きブルマー二つの上に、代る代る執拗なまでに鳴ったホースも漸く収められた。二人はシャワー場に這い寄り、環視の中で泣きながらブルマーを脱いだ。皆にお尻を向けて両脚ひろげ、腰を折り曲げて膝を伸ばしたまま、先ずおシメを洗われる。

あばずれたちが眺めて鼻を大袈裟に寄せ、たまりかねたフォンティエヌが房内衣着用の号令をかけ、哀れな二人を残して日課の続行を計った。

「臭いわあ」

「無理ないよ。この陽気だもん」

「お黙リッ」

凄い見幕のイヴェットに、あばずれたちは

シユンとたじろいだ。

ミシユリーヌたちは泣きながらおシメを絞  
り、ブルマーを念入りに洗う。

「感謝をこめて洗うんだよッ。なんだい、こ  
りゃあ。こらッ」

膝を落としたミルドレーヌが咎を喰い、二  
人はさらに洗い直した。女囚たちは食事に坐  
った。

「早くそこらを洗わなきゃ駄目よ。乾いて、  
こびりついちゃうわ」

「第一、臭いったら。ドン百姓のお仕事は済  
んだんだってば」

またしてもイヴェットが血相を変え、ミシ  
ユリーヌ奥さまを嘲ける連中にビンタを飛ば  
す。札つき女囚がヒート泣くほど力一杯だ。

「あの娘、今日はまたスゴイじゃない？ 折  
角生えかけて来た天使の羽が抜けちゃうわ」

「ふん。おミシユちゃんのこととなると、眼

の色が変わって来るんだ、あの天使の卵。みん  
なが笑ってンのはミルドレーヌなのさア」

「どういうわけだろ？ クリスチーヌ」

「出たら調べてごらん。顔見知りのデカがい  
るだろ。今日だってそうさ。クソ忌々しい連  
中から庇ってサ、そばにヘバリついてんの。  
お陰で、こちとら大迷惑さ。ドレスの流行を

調べとこうと思ってンのに」

クリスチーヌはエドウィージュに囁やき、  
ミシユリーヌたちは漸くシャワーの下に  
立った。

「よおく洗いな。衛生には充分注意しなきゃ  
ね。草がまだ短かくてよかったこと。フフ」

臭いだろうにベルディーヌはそばに立ち、  
なおもヌケヌケと笑った。シャワーの微温湯  
に溶けて流れ、臭気が匂い立ち、ミシユリー  
ヌたちは全身を染めたのだった。

三六〇号と三五八号の二人は剥き身のまま  
で広間に立たされ、革サンダルをくわえてい  
た。云わずと知れたこと、今日の午後の島で  
の一幕の塵で微罰を受けているのだ。連坐し  
た三五八号は恨めしげだが、まあ、禁食だけ  
で勘弁して貰えるだろう。しかし、三六〇号  
の方はそうは行かない。革鞭と懲罰房とが待  
っているのだ。

ミシユリーヌたちは二人はおしめをロープに  
干し、規則どおりの検身でいたぶられ、やっ  
と房内衣を許されて、鼻唄りつつテーブルに  
就いた。

食後、直ちに革鞭の罰が執行された。極の  
天秤棒を両肩に背負わされるや、さすがの三  
六〇号もおののいた。眺めて、三七二号あた

りの女レスラーたちも身ぶるいする。三六〇  
号の大反則がなければ、この大女たち二人に  
お目こぼしはなかったことだろう。三四六号  
の元看護婦も、三四〇号の元秘書課長も、大  
なり小なりシゴキあげられる破目になったに  
相違ない。反則するのにも運不運がある。

コリンヌ課長の懲戒指圖書を鎧ってフィリ  
ス婦人看守は革鞭を高々とふりあげ、イヴェ  
ットは顔そむけつつ天秤棒を押えた。

日曜日の午後、ミシユリーヌは心ほのぼの  
と詰所の床に坐り、婦人法務事務官たちの靴  
を磨いていた。

愛情派の取りなしのお陰で、彼女の発受信  
停止と面会禁止とは早い目に打ち切られ、着  
信していた手紙三通を先刻読ませて貰えたの  
だった。ピエールとロシユフォーとジャンか  
らの便り——とりわけ、ジャン・ラグランジ  
ユ氏からの手紙には涙がこぼれたミシユリー  
ヌだった。寛容と温情あふれる文面を思い返  
すと、嬉し涙が滲む。睨押えつつ、彼女はふ  
と胸を焦がすのだった。行間には、妻リユシ  
ェンヌとの冷たい垣が崩れ行く喜びが、はっ  
きりとは書かないまでも仄めかしてあった。  
(ようございしましたこと。ほんとに——。い



つまでも、そうしてお暮しになって——」

奥深く波立つ女心を胸に押え、ミシュリーヌは神に祈るのだった。

（お体に気をつけて下さいね。ジャン——）

ミシュリーヌは遠く彼の健康をも心配するのだった。肝臓を痛めているようだと言っていたのだ。

「ほんとにいいの？ お手紙書くんなら、いまからでも許したげるわ」

イヴェットが云った。彼女は小さな椅子に端然と掛けている。ミシュリーヌ奥さまが床に坐っていらっしゃるというのに、この私が椅子に掛けていられるだけでもバチが当る、という心境なのだ。

ミシュリーヌは打ち仰いで微笑み、静かに頭を振った。刑務所にいる間には誰にも手紙を出すまいと思ひ定め、入獄直後に書いた二通だけが例外の彼女であった。

イヴェットは、そのかんばせに見惚れる。

（お手紙、よっぽどお嬉しかったのね）

ミシュリーヌの素顔は象牙色に膈たけて、匂い立つような微笑なのだった。

「ほんとにお前ったら、お手紙も出さないし面会もないのね」

と、マジョーリがソファから声をかけた。

「淋しくないこと？」

マジョーリは、このあいだのノール駅での取乱し方について、なんとかして聞き出して力になってやりたいのだった。

「いいえ」

と、女囚は静かに答えた。

「私、罪の償いを終えるまでは、どなたにもお逢いしたくありませんの」

ミシュリーヌはジョーゼット婦人看守の靴を取りあげ、マジョーリはホッと溜息した。

ソファにはモレシエンヌもいるし、隣室にはフォンテーヌが執務している。そのほかにはマリーもいるが、おおむね愛情派メンバーに囲まれて、ミシュリーヌの手も楽しげだ。

やらされている靴磨きなどは口実で、こんなときの詰所当番なんかは、息抜きさせてやるのが目的なのだ。

ジョーゼットがけだるそうに立ち上った。

「磨いた？」

「はい。これでお氣に召しますかしら」

ジョーゼットは受取って眺め

「お前はほんとに綺麗にしてくれるわね」

と感心し、交替のために室を出た。代って日直デスクから戻ったマリーがソファにひっくり返り、靴をミシュリーヌに脱ぎ飛ばす。

このマリーは、育ちのせいか少々わがままなところがある。今はかなり落ちぶれたとはいえ、コンピエーヌ婦人刑務所切つてのブルジョアの娘だ。極薄ナイロン靴下に包まれた足先から飛んで来た靴がミシュリーヌの膝に当たったが、もとより悪気があつてのことではない。なにしろ、十六の年までは専用小間使いを侍らせていた女性なのだ。

マジョーリが紅茶を淹れて皆に配り、自分も一口啜って唇をすぼめた。

「お砂糖入れ過ぎちゃったわ。こんな甘いのが飲めやしない。捨てるの勿体ないわね」

「回りくどいのねえ。さっさと飲ませたらいいってば」

マジョーリは苦笑いしてミシュリーヌに与え、お面一本を取ったマリーは、我れ関せずと、雑誌を手に寝そべった。

女囚は全身に感謝を浮べ、強く云われて膝を崩し、さも美味しそうに啜り込む。

眺めやって、イヴェットの喉はジンと熱くなった。ミシュリーヌは茶碗を片付け、寝そべったままマリーが云う。

「イヴェットも磨かせてやったら？ あんなに、いつまでもクソ丁寧にくすられてたら、私の靴すり切れちゃうわ」

イヴェットはあわてて立ち上がり、生ま返事に言葉を濁し、巡視にかこつけて室を飛び出した。ミシュリーヌ奥さまに磨かせた靴などを穿いたら、勿体なくて足がハレちまう。「ヒマで困ってるじゃないの。何かさせてなきゃいけないのに」

マリーは手錠を投げ与え、ミシュリーヌは念入りに磨き立てるのだった。

その晩の夜勤はマリーとジョーゼットとモレシエンヌ。日曜日の二十四時間勤務にマリーがブツブツいい、ジョーゼットがエドウィーユが耐えかねて、監視ミラーを丹念に窺ったのだ。

「すみません。つい……。でも、あたし、下穿きに指一本かけは……」

エドウィーユは、呼びつけられた鉄格子の内側で身をもだえた。

「お黙りッ。ミラーを見ただけで反則よッ」

女囚は恨めしげに制服女性を見上げた。このジョーゼット婦人看守は少々近視気味なのだが、双眼鏡という武器がある。所詮、肉眼では太刀打ち出来ないし、当直デスクのあたりは、手許灯だけにすれば仄暗いのだ。

エドウィーユは鉄格子のすぐ内側で、床

の上に寝ることを命じられた。鼻吸ったエドウィーユだった。制服が去るや嬉しげにミシュリーヌを見上げた。ミシュリーヌの寝台は最前席で、ぼつぼつクリスチーヌあたりと入れ替えなきゃ、とジョアンヌ女史も云ってはいる。

「お気の毒ね。痛いでしょう？」

「なあにさア、そんな心配は無用よ、おミシュちゃん」

と、クリスチーヌが隣で呟いた。

「その女ったらね、間に挟まってるあたしのこと、邪魔で邪魔で仕方ないのよ。あたしが暗房へでもブチ込まれたら、おミシュちゃんと繋いで貰えるのになって又カシヤがんの。気をつけた方がいいよ、言い寄られちゃうわ」

エドウィーユは照れながらも、ミシュリーヌの横顔を床から飽かず見詰めていた。

夜半、ミシュリーヌは驚いて眼を醒まし、小さく叫んで何かを払いのけた。

エドウィーユの眸が血走って眼前にギラギラ迫り、じっとりした手が裾の中でまさぐり、女盛りの体がのしかかって、同じ毛布の中に入っていたのだ。

胸がまさぐられ、唇を吸われ、触れられてミシュリーヌは腿をよじり合わせ、必死に抗

らいつつ悲鳴をこらえた。

「——ね、おミシュちゃん。後生だから。いいだろ？ ね……。ここ——あたしの……：……こうやって——いっぺんだけ。ああ、なんと可愛いんだろ——」

クリスチーヌが薄目をあけて狸寝入をし、シモーヌが唇を開け、ミルドレーヌがどうしようかとうろたえ、ルーシーが顔を掩った。

「まあ、嬉しいねえ。いうこときいておくれかい？ 大声あげられても仕方ないと覚悟してたんだよ。やわらかい体なこと」

エドウィーユは歓喜し、狂おしく身を悶え、胸許はだけ得ぬ囚衣に焦れる。

「あたしや、もう、どうなったっていいよ。

ああ、ミシュリーヌ。こんなひとを袖にしたバチ当り男もいるんだね。大バカ者さ」

隣房はもとよりのこと、第八監房あたりまでが耳を澄ませて生ま唾を飲み、九房の骨太のあばずれたちが太く唸った。

春の生ま暖かい夜半、ミシュリーヌは愛らしく呻いて恥じらい、心の中で十字を切って神さまに詫びるのだった。

潮が満ち来れば砂浜も湿める。乳房掴まれる荒々しさにミシュリーヌは呻き、手で応えて足指そらせ、エドウィーユの全身もおの



のいた。

「グッドタイミングね。終わった直後と初まる直前の激突。御本に書いてあるとおりだね。ねえ、そうでしょ？ 女医さま。あら、なにウロタエてんの？」

クリスチーナがミルドレーヌをからかい、自分もゴソゴソやって眸をうるませる。

「ねええ、専門家にやって欲しいのよお。指の二、三本ありゃ出来る手術よ。ねえ」

クリスチーナが悶えてせがみ、九房のあばずれが遂に喚いた。

「担当さま。チンタラやってるわよお」

タレこみ禁制の仁義には厚いあばずれではあるが、女役がミシュリーヌと知って頭に來たらしい。しかも、そのミシュリーヌが曲りなりにも愛らしく応じている気配とあらば、かねて思慕寄せる骨太女たちが嫉妬に狂うのも無理からぬことだった。

当直デスクは空だったが、あばずれ女の喚きは監舎内に響いて、詰所からマリーが飛び出して來た。

喚きを耳にしてミシュリーヌは我に返り、まだ狂おしいエドウィージュを押しのかんと必死だったが、からみ合った姿をマリーに見られてしまったのだった。

マリー婦人看守は吞気者だがストイックな面もあって、虫の居所が悪ければ、ことに性問題にはきびしい。

一喝された不埒女二人は流石にシユンとして、打ちしおれて鉄格子に立ちすくんだ。乱れた獄衣はそのままに繕うことすら許されず、ミシュリーヌは生きた心地もなかった。

モレシエンヌ婦人看守も眼をこすりこすりやって來て、ミシュリーヌと知ってオロオロしてくれたが、今夜のマリーとジョーゼットは虫の居所が悪かった。

マリーは、齒に衣着せぬ物の言い方で簡単に取調べ、二人を引き摺り出して囚衣を全部剥いだ。両腕ねじあげて固く固く後手錠、眼から火の出る往復ビンタが暫く鳴り続く。

ミシュリーヌは膝萎えて崩折れ、哀願半ばにして蹴転がされた。常日頃、おっとり型のマリーだが、怒ればきつい。悲鳴をあげてミシュリーヌは恐怖をほとばしらせ、失禁せんばかりのおのき加減だ。そのミシュリーヌをエドウィージュが庇い、すべて自分のせいにしてひれ伏したが、髪掴まれて起たされ、マリーのパンチを、みぞおちに喰って体を折った。

「二人とも、どんな汚らわしい反則をやらか

したのか、よく分ってるのねッ」

二人の女囚は声もなく恐れ入り、一息入れたマリーは制帽を留め直した。

「明日、保安課へ送ってやるわ」

縄張り意識の稀薄なマリーはこともなげに言い、ジョーゼットが眉を寄せる。チンタラは保安課取調べが規則だが、ジョアンヌ女史はおそらく反対するだろう。しかし、お給料はお小遣いのマリーにとっては、看守長の思惑なんかは平チャラだ。

二人のチンタラ女囚は声ふるわせて恐怖を示した。春ともなれば、この類いの反則を待ち構えて、保安課の鬼婆たちは手ぐすね引いていることだろう。

二人の哀願に少しは怒気を収めたか、マリーは見下ろして云った。

「じゃ、保安課は一応保留として、お仕置します。反省するのよッ。いい？」

声は幾分和らいだものの、眸は怒に燃えている。マリーはわがままな面をむき出しにして、テキパキと独りで取り決め、吞気でおっとり型の彼女にしては珍らしく、私的なお仕置きを即刻執り行なった。ジョーゼットとモレシエンヌは仕方もなく手伝う。四五三号などは日頃の成績から見れば可哀想でもあるの

だが、チンタラの現行犯ともなれば仕方な  
 かるう。

ミシュリーヌとエドウィージュは例の「ベ  
 ルト」をかけられて、きつくきつく締めあげ  
 られた。三四六号の元看護婦が

「助かったわア」

と呟いて肌間を撫でた。ベルディーヌあた  
 りが心配しているとおり「ベルト」が出払っ  
 ていたので、ミシュリーヌの腰部に締められ  
 たのは、三四六号の体から取り外されたもの  
 だ。

「いつまで撫でてんの？ 早く穿いて」

モレシェンヌは鉄格子の間から下穿きを与  
 え、三四六号はゴソゴソと裾をおろした。

「ホント、もう一ダースは要るわね。消毒し  
 なくても大丈夫かしら？ これ」

「大丈夫よ。看護婦さんが締めてたものよ」

マリーはミシュリーヌの縦ベルトを後ろ腰  
 で締めあげ、ミシュリーヌはヒールと腰をよじ  
 った。今の今まで女性の肌が装着していたこ  
 の「ベルト」は、金具や鋼鉄環が体温を残し  
 て生ま暖かい。

背中合わせに立たされ、小柄なミシュリー  
 ヌの両腕をエドウィージュが抱き取り、二人  
 は前手錠をかけられた。ミシュリーヌは唇を

わなわなさせ、エドウィージュがその恐怖を  
 慰めようと、肘からませ合う両腕を柔らか  
 く抱き締めてくれた。

真下の金具に革ロープが通された。

「こら。もっとひろげてッ」

マリーはミシュリーヌの前にしゃがみ、二  
 人の金具を強く締め寄せ、覗き込んで結ぶ。

まったく御苦労なことだ。ミシュリーヌは  
 その制服の背を見下ろして全身を染めた。

二人の腰ベルトも、左右それぞれに締め寄  
 せられた。それでもう、二人の女囚の双丘は  
 ピッタリとくっついたまま、どうしようもな  
 い。ミシュリーヌは両脚を合わせ、そして踵  
 を浮かせた。察したエドウィージュが腰を落  
 としてくる。エドウィージュは背が高い上  
 に両脚を合わせていたので、小柄なミシュリ  
 ーヌは鋼鉄環の苦痛に堪えかねたのだ。

「あら、命令を解除するの忘れてたわ。でも  
 忠実なのね、お前は」

両脚をひろげろとの命令を、マリーは出し  
 放しだった。

背中をすりつけ、密着した双丘を想いこめ  
 て微妙に動かし、エドウィージュはなおも愛  
 情を肌で伝えて来る。

二人のチンタラ女囚はそんな姿で、監房前

の通路を往復させられた。代る代るに相手を  
 背負って歩くのだ。通路の両端で上下を交替  
 するたびに、喰い込む革具がギシギシ軋み、  
 触れ合う肌が汗でヌルヌルし、後ろ腰で金具  
 がせめぎ合い、突きあげる痛みに二人は呻い  
 た。

全監房の女囚たちが面白そうに見物し、中  
 には、眉ひそめて顔をそむけるものもある。

ミシュリーヌはエドウィージュの背で仰向  
 けになり、肌間の痛みに両腿を引きあげた。

こうしてやらないと相手が背負い難いし、も  
 う、恥かしいのなんのとは云っておれない。

エドウィージュを背にミシュリーヌはよろ  
 めき、踏張った両膝を通路に落とし、それで  
 も足りずに横ざまに倒れた。めり込む「ベル  
 ト」に悲鳴がほとばしり、必死に支える両手  
 を手錠がこじ、二人は床の上でもがいた。こ  
 んなことがあるから、危険防止のために前手  
 錠だけにしている。

眺める連中が鉄格子の中で笑った。相手の  
 ある楽しみを分け合ったあの二人だから、そ  
 のお代金は払って貰わなきゃ、という笑い声  
 だ。マリーとジョーゼットも笑って眺める。

「早く起きるのよッ」

「だけど、シャムの双生児よ。パッ、という



具合には行かないわ」

見兼ねたモレシェンヌが走り寄り、扶け起してくれた。

「かんにんしてーモレシェンヌさま」

涙を流してミシュリーヌは哀願し、そして全身で恥じた。どんなことをやらかした自分を想うと、とくに、このモレシェンヌに対しては顔が真赤になる。モレシェンヌは黙って、女囚の肩を叩いてやった。

「さあ。やったことを云うのよッ。上になつての方が云うの。大声でねッ」

「あら、安眠妨害よ、マリィ」

「ホホホ、構やしないわよ。第一、眠ってるの居ないじゃない？」

ミシュリーヌはビクリとした。仰向けの彼女の体の下——腰を屈めて重さに喘ぐエドウィージュも、マリィ婦人看守の命令を聞いて肩ふるわせる。こうして往復させられているだけでも情けないのに、その上に恥の上塗りをさせられるのだ。これじゃ、保安課の鬼婆アとおなじことだ。

しかし、若いマリィ婦人看守は風紀保持の意志固く、ためらうミシュリーヌの内股に革ロープをピシリと当て、早く赤恥を掻けとせき立てた。

「ヒーッ——は、はい。——あ、あの——」

わ、わたくしたち二人は……」

ミシュリーヌは夢中で叫び出し、あばずれどもが耳を澄ました。

エドウィージュの体はしなやかに重たい。

ミシュリーヌは額に汗を浮べ、息切らしながら、その裸形を背負った。エドウィージュの体がちよつとでも身動きすれば、荷物より軽いミシュリーヌは、脚ふらつかせて倒れてしまう。

「ちえッ、もうすこし具体的に云いなよ」

あばずれたちが失望する。

「そうとも。元伯爵夫人さまは、まああのくらしいのセリフで仕方ないとしてもさア、エドの好き者女が、あんな脚色じゃねえ」

「どんなこと喚いたっていいんだってば。不埒な行為って一体なにさ。裁判官みたいなことばかり口走りやがって」

「おミシュちゃんのオッパイ、柔らかかったろねえ。ち、ちくしょうッ」

九監房の骨太女たちが毛布を蹴立てた。

「あんちくしょう得意になってやがる。あの可愛らしい唇を吸ったんだ。ああ」

「惚れた女は軽いだろ。うれしそうにおぶってやがる」

やけくそ気味のエドウィージュだが、聞く相手によっては得意げにも聞えるのだ。

「あのおミシュちゃんを巻き添えにしやがって。ああ、あたしもオンブして歩きたい」

何十回目かの交替のとき、ミシュリーヌは遂に力尽き果て、両膝落としてマリィに手を合わせた。モレシェンヌが言葉を添え、マリィはあっさりと赦し、シャムの双生児は離された。

二人は、もとより「ベルト」を解かれる筈もなく、背を丸めての股手錠をカマされた。

監房へ叩き込まれ、鉄格子にお尻を押つけ、ロープで後ろ腰を短かく吊られる。これで二人は、同囚たちに情けない姿を真正面に晒したまま、並んで立って一夜を明かさねばならないのだ。

クリスチーヌが飽かず眺め入ってウインクし、シモーヌがおろおろと涙ぐみ、ミルドレーヌが怒りを呟いた。ルーシーは唇をふるわせる。またぞろ、拘禁性ノイローゼの発作をぶり返すかも知れなかった。

翌朝、エドウィージュは重屏禁二週間を申し渡され、先ずはあっさりと、懲罰房にはうり込まれた。ミシュリーヌを赦して貰えるなら、自分は三週間でもいい、と健気なエドウ

イージュだったが、革手錠かけられての懲罰房鉄扉の前では、さすがにおののいて哀願を絞ったのだった。

イヴェットは胸つぶされておろおろし、そんなイヴェットにマジョーリが活を入れ、ジョアンヌ女史はミシユリーヌの同罪を主張した。

フォンティーンとマジョーリとモレシェン又あたりが共同戦線を張り、同房連中から事情が聴取され、ベルディーヌが珍らしく黙っているの、ジョアンヌ女史も折れた。

「今後は大声あげるんだよ。いいかい？黙ってたんじゃ、喜んで受け入れたことになるよ。誘惑して、一緒に楽しんだものと認めるからね。婦女暴行罪だって……」

ジョアンヌ女史は云いかけてやめ、三監切つての愛くるしくも臆たけた女囚の裸体を見下ろした。

「は、はい。もうしわけございません。今後は決して——おゆるし下さいまし」

声ふるわせて全身で恥じらうミシユリーヌは、朝食のテーブルに並ぶ女囚たちに向き合ひ、「ベルト」一本で捕縄姿、朝食抜きで正座させられていた。

その姿に、ジョアンヌ女史のハートが微か

に痛む。女史は自らの手で捕縄を解いた。なんのかのと云っても、女史ぐらいともなれば眼は確かで、ハートに響く女を瓦礫から区別するにやぶさかではない。女史は、めり込んだ捕縄を肌から取り去ってやりながら、愛情派に従がって我を折ったことを喜んでいた。

そして、ベルディーヌが、ミシユリーヌを九房へ移したら、と言い出したときには、言下に退ぞけたのだった。男性ホルモン過剰の女たちの巢に、こんな可憐な小兎をほうり込んだ日には、どんな事態が発生するか知れたものじゃない。まあ、あんなあばずれどもは仕方ないとしても、折角更生の色濃い四五三号が心身ともに揉みくちやにされて、這い昇るところか転落してしまう。そんなことは刑政実務のベテランとして以てのほかのことだ。

ベルディーヌとて、そのくらいの道理は分っている。彼女は肩すくめて詰所へ戻った。「やっぱし駄目だったよ。九房の連中をなんとか女らしくてやろうと思ったんだけど」と舌を出す。四月半ば過ぎの宵、点呼待ちの詰所のソファで、イヴェットはホッと体をゆるめた。ああ、よかった——。

「あたりまえだわ」

とマジョーリも呟いた。

「ね、ね、さっきから一体なにを論争してるのよ？」

「いえね、ベルディーヌ。死刑場へ連れて行かれる無実の人間がさア、護送者を殺して逃げたとするわね、いい？」

「うむ、うむ。それで？ キャスリーヌ」

「その人間の無実が立証されちゃったら、どういうことに相成るのかっていう議論。つまり、その殺人は正当防衛かどうかって——」

「へえ。そんなことあったのかい？」

「あったとかなかったとかいうんじゃないのよ。架空の問題だってば」

「現実を離れたことには興味ないね、私は。お給料が十倍になったらっていうのとおんなじさ」

「救い難いわね、ベルディーヌは。所詮、おろかな大衆の一人なのね。想像力の欠如」

「なんだって？ マリー。ふん。そんな不心得な囚人はね、ふん捕まえて改めて死刑さ。決まってるじゃないか」

「あら。だって、そうしなきゃ自分が殺されるのよ、無実の罪で。不合理だわ」

「じゃねえ、イヴェット。職務を果たそうとして殺されちゃった護送者の方は、どうなのさ？ 彼に——彼女でもいいけど、ともかく、



その被害者に対する正義はどこで満たされるんだい？ いいかい。裁判で決まっちゃったことは完全に行なわれなきゃいけないんだ。三二三号だってそうさ。甘いわねえ」

「スゴいわ。ヒットラー顔負けのファッショぶりじゃない？ 法の権化」

「ふん、それにしちゃ、お給料が少な過ぎるねえ、キャスリーヌ」

「私は、やっぱり正当防衛だと思わうわ」

「へえ。じゃね、マジョーリ。強盗を捕まえようとして射たれたお前さんの御亭主、彼もやっぱり正当防衛されたというわけ？」

マジョーリは口を噤み、眸を伏せて、まっげをしばいた。ちよっと筋違いの論法だ。

「ま、いいじゃない？ 殺された護送者は同

### 山原清子／＼入墨女賊拷問刑罰集

大中判印画紙焼付 三枚一組 五〇〇円

◎女賊仰向け木馬責

略号(よひ)

◎全裸の入墨女賊折檻

略号(よせ)

◎入墨女賊答打ち糾明

略号(よゆ)

◎女賊ハリツケ拷問

略号(よめ)

◎凄絶海老責め拷問

略号(よす)

◎全裸四つ這い木馬責

略号(よも)

◎逆さ吊りのお仕置

略号(よき)

◎大の字磔女賊処刑図

略号(よさ)

情されてさア、遺族には慰藉料が支払われるわよ、タツプリかどうかは別としてね」

マリー婦人看守があくびして結着をつけ、デスクからのインターフォンが

「点呼時刻よ」と告げた。

——結局、二房の三〇八号とエドウィーユとが入れ替えられることになった。

鉄扉の監視孔から言い渡されて、エドウィーユは革手錠をきしませ、暗い懲罰房の床で身も世もなく嘆いた。覚悟はしていたことだろうが、いとしいミシュリーヌと離れるのだと思うと、やはり悲しいのだ。しかし、チンタラに耽った女囚二人を同房にしておくことは出来ない。

「心根を考えると、涙がこぼれちゃう」

クリスチーヌが紅涙を絞って見せた。

「愛し合う者同士があたら生ま木を裂かれたのよねえ。哀れ、鉄格子に咲いたローマンズの花。これからの日々が気の重いこと。ところで、お前さんは何やらかしたんだっけ？」

クリスチーヌは三〇八号の金髪に鋒先を向け、仁義を要求した。クリスチーヌはミシュリーヌに代って最前席へ移され、大した違いではないのに些か御機嫌斜めで、新入房女囚に当り散らす。ミシュリーヌはエドウィーユ

ユの席、つまり、前から三番目だ。そのベッドにはエドウィーユの体臭が泌みついているようで、ミシュリーヌは思い出して頬を染めるのだった。チンタラの相手の寝台を使わせるなんて、きびしいようでも少し抜けたところがなきにしもあらずだ。

クリスチーヌの後ろで小さくなっているのは三〇八号——例の奇天烈マゾ女囚で、男まざりの同房者が見当らないせいか、少し落胆の御様子だ。二房にいたときは三〇九号がキリリとした浅黒の女囚で、その男役との対抗ピンタに痺れた彼女だった。

「ふん。そうかい。お前さんが例の妙チキリン、監獄向きお跳えってンだね。ま、少しデザインはちがうけど、あたしと同業だったんだから、そのつもりでつき合ってたげる」

「——は、はい。よろしくおねがいます。みなさまも、どうぞよろしく——。ダイアナと申します。はい——」

三〇八号は手を合わさんばかりで「もうおっぱじめたのかい？ 湿っぱいね」とクリスチーヌが鼻を寄せ、あとの四名は返答に窮したのだった。

ルーシーが資格を与えられて欣喜雀躍、仮釈放嘆願書に鉛筆を走らせ、我が身の刑期を

思うミルドレーヌとシモーヌが鼻を吸り、ミシュリーヌも涙をにじませた。クリスチーヌが鼻で笑い、そして、その夜ダイアナがマジョーリにすがりついた。

「担当さま——お、おねがい」

と鉄格子に走り寄り、ひれ伏して声絞る。

「縛って下さいまし——きつく縛って」

「いったい、どうしたっていうの？」

マジョーリは苦笑いした。例の虫が出たのだ。しかし、いやしくも法務事務官ともあるう身が、厳肅な職務要具の捕縄を「お遊び」には使えない。

「は、はい。あの——毛布を破いてしましましたの。罰して下さいまし。捕縄が御面倒なら手錠かけて下さいまし。きつく嵌めて下さって懲らしめて下さいまし——」

ダイアナは両手をそろえて鉄格子からさし出した。マジョーリは鋭く観察し、びしりとキメつけた。

「そう。じゃ「ベルト」締めたげるわ」

ダイアナは身もだえした。不思議なことにこのマゾ女は「ベルト」が苦手だ。きつい捕縄に陶醉していても、ベルトをかけられると正気に戻って、陶醉の興奮のという段ではなくなる。それが判明してからというものはこ

の奇天烈女囚も御し易くなったのだった。

「いやでしょ？　なら、おとなしく寝るの。」

もうおそいわよ。明日は島仕事だし——」

聖マジョーリさまに泣き所を押えられては仕方がない。ダイアナはしおしおと寝台に戻った。

「縛られるのが好きだなんてねえ」

クリスチーヌがいまさらのように呆れて眩き、毛布の上から胸をまさぐった。

「牢番がみんな男だったらどうお？　お前さんにゃ天国だろね」

「そ、そうなのよ。そんな国ないかしら」

「エスキモーの国へでも行きな」

「ねええ。ジャポネあたりは、どうなってるのかしら。あの国は男天国で女がおとなしいっていうから、案外——」

「お前さん、映画見たことないのかい？　それよか、この国でだって、ずっと田舎回りでパクられて御覧なよ。身検に小使いの小母さんが駆り出されるっていうほどのところ——」

「そうねえ。でも、食べものだけは——」

「ちえ、ぜいたくなもんだよ。まったく」

「でもねえ、パクられたときには、ホント痺れちゃった。ガッチリと背の高い刑事さん到手錠かけられたのよ。暴れてやったら後手

錠に直されちゃって——。そうだわ、いいことあるわよ。出たら交通違反やろうと。わざと逃げて手向いするの。白バイの警官が手錠かけてくれるわね。うまくやりや、毎週やれるじゃない？」

「ふん。おマンマの方はどうして食って行くつもりさ。もう黙ってよ。鎮まったら？」

クリスチーヌがうるさげに叱り、ミシュリーヌはスヤスヤと安らげく、そして、ルーシーが唇を噛んだ。ルーシーは轢き逃げ罪でここへ来ているのだ。エドウィージュは二週間の重屏禁にめっきり弱り、眼をショボショボさせつつも、折りあるごとにミシュリーヌに熱っぽい眸を光らせた。ルーシーが審査委員会に曳き出され、天にも昇る足取りで戻ってきた。仮釈放を許されたのだ。ルーシーは嬉し泣きしながらもときどき唇を噛んだ。取り澄まして見下ろす委員たち——ことに、あのレニエ夫人——そのときの屈辱感を思い起すのだ。ルーシーが、委員長の名を知って口にしていけば、ミシュリーヌは仮釈放嘆願を諦める気になったかも知れない。チンタラ事件以来というものは、ミシュリーヌは、イヴェットの眸を恥じて縮こまり、そんなミシュリーヌをマジョーリが励まし、五月も過ぎた。



「あきこ登場」から

## 浪花の夢の物語

井 風 呂 秋 於

△

秘かに私が、私を無くしてしまった時の飲  
び、これは他の、常の楽しみなんかを、はる  
かに超えたものだった。

『女装』

——この奇妙な「夢幻境」に没入して、哀  
しいまでに嬉しく浮游できる自分は、なんと  
まア幸福な人間だろうと単純に思っている。

そうして私の場合、女性用のものをひとつ  
ひとつ我が身に着けてゆく、その直接的な感  
覚の楽しみよりも、むしろ着けていく段階に  
はどうってこともなく全部着け終ったあと、

完全に「私」を無くしてしまったその姿を、  
鏡などで凝っと見つめた時の、楽しみのほう  
が、より素晴らしく、より深く陶醉し得るの  
だった。

この部屋から、いやこの世から「私」は忽  
然と姿を消し、同時に誰も知らない「私」と  
てよく知らない「女性」が現われて、鏡に向  
ってにつこり微笑む。この瞬間に彼女の彩ら  
れた感覚は、一層きらめきを放って茫洋とし  
た虹を視界いっぱいに架けるのだ。

（女装とは、実に楽しいもの——）

居なくなってしまったはずの、「私」の眼  
が、ふと鏡の中の女性を見つめたとき、その

眼は、自己陶醉の色なんかではなく、彼女へ  
のあこがれとでもいうか、深淵にひきずりこ  
まれていくような、憑かれた色を漲らせるの  
だった。私の女装は、この一瞬にすべてをか  
けているともいえる。

もちろん最初の頃は、この「女性」は、こ  
れ以上綺麗にならないものか、もう少し美し  
くならないものかと、楽しみよりも焦慮心の  
ほうがまさっていたものだった。しかし最近  
ではもう諦めた。この「女性」に、これ以上  
の美を求め強いることは、楽しみや欲びから  
一歩一歩遠のいて行くことになるかも知れな  
い、と気づいたからだった。



せめて、これ以上求め得られるものは、無限とも言える「女らしさ」しかない。いくら努力しても、造った美には限界がある。俗に十人十色というではないか。十人の人すべてを感服させる美なんて不可能だ。それよりもこの「女らしさ」という極のないものへ努力するほうが、それこそ女らしくていいではないか。無理なく努力すれば、それにともなう喜びもあるうし、希望も湧いてくるともいうものだ。

このようなわけで、現在の私は「彼女」を

せつせと飼育して女らしく——具体的に言えば、立居振舞から視線、指先の動かしかなた等に至るまで、斯うでもない、ああでもない熱心に楽しく指導している次第だ。果してこの教育が実を結ぶか否か、そんな苦勞なんて、必要ではないじゃない

か。女性になる、ではなくて女装なのだから——。「女らしさ」が見る人の視覚に及第すれば、私としては勿怪の幸いなだから。

さて。

私が居なくなつて、誰も知らない「女性」が現れる。

この女は——あちらを向けと言えばハイと向き、此処へ坐れと言えばハイと坐る。全然さからわない。

あまりにも従順すぎて腹が立ち、そこでつい苛めたとくになると、いいから遠慮なく苛めた

らよろしい。都合の好いことに普通の女性よりちょっと丈夫にできている。まあ減多なことで音声をあげない。そのくせ、責めなどに反応する表情は実に豊かなのだ。

「許して……ゆるして——」

なよなよと身を悶えさせながら、口唇をわななかせながらムードたっぷりなんだから。だけど彼女だって、そのほうが内心嬉しくって仕方ないのだから、構うことはない、どんどん責めてもよろしい。すっかり乱れてしまふのなんか、いつものことだから……。

ただしこの「女性」。

さっきも書いた通り、それが縛られ弄ばれ責められている時でも、自分で自分のその姿を見ることに哀しいまでの欲びを感じるらしいから、その場合、鏡なりカメラなりで、即座にしる後日にしろ、見せてやるという、いくぶん厄介なことではあるうが、この程度のご同情だけは、与えてやってほしい。

△

ある夜。

涙の露を散りばめたような星空をみつめながら、あきこが言った。

「——あたし、結婚したい」



「いやいや笑ってやってくださるな。」

夢みるような瞳によくよく聞けば、結婚生活に延長しない結婚、つまり「式」だけを挙げてみたいのだった。

「急に、なぜ？」と『私』が尋ねると、

「ウエディング・ドレスを着てみたいのよ」  
だって。

「お前には、うつらないよ」

「でも、女なら誰だって、一度は着てみたくなるものよ」

「着ない人だってあるさ」

「——でも、あたしはイヤ。花嫁姿も経験しないで、このままお婆ちゃんになってしまふなんて。それに、あたしっていつも縛られいじめられ、それはそれはひどい恰好ばかりさせられているじゃない？ たまには最高に美しいお洋服ぐらい着て、お澄ましの一回ぐらいしてみたいわよ」

「ウエディング・ドレスが最高かい？」

「イエース！」

またまた笑ってやってくださるな。

この時のあきこったら、すでにそのドレスに身をつつんでいるかのように瞳を濡れうるませ、今にも星空へ向って、とんで行ってしまいそうであったのだから。

「私」は、いつしか、この彼女の夢をかなえてやりたくなった。

「でもやっぱり駄目かしら」

頬をかるく押さえて、ポツリとさみしげに言ったから『私』は狼狽して言った。

「駄目なことあるもんか。よしわかった。その結婚式とやらを挙げさせてやるよ」

「——？」

彼女は疑わしげな眼つきをした。

「ほんとだよ。——ところで、いったい誰と式をするつもり？」

すると彼女は、ポツと頬を染めた。そうして、

「……そうね」

と紅い唇に指をあてて考えこんでしまったが、ふざけちゃいけない。相手を誰にしようかと考えこまなくてはならない結婚式なんてあるもんか！

「ふん、あきこ、急に困ったようだな」

図星を差されて、キョトキョトしながら、

「あら、困るなんて、そんなことないじゃないの。言っておきますけど、こんなに可愛いあたしよ。相手はいくらだってあるの、あたりまえじゃないの。あんまり多すぎちゃってその中から選ぶのに苦労しているのよ」

「ケッ！」

「ねえ、あなたなら誰がいいと思う？」

「バカ。おれはね、その多すぎちゃってるお相手の人を全然知らないんだ。誰がいいなんて決められるはずはないよ」

「ふーん」

「まあ困るほどだったら、その着たいとかいう服だけ着て、それで我慢しておくんだな」  
「いやいや。ウエディング・ドレス着て結婚式も挙げたいのよ——」

「バカ、それじゃ早く決めろよ、相手を」

「——」

「そんな人、居ないのだから、バカ」

「あなた！」

「なんだ」

「気がついてみると、さっきから調子よく馬鹿々々と、まるであたしの名付親みたいになっているけど、あたしはバカじゃないわ。あ、き、こ、あきこって、歴とした名前があるのよ。知っておいてちょうだい」

「オウ、じゃ、そのあきこさんに尋ねますけどね、あんたの、その多すぎて困っているお相手のなかで、ウエディング・ドレスを着たいばかりに挙げる結婚式の相棒を、気持よく勤めてあげますって、そんな奇持な方がい



呆くさいったらありやしない」

「あ、——そうだこんな人がいいわ。背が高くて美男子で、もちろん若々しくてそれにウンと優しい人」

「誰だって、それならいいと思うだろうさね、フン」  
「そう！ズバリ言っ

「バカ——じゃない、あきこさん、あんたそれでも女でしょ？」

「そうよ」  
「その結婚式の相手が、男装の女性？」

「そうよ」  
「ケツ、ケツ、ケツ」

すると、あきこは凄じい流目でにらみつけ、言やがった。

「あなた、笑ってんのネ。それならそれで、いいわよ」

まあなんとでも好きな様にしろよ、と言

かけたが、なんとなくこれ以上あきこの怒った顔は見たくもなかったからそれは止めた。しかし『私』も考えてみると、

（今まで随分と彼女を苛めたりしてきたのだから、この際一度ぐらひは、その望みをかなえてやるべく、努力してもよからう）

問題はその相手のことだ。あきこは大口叩いて、あまり多すぎて困っているのよなんて言いやがったが、そんな人居るわけがなく、どうせ見栄に決まっている。しかし——多分そのような奇特な人は居ないとは思うけれどもかく色々と探してみてもやることにしたのだった。

「では、お膳立てはしてやるよ。それでいいだろう」

「ほんと？——ああ嬉しいっ」

打って交ってあきこは喜んだ。あきこが喜ぶのを見るのは『私』も嬉しいが、なんとなく、いささか、いまいましくなってきた。

「そのかわりと言っではなんだが、もしも、その式を挙げることに成功したとしたら、その後で、少しおれの言うことも聞いて貰えないかな」

「なあに」

「その、なんだ、ウェディング・ドレスを脱

らっしゃるんですか！ 最終的に答えてください」

「相棒だなんて、駕籠かきみたいに言わないで。あなたったら本当に女の気持って、わからない人ね」

「どうでもいいけど、居るのかいないのか」

「——わかんない」

「……！」

「あら怒ったの。ヤーだ。これでもあたし、真剣なのよ」

「ヤーだったのは、こちらが言う台詞だ。阿



がないうちに、——一度、縛らせろや」

「え、何と言ったの」

「花嫁姿を縛らせろって……」

「まア、ひどい」

「式のあとでいいんだからさ、そんなに眼をむくなよ。おれは前から、一度でもいいから美しく盛装した花嫁を、思う存分ひくくって曳き廻したかったんだよ。な、わかってくれよ」

「——」

あきこは返事をしなかった。

しかし、その時彼女の瞳の中に、ふっと、何かを想像するような、やわらかい光を見てとり、内心よし、これで決まったと思った。

斯うことなくては図々しくも男装の女性なんて、あちらこちらで誘えるもんか。それが、何かの下心さえあれば、彼女にたとえ尻を叩かれこき使われたとしても大いに励めるといふものだ。

すると『私』は、調子づくということは勝手なもので、もし今後、その『男装の麗人』とやらが現れてくれたなら、その人と一緒にあって、あきこのやつを縛りあげたり苛めたり、大いに楽しみその展開ぶりをまたまた本誌に、フォト付きで発表してくれるよう頼ん

でみよう——と、

(へへへ、その時は今までのような、お澄ましの恰好ばかりとはいかないんだから)

計画兼想像を、たくましくうしていたのである。

さてそうすると、『私』は、この計画というピンク色の雲に乗って、明日からでもその『まぼろしの男装の麗人』を求めて街を彷徨<sup>さまよ</sup>わなければならない、とくる。まアいいや、あきこにお膳立はしてやるよと言ってしまった手前、スベテ態度デシメソウヨ——だ。

ついでにと言っては物凄く失礼にあたるとは存するが、この文を読まれた方で、もしもその『まぼろしの人』に該当される方をご存知なら、『私』へ一片のご同情を以ってお呼びかけくださるよう、お願い申し上げます。

依って本日、奇ク誌が掲載くださった数葉の写真は、カワイイ女性あきこの、お見合写真とする所以であります。

よろしく、お毒見願ひあげます。

△

今夜は妙に生暖い。

と思つたら、外は、しとしととこぬか雨。

こんな夜は、あきこのやつ、やって来ない

ことになっている。

何処にいるのか知らないが、彼女にちよつと思いを馳せてみると——

さぞや今ごろは、股をおっぴろげて駄菓子か何かを口へ放りこみながら、

(ああ早く花嫁衣裳を着て、紙の花吹雪を浴びてみたいわア——)

とかなんとか、純白のウェディング・ドレスへの夢に、うつつを抜かしていることであらう。

少し、お茶目で、ふざけ屋さんで……

いつまでも、可愛いあきこ……

しかし、何だか今夜の私は疲れている。

彼女には水臭いかも知れないが、私は、お先に睡らせていただく。

——ごめん！

——外は、しとしとと、雨が降る。

——外は、しとしと……

——外は、……

(完)

# 久<sup>ひさ</sup>男<sup>お</sup>の結婚<sup>けっこん</sup>

(後篇)

△禪と女相撲にまつわる、その思い出▽

海 野 三 津 男

- (6) 再 会  
(7) 許された「夢」  
(8) 結 婚

## (6) 再 会

ちょうど五日目の夕方であった。

彼はいつものように散歩に出かけた。足は昨日発見した小さな山道の方へ向いていた。その山道を五分ほど登ると、なだらかな、広々とした丘があった。

山道を登り切って、その広々とした草原に出た彼は、はるか向うに、一人で立っている

女性を見つけていた。

彼は最初、その女に別に気をとめないでいた。

美しい夕日が、ずっと遠くの山脈に沈もうとしていた。彼は草原に腰をおろし、それを感じて見ていた。

陽は、その山脈に沈み、あたりがトップリと暮れてきた。

フト立ち上って、はるか向うの、草原の端のあたりに目をやると、さっきの女が、まだそのまま立っているのに気づいた。

久男は、少し、心配になっていた。

「もしや、自殺でも……」と思った彼は、そ

の女に近づいて行った。

声をかけられて振り向いた女の顔を、彼は穴のあくほど見つめていた。

その女も、ギクッとしたように身を引き、じっと彼の顔を見た。

「和子さんでは……ないですか？」

それだけの声が、やっと出た。

彼は、まさかノと思っていた。確かに和子だと思いながら、まだ、彼は自分の目を疑っていた。

しかしその女は、確かに和子であった。

「久男さん……山本さんの息子さんの……でしたね」



和子も、言葉を途切らせていた。

彼には、声を出すこともできなかった。

思い切り抱きしめてしまいたい衝動を押え

て、彼は立っているのがやっとだった。

彼女も、一言も発しなかった。

日が、すっかり暮れていた。二人は、だが

まだそのまま立ち続けていた。

「もう……日が暮れた……。そろそろ帰えらんと……」

久男は、ようやく我に返っていた。

和子には夫がいるという。その夫はいっし

よにこの温泉に来ているのだろう。彼は、そ

うとばかり思って、先に立って山道を下りて

行った。

和子は、黙って、その彼のあとについて下

りてきた。

ホテルの前まで来た時、

「そうだ、和子さんは、どこに泊っているん

ですか？ ご主人もいっしょでしょう」

と、久男は和子を振り返っていった。

その声は、落ちついていたらつもりでも、ま

だ上ずっていた。

和子は、返事を

しなかった。

そして、逆に彼

の先に立って、彼

のホテルの玄関を

入っていった。

エレベーターの

入口で、和子は、

小さな声で、

「このホテルの四

階の四〇八号室に

いるんです。一昨

日から……。あな

たは？」

といった。

「私は三階の、三一五号です。ちょっと胃を

こわしたもので……一人で来ているんです」

と、久男は答えた。

「じゃあ、奥さんは？」

「……はあ、まだいません」

久男の答えに、和子は一瞬、驚きの表情を

あらわに見せた。だが、すぐ落ちついた態度

に戻り、

「あとで、お訪ねしていいでしょうか？」

といった。

彼は、大きくうなずいた。

和子は、黙って彼に背を向けると、一人で

食堂の方へ行ってしまった。

彼は、今起きたできごとが、真実とは思え

なかった。そして、たった今会った女が和子

であることも信じられなかった。

部屋に帰った彼は、頭から水をかぶった。

我に返った彼は、それがすべて真実であ

ることを確かめていた。

今度は、彼女に夫がいることを思いだし、

たまらない気持になった。

夕食は、全くノドを通らなかった。

八時を少し廻った時、和子は訪ねてきた。



さっきと同じ、キチンとした和服姿であった。

彼は、あわててユカタの襟を合せた。

和子は、キチンと畳に坐ると、

「ご無沙汰しておりました。お元気で、本当に何よりで……」

と、そこで声をつまらせた。

久男は、何と行ってよいか、わからなかった。

彼女は、ハンケチを出してソツと涙を拭くと、

「私、本当にお逢いできて嬉しゅうございました。実は、私……」

そういつて、ぐっと久男の目を見つめた。美しい目であった。

久男は、その目を、じっと見返えした。その目には、喜びの色があった。

彼が、「なぜ、嬉しいというのか？」問い返えそうとしたとき、

「私……」

と和子が口を開いた。その目は伏せられていた。小さな声が、

「一度結婚したんですが……別れました」といった。

彼は思わず、

「和子さん！」

と叫ぶと、その手を、しっかりとつかんでいた。

二人の目から、一度に涙があふれた。嬉しかった。ただ、嬉しかった。

夢か現実か、そんなことを考える余裕はなかった。

二人は、しっかりと抱き合っていた。長い、長い口づけであった。

久男は、唇を離しては、  
「そうだったのか！」

といい続けた。

和子は、  
「久男さんも……苦しかったでしょう」といった。そして、その美しい唇を重ねてきた。

久男は、「良かった！ 良かった！」と、胸のうちでくりかえしていた。和子は、あの時から自分を愛していたのだと、それが嬉しかった。それがわかっただけに、結婚した時の彼女の苦しみが、いじらしかった。

彼は、いっそう強く、和子を抱きしめた。

和子の腰を抱き、畳の上にその身体を押し倒した時、久男は我に返った。

彼は坐り直し、和子の腕をつかんで、その

身体を引き起してやった。

『すべては、ちゃんと結婚してからだ』と思ったからだ。

和子も、自分を取り戻していた。

長いが、しかし幸せな沈黙が続いた。

和子は、すべて昔とかわらなかった。

この十年の間、久男は、その美しく澄んだ瞳、きゅっと結んだ唇、細面のようにいてふつくらとしたその頬を……いや、部分ではなく、彼女の全体を幾度思い起したか、しれなかった。

久男にとって、和子はずっとかわっていて構わなかった。それが、全て昔とかわらぬままに、今ここにいることが、彼にとって夢のような幸せであった。

むしろ、肉付きが良くなり、女として完成しているだけに、十年前よりもずっと魅力的であった。

十年もの間の苦しい気持は、もうあとかたもなかった。

じっと見つめ合っているうちに、久男は、もうひとつ、和子のかしらぬものを発見していた。

それは、その肌が、昔と同じように健康な



小麦色をしていることだった。

久男の思い起していた和子は、常に小麦色の肌の娘であった。その健康さが、久男をとりこにしたひとつの大きな理由であっただけに、その発見は、大きな喜びであった。

たいていの場合、女は、高校時代までのその肌の色を失なっていくのに、なぜ和子が、一層健康な肌を持っているのか？ 彼は尋ねてみたくなっていた。そういえば、彼女が今何をしているのかも聞いていなかった。

彼女は、笑って答えた。

「父の経営している牧場を管理しているんです。だから、こんなに黒いんです。おかしいでしょう」

久男は、なるほどとうなずき、

「いや、僕は、それがいいんだ。色の白い和子さんなんて、考えられない。いや、自くてもいいんだが……僕は、健康な肌の女性が、何となくいいんです」

といった。

和子は、

「じゃあ、これから、そんな女の方があらわれたら注意しなくちゃね」

という、声を立てて笑った。

二人は、それをきっかけに、おたがいのそれまでのことを打ち明け合うのだった。

和子が二十五の年まで結婚しなかったのはやはり、彼女が久男のことを忘れられなかったためであった。

父や母に、なぜ結婚しようとしなかったのかと幾度もきびしく問いつめられたが、彼女は遂にそのことがいえなかったという。

「もし、久男さんの気持がわかっていたら、良かったのだけど……」

と和子はいった。

久男は、胸が痛かった。

「久男さんが農業試験場に入られたことも知っていましたが、元気でやっておられることもお父さんから聞いていたんですけど、お父さんやお母さんが結婚をすすめてもみな断わったということは聞きませんでした。ただ、私の父が結婚話を強引にすすめていると知ったとき、思い切って、あなたのお母さんに会いに行ったの……そうしたら……」

和子はそこで、言葉を切った。

「そうしたら、どうしたの？」

久男はうなげた。

「そうしたら、お母さんは……やっと久男の結婚も決まりましたって……」

久男は、母が憎かった。なぜ、そんなうそをつく必要があったのか、と齒きしりしたいほど憎かった。父も憎かった。

「ちくしょう！」

彼は、思わずそれを言葉にした。

しかし、和子は、

「お父さんやお母さんには罪がないわ。そんな風にいるのはまちがっていますわ。そんなこと、どうでもいいじゃない。前のことなんか……。ごめんなさいね。お母さんのことなんか話してしまっただけ」

といい、久男を見つめた。その目はやさしかった。

久男は、恥かしくなった。

「そうだな、今、こうして会えたんだし……自分が打明ける勇気を持っていないでいて、父や母を憎んだりしたらいかんね」

和子は、そのとうりだというように、うなずいた。

「あなたの御両親は、こういったら何だけどうちの父や母と同じで、すぐ古いのね。だから、二十六にもなって、結婚もしていないと、何かそれが、恥かしいことみたいに思っで、あんな風にいわれたんだと思うの。私もほんの話のついでに久男さんの消息を尋ねた

ただだし、ご両親は何も知らなかったんだから。……もう、その話よしでしょう」

和子はそういうと、話を結婚後のことに移した。

彼女の夫は、金も地位もあったが、全く心の貧しい人間だったといい、女は、男のあの要求を満たしてくれさえすればいいのだと考えるその夫との生活は、毎日毎日が、たまらなくさびしく、暗いものだったと、和子はいった。

別れたのは結婚八カ月目で、その夫ははじめ、いろいろと未練がましいことをいい、強いこともいつかあったが、三人も女がいることをつきとめていた彼女に、そのことをいわれたからは、引きとめもなくなったという。

和子の両親は、非常に心配もし、苦しんだが、相手の親が、その離婚話を、全く自分たちの立場だけで考えていることに腹を立て、離婚を許してくれたのだという。

久男は、そんな人間たちの話を聞いて、非常な腹立ちを覚えた。

その腹立ちは、自分がためらっていたが故に、そういう男のところへ、例え一時でも和子を追いやってしまったのだという後悔の念にかわっていた。

しかし、それはもう、すべて過去のことであつた。久男の両親が、和子の離婚のことを知らなかったのは、自分の父母が、恥と思つていかなかったのだろうと和子はいった。

明るい顔をして淡々と話す和子を見ているうち、腹立ちも後悔の念も、久男の胸からは消えていった。

今度は、久男が話す番だった。彼も、淡々と和子に話すことができた。

気がつくと、十二時を廻っていた。

和子は、翌々日の朝発つ予定だから、また明日ゆっくりお会いできるわといい、自分の部屋へ帰って行った。

和子が部屋から出ていく時、久男は、その手をきつく握った。

和子は、その久男の手を、固く握りかえした。

### (7) 許された「夢」

胸いっぱいひろがる嬉しさで、彼はなかなか寝つかれなかった。

しかし、いつのまにか、彼は、深い、幸せな眠りに入っていた。

そのことに気づいたのは、翌朝、もうだいぶ日がのぼってから目を覚ましたときであつた。

彼は、『夢も見ずに、これほど気持ちよく眠れたのは何年ぶりだろう』と思い、身を起こしたとき、彼はハツとした。

『夢』……そうだ、あの夢のことを、昨夜はすっかり忘れ去っていた。一番大切なことをなぜ忘れ去っていたのか。少くとも和子と結婚するつもりならば、あの夢のことを話さずには、自分自身が許せないはずだ……と彼はにわかに苦しんだ。

『しかし、お前は、あんな恥かしいことを話せるのか』と、彼は自分の胸に問い返えしてみた。

また、『そんなことを話して……彼女は、そんな自分を……結婚の相手にしてくれるだろうか?』という心配も頭をもたげた。

あの時の、十年前の、あの時の自分が、そのままよみがえったようであつた。取り返えしのつかないことをしたという、たまらない苦しみがよみがえってきた。

なぜ、前の晩、そのことを忘れ去っていたかも不思議であつた。

久男は、長いことフトンの上に身を起した



まま考えつづけた。

フト気づくと、ドアをあける音がして、和子の声がした。

彼は、自分のそうした苦しい気持の整理がつかないままのところへ和子がやって来たことに当惑した。顔も上げられなかった。

しかし、何も知らない和子は、そんなことにはお構いなく、フスマの外から明るい声で話しかけてきた。

「いらっしゃるの……カギがかかっていなかったから入って来たんだけど……」

久男は、カギもかけ忘れていたことを思い出し、顔を赤らめたが、

「まだ寝ていたんです。今すぐ、起きますから少し待って下さい」といった。

自分でも驚くほど、その声は明るかった。彼は、自分のその声で、落ちつきをとり戻していた。

急いで起き上ると、ユカタの襟を合せ、丹前を着た。口をそそぎ、窓をあけると、晴れ上った秋空がまぶしかった。

和子と向き合っていると、先刻の悩みは、何か馬鹿らしいものかと思えてきた。

丹前姿の和子には、また昨夜とはちがう魅力があった。

朝食を運んできた女中に、和子は、「私がいそいそとした姿で準備した。」

「私より二時間も、お寝坊したわけね」といいながら、和子はご飯をよそった。

久男は、そうしていると、もうずっと前からの夫婦であるような錯覚を覚えるのであった。

和子を前にした時、あの夢を忘れることができるのなら、それでいいではないかと、彼は自分の心にいい聞かせた。

その日は、山に登った。

スラックスにセーターという和子の姿には野性美が感じられた。

久男には、胃の痛みなどはもうなかった。手を引き合い、歌をうたい、大声で呼び合ひ、誰もいない美しいススキの原で、長いこと唇を吸い合った。

夕食は、いっしょに摂った。

夕食を食べながら、二人は結婚への具体的な打合せをした。

和子は、牧場には帰えらずに下市の父母の

もとへ直行して、そのことを話し、久男も、和子と同じ列車で下市に行き、父母に話すことにした。久男の休みはまだ八日あった。二人はまた、結婚式は、一カ月後の十一月下旬と決めた。

二人が今、それぞれに置かれた状態から、両親は必らず許してくれるだろうという確信があった。

久男の、十年前のあの夢が、思いもかけぬ解決を見たのは、その夜であった。

夕食後、八時過ぎまで二人は語り合った。それから二人は、隣り合せの男湯と女湯に別に入った。どちらも、ほかには誰も入っていないかった。

久男は、湯ぶねの中で、幸福感に身をひたしていた。

それは、隣りの女湯から、和子の、湯ぶねに浸かる音がきこえてきた時であった。和子の身体を抱きしめたいという衝動が、にわかに起って来たのだった。

彼は、けんめいに、それを押えようとしたが、自分の肉体がいうことをきかなかった。急いで湯ぶねから上ると、頭から水をかぶってみたが、だめだった。

彼は、そのままだと、部屋に帰えってからどんなことになるかわからないと思った。どんなことをしても、結婚まではきれいでいたというのが彼の信条であった。

久男は、深呼吸をしながら身体を拭いた。その衝動は、僅かにおさまったようであった。

さらしの腹巻を手にとった時、彼はフト「これだ！」と思った。

彼は、それがおさまりにかけていた身体に、急いでそれを締めた。

全く久しぶりに締めた褌であった。

あのことがあった、相撲もやめた時から、久男は褌を締めてみることにさえピタリとやめていた。相撲とか、褌とかいう言葉さえ、彼に苦痛を与えた。

しかし彼は、なぜか、さらしの六尺を腹巻にしていた。幼ない頃味わったあの感触が、どこかで忘れられないものになっていたからかもしれない。

鏡に映った、六尺褌の自分の姿をじっと見つめながら、彼は、自分の過去の、褌につながる思い出を思い起していた。

だが、その思い出があの時のことになった時、彼は大きくかぶりを振ると、急いでユカ

タを着けた。

その朝の、そして十年前の苦しみが再びよみがえってきたからであった。彼はしかし、褌を解こうとはしなかった。

和子の風呂は長かった。

その時、久男の身体は、あけ放った窓から冷んやりと入ってくる秋の山の空気で、落ちつきを取り戻していた。

それはしかし、「今でした。早かったんですね」といいながら入ってきた、湯上りの和子の姿を見ることで、一度にもとへ戻っていた。

窓を閉め、ドアにカギをかけると、彼は物もいわずに和子を抱きしめていた。

和子は、久男の両肩を押し返えしながら、

「いや、結婚までは……だめよ！」  
といった。

しかし、彼を押し返えす和子の力は、その言葉の割に弱かった。

久男は、和子をフトンの上に押し倒した。

押し倒しながら、彼は、「ただ抱きたいんだ……それだけだ……結婚まで、それ以上のことは……僕もしいない」といった。その声は上ずっていた。

和子は、積極的に唇を重ねてきた。湯上りのその肌の匂いが、久男の身体を更にたかぶらせた。

久男の手は、無意識に和子のユカタの帯をほどいていた。

和子の熱い肌が腕に触れた時、久男は半ば我に返えっていた。

彼の心の中で、「結婚まではだめだ！」という気持と、「許されていいんだ」という気持が葛藤した。

人間は、その心の中で矛盾が葛藤する時、必死でその解決の道を見出そうとする。そして、その解決が、いわば考えることでなく、無意識のうちに見出されることが案外多いものだ。

久男の手は、フトンの傍に着替えといっしょにたたんであった新らしいさらしに伸ばされていった。

あとで考えれば、女相撲にショックを受けたその時から、彼に、女と褌を結びつける気持が生みだされ、それがあの夢となり、そして、その時の行為になったということがわかったのだが、その時の彼にとっては、風呂場で自分自身にそれを締めた時と同じように、その行為をやりにくくするために、無意







がこもっていただけに、その言葉にはおかしさがあった。

和子の母が、プツと吹き出したのをきっかけに、一座は、明るい笑い声に包まれ、それはいつまでも続いた。

十一月二十六日の式の日、あいにくと雨であったが、両親たちの心も、晴れ渡っていた。式は下市で行なわれた。

自分たちよりも幸福そうな顔をしているその両親たちに見送られて、二人は新婚旅行に旅立った。

目的地は、二人が十年ぶりで出会ったその温泉であった。二人は、どこにも動かず、その温泉だけに三泊することになっていた。

宿に着いて部屋に落ちついた時、二人の胸には新たな感動が湧き起っていた。

二人は、長いこと抱き合った。

晩秋の、早い日没が、海拔一〇〇〇米近いそのあたりをも、たちまち暗くした。

夕食をとる二人の胸には、つい、ひと月前のことが、遠い昔のことのように思えるのだった。二人は、それは、思いもかけぬ、しか

もはげしい再会であったためだろうと話し合った。

和子が、「今日までは、別々に入りましょう」といい、久男に、一足先に風呂に入るようすすめた。

そこは、バス付きの日本間であった。湯ぶねに、温泉が静かに流れこんでいた。和子は、久男が上ると直ぐ続いて風呂に入った。

既に寝床は敷かれていた。

風呂から上った和子を、待ち切れぬように久男は抱いた。

久男は和子の背を、和子は久男の首を、おたがいにしっかりと抱き、唇を重ねた。

久男が、和子のユカタの襟に手をかけたとき、和子はその手をソツと握って襟から外しそれを自分の腰のあたりへ持っていた。

そこには、何か固いものがあった。

彼は、感動した。

ユカタの裾をはねのけた久男の手には、襷が、ぎゅっと握りしめられていた。

和子が、自ら、襷を締めていたのだった。夢中で和子を裸にした時、和子は、

「あなたも……締めて！」

許し、日取りもバタバタと決まった。

和子の両親の家で、式の打合せもすべて終わった時、和子の父が、フトつぶやいた。

「灯台、もと暗しか」

その言葉には、実感がこもっていた。実感



といった。

「そうだったのか！」

久男はそういうと、パッとフトンをはねて起ち上った。一瞬、和子の肌があらわに彼の目に入った。

和子は、さっとフトンをかぶり直した。

久男はユカタを脱ぎ捨て、しっかりとさらしを締めこんだ。

彼がフトンに手をかけた時、和子はパッと立ち上った。

彼は、正面を向いて立った和子に気を吞まれ、圧倒されていた。

和子の裸身はみごとであった。

ほの暗い電灯に、その肌にきりりと締められた禪が浮き立って見えた。

久男はつばを呑んだ。

向き合ったまま、沈黙が流れた。

和子が、きゅっと結んだ唇を開いた。

「あなたの夢に見た私……こんなだったの？」

久男は、思わず和子にぶつかっていた。そして、その禪をぐいとかみ、思い切り引いていた。

和子も、久男のそれをつかんだ。

汗が、じつとりと肌を濡らした。それは、暖房のせいだけではなかった。

……

それから先は、二人とも無我夢中だった。

気がついた時、その始末をしたらしい。さらしの布が、じつくり濡れていた。

久男は、素裸の和子をやさしく抱いた。二人は、深い眠りにおちいった。

次の日、二人はひと月前、夕日を背に再会したその草原に出かけた。南国とはいえ、高原の風は冷たかった。風の当らぬくぼみを見つけ、二人は長いこと話し合った。

その夜の二人の間には、もう説明もためらう必要もなかった。

風呂から上った二人は、たがいに禪を締め合った。

だが、和子の、たくましいとさえいえる小麦色の裸身を正面にした時、久男は、思わず組みつき、ライトを押し倒していた。

明るい電灯の下で、はげしく荒々しい抱擁が続いた。

それが終わった時、和子は久男の耳もとで、

「私、はじめて結婚したみたい」といった。

久男は、その言葉が嬉しかった。そして、心にもない結婚生活を、例えわずかの間でも

送らねばならなかった和子が、いじらしかった。

三日目には、二人は、いっしょに風呂に入っても冗談をいい合えるような関係になっていた。

「顔に比べたら私の身体、肥えているでしょう」

小さい湯ぶねの中に身体をくっつけ合っている時、和子はそういった。

「そうだな、腕も太いし、足も太根。腰のあたりはまるでタイだ」

そういつてからかう久男のものを、和子は「こいつ！」といいながらぎゅっとつねった。

和子はまた

「私の体重、このごろまたふえて、五五キロにもなってしまったのよ。でも、あなたと結婚できたんだから、もう心配しない。久男はいい、どれくらいあるの？」

と聞いた。

二人の、おたがいの呼び方は、いつのまにか、久男／和子／になっていた。

「僕か？ 十年前より減ってしまった。今五九キロあるかなしかだ」

「まあ、するともう少ししたら、私の方が重くなるかもね」

「和子と合えたおかげで胃も良くなったしそのうち俺も肥えるだろう。一七〇センチで六〇キロ以下じゃ困るしな」

「久男より重くて強いなんていうことになるよ、私、困るわよ。けんかした時組み伏せるのは気持ちいいだろうけど」

「こいつ」と、今度は久男が和子の腕をねじあげた。

二人は、大声で笑い合った。

風呂から上る時、久男は、

「とにかく、たくましい奥さんを持って幸せだよ」

といい、和子の尻をつついた。

すると和子は、

「久男の話じゃないけど、女相撲でも取らせたら小結ぐらいはいくかもね」

といいながら、四股を踏む真似をした。

久男は、和子の口から、そうして『相撲』

という言葉が飛び出しても、四股の真似をされても、もう動揺したりはしない自分を見出していた。

「よし、そんなら今夜は、本当の相撲取ろうじゃないか」

そんな冗談さえ出るのだった。和子も、

「いいわよ。負けちゃいないから」

といった。

久男の胸の中を、あの夢が、ちがった意味を持ってフトよぎった。

その夜の二人は、おたがいの裸を見ても、直ぐ我を忘れるようなことはなかった。

八畳間の真ん中に向き合って立った二人はニコツと笑い合った。冗談は本物になった。

和子が

「さあ、お相撲取りましょう」

といって、手を差し伸べた。

「よし、じゃあ、はじめに、こう組んでみよう」

といって、和子のその右手を取り、右四つになるように禪をつかませた。

「こっち側だと、何だか調子が悪いな」

和子が、久男の右肩につけたアゴを動かしてそういった。

「得意な組み方があるんだよ」

久男は、今度は左四つに差しかえさせた。

「うん、これならいいわ」

和子が、自分と同じ左四つが良いといったことが、久男を喜ばした。

「僕も、昔、選手だった頃、専らこの左四つだったんだ」

久男の手に、思わず力が入っていた。

和子は、その時何も答えなかった。そのかわり、その腕にはぐつと力が入り、久男の禪をぐいぐいと引いてきた。

久男が腰を引くと和子も腰を落し、両足を開いて踏張った。

久男の目に、和子の臀にくいこんだ白さらしが見えた。そのきりつとした感じと、柔かった和子の肉体が、力を入れる従ってぎゅっと引き締まってくるのが、久男にはたまらない魅力に感じられた。

和子が

「良かった……同じで……」

といった時、久男の心には余裕がなくなっていた。

彼は、和子の身体をぐつと引き寄せると、それを吊っていた。

「痛い！」

和子が小さく叫ぶのも耳に入らなかった。

和子がけんめんにもがき、二度目に、「痛いっ！ やめて！」といった時、久男は気づいて、和子の身体を畳におろした。

しかし和子は、彼の禪から手を放そうとし



なかった。そして、その頬を彼の頬につけ、胸を押しつけて、ぐいぐいと寄ってきた。

寄りながら和子は、

「痛くてもいいの……こうしていたいよ」といった。

その頬も、その胸も、汗で濡れていた。

女の匂いが、その汗の間から立ちのぼった時、久男は再び我を失なっていた。

彼は、外掛けのようにして和子をフトンの上に押し倒し、その禰をほどいていた。

全てが終り、ぐったりと疲れた身体を、い

## 天星社刊 〆限定版グラビア写真集 〽在庫案内

特アート紙に対する極鮮明なるグラビア印刷による限定版写真集は、すでに売切れとなった若干の集を除き、左記一覧表の通り在庫しておりますので、在庫している間には是非お申込み下さい。すべて大好評を博した絢爛たる内容の写真集揃いです。

女体緊縛グラフ集〔豊満と清楚〕	一部一〇〇〇円（送共）略号「限二」
緊縛美女八十態〔美しき縛しめ〕第四集	一部一〇〇〇円（送共）略号「美4」
山原清子「刺青の魅力を探る」	一部一〇〇〇円（送共）略号「美7」
二女緊縛「女斗緊縛競艶写真特集」	一部一〇〇〇円（送共）略号「美8」
「革具に拘束される女」拷問特集西洋篇	一部一〇〇〇円（送共）略号「美9」
緊縛写真集〆責められる美女百態〽	一部一〇〇〇円（送共）略号「美10」
M写真集「女王様に飼育される日々」	一部一〇五〇円（送共）略号「M特」
緊縛美態代表作品一二〇葉写真集	一部一〇〇〇円（送共）略号「美11」

◎以上の写真集は一般の書店にては一切販売しておりませんから、直接、大阪市阿倍野郵便局私書函第十四号天星社に代金同封の上、お申込み下さるようお願いいたします。

たわり合うようにしてフトンに横たえた二人は、どちらからともなくほほえみ合うのだった。

久男はしかし、『こんなことをしていて本当にいいのだろうか？』

と、フト思った。

それを口にする時、

「いいのよ。人はさまざまなんだ……それに女だって、あばれてみたいなあって思うことが、みんな、あるのよ。それがお相撲だろうと何だろうと構わないと思うの。私たち、夫婦なんだしね。……それより、久男があんな夢見なかったら、私、あの感じ、わからずじまいだったのよ……私、痛いほど引きしまったあの感じ、好きなんだなあ……」

和子は、そういった。

久男は、それで全てが解決したと思った。少くとも和子との間では、それまであったことのすべてを、肯定していけるということが何よりの喜びであった。

二人の夫婦生活は、それ以後、そうして健康に続けられていくのであった。

# 体験記 責め絵のある関係

能 美 積

## ① 変な親爺

其の日。私は、ステレオを買うために日本橋へ出た。日本橋は大阪でも有名な電気製品の間屋街である。私は其処で、拾万円もするセパレーツのステレオを買ったのだ。拾万円はタクシの運転手風情の私にとっては、正に大金である。しかも、そのステレオは、私のもものでは無い。私の金で私が買って、私のものでない、というのもちと変な話だが、つまり、女性への贈り物にするための物なのである。彼女？、いや、彼女という言葉が恋人

どうしでいうものなれば、此の場合適切を欠くかもしれないが、要するに一人の女性、加納芳子へのプレゼントであった。

芳子は、同じ社の無線課に勤務している。小柄で、色が白く、腰まで届きそうな長い髪が魅力の焦点で、（私はそう思う）社内でも人気者であった。九州から上阪して、社に就職したその日から私は、あてがわれたN製の新車よりも、芳子の、美しさの方に魅せられてしまった。たまたま機会があつて、

“映画でも観に行きませんか”  
と、実に平凡な誘い方をしたのであるが

“動物園に行つて見たい”

と芳子は応えた。良い年をして動物園を観たがるなんて可笑しいし、私は、てっきり、私を警戒したか、或は社から近い関係もあるので、断るのも可哀想と同情して、その場所を選んだのだらうと合点した。そんな事は、どっちでもよかった、芳子と歩けるだけでも私にとっては楽しい事だった。

途中、日本橋のショーウィンドを覗いて歩いた。芳子は音楽が好きだと話した。

“お金を貯めて、あんなのを買うのが夢”  
ささやかな夢であつたが、その夢を満して



やれる資力は、現在無い。其の月から私は、  
 壹万円掛けの定期預金を始めたのである。そ  
 して今日。真新しい聖徳太子拾貳枚となにが  
 しかの利息をもって、乗務が終ると真っ直ぐ  
 に、かねて目当の其の店へ駆け込んだのだ。  
 むろん、芳子は知らない。二、三度、シネラ

マのA席を奮発したり、コーヒーを御馳走し  
 たりはしたが、事、ステレオに関しては、私  
 は一言も語らなかつた。其の方が芳子の喜こ  
 びを増進させる結果になると信じていたし、  
 エビで鯛式にステレオで芳子を釣れる？可能  
 性が多いと踏んでいた。

ところで、此の日、私はもう一つ別の用件  
 を持っていた。正午きっかり、ある親爺と会  
 う約束がある。

私達の仕事は、最初拾った客によって、其  
 の一日の気分を左右される。車庫を出て、  
 真っ先に女客を拾って気を良くする者もいる  
 し、そのぎやくの場合のものもいよう。もっ  
 とも嫌なのは、矢張り近距離の客である。ひ  
 どい客になると、日本橋から難波までを、で  
 かい荷物を抱えこんだ後で指命する。徒歩で  
 五分で行ける処をラッシュ時になると十五分  
 から二十分はかかる場合だってザラにある。  
 客を拾うために運転手は血眼で探す、そして

一旦乗せると今度は一刻も早く降ろさなけれ  
 ば、どうにもならないのだ。

其の客が、その嫌な客の感じであつた。駅  
 前で乗つかつて、高島屋前。とやられた時に  
 は、正直云つて、むっとしたものだ。だが朝  
 っぱらから仏頂面では、一日中面白くない。  
 そう思い直して、

“少し混んでますけど、よろしまっか？”

馬鹿丁寧に、念を押した。それが客に好感  
 をもたれる結果になつた。現場につくと、客  
 は私に壹万円札を渡して、

“一、二分待つとくれや、一日借り切るわ”

と云つた。それが、その親爺との初対面であつた。忙がしい商人だつた。用件をすませ  
 て車に戻ると、行先を告げて後は帖簿と二、  
 三分間、にらめっこ。それが終ると、いろん  
 な事を次々にはなしかけてきた。

“オリオン座なんか観に行きまっか？”

“もちろん、始終ですよ”

と私は応えた。オリオン座というのは、独  
 立系のいわゆるピンク映画専門の上映館であ  
 る。そこん処から親爺の話し振りは急に活気  
 を帯びてきた。五社の映画では到庭味わえな  
 い暴行シーンの迫力なぞについて、抵抗する  
 女性をそう簡単に自由にする事は出来ない。

ぶん撲って悶絶させるか、抵抗の自由を奪わ  
 ない限り目的は遂げられない。といったよう  
 な事をとうとうと、まくしたて、挙句の果に  
 は只のヌードではない写真を、そつと公開し  
 てくれた。縛りを主体にした私には興のない  
 ものだ。

“つまりお客さんののは、縛りあげたり、なぐ  
 つたりの一種の変態性だんな”

“そんな、あんな恋態やなんて、人聴きの悪  
 い事いわんといて”

親爺は慌てて否定した。オッサンの説によ  
 ると、変態というのは新聞を騒がせている犯  
 罪者であつて、観たり、聞いたりで楽しむ分  
 には、一向に差支えは無いし、若し自分を変  
 態というのなら、単なるお色気のくだらぬベ  
 ッドシーンを観てヨダレを流す兄さんかて、  
 同じ事だよ。と理屈をつけた。私は別にヨダ  
 レを流す方ではなく、反対にツバを呑みこむ  
 位の事だが、敢て否定もしなかつた。相手が  
 大切な客である事も無論だが。親爺のいう演  
 出の嘘。女だけが裸で、男はズボンを履いて  
 る、それで女だけが、やたらと興奮してる。  
 なんてのは、たしかに可笑しいといえれば可笑  
 しいし、映倫が、どうのこうのと目鯨立て、  
 反論する程の事でもないし、めったにお目に

かかれない変った写真まで見せて貰ったり等々で、すっかり此の変な親爺と気が合ってしまったのである。

其の親爺と、今日も此処で会う約束になっている。勿論、仕事を離れての友人としての付き合いである。ちなみに親爺は四十三才。私は三十に少し間がある。親爺の店は恵比須町という所にあった、通天閣が眼と鼻の先にある関係で、ぎゃく視角になって見え難い。

菓子問屋で繁昌しているらしく、私も度々遊びに、或は仕事で立ち寄った。奥さんは若くて美人で、親爺の説によると。時々、趣味に協力して、楽しませてはくれるが、本人が真面目にマニアになろうとしないので、仕込んでゆくのが大変だ、という事だった。斯んな変った亭主を持ったら、奥さんも、さぞや御苦労な事だろう。と始めの内は同情した。が亭主の命令で奇譚クラブの旧号を揃えて持ってくることをみると、他人の私がとやかく案ずる事はないのかもしれない。

親爺は、時間一杯に、きっちりやってきた。千日前の馴染みの店で、ビールと串かつで一杯やって、オリオン座に馳けつける。前以って時間表の計算ずみとみえて、私達好みの責めシーンは、席も定まらぬ内に展開され

はじめた。白黒フィルムにカラーのおまけ付きという変った手法で、お定まりの場面は、和服の華やかさを出すために効果があつた。ヒロインの必死の抵抗も空しく、半裸に剥がれて、身につけていた細紐で縛り上げられ、抵抗の力も失せて、絶望の涙を落す。そんなシーンだけに、体の一部が硬直するのを、私は別に不思議だとは感じなくなっていた。考えてみると可笑しな話である？ 此の場合、

正常な神経の持主であれば、あわれな生贄のために同情し、正義の味方が馳けつけてくれるのを、今やおそしと待ちかねてやるべきではなからうか？、子供の頃、いや、此の変な親爺とあうまでは。正義は必ず勝つし、どんな薄倅のヒロインでも、最後は必ず、助かるものと別に理由はないが、そう思い込んでいた。ところが昨今は、どうも可笑しい。あわや、という時に変な二枚目が現われる、となんとなくがっかりする。とすると私の血の中にもこんな素質が充分あるのかも知れない。同じ事が、超満員の観客にもいえるのではないだろうか？。

クライマックスに至ると、もっと残酷なシーンが展開される。ヒロインは再び捕われ、拳句には恋人と共に焼き殺されそうになる。

此処でも気がついた事だが、私は、どういう訳か、斯ういった形の、つまり例をあげると『日本拷問刑罰史』のような残酷だけのシーンには何の反応も起きない。あくまでも被害者の純潔の危機感といったものが必要になってくる。拷問も暴行も残酷である事に違いはないのだが？（誰か答を出して下さい）

その場面が終ると、親爺も私も、そそくさと席を立つ。隣接の同じチェーンの良い場面を観るためである、三本立を一本だけ観て二本分の料金の損害などは、此の場合問題ではない。要するに必要な個処を観ればいいのだ。

此処でも、のっけから、凄いのが上映される。瞳が大きく髪の毛の長い女優が、スリッパ一枚で縛りあげられ、悪役に、皮ベルトでところかまわず打ちすえられる、動けなくなった処で二の腕つかんで引き起されて、屈伏を強要される、恐怖と屈辱でただもぐのみの女体は、寝室へ邪けんに引き立てられて行く。館を出て、親爺と別れて、私はいつまでも映画の余いんを噛みしめながら歩いていった。

## ② 恋愛終末

ところで、私のステレオ戦法はさっぱり反応がなかった。むろん彼女、加納芳子は、私



からのプレゼントである事は承知していた。いや承知している筈であった。すれちがった社の廊下で

「ありがとう」

といった。他に礼をいわれる事もなかった。で、まず間違いはないのだが、拾万円の贈り物に、有難うだけとは、ちとつれない。芳子の父も社の事故係長をしていたし、私自身可愛がって貰ってもいたのだが、其の方からも、うんともすんとも反応はなかった。つまるところ、私の一年間の苦勞の賜は、なんとなく只取りされた形になってしまった。数日後、厄介な事故の事後処置の相談がてら、夕食に誘われた時、その事がはつきりした。

「それはそうと、お前定期はどうしたい」

社をとおして預金していたし、もっぱら前借も係長の袖にすぎる率が多かったので知られているのは、あたり前だが、

「使っちゃいましたヨ、だいぶまえに」

「嘘だろう。実はね銀行がうるさいんだ。なんとか再預金を勧めてくれろって、なにも償が責められる筋合いは、ないんだがね」

「すみません。借金払いでバアなんです」

「結婚資金の積りじゃあなかったのか」

「御冗談。第一そんな相手がいませんよ」

横から母親が口をはさんだ。

「近頃の若い人は、なにを考えてるのか分りませんよ。此の娘なんかに、うるさく云ってるんですけどね。お父さんが優しくするから、すっかり甘えちゃってね、此の間もステレオっていうんですか、ほら昔の蓄音器の大きい、月賦で買ったなりなんかして」

「あれうるさいでしょう、ガンガン響いて安眠妨害になりませんか？」

「いえ一人できく道具はあるらしいんですけどね。高いんでしょう、勿体なくて」

母親の皮肉にも、芳子は平然としていた。まるで、他人の噂話でも聞いているように、無表情だった。母親は、ステレオの為に、月々の家への入金をへらされるのでは、ないかとか、お見合ばなしには耳もかさず、一体なにを考えているのか、見当もつかない、なぞとぐちり始めた。いつもの事だった。

「君だって、呑むだけが芸じゃあなからう。」

一度きいてみるかね、芳子の室だよ」

「やめときますよ、柄じゃあないし、潰しでもしたら、ことですからね」

私は、話題を仕事に戻した。芳子は、食事をすますと、お二階にどう。ともいわずに、さっと消えた。

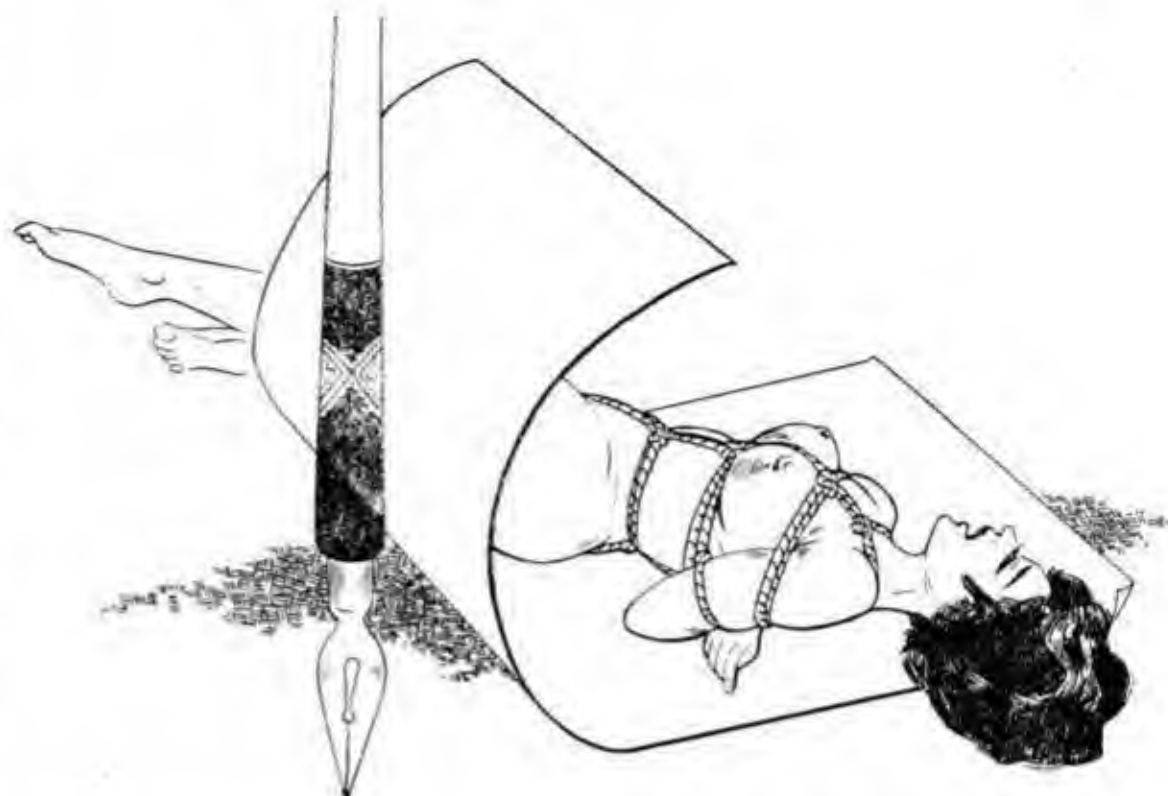
親爺と、私との関係は、短い間ではあったけれども、信じられない程の早さで、親密の度を増していった。私の仕事は、月に半分働けば良い勤定である。むろん時間的には人並以上に働いているのだが、一日の勤務が明けると、非番に一日中眠っておれるものではない。親爺の家が、社の近くの関係もあって、私が電話し、ぎゃくに親爺が誘ったりして、其の種の物は出来る範囲で観賞？し批判しあったりした。会社でも親爺からの電話は確実に通してくれる。つまり私個人だけでなく、親爺は私への義理立てに、社の車をフルに利用してくれたからである。私の拙ない体験記に登場する親爺は、変態の助平野郎の印象のみをあたえるかも知れないが、愛する親爺の為に、その点は、弁明しておかなくてはならない。彼が私に奇譚クラブを教えてくれたのであり、熱烈な読者なのであるから。

青木順子ショー？ というのも、むろん、

親爺に連れて行ってもらった、折悪しく、私の体が空かなかったもので、同行した時には、これが三度目だと親爺はいった。ストリップ劇場だったために、一人でよう行かん私を

「純情ぶって、あかん息子もったもんや」

それでも満更でもない観賞振りだった。劇



場を出ると、例によって私達は貪慾に、次の観物を検討した。数紙の新聞を買い込んで、縛りのありそうな題名の映画を漁って、結局天六にある（天神町六丁目という地名）の映画館に決めた。『性に泣く女』というのが、

案外面白かった。二人にとって筋書などはどうでもいいのだ。かれんな顔の主人公が性不能のボスに捕われ、文字通り全裸にされて縛られて、アンマ器で責められたり、裸の肌に洋酒を浴びせられて、なめまわされる。そのシーンだけで、充分だった、それが終ると私の発案で、急用を思い出したから、後で出直す。とモギリの伯母さんを買収して、一旦出る、次の時間も抜かりなく計算しておく。

天六で、一杯呑む場所には不自由はない。

同じ場面を、もう一度堪能して、私達は飲み直しをやりながら帰路についた。社の近くの親爺の店と、私の下宿とは、ぎやく方向だったが、私が送るのが習慣だった。駅前の信号の傍で酔っ払いが車を拾うのは難かしい。商売上私には、それが分っていたが、親爺は、とめてみせると頑張った。酔うと強い。ふとみると角のレコード屋にでかい看板があって、こんな事が書いてあった。

△憩とムードの音楽集。

貴男の愛をこめて 最愛のその人へ▽  
ふらふらと買う気になった、無駄な事だと

しりながら。値段をきいておったまげた。買うのは買えるが帰りの車代が危ない。

“お包みますか？”

店員が云った。ままよ野となれ山となれ、だ。電車賃位残るだろう。

“能美君、何してる。車だ、車つかまえた”

親爺が叫んだ。ケースと包装紙を別々に持って、私はすっとんでいった。

“へえ、君に音楽の趣味があるとは知らなかったねえ。人は見掛けによらんもんだ”

“オッサンと違ってねえ、これでもインテリなんでっせ”

私は笑いで胡魔化した。そんな事より財布の中味が心細い。

“包む暇もなかったのかい。まあ、よろし、いえでかあちゃんに包ましたる。これでも商売人や、菓子包むのもかわらへんがな”

“それは、どうでもいいんですが”

少し借りようと思ったら、親爺は、シートに身を沈めた。一日中、走り回ってコーフィンして寄る年並？ には勝てぬとみた。

親爺の店は休業だった。あの子どうや、ものにして仕込んでみんか。親爺の口癖のかわい子ちゃんも影はなかった。一旦室に通された後、店先にある電話を借りて、芳子の父を



呼び出した。事故係長の社宅には、会社の費用で電話が引かれていた。

「一時間以内に参ります。下宿までの車賃足りんのです、お頼み申します」

細い声で頼みこんだ。室で親爺はいろんな本を取り出していた。若い奥さんも、この頃は、すっかり私に慣れていた。ただし

「一度、能美君に、実物の艶姿を？」

との親爺の要望は固く拒否した。無論、冗談のつもりで、親爺はいったのだろうが。

酔うと、くどい性質なので。(御免よ親爺)

奥さんが包装してくれたのであろう、レコードケースを持って、私は早々に退去した。

千円持って、係長は待っていてくれた。斯ういう処は有難いが、口はうるさい。手と首だけを窓から出して、序でに、レコードを差し出した。

「芳ちゃんに渡して下さい、この間ステレオ買ったって聞いてたから」

「お前、誰に金をたのんだんだ？」

「もちろん、係長ですよ」

「馬鹿野郎。そんなら僕に、すしでも買ってくるのが道理とちがうのか？」

斯んな時には、逃げるが勝ちだ。下宿へ着いて靴も脱がぬ内に電話が掛った。カチャリ

という拾円玉の落っこちる音、公衆電話だった。が声は電話のある筈の芳子からだった。

「父から受け取りましたけど。あれ、どういう意味ですか？」

私は、哑然とした。

「つまり、あの。レコードの事だね？」

「そうです。どうして、あんなものをくだすったのです？」

「あんなもの、だって？」

其の瞬間に、一年間、秘かに燃やしつづけた愛も、情熱も霧散した。

「じゃあ云おう。云わして貰うよ。君は少し

勝手すぎるんじゃないか？都合のいい時は黙って頂戴する。それで今になって、どう云

う意味とはどういう意味だい。此っちがききたい位なもんだね。いいかね、ステレオが惜

しくなっている訳じゃあないぜ。一年前に買う腹をきめた時から、俺は、いや私はだな、

腹をきめてたんだ。酔ってるんでね、どうも上手く文句がいえんが。つまり君が好きだっ

たから勝手に、そうしたんだ。あんなに惚れたんは私の勝手だ。だがね、俺はあんなに鼻

糞程もめいわくはかけてないぜ。ステレオ送りかえされても後悔せんように、私は私の名

前をかくしたんだ。という事はだな、振られた時は、すっぱり諦める。だから、それが分ったからって愚図愚図いう程、野暮天じゃあない積りだ。結果は愚痴る事になったがね。それはだな、君の断り方が気にいらんのだ。ちがうかね。俺のやりかたが、しつっこいと思うんだったらだな、もう一寸やわらかく、(これ以上の好意は迷惑だ)とか、なんとか、他にいい方が、ありそうなもんじゃあないかね。折角、人がいい気分帰ってきたのに、追い打ちかけて因縁つけることあ、ねえだろう。

ま。とにかく訳の分らん事をいったが、君に嫌がられた事は、はっきり理解してるよ。二度と迷惑はかけんし、会いもせん。レコード要らんのだったら捨ててくれて結構だ。それじゃあ、みなさんに宜敷く。バイバイだ。胸がスカッとした。といたい処だが、腹の中は、煮えくりかえっていた。

### ③ ある、誤解

元来、私は粗暴のきらいがある。短気は損気、というあれだ。ただ芳子の場合は別だった。一年有余を、少し大げさにいえば、一人悶々と耐えてきたのだ。それが此の結果なん

だから、あたまにくるのも当然だろう。

翌日、私は辞表を提出した。女の事で社を罷めるなど、いささか筋違いかもしれぬが、性分だから止むを得ない。

自己退職の場合は、一週間以内に下宿を開け渡す規約がある、その日の内に私は、新しい職場を決めた。夜。整理をしている処へ、人事課長と加納さんがやってきた。引き止め工作だが、私は拒否した。会社にも、此の人達にも怨みは無い。だが原因は芳子だなどとはむろん云えない。ただ、辞めさせて頂くの一点張りで押し通した。

三日後に、新会社のアパートの準備が出来て、引っ越しする事になった、一年三カ月、一緒に働いてきた連中と、これから働く事になる人達とが手伝ってくれた。新しい室は、二人一室だが住心地は良さそうだった。

引っ越しの挨拶と、旧友との別離を兼ねて盛大な酒宴を開いた。二次会を終えて戻って来ると、番号を書いた紙片を渡されて、待っているから連絡するようにとの伝言である。会社の近くの食堂の電話番号である。大体市内のタクシー会社は相互の連絡が行届いていて、何処へ行ってもすぐ分るようになっていて、不良運転手を締め出すための自衛策、み

たいな物があるらしかった。そういえば、食費の支払いが残っている、既に午前七時を回っていたが、深夜営業だから気にしないのだろう。郵送するよ、そういう積りでダイヤルした。

“能美さんですね”

思い掛けない声であった。

“明日、うちに来て下さい。待っています”

“俺は行けない。行く必要も、無い”

“あたしにあるんです。朝から来て下さい。”

“未解決のままで、すますなんて卑怯です”

“卑怯だって、なにが未解決なんだ”

“レコードの事です、分ってる癖に”

“なんだ。そんならほかしちまえ。そういったつもりだぜ、なにを今更いつてるんだ”

“捨てて済む事じゃあないでしょう。あなた酔ってるのね。駄目よ、お酒で胡魔化して”

“酔って悪かったね。大体君は、呑んでる時に電話をかける、そのくせ治し給えーだ”

“とにかく、あす来て下さい。分りまして”

“駄目だ、俺は新入社員なんでね、そんな自由はきかん。とにかく二度と会わん、今度電話したりしたら張り倒すぞ”

“張り倒して御覧なさい”

“――”

“そちらの会社には、お父さんが連絡してあります。お勤めもあさってからって事、分っています。もうおそいから、お休みなさい。拾時すぎにいらして下さい、午前の拾時ですよ、お間違いないかね。じゃあ切ります”

翌朝。十時きっかり、アパートを出た。睡眠不足で目が充血しているのが分ってはいしたが、仕事疲れや飲みすぎで慣れっこになっていた。芳子が隠しきれなくなって、父親になにもかも話をしたに違いない。私はそう解釈していた。とすれば律気一本の係長の事だ、黙ってすます筈がない、うまくすると金をかえしてくれるのかも知れん。レコードの事が未解決だ、と芳子はいったが。そんならステレオはどうなるんだい。そういつて居直つてやろう、少しばかりめめしいようで、気が引けるが、捨てた女に、いや捨てられた女に、遠慮するこたあ、あるもんか。そんな、いわばヤケ半分の訪問だった。会社の車に、便乗させて貰ったので、途中で一杯、迎い酒の間を待って貰った。もうこれで係長一家に対する義理も人情も盡くらえだ。

ベルを押すと、芳子自身が出た。和服だった。私は一寸の間、たじろいだ。芳子の着物は正月に年始に来た時と、誕生日に招かれ



た時以来の事だった、明るく淡い水色の地にばたん柄を現代風にアレンジして染めぬいた訪問着だったし、顔も普段と変っていた。首筋が薄黒く顔だけ白い奇妙な化粧は、見飽きる程にみてきたが、芳子は、そのぎゃくに濃い目の肌色のドーランを刷いている、いつものようにスエーターにストラックスの無難作な芳子との口論を予想してきただけに、私が、めんくらったのは当然だった。

私を招じいれると、芳子は、玄関に鍵をかけた。用心深いのは、いつもの事で、どうとこの事はないのだが、勝手したる茶の間ではなく二階の方へ導いた。

その室は、洋室に改造されていた、沢山の社宅をみているので、その位の事はすぐに分った。向い側の窓に少年が、腰をかけてギターを引いているのが見えた。芳子は、その少年に軽く会釈して、窓を閉め、紫色のカーテンを引いた、問題のステレオは三方に分けて据えてあり、も一つ問題のレコードケースは中央の小さな卓子に載っかっていた。

「隣が弟の室ですの、少し広いけど取り散らかしていますから」

それで始めて、私は誰もいない事に気がついた。

「音楽でも掛けましょうか？」

「そうだな。ブツこわす事にでもならない内に、お別れの意味で聴かせて貰おうか」

どうやら金のかえる望みはないらしい、しかし何か、こんたんはありそうだ。

「どんな曲がお好きかしら」

服装が変わると言葉付きも変えるらしい、だから女は油断出来ない。

蓋を取ると白色の大きな袋が入っている、説明書らしい中味をとりだした。

とたんに私は、きもったまがひっくりかえる程のショックをうけた。

なんという事だ。こんな、こんな馬鹿な。

(奴だ。親爺の仕業だ、なんてえこった)

芳子は、一番上の一枚を取り出すと、その表側を私の鼻先に差し向けた。

それは、私もみた事もないような素晴らしい極彩色の責め絵であった。素晴らしい物ではあったけれども、此の際、そんな呑気な観賞の余裕はなかった。

最初のそれは、御殿女中風の女が雪の庭先で縛られている極くありふれた図柄の物であった、責め絵というよりも、私の眼には美しい、なんとなく額にでもいれて飾っておいてもよいような、感じの物であった。だがあと

のが悪い。二枚目は、本堂、と思われる柱に

がんじがらめに縛りつけられた二人の娘が、坊主頭の男に手と足で同時になぶりものにされて

いるのであり、他のもそれぞれに『悪浪人と姫君』『岡っ引きと女賊』といったよう

な、其の道のマニアなら、いくら眺めても見飽きない傑作ばかりが六枚、週刊誌の表紙大

のものだった。加納家に電話で金の無心をしている際に、親爺が、包みこんだに違いない

のだ。芳子は落付いていた。何事もない表情で、レコードをもって隅へいった。美しい曲

だった。だが完全にどうてんした私の頭は、それどころの騒ぎではない。

「これできいて御覧なさい。左右の耳と、それから頭のとっぺんからきこえるのよ」

ヘッド・ホーンという奴だった、電話局の交換手が嵌めている、あれだった。女の声が

英語で？ 何か唄っている、芳子の唇が動いた、なにか云ったのだろうか、きこえない。

これはどう説明したらいいのだろう。

ホーンを、芳子がはずしてくれた。沈黙の中に、ホーンをとおしてかすかに曲が流れていた。

「これから、私のいう事をきいて下さい。私のいう事だけをきいて下さい。一年間、あな

たはなにも仰つ有らなかつたわ。でも私には分っていました、あたしもあなたが好きだったからです。ステレオが届いた時、私は一晩中此のホーンを放しませんでした。一年前、

私が欲しいなあって洩らした事を、覚えていてくれ、月賦でなくてお金を貯めて買つて下すつた。一言も仰つ有らない、あなたのお氣持が痛いほど嬉しくて——月賦で買ったのって嘘をいったら、おかあさんには叱られました。父にも云えませんでしたけど。結婚する人はきまつてゐるって、父にだけそういったんです。——かあさんは運転手との結婚は反対なんです、ですから父だけが相談相手なんです。——あなたが父にはなして下さるのを私は辛抱強く待っていました。どんなお話も父と一緒に断わり続けてきたんです”

“……”

“レコードを頂いた時、父は室まで入ってきて云いました。お前の相手は、やっぱりあの飲み助野郎かって。儂のところにも車代を借りにくるようなオッチョコチョイと一緒になつたてろくな事はない、考え直させて。此のステレオもあなたから貰ったんだろうって。父は見抜いていたんです。室を出る時、その内に、事務の方でも廻すようにしてやるか

ら、それまでかあさんには内緒だぞって。父は許してくれたんです。そして一人になって跳ね廻って喜こんで、ケースをあけてみたんです”

“……”

“その絵をみたとき、あたし、あたし”

“一寸待ってくれ、芳ちゃん。それはちがうんだ、僕が、僕がくれたんじゃない”

“いや、弁解はやめて”

芳子は、レコードを裏がえすと、それまで手に持っていたホーンを、自分の耳にあてがった。

“あなたが、なんと仰つ有っても、あたしにはきこえません。ですから私の話だけきいて下さい。五日間、考えて、考えて、考えての事なんです。あなたが辞表を出された日に、私は念の為に、包装紙の所がきを調べて天六へ行ってみました。その袋をみせて、お宅ではサービスか何かで、此のような袋を使われますか？とたずねてみました、ソノシートを進呈する事はありますが、斯のような菓子屋のマークの入った袋など使用する筈はない。そういう返事でした。

“だからだね、それは僕が……”

“えっ、なんですの。きこえないんです。あ

なたはお電話した時、欲しい物は頂戴するがレコードは氣にいらなかった、怒ってらしたでしょう。昨日になって、あたし始めて氣がついたんです。あなたが私に一言も仰つ有らなかつた事。謎がやっと解けたんです”

“……”

“サジスト。そういうんでしょう。私だって其の位の知識はあります。愛する相手を苛めたりする事で、愛を表現する男の人が沢山いるって事を、知っているのです。私達が結婚して、私があなたの求めに応じられない女だったら一緒になつても偉あせは望めない。あなたはその考えて、あの写真を私に見せる氣になったのでしょうか。

“違うよ。そこところは全く君の一人合点で、あの写真の絵はまるで関係ないところからあのレコードに入る事になったんだ”

“あたしは怖いんです。大好きなあなたに苛められるなんて、信じられません。でも、だからといってあなたを今すぐ忘れるなんて、嫌です、とても我慢できません”

“その器械をはずさない、そして僕のいう事もきいてくれ……”

“あなたは私から逃げようとなさった。もう駄目だと見限りをつけて、さっさと会社を辞





めてしまったんです。——でも私は諦めません。そして決心したんです”

“……”

“父も母も、そして弟たちも帰りません。二人だけでお会いしたい人がいるから。父に、

そうたのんで一日あけて貰ったんです”

“……”

“父は云いました、世間に顔向けできないような真似だけはするなって……”

“……”

“能美さん。私をあげます”

“そ、そんな無茶な”

“あたしは純潔よ。きむすめっていうんでしょ、なんでも、しってるんだから”

“音楽を止めてくれ、スイッチはどこだ”

“その代り、あたしをあげる前に、一つだけきいて下さい。つまり条件があります”

“芳子は、そこまで云って、はじめてホーンをはずした。

顔が、化粧のせいではなく、硬直しているのがはっきり分った。

“条件って。なんだい?”

“あたしを其の絵のように、苛めてみて”

“ええ?”

“あたしを試してちょうだい。怖いけど決心したんです。だから、その絵と

同じように、あたしを試して欲しいんです”

“……”

“此の着物も、私の好きなものなのよ。きれいでしょ。そりゃ絵のような美人にはなれないけど、これでも精一杯おめかししたのよ”

“芳ちゃん、冗談いってる場合じゃあないだろう。真面目に話し合おうよ。ねえ”

“私は真剣よ。でも、これだけは約束して、若し、もしよ。あたしが、あなたのなさる事を辛抱できないって分ったら、あたしを許して。結婚しても駄目だって思うのだったら、私の体を綺麗なままで許して欲しいの、悲しい事だけど、それは誓って”

私は疲れた。頭も体もクタクタだった。

“酒が欲しいな、少しでいいんだけど?”

“茶の間にあります、取ってきます”

“いや、自分で行くよ。芳ちゃんの熱気にあてられてね、頭の芯が痛いんだ。下で暫く冷やさせて貰うよ”

茶の間におりると、へなへなと腰がぐだけた、何時だったか、自動車強盗をまねがれた時の気持に似ていた。いや、もっと厄介な事になりそうだった。

#### ④ 責め絵

冷たい酒をコップで二、三杯あおると、や  
つとこさ人心地がついた。此んな場合、もっ  
とも適切な方法はなんだろう。私はそれを考  
えてみた。そつと脱け出す。という方法があ  
る。だが芳子をどうする、自から純潔を捧げ  
る、といったのだ。ほんのちよっぴり、苛め  
る真似をすればいい。それで納得させる事さ  
え成功すれば、白滋の肌は永久に俺の物にな  
る。永い間、秘かに求めていたものが、家族  
を遠去けてまで、待っているのだ。室からは  
静かなメロディーが流れている。芳子は今、  
なにを考えているのだろうか？

突然、親爺の顔が頭に浮かんだ。人を思い  
がけない窮地に追い込む原因をつくった男。  
そうだ電話をかけてみよう。私は玄関の電話  
口に立った。都合よく親爺は在宅していた。  
玉子の値段が安定しない。そんな愚痴を押し  
とどめて。私は手短かに事情を説明した。流  
石の親爺も、驚いた様子だった。が――

「チャンスだんがな」

それが最初の返事だった。

「よろしまっか。わいを結びの神やと感謝し  
なはれ、ようけ、おさいせんもらいまっせ」  
「それは結構ですがね。いい智恵ないですか  
ね、助けて下さいよ。なんとか？」

「あんた阿呆とちがうか。やんなはれ、徹底  
的にやんなはれ。よろしいか。あんたがその  
おなごはんと夫婦になる腹やったら、好きな  
ようにしたがよろし。ええ恰好してもあきま  
へんで。ほんまに。その女子はんかて、あん  
たに惚れて、体張ってはるんや。ほんなら手  
加減せんこっちゃ。いうとくけどな。変態ち  
ゅう言葉、わいはきらいや。そやけど、あん  
たの性質知ってて、惚れてくれてるんなら好  
都合やおまへんか？ な。そうでっしゃろ。  
どこかしらんけど氣い交らん内に、早ようい  
きなはれ。わいも応援してまっさ」  
私は暫く、ジイーとしていた。体中の血が  
騒ぎ始めていた。

一升瓶を提げた俤、室に戻った。芳子はひ  
っそりと坐っていた。

「本当に、苛めてもいいのかい？」  
黙ってうなずいた。

「怖いだろう、今なら止めてもいいんだぜ」

「怖いわ。――でも止めません――」

「強情なんだな。じゃ仕度しなさい」

「――ど、どうするの。おしえて？」

「括るのさ。――それぐらい常識だよ」

――芳子は引き出しをあけて、細引きを取  
り出して来た、ビニールの袋に入った、新し

いものだった。

「こんな紐、どうして持ってるの？」

「今朝、――買ってきたのです」

「自分を縛るためにかい？」

返事はなかった。が芳子の並ならぬ決意が  
その細引きにこめられているようだった。

私は、六枚の責め絵を卓子に拡げた。

「此の中から、君の好きなものを選びなさい」

「そんな、あなたが決めて」

「駄目だ、君が決めるんだ」

顔を反向けて、見る事を拒もうとした芳子  
は、それが試される事の第一歩である事をさ  
とったようだった。だが、なかなか決心はつ  
かないようだった。

「充分見てる筈なのに、手間取るね？」

マネキユアされた白い指先が、おずおずと  
一枚を差し示した。雪の中の美女、唯一の、  
男のいない分だった。

「比較的、楽な物を選んだものだね。これじ  
ゃあ僕の役割りがないじゃあないかい？」

冷酷に、私はいつてのけた。自分でも驚く  
程に冷静だった。永い間、芳子は又迷った。  
無理もなかった、どの絵にも兇悪な顔の男が  
いる、気の弱い女なら、その場面を想像した  
だけで気絶するかもしれなかった。私は一服



つけた、それに刺戟でもされたように、芳子は二枚目を選んだ。遊女らしい女が両手を頭上で括られて、その前で岡っ引きがたばこをくゆらしている図柄だった。

「よし、これでいいんだな？」

丁度、ベッドと居間を仕切る個処に、カーテンレールがある、カーテン用のものなので細くてよくしなるが吊る為ではないので、充分役立つ、新しいロープを、私はそれに廻した。

「よし準備オーケーだ。まず着物を脱ぎなさい、それから手を縛る」

「……」

「どうした、何故脱がない」

「どうして、着物を脱ぐんです？」

「実演だからね、リアルにやる」

「だって、その絵は着ています」

「これは着物とちがうだろう？　なんだね」

「長襦袢、だと思えます」

「じゃあ君も、そうするんだな」

「そんなら、此っ方の着物をきたのと代えて下さい」

「なぜだね、着物を脱ぐのはいやなの？」

「羞かしいんです」

「羞かしい。いいかね、苛めるのも楽しいけ

どね。君のその恥らいをみるのも楽しみの内なんだよ。羞かしさの無い女なんて、価値はないからね」

私は、どうやら親爺に相当感化されたようである。我ながらうまい事をいう。もっとも此処まできて、自分で照れていたんでは、どうにもなるまい。

「さあ、さっさと脱いで貰おうか」

どうやら諦めたようだった。芳子は横向きになって帯をといた。着物の襟元が割れて紅絹色の襦袢が覗く、しみるような赤い細帯が目につく。着物が体を離れると、拾ってベッドにはおる、もう帰る時まで着る必要のないものなのだ。序でに邪魔な卓子を端に押しやる。

「括り易いように、両手を前に揃えるんだ」

素直に芳子は、それに応じた。縛られる事は覚悟が出来ているようだった。私は手早くロープをかけた。多少手加減した。立たせた俥で、手首を頭上に吊りあげた。女を、いや人間をこんな姿に縛ったのは、むろん生れて始めての事だった。

「多少ポーズはちがうがね、洋間だから仕方がない」

芳子は身動きもしなかった、袖口からむき

出された、あらわな二の腕は、責め絵のそれよりも、白く艶やかだった。

一升瓶のまま、私はラッパ呑みをした。

「その帯は、なんというのかね」

「伊達巻の事ですか？」

「じゃあ、それをとかせて貰うよ」

「い、嫌です」

「嫌だって、どうしてだい？」

「……」

「どうしてかって、きいてるんだ」

「は、裸がみえるからです」

「良いじゃあないか、是非拝見したいね」

「裸はいやです。括られてもぶたれても我慢します。裸だけは勘忍して」

「弱ったなあ、どうしよう」

「その絵だって、裸の物はありません」

「よし、じゃあ他の方法を考えよう」

あわてる事はない、どうせ俺の女なんだ、じっくり時間をかけて楽しもう。そんな図太い考えが、知らぬ間に私の中に芽生えてきていた。

「そうしていても、別に痛くも搔くもないだろう？」

「はい——でも手が少し——」

「まだ十分しかたっていない。いいかね、こ

の責めはね、本来の目的は女体観賞のためなんだ。だから裸の方がいいんだが、でも大体君の体の線は分る、気にいったよ、暫く眺める事にする”

此の言葉は、羞恥心を刺戟するのに役立つたようだった。私は万べんなく芳子の周囲をめぐって廻った。うなじにあかみがさしているのが美しい。背後にまわるたびに、私はつばを呑みこんだ。考えた末に私は一つの方法を思いついた。つい先刻、芳子の着物と共に抜きとられた二本の細紐を選ぶと、その一本宛を、それぞれの二の腕の腋の下あたりに、その一端を括りつけた。そして手首のロープを解放した。芳子は、少し色の変った手首のあたりをもみながら、両方の腋からぶらさがっている細紐を、不審相な表情で見た。それがなんの目的なのか、分る訳はむろんない。一服したら今度は後手縛りだ。手を後で組みなさい”

芳子は命令どおりに背を向けた。先刻と同じようにロープで軽く手首を縛る。

“よし、そのまま、うつぶせに伏せるんだ”  
なにをされるのか分らない恐怖に、芳子はチラと私をふりかえり、おずおずと腰をおろした。

“伏せろって、いった筈だぜ”

私は、いきなり、芳子の左肩に手をかけると、勢いよく襦袢の片方を引きはがした。

“いやあー”

そんな悲鳴を挙げて、芳子は突っ伏した。引き起こそうとする左肩を床に押しつけて、そうされまいとあがらった。面白半分、私は下半身に手を伸し足首の方から引剥がそうすると、芳子は不自由な脇をつかって、ずりこける。右肩もむきだしにした。上半身と、下半身とを交互に襲う私の食指に、芳子は、床をならして狂気のように匍匐廻った。一息いれて、整理筆筒の上から、物指しを探し出した。まだみられる事を拒み続ける襦袢の下双丘に、私は一撃を加えた、二度、三度。休む間もおかずに打ちすえたが、流石に悲鳴は嚙みしめている。私のために耐えているのだ。その事を、考える余裕は、既に私には失われていた。後手のロープをつかむと、芳子の体を引寄せておいて背中の上へ、馬乗りなつた。二の腕の細紐を襦袢の袖から引き出すと、たった今鞭打ちにつかった物指しを、背中と腋の間に差し込んで、それぞれの腕へ、がっちり固定した。

“ああ、あ——”

みると、黒髪が長いために物指しにからんで、咽喉が引きつれていようだった。もう馬乗りの必要はなかった。手首のロープを解くと、手首を床について、一息にはね起きようとしたが、襦袢を剥がすと、無残に突っ伏した。再び手首を括り合せた。ロープを引きしぼったがたたなかった。伊達巻に手をかけると、狂ったように、跳ね、躍った。

“止めて、やめて。——やめてえ”

無駄な呻きであり、哀願だった。空色のパンティを穿いていた。膝から上が烈しく震えている、恐ろしさと羞しさで、震えが止まらないのだろうか。無情に私は引き起した。もう何度もそうした事でもあるように、私の腕は動き回った。ロープをたぐって背後から、ヒシヒシと、胸にまわした。すべては完了した。小柄な体を抱きあげると、ベッドにはこんだ。

下半身をくの字にまげて、芳子は鳴えつしつづけた。物指しを背負わされた上半身は、いくら身悶えても蔽う術はないのだ。私は此の眼で、縄にくびれた女体の美しさを、知った。乳房のふくらみも、蒼い谷間の翳りも、くびれた胴の烈しい震えも。

両足の自由も奪うのだ。



「いや、いややめて、さわらないで——」  
 ベッドの枠へ、足首も括りおわった。最後の  
 の布切れを引き千切った時、加納芳子は、絶  
 叫した。

「お願い、お願いです。——今日は、今日は  
 もう許して。——許してえ」

「もう終ったんだよ、芳ちゃん。これ以上、  
 苛めたりはしやあ、しないよ」

「縄を、なわを解いて下さい。お願い」  
 「駄目だよ、それは無理だよ」  
 「せめて、お腰だけでも何か与えて」  
 「君は美しいよ。みてごらん。どんな素晴らしい物だって、此の肌の艶には勝てないよ。君は分らないのかい、此の、内腿の光沢、血管が蒼くういて地図のように輝いているよ」  
 「許して、もうそんな触らないで」

「許してだって、なぜ許しを乞うのだ。僕は君を愛しているんだ。なぜ喜ばうとしないのだ」  
 「お願い。能美さん、縄をといて」  
 「嫌だ！君は縛られたまま、僕の妻になるのだ。結婚するって約束したじゃあないか」  
 「いやです。こんな姿で、こんな姿でなんてあんまりです」

限定版 写真集 **美しき縛しめ** 第七集 愈々好評!!

山原清子  
妖艶緊縛

刺青の魅力を探ぐる

写真集

一部一〇〇〇円  
略号 **美7**

全部最近撮影の力作!

未公開の秘蔵写真集

刺青の女王——山原清子の魅力の隅から隅までを抉  
 ぐり出しその美しさを最高度に発揮した強烈な緊  
 縛フオトの結集版 (思わず息をのむ凄まじいポーズばかり満載)

このグラビア写真集の写真を撮影するため  
 に、三カ月に亘って、山原清子嬢を連日のよ  
 うに煩して特写しました。ここに収録したもの  
 のは、すべて未公開の傑作写真ばかりです。  
 山原清子嬢の若い女性としては前代未聞の素  
 晴しい刺青の魅力をぎりぎりの線まで徹底的  
 に追究して、その肉体の隅から隅までを鮮鋭  
 なピントのフオトに表現しました。殊に彼女  
 好みの強烈な緊縛によって、単なる刺青フオ  
 トの域を脱して、より高度の芸術品を仕上げ  
 ました。このような稀有の文献資料は他では  
 二度と手には絶対に入らないという自負を持

っております。一般市販はいたしておりませ  
 んから直接発行所へお申込み願います。  
**内容** 全裸の刺青を晒らす後手縛り。股  
 間縛りの刺青の魅力。黒縄緊縛にも見える刺  
 青女性。後手縛りの刺青媚態六態。絢爛たる  
 逆エビポーズ。乳房責めにうろたえる清子。  
 海老縛り。正面と背面の魅力を抉ぐる。台上  
 にさらす緊縛妖姿。刺青が樹間に見える緊縛  
 全裸姿態。日本髪全裸緊縛。光と影に映える  
 妖しい刺青。刺青芸妓の裸身縛り。海老縛り  
 にうめく清子。股間縛りでもだえる刺青女。  
 清子の身体各部のアップ。

「おなじ事さ。どんな姿だって和合は和合、  
 君の想像する程美しい恰好じゃあないよ。そ  
 れよりも僕が満足し、素晴らしいと思う形で、  
 夫婦を契ろう。ね、いいだろう」  
 「いやです。それはあなたの身勝手です、あ  
 たしは、こんな奴隷みたいな、みじめです。  
 あたしにも、あたしにも権利はあります」  
 「権利。奴隷。——そして、僕が身勝手だっ  
 て。——じゃあ、どうしろっていうんだ。縄  
 を解いてくれ。——ときました。——はいお  
 まちどおさま、あなたの奥さまにどうぞして  
 下さい。——そういう段取りになるとでもい  
 うのかね」  
 「……………」  
 「君は逃げるだろう、多分にけるさ。気狂い  
 狼に襲われかけたって。親爺さんに報告する  
 だろう。——これからは気をつけるんだぞ。」

それで終りだ、ザ・エンドだ。

“……………”

“あたしにも権利があるって。手も足も縛られて、なにかもさらけだして、どんな権利があるというんだ”

私は、ステレオをいじりまわした。音楽ががなりだした。皮ベルトを引き抜くと、たった今、愛撫しつづけた太腿めがけて振りおろした、めった打ちだった。あわれな生贄は、唯一の権利である唇をゆがめて悶え狂った。

### ⑤ 敗れて勝つ

ダイヤルを回すと、まちかねたように、親爺が出て来た。

“どないだ？ 失敗したんとちゃうか？”

“いえ。お蔭で成功させて貰いましたよ”

“そらよかった。お芽出度うさん。それで、

どないでした？ あの方は”

“そっちの方はだめでしたよ。どうやら振られたらしいですわ”

“そらあかんがな。一体全体どうなってまんねん。さっぱりわからへん”

“まあいずれ、折をみつけて報告にあがりますよ。どこかおもしろい話でも転げてたら、是非一つ頼みますよ。じゃあ又後で”

私は、洋間へとってかえった。芳子の体はピクリともうごかなかった。

“縄をとき乍ら話をしよう。―あの責め絵をレコードに入れたの本当に僕じゃあ、ないんだよ。いまになって、信ずる、信じないは、勝手だがね。千日前で一人のオッサンと知り合いになったんだ。僕はよく南に遊びに行くんだがね、ピンク映画。知ってるだろう。そんなよからぬ処で知り合ったんだ。但し、彼は立派な商人だし、金もある紳士だ。電車の中で娘さんの晴衣にたばこの火をいれるような人間を毛虫のようにきらってる。それでいて、あんな責め絵を押し込み一杯もってるって変り者なんだ。自分で楽しむ分には罪悪でもないければ変態でもない、若い奥さんがいてね。二人だけで楽しんでる、そんな人なんだ。僕もすっかり共鳴してね、非番の度に、親爺とあそぶようになった。むろん僕にも、そんな素質が大いにあった訳だな。

此の間レコード買った時も、その親爺と一緒にだった。タクシーがきたんで包装して貰う暇がなかった。その家で電話をかりて、君の父さんに車代をたのんでいる内に、親爺か、奥さんのどちらかが包装してくれたんだ。向うは、僕のレコードだと思っていたから、な

にも云わなかったんだね。証拠は、此の袋だよ。親爺の電話番号も書いてあるけど、確かめる必要も、もう無いよね。つまり僕がステレオを日本橋に買いにいった事。帰りに親爺にあった。変な親爺にね、そして僕にもサジストの血が流れているという事、そして写真を観た君が勝手に判断を下した事。みんな狂っていたんだ。そして、もっと悪いのは、君が純潔を捧げるって決心した事だ。何日か先にゆっくり話し合えば誤解もとけたかもしれない。でも、それが駄目だと分った時、遮二無二、君が欲しくなった。君は純潔を守りとおした事を誇ればいい。だが僕も負けたとは思わない、今の電話きこえたらう。僕はあの親爺に成功したといってやったんだ。君は征服出来なかった、でも僕は一生得られない体験をさせて貰った。あす九州へ帰る。あの親爺の奥さんのようなM趣味の人を求めにね。手首の跡はよく揉めば治るよ。左様奈良”

私は再び大阪へ戻って来た。

後日譚、もちろんある。でも紙数も尽きたし、こんな話が奇クの誌上に載せて貰えるかどうか分からない。と思うと急に疲れた。親爺も含めて、紙上匿名は御容赦下さい。



／＼日常

にちじょう

(一)

縄なわの  
ある  
蜜みつ月げつ

千草 忠 夫



新婚旅行から帰ると、挨拶まわりやら何やらで多忙な日が続いた。夜になると会社の同僚が二人三人と群をなしておそってくる。新らしく移った二DKのアパートの整理もまだ

ついていないままに、日はたっていた。

「結婚すると女は変わるもんだと言うけど、きみの奥さんは特別だな。別人みたいだよ」

会社へ出勤しても、猛は昨夜訪れた同僚の新妻評に悩まされなければならない。それは新婚した男たちの必ず負担しなければならぬ、こそばゆい痛みをとまった税金みたいなようなものだった。

誰もみな淑子の変わりようを奇異なもののように口にする。

「よっぽど、きみを愛してるんだな」

「やけるぜ」

「だんな様も、ここしばらくは大変だろう」

「きみの眼に、狂いはなかったって、ことだよな」

言葉は異ってもみな一様に、磨かれない玉を選別する眼を持たなかった嘲りと、まれな宝を自分のものにした猛に対する羨望を胸に抱いているようだった。

事実、わずかな新婚旅行期間中においてさえ淑子は変った。いや、猛の手で変えられた——いや、それだけでは充分ではない。淑子のがわの変えられようとする受身の意志と、猛のがわの変えようとする欲望とが、まれに見る二重奏をかなでて、官能の花弁がおの

なきがら花ひらいた、とでもいった方が当てよう。

結婚前までの淑子は、ただおとなしくまとまった顔立ちの娘というにすぎなかった。それは明治時代でもあったら、あるいは美人の部類に入れられた容貌であつたかも知れないが、現代においては、そんな非個性的な顔ははやらないのだ。どぎついメイキャップの氾濫の中に、そんな平凡な美しさなど、たちまち溺死してしまう。

そして、現代の男たちは、レディメイドの女ばかり求めて、みずから好みの女に作りあげるといふ楽しみを忘れてしまっているかのようだ。作りあげること意志し、作りあげられようと望むなかに、夫婦というものの真の姿が——色恋などという半ばは虚栄に突き動かされた行動では理解できない、なにかが生まれるのではないか——

淑子の平凡な顔立ちは、夫を恋する瞳を中心にして、生き生きと回転しはじめたのだ。それまで、中心を持たなかった平板さは中心を得て、そこに美を凝縮させはじめたのだ。表情ばかりではない。未熟なすももの肌を思わせた、蒼く冷たい肌が、ほんのりと色づき、内からあふれるような輝きに濡れ、お

そい春のあのうっとうしいほどの芳香さえ放ちはじめていた。

猛は会社で同僚にひやかされたりからかわれたりするのを何とも思わなかった。そして「早く帰りたいのをムリすんなよ」などとからかいながら、結婚前と変わりなくよくバーをつきあい、マージャンの相手になった。

猛とて早く新妻の待つ家に帰りたくないわけではなかった。しかし、会社のひけるのもどかしく——というほどの気持もない。遅く帰ったら帰ったで、また別の楽しみがあるのだ。マージャンのバイを打ちながら、その胸の内ポケットに、今朝出勤する時、妻の腰から剥いできたパンティが、あるかなきかのぬくもりを彼の全身に伝えていることを、他の三人が、どうして感じ取ることができたろう？

「パンティを絶対はいちやいけなうと言ってあるだろう」

「でも……」

剥ぎ取られたばかりのピンクの愛らしいパンティを眼の前に突きつけられて、淑子は真っ赤になつてうなだれた。

「ばくが傍に居る時だけじゃだめだ。いない

ときでも、下に何もつけていちゃいけない」(でも、もう十二月、とても冷えるんですのよ……)

心の中で怨じて口には出さず、淑子は両手で顔を覆う。

猛は、その手首を掴むと、顔から引きはがし、そのまま背中からねじりあげるようにして妻の体を抱き寄せる。豊かな胸が押しつぶされる感触が猛の体を熱くし、猛は、眼の前に捧げ出された唇を吸った。

マージャンの猥雑な雰囲気の中にありながら、猛は妻から剥ぎ取ったパンティのおかげで、ひとりすがすがしい気分ひたっていることができたのだ。

猛がどんなに遅く帰っても、淑子はきちんと起きて待っている。皮肉ひとついわない。皮肉さえ言わないことが、無言の非難になっている場合もあるが、淑子の場合にはむしろそんなのではない。

猛は、普通に帰宅したような顔をしている。淑子もあたりまえの顔をして出迎える。

「外は寒かったでしょう」

「うん——だが、きみの腰ほど寒くはなかったよ」

これが猛のもらす愛情の言葉なのだった。



部屋の中は暖かい。ガストロブが、なつかしい炎の色を見せて、主人の帰宅を歓迎している。淑子は結婚して、まだ一カ月かそこらしかたっていないのに、もう十年も猛と生活を共にしたような家庭の切りもりぶりだった。それが努力してやっているというふうに見えない所に、淑子の夫に対する愛のあかしがあった。

猛は夜食の茶づけをかきこみながら、食卓をへだてて坐っている、きちんとした和服姿の妻をしげしげと見る。

「美しいよ、淑子」

満ち足りた声で言った。

「いやですわ」

「きのうまでとは違った髪形だね。ゆうべは少しあばれ過ぎたからな」

淑子の頬の紅が更に深まる。

夫ひとりのかせぎによる家計の苦しさを思っ、はや淑子は節約を決意している。しかし、それを夫に節約と感じさせない努力を忘れなかった。夫のほめてくれた髪形も、自分で一時間も鏡台に向かって工夫したものなのだ。それをほめられて——少なくとも認められて、淑子はもう身も世もなく幸福のバラ色のもやの中に包まれた感じだった。

これが日常だった。

猛が淑子を妻にめとった真の理由、淑子を調教して自分の思い通りの女に仕上げることは、ほとんどその目的を、喪失したかに見える。それほど猛は満ち足りていた。妻のわずかな粗相を口実にして、妻を責めるなどというみみっちい事は思いも浮かばなくなった。

かといって、淑子が猛の共犯者となることを認めたわけでもない。そのような気配には猛は敏感なのだ。そんなのではなくて、ただ自由なのだった。自由無碍——このような状態ほど夫婦にあって望ましいものが他にあるだろうか？

そんなわけで、猛は淑子をあまり縛らなくなっていた。プレイに耽溺することによって生活自体を破壊することをおそれたということもある。だがなによりも、縛らなくても、淑子を自分のものとして所有しえたという自信が、猛をプレイから遠ざけたのだった。

猛が淑子の中に見た、死んだ母の面影——冷たく猛を拒否してそのまま帰らなかった母の冷えた肌を、淑子の中に再び生きたものとしてとらえることができたのだった。

猛のプレイへの欲求は突発的だった。翌日の出勤にさしつかえないように、プレイは土曜日の夜に限る——といったせせこましいことにこだわってはいない。型にはめることがマンネリズムへの道を作り、マンネリズムはプレイ本来の意義を奪ってしまうことを、猛は知っているのだ。それにタフでもあった。

猛が淑子をおそうのは、淑子が猛を少しも意識していない時が多い。キッチンで夕食の仕度をしているとき、雑誌に読みふけりながらなにげなく体をずらせたようなとき、家庭の雑用で猛の前をなにげなくゆききしていると、きなど、そんな妻の無意識な肉体の瞬間の動きの中に、猛は眼を見張るような情感の刺戟をとらえる。そして、その一瞬を永遠にしようとするかのように、猛は淑子におそいかかり、組み伏せ、いやおうなしに縛りあげてしまふのだ。愛用の絹紐はそのため、常に彼のポケットの中にしのばせてあった。

そんな時ならぬ攻撃に常にさらされているという意識が、淑子の挙措を普通以上になまめかしいものにしたことは否定できない。意識がどうしても肉体の一点に集中してしまい、恥ずかしい興奮がふつふつと、そこからじみ出してくるのを止めようがないのだ。

レンジで夕食の仕度をしていると、さっきまで居間で夕刊を読んでいた筈の夫が、だしぬけに背後から羽搔いじめにおそいかかってくる。片手がすばやく襟の合わせからすると胸にしのび込んでくる。

「今日は、何のこちそうだい？」

熱い鼻息を耳元に聞くと、淑子はもうどうしようもなく膝の力が抜けてくる。

「いけませんわ、御料理がだめになってしまいます」

「これから、ぼくが料理してあげようというのさ」

たちまちそこに組み伏せられ、帯をゆるめられ、襟がゆるんでしまう。

どんなに寒くても、和服の下に洋風の下着をつけることを許されないで、襦袢もろとも着物を剥がれると、後はなまめかしい色の腰の一枚。

「ああ、ゆるして……」

両手で顔を覆って、そこに突っ伏してしまふ。ほつれ毛の乱れかかるほっそりしたうなじから、脂肪の乗ったなめらかな背肌、緋色につつまれた腰のまろみが、猛の視覚をくすぐる。時には、そんな姿が、自分の手を待っているかのように見えて、猛は、わざと突き

放す。

「今夜は、その恰好で料理してごらん」

「いや……そんな……いやですッ」

突っ伏したまま甘えるように体をゆする。

「素っ裸にしてくれなきゃいやだってのなら

お望み通りに剥いでやろうか」

「いじわるおっしやらないで……襦袢だけでも……ねえ……」

「そら、ぐずぐずしていると、鍋のものが焦げついてしまうぜ」

背後から引き起こされ、淑子はたわわな胸を抱くようにしてレンジに向かわせられる。

そして、おどおどと背をすくめながら、どうにか支度を進めていると、淑子の両手がふさがって抵抗のしようのない時をねらって、

猛の手が腰の紐に伸びてくるのだ。

進退きわまって立ちすくんだまま淑子は、最後のものがずるずると引きはがされていくのを、どうしようもない。

このようにして、一糸まとわぬ姿で夕食の

料理を強制されることも、一度や二度のことではなかった。しかも、このような前奏を伴った夕食は、そのままですむ筈もなかった。

テーブルに料理を並べ終ると、淑子は不必要になった両手を後手に縛りあげられてしま

う。その頃になると、淑子はもうめくるめくような興奮にとらわれていて、食事などほっぱり出して、そのまま夫に抱かれないという欲望でじっとしておれないくらいになっている。

だが、猛の方は淑子を後手に縛りあげ、欲望に波打っている乳房の上下を紐できつく絞めあげて、思わず淑子を呻かせるだけで、やめてしまう。そんな時の淑子の肌は全身バラ色に上気して、えもいわれぬ芳香を立ちのぼらせている。黒い瞳が夢を見るようにうるんでいる。

猛は、そんな妻の表情や姿態を見るのが好きなのだった。

「ねえ、あなた、おねがい……」

頬を真っ赤に染めて、死ぬほど恥ずかしいことを思わず口に出して求め、すぐそれと気づいて、ハッと顔をそむけてしまう妻の熱く燃えあがってしまった肌をあきずに眺める。

時にはそのまま縄尻を居間とキッチンをはだてるカーテンのレースに結びつけて、淑子を立縛りにさらしたまま夕食にかかることもあるし、傍の椅子に、両脚を割って縛りつけ、御馳走を口へ運びながら、左手を淑子の肌に遊ばせることもある。そんな時など、指で汗



もしとどな肌を下から上にこすりあげられたりでもすると、淑子はあまりの切なさと思わず声をあげて泣き出してしまふのだった。

しかし、それはまだいい方で、もっと耐えられない責めが待っていることもある。

猛の掛けた椅子の下に、あぐら縛りに床に坐らせられ、食事の間じゅう奉仕させられることがある。

「さあ、ぼくの御馳走だよ。腹いっぱいおあがり」

無造作に突きつけられて、淑子はいやおうなく口にせざるをえない。

こうして、テーブルの上では猛が二重三重の快楽にひたっているのに、テーブルの下では、淑子が、いつまでたっても満たされることのない空腹感にさいなまれて、切なく身悶え、すすり泣きながら、強いられた御馳走の咀嚼を続けなければならないのだった。そしてそんな夜にかぎって、猛の責めは手をかえ品をかえてしつように続き、あまりにも長く引き伸ばされるおあずけに気も狂わんばかりになった淑子は、こぶのある股縛りをかけられて、二度三度引きしぼられるだけで、たあはなく悲鳴をあげて、気絶してしまふのだった。

### (三)

師走もおしつまって来た或る日のこと、会社の猛から電話があった。ボーナスが出たから銀座で晩飯でもくおうというのだった。落ち合う場所として猛はホテルの名を言った。

「予約しておいたから、行けばわかる筈だ」  
電話が切れても、淑子はしばらく胸の動悸がおさまらなかつた。そのホテルは一流とはいかないまでも、かなり名の知れたホテルだったのだ。

淑子はそのホテルにふさわしいような盛装をこらした。といっても、夫の好みを知悉しているの、なるだけ地味なものを選ぶことを忘れなかつた。地味な和服と襟あしの冴えた白さの対照が、あふれるばかりな若妻のにおいを際立たせる。

ホテルの一室に案内され、いかにも名のあつるホテルらしく落ち着いた調度の中に腰をおろしても、淑子は落ち着けない。こんなことは、はじめての経験なのだった。家庭にあって夫を待つ時とは違って、途方に暮れた感じだった。

三十分ほど待って電話がかかって来た。どこかの公衆電話からでもかけているのか、街

のざわめきや自動車のクラクションの音がかすかにレシーバーを通して聞こえた。

「どうだい、部屋の感じは」

猛の声は、どこか浮き浮きしている。

「とってもすてき。あなた、いついらっしゃるの」

(部屋がすてきでも、あなたがいらっしゃらなければ淋しくて……)と心の中で言った。

「すぐ行くけれど、その前に……」

言葉がとぎれて、低い笑い声が聞こえた。

「なあに？」

「ぼくがこれから言うことを、そのまま実行するんだよ、いいね」

「ええ……でも……」

ふと胸をかすめた予感を確認するひまもなく、夫の命令が無機質な音調で耳に響いた。

「帯を解きなさい」

「え？」

「帯を解いて、着物を脱ぎなさいと言ってるんだよ」

淑子が和服であることを知りつくしているような確信に満ちた口調だった。

「でも……」

ためらいながら、淑子の指は反射的に帯じめの結び目にかかっていた。

「受話器を片手で持ったままやるんだよ」

夫の荒々しい鼻息を聞いて、淑子は全身が燃えあがるのを感じた。無意識にもらした吐息が逆に夫の方に聞えたのではないかと、淑子は総身に汗をかいた。

猛は熱した手でレシーバーを固くにぎったまま、息を殺してかすかな物音に耳をすましていた。

固い繊維のこすれる、キュッキュツという音、サラリと解ける音、荒い息づかい。

「愛しているよ、淑子」

レシーバーの振動板を打つ息が嵐のように激しくなった。それが、ああ……と、かほそい声になる。

「脱いだかい？」

「もうこれ以上は、ゆるして……」

夫の意図を知って、淑子は喘いだ。

「全部とってしまふんだよ」

猛の声も熱しきっている。

しばらくは何も聞こえず、ただ何かもそもそ身動きするような雰囲気張りつめた耳の神経に伝わってくるだけ。

「すんだ？」

「はずかしいわ……」

消え入りたげな声。

「きみの美しい全裸が、見えるような気がするよ」

「いや、おっしゃらないで……」

「キスしておくれ」

息をつめ、唇を吸うしめった音。

猛はそれに応えておいて、さも残念そうに言い出した。

「きみがぼくの言う通り裸になったことは信じているよ。だけど、確証がほしいんだ。わかるだろう」

「……」

「聴覚を通して、きみが全裸であることがわかる方法がただひとつだけある」

それから猛が言いだしたことは、聞いただけで、はずかしさに顔をおおいたくなるようなことだった。全裸でレシーバーを握っているのさえ、見る人がいなくても恥ずかしくてたまらない淑子なのに、夫の命ずることは絶え入りたい思いを更に、強制しようとするのだ。淑子は美しい全裸を真っ赤に染めて、身悶えた。

「わかったね。すぐだよ、すぐでないともた疑わしくなってくるんだ、わかるだろう」

「……」

今にも泣き出しそうな困惑しきった息づかいがしばらく続いたが、やがてそれがはたと止んだ。

猛は胸を轟かせて待った。

やがて、——あたりをはばかりうなひそやかな音が、レシーバーの奥から聞えはじめた。それは、恋人同士が熱烈な接吻をかわしている時にたてるような、仔猫がミルクをなめる時にたてるような、あるいはまた、雨のしよぼ降る夜に、人眼をしのぶ恋につかれた男が、恋しい女の聞の外に、素足に泥を踏んで訪れる時にたてる音のような——そんな音だった。

「淑子……」

猛は感きわまったように低く叫んだ。

しかし、勿論淑子の耳元を離れているレシーバーは、その声を淑子に伝えようもなく、ただ猛の耳に、喘ぐようなすすり泣くような声ならぬ声が、ひそやかに語りかけてくるだけだった。

猛がホテルのその部屋に入って見ると、淑子は全裸のままベッドに突っ伏していた。猛が入って来たのを知っても顔さえあげられず白いまるやかな尻を、すねたように左右にゆすただけだった。ベッドのすその方には着ていた着物が花のように散り敷いている。



淑子は電話を通じて、夫に命令された事を  
実行したのだった。

それを知った猛は、いとしさのあまり泣き  
たいような心持ちにさえた。淑子の裸体  
を中心にして、部屋全体が言い知れない恍惚  
に揺れ動くかに見えた。

(倫代の時は、こんなことはなかった)

猛はふるえる胸の中でつぶやいた。

猛はそのまましばらくの間、かすかな息づ  
かいを見せているベッドの上の妻の背肌を見  
つめていたが、やおら床にとぐろを巻いてい  
るしごきを手にして、近づいて行った。

なにか厳肅な儀式でも取り行うような猛の  
表情だった。

「すばらしかった。愛しているよ、淑子」

耳元でささやいておいて、顔を覆っている  
妻の手首を掴むと、背中にねじりあげた。

淑子は、グッタリと為すがままに任せてい  
る。猛は両手首を背中中で交叉させると、いと  
おしむように丹念に縛り合わせた。あまった  
縄尻を形通りに胸にまわして、乳房の上下を  
くびりあげて縄止めする。汗の引きかけた淑  
子の肌はひんやりと冷たかった。体を夫の手  
にあずけたまま、長い睫毛を伏せている。

もう一本のしごきを取って、後ろ手から首

にまわし、乳房の上下に食い込んでいる紐に  
通して引きしぼる。

淑子はかすかな呻き声をあげて、くびられ  
た乳房を突き出すようにしてのけぞると、そ  
のまま仰向けにベッドの上に倒れ込んだ。

猛はおおいかぶさるようにして更に縦の紐  
を絞りあげた。乳房が上下左右をくびられて  
奇妙な形にふくれあがり、頂点の紅が濃くな  
った。薄い肌の下で蒼い静脈が脈打っている  
のが、あらわになった。

「あ、あ、よして……」

淑子ののけぞった頭がシーツにめりこむ。  
全身が紅潮し、汗ばみはじめた肌から虹が  
吹きあがってくるようだ。

猛は口にふくみ舌先でしこりを愛撫しなが  
ら、眼は妻の身もだえる姿を凝視していた。

倫代も乳房責めに屈服した。それを再現し  
ようという意志があるわけではなかったが、  
次第に色づき熱していく白磁の肌と、くんで  
もくみつくせない豊かな胸の実りの中に、猛  
は無意識のうちに、母の懐を見出していたの  
だった。

淑子の吐息はじよじよに熱して、激しくな  
り、やがて呻きに変り、長く引き伸ばされる  
語尾はふるえてすすり泣きになった。

「淑子……淑子……」

大きな赤ん坊は、時折口を乳房から離して  
甘えるような声をあげた。その声を遠く快い  
ものに聞きながら、この母親は乳をふくませ  
たまま、赤ん坊のようにすすり泣いていた。

どれだけそうしていたか——猛はそっと胸  
から顔を離して起き上がった。さっきまでの  
赤ん坊は大人に变身していた。そこにグッタ  
リと身を投げ出したままの、さっきまでは母  
親だった女を、燃えあがったまなざしで見つ  
め、その胸元にまだ長く残っている縄尻に気  
づく、それを下の方に降ろして行った。  
母親は完全に男を待ちうける女に変わってい  
た。

「いや……もう、いや……」

膝を縮めて防ごうとするのを、無理に紐を  
後へまわし、引きしぼって置いて、後ろ手の  
所でとめる。膝からガクリと、力が脱け落ち  
る。

猛は淑子の上体をそっと膝の上に抱きあげ  
ると、頬を両手ではさむようにして正面に向  
かせ、乙女のようにういういしい羞じらいに  
染まった表情に心うばわれながら、ゆっくり  
と唇を寄せていった。

(未完)

△懸賞入選作品▽

# 「蛇性の女」

小谷和勝

## —女の刺青に魅せられて—

◇ ◇ ◇  
 いれずみし  
 刺青師の仕事場。そこは確かに、今まで私が見たことのない別の世界であった。

部屋一面に敷きつめてあるビニール・フィルムの上には、薄い布団がのべられ、そこに若い女が男枕を両手でにぎりしめ、俯伏せに裸身を晒していた。

女の背中に、のりかかるようにして手先を動かしている刺青師の顔は見えないが、その繊細な指の動きは、素人目にも鮮やかであった。

左の親指と人差指で皮膚をのばし、左の中指と人差指、そして薬指の三本に筆をはさみ

同じ左の親指を梃子にして、右手に持った刺青針をサク、サクと皮膚に刺していく。

女は、眼を閉じ、歯をくいしばって針の痛さに耐えているが、その額にはジツトリと脂汗が滲み出ている。

ときに、軽い呻きとともに、豊かな乳房が布団を擦る……。

女の背中には、二匹の青黒い蛇が、その中心あたりでからみあっていた。

そして、一匹の蛇は左肩から胸の方へ、もう一匹の蛇は右腰から下腹部の方へと各々その鎌首をのばしていた。

その不気味な二匹の蛇とは対照的に、右肩

と左の臀部には大輪の菊が見事に咲きほころびている。

この刺青の図柄の大胆さと美しさに、私は息をのむ思いがした。

こうして、針の苦しみに耐え、自分の肌を青黒い絵模様で飾ろうとする、この若い女の心に一種の妖気さえも感じるのだった。

刺青は殆んど完成であった。

彫ったあとが赤く腫れあがり、そこが熱を帯びているのが判る。

刺青師が、熱い湯で湿めたタオルを今彫ったばかりの刺青の上にのせると、思わず女は「アッ」と小さく声をあげ、美しい裸身を



ゆがめた。刺青は終わった。

私は、あまりにも異常な雰囲気<sup>ふくけい</sup>に我を忘れていた。

「さあ、終わったよ」

刺青師の声に女は始めて顔をみせた。

今までの苦痛にゆがんだその女の顔は、汗にぬれて光っていた。

私の存在に「あら」と小さく声を出して、あわててそばの着物を裸身にまとった。

「嫌ねえ、親方。私、ちっとも知らなかったわ。恥かしい」

そう云いながらも、別に恥かしい素振りも見せず、私の方をときどき盗み見しながら帯を締めた。

「なにね、私の知人の紹介で、是非、刺青を彫っているところを見せてほしいと頼まれたもんでね」

刺青師は苦笑しながら、刺青の道具を箱に納めている。

「学生さん。わたしはあんたが、学問の研究の爲っていうんで見せてあげただけだね、刺青って見た目には美しいが、素人の人があんまり、こんなものに興味をもっちゃあいけないね。これは麻薬と同じで、この針の味を身に覚えさせたら、もう逃げきれないよ」

それを黙って聞いていた女は、嫣然<sup>えんぜん</sup>と微笑<sup>えみ</sup>を浮かべながら云った。

「あら、親方。そんな事云って大丈夫なの。

親方のおまんまの食いあげになるわよ。それに今の親方の云いかたじゃあ、こんな刺青を彫ってる私なんぞ、文字通りの毒婦<sup>どふ</sup>だね」

なる程、年の頃二十七、八のこの女も美しい顔だちではあるが、どこか生活の荒波につかれた、世の苦楽をかみわけた、どこかくずれた感じのする女ではあった。

この女が帰ったあとも、初老の刺青師は、技術的なこと、図柄のことなどをはなしてくれたが、私は刺青師の話などもはや耳には入らなかった。

あの妖しくも美しい二匹の蛇の刺青が、嫣然と微笑をうかべて去った女とともに脳裡に深く焼きついてはなれなかったのである。

# ◆ ◆ ◆

刺青の女と再会したのは、それからひと月も過ぎたころだった。

やっと、『刺青と犯罪との関連性』をテーマにした卒論を仕上げた解放感から、私は一人小さな喫茶店でコーヒーを飲みながら店のジュークボックスから流れるジャズに耳を傾けていた。ややもすれば、睨<sup>まぶた</sup>が重くなる。

「こんにちは」と呼びかける女の声に振り返ると、女が微笑して立っていた。

茶と淡緑のチェックのスーツを身にまとったこの女が、あの刺青の女とは私は気がつかなかった。

成る程、考えてみれば、女の背中の蛇の刺青にばかり夢中になって、女の顔など印象に残っているはずはないのだ。

「お忘れでしたのね」

女は悪戯<sup>あくご</sup>っぽい眼で私を見ると、

「お邪魔してもいいかしら」と私の前に腰を降した。

美容院帰りなのか、綺麗にセットされた髪から香りのいいヘアローションの匂いが私の鼻口をくすぐる。

私達は、意識していたのか、お互いに刺青の話はせず、あたりさわりのない世間話に終始した。そこで、女の名が京子であることを知った。

京子は固辞する私を夕食に誘った。

頑くなとさえ思える京子の誘いに、私達は豪奢なホテルの食堂で食事をした。次から次へと目の前に現われる豪華なメニューに面くらう私を京子は嬉しそうに眺めていた。

京子から見たら、この時の私はまるで世間

知らずの田舎者にでも見えたことだろう。

初冬の陽は落ちるのが早い。

ホテルを出ると、街はネオンが煌めいていた。鄭重に礼を述べ別れようとする私を京子は離さなかった。

このまま別れるのは淋しい。もう少し私と一緒に居るといふ京子に再び私は負けた。いや、私自身、最早京子に捨て難い微妙な感情の変化を感じていた。

私達は何処へともなく、街並木を歩き始めた。名も知らぬカクテルの味と、ホステス達の甘い囁き、ムード音楽の素晴らしさに酔いしばれた私に、京子は囁いた。

「大丈夫、心配しないで」

京子の唇が、そっと私の唇に重った。

◇ ◇ ◇

真赤な舌をペロリと出し、大きな鎌首をもたげた青黒い蛇が、ジッと鋭い冷めたい眼で私を睨んでいる。

その鋭い牙が、今にもかっと私に襲いかかりそうであった。

だが、その蛇はいつまでも、そのまま動かなかった。

いや、その蛇は私を狙っていたのではなかったのだ。

その鋭く冷たい蛇の眼の視線は、桜んぼうのように可愛い女の乳首を狙っているのだ。

「危ない」

思わず私は、右手でその蛇をはらいのけようとした。

「痛い」

蛇が叫んだ、と思った。だが、それは錯覚だったのだ。

「どうしたの」

京子の声だった。

「痛かったわ。せっかく眠っているのに急に私の乳房を打つんですもの」

京子は甘ったるい声で私に云った。

私は思い出した。飲みつぶれて、京子に介抱されて……それから……。

私はベッドの中で京子と並んでいるのだ。

京子は満ち足りた表情で私の胸に顔を埋める。京子の唇が私の胸をくすぐる。

京子は肌に何にもつけていなかった。

私がさっき夢うつつで見た青黒い蛇は、京子の胸に彫られた刺青だったのだ。

右肩から、その胴体をくねらせながら胸を這い右乳房の上に鎌首をもたげ、その赤い舌は今にも京子の桜んぼうのような乳首を狙っていた。

右乳房には、目にも鮮やかな真紅のバラが一輪彫ってある。

そして又、右の腰からは別の青黒い蛇が這いだし、臍の下を抜け女のそこを狙うかのように鋭い眼を光らせていた。

「驚いた？」

京子は呆然としている私の首に両手をまきつけると、その体を近づけてきた。

「駄目だ」

私は汚たないものでも追い払うように京子をつきはなすとベッドを飛び下りた。

一瞬、大きな瞳を見開き、しばらく声も出なかった京子は突然、「アハハハ……」と大声で笑いこぼれた。

ベッドの上にあぐらをかき、体中で笑う京子の姿は蛇性の女であった。

京子が体をゆるする度に、二匹の蛇も真赤な舌をうごめかしている。

「駄目よ。もう駄目よ。遅いのよ。あなたの体をごらんさない」

京子は笑いながら言った。但し、その眼は濡れていた。私は愕然となった。私自身も全裸にされていたのだ。それに、私の胸から下腹にかけては巨大な女郎蜘蛛の刺青が鮮やかに彫られているではないか。



「ホホホ……。驚いたでしょう。あなたが正体不明に眠っている間に細工したのよ。あなたの体にいるその女郎蜘蛛は、私の化身なのよ。その女郎蜘蛛は、もうあなたから一生離れないわ。ホホホ……」

京子の妖しいまでに美しい裸身が再び波うった。

私は無我夢中で周囲に散らばっている自分の衣類を手づかみにすると、京子の部屋を飛び出した。

京子が憎かった。とともに、あのような蛇性の女の誘惑に負けた自分自身が、たまらなく恨めしかった。

「バカ、バカ」

思わず口走る自嘲の言葉と共にとめどもなく涙があふれた。

そんな私をあざ笑うかのように、京子の高い笑い声がいつまでも私を追ってきた。

◇ ◇ ◇

京子の手によって彫られた女郎蜘蛛の刺青は、これからの私の人生を暗示しているかのようであった。

私のこの奇妙な刺青を、人はどう見るだろう。考えるだけでも嫌だった。

改めて京子への憎しみがよみがえった。

憎んでも憎んでも憎みたりなかった。

勿論、京子の甘い誘惑にのった私も馬鹿だった。だが、最早返らぬ恨みごとだった。

時がたつにつれ幾らかでも心の動揺がやすまると一時も早く、京子の肉体に汚された私の心を流しながしたくなって、下宿の風呂に浸ることにした。

湯の中に青々と浮びあがる女郎蜘蛛が、私をあざ笑うかようだった。

だが、不思議なことに、その女郎蜘蛛が湯につかっている間に少しずつ消えていくような気がした。

驚いたことに、今まで刺青とばかり思い込んでいた女郎蜘蛛は実は絵具で描かれた絵だったのだ。

京子は、眠り続けていた私への悪戯から絵具で私の胸に女郎蜘蛛の絵を描いたにすぎなかったのだ。

突然の出来事に驚天した私は、その事に気付く心の余裕もなかったのだ。

私は自分の短気さと迂闊さに思わず笑い出してしまった。

思い切り風呂の中で笑ってしまうと、不思議な事に、あれほど憎んでいた京子に対する憎悪が次第に薄れ、かえって恋慕の情がつの

ってくるのをどうすることもできなかった。

あの桜んぼうのような京子の乳首を、そして豊かな草むらを狙う蛇の刺青が、私の脳裡に判然と浮かびあがってきた。

今一度、京子にあいたかった。

いや、京子の刺青をみたかったのだ。

◇ ◇ ◇

矢もたてもたまらなかった。

私は、おぼろな記憶を辿りながら、やっと探しだした、京子のマンションの呼鈴を押した。私の手はかすかに震えていた。

薄いピンクのネグリジエのままの京子は、私をみると一瞬、ドアを閉じて私を拒んだ。

「開けてください。開けて……」

私は恥も外聞もなかった。ドアを叩き続けた。何度目かのノックでドアが開かれた。

「おはいりなさい」

京子はやや青ざめた表情で云った。

京子の部屋は豪華な調度品で整えられ、私の下宿など足もとにも及ばなかった。それに何となく部屋全体が艶めかしかった。

あの時は気持の動揺が激しかっただけに、今のように部屋を観察する余裕もなかった。

カーテンの向うは京子の寝室であろう。洒落たベッドの一部が私の目についた。

あの時の事を憶いだして、私の身体は熱くなった。

しばらくは、私も京子も意識して黙して相対した。柔かいソファの感触とは対照的にあたりには重苦しい雰囲気漂っていた。

「何故、きたの？」

耐えかねたように京子が口をひらいた。

「会いたくなったんです」

私は云った。

「何故」

京子は強い調子で云った。

何故、と聞かれて私は躊躇した。あなたが好きです。と云ってしまえばそれまでだが、その言葉の前に大きな影が立ちはだかった。この影は私にいった。お前はK大卒というエリート階級を捨ててまで蛇性の女の餌食になりたいのか、と。よせ、今なら間にあう。思いきってその女に背を向けるんだ。考えなおすんだ。大きな影は私の悪魔と激しく葛藤した。その時、私は影の中に蛇の眼をみた。

「あなたが好きだから……」

蛇の眼はキラリと光った。

私はとうとう云ってしまった。

私の頭の中で、未来への偶像ががらりと激しい音を響かせてくずれ落ちた。

私は未来を捨てたのだ。

但し、私の心は不思議に冷静だった。

「だめよ。そんな事」

京子は、真剣な表情であった。その瞳には涙が光っていた。

「あなたには、私という女の正体が判らないのよ。女だてらに身体中に刺青を彫って喜んでいるアバズレなのよ。それに……」

京子は、両手で激しく私の肩をゆすりながら私を思いなおらせようとした。

だが、京子がそうすればするほど、私の京子への思慕はいよいよ燃えていった。

「だめです。それ以上云わないでください。あなたが何とおっしゃっても僕は好きなんです。あなたが、あの日、あれ程まで私を誘ってくださったのは、あなたにも僕に幾らかの好意があったからなのでしょう」

「いいえ、違うわ。気どらないでよ。わたしね、あなたみたいなボンボン学生を誘惑して遊んだら面白いと思っただけよ」

あまりの意外な京子の返事に、私は自分の耳をうたがった。

「そんな、そんな」

私は狼狽した。と同時に自分の愚劣さにたまらなく嫌気がさした。私はもてあそばれて

いたのだ。

京子という蛇性の女の一夜の快楽の為の道具に利用されていたにすぎなかったのだ。

私は京子を正視することができなかった。力なくソファから立上ると、京子に背を向けて、ドアのノブに手をかけた。

「バカ、バカ」

突然、京子が激しく私のうしろから身体をなげかけてきた。

「ウソ、ウソよ。好きよ。私もあなたが大好きよ。親方の仕事場であなたをみたときから好きだったのよ」

泣きながら語る、京子の豊かな頬に二筋三筋、涙が跡をひいていた。

私は思わず京子を抱きしめた。

「もうどうなってもいい。僕はあなたと死ぬまで一緒です」

京子の唇に落ちる涙が、私の唇に塩からかった。京子のピンクのネグリジェが床に落ちた。京子の左肩に彫られている蛇の刺青の鱗が青々と鮮かだった。

◆ ◆ ◆

私と京子との逢瀬が続いた。

雪が溶け梅がほろび、桜の花が散った。そんなある日、京子は珍らしく真剣な表情で





私に言った。

「このあいだ、親方の処に外人の女の子が来て、自分の恋人のイニシャルを彫ってくれて頼んだそうよ。その彫る場所が変わっている

の。人差指の内側にですって、恋人以外には見せたくないからでしょうね。その女の子は必死に頼んだそうだけど親方はことわったんです」

そこまで一気に話すと、京子はしばらく何か思案している様子であった。だが、まもなく決心したように私に言った。

「私も彫りたいの。あなたのイニシャルを」

私は、京子の話や刺青師の仕事場を見たりして、ある程度の刺青を彫ることには自信らしきものをもっていた。

但し、京子の口から、それを頼まれるとは予想してはいなかった。

だが、京子との爛れた情事だけが現在の私の生活の総てである以上、私に京子の頼みをことわる勇気もなかった。

「彫ってやろうか」

この頃では、最早、私には学生らしい意識は残っていなかった。

いや、それよりも、京子の肌に私の手で刺青を彫るという、現実の問題の方が、もっと意義があるように思えるのであった。

下手でもいい、京子が望むのなら、私の愛の刻印を京子の肌深く残してやるのだ。

私は、四、五本の絹針を糸で束にした簡単な刺青針と墨汁を用意した。

「着ているものを全部脱げよ」

私の命令に、京子はちょっと驚いたようだったが黙って脱いだ。

京子の美しい裸身が、私の目の前に大きくはだけた。

「どうするの」

いくらか不安気な京子の言葉に、私はやさしく微笑をかえした。

「僕を信じてくれるね」

京子は小さくうなずいた。

私は、どうせ自分のイニシャルを京子の肌に彫るのであれば、指の内側よりもっと神秘なところにしたかったと思った。

私は京子の裸身を抱きかかえると、軽く京子の唇に接吻した。

京子は総てを私にまかせきった様子で眼を閉じている。

京子をベッドに横たえようと、私は京子の両手をベッドの両脚にロープで縛った。

思わず京子は「何をするの」と叫んだが、両手が動かぬ悲しさ、まもなくあきらめたようにしずかになった。

次に私は京子の両肢を素早くベッドの両脚

に、ロープで縛ってしまった。京子はベッドの上で大の字になり完全に身動きできぬ裸身を美しくさらした。

「僕の愛の印を、京子さんの一番大切な処に彫りたいんだ。許してくれるね」

私は京子の唇に、そっと接吻しながらささやいた。

京子の閉じられた瞳に涙があふれた。

冷たく光る剃刀をあてると、京子の身体がピクッと痙攣した。

私は傷でもつけたら大変と、慎重に剃刀を動かした。

そのあとには、青々とした地肌があらわれた。そこは予想以上に広がった。

私は、そこに私の愛の刻印を彫るのだ。インクで、そこに下描きするとき、「くすぐったいわ」と京子は弱々しく笑った。

但し、その笑いもつかの間であった。

墨汁をふくませた刺青針を、一思いに刺しこんだ。

「ウッ」と京子は呻めいた。

それもそのはずである。京子が今まで彫ってきた肌の部分のどこよりも、神経が敏感なところに針を刺すのだから……。

だが、京子はよく頑張った。苦しそうに齒

をくいしばり、額には汗をにじませ身体をよじらせながら我慢した。

私の額もジットリと汗ばんできた。

サク、サクと刺し込む針の音が、京子の呻めきと重なり息づまるような重苦しい雰囲気周囲に漂った。素人の私の針は、一層痛さがつのるはずである。

京子の腹や、乳房の蛇の刺青までもが、私の針の痛さに耐えかねるのか、汗ばんだ私の目には、それがもだえているようにさえ見える。

彫った跡が、みるみる、みみず腫れのように腫れてきた。

私の額の汗が京子の腹にポトリと落ちる。

「頑張れ。京子」

思わず私は口走った。

◇ ◇ ◇

「終わったよ、京子。終わったよ」

最後の針を刺し終ると、私は思わず京子の裸身を抱きしめた。

だが、京子は死んだようにぐったりしたまま、私の感激に応えてはくれなかった。

小高い神秘の丘には、青々と鮮やかに、私のイニシアルが浮かびあがっていた。

私は、その上に、そっと唇をよせた。

私は、再び力一杯京子を抱きしめた。そして、首筋にも、肩にも、乳房にも、腹にも、ところかまわず接吻した。だが、蛇の刺青に唇をよせようとしたとき、私は、ドキリとした。

その蛇の眼がキラリと光ったのだ。いや、それは私の幻想だったのかもしれない。

しかし、それが幻想だと思って私も自分は背筋が冷めたくなるのを感じた。

この刺青の蛇は私に嫉妬しているのかもしれない。

京子を横どりした私が憎いのだろうか。

「ああ、終わったのね。これで私は全部あなたのものなのね。うれしい！」

感極まったようすすり泣きに似た京子の声に、私は我に返ることができた。

京子は両手をひろげて私を求めた。

だが、突然。

京子は恐怖の形相すさまじく大きな瞳を開いたまま、あらぬ方を見つめた。

「どうした」

私は言った。と同時に私の後頭部に強い衝撃がきた。

「キャッ」と悲鳴をあげた京子の声が、かすかに私の耳に聞こえたが、それも次第に私の



記憶から薄れていった。

◇ ◇ ◇

気がつく、私は後手に堅く、縛られていた。まだ後頭部が焼けるように痛い。

「野郎。気がつきやがったな」

ドスのきいた声に驚くと、上半身裸になった屈強な中年の男が憎々しげな眼で私を見下していた。

あさ黒い肌に文字通り身体一杯の刺青が、その中年の男の素性をものがたっていた。

「おい若造。よくも俺のスケに手を出しやがったな。お礼はたっぷりさせてもらうぜ」

ニヤリと笑うその男の凄惨な形相に、私は縮みあがった。

「ムム……」

妙な声に、私は改めておずおずと部屋を見渡した。

「アッ」

思わず私は声をあげた。

全裸の京子が、天井から逆さに吊り下げられているではないか。

すでに長い間、そのままになっていられしく、顔面は真赤に充血して、ところどころの皮膚が破れて血がにじみでている。

「ダメ、その人に……罪はないんです……許

して……その人を……」

とぎれとぎれに訴える京子の眼は、私にそそがれたままだった。

「だまれ。売女め。やっとムシヨから帰ってきたら、こんな若造と出来やがって。俺はな

こんな事の為に、わざわざ大金をはたいて、お前の身体に刺青を彫らせたんじゃないんだ。おまけに、こんな処に、変な文字まで彫りやがって」

嫉妬にかられた男は、再び京子を責めはじめた。皮のバンドでパシッパシッと京子の肌を打つたびに京子は裸身をのけぞらせた。しかし、私には京子を救う事も勇気づける事もできなかった。

遂に京子は失神した。

口からよだれをたらして、京子はぐったりと両手を床上にたらし、動かなかった。

「畜生」

男はやっと京子を責めることをやめると今度は私にその怒りを向けてきた。

「若造。覚悟はできているだろうな。お前の指を一本頂くぜ」

いつの間に用意したのか、男は短刀を手に持っている。

殺される。私は思わず縛られたままの姿勢

でドアの方へ逃げようとした。

だが、無駄な抵抗だった。

素早く動く男の手から最早脱けでる術はないのだ。

「やめて……」

京子が気がついたのか、悲しく叫び声が聞えた。

「フン、命までとろうってんじゃない、こんな若造一人の命などほしくはねえ。ただ、こいつの小指を一本貰うだけよ」

「やめて……やめないと、私、舌をかむ」  
この京子の一言に、さすがの男も手を止めた。

「畜生。お前に死なれたら、もともともねえからな」

口惜しそうに舌をならして男は私から離れた。

「お前がそんなに頼むのなら、この若造はこのままにしておいてやらあ。だがな、お京、お前をこのままにしちゃあ、おかねえぜ」

男は何を考えついたのか、不気味な笑いをみせた。

「いけない。京子さんをそれ以上責めないでくれ。僕の指を……」

私は叫んだ。

私の最後の勇気だった。

京子を、これ以上苦しめたくはなかった。

京子の為なら私の小指一本位失くしてもいいと思った。

「さて、どちらにするかな」

男は、ニヤリと笑いながら私と京子を交互に見くらべていた。

私と京子は最早、蛇に睨まれた、蛙であつた。

「いけない……あなたは今からが……大切な  
のよ……私なんか……もういいの」

京子は吊り下げられたまま、小さく首を横  
にふった。

もう流れる涙もないのか、その表情にはあ  
きらめにも似た感じさえあらわれていた。

「よし、きめた」

男は決心したように、京子の裸身を無造作  
に抱えるといましめを解いた。

京子の両足首は、すっかり血の気がなくな  
り、縄目がくつきりと肌に残っていた。

男は、軽々と京子の裸身をベッドに運ぶと  
驚いたことに、さっき私が使った刺青針を手  
にもった。

京子は、男のなすがままだった。

もう、男に抵抗する気力さえも残ってはい

なかった。

京子の左乳房の真紅のパラの刺青が哀れで  
あった。

男は、京子の両股に顔を埋めるようにして  
刺青を彫りはじめた。

男が、どのような図柄を京子の肌に彫って  
いるのか私には判らなかつた。

京子の苦し気な表情と、うめき声が私には  
耐えられなかつた。

どれ位の時がすぎたのか、私には判らなか  
つた。男の長い刺青がやっと終つた。

男は、私を見てニヤリと笑つた。

「立て、お京」

男は、京子に命じたが、京子に自力で立て  
る力はなかつた。

男は、「チェッ」と舌うちすると、いらだ  
たし気に京子に手をかした。

私には京子の哀れな姿を正視することがで  
きなかつた。

「アーッ」

京子の悲痛な声に、私はハッとしたり。

京子は両手で顔をおおっていた。

私は、おそるおそる京子の下半身に眼を向  
けた。

思わず、私は眼を閉じた。

あまりにも残酷であつた。

これ以上の卑劣な復讐はないであろう。

京子の両股には青の色も鮮やかに巨大な男  
根と、女陰が各々彫られているではないか。  
私は叫んだ。

「鬼だ。あなたは鬼のような人だ」

男は、不気味な微笑を浮かべて立つた。

「何とでもほざけ、ああ、俺は鬼だよ。蛇だ  
よ。このスケの身体は二匹の蛇は、俺の化身  
だ。この二匹の蛇は俺のかわりにいつも、こ  
のお京を監視しているはずだった。だが、お  
京は俺を裏切った。だから、二度と俺以外の  
男の前で身体をみせられねえように、今、こ  
うして素晴らしいお守りを彫ってやったのさ。  
ハッハハ……」

男は狂気のように笑いだした。

京子は、うつろな眼で私をみつめていた。

京子の、乳房と、下腹部の蛇の刺青が、そ  
の白い肌に美しかった。

「京子」

私は心の中で空しく叫んだ。

(完)



## 責め演劇見てある記

横 溝 仁



(悪のもだえ)

## 一、続拷問、日本残酷史

カジバシ座の一月公演、『拷問』に引き続

き、二月は『日本残酷史』、三月には『続拷問』が上演中です。これは中国の奇書『金瓶梅』をアレンジしたもので西門慶を廻る女達

の葛藤を筋書に、お色気あり、残酷シーンありの舞台は最近の週刊新潮のグラビアに採り上げられています。劇団『赤と黒』というこのグループはOP映画の女優を中心に結成されていて、なかなか美人も多く、真面目な芝居ぶりは好感が持て、ファンも多い。

正月公演の拷問場面も責められる演技が真剣で好評でしたが『拷問金瓶梅』も多数の観客を集めていました。先の切支丹物とがらり趣好を変え、昔の中国が舞台なので、原色極彩色の装置をバックに、お目当ての拷問シーンも鞭打が二つ、枷を嵌めた女の引き廻し、お尻の平手打ち、更に妊婦の腹裂き迄登場します。女の悲鳴で幕が上ると、第二夫人金蓮が小間使いを膝に腹這いに乗せ、下半身を剥き出しにした娘の臀部を平手で叩き、折檻しています。第三夫人になる女の美貌を口にしたせいでした。

次は西門慶に怨みを持つ娘が男装して庭内に忍び込み、下男に捕えられ主人の前で責められる場面で、その責められる女優が週刊誌に紹介された十九才のお嬢さんで白川和子という人です。「何故この邸に侵入した！ 白状せい」と卓子に俯伏せにされ、手足を縛られ薄汚れた上衣を捲り上げ、ダブダブのズボ

ンを、お尻の上迄引き下ろすと粗末な男物の衣服の下から白い背中が丸出しになります。ここで鞭で打たれ盛大な悲鳴と絶叫を迸らせます。

その発声もなかなか上手で真に迫っています。少年が女であることに気づいた主人は、卓から降ろすと、下男に上衣を脱がせよと命じ、剥いだ下からふっくり盛り上る胸の隆起が現れると下男は始めて女であることに気がつきニヤニヤと好色な笑いを浮かべるのでした。「枷を嵌めよ！」といよいよ枷責めの始まりです。平板に穴をあけた足枷、手枷、首枷を装着した惨めな姿で立たされます。

「ふっふっ、何とも不様な恰好じやな、よしその哀れな姿を皆の者に見せてやるが良い」均整のとれた肢体で、ふっくり膨む胸とくびれた胴、その引き締った肉体を大胆に露出し、くの字に体を屈め羞恥に悶える様子も見事なもので、お脛の下迄裸のまま舞台を引き廻されるシーンは、下手なストリップなど及ばぬエロチックな見ものと言えます。その後で例のグラビアの場面になり焼印を額に押しつけられるのです。

劇の圧巻は、この枷責めで妊婦の腹裂きもただドギツイだけで感銘も薄く竜頭蛇尾の尻

すばみでした。都心という場所柄か観客のほとんどがホワイトカラー族で真剣な顔で舞台に見入っていました。

この金瓶梅の前に日本残酷史を上演しているのですが、『赤と黒』でなく『ブルーキャッツ』とかいう劇団でした。題名とは関係の無い戦争中の大陸特務機関と中国スパイとの闘争を芝居にしたもので、女スパイの拷問場面が二個所程挿入されていました。二人の美人スパイを捕え、裸体にして股と股を組み合せ、両端から女の足を引っ張る変な責めと、いま一つは明らかに往年のOP名画『0才の女』からアイデアを借用したと思える女スパイの飼育法といったもので、ベッドの脚に腰縄を繋がれた裸体の女スパイは、食べ物も、水も与えられず、目の前に立つ男に、「水、水」と哀願します。

ムッチリと肉づきの良い女優でしたが、パンティー一枚の裸身を犬のように這いずり男の足下に平伏して水を乞うのです。しかし無情な男は女スパイの腰縄を曳いて牝犬の真似をさせ、床に点々と水を撒いてゆきます。この辺がなかなかの刺激場面で、足蹴にされ、鞭で打たれたりする度に女スパイは舞台を駆け廻り、白い体が舞台の汚れを吸って薄黒く汚

れてゆくのが変に生々しい感じでした。

この種のS演劇が受けるから上演されるのだと思うのですが、カジバシ座が特異な存在で多くのファンを集めているのは喜ばしいことです。

## 二、浅草、江東周辺

浅草六区（この名称も今は無くなった）のストリップ常設館ロック座も数々のS芝居やショーを上演しています。戦後間もない昭和二十三、四年頃、新宿帝都座五階劇場（現日活映画劇場）やこのロック座で空気座の『肉体の門』が馬鹿当りに当たっていました。有島一郎、堺駿二、田中実（田崎潤）、左卜全等が加入した空気座も解散寸前に追い込まれていましたが、この『肉体の門』で息を吹き返しました。真紅の長襦袢一枚で柱に立ち縛りにされ、パン助達から皮バンドで叩かれ、ひいひいと悲鳴を上げて身悶えたお町は、『バス通り裏』で知られる露原千草でした。ボルネオマヤの宙吊りシーンと共に有名なその場面は、今でも想い出されます。

その後も『続肉体の門』『火あぶり』『大陸暴行列車』等々思い出すままに列記しましたが、いずれも名作だったと思います。『火





## 「女犯の掟」

あぶり』は若くして死んだ異才鈴木泉三郎の作品で晴雨翁をモデルに書かれたというもので沢村いさ雄が晴雨に扮して出演していました。これ等の舞台の思い出は沢山あって、池袋の『アバンギャルト』のサジズムショーや、朱里みさをのショー（奴隷市場の女奴隷その他）浅草百万弗劇場の晴雨演出のもの、これ等はいずれも十年から十五年も昔のものですが、最近の『マリアの首』の渡辺美佐子

のリンチ場面や、新橋演舞場の武智鉄二演出による『青山播磨』のお菊惨殺の場、これは長谷川季子が半裸姿で血糊をべっとり使って責め殺されるシーンが凄かった。村山知義の『山の民』の拷問、ETC、は別の機会に書いてみたいと思います。

さて話を元に戻してロック座が最近、珍妙なアイデアでお客を悦ばせた？ ことがありました。ストリップショーの一景ですが、ス

トリッパーが扱帯を持って踊り、舞台から客席の通路に降りて、客に扱帯を渡し両腕を背中に組んで「ねえ、縛って下さいな」と流し

目で頼むのです。浅草の客は、威勢がいいから、なんののかと踊り子を冷やかしながら、不器用な手つきで扱帯を女の体に巻きつけてゆくのです。後手に縛られたまま舞台で一曲踊りながら別の客を上げて縄尻を曳かせるの

ですが、客も照れてしまっているように振舞うことも出来ぬようでした。

盛り場から場末にゆくと、時たま掘出しものに当ることが間々あるものです。縛られた女の写真を看板ビラに刷り込み、八変態実験劇場、体力の限界に挑むVと思わせぶりな広告を発見したのは京成押上駅の近くでした。

普通は特出しストリップと抱き込みで上演されるのですが、これは珍しい映画との連鎖劇でした。姦通した女房を発見して亭主が責める場面が十六ミリのカラーで映写されました。海の底で写したような不鮮明なフィルムで、逆海老型に手と足を一つに束ねて縛られたスリッパ姿の女が責められる様が薄ぼけてみえます。

その十六ミリが終ると舞台は二人の女が抱き合っているレスピアンショーでした。すると片方の年上の女が、若い女を苛め始めるのです。「あんたの体は、男の匂いがするようだよ」男に抱かれたのだらうと、責めるわけです。狭い小屋に客が十数人、寒そうに縮まって見えています。うすら寒い雰囲気だ入口で売っている、おでんの匂いがプーンと客席に漂って来ました。舞台も小さくて客の鼻先に女優がいるのです。中央にベッドが置かれてい

ます。

若い女はネグリジェを脱がされ、最前の映画同様に逆海老の型で体を逆に反らして手足を一つに縛られます。入りの悪い客席に向って若い女体の発散する熱気が迸るようです。

ムッチリ盛り上る胸の膨みの頂点に実る淡紅色の突起が、手を延せば届く位に近々と迫っています。年上の女は縛り上げた娘の髪の毛を引き攪み、ベッドの下に転げ落してしまつたのです。ドスツと鈍い音と共に、白い大柄な女体が床に転げる様子は、芝居を通り越した真実味に溢れています。

苦しうに眉を寄せ、呻く声も、演技の中なのでしょうか。「白状おしッ、男が出来たんだね」仰向けに転がされたグラマーな女体に年上の女のハイヒールが乗せられ、ぐっと体重を掛けると苦痛の悲鳴を上げ、のたうち廻るのです。靴の爪先の下で、お腹の肉が凹みをみせ、演技以上の迫力が、ひしひしと観客に伝ってきました。

次には小道具の短刀を持って、娘の体を所構わずチクチクと刺すのです。先端は丸くなくて居て、肌を傷つける心配は、無いのですが、力を入れて押しつけると、切先が肉に埋まって、その痕が紅く変色しているのが、歴然

と判ります。体のあちこちに点々と紅色の斑点を印された娘は、息もたえだえに呻き、苦しみますが、どうしても男が出来たと白状しません。「ふん、強情な娘だよ。そんなに痛い目がみたいのかい、今度は、もっと良い声で鳴かせて上げるからね」年上の女は、赤い洗濯挟みを娘の目の前に撒き散らしました。

この辺が場末の小屋の面白い所で、かなり大胆な演出が続きます。舞台でこんな責めを見せるのは始めての事で、興奮を禁じ得ませんでした。恐らくバネを或る程度、痛くないように加減してあるのだと思いますが、それでも肌を噛んで離れない位ですから、かなりな力は残っているわけです。それを両乳首に挟まれ、娘の絶叫が狭い小屋に響き渡るのです。

「良い勲章だろう。どうだい、まだ言いたくないのかねえ」腕から脇腹、お臍の両脇、更に太腿にも、紅い洗濯挟みが、ぶら下った異様な光景は痛々しくも、妖美な眺めで、観客は酔ったように舞台に吸いつけられているのです。娘の足の縄を解き、その縄を咽喉に巻きつけ、立ち上がらせ天井のロープに繋がれると、もう哀れな娘はその責められる全身を観客の前に晒したまま坐ることも出来ず

に、がっくりと額を肩先に埋めて佇立するだけでした。このショーは『変態実験劇場、レスピアンショー』という名称で押上の唱和ミュージックや本木セントラルなどで上演されました。

ごく最近の都内で見た劇場を書いて参りましたが、過去には、色々なS芝居、Sショーを見てきました。伝説的にさえなってしまう浅草百万弗劇場の伊藤晴雨演出に依る『雪責地獄之生娘』『火責、水責、大女』等々や晴雨翁の画と写真を看板に飾りつけ、道往く人々の好奇心をかきたてたものです。

又、現在、日劇ミュージックホールとして華やかなヌードフォーリーで人気のある小屋もその前身は日劇小劇場と呼ばれ、スピンド有名な朱里みさほが、舞踊団を結成し数々のSショーを上演していたのを知る人も少なくなっていました。『奴隸市場の女奴隸』『阿片窟の女達』『海賊船の女』、題名を見ただけでも、そのシーンの想像出来る舞踊劇でした。これ等は次の機会に是非書いてみたいと思っています。

最近、埼玉の北端、群馬県との境の小さな町で見た芝居は類のない責め芝居でした。母



方の実家のあるその町に所用で出掛けた時、或る芝居の看板ビラを目に止めたわけです。

小柳二三夫劇団とあり、題名が私しの六感を刺戟したのです。『遊女福岡の仇討』こんな出し物を見れば、だれでも、ピンと来る筈です。外に三尺物や、舞踊があり、泥臭い田舎芝居ですが、女優連は意外と思える位に奇麗な娘が交っていました。遊女屋福本屋佐吉の女郎虐待は、有名な話で、抱え女郎福岡が責め殺るされ、残った女達が結束して奉行に訴え、主人が捕縛されるのですが、その物語を骨子にした芝居でした。女の悲鳴と割れ竹の音、男の怒声で幕が開きます。

真紅の長襦袢一枚の遊女が松の根元に後手に縛られ、遣り手ババと、楼主佐吉に責められています。虐待に耐えかねて逃走した妹分の遊女花江の行方を追求されているのです。福岡達抱え妓が逃がしてやったのですが、知らぬ存ぜぬで通し、酷い折檻を受けているのです。感心したのは縄の掛け方です。ぴったりと、胸の上下を締めつけた縄は後手の両腕を吊るようにして縛りつけ、かなりの緊縛感を出していることです。弓の折れが胸元をこじり上げ、割れ竹が叩きつきます。本当に打ちはしませんが、突き廻す弓の折れはかな

り、強く女優の軀に刺っていることは事実です。

杓元がはだけ、丸い肩から胸の膨みが、露出し、裾も乱れ、真白い太腿が割れて覗き、観客も息を飲んで見つめていました。「どうだ。強情なあま奴」松の木から縄尻を解き、曳き立てて、弓折れで肩先を突くと、どっと前のめりに転げ伏します。下駄の足で額を踏みつけ、遣り手婆が、弓折れで裾を捲くり上げると、むっちり肥えた太腿の上迄、晒し出されました。「旦那、ひっひっひっ、牝の折檻は素ッ裸に剥いてからと、相場が決ってますよ」福岡は、呻き悶えながら舞台の中央に転げ伏しました。

倒錯した甘美な魅惑に、どの人達も静まり返って舞台上で責められる一人の遊女を見つめています。責め役の男も、責められる女も、汗を流しての熱演でした。長襦袢を剥がされ改めて素肌に縄を掛けられる時、女優は、本当に苦しうに身をよじりました。まやかしでない縄目はふっくり膨む乳房の上下を締めつけ、肉の凹凸をくっきりと刻んでいるし、双の隆起は圧迫されて、ぷっくりと飛び出してみえます。

責め疲れた佐吉は、福岡の裸身を松の枝に

吊るし、腰巻の裾を左右に割って、捲り上げ腰に挟み付けて、晒しものにするのでした。

吊るした福岡の前に腰を降ろし、煙草を吸いながら、責められる女の裸身を見上げるのです。勿論、私達観客も、緊縛の女を心ゆく迄見つめることが出来るわけです。女優は本当に責められ、辱められる福岡のように、羞恥に顫るえるかのようでした。次の場では逆さ吊りが登場します。折檻部屋の内で、女の悲鳴をたっぷり聞かせ、戸を開くと、竹の棒に両膝で吊り下った福本が逆さにぶら下がっています。二、三分で暗転します。わずかな時間ですが、印象に残る名場面でした。最後は客の助けを借りて佐吉を刺し殺して幕になるのですが、こんな強烈な責め芝居を見る機会はそう度々ないと思います。

青木順子さん達のショーを見るチャンスが無く残念に思っています。関東方面に巡業の節は、なんとか誌上に発表して下さいませんか。

また、OP映画の鬼才若松孝二氏の作品、『胎児が……』の上映館を知りたいのですがどなたか御教示下さい。

# 辺<sup>へん</sup>城<sup>じょう</sup>の譜<sup>ふ</sup>

黒 湊 嬰 一

## (日本婦人部隊奮迅録)

昭和十五年八月。

支那事変が起ってから既に三年が過ぎた。前年に始まった歐洲の大戦は今年に入って急展開を見せ、六月にはパリ陥落、続いてフランスの没落となり、今やドイツの大空軍は連日ロンドンを襲撃しつつあった。一方太平洋では米国の両洋艦隊計画に対する日本の第三次第四次補充計画が大正十年頃の建艦競争を再現していた。

此の物語は山西省北部の玉陽鎮で始まる。山西省は周代の晋国に当り、日本本州の七割に匹敵する広さに一千万人が住んでいる。東の華北大平原とは太行山脈の急崖で区切ら

れ、南と西は黄河を境界と成し、北は万里の長城を以て朔北の広漠に対してゐる。省内は標高千メートルの高原で、汾水が南北に貫流し、農産と地下資源に恵まれている。

大軍閥閻錫山<sup>えんしやくざん</sup>は、山西モンロー主義を称え強大な私兵を備えて蒋介石にさえ一指も染めさせなかった。昭和十二年から十三年に亘る日本軍の山西作戦は閻錫山の勢力を崩壊させ全省の主要都市は日本軍の手に入った。省内の鉄、石炭は直ちに利用され、運域には航空隊の前進基地が設けられた。以来今日迄、大陸戦線中では比較的平穏な状況下にある。万里の長城は山西省北部で二重になってい

る。内長城と外長城の中間地帯は支那本土であると同時に、蒙古聯合自治政府の領土でもあった。関東軍が徳王を援け、東条中将の一兵团を張家口、大同、綏遠に進撃させたのは昭和十二年八月から十月にかけてであり、李守信の内蒙軍がこれに協力した。その後、大共に司令部を置く駐蒙軍が編成されて蒙疆の警備に当たっている。

此の頃、稔田大尉は駐蒙軍第二十六師団の中隊長として玉陽鎮警備隊を指揮していた。玉陽鎮は天鎮の西北方。平綏鉄道と外長城の間にあり、山西商人が開拓した漢蒙通商の要地だった。平綏鉄道開通以来、豊鎮にその



地位を奪われたが昔は人口数万を算したと思われる。現在の住民は五千程だが、その割に大きな城壁を持っていた。

玉陽鎮は一辺千米程の方形城市である。囲壁の高さは十メートル内外。幅二メートル。大陸の城市が概して単郭なのに、此の城は珍らしく四箇の内郭を持っている。南の大きな部分は関帝廟を中心とする漢城で、山西商人の居住区、商舗街に当る。東部の小區画は旅館や馬宿の多い蒙城。西方の一部はイスラム寺院のある回城。そして北部の広大な空間は山の斜面を含む無住地で、城壁内も畠になっていた。籠城時に城外の人民を收容する予備地域か、城内の食糧を自給する土地だろう。四箇の内郭は中央の一点で接して四箇の内門を持ち、其処に政庁が有った。閻錫山配下の役人が居たが日本軍進駐と同時に逃亡し、今は漢人と蒙古人の土着有力者が日本軍監督下に自治を行っている。稔田大尉の中隊は市域を避け、北部の空城に兵舎を建てていた。常駐する者、三箇小隊と重機関銃一挺、若干の衛生兵及び政庁附の憲兵、合せて百余人。中隊の他の二箇小隊は長城に接近した幾つかの小邑に交替で分派されている。

八月十八日の昼頃。

稔田大尉は南門望樓に立ち、城の内外を窺望していた。

見渡す限り赤禿げた山。そして黄土の崖。

北方遙かな山嶺を縫って大蛇の如く万里の長城が走っている。変化のない平穩な景色。

併し何か異状が感じられる。

山雨来タラント欲シテ風樓ニ満ツ。と言うのか。何事かが起ろうとしている。城内の住民も動揺しているように見える。

南門の内側に楊柳の巨木があり、その幹に二人の中国婦人が立姿で縛られていた。

一人は三十才前だろう。尤も稔田大尉には中国女性の年齢を判別する能力がない。背は余り高くなく、色も浅黒い。併し豐滿な身体だった。紺の汚れた支那服を着ているが、飾って化粧したら随分美しく見えそうだ。

此の女が曳かれて来た時、政庁の下級吏員が顔色を変えた。稔田大尉が感附いて銀幣を握らせた。康克清。これが彼女の名前だそう。併し稔田大尉は信用しなかった。若し本当なら彼女は江西省万安県生れ。今年二十八才で、八路軍中央革命軍事委員会主席朱徳の妻という事になるのだが。

他の一人は二十才になっていないだろう。

瘦形で丈の高い、華北女性特有の白さと、幾

分赤味がかった頭髮を持った娘だった。当時若い中国女性が好んで作る形の断髪をしているが、その髪は崩れて顔に振り掛っている。理智的な顔。下り目尻だが大きな瞳。そして長い睫。袖の無い服から真白な腕が露れ、その腕にも胸にも縄目が喰い込んでいる。

「糧秣倉庫を狙ったのは単なる偶発事件か」

稔田大尉は門内を見下した。二人の女は楊柳に寄り添うように立っている。昨日から、ずっとあの姿勢の俛だ。既に三十時間以上曝している。相当弱っているだろうに。

この二人は野菜籠に偽装した放火具で糧秣倉庫を狙った。原始的な手製爆弾だが効力は充分と思えた。ベルグマン式拳銃と実包も押収された。会話に北京官話を用いた為、土民に疑われたのが発覚の原因だった。玉陽鎮政庁に派遣されている憲兵曹長が知識と体力の限りを尽くして拷問したが何も得られなかった。併し稔田大尉は八路に違いないと思う。

「これ程な信念を持つ者は八路だけだ」

稔田大尉は支那事変初期を板垣中将の第五師団に属し、平荆関や析口鎮で幾度か八路の強さを体験した。

「若しも本当に康克清なら」

曝して置けば餌に掛る者が現れるかもしれ

ない。南門望樓の蔭からは九六式輕機関銃が狙っている。

「八路が接近している」

玉陽鎮は戦線の遙か後方に当る筈だった。

既に宋哲元は死に、湯恩伯は南方へ奔り、閻錫山の勢力も崩壊した。併し今年に入ってから毛沢東の配下が少し宛浸透している。

「若い女でさえ、此のような事を企てる。八路は恐るべき敵だ」

女の兵隊は珍しいものではない。閻錫山も婦人部隊を持っていた。山西軍の捕虜には女の将校や下士官も居た。彼女等は看護婦や事務員ではなく、武器の操法を知る戦闘員だった。併し戦争目的を心得た者は一人も居なかった。釈放されると直ちに平凡な家庭人に戻っていった。

「そう言えば日本の婦人部隊が張家口に到着したとの事だったが」

稔田大尉の知識では慰安婦か看護婦程度しか思い出せない。

「宮内省の女官養成所を卒業した娘達で編成したと言うから慰安婦ではないようだ」

東京オリンピックを目標に作られた軍隊式の婦人集団だと聞いていた。

「見た眼には綺麗な軍服を着た少女歌劇か」

東京オリンピックが昭和十四年に返上と決定し、オペラの兵隊は存在理由を失った。今度の派遣は怖らく慰問団だろう。蒙疆が選ばれたのは治安良好と判断されたからだろう。

「併し最近は何となく異常を感じる。戦闘が突発して女達を捲き込まなければよいが」

日本軍の攻勢は昭和十三年で終末点に達したようだ。徐州会戦、漢口作戦、広東攻略迄で快進撃は終わった。南昌、南寧の諸作戦は小

地域の争奪に過ぎず、日本軍は真の意味の勝利を一度も収めていない。宜昌進攻は重慶に

大動揺を起させたが屈伏させるには至らなかった。蒋介石は未だ三百万の兵を持ち、欧米

の兵器で装備を改善しつつある。各戦線は現在彼我の勢力が均衡しているが、或は敵の大

反攻が準備されつつあるのではないか。

「塵高クシテ鋭キハ車来ル也。卑クシテ広キハ徒来ル也」

稔田大尉は南方地平遥かを眺めながら孫子の一節を思い出した。

雨の多い季節は終わった。大地は乾燥し、風は無く、黄土の微塵は僅かな人馬の動きでも埃となって舞い上る。

「古人は、いい事を言ったな」

その独言に応じる如く、天鎮の方角に当

て立ち騰る黄塵が見えた。それは急速に接近して来る。その高さと早さは孫子の言う如く車輛群が此方へ向っている事を告げていた。

× × ×

「近衛婦人部隊第一中隊第三小队第三分隊。蒲田胤子以下四十名。駐蒙軍司令部の命令に依り、弾薬、糧秣積載の輜重車十輜と共に只今到着致しました」

軍隊式の報告だが、その声は確かに女性のものだった。稔田大尉は婦人兵を前にして、戸惑いながら答礼した。「御苦労」と言った心算だったが舌が綻れた。驚嘆と言うより威圧に近い感じである。身長百六十糎を越える者が幾人も居る。年齢は二十才を中心として上下三、四才か。悉くが優れた体格の所有者だった。小麦色に陽焼けした顔。健康的な、澁刺とした態度。しかも女らしさは失われていない。一層驚く可きはその容姿だ。歌劇団と雖もこれ程の名花は集められないだろう。黄色に近い淡褐色の制服が良く似合った。幅広の革帯で腰を締め、頸は詰襟。対照的に胸部は緩やかに作ってある。胸の隆起に個人差がある為か。局部の大きさを極限迄掩蔽しようという配慮か。

陸軍の戦帽よりは幾らか天蓋の広い制帽。



これは長い髪を捲き上げる為だろう。半長靴に絞った裾。遠くからでは女とは見えない。

一様に短剣を吊り、二十五人が三八式歩兵銃を持ち、他は南部式拳銃を帯びていた。中に一人、軽機関銃を携行する者が居る。

稔田大尉は婦人部隊の装備を観察した。

銃も剣も手入れが行き届いているようだ。

併しあの軽機関銃は十一年式の旧式兵器だろう。女共に持たせるのだから軍の払下品で間に合うとしても日本内地で戦闘の真似事をして見せるなら兎も角、黄塵が吹き立つ華北に挿弾子式の故障の多いあの銃器を持ち込んで使い切れる気だろうか。

「射撃の自信はあるか。見せて貰いたいな」

稔田大尉は婦人部隊の腕を試して見たくなかった。

× × ×

婦人部隊は八人で一伍を成し、五伍四十人で一分隊を作るようだ。各伍に伍長が居て、第一伍長は分隊長を兼ねていた。

今、五人の伍長が代表として銃を把り、新しい標的の前に立っている。

分隊長の蒲田胤子。豊満な顔立ちだった。

第二伍長の霞ヶ岡瑠璃美。精悍な面と鋭い眼が特徴だった。

第三伍長の鮎川繪津子。緩やかに仕立てられた筈の制服が一杯に張り切る程の胸を持ちながら、何処か幼ない顔をしている。

第四伍長の衣笠英美代。日本人離れした体躯と容姿が際立っていた。

第五伍長の辺磐城朋子。少年と見紛う程な鹿を思わせるような身体と、大きな瞳が印象的だった。

「狙え」

稔田大尉が自分で指揮を執った。

「撃て」

五箇の銃口が一斉に白煙を吐いた。

標的が取り寄せられた。

「当るだけは当たったようだ」

余り正確ではないが、と言いかけて稔田大尉は奇異な感に捉われた。弾痕は中央に一箇と四周に正方形の頂点を成す如く四箇。見た眼には分散している。だが何となく意味有りげな幾何学的模様に見える。

——これは俺の頭文字だ——

稔田大尉は愕然とした。弾痕は鮮やかにMの字を描いていた。

× × ×

稔田大尉は考え込んでいる。

恐る可き射撃の腕だ。どの位の期間で此の

水準に達したのだろう。

併し戦場の経験は無い筈。果して実用に適するか。弾丸の飛んで来る中でも、射的場と同じ命中率を発揮出来るか。オリンピックの会場で風船を撃って見せるのとは違うのだ。

これが正規の兵士なら、成る可く弱い敵に当たって戦場経験を積ませるのだが。

「玉陽鎮に何日間滞在するか」

稔田大尉は蒲田胤子に尋ねた。

「此の中隊から分遣隊、小邑城へ出ていますね。其処へ輜重車二輛を輸送する事になっています。これは二伍十六人で充分です。往復三日として、その間だけ他の二十四人は玉陽鎮に滞在させて戴きます。任務が終わったら直ちに天鎮へ帰還致します」

小邑は玉陽鎮の西北四十軒にあり、土塁を巡らせた孤村に稔田中隊の一部が派遣されていた。

「三日間か」

若い澆刺とした婦人達を城内に留め置ける事は嬉しくはあるが困惑の種でもあった。玉陽鎮には慰安所が無い。風紀上からも兵士から隔離しなければなるまい。これだけの人数を何処に宿泊させよう。民家を接收するか。

併し心配は無用だった。婦人部隊は空城内

で兵舎から適宜離れた場所を選び、慣れた手で天幕を二箇建てている。一箇は居住用、他の一箇は便所らしい。

× × ×

稔田大尉は婦人部隊の伍長達を連れて玉陽鎮の城内を案内した。

「天地皆春」「百福迎門」「国恩家慶」「紫氣東来」「三星在戸」「人壽年豊」「天作之合」等々到る所に四字の赤紙が貼ってある。

稔田大尉は達筆の部に入るが、赤紙の一番拙い字でも彼より上手だった。

商舖街には飲食物や装飾品の店が並んでいるが、婦人伍長達は見向きもせず先ず南門楼に登った。

「此の門は重要ですね。万一突破されたら漢城を放棄する事になると思いますが」

「何故だ」

「住民に及ぼす被害も大きいが、此の錯綜した街路を持つ町は百人位で守備する事は困難でしょう。内郭迄後退すべきです」

南門楼からは万里の長城も見える。婦人伍長達は遠景を観望しながら賑やかに喋っていた。その喧しさは女学生と少しも交らない。

併し会話の内容は司令部幕僚並みだった。

敵の予想進攻略は何の方面。城壁の死角は

何所。重機関銃は何処に据えるか、等々。

南門楼の内側にある楊柳には依然として二人の中国婦人が縛られていた。体力が尽きかけているのか。脚は体重を支えかねる如く、身体を縄に預けて喘いでいる。昨日から飲食も用便も許していない。近寄ると悪臭が漂っているのが感じられた。二人共、群る蠅も払えずに、じっと立っている。

「糧秣倉庫を狙って発覚したのだ。どう処置したら良いと思うか」

これだけ恥辱を与えたのだから生き永らえる気はあるまい。そろそろ休息させるべきではないか。永遠の休息を。

婦人伍長達は黙って顔を見合わせた。

「敵としては尊敬し、同性としては同情します。併し処置については軍の方針が有る事でしょうから、何も申せません」

暫時の後、蒲田胤子が代表するように答えた。稔田大尉は二人の中国婦人を婦人部隊に銃殺させようかと思いかけていたが止めた。

「それなら君達があの立場だったら何うなる事を望むか。舌を嚙んで死ぬかね」

少し意地の悪い質問と思ひながら聞いた。

途端に五人の婦人伍長は堰を切ったような応答を稔田大尉に浴びせかけた。

「自殺はしません。殺される迄、生きている心算です」

一番近くに居た鮎川絵津子が先ず言った。

「最も残酷な方法で殺される事を望みます」

続いて衣笠芙美子。

「復讐を期待する最適の手段です」

補足したのは磐城朋子。

「自殺は弱者の手段です。私達は強くあるように鍛えられています」

これは霞ヶ岡瑠璃美。

「私達は、そのように訓練されています。苦痛にも屈辱にも耐えられるように」

蒲田胤子が最後に説明した。稔田大尉は漸く婦人部隊の本質に触れたような気がした。

× × ×

夕刻、婦人伍長達が揃って質問に来た。

「倉庫に大砲と弾薬が放置してありますね」

蒲田胤子が代表で聞いた。

「玉陽鎮を攻略した時、山西軍が遺棄して行ったのだ。凱旋の時に持って帰ろうと思う」

「シュナイダー製百五耗山砲でしょう。日本の九九式山砲は此のコピーと聞いています」

婦人伍長達の知識は意外な程に深かった。

「その通りだ」

「借用出来ないでしょうか」



稔田大尉は苦笑した。彼は歩兵だが四一式山砲や九二式歩兵砲程度の知識は有った。

「折角だが、あの太砲は使えない。左側の車輻に傷がある。砲撃の震動に耐えない。駐退液は殆んど漏洩している。尾栓は錆びているし、弾薬は製造年代不明だから不発や早発の危険がある。曳き廻す事は構わないが発射する事は出来ないね」

× × ×

その夜、稔田中隊の将士と婦人部隊は篝火を囲んで交歓した。酒を禁じた筈だったが、将士は雰囲気酔って放歌高吟した。これに対し、尚武の婦人達は典雅な四部合唱を以て返礼した。此の道に於いても婦人部隊の技能は一流だった。

稔田大尉は伍長達を近く呼んで種々質問した。特に興味を持ったのはその教育だった。

宮内省直属の女官養成所。これが婦人部隊の教育機関だそう。本来は学習院の分校である。満十二才の初等教育を終了した知性、体格、容姿共に優れた少女を全国より募集して五年間教育する。一般教養の中で殊に重視されるのは機械工学と化学。全員が二箇国語以上を話し、衛生、医療の心得がある。技芸や情操方面も充分に考慮される。宣撫に役立

つ兵士を得る為である。軍事教練は教育の一部に過ぎない。婦人兵士であるより前に先ず女官でなければならぬのだ。教養の一片にしか当らない軍事学が職業軍人に匹敵するなら知識の全量は果して何程か。

——昔の奥女中は長刀や懐剣の使用法を心得ていた。今の宮廷女官が銃の操作を知っていても不自然ではないだろう。——

稔田大尉は無理に自分を納得させた。

満十七才で卒業すると適性に従い文官と武官に分れる。武官の服務期間は八年で、二十四才で伍長になり、二十五才で退役する。伍長以上の階級は無い。

婦人部隊の基本編成は八人の伍で、十七才から二十四才に至る各年齢一人宛より成る。五伍四十人で一分隊を作り、第一伍長は分隊長を兼ねる。五箇分隊二百人が一小隊で第一分隊長が小隊長を兼務する。三箇小队六百人で中隊を構成し第一小隊長が中隊長である。小隊も中隊も陸軍のそれより遥かに大型だが将校はいない。中隊長以下すべて陸軍並みに言えば下士官に当る。装備は一伍八人中五人が三八式歩兵銃を三人が南部式拳銃を持ち、分隊毎に十一年式軽機関銃又は擲弾筒。小隊には三年式重機関銃、各中隊にストークブラ

ン八一耗迫撃砲と同型式の九七式歩兵砲を附属させてあると言う。一人宛の婦人兵は数人分の医薬と衛生資材を携行していた。衛生隊としても役立つ為だった。

× × ×

八月十九日の早朝。

衣笠英美代の第四伍が四馬挽曳の輻重車二輻を曳き、蒲田胤子の第一伍に護衛されて回城の西門から出て行った。婦人兵は巧妙に馬を扱っていた。

霞ヶ岡瑠璃美が分隊長の職権を代行した。玉陽鎮に残った婦人部隊は朝から活潑に動いている。

体操、演習、そして武器の整備。

稔田大尉は城壁上を遊歩しながら婦人部隊の幕営を観察した。十一年式軽機関銃を分解しているのは鮎川絵津子のようだ。

——女と機関銃。不自然な組み合わせだ。

女とタイプライターなら普通なのだが。

併し機関銃とタイプライターは親戚だ。世界一のタイプライターメーカー、レミントンのは前身は銃器工場。アメリカのギャングは機関銃をタイプライターと呼ぶそう。——

天幕の裏に沢山な洗濯物が干してある。

——四角なものが多いな。——

稔田大尉が氣附くには数分間かかった。

—— 輝だ。あの連中の下着は。——  
併し、よく考えると当然かも知れない。

—— 戦地でゴム製品は、自給出来ないからな。布と紐だけで作ると、どうしても、あのような形になるだろう。——

南門の内側には依然として二人の中国婦人が縛られている。時々動くから未だ生きてはいるようだ。

—— 明朝早く、未だ暗い内に銃殺するとしてよう。——

稔田大尉は漸く決心した。

—— 殺す前にせめて身体を綺麗にさせてやろう。——

婦人部隊は午後になると無料診療所を開設した。稔田中隊は健康者ばかりだが、何時の間にか行列が出来た。

—— 俺も診て貰うか。——

三時過ぎには土民が沢山やって来た。婦人兵は支那人や蒙古人を優しく、併し手際良く捌いて行く。

婦人部隊の過半が支那語を話した。一部は蒙古語が解るようだ。

夕方には軍歌。伴奏はハーモニカだけだが調和のとれた美しい声が高く低く、万里の長

城の彼方迄流れて行くかと思われた。

夜、婦人伍長達が何かを訴えに来た。言い難そうだった。

「実は、私達の下着が盗まれたのです」

稔田大尉は苦笑した。員数揃えは軍隊の常識だが、犯人は彼の部下に違い無かった。

× × ×

平穏な夜が更けて行く。

だが静寂は突然破れた。

「大変です。小邑城が奪われました」

稔田大尉は哨兵に起こされた。

「小邑城が……」

泥人形のようになった軍曹が一人だけ帰って来ての報告だった。襲撃されたのは十八日の深夜。敵兵力は不明だが千は下らなかつたようだ。低い土塁を四方から乗り越えて侵入した。我が一箇小隊は奮闘したが兵力差過大の為遂に全滅。唯一人残った軍曹は日中原野に潜伏し、終夜駆けて玉陽鎮に急に報じた。

—— 何事か起りそうな予感がしていたが。

稔田大尉は真先に婦人部隊の事を思い出した。蒲田胤子達十六人の若い娘が何も知らずに小邑城に向ったのだ。

「総員集合」

未だ決心はついていなかった。婦人部隊は

小邑城に到着している筈だ。追っても間に合うまい。異変に氣附いていればよいが。

玉陽鎮自体が襲撃されるかも知れない。併し婦人部隊を見棄ては置けない。

—— 兵力分割か。最も愚劣な戦術だが。

二十四人の婦人兵も迅速に装備を整え、稔田大尉の決断を待っている。

既に黎明が近い。

「輜重車が接近します」

西門の城壁から哨兵が叫んだ。車輛の音響が微かに聞こえて来る。

「帰って来たか」

稔田大尉は西門楼へ駆け上った。

「門を開け」

見覚えある婦人部隊の制服が輜重車二輛の前後に群れている。四頭挽曳の馬車は全速力で疾走する。砂塵の後方には影しい人影。

「追われているぞ。敵を入れるな」

開かれた門扉の両側に兵士が展開した。

「違う。あれは私達の仲間ではない」

婦人部隊分隊長代理の霞ヶ岡瑠璃美が開かれた門から外を見て叫んだ。人の輪郭を僅かに見分け得る程度の薄明。併し彼女の視力は正確だった。

だが警告は遅かった。輜重車は阻止し難い



速力と重圧を伴って門内に突入していた。

輜重車の被覆を捲ね上げて現れた敵兵が機関銃を把って門の両側を掃射した。霞ヶ岡瑠璃美が馬車の中へ手榴弾を投げ込むのと殆んど同時だった。婦人部隊の制服を着た敵兵と西門両側に並んだ味方の兵が一斉に斃れた。

「回城を放棄して内郭に後退せよ」

稔田大尉は迅速に判断した。輜重車に追尾していた推定三百の敵が門内に乱入した。

スコダ製チエコ式軽機関銃の痼高い三点連射音が西門の内外に起った。それを圧する如く、九二式重機関銃の重厚な響が城壁上から鳴り亘った。錆色と鮮紅色の曳痕が明け切らぬ天を劈いて縦横に飛び交った。

敵は西門附近に夥しい死屍を積みながら回城を奪った。併し、それ以上の侵入は阻止された。若し玉陽鎮が単郭式城市なら陥落を免れなかっただろう。稔田中隊は内部の阻壁に抱って頑強に防戦した。

西門を挟んで乱闘が展開されている間に、別の敵が南門に梯子を掛けていた。他の一隊は東門に爆薬を設置した。南門を突破した推定五百の敵は漢城を駆け抜け政庁に迫った。南門内側に繋いで置いた二人の女間諜は奪回された。玉陽鎮は一朝にして三箇の内郭を喪

失した。

稔田中隊の戦力は西門と北門に傾注されていた。予備兵力は婦人部隊だけだった。

——背面を守る手段は婦人部隊しかない。これを投入すべきか否か。迷う余地は無かった。察知した霞ヶ岡瑠璃美は婦人兵を率いて政庁に馳せ向った。

——あの戦意と闘志。これが、唯一の期待だ。頼むぞ。

稔田大尉は北郭の城壁に立ち、激戦に揉まれながら全戦闘を指揮していた。二正面の敵を阻止しながら背後を見た。

——美事な戦術動作。迅速な展開だ。

旋回運動は辛くも間に合った。併し女の体力で大兵力を阻止し得るか。

婦人部隊は銃剣二十四本の切尖を揃えて白兵戦に入った。内部に侵入した百余人の敵を突き伏せ、追い立て、遂に門外へと掃蕩し、更に政庁方面へ追撃した。

「危い。進み過ぎた。包囲されるぞ」

稔田大尉は思わず叫んだが声は届かない。退却喇叭で知らせる隙も無い。直横から見ていると良く解る。敵の新鋭数百が一握りの婦人部隊を押し包む勢いで駆け寄っていた。

「構わずに門を閉めて」

霞ヶ岡瑠璃美が一人で門外に立ち塞った。婦人部隊の、感情を抹殺する精神訓練は此の急場で効果を顕した。婦人兵達は躊躇せずに犠牲を容認した。

霞ヶ岡瑠璃美は手練の剣尖で敵を刺した。抜く手も見せずに突き捲った。門扉は彼女の背後で固く閉ざされた。それを確認するや、彼女は敵の方に駆け出した。間もなく勇敢な婦人伍長は大勢の底に埋没して見えなくなった。此の間に鮎川絵津子が門上に十一年式軽機関銃を据え附けた。政庁前の狭地域に密集した敵は火力圏を免れる事が出来なかった。

「よくやった。北郭は持ち耐えたぞ」

最初の奇襲から立ち直ると日本軍の熟練と優れた装備が威力を発揮し始めた。出動準備完了と同時に戦闘が始った事も幸運だった。敵兵多数が城壁下や諸門周辺に死屍を曝し、攻撃は天明と共に中断された。

怒号と騒音の渦が遠退いた。敵も味方も死傷者の収容に余念がない。

此の頃。政庁前の堆高い死傷者の底から、霞ヶ岡瑠璃美が掘り出されていた。触っているのは敵の手だった。積み重った圧力が取り除けられると同時に彼女は漸く意識を恢復し

た。併し体力消耗と全身打撲の為に動く事が出来ない。両手が背に廻り、手首の上に縄が走るのを感じながら抵抗し得なかった。そして再び朦朧の中へ陥ち込んで行った。

× × ×

夜が明けた。

「よく囲んだものだ。支那は何事も大規模だと言うが。三国時代の陣法も斯うだったか」

稔田大尉は城壁上から敵状を観察した。

見渡す限りの山谷に紅旗翻翻。朱柄の鉄槍

林立し、剣光帽影野に満ちて彼方万里の長城に連る。八路軍の大襲来である。

「合囲八月暈二等シか。一箇聯隊は居るな。」

玉陽鎮の小城に向って何と大袈裟な

だが山西省北部の後方地区へ如何にして三千の兵を侵入させたのか。朱徳には孫呉の手腕が有る。

稔田大尉は落着いていた。早朝来の激戦で味方の戦死八名。負傷二十名。他に婦人部隊の行方不明一名。併し尚城壁を守るに足る。

敵は大軍だが装備劣等。重火器を持っていないようだ。城壁の強襲は出来まい。形勢は重大だが斯かる大動員が天鎮、大同に知られぬ筈は無い。必ず援軍が来る。

けれど稔田大尉は一点だけ判断を誤った。

敵は玉陽鎮のみを包囲したのではなかった。八月二十日は中国共産党史に特筆すべき日となった。「百団大戦」と号し、太原、正定を結ぶ正太鉄道沿線を中心に、山西省全域に亘って百十五団四十万人を動員する大攻勢が開始されていたのだ。玉陽鎮の包囲は最北端の小事件に過ぎなかった。中隊以下に分かれて交通線を守備していた日本軍は到る所で孤立し、鉄道も道路も寸断された。

× × ×

正午頃。北門正面五百米に木柱が並んだ。全部で十七本。婦人部隊の十七人が柱一本に一人宛、後ろ手に縛られ、立姿で縛りつけられていた。

制服を着ているのは一人だけだった。その服は裂け千切れ、血と泥に塗れている。制帽は失われ、髪は海藻の如く乱れていた。俯向いた顔は双眼鏡で見ても判然としないが霞ヶ岡瑠璃美に違いない。

下着だけに剥がれたのが十六人。

蒲田胤子。衣笠美美代等。小邑城に向った者達のような。二伍全員が揃って敵の手に落ちたらしい。敵が西門突破に悪用した制服は彼女等から奪ったものだろう。

——彼女等の同僚は政庁前で数倍の敵を相

手に防戦して目的を果した。用法さえ誤らなければ彼処で自由を奪われている者達も充分に武勇を発揮出来たのだ。

稔田大尉は少康の間に慨然と城外を見る。

——痛いだろう。併しそれ以上に辛いことだろう。戦技と闘志を持ちながら、あの者達は怖らく一弾を放つ隙も無く捕えられたに違いない。制服も武器も奪われ、それを敵に利用され、縛られた身を晒されて如何程残念に思っているか。

晒し柱は射程距離内にあった。

——あれが普通の連中なら、此処から撃つてやるのが慈悲なのだ。

多数の敵兵が柱の近くに群れていた。縛られて身動き出来ない婦人兵を嘲弄し、局所に触れて侮辱している様子が見える。

——婦人部隊の共倒れを覚悟すれば。

稔田大尉は北門に九二式重機関銃を配置した。併し発射は命令しなかった。

「最も残酷な方法で殺される事を望みます」「苦痛にも屈辱にも耐えて生き抜きます」

稔田大尉には婦人伍長達の声が聞えて来るように思えた。

——必ず救出するぞ。耐え抜くと言うのが本当ならば。



傍には婦人兵達が居並び、毗を決して悲運な同僚達を見守っている。

× × ×

十七本並んだ柱の中央に霞ヶ岡瑠璃美が縛られていた。両手は柱の後ろに廻り、十文字に固く縛られている。足首と膝は揃えて縛られ、胸から脚にかけて縄は彼女の身体を柱に幾重にも締めつけていた。創傷と打撲と疲労に弱り果てている筈だが、本来強靱な体力と鍛練された精神力で辛くも身を支えている。

左右の柱に蒲田胤子と衣笠芙美代が縛られていた。下着だけに剥がれた膚に縄が固く喰い込んでいた。靴は無く、足には血が滲んでいた。小邑城から四十軒の道を跣足で夜通し曳き立てられて来たのだ。

「不覚でした。味方の城に入る場合にも尖兵を先行させるべきでした」

蒲田胤子が言った。残念そうだった。

「誰かが生き残ったら皆に伝えなければなりません。貴重な戦訓です」

小邑城を攻略した敵は、三十人程が戦死した日本兵の軍服を着て良く見える位置に立ち他の数百人は姿を隠して潜伏していた。戦場経験の不足。治安地区だという先入観。純情な娘達が欺かれたのは己を得ない事だろう。

気がついた時は既に無数の銃と剣で囲まれていた。如何なる敏速な動作も抵抗の余裕を見出せなかった。脱走するには敵の密度が濃厚に過ぎた。両手は忽ち左右から握じ上げられた。武器も輜重車も奪われ、全員が後ろ手に縛られるのに五分間を要しなかった。

十六人の娘達は敵将の前で大地に曳き据えられた。八路軍の高級将校が早くも小邑城に到着していた。主将は賀竜、副将は左権と呼ばれていた。これは重大な事だった。

賀竜は陝甘寧辺区軍司令。

左権は第十八集團軍副參謀長。

共に八路軍の有力幹部である。これに従って相当な精兵が来ているに違いない。

敵将は玉陽鎮への手引を強要した。八路軍に追われた様子を示して門を開けさせると迫った。勿論応じる者は誰もいない。蒲田胤子は口を極めて賀竜を罵倒した。

併し死は与えられなかった。代りに固い猿轡が嚙まされた。十六人の娘達は逆吊りに並べられ、悶絶する迄殴打され、蹴転がされ、半死半生の間に制服を悉く脱がされ、下着姿で前よりも緊しく縛りあげられた。そして寸刻も抑かず水を浴びせて蘇生させられ、夜を徹して鞭に追われながら玉陽鎮へと駈足で駆

り立てられた。漸くにして得られた休息は柱を背負った姿勢だった。

「この屈辱と苦痛は当然です。併し奪われた制服と装備が原因で玉陽鎮を危険に曝した事を思うと、死ぬにも死ねない気持です」

蒲田胤子は僅かに動かせる首を振って、顔に懸る髪を払い除け、唇を噛んで玉陽鎮の城壁を凝視した。

× × ×

朝からの激戦に続いて狙撃が反復され、負傷者が幾人も出た。稔田中隊は城壁に拠って撃ち返し、露出接近する敵を多数射殺した。

併し我が兵力は少い。城壁の各正面に二十人程を分配するのが漸くで、予備兵力を控置する余裕は全く無かった。婦人部隊の二十三人は凡ゆる後方勤務を引き受けて挺身した。傷者の収容看護、弾薬の運搬、食糧や飲料水の配附、伝令等々。

玉陽鎮は三箇の内郭を奪われた為、南方に弱点を露出した。婦人部隊は南面した掩堡を迅速に構築して狙撃を防いだ。敵襲があれば娘達は直ちに銃を把って戦列に参加した。

——輜重、工兵、衛生兵。婦人部隊は万能の後方勤務員だ。その上、有能な歩兵でもある。

稔田大尉は舌を捲いた。

——婦人部隊の協力が無かったら玉陽鎮は陥ちていただろう。

婦人兵の何人かは負傷していた。肩や腕から血を流しても屈しなかった。顔面に傷を受けた時だけは人目を憚りながら涙を流した。併し歯を喰いしばって戦い続けた。

夕刻。少康の時が来た。と、北門楼の附近から軍歌の斉唱が聞えて来る。「戦友」だった。哀調を帯びた旋律が美しい女性合唱となって流れ出た。敵弾は急霰のように北門楼に集中したが婦人部隊は歌い続けた。長い歌詞が終る頃、敵も味方も銃を抱いて歌に耳を傾けていた。

× × ×

八月二十一日早朝。

仮眠していた稔田大尉は連続して起った爆発音に夢を破られた。寝ね起きて見ると北郭の内庭に黒色火薬の硝煙が渦を巻いている。

「迫撃砲だ」

敵は夜の間に迫撃砲数門を漢城に搬入し、弾薬を集積していたらしい。炸裂は連続して起り、しかも照準は恐ろしく正確である。

糧秣倉庫が直撃弾を受けた。井戸が破壊された。兵舎が倒壊した。玉陽鎮の致命部を敵

は知り尽くしている如くだった。解放された女間諜の報告に依るものだろうか。

「弾薬を分散しろ。負傷者を城壁下に移せ」

曲射弾道を描いて迫撃砲弾は頭上から容赦なく降ってくる。

「婦人部隊はどうした。一人も居ないぞ」

すると此の時、北門附近で全く異なる大音響が起った。何事と振り向くより早く、南門前に黄褐色の爆煙が湧き上る。黒色火薬ではない。高級炸薬だ。味方が撃ち返したのだ。

南門楼が崩壊した。迫撃砲を据え附けた建物が吹き飛んだ。続いて弾薬集積所が轟音と共に誘爆を起し、一面に大火災が発生した。市街の住民は既に悉く逃散して消火する者も居ない。火は軒から軒へと拡がった。敵兵は迫撃砲を棄てて逃げだした。

「婦人部隊だ。榴弾砲の操作を知っている」

シュナイダー製百五耗山砲が砲口を南に向いていた。観測しているのは警城朋子。発射後に就いている者も装填している者もすべて婦人兵だった。

「何時の間に修理したのだろう」

廃品同様の火砲を使用可能にした整備能力は尋常ではない。更に複雑な曲射弾道の諸元を算定し、適確な命中弾を浴びせる手腕は砲

兵としても一流である。稔田大尉は又しても見せつけられた婦人部隊の特殊技能に改めて驚嘆した。

× × ×

敵の迫撃砲は一時間以内に掃蕩された。漢城の火災は次第に燃え拡がって行く。

婦人部隊は砲の傍で一息入っていた。稔田大尉は近寄った。見ると左側の車軸は木柱に載り、定位置で旋回するよう工夫され、錆びた部分は磨いてあった。併し復座駐退機は、駐退液を何処で入手したのだ」

グリセリンが無ければ撃てない筈なのに、「私達は一瓶宛グリセリンを持っています」警城朋子が砲煙に煤けた顔をあげた。

「何に使うのだ」

美少女は耳迄真赤になった。暫し躊躇の後聞きとれないような小声で答えた。

「浣腸用です」

稔田大尉は苦笑した。併し彼は女性の生理を知らない。戦場の如き不規則な生活を余儀なくされる環境下に於てグリセリンは婦人兵の必需品であり、復座駐退機を可動ならしめる為の供出が文字通り『血の出る』程の犠牲である事に思い及ばなかった。

× × ×



夕刻になると婦人部隊は北門楼下に集って軍歌を斉唱した。門外に縛られている十七人が喘ぎながら唱和した。八路の兵が駆け寄って一人宛猿轡を噛ませた。それでもハミングを消す事は出来なかった。

玉陽鎮の健在を誇示する女性合唱は今宵も朗々と流れて行く。

× × ×

南郭の漢城は夜通し燃え続け、焰は天を焦がしていた。稔田大尉は独語した。

「此の兵火は天鎮から見えるに違いない。異変を知って必ず援軍が来るぞ」

× × ×

衣笠美美代は縛られた俛、柱に依って眠るともなく微睡<sup>まどろ</sup>んでいた。併し鍛練された聴覚は微かに意識の底で働いている。規則正しい足音。無数の足音。その絶え間のない流れが無限の彼方からやって来る。背後を通り過ぎ玉陽鎮を囲む何処かの戦列に加って行く。

敵は夜の間に兵力を増強しているらしい。土木工事をしているような音が聞える。

眼の前が突然明かなくなつた。炬火が燃えている。見極めようとしたが既に視力が衰えて急激な光度変化に追従出来なかった。人の輪郭が僅かに見分けられた。

昼間の炎熱に照射されて全身の水分が蒸発し去つたような気がする。玉陽鎮の南門に縛られていた八路の女より条件が悪い。あの二人には楊柳の樹蔭があつた。餓より渴きの方が致命的である。余命は何程か。最早抵抗の体力も脱走の気力も尽き果てた。

それなのに、

背後に群る人の気配。柱の後ろに廻った手首の縄目を一人一人調べている。少しでも緩んでいると固く締め直した。

声の調子が高い。八路の女兵らしい。

その二人が衣笠美美代の前に立った。漸く眼が見えだした。軍服の良く似合う威厳の備つた婦人将校だった。顧に見覚えがある。併し思い出せない。

「陝甘寧辺区軍政治委員、康克清少将です。此方は副官で宋玉蘭中尉」

玉陽鎮の南門に縛られていたあの二人だ。

「三日前の晩、死にかけていた私達の縄を緩め、水を飲ませた上に身体を拭いて下さった婦人兵が居ました。確かに貴女です」

耳元で、そつと言つた。

十七人の中で衣笠美美代だけが縛を解かれた。併し全身が痺れて急には立てない。

暫時の後、漸く半身を起すと眼の前に水を

容れた土器があつた。小麦粉を油で焼いた大きな焼餅<sup>ショウビン</sup>が一枚。薄汚れた布が二枚。

康克清と宋玉蘭は適当に離れた位置から監視している。衣笠美美代の行動を警戒するよりも八路の女兵達を気にしているようだ。

衣笠美美代は蹣跚と立ち上つた。十六人の同僚に少し宛、水を汲んで与え、焼餅<sup>ショウビン</sup>を一片宛、千切つて含ませた。不完全ではあるが、汚れた身体も拭いて廻つた。彼女に残つていた体力はこの労働で消耗し尽くした。それでも最後の気力で木柱に歩み寄つた。敵の好意を最後迄満喫する気にはなれなかった。先刻解放されたばかりの木柱に自ら背を当てた。両手を柱の後ろで組み、胸を張つた。無言の催促だった。

康克清と宋玉蘭が、これを何のように受け取つたか。

感嘆したか、軽蔑したか。

表情は暗黒に蔽われて見えなかった。そして縄目の厳しさには少しの遠慮も無かった。衣笠美美代は縛の固さを知覚しない。意識を失つた彼女の身体を縄が支えていた。

× × ×

八月二十二日の朝が来た。

敵兵力は夜の間に大増強されていた。

各方面の友軍が敗れているのではないか。その為に、勝ち誇った敵が、唯一つ残った玉陽鎮に集結しつつあるのではないかと案じられる。味方の援軍は現れない。

その筈である。大隊本部は天鎮で包囲され師団司令部のある大同さえ攻撃を受け、平綏鉄道は至る所で寸断されていた。八月二十日から数日間、日本軍は防戦一方だった。

玉陽鎮では終日射撃戦が反復された。百五耗山砲は間歇的に射撃し、露出目標に損害を与えた。稔田大尉は敵指揮官の一人が此の砲撃で倒れたと判定した。

夕方。恒例の軍歌斉唱。婦人兵は十九人に減っていた。その中の幾人かは血の滲んだ繻帯を巻いている。併し意気軒昂、欠員の声量を他の者が補った。

夜に入って敵は城の四方から投降勧告を呼び掛けて来た。女の声が多かった。城中に應じる者が無い事を確認すると、今度は総攻撃の開始を予告した。これは戦略の常道に反する。本来、攻撃は不意に開始すべきものである。それを事前に宣言出来る程、敵は自信を持っていた。その位兵力差が圧倒的だった。

二十三日の夜明け前。敵の決死隊が地雷を持って忍び寄った。我が歩哨が感付いて射殺

したが、爆薬は城壁を数米離れた位置で炸裂し、年代を経た磚の一角が崩壊した。

人海戦術を以てする突撃は早朝に開始された。それは巖頭に砕ける怒濤にも似ていた。

損害を無視する密集縦隊が城壁の破孔に殺到した。浴びせ懸ける機関銃火の飛沫も阻止し得なかった。敵は遂に内庭へ突入し、兵舎を蹂躪した。稔田中隊は北門附近の城壁に圧迫された。併し最後の一郭は持ち耐えた。八路の兵は勇敢だが近接白兵戦では日本兵の敵ではなかった。突撃は四回撃退され、城壁下に死屍の山が築かれた。だが一回毎に残り少い味方の兵が更に減って行った。

孤城落日。血のような夕陽が西の地平線に沈んで行く。大地に満ちた死屍が赤い薄紗に蔽われ、地獄の血の池に浮ぶ亡者も斯くやと疑われた。

北門楼から軍歌が途切れながらも流れて来る。立てない者も、両眼の見えない者も挙って唱和した。玉陽鎮は未だ陥ちていない。

× × ×

北門外の柱に縛られている十七人の中で、蒲田胤子だけが顔を上げた。微かに唇が開いた。併し、すぐ動かなくなった。

× × ×

更に二日が過ぎた。八月二十五日。「今夜が最期か」

右肩を貫通された稔田大尉は左手に軍刀を握っている。その刃は鋸の如くだった。

中隊は名ばかりの残骸と化し、機関銃弾は既に尽き、小銃弾も少い。手榴弾は黄色い柄のついた敵のものを拾い集めて使っている。食糧は無くなった。井戸は敵の手中にあり、全員が渇に苦しんでいる。

敵はこの状態を良く知っている筈だ。二日間、強襲を休んだのは損害過多に対する警戒よりも、此方の自滅を待っていたのだろう。併し今日は様子が違う。突撃縦隊の配置が行われているようだ。夜に入ったら攻めて来る気配に見える。

今宵、軍歌を斉唱した婦人部隊の数は八人だった。その悉くが何処かに負傷していた。

——餓と渇と負傷と疲労。それなのに、よくあれだけの歌声が出せるものだ。今宵最後の決戦に備えて、体力を保存する方が良いのに。併し戦争は計算ではない。あれで良いのだ。

稔田大尉は双眼鏡で城外を見た。十七本並んだ柱に縛られている婦人兵は既に動く模様が無い。未だ生きているだろうか。始めの頃





陽が中天に昇った。

——水が欲しい。——

甘露の味が忘れられない。併し誰が何を飲ませてくれたのかは遂に解らなかった。

× × ×

正午。稔田大尉は北門楼から玉陽鎮の内外を観察している。

——何故、攻撃して来ないのだろう。

敵にとって戦術は不要だ。只、突撃するだけでよい。味方は一丈も出来ないだろう。それなのに何か躊躇の色が見える。

「爆音が聞えます。飛行機です」

鮎川絵津子が乾いた声で叫んだ。

「九七式戦闘機だ」

稔田大尉が機種を確認した。

「天鎮の方角に土煙が見えます」

磐城朋子が言った。

玉陽鎮を囲む雲霞の大軍が急速に崩れ始めた。九機の飛行機は急降下して六十疋爆弾を投下し、更に地上掃射を行った。

内庭の敵が物陰から現われて城外に駆け出した。城壁上の味方が狙撃した。

不意に婦人部隊の八人が走り出た。北門を開いて突撃した。何処に、このような体力が

残っていたのか。

敵が逃げながら機関銃を撃った。婦人兵の半数が倒れた。それでも残る者は五百米疾走して木柱の列に駆け寄った。

× × ×

第二十六師団主力が大同から東進を開始した。北支方面軍は九月一日から山西省南部で晋南作戦を起した。これは掃蕩戦ではなく、挺身奇襲の形を採った。『百团大战』は九月十日を以て終った。日本軍の晋南作戦は九月十八日に及んだ。中国共産党史は『鉄道九四八箇所、自動車道三千余箇所を破壊し、日本軍二万を屠り、云々』と記している。但し日本軍の損害は四千だった。これに対し八路軍は第十八集團軍副参謀長左権以下二万二千の兵を失った。

これですべてが終ったのではない。八路軍は九月二十日から第二次攻勢、十月六日から第三次攻勢を敢行した。日本軍は十月十一日から十二月四日に及ぶ大規模な晋中作戦を展開し、八路軍に六万の損害を与えた。併し、これは婦人部隊の挿話と直接の関係は無い。

× × ×

稔田中隊は事実上戦闘力を失ったが八路軍に与えた損害は千を越えた。一層大きな戦果

は捕虜の証言に依り敵将左権の墓を発掘した事だった。検死の結果、死因は両眼を貫通して脳底に達した二発の小銃弾である事が判明した。総帥賀竜が砲弾で負傷したらしい事も解った。八路軍の攻勢が途中から弱体化したように見えるのは指揮官の死傷と無関係ではなさそうだ。

× × ×

玉陽鎮の北門楼には八月二十日以来一度も降した事のない日章旗が、無数の弾痕を留めながら今日も高く翻っている。

北門外では茶毘の煙が立ち騰っていた。

柱に縛られた俣、銃弾に斃された薄田胤子等六人。玉陽鎮を守って戦死した十八人の遺骸が焼かれている。重い煙が何時迄も地を逼っていた。

如何なる悲運にも苦境にも耐え抜いた十六人の娘達は火葬壇の前で相擁し、地に伏して号泣していた。幾時間でも泣き続けた。

北門の内側に、右手を肩に吊り、左手に杖を突いた稔田大尉が立っていた。

眼が霞んで直視する事が出来なかった。

左脚は体重を支えられなかった。

それでも同じ姿勢で立ち続けた。

何時迄も、何時迄も。



## 贗作・マゾヒスティックストーリー

## 「男性失格」

芳野眉美

## △パイプカットにまつわる一挿話▽

現代は男性避妊時代だそうですね。女性が不妊手術をするのではなく、男性がパイプカット、即ち、輸精管結紮手術を受ける。医学的に不妊手術を受けることは知りませんが、射精された精液中に、精子が含まれないように手術するのだそうで、手術をしたからといって精液の量が変わるわけではない。

精管をチョイと切断するだけだから、手術に必要な時間はせいぜい三十分ほどで、女性の卵管結紮にくらべたら、いとも簡単で、それこそ会社の昼休の間にできてしまう。それをいいことにして、浮気のためにパイプカッ

トする男性もいるかもしれません。浮気をするたびに、あなたのベビーよ、などとおどかされていてはかたがたありませんからね。パイプカットブームの原因は、真実はこんなところにあるのかもしれない。

もっとも、法律的には、浮気のためのパイプカットは認められていません。優生保護法で禁じられ、法を犯せば、医者も依頼人も検挙されてしまうのです。パイプカットの理由は、勿論産児調節にあるので、子供を二、三人生んで、もうこれ以上いらないという家庭の男性が手術を受けるものでしょう。これに

は、妊娠するたびに、中絶しなければならぬという家庭の事情で、妊娠ノイローゼになり、夫婦生活が破壊されるのをふせぐ意味も含まれています。

日本では四十年前も前からライ患者にパイプカットをしているそうで、古い歴史があるわけですね。今はじまったものじゃない。

最近の話ですが、私の知人が流行のパイプカットをしようとして、ふと週刊誌の記事を読んでやめてしまったことがあります。その週刊誌には、

——不妊手術で男性失格した夫に殺された

駆け落ち妻。

とあったのですよ。

この男の奥さん、多産系らしく、すぐ妊娠してしまふ。五、六回も中絶したあとで、これでは身体がこわれてしまふと奥さんが訴えた。中絶後の無理がたたると、頭痛はする、腰痛はする、貧血にはなる、これでは楽しいはずの夜の生活までつまらない。中絶の費用も馬鹿にならないが、それより、医者の前で屈辱的スタイルをとるのが、いやになったのでしよう。あれやこれやで、奥さんは夫にパイプカットをすすめた。

「手術費も安いし、それに簡単よ」

ところが、意地の悪い運命の神のいたずらか、手術後男は不能になってしまった。パイプカットにケチをつけるわけではありませんが、こんな不幸な男中にはいるわけです。男性失格。

さあ大変、夜になると、女はそれががまんできない。ねえ、どうしてくれるのよ、と奥さんが鼻を鳴らしたって、用がたせないのだから仕方がない。奥さん、さっさと愛人をつくって駆け落ちしてしまつた。薄情もこうドライだと開いた口がふさがらない。

妻に逃げられた男は、しばらくして新しい

女と同棲した。逃げた女を追いかけるほど馬鹿じゃなかった。ところが、新しい女も男が不能とわかってしまえば用は無い。踏んだりけったりだ。愛人をつくって駆け落ちした奥さんにどつと憎悪が湧き上つた。無理もない。パイプカットをすすめた女が憎いのはあたりまえだ。

たちまち、愛人と逃避行中の奥さんを追跡して殺してしまつた。悲劇です。殺人の原因は、パイプカットの失敗、不能という男性失格につきる。性欲はおそろしいですね。夫婦生活でも、精神と肉体のバランスがくずれるところなる。

でもねえ、私に云わせれば、不能の夫を持つたからといって、わざわざ逃げださなくてもいいと思うのですよ。不能の夫は、不能なりにいいところがあるものなのです。むしろ不能の夫のほうが、妻のことを心配し、愛していると断言してもいいかもしれません。前置きが長くなったのも、この話をしたかったからです。

× × ×

おわかりですか、私も男性失格を宣告された不幸な男の一人なのです。パイプカットを受けて不能になった。

私の夫婦関係の話を聞いて下さい。

私は四十才、妻は三十四才で、一男二女があり、結婚も十年選手です。多産系だけあって、妻の尻はいやになるほど大きく、色白がとりえだけの、丈夫で長持ちする女です。一週間少くとも三度は要求してくるので、新婚でもあるまいし、せいぜい一週に一度ぐらいにしてくれと背を向けると、不満顔でいつまでも悶々としていて私を弱らせます。

私はだいたい強いほうではなく、一回で疲労してしまいますし、それも、ほんの数分で妻があきれるぐらいですから、はっきりいってその方はあまり好きなほうではないのです。よう。ニワトリですか。

妻は結婚したときは処女でした。私も童貞に近く、知らない者同志が結婚三日目でやっとな成功させたというテイタラクでした。ですから、妻は男は私だけしか知らなかったのです。

女が続けて二人生まれ、三人目でやっと男が生まれると、不妊手術の話ができました。安サラリーマンである私の経済では、子供は三人で限度です。妻の巨大な尻を見ていると、まだまだ次から次へと生まれそうで、その度に中絶していたのでは妻の身体も心配だし、



赤字の家計簿からその費用を捻出するのも大変なことです。会社の昼休みにチョイとするわけにはいきませんが、とにかく私がパイプカットをする決心をしたのは、妻が四度目の妊娠をし中絶をしたあとで、二度と医者の前であんな恰好をしたくないと泣いた翌日でした。

看護婦さんがひょいと私の分身をつまみあげ、目の前でジョリジョリやったのには参りました。麻酔をかけましたが、やはり痛かったですね。でも、一瞬のうちに手術は終わりました。なにか下腹部がつれる感じでヘンでした。一週間夫婦関係を禁じるように医者に云われて病院をでました。まさかこの瞬間から私の運命が変わろうなどとは夢にも思っていませんでした。

一カ月たっても、私の男性は失格しっぱなしでした。最初は、妻も一生懸命マッサージをしたり、一度も見せたことのない挑発的な肢体をして刺激しましたが、だめでした。

精管を切断してもまた復元した例もあるようですが、私の場合は無理でした。六、七割は復元可能だそうです、運の悪い私は復元不可能の三、四割のほうに入ってしまったわけです。医者から見離されては絶望です。夫

婦生活は肉体だけじゃない、精神的つながりこそ夫婦だと楽天的なことを云っている場合ではありませんでした。アンバランスは悲劇のはじまりです。妻を殺してしまった夫の本がありますからねえ。

二月たち、三月たち、夫婦関係の断絶した妻は、ヒステリーが、次第に露骨になりました。会社から帰っても、妻のふくれづらを見るのはかたがたしません。それでも教育ママらしく、子供の前では決して夫婦喧嘩はしません。が、布団に入ると露骨な悪口が堰を切ったように浴びせられました。

「インポと結婚するとは思わなかったわ」とか、

「だいたい、あなたが弱いから、ちょっと医者にいじられると、インポになってしまうのよ」

私はただ無言で、頭から布団をかぶるばかりです。私なりに努力はしたのですが、こればかりは素人の力ではどうにもなりません。「お前が手術しろとすすめたのじゃないか。産制ならコンドームでもよかったんだ」などと云おうものなら、

「インポにしろって云ったおぼえはありません」

と毒づきます。インポ、インポテンツ。

「ああいやだ、いやだ」

夜がこれほど苦痛に感じたことはありません。恐怖の夜です。夢にまでおびやかされては寝るに寝られない。

「あなたはそれでいいでしょうけど、わたしはどうするのよ」

と妻は毎夜私を責め、とうとう、

「浮気をしちゃうから」

私がおそれていたことを云い始めました。

「ねえ、浮気をしてもいいの」

「おまえさえよかったら」

力無く、私は妻に答えました。こんな夫がどこにいるでしょう。妻の浮気を公然と認めるなんて。

「そう、浮気をしてもいいの」

妻は、さも軽蔑したように、私を見下しました。馬鹿野郎とどなられると思っていたのでしょう。

「浮気をしてもいいが……」

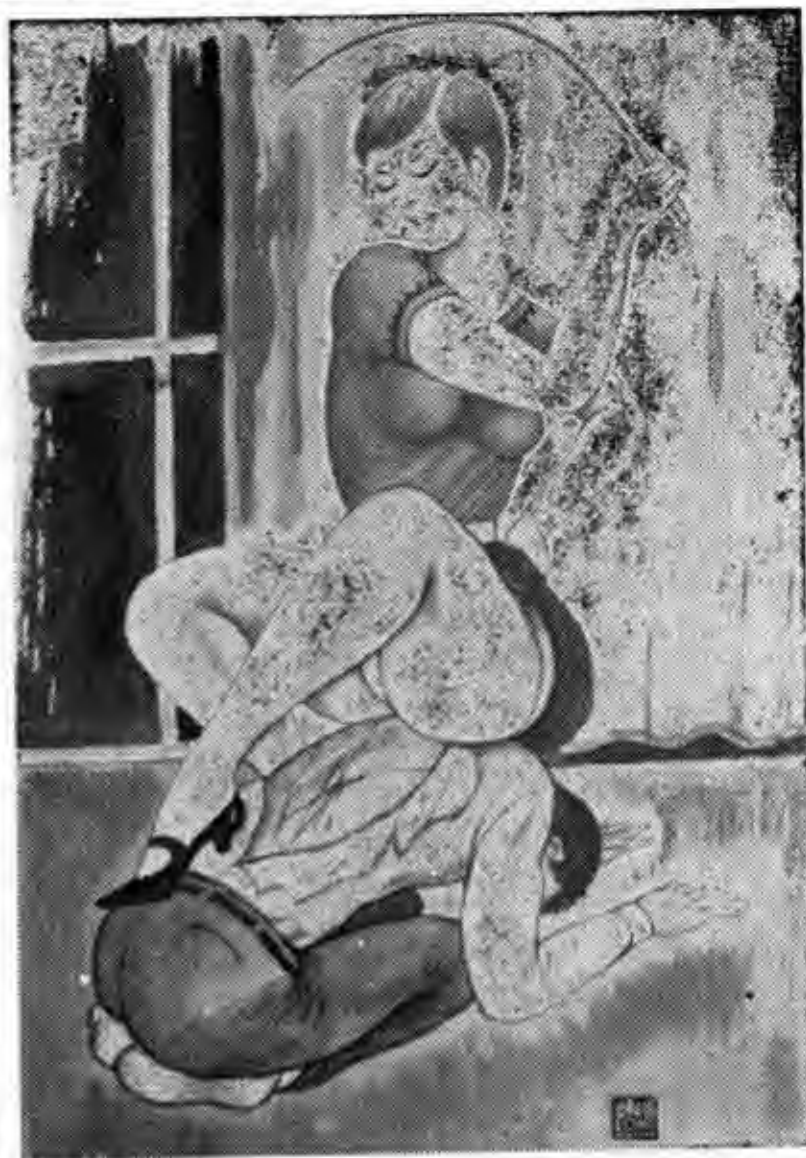
「何が云いたい」

「愛人をこしらえるのはかまわないが、私から逃げないでくれ」

「そうね、でも好きな人ができたら逃げてしまいかもしれないわ」

## 「鞭 撻」

春川ナミオ・画



「子供のために、こんな灰色の生活を、がまんしろというのね」

「お願いだ。私を捨てなければ、男をつくったってかまわない」

「わかったわ」

その時の冷酷な妻の表情は思い出しても、ぞっとします。

妻の柔和な顔も、おとなしい従順な性質も、この会話を機にして一変してしま

ました。この時から私は夫の座をすべり落ちたのです。妻は暴君になりました。いえ、妻は私にだけ暴君であって、子供たちにはいつもの通りのやさしいママでした。

妻の急激な変化は化粧が派手になったのですぐわかりました。あまり行ったこともなかった美容院にも通い、流行のヘアースタイルは私を驚かせました。妻は、夫を無視してから、にわかに若くなり美しくなりました。

家計簿まで私におしつけ、貯金もおろして勝手に使っているようでした。高級化粧品の手スルスマンが訪れるようになったのも自然のなりゆきでした。

妻の浮気の第一号は、この化粧品の若いセールスマンです。手近かなところの男によるめくのは、交際範囲のせまい人妻のルールみたいなものですが、私の妻もその例にもれなかったことになりました。すべてが自然に従順にことが、運んでいるように見受けられました。

× × ×

私が二人の関係を知ったのは、出勤したものの、頭痛がして半日で帰宅した日でした。男性失格を宣告されてから半年はたっていたでしょうか。子供はまだ学校から帰っていません。午後一時前後だと思えます。妻は若いセールスマンに、全身美容とやらをされていました。

妻は身体に何も着ていなかったのです。そんな姿で敷布団の上に横たわっていました。真っ白い柔肌にうっすらと赤味がさして、背中が汗で濡れていました。

私が不意に帰宅したので、あわててズボンは穿いたのですが、ネクタイまでする時

「おまえに逃げられるのが私はおそろしいのだ。今はそれだけしか考えていない」

私は小さな声で、ボソボソと妻に云いました。本心でした。男性失格が、これほどこたえたことはありません。

「三人も子供があるし、子供のためにがまんしてくれないか。私だけではそだてられないし、ママがいなければ三人の子供たちが可哀いそうだよ」



間はなかったといった、そんな恰好で青年は妻をもんでいました。

夫が帰宅したのに、妻は浴衣も着ずに化粧品、セールスマンに全身をマッサージさせていたのは、私への挑戦だったのかもしれない。妻は私におかえりなさいとも云わず、嘲笑した顔で一瞥しただけで、気持良さそうに眼を閉じていました。妻ではない別の女がそこに寝ているような錯覚にとらわれて私は狼狽しました。それでいて、こんな魅力的な妻を見たことは一度もなかったからです。

妻が見知らぬ男と仲良くなった。妻を寝とられた夫がここにいる。そう思ったとき、不思議なことに、官能のよろこびでぞくぞくする自分をおさえることが出来ませんでした。コキュにされたくやしき、怒りといった自分の意志とは反対に、コキュにされた喜び、妻にしたいげられたなんともいえない被虐の快感に酔ってしまいました。胸の鼓動の轟きがそれを証明するかのように高鳴っていました。

妻の豊かな肉体は、夫を無視した秘かな悦楽にあえていました。妻の身体がこれほど美しいとは思いませんでした。

翌日は会社を休みましたが、二日目になる

と、妻が枕元に立って、

「また、休むの」

と云うので、微熱がりましたが、朝食もそこそこに家を出ました。「また」と云った妻の言葉の裏に、今日、あの化粧品のセールスマンが家に来るのではないか、妻と会う約束をしているのではないかと直感したからです。この直感は、不幸にも、あたっていました。

家の門は出ましたが、庭の勝手口からもどりました。申し遅れましたが、親父のたてた古い家で、郊外です。少しばかり庭のある二階家なのです。息をひそめて物置のかけにかくれ、妻が便所に入るのを待って、足音をしのばせて居間に帰りました。ただ、あの化粧品のセールスマンと妻とのことをみとだけようと、そればかり考えていました。

居間に入ると、私の布団は押入れにかたづけられていましたが、妻のはそのまま、その上、新しいシーツにかえてあるではありませんか。妻の意図は、はっきりわかりました。私を会社に追い出してにおいて、年下の男と真昼の情事を楽しむつもりなのです。

私は靴を持ったまま、押入れにかくれました。押入れを開けることはないだろうと判断

したからです。下段に身をこめて坐り、押入れの戸を少し開けて待ちました。楽しみと苦痛のいりまじったヘンな気持です。快楽でもあるし、死んでしまいたいような狂った気持です。どう説明したらよいか、わかりません。

十時頃だったでしょうか。妻がいそいそと客を迎える声やし、玄関の鍵を閉める音がしました。また、不意に私が帰って来るとでも思ったのでしょうか。すぐさま、布団の上に寝るような音がしました。

「乱暴ね」

妻の甘い声がしました。

「脱ぐわよ、破れてしまう」

帯を解く音がします。こんな甘い言葉を、私は結婚してから一度も妻から云われたことはありません。テレビか週刊誌の影響でしょうか。それとも、夫ではない、年若い愛人だから甘えるのでしょうか。

「そんなにいそがせないで、お馬鹿さん」

「ゆっくりしてって」

妻の言葉だけで、男の声はなかなか聞こえません。

「赤ちゃんね、そんなにわたしのオッパイが好きなの」

子供を生んだにしては、妻の乳房は豊満で乳首も小さくてくずれていません。

「御主人は」

突然、男の声がしました。私は耳をそばだてました。やはり夫の私を気にしている様子です。

「出勤したわ」

「おとといはびっくりしたな、まさか帰って来るとは思わなかった」

「大丈夫よ、何も云わなかったでしょう」

「でも、なさけなさそうな顔で泣き笑いしていたぜ」

「わたしが何をしようと、彼は何も云えないのよ」

「へえ」

「あんな奴、夫の資格なんてないんだから」

二人の会話はこれで切れました。妻があんなに乱れるとは、私は、気がつきませんでした。女は、男によってこうも変わるものなのでしょう。

押入れから覗こうとしたのは、間違いでした。かろうじて、妻の足の先が見えるだけでただじっと耳を澄ませて、妻と男の気配を感じ取るだけでした。

ただやたらに、心臓の鼓動が激しく波打ち

息苦しく、吐く息も荒げて、二人に押入れの中に居ることを発見されるのをおそれていただけでした。こんなことばかり心配していたとは、まさか信じないでしょうが、本当のことです。

押入れの中で尿意をもよおしたら困るなと思っていました。尿意をこらえることもなく、妻が化粧品のセールスマンを送って外に出たすきに、私は押入れを飛びだして庭に出ました。その日は、会社がひけるまで、エロダクションのつまらない映画を三本も見て時間をつぶしました。

この日から、妻の秘密を覗き見る快感が忘れられなくなっていました。

化粧品のセールスマンとのことは、私の留守中にひんばんに続けられたのでしょうか、二人のいる居間の窓の外をうろちよろしたことが一度あっただけで、二人の情事を窺視することはできませんでした。自宅では、残念ながら、隣室の客間の唐紙を開けでもしなければ見ることは不可能でした。

恥ずかしいことですが、窓の外をうろめたい気持とおかしなジェラシーを抱いてうろうろしたとき、廊下を走る妻の足音がしたので、とっさに便所に行くのだと思い、先廻り

して便所の下の小窓を少し開け、覗いてしまいました。たしかめたかったのですよ、わかりますか、この気持。

妻はしばらくしゃがんでいましたが、私はその結果に満足しました。

そのうち、化粧品のセールスマンの足が遠のきました。妻が男をあきてしまったのか、男が妻の体臭に辟易したのか、それはわかりません。セールスマンから買った高級化粧品の代金を、妻はとうとう一度も支払わなかったと自慢していましたから、男のほうであきれて逃げ出したのかもしれませんが。妻のチャッカリした性格の一部を見たような気がしました。私の安サラーリでは、とてもあんな高い化粧金をそろえることはできません。

その外に、妻の知っている男といたら、私の甥がいます。すぐ上の兄の子供なのですが、私立大学の一年ですから、まだ十九の若造です。兄が地方に転勤してしまい、大学の関係で、一人で下宿ずまいをしているのですが、たまに遊びに来て妻からこずかいをせびっていきます。子供のめんどどうもよくみられるし、ハイティーンの青い生活の話などを面白おかしく話してくれるので、世間のことは何も知らない妻などは、甥が来ると肉を買



って来てスキヤキをつくったり、ビールを飲ませたりして歓迎します。

セールスマンが来なくなってから半月程もたった頃でしょうか。久し振りにその甥が遊びに来て、私の妻が急に美しくなったとききりにほめ、こずかいをいつもよりよけいにせしめた様子でした。勿論、私はパイプカットを失敗したことなど、この甥に話しませんでした。恥ずかしくて話せるものじゃない。

その夜、にわか雨が降り、甥はとまっていた。いえ、にわか雨を理由にして、妻が無理に甥をひき止めたのです。二階の部屋で子供たちと一緒に寝るからとしきりに恐縮する甥なのに、妻はそわそわして、いそいそと私たちが寝る居間の隣の客間に、甥のために新調したばかりの客用の布団を敷く始末です。三人はすぐ休みました。

どうしたとか、妻が自分の布団に入らず私の布団にもぐりこんできました。こんなことは、男性失格してから以来、久しく無かったことです。妻は浴衣の下に何も着ていませんでした。

「馬鹿、隣りに甥が寝ているのだぞ」

そう叱っても、妻はフフ、とふくみ笑いをするだけでした。甥が隣りに居ると感じただ

けで私は落着きませんでした。もっとも、いくら刺激を受けてもなんの役にも立ちませんが。妻のからだはぼやっとあたたかく、しっとりと汗ばんでいました。甥と飲んだビールの酔もてつだって、私はすぐ眠ってしまいました。

どれくらい眠ったでしょうか。ふと眼がさめると、妻がいません。自分の布団に戻ったのかと寝返りを打ちましたが、どうしたことか妻の姿は、どこにも見あたらないのです。私はハッとしました。いやな予感がしたのです。

少し開いた唐紙から、隣室のあかりが漏れていました。私は息を止めて唐紙の隙間に身体をのりだしました。枕元のスタンドの薄明りの中で驚いたことを私は見てしまったのです。

一時間位、私は覗いていたでしょうか。終るとあわてて布団に戻り、私は寝たふりをしていました。と、どうでしょう。唐紙が開き浴衣を素肌にくぐりひっかけた妻が、いきなり私の顔をまたいだのです。

「寝たふりをしなくてもいいのよ」

妻は私の顔にかがみました。

「押入れの中から覗くより、らくだったでし

よう」

妻は私が押入れの中から、セールスマンとのことを覗いていたのを知っていたのです。靴の泥が落ちていたのでしょうか。それとも押入れの戸が少し開いていたので気がついたのでしょうか。押入れの中で息を荒げていた気配でわかったのでしょうか。

「これからお便所に行くけど、下の小窓を開けておきましょうか」

妻は私が便所を覗いたことも知っておりました。私の思考力は完全に麻痺し、激しい心臓の高鳴りだけが息苦しく胸を圧迫し、全身ががたがた慄えだすようでした。

何もかも知っていて、妻は私に見せつけていたのです。

男性失格、哀れな私は妻の不貞の理由に利用され、妻の快楽のための刺激剤の一つに転落していたのです。

私の眼の前が急に暗くなりました。豊満な妻の尻が私の顔を押つぶしたのです。妻が自分の甥と寝るなんて……私は妻の尻の下でそうつぶやいていました。

(終)

△戯文▽

# 新種 M 態位考

—ある男たちの秘めやかな会話—

保 藤 久 人



△最後まで読まれたら、また最初から読みかえて下さい▽

東Ⅱやあ、ずい分待たせたね。どうやら出来上ったようだ。一度目を通して見るかい。

西Ⅱすみませんね先生。えらいご苦勞をなさったん違いますやろか。

東Ⅱうん、まあな。ところで、それを見る前にぜひ君に訊いておきたいことがあるんだが、正直に答えてくれるかい？

西Ⅱなんですやろ。他の人やなく相手が先生やから、大抵のことならお答えします。

東Ⅱ君は、奥さんにくくられることがあるんだろ？

西Ⅱなんやと思ったら、そんなことですか。改って訊かれると言葉にはつきり出しにくくなりますが。ありますよ、ときどき。

東Ⅱ鞭打ちのようにぶたれることは？

西Ⅱそれもまあ、ないとは云いまへん。

東Ⅱそのとき、一体どのような気がするんだね。具体的な感覚や感想を聞かせて欲しいのだが、どうだろうな。

西Ⅱ変な話になりましたなあ。具体的に、といわれても困ります。が、一口に感想を、と訊かれたら、うれしいと返答するよりほかに、適切な表現はないようですな。



東「本当に嬉しいの？」

西「ええ、愉たのしくうれいすよ。なんとい  
ったらいいか、全身が急にこう、キュッと  
引き締まてきます。今、自分には自由がま  
ったくないんや。最愛の奥方の気ままな意  
思に盲従する以外に道はないんや、と、そ  
の思いだけで体中がカッカとほてって来ま  
す。からだの変化を冷たいような瞳で見つ  
められていることがまた、心理面に大きな  
作用をおよぼしてきます。

東「そういうものかな。ぼくにはよくわから  
ないが、そのとき、自分の姿がみじめな、  
という感じはしないのかい？」

西「ぜんぜんしません。逆に、いまに適当に  
操あやつられて玩弄がんろうされるといふ、妖しい期待  
で、胸の芯しんが熱くなってきました。先生にだ  
から正直にいまするが、小さな首輪を嵌はめ  
られることだってあります。ぐるぐると、  
残酷に部屋の中を何度も引き回されます。  
けど、死命を制せられているという感じだ  
けで、奇妙にも体が慄ふるえて燃えてくるので  
す。

東「うん。わかるような気がする。

西「背中をグイと踏まれます。先生もご存じ  
のように、うちの奥方は、あの通りのグラ

マラスな肢体の持主ですので、圧迫感も強  
烈です。しかし、いくらポリウム溢れると  
いっても、実際は、女性の脚一本なんやか  
ら、いくら私が非力だといっても男ですよ  
って、力で跳ね返そうと思えば不可能なこ  
とじゃおへん。ところが、そんな気持は一  
向に湧いてこないんです。

奥方の足の下にいう自意識で、充  
足感がつのってきて、知らず識らずのう  
ちに、まるで芋虫いもむしのように身をくねらせ、奥  
方の、もう片方の足先に吸い寄せられるよ  
うに、懸命に、唇を持って行こうとしてい  
るのやから、おかしいものです。

体をぶたれるのはビニール製のバンドで  
す。音の割に苦痛は少いということですが  
ど、それでも結構身にしてみてもたえます。

肌が赤くなりまっせ。痛い、苦しい、と  
我慢しながら、なにか、自分が奥方の感覚  
を損こったんやと、一種の観念ですやろか。

そう思っていると、なおさら、献身的な  
努力が必要だという奉愛精神が頭をもたげ  
て来て、たまらなくなってきました。

しかし先生、私は、呻きもしなければ哀  
願もしまへん。私は自分の妻を心から敬愛  
しています。そやから臆面もなく、奥方やな

んていうて崇あがめています。どんなことでも  
甘受して敬虔けいけんな気持で奉仕するのが当然や  
と思つてます。

東「わかるよ。その気持はよくわかるよ。君  
たちおふたりの形態は、客観的にいうなら  
俗にいうSとかMとかの部類に入るのだろ  
うが、ぼくはそうは思わない。尊い夫婦愛  
の結晶だと思うよ。ぼくは、ふとした偶然  
から、君たちを知ったことをしあわせだと  
感謝したいぐらいの心境なんだ。

君たちは、ぼくにとって一つの理想像な  
んだな。いまの君の話をきき、その感が一  
そう深まったような具合だ。

西「先生からそないにいわれると、なんや尻  
こそばいですがな。しかし先生、いまの私  
は、真そこからしあわせやと思つてます。

なるほど、先生のおっしゃるやうに、私  
たち夫婦はSとMとの結合です。Mの私は  
奥方の足下に拝跪はいきして、奉愛心に徹するこ  
とで人間としての快楽を満喫しています。

これが私自身の本質なのでどうにもならな  
いといえはそれまでですが、先生、M人士  
の窮極の願望というものは、神秘なるもの  
に口づけて、神秘物をと、それが真しんなる切  
願やおへんやろか。結局のところは「エロ

スの狂宴”みたいなものです。けれども、それもまた人間のSEXやと、これは、私の信念みたいなものですけど。

東Ⅱそれだ。そのことだよ。ぼくが君たちを自分の理想形態だと看做<sup>みな</sup>しているのはその現実の姿なんだ。君は奥さんに対して、口唇奉仕はもとより、液体をも尊い神泉として拝受している。ぼくはそのことが羨ましいんだ。ぼくの理念がそこにあるんだ。

西Ⅱ先生には理解してもらえるので、うれしおす。が、普通ならケツタイな夫婦やと思うことですやろ。さいわいなことに、奥方のファン也多いらしく、いろんなことを訊かれて困ります。あんなことを本気で詳細漏れなくしゃべれますかいな。先生にだけでっせ。先生にしゃべることは奥方の許可を得ています。それに、いつもいうように毎日戴くわけやおへん。そんなことになったら、もう気違い沙汰ですがな。

先生、SMとかいうもののことについてですが、Mの本質とでもいうのですか、苦痛と快楽は紙一重の差だなんて、よいいますやろ。しかし、私にはどうしても、そんな境地に没入することはできまへんな。

先の尖った鋭い鞭で打ちのめされ、肌を

裂かれて血みどろになり、その苦虐の果てでないと使いものにならないなんて、そうなたら世も末、人間性の崩壊と滅亡で完全な性格破綻者ですやろ。大きな顔をして世間を歩くこともできまへんがな。私はそんなのはご免です。そやから、SM的にいうなら、むしろ異端者かもわかりまへん。けど、私はそれでいいと思っています。

東Ⅱそれぞれ、そこんとこだよ。ぼくの惹<sup>ひ</sup>かれるのは――。社会の一員だという現実をよくよく認識して、なおかつ、その上でじゅう分に内生活をエンジョイしている。

ぼくは、その事実を立派だと思う。

さ、読んでくれたまえ。ぼくの理想を嗜好的な風味を織り込んで綴ったつもりだ。

君に気に入ってもらえるかどうかはわからないよ。しかし、君の内部に成熟している感受性というか、受感覚とでもいうか、そういうものにいくらかでもマッチしているようなら、ぼくはそれで満足なんだ。

西Ⅱ嘘でしょ先生。私が見ただけで満足するはずはおへん。うちの奥方に見て戴くのが目的ですやろ。

東Ⅱああ、本音を吐けばな。それに……。

西Ⅱわかってます。けど、断っておきますが

先生、何事も私の意思ではどうにもならないということを心得ておいてもらわぬと。

東Ⅱ承知しているよ、そのことは――。

西Ⅱそれじゃ先生、読まして戴きます。

エーと。なんや堅い漢字が並んでいる。

△拝面密着神聖型・二十三形態▽

ほう、二十三種類もおますの――？。こうして文字で書いてあると、けったいな具合ですな。先生、この拝面というのは？

東Ⅱ読んで字のごとし。つまり、直接にという意味だ。二十三種というのは基本で、そこからいろいろの応用形が生れてくる。

その“拝面”と対照的に△拝跪間隔狂崇型▽というのもあるが、この場合は、いわゆる神酒<sup>ネクタル</sup>だけが目的になり、ぼくの感覚にはほど遠いものになってしまふ。本当は、これでもマゾヒスト<sup>マゾヒスト</sup>の一員のつもりなのだが、ぼくのように奉愛精神の旺盛なもの、どうしても神酒<sup>ネクタル</sup>一辺倒にはなりきれない。それに、君たちのことを念慮するとなおさらだ。

西Ⅱわかりましたよ先生。一つずつ読んでいきますから適当に説明を頼みます。

東Ⅱ君には説明など不用だと思いがな。



西Ⅱ恐れ入りました。エーと。偉大なる女身

憧憬ですか？ 先生は以前からラーゲを研究していやはるときいていましたが、なるほど、なかなかいい文字が、並んでいます。しかし先生、この風流な名前は結構ですが、上のほうの、オナゴはんとオトコはんの区別は感心しまへん。これでは性書と同じことですが。公刊誌への掲載は不可能でせ。そうになったら、先生お困りどすやろ。いつか先生にお話した、うちの奥方のお友だちね、あのお方は、先生が自分の念願を誌上でもいいから公開する勇氣があり、また、その文章が気に入ったなら会うたるっておっしゃってます。

先生、あのお方のお写真をご覧になって感想はいかがです。高雅なお方ですやろ。

先生が真剣になってこんなものを書く気になられたのは、その辺に目的があるのやと、私はそう睨んでいます。

東Ⅱつまらないヒヤカシはよしてくれ。いけないのなら破って捨ててしまおう。

西Ⅱそんな無茶な。せっかくの機会を、短気でわやにしたらあきまへん。ここんところ、少し直しておくれやすな。ついでに、ここも上と下を入れ替えてほしいですな。

東Ⅱこれでいいのかい？

西Ⅱへえ、おおきに。これで結構です。

『立ち姿・基本姿勢四態』

△開脚直立姿勢Ⅱ偉大なる女身↓憧憬▽

(対向姿勢Ⅱ正坐・××××××××××)

先生、この前やら後ろやら、仰ぎ見るなんていうのは露骨すぎるやおへんか。適当に省いていってもよろしいな。

△開脚直立姿勢Ⅱジャイアント↓尊厳▽

△開脚膝曲姿勢Ⅱ横綱土俵入り↓雄姿▽

あの……この(対向姿勢)の胡坐やか半臥というのも意味があります。膝掌位というの、膝と掌ということですよ。

東Ⅱそうだ。四ツん這いという形だな。

西Ⅱいけまへんな。読んでいても感じが出すぎて、体がピクピクしますが。これじゃ

オトコはんの文字を消したけど、大した緩和になりまへん。これは全部省略します。

東Ⅱそれで意味がわかり納得できるのならかまわないが――。

西Ⅱあのね、先生。そこらあたりはなににもないほうがよろしい。注文つける必要がおまへん。読んだお方は、皆さんそれぞれに自分好みの対向姿勢を心の中でお考えになります。そのほうが夢があります。

△開脚前屈姿勢Ⅱ天の橋立↓戦慄▽

立ち姿はみんな勇壮でよろしいのに、これはまたなんです。風趣がおへんな。田んぼの道で、ご用してはるのを連想します。

東Ⅱそんな想定をしてはいけない。天の橋立

へ行って見るからだ。素敵なレディだつて悠然と覗いていらっしやる。覗かれながら、というのはどうだろう。思わずブルブルと慄えるのじゃないだろうか。つまり戦慄という感じになる、とぼくは思うが。

西Ⅱ悪うないです。見て戴く、ということはこれに勝る刺戟はおへん。少しカッコにこだわりましたが実感がともなっています。

けど、先生は肝心のことをお忘れや。

東Ⅱなんだい、その肝心のことは？

西Ⅱこの態位というもんは、みんな、偉大なる女神のお気の向くままや、ということですよ。その場になったら、どんな姿勢でも一切文句はいえまへん。

東Ⅱいわれなくてもよくわかっている。そのところがこれを書きたくなった動機だといつてもいい。何度もうように、これはぼくの理想なのだ。君も知っているようにぼくは通例的な△女王様と奴隸▽関係の否定者なのだ。ぼくの夢は、もっとお互に魂

の通い合ったものを求めている。本当いうと、この新種態位は、大半がぼくの脳裡に描かれて出来上った幻像なんだ。だから読む人は、甘ッ垂れた夢男だと冷笑することだろう。しかしそれでもいいんだ。ぼくはこんな形を自分の念願として生きているんだから——。君を相手と選び、奥さんに見てもらいたいと思うのもそのためだ。なんといっても、君たち夫婦の生活は、ぼくにとってはただ憧憬と羨望の二語で尽きてしまう。

西Ⅱ先生のお気持、うちの奥方ならきつとわかってくれはる。お友だちのあのお方も、えろろ先生のことを気にしておいでやが、そのあたりの微妙な感情を探っておいでやないかと、私はそないに思っています。

平身低頭して、ぶって下さい、踏んで下さい、なんていう狂熱的なマゾヒスト患者は敬遠したいお気持らしいです。

まあ、話はあとにして読むことにします。

東Ⅱああ、適宜修正しながら進んでくれたらいい。皮肉じゃなく、君はこの道の大家で先輩だからな。君の意見は尊重するよ。

西Ⅱいやですよ先生。冷や汗が出ます。

『坐り姿・基本姿勢七態』

いよいよ本格的になって来ましたな。

△閉脚膝坐姿勢Ⅱ神秘的麗身↓切願

△開脚膝坐姿勢Ⅱ優雅な社↓祈願

これはうれしいお姿ですな。先生のお言葉通り△女王様と奴隷△の関係では望めそうもありません。私のうれしいというのは実感です。

東Ⅱぼくまでうれしくなってくる。次だッ。

西Ⅱああ、出て来ましたなあ。

△前向跨坐姿勢Ⅱ調度品↓崇物

△逆向跨坐姿勢Ⅱ備品↓狂崇

なるほど、感じとしては上出来です。

東Ⅱその辺はいい感じじゃないよ。よくいうだろ。人間トイレだなんて——。あの言葉をきくとぼくは佻<sup>わび</sup>しくなってくる。真実、

狂崇だと思うよ。それが現実だとしたなら人間として悲劇じゃないだろうか。調度品や備品になることは人間性の破壊だ。ぼくは口づけの姿勢として列記したかったのだが、形態的に見ると極致の姿態になってしまふ。マゾヒストの夢幻なんだろうが。しかし、簡単に奴隷奴隷と口ではいうが、実態は、そんな生やさしいものじゃないはずだ。針の先ほどの失敗も、たちまち巨大な痛棒となって返ってくる。毆打と蹂躪<sup>おうちじゅうりん</sup>。息

も絶え絶えになるほど虐待されて、それでお終いということもあるだろう。なにしろ隷属物だからな。一切の発意や思念を剥奪<sup>はくだつ</sup>され、あらゆる辱態<sup>じよくたい</sup>や醜行<sup>しうかう</sup>を強いられる、と、これが奴隷の真の生態じゃないかな。必死になってご命令に従い、運が良ければお遊びとご褒美を兼ねて鞭を戴き、ありがとうごさいますと、お礼を言上してそのあとで、拝跪<sup>はいき</sup>してお情けに預りご奉仕するなんて、哀れな夢物語だ。

と、こんなふうになったら、いい過ぎだと叱られそうだが、現実の社会で、この完全な隷属形態が実現できるとは思えないのだ。だからぼくは、備品志望や隷従志願にかなり激しく抵抗をおぼえるんだ。

ただ、S女性に対するM男性という関りや結びつきは納得できるよ。なぜかって？ そのときは、お互いに自己を満たすという意思と思慮がある。つまり理解とでもいえる、人間としての心のつながりがあるからだ。その上での行為だとすると、はじめてプレイとかいう言葉も生きてくるし、夫婦なら、それが和合の基礎となる。そうじゃないだろうか？

西Ⅱ賛成です。私もときどき夫婦円満の秘訣



を、なんて尋ねられることがあります。

私は、奥さんのお尻に敷かれなはい、と答えることにしています。けど、ほんという

と、旦那はんをお尻に敷きつ放しの奥さんではあきまへん。敷き加減がむつかしい。

東君のところは、丁度ころ合の婦唱夫随というわけだな。

西君、そういった形ですやろな。先生、次に進んでいきます。

△前向正坐姿勢Ⅱ白い肉の宴→恍惚▽

△逆向正坐姿勢Ⅱ双丘下の悶え→甘美▽

先生、これは完璧な圧伏状態ですな。

さっき私は、苦痛に隣居する快楽の味覚はわからないといいましたが、実をいうとそれに似通った状態が、このポーズから感じることができます。苦しいんでっせ。

息も満足にできまへん。

胸や首から上にかけての強圧は絶対的な威服力がおます。無我夢中のうちに金魚のように、アップアップとわずかな隙間から生きようとして、希薄な空気を貪っていま

す。窒息して死ぬんじゃないか、と、鳥肌立つような恐怖が身内を貫ぬくんです。

と同時に、ゾーッとして、それがもうなんと形容できない戦慄となつて――。

一種の陶醉ですな。恍惚として忘我の域

をさ迷い、わずかに顔だけでもがいています。瀕死の動物のように――。そして、か

らただけは意気盛んで、細かく慄えつづけている、と、これは奥方の話ですがね。

先生にきかせるのは毒かも知れまへんが今、思っただけでもジーンと痺れてくる。

東君あまり、驚かせるのじゃないよ。

西君すみません。つい、その……。

△後反掌付姿勢Ⅱ初夏の夕暮→瞑想▽

暖いお水を浴びることもあり得るポーズ。

東君聖なるお水の戯れだよ。

西君シャレてますな。先生のお心の中にあるやつですな。

東君わかるかい？

西君まあね。普通ではなかなか、こんなお姿を拝見させては戴けません。

東君君のところでは、どうなんだ？

西君うちでッか？ いやですよ先生。そんなことを明細に説明したとわかったら、あとで奥方に折檻されますがな。ご想像におまかせします。次は椅子利用ですな。

『椅子坐り姿・基本姿勢二態』

△高脚型椅子坐姿勢Ⅱ情愛→歓喜▽

ああ先生、最高の愉悅のポーズが、とうとう出て来ましたな。もっとも喜ばしい時の訪れです。このときはただもう誠心誠意、そのことだけに熱中して頭の中は空っぽですな。生きているのは官能だけや。

東君――だろうな。お恥ずかしい次第だが、ぼくには幻想しかない。ぜひ、君に感覚的な推移を訊きたいと思っていた。

西君情愛とはうれしい言葉です。歓喜となる

と、まったくびつたり表現や。

いと高きあたりに御座します、拝ん見るも畏き御開き示し給う気高きお姿の御前に額突きて三拝九拝。潔めたる掌にて、聖なる器の、豊かに肉満てる白妙の糸底を捧げ参らせ、穢れ多き我が唇に恐懼し

つつ許させ給えと念じて――

まあ、こんな実感かいな。

東君おいおい、驚かすなよ。しかし、さすがだな。ぼくは羨望するばかりだ。

西君先生に気の毒やから先へ進みます。

△低脚型椅子坐姿勢Ⅱ気まぐれ→飢犬▽

先生、これは見事な絵になりますな。

気まぐれとは、そういうたもんや。ほんとに、ああいうお方は移り気なものです。

や、しまった。うっかり口が滑りました

が、ここんとは奥方に内しよでっせ。

そやけど、この脚の低い椅子というのは欠くことはできまへんな。私もそうやが、先生は一番好きと違いますか？

「御足に戯る」ですがな。ご馳走を眼の前にして「お預け」のあいだ、咽喉を鳴らして舌を伸ばし、涎を垂らしてお許しをいまかいまかと待っている。飢えた犬です。

それにしても、私たちの希求するお方たちの脚というものは、どうして、あんなにしなやかに、それでいて力強く動くんですやろ。また、あの指先の器用なこと——。

東「君の奥さん、いや、奥方の脚線は、とくにすぐれて美しい——」。

西「先生、タメ息ですか。うちの奥方の脚のキレイなことは、私が自慢したいぐらいやが、素足がまた格別です。それにまあ、なんと器用やおへんか。鼻でも耳でもチョイチョイと、まるで、おてと一しよや。舌なんかでも、うまい具合に撮んで引き出されてしまいます」。

東「それから、どうするんだ？」

西「へえ、その舌で……。あきまへんがな先生。うまく釣られて変なことまでしゃべりそうや。けど先生は、足の指への優しいマッサージが大好きで、お上手やということ

ですな。奥方のお友だちのあのお方が、このマッサージがとってもお好みやそうや。今から楽しみですか、先生！

今度は「床上床下姿・基本姿勢三態」

△床上仰臥姿勢△ 性宴の △感激▽  
△床上側臥姿勢△ 性宴の △感激▽  
△床上腹臥姿勢△ あとで △感謝▽

「戦いすんで日が暮れて」といった感じ。東「椅子の場合もだが、こういうときの態位というものは、数えきれぬほど変化があるし、対向の感覚も文字では表明できない」。

だから総合的に、感謝感激した上、真シ丸な部分を拝礼する光栄に浴する。

この比喩は、あまり感心できないな。西「まあね。しかし、お世話になったあとやから、感謝感激でよろしいがな」。

「純寝姿・基本姿勢三態」

理想のアップノーマルSEXを、先生はこのあたりから求めておいでと違いますか。

△仰臥姿勢△ 安らかな △悦楽▽  
△側臥姿勢△ 眠りへの △余香▽  
△腹臥姿勢△ いざない △耽美▽

東「情ない話だが、ぼくのは皆絵空事だ。君の話のきいて、そんなものかな、と思うこ

とのほうが多い。

西「そうでもおまへんやろに。オナゴはんかて、結構にお楽しみの方法は知っておいでですやろ」。

東「いや、この道ばかりはダメだな。君は別格だ。なんといっても夫婦だからな」。

西「すると、なんでっか。お独りのあいだは真実の味がわからんとおっしゃるので——」

東「いや違うよ。ぼくにとっては、皆、SEXだ。だから、その根底に男と女の情愛のようなものが欲しいのだ。だれとでも、という気になれず従って状況は困難が多い」。

空想は自由勝手だが、現実には冷たくきびしく、寂漠とした哀感だけがあとに残る。

西「先生のお言葉とは信じられまへん。私は発展家やときいていまっせ。独身の先生を羨ましいと思ったもんですのに——」。

東「贅沢というものだ。あんな麗しい奥方と一しよに暮していながら、そんなことを思うだけで罰が当る。君は、自分が果報者だと自惚れてもいい」。

西「その代り、浮気はできまへんで」。

東「浮気がしてみたいのかい？」

西「……」。

東「人並なことを口に出してみるだけだよ君」



は——。君には浮気はできないよ。移り気なんてあるはずがない。君は奥方に心酔しているじゃないか。その顔を見ればわかるよ。実をいうと、ぼくは君の奥さんの気まぐれなお遊びを、ずっと期待しつつ待っていたのだが、一向にその気配もない。

しかし、本当はどうなんだい？

西Ⅱさあ、どうですよ。案外、私が留守をしている今ごろ……。

東Ⅱチェッ。落ち着いているな。自信たっぷりだからかなわない。しかし、考えてみると、それほど君が奉愛し、奥さんも満足していらいしゃるということになる。

西Ⅱわかりまへんで。なにしろ、よく手紙が来ますし、私は仕事で昼間外出していることが多おすしな。正直にいうと、ぜんぜんないことはおまへん。けど、その関わりは微妙なものです。あ、いかん。こんなことまでしゃべったら、きつう怒られます。

東Ⅱもう一つだけきかせてくれないかなあ。どんなものか知らんが、奥方の寄り合があるそうじゃないか。君も行ったことがあるんだろ？ 複数というのは、いかにも魅力的だが、実際はどうなんだい？

西Ⅱ先生は悪智恵が働く。うまいこと、私か

らなにもかも訊き出すつもりですよ。

ま、仕方がおまへん。白状しましよ。

うちの奥方は同性の複数というのは、あのお友だち以外はおきらいどす。反対に、異性の複数に自分が一人であるという形が好きらしい。先生に、この新種態位考というものを書くように奨めたのは、第一の目的はあのお友だちに先生を宛行<sup>あてが</sup>うつもりらしいですが、同時に、先生と私を、と思っておいでらしい。そやから先生のことをすっかり調べて、気持も全部訊き出して、と、これが、きょうの私のいつかった役目や。

東Ⅱああ、驚いた。本当かい？ しかし悪い気がしないな。よし、ぼくのほうはなんでもしゃべる。さ、早くきいてくれ。

西Ⅱまあまあ、それはあとのことや。

『特殊な姿・変化並に別格姿勢四態』

△仰臥腰高姿勢Ⅱ美容のポーズ↓幻想▽  
えらいもんが出て来ましたなあ。考えられんことはおへん。実際的です。けど、腰高というのが問題や。

潮みちて、み開きたまう桃割れの

いずみ乾<sup>は</sup>さむと、やわ枕かう

てな具合やと本ものやが、先生のは少々意味が違うらしい。美容のためやとか、幻想

やとか、変な感じや。

東Ⅱああ、その通り、夢のポーズだ。

西Ⅱあきまへん先生。そんなことを頭の中に描いているのなら資格ゼロや。せつかくの力作も、これ一つで全部バアやがな。

私かて不可能です。奥方に、もうちょっと高こう、なんて、恐れおおうていえまへんで。絵にしたなら、ものすごく煽情的で耽美華麗やと思うけど、結果的には神秘的な美神への冒瀆になりますがな。

東Ⅱそうだろうな。正直にいうと、そこところは意識して書いた。仰臥四肢姿勢としたいぐらいの気持だったよ。

書きながら、奥方やあのひとの、その姿をふと思ったら急に胸が苦しくなってきたね。その夜は睡れなかったよ。

西Ⅱ当り前ですがな。こうなると先生への認識を改めんといかん。あのね、少々お尋ねしますが、今おっしゃった四肢というのはよく性書などに書いてある、掌と足だけという意味と一しょですか？

東Ⅱ……

西Ⅱあかんがな。それやったらS派のフェチシズムになってしまう。S趣味のオトコはんがオナゴはんに対して、せいぜい羞ずか

しいカッコをさせて玩弄してから、そのあとでちょっぴり悪戯半分に神秘の味を。

そんな図柄や。アベコベやがな。それが先生の本気やったら大変や。私はとにかくありのまま奥方に報告しまっせ。

東Ⅱそう興奮せずに落ち着いたらどうだ。ぼくの話も聞いてくれ。

西Ⅱなんやね。弁解ならききとうおまへん。

東Ⅱ君にならわかってもらえと思ったが。

西Ⅱわかりまへん!

東Ⅱまあまあ腰を落着けて――。

弁解じゃないよ。が、いつもぼくは、自分の理想を勝手にこしらえて話しているだろ。その根源がSM理念であることは間違いないが、ぼくが本志で求めているのは、単にSやMでなくもっと大きなもの、いわば人間の心なんだ。

いつの場合もぼくは自分の性をMとしてではなくSEXで表現しようとしている。

つまり、ぼくの女性への奉愛心は、あらゆるM的行為がイコール・SEXだ。

君も知っているようにぼくの本質はMなのだ。だから常に「尊貴な女体」を意識して、その対象になろうと努めている。これは自然な感情の推移だろう。だが、対象を

限定したとき、すなわち一步前進して、自分のこれから先の伴侶<sup>はんりや</sup>として考えた場合、また違った解答も出てくるように思う。

この歳になるまで独りでいるが、ぼくは独身主義でもないし意地を張っているわけでもない。本音を吐けば相手が欲しいよ。

だけど、結婚ということになると自然に考え込まずにはいられないんだ。恐しいんだよ、ぼくは自分という人間の性が――。

妻というものの満足できずに、特定の対象を求めての彷徨<sup>ほうこう</sup>を繰り返すのじゃないだろうか、と思ってね。かなり激しい懊悩<sup>ほうなう</sup>を重ねた時期もある。いろいろと考えたこともある。なんの結論も得られないのに。

しかし、やがてぼくは、人間である以上どんなお方にも、その度合に差異こそあれ内奥には必ずSとMの心理が同居しているのじゃないか、とふと思った。

ぼくが精神的に蘇生した思いをしたのはこのときからだ。愛情から情愛、その過程には理解がともなはずだとも思った。

もちろん、ぼくは相手を至上と崇<sup>あが</sup>めることだろう。しかし、時には幻想的な情景もあり、お互に満たし満されて心を通わす。

SとMとの本質的な現実からいえば、ぼ

くのようなのは奇形で叛逆者かも知れないし、君から見れば、度し難い奴かも知れぬが、その辺りに、ぼくのバラ色の人生があるんだ。普通では味合うことのできぬ、真実の、赤裸な人間の心の結びつきも生れ出てくるような気がして仕方がないんだ。

わかってもらえないかなこの心情を?

西Ⅱわかるような気がします。けど先生のは型破りや。私には考えられんことや。

東Ⅱそうだろうな。君はもう完成しているもの。しかしね、もう一つ突ッ込んだ考え方を

するなら、ぼくは「飽和<sup>ほうわ</sup>」という状態を恐れるね。完成とか完了とかいうことは、

物事の極点や終止を意味しているだろう。

ところが人間という動物は至って欲が深い。しかも順応性に富んでいる。ある意味でいうなら、もっとも始末におえない生き物だといえそう。

一応型に嵌まり満足し飽和点に到達したなら、今度はさらに、新しくより勝れたものへと欲心を注ぐようになる。いわゆるSMや、それに類する諸行為では、新鮮で奇抜な刺激<sup>ききうげき</sup>をということになり、ときには矯<sup>きよう</sup>激<sup>げき</sup>なと思える飛躍を試みようとする。

もちろん人間である以上、社会的な立場



への思慮もじゅう分で、その限界も心得ていて自分を減すことはまずないと思うよ。

が、たとえば君を例にしてみよう。

君は先ほど、奥方が君とぼくとをっていっただろう。君の話では奥さんは異性の複数をお好みだという。たぶんその実績もあるのだろう。もし今後、第二第三のぼくのような男が現われ、やがて君に「ご用」がなくなると仮定したら——。今の段階では考えられぬことでも可能性は否定できない。隷属という形態に定義的なものがあるとしたなら少しも不自然な現象ではない。

ただ、君の場合は夫婦だし、奥さんが心身ともに健全な才媛に加えて、生活そのものが融合して、微妙な独自のムードを醸し出している。その心配はないがね。

ぼくが君の家庭を理想視するのもそのためだ。けれども通例的にはいま云ったような、マンネリ以後の危険性を孕んでいることも事実だ。

ぼくがこの態位考を書くに当って、自分の見知らぬ夢想姿態まで挿入したのは、脳裡にある幻像を文字に綴ってみたかったのはもちろんだが、それ以上に、多彩な変化の可能性を追求し、ひしひしと幸福感を感じ

じとることのできるようなものの基礎を探ぐり出してみたかったのだ。不遜だがね。

西Ⅱ恥ずかしい話やが先生、私はそこまで考えたことはおへん。少し気になります。

東Ⅱいやー。ぼくのは屁理窟だから気にすることはない。第一、君の奥方はそんな方じゃないもの。そうだろ。アッハッハ。

ぼくのいうのは飽きられて見捨てられたマゾヒストのことを考えてのことだ。もちろん、ぼくも含めての話だよ。

知らないうちにはいいのだが、一度知ってしまうと麻薬と同じだ。早い話が、ぼくがそのいい見本だよ。だれかが「魔の味」といったが、これほど適切な表現はないとしみじみとぼくは思う。さいわいにもぼくには、いつからともなく独得の理論が生れて来て、その現実化を夢見ることによっていくらか自分を抑制してこられたがね。

西Ⅱわかりました。けど、ごく一般的なものとして、美容のポーズという形容は変更できまへんか。幻想は先生の夢として、お気持ちは奥方に伝えることにしますが。

東Ⅱそのままにしておいてくれないか。多分君は、その次にも苦情をいうと思うが。

西Ⅱ次——？ ああ、これですな。

△膝掌姿勢Ⅱ遊びに飽きて↓惑乱▽

マンネリ以後という形ですかいな。もったいないお姿やが、もうなにもいいまへん。しかし、その次のはややこしいな。

△双仰臥逆姿勢Ⅱ鍛練↓緊張▽

上と下との関係はわかります。また、逆やなかったら具合が悪いが——。

東Ⅱ醜悪なものを接触させず、膝を立ててソファ代りとなる。緊張させぬように終始緊張しつづける訓練！

西Ⅱえろろ皮肉ッばい形やな。

東Ⅱ夢を含めて暗示しているつもりだ。

西Ⅱ情愛の……ですか？

東Ⅱそういうことになるだろうな。問題はお終いの二十三番目のポーズだ。

西Ⅱほう、これはまた奇怪な形やがな。

△逆騎上姿勢Ⅱ盲しい馬↓悦戯▽  
一体、なんですな、これは——？

東Ⅱ無責任野郎と怒鳴られるかも知れぬが、実は、ぼくにもよくわからないんだ。ただ戯態の中には、そういう形態があっても決しておかしくないと思うのだが——。

可能性よりも形が重要なポイントだ。

西Ⅱ乗ッかるんですやろ。馬だというから。

ヘナヘナ馬では危っかしい。落ちてしまい

ますがな。そんなことになったら大変や。

東Ⅱ君が奥さんにくくられるときは、大抵後手だろう？　そして前面展供だろう？

西Ⅱへへへ……いやな質問ですな。まあ、そういうことになりますか——。

東Ⅱ指を組み合せて後ろ手を吊りあげ、手首が水平になるように縛る。肘を張って体の左右にはみ出るようにするんだな。両方の肩が鞍だ。肘の付け根のあたりが<sup>あぶみ</sup>。どんなものだろう。少し鍛えればなんとか立って歩けるかも知れない。

西Ⅱつぶれてしまいますがな。まるでサーカスや。しかし、実行できたらうれしい形ですな。私には無理なことですけど——。

東Ⅱ君があのお方の豊身を乗っけるのはまず不可能だろうな。押し潰されることは確実だ。が、君があぐらを組んでしつかりと腰を据えて坐り、奥方にはなにか……そうだな、タンスにでも掴まってもらって加減をして戴く……なんだい。変な顔をして。

西Ⅱいえ、ほかのことを考えてました。あのお友だちのお方と先生との組合せでなら、できることはおまへん。あのお方なら小柄なほうやし、先生の肩に乗ッかるのに丁度ころ合いや。

東Ⅱつまらんことをいうな！

西Ⅱうれしそうなお顔ですね。愛情やとか理解やなんて、むつかしいことをおっしゃっても、先生はやっぱりマゾヒストや。所詮は過剰なM性に<sup>わくでさ</sup>惑溺していやはる。心の中にはあのお方の写真の映像が大きく陣取っているのですやろ。うちの奥方に、というていやはるけど本心はもう……。

東Ⅱ冗談いってからかうのはよしてくれ。

西Ⅱいいえ、私の参考意見として奥方に報告しときます。ほらほら、先生のその、年甲斐もなく赧らんだお顔を、感情の動きの証拠として、カラーフィルムで撮っておきたいぐらいや。

東Ⅱ変なことをいってくれるなよ。

西Ⅱあきまへんで。うちの奥方にいい印象を与えておいて、おふた方にとおもてはるのと違いますか？　ずるいわ、先生！

東Ⅱ……。

西Ⅱまあよろしおす。これで二十三種類全部済んだんですな。大体うまく纏めてあると思います。夢も多くて結構でした。

ところで先生、少々お訊きしたいことがおますのや。

東Ⅱなんだい。急に改まされると気味が悪い。

西Ⅱきょうまで、ほんとにお独りですか？

東Ⅱああ、正真正銘の独り者だよ。

西Ⅱいいえ。私の訊いているのは、その、いろいろな関係のことです。

東Ⅱ実績……経験のことかい？　それなら極くわずかだ。君のようなわけにはいかん。

西Ⅱ量よりも質のほうが肝心や。だれかおいでですやろ。そやなかったら、こんなにたくさんのポーズが纏められるはずがない。

東Ⅱいつてるだろ。夢まぼろしばかりだと。本当に稀少なんだ。そのたびに莫大な支出をする。佗しい話だが、一回いくらということになる。

西Ⅱ当前ですがな。そんなところでお金を惜しんではあきまへん。なにしろ神秘への対面ですさかいな。

東Ⅱ君にかかっちゃたまらん。

はつきりいうと金額の多少によって違ってくる。お相手は、そういうことにはてんで関心はなく、好奇心と興味と、ほんのわずかの憐憫の情だけだ。いわば一種の商取引きだと割切っているらしい。そのうち、項目別の定価表ができるだろうな。味気ないもんだよ。

西Ⅱそれでも結構お楽しみですよ。そのつ



ど変化があつて悪い気はしまへんやろに。

東「人のことだと思つていいたい放題だな。

まあいいよ。今は君を羨むばかりだ。

西「うちの奥方が、お相手を申しつけはった  
ら、どないしやりますか？」

東「感激して——。が実際は、君のようにび  
ったりと呼吸が合わんだらうと少々心配な  
んだ。なんといつても、アブの真髓という  
意味では、ぼくは未知に等しいもの。

西「そんなことはおまへんやろ。けど、打て  
ば響く琴瑟相和す状態になるまでは並々な

### 毎月確実に入手されるために

#### 本誌予約購読者を募る

毎月二十五日確実発売!

一月分	1冊	三五〇円 (送20円)
三月分	3冊	一〇五〇円 (送共)
半年分	6冊	二一〇〇円 (送共)
一年分	12冊	四二〇〇円 (送共)

○本誌の入手がなかなか困難であるとか、  
或は地方のため、入手することが出来ないとか、  
かいう声を聞きます。又、毎月確実に、早い  
目に、手に入れたらいいという御希望をよく承り  
ます。そういった方々は、どうぞ是非月極御  
予約下さるようお願い致します。毎月製本完  
成と同時に、お手元までお届け致します。  
○直接予約購読のお申込みを下さるのには

らぬ努力が必要だ。このごろは別やが。

東「どんな具合なんだい、このごろは？」

西「口にするのは照れくさいが——。

あのね、私の氣を読んではるみたいでっ  
せ。先生のおっしゃる理想型ですな。

東「罪な男だな君は。タメ息が出る。ぼくは  
ね、すぐくムードに弱いんだ。ほら見ろ。

話をきいただけで汗びっしょりだ。

西「すまんこっちゃ。けど、しゃべらせる先  
生が悪いんや。きょうは原稿の下見やから

話もこれでお終いにします。これ、清書し

大阪市住吉区大領町四ノ六八、曉出版株式会  
社宛表記予約購読料をお払込みの上、何年何  
月号より何カ月分と御指定下さい。

○三月分以上お申込みの節は、送料、包装  
代などは、総べて当社にて負担致します。但

し一冊毎にお申込みの方は、送料として一冊分

二十円(切手可)の御負担を願います。

○本誌は十月号から定価三五〇円に値上げ  
になりましたので、予約購読料は三月分三冊

一〇五〇円、半年分六冊二一〇〇円、一年分  
十二冊四二〇〇円になります。今後当分の間

誌代の改訂はしない予定です。今後当分の間

○予約お申込みの方には、毎月二十日、印  
刷完成と同時に、外部から見えないように厳

重包装の上、一斉に発送申し上げます。

○毎月一冊宛お申込み下さる方は、誌代送  
料三七〇円をなるべく毎月十五日頃までに御

送金頂ければ、印刷完成と同時に、予約購読  
者の方の分と一緒に発送致します。

てもらえますな。奥方が見てお氣に召した

ら、あのお方へお返しになりますやろ。そ

のつもりで丁寧ね。

東「あのひとがご覧になるって——？」

西「エッヘッヘ。多分ね。

東「困ったな。きまりが悪いよ。

西「嘘や！内心喜んでいくくせに——。

じゃ先生頼みます。また来ます。先生や  
ないが、私かてムードに弱い。なんやしら

ん咽喉が乾いてきました。エッお茶？

そんなもんいりませんで——。

△了△

○予約購読のお申込みの際は、必ず何月号  
から何カ月分送れとお書き願います。第一回

分発送の際、明細表を雑誌に添布致します。

何月号からとお書きにならないときは、重複

や欠号をきたします。御留意願います。

○予約金が切れましたときは、封筒の上に

△本号にて前金切の判を捺印致しますから

継続お払込み願います。継続のお払込みでも

何月号からと御明記願います。

○局留にて雑誌をお受けとりになられる方

は、毎月二十五日頃、局へおいで下さい。局

留郵便物の受取り方は、先ず御注文の際にお受

取りに行きたい郵便局(特定郵便局でも結構  
です)と受取人のお名前とをお知らせ下され

ば、当方では御指定の局留としてお送りいた

しますから、数日後その局で御受領願います

局での留置期間は十日間です。その間に

お受取りにならないときは、発送人に返戻さ

## (読者原稿)

## 怪説・義仲をめぐる三人の女

黒田 寿

怪説・義仲をめぐる三人の女

私の町の一角に、葵・山吹というバーが並んでいる。私ならもう一軒、巴という店をだし、壁にはそれぞれの武者絵を、テーブルには彼女たちの生首を置きたい。

巴・葵・山吹。即ち義仲をめぐる三人の美女については、多くの説があるが、最近私でさえ生きのびたと信じていた巴の前が、助命を認められず、斬罪梟首に処せられた話を知りました。私が読む位だから、いい加減な説だろうが、これに勢を得て新黒田説をうちだしてみます。

○  
三人の美女のうち、葵の前は討死説が最も正しいとみられ、彼女を「生か」したのは、

新・平家物語の吉川英治ぐらいなものではないでしょうか。

礪波山の戦で、ライバル山吹の射た矢を下腹にうけ、傷さえなければこんな相手に負けるものかと、無念の齒がみをしながら首をとられた話は、築地氏の文にもあるし、私も一度書きましたが、今度は往生際を少し良くしてみます。

敵は尾張判官貞康。勝いくさとは云い条、朝からの追撃戦に疲れきっている上、下腹の矢傷も軽くはない。次第に受身となり、遂に右肩深く一刀を斬りこまれ、「むねーん」の絶叫と共に、葵の美しい身体はガックリと前にのめった。

得たりや賢しと貞康は、大刀を投げすて鎧通しを引きぬくや、痛手に屈せず起きあがろうとする葵を組みしき、一気に首をとろうとする。

葵も必死に抵抗。右手をうちふり、左手の甲で咽喉をおおって、首を搔かれるのを防ぎつつ、何とかはねかえそうと、しなやかな身体をうねらせ、弾力ある両脚をけている。

もてあました貞康は、さらばとばかり鎧通しをもちかえ、ふくよかな腹部めがけて、グサリ、グサリと二度まで刺し、重なる傷手に弱るところを完全におさえつける。

まだ刃先は軽く首すじにふれただけだが、ヒヤリとするその感触は、明かに死期の近い



のを意味し、葵の顔から血の気が引いた。

死の直前の感情は、はっきりその死相にでるものだ。あまり歯を食いしばっている歯をむきだしにした無念の形相となるし、首すじを十分にのばさないと頭だけになって、検分をうける時みにくい恰好となる。またうらめしように白眼をむいたりしないように、いよいよ首を掻かれる時は、身体中の力をゆるめ、目を軽くとし、口をむすぶのが当時出陣した女性のたしなみであった。

葵は実はまだ死にたくなかったが、女性ながら一方の旗頭をつとめる身、あまり未練ありげなふるまいはできない。内心これが夢であつたらと思いつつも

「わたしの武運は、もはやこれまで。さ、早く首を掻いて下さい」

と言わねばならなかった。

貞康の方は、いつでも容易にとれる首ではあるが、顔を上気させ、息をはずませた美女が観念するのをみれば、こちらも礼儀をつくさねばならぬ。

「いま一度お跳ね返し遊ばせ」

と、一応はすすめたが、葵も

「いいの。さ、早く首掻いて」

を、くりかえす。

もつとも、助かりそうもない傷手を負って、さっさと首打たれた方が有難いかもしれない。

「葵殿、お眼をつぶらせたまえ」

貞康は息をのむ葵の、乱れた黒髪をつかんで引っぱり右手の刃を、後方に引かれてせいいっぱいにのびた白く柔かい首すじにあて、エイッというかけ声もろ共グサリ！と突っこんだ。

激痛のため、葵の身体がピクリとこわばるのをしっかりとおさえつけ、柔かい皮膚と肉とを、グイグイ切り裂いていく。

一度はガチッと鋭い音と共に頸骨に当たって止ったが、更に鋭く後に刎ねあげた切尖は、新たにふきでる血しぶきのなか、雪の細頸を鮮やかに切断した。

この最期の瞬間に、葵の死にたくない本心があらわれたのか

「わあっ！、きえっ！、いたーい。えーっ。

ううーくやしーい！」

と絶叫をあげつつ、貞康の身体の下でもがいていたが、首を落してホッと一息ついたすきにスルリとぬけでて、尚も首を斬られた痛みにも耐えかねたものの如く、葵の首のない胴体は、二転三転、激しく疼れんし硬直しつつ

とびはねた。この間も、首の斬口からは激しく血汐が噴きだし、あたりいちめんに雨となつてふりしぶいた。

やがて十数秒もすると放血も一段落し、疼れんもおさまり、力のぬけた葵の、唐くれないの胴体はグンナリと横たわった。

貞康は鎧通しから滴々と血汐をしたたらせたまま、しばし呆然と美しい敵のむくろの、悲惨な動きをみつめていたが、やがて氣をとり直し、大地にころがった生首をつかみあげる。

斬口の血は早くも凝結しはじめ、頸椎が白くのぞいているのが無気味であった。これは長い黒髪によって馬の鞍につけられる。

燃えたつような緋威の鎧や陣太刀、小薙刀など葵の持物は、すべて当然の戦利品として貞康が奪いとり、馬の背にのせられる。鎧下を残したのは武士の情であった。

この時、葵の侍女百合が姿をあらわした。見れば我が主は、哀れ首のない死体となってスナナリした四肢を投げだしたまま、血汐のなかに横たわっているではないか。夢かと思なおしてみても、明らかにその身体には首がないし、また主人以外、こんなに美しい肢体の持主はいない。下着も、馬につけられた鎧

も、この日の朝自分が着けてやったもの。

馬の鞍に結ばれた生首……明らかに探し求めていた女主人のそれではないか。十六才の百合は、我を忘れてとびだした。

「葵様の仇、おまちください。わたしは侍女の百……ウ……ッ！」

名のりも終らぬうちに紫電一閃。何と簡単なことか、美少女の細首は宙天六尺も高く刎ねあがっていた。あまり早かったので、草むらに舞いおりた首に、苦痛の表情はまるでなかった。

引あげの途中、何か丸いものが馬の蹄にかけられ、コロコロと赤いものを点々とまきちらしながらろがったが、貞康はそんなものにはめもくれようとしなかった。

平家敗軍のなかではあるが、一軍の将である葵の前とあって、首実検を行うことになった。

武将の首を処理するのは武将の子女に限られている。控えの間におかれた葵の生首の前に多くの女性が集った。女というものは、自分より少しでも美しいものに対しては、にくしみを感ずるものだが、葵は首になっても、女性の目からみても美しく、全員がため息をもらしたほどである。

その時、一人の女がとびだし、首をけりとばし、狂気の如き笑声をたてながら黒髪をつかんでぶらさげ、顔に唾を吐きつけ、頬に平手打ちをくわせた。化石の様に蒼ざめていた顔にさっと赤味がさし、固くとじられていたつぶらな瞳が、とがめだてする様にひらく。この女は、さきの戦で葵に討たれた武士の娘であった。

葵の生首は微温湯を満した桶に浸される。黒髪にまでベットリとついていた血のりがとけて、湯はみるみる赤く染まった。何度も何度も湯をとりかえ、耳や鼻孔に至るまできれいに洗う。

軽くとじていた口には小柄をさしこんでひらき、一本づつ指をつっこんで、口腔から喉のおく、更に首の斬口へと湯を通した。

最後に上酒で洗い清め、乾いた布でよくふいてから髪をなでつけ、死化粧をほどこす。

こうして生けるが如くなまめかしい姿に返った葵の生首は、香をたきしめた首桶に入れて、検分の場所にはこぶのだ。

主将の前には三宝がおかれています。副将が首桶の蓋をとり、生首を三宝にのせかえる。

右手の指を耳の穴に入れ、左手は美しい曲線を画く顎の下にかけ、まるい、まっかな斬

口をさししめしてから死顔を正面にむける。主将が大きくうなずいて首実検は終るのだ。

これに対し胴体の方はどうなつたろう。

夕暮と共にあらわれた戦場かせぎが、なまめかしい下着姿をみのがすわけはなく、翌日味方によって収容されたそれらしい死体は、気の毒にも一糸まとわぬすっ裸にひきむかれていた。

この日の義仲軍は、ほかに八人の女兵を戦死させていた。いずれも首がなく、乳房その他をえぐりとられた死体では、誰が誰のものか判定が困難で、侍女も討たれているし、どうしても葵と区別のつかぬものが一体あり、ふたつとも塩をしこんだ酒に浸して保存しておいた。

それから三日後、安宅河原の松の木に、長い黒髪でもってぶらさげてあった葵の生首が発見され、首と胴体の斬口をあわせることにより、ようやく彼女のものがわかった。

旧暦五月に三日も経たにかかわらず、葵の死顔は美しくさを保っていた。それと同時に最後の瞬間の願望も残り、生に対する執着の色がありありと描かれていた。

勿論、敵も味方もその未練をとがめ、非難するものはいなかった。むしろ、いじらしい



美女の胸中をおしはかつて、聞くものすべて涙したという。

こうして葵の前の艶名は、御愛妾の討死として一時にとどろいた。

○

本妻の巴の前は、講談によると義仲の死後和田義盛に嫁し、豪傑朝比奈三郎を産んでいる。もっともこれは全くのデタラメだが言うが、更に信じがたい説がある。

捕われの身となった巴は遂に死罪と決定、頼朝の面前で首を刎ねられることになった。

いかなる美女といえども、生命あつてのも種。首と胴がはなれば、ただの物体にすぎない。武勇にもすぐれた殺すには惜しい女性とあつて、斬手をもとめても皆がしりごみし、名のりであるものがない。

止むを得ず、くじびきで決めようという時「それがしが討ちましよう」と名のりでたのは、ほかならぬ彼女を捕え、更に妻にと望んだ和田義盛であつた。

愁容と首の座についた巴は討手の方をふりむき、義盛と認めると、かすかなほえみを浮べ、目かくしの白布をことわり、かわりに櫛を所望した。

しずかに髪をくしけずると

「いざ、お討ちください」

と、ながい頸をさしのべる。

折からのぼる朝日をうけ、太刀がキラリと光ったとみるや、白刃は早くもくびれの深い美女の頸の下をくぐりぬけていた。カッたる頸骨を断つひびき。ピュツと、ほとばしる鮮血。二十六年の生涯は、ここに終った。

美しい首は喉の皮一枚を残して胴体から斬り放され、胸の前にダランとたれさがった。

巴の前は、しばらくそのままの姿勢を保っていたが、やがて己れの首を抱きかかえるように、上体は下肢の上にうちふせ、もうピクリとも動かなかった。

義盛は鎧通しをぬいて残る一枚の皮を切り離し、ズッシリと重い生首を抱きあげ、頼朝の前に進みでてさししめしたのち、この首級と櫛を所望する。

巴の前と言えば、オテンバの代名詞になる程。おとなしくてはつまらぬと言うなら、もうひとつの話。

時勢一変して追われる身となった義仲、主従僅か十数騎となつてはいたしかたなく、自刃を決意するが、この時巴は愛用の薙刀でもって、時をかせぐことを申しでる。

ただひとり、むらがる敵に対した巴の奮戦

はすさまじく、重い鎧をぬぎすて、ここを死場所と覚悟をきめた美女の肌をおおうのは、キリリと締めた純白のふんどしのみ。薙刀を水車の如くふりまわし、一步も敵を近づかせない。

手強しとみた敵は、遠くから矢を放つ。見事な腕前で次々と払い落したが、その数は限りなく、肩、腿、腕、腹と突き刺さる矢の数もましてゆき、雪をあざむく肢体も血だるまのよう。

「グサリ！」「ブツリ！」

同時に二本の矢が、喉と左乳房に矢羽根も埋れんばかりに突き立った。寄手はドツと歓声をあげたが、巴は一瞬ピクツとふるえたものの、薙刀を大きく頭上にふりあげ、両脚をふんばった姿勢のまま仆れずにいる。

驚いた寄手は、更に無数の矢を放つが、巴は何を考えたのか、今度はうち払おうともせず、なすがままにしているの、みるみる全身くまなく矢が突っ立ち、さながら針ねずみのよう。左の乳房だけでも八本も当たっているのだ。まる裸にもかかわらず一寸か二寸しか食いこまぬのが疑問であつたが、巴は平然と寄手の前に立ちふさがっていた。まるで木の幹にでも射こんでいるような手ごたえ。

「鬼女だ、鬼女にちがいない」

それにしてもあまりにも美しすぎるが、寄手のなかから恐怖の聲があがった。

疑問に思った侍大將が、大身の槍を小脇にかかえ、馬にまたがり猛烈な勢で体当りかけると、手もしびれんばかりの重い手ごたえがあり、穂先はふたつの乳房の中央を背中にぬけるほど食いこんで、さすがの巴の前もドゥッとおおむけに仆れた。

「巴殿、御奮戦お見事でござった。貴女様の御首級は拙者が貰い受けますぞ」

ヒラリと馬からおりた侍大將は、すばやく巴の傍にかけよるや、短刀をその頸におしあて、一気に掻ききろうとしたが、とたんに悲鳴をあげてとびのいた。

巴はすでに息絶えていたのだ。その身体はもはや木の如く固く、冷たくなっているではないか。死後硬直が死と同時にきた例で、この間に義仲は自刃する余裕ができた。

ノコギリでゴリゴリと斬り落された巴の生首は、京に送られ晒しものとなったが、彼女の死顔には会心の微笑が残っており、死してのちも、夫を守った巴の前の名は高くあがった。後年の伝説「弁慶の立往生」は、この話を焼き直したものである。

娘十八散華露

室井亜砂路



（デタラメもいいところ。でも女斗彦様、前川様。せめてあなたたちだけでも信じてください）

○

最後の山吹については残念ながら最も影がうすい。長谷川・京の二大スターを使った往年の映画「義仲をめぐる二人の女」でも、山吹を演じたのは、山本富士子という若手女優にすぎませんでした。有望視はされていたそうですが……

さて、義仲の女兵は主として後方で兵糧係をつとめていたが、戦局が不利になるにつれ、遂に第一線に投入された。

山吹の属する一隊三百人、小太刀を腰に半弓を手に、約五千人の大敵に対し勇敢に襲いかかった。

山吹と相対したのは六尺近い大兵の武士。四尺の陣太刀をビュウビュウふりまわしながらとびかかる。胴を狙った最初の一撃をかわし得なかった山吹は、あっと言う間に、上半身と下半身がべつべつになってふっとんでしまった。あまり簡単すぎて悲鳴をあげる余裕もない。

四半刻後、山吹の生首は仲間の女兵三百個のそれと共に、いっしょくたにカマスにつめ



こまれ、本陣にはこぼれていった。しかし、  
「本日の獲たる首級」の員数には入っていない。何故なら途中、車からこぼれおち、誰も拾おうとしなかったから……。

これではあまりにもあわれ。もうすこし活躍させましょう。

義仲最後の出撃に際し、山吹は病のため京に残されていた。

味方苦戦の報にいてもたってもおられず、僅か十数人の女兵と共にあとを追うが、ちょうど現在の大津駅附近までたどりついた時、敵方の部隊と遭遇するのである。

先頭を進んでいた一人が、突然悲鳴をあげてのけぞった。見ればその雪白の咽喉がえに一本の矢が突っ立ち、血汐に染まった矢羽根をブルブルふるわせているではないか。抱きあげてみたが、もう息は絶えている。

「敵だわ」

皆がさっと山吹を中心に戦闘態勢に入ったが、敵はあまりにも多く、行途は絶望以外の何ものもなかった。味方はもろくもくずれ、追われ、逃げ、組み伏せられては次々と美しい首を敵手にさずけていた。

四方から追いつめられた一人が、小太刀を投げすてると両手を高くあげた。気力も体力

もつき果て、降伏しようというのか。

「それもいいわよ」

山吹は口の中でつぶやいたが、非情な敵は彼女の胸ぐらをつかむや、短刀を左乳の下につきさす。声もたてずに仆れたところを無造作に首を掻き落した。

山吹は殆ど無表情でこれを見ていた。闘かえば間違いなく殺され、降ってもおそらく死は免がれまい。

「だけど、わたしは生きなくては。殿のお傍にゆくまでは」

山吹は自分を落ちつかせるため、静かに自分に言いしかせた。だが、どこに逃げ場があるのだろう。

突然、数人の敵が目の前にあらわれた。山吹は小太刀を握って、右股を突かれながらも一人を討ちとり、敵がちよっとたじろぐすきに、逃げようとしたが、残りの敵があとを追ってくる。

山吹は健気にも立ちどまって、又一人を仆したが、その時自分も左の乳房に、深く殆んどそぎ落されんばかりの傷をうけた。

「もうだめだわ。死ぬのかしら」

山吹は逃げながら思った。気がつくと前方からも左右からも敵がせまる。四方をみまわ

せば、味方すべてが死体となってちらばり、生き残りは彼女ひとりであった。

その死体のすさまじさ。乳房をネジ切られたもの。おへそを槍で地面にまで刺し止められたもの。下肢から裂かれ突かれ斬られているもの、或は四肢をブツ斬りにされ胴体だけのもの……ことごとく首を失っているのは言うまでもない。

「生きなくては……同じ死ぬのなら、せめて殿の馬前で……」

山吹の網膜に義仲の幻がうかんだ。殿！と叫ぼうとした時、下腹に激しい痛みを感じ、見れば鋭い槍が背中にくぬけるほどふかふかと食いこんでいる。

「死にたくない。生きたい……」

槍を食いこませたままヨロヨロと二三歩あるいた時、山吹は義仲の笑顔をみた。優しく笑って手まねきをしているような気がした。

その方に向って更に一步進んだ時、一刀が肩口から乳房をふたつに割るほど斬りつけてきた。

山吹はガックリと前にのめる。その背に七八本の白刃が、槍が同時に突きたてられる。

これほどの傷にかかわらず、山吹はまだ死んでいなかった。殆ど意識は消え果てようと

していたが、尚も両手を高く義仲の幻の方へと伸ばし、何ものかをまさぐるようにしていた。

「こいつめ、まだくたばらないのか」

一人が足をあげてけとばすと、山吹の身体は両脚をせいっぱいにおっぴろげた、見るも無惨な恰好にひっくりかえった。

更に一度つつ、胸や腹を突き刺し、左乳の下を大きくえぐる。眼瞼が尚もピクピクうごいていたが、やがて瞳孔が静かにひらき、その顔からもすべての表情が消えていった。

「もうよかろう。首を討て」

進みでた一人が、短刀を血にまみれた右耳

の下にあて、ググッと刺し通しながら右に引きまわすと、美しい首は胴体からゴロリと斬り放された。

討手は高らかに笑いながら、血の滴る生首をポンと仲間の方にほうりなげる。更に手から手へボールのように投げまわされ、さんざんなぶりものにしてから、ひろがったままの脚の間におかれた。

このような無念の最期をとげた山吹ではあるが、巴や葵が「御前」と呼ばれる將軍格なのに対し、せいぜい伍長か軍曹クラスの悲しさ、首実検をうけるどころか、獄門に梟ける価値もないと、空しく河原にすてられたまま

胴体と共に風雨にさらされ、醜く腐敗し、やがて白骨となって朽ちはててしまう。

黒田寿の「珍・平家物語」によれば、この日、大津に在った部隊からは、本陣にあてて「本日女兵十六人を討ちとる」との報告が行っているだけ、山吹のヤの字もでていない。大津駅前には山吹の墓があり、それには「義仲を慕いて山吹散りにけり」

の句が刻まれているとのこと。いずれにせよ私は、育ちのせいか義仲三人女のうち、一般ジンミンである山吹に最も心をひかれる。

(終)

## 告白手記

# 新妻の切腹

山岡里江

## 一、はじめに

よく人間の欲望には、きりがないと云われています。

それで切腹プレイの味を覚えてしまった私は、プレイが度重なるにつれて単なるプレイでは物足りなくなってきたのです。

本当にお腹を切ってみたい。そういう願望が私の体の中に日増しに成長して行っただけです。物差しを短刀の代りにしていたプレイか



ら始まって、おもちゃの刀、そして一年ばかり前には、余り多くもない貯金の中からお金を出して古道具屋から本物の短刀を買い入れました。でも、その短刀を使ったプレイにまでは仲々思い切れませんでした。

それは本物の刃物を使えば、当然のことながらお腹に傷がつくからです。女性である以上、将来結婚した時に、夫にそんな傷痕を見られたらどうしようと思う考えが先に立って



しまうからです。

こんなためらいと高まる願望に悶々としている中に、結婚と云う事になってしまったのです。結婚したら本当の短刀を使ったプレイなど思いもよらないことです。

そんな私に救いの神が現われたのです。それは古本屋で立読みした（残念ながらその時お金の持合せがなく買うことができなかったのですが）奇巧の旧号でした。たしか昭和二

十年代のものと思います。それにはこんな記事が載っていたのです。

昔、ある武将の家では代々花嫁を迎えると初夜のお床入りの前に夫の前で、花嫁が切腹の真似をして夫に忠誠を誓う風習があったと云うのです。

私は心の中でこれだと思いました。私の家に代々こう云う風習があつて……、他家に嫁入りする者でも、これに従わなければならぬ……、とすれば。こんな口実をつければ本物の短刀で、しかも夫の前でプレイができるかも知れない。幸いなことに身寄りのない私には、嘘をついても後でバレる心配はないのです。

そうして遂に念願を果たした私のプレイの経過を文章に綴ってみました。ただし、プレイ中に無我夢中になってしまい、自分で何をやってるか解らなくなってしまうところもあり、その部分は後で夫に聞いた話を参考にして文章を作りました。

## 二、口 実

「やっと、二人きりになれたな」

「ええ、ほんとね」

新婚旅行に旅立った私達二人は、新東海道

幹線で西に向っていました。

私は決心して切り出しました。夫が納得してくれればプレイの成功は疑いなしです。

「ねえ、あなた。一寸お願いがあるんだけど。私の家には代々変った風習があつてね。

家へお嫁に来る人、家からお嫁に行く人は『夫婦固めの切腹』って云う儀式をやることになつてゐるんですって、亡くなった母に聞いたんだけど」

「何だい、それは？」

夫はニヤニヤ笑いながら問いかけて来ました。

「それはね、結婚した晩に花嫁さんが夫の前で永久の貞淑を誓う意味で切腹の真似をして血を流す儀式なんですって」

「へえ、変った風習なんだな、西洋の黒ミサみたいなもんじゃないか。それでどうしたんだい」

「黒ミサなんて私、良く知らないけど。それでね、母が亡くなる時、私に先祖伝来の、ちよつとオーバーな云い方だけど、短刀をくれて、お前も御先祖様に負けないように、立派な切腹をやってくれて云われたの。それで私いろいろ考えた末、お母さんの遺言を実行したいんだけど、許して下さいさる？」

「だって、そんな事したら、お腹に傷がつくだろう」

その後、夫はしばらく考えているようでしたが、やがて、

「よし、里江のお母さんなら僕のお母さんでもある、里江がやる気ならやってもいいよ」

「ありがとう」

「でも途中で痛いなんて云って泣き出しでも知らないぞ」

いよいよ出来る、念願のプレイが。そう思うと私はうれしさがこみ上げて来るのと同時に異常な緊張を覚えました。

### 三、切 腹

京都東山の一角、そこに私達が初夜を迎える旅館があつたのです。

お風呂から上った私は、姿身の前に立ち全身にお化粧しました。用意した風呂敷包みから切腹のための衣裳をとり出しました。

下着には白いさらしの六尺ふんどしを垂れました。布の一端をお腹のあたりでおさえ、垂れた方を股に通し、腰を一巻きしてお尻の上で結びます。それからお腹のところでおさえ、垂れた方をはなし前に垂れ下ったところで股にカット綿をはさみ、垂れ下った布を股に

くぐらせて背中を廻した手で思いきり引き、股を少し開いた姿勢で、前袋を引きしぼります。股が締め上げられて痛いくらいですが、プレイの途中で苦痛に耐えかねて体をよじたりしたときにふんどしがゆるんだりしたらみつともないからです。カット綿をはさんだのは苦痛のあまり粗相しても恥かしくないようにと考えたからです。

その上には直接黒無地の薄手のウールの上着とスカートをつけました。両方ともシンプルなデザインのものです、上着は前開きの三ツボタン、襟は開襟で半袖、スカートは短かめのピッチリしたタイトで、いずれもこの日のために用意したものです。

胸の高なりを覚える中に、いよいよ儀式が始められました。私はビニールの大きな風呂敷の上に白布を敷きその上に正座しました。夫は私の正面に畳一帖ほど離れてきちんと服装を整えて座ってくれました。

私の前には母の形見と夫に偽ってある、本当は古道具屋で苦心して手に入れた短刀が置かれています。

「あなた、これから始めますけど、私がどんな格好になっても、どんな声を出してもじつと座って黙って見守っていて下さい」



「よし、解った。御先祖様に恥かしくないように立派にやりなさい。里江のお腹にどんな傷が残っても文句は云わないから」

夫は意外と積極的でした。きっと私と同じような性格なのかも知れません。それに実に真剣な顔でした。

私は何だがプレイとか儀式とかでなく私が本当に死ぬかのような錯覚におそわれて来ました。そして本当の短刀を使うプレイとしては最初にして最後になる筈だから思い切り深く切ろうと決心しました。

私は短刀を取り上げると鞘を払い、刀身にさらしを巻きつけ手で握った時に充分力が加えられるような太さにしました。切先が三程程のぞいています。刃物屋さん頼んで研いでもらったので剃刀程度の切れ味であることはすでに確かめてあります。こののぞいている切先、三程をお腹に埋め込むのです。初めの中は五程くらいと情けないことを考えていたのですが、前にお医者さんから聞いた話。女の人のお腹の皮は薄い人でも五程、厚い人だったら十程はある——を思い出して三程と決心したのです。私のお腹の皮だったら七、八程はあるかも知れないと考えたのです。私はきちんと座り直すと、

「只今より里江が夫婦固めの切腹をいたしました、どうぞお見届け下さい」

そう云ってから両手をつきました。上体を起した私を夫が喰い入るような眼で見つめています。

私は上着のボタンを上から一つずつ外して行きました。最後の一つが外された時、前が少しはだけて俯向いた私に素肌が見えます。「失礼します」

一言云うと私は思い切って上着の前を開き右袖を抜きました。上半身裸体と云うのは、あまりにも恥かしいので、左腕は袖に通したままにして着衣の名ごりをとどめたつもりでしたが、正面から見ればないも同じでした。無意識の中に胸を覆った両手を静かに下に下し、スカートのカギホックに手をかけました。そしてファスナー。前にも云ったようにスーツの下は前袋をぎりぎりに絞り上げた六尺ふんどし一本なのです。

ゆるんだスカートの隙間から左手を差し入れ、ふんどしの前袋を掌で覆うと、腰を浮かし一気にスカートを、腰のあたりまでずり下げました。前袋はちゃんと肌を包んでいるだろうかと思ひながら左手をずらすと、あまり完全ではないようでした。でも今さらどうす

ることもできません。お腹を充分露出するために、そこまで前袋を絞っていたのです。パンティか、少なくともビキニパンティくらいは穿いていると思ったのでしょうか。夫は下にふんどし一本しか締めていない私を見て驚いたようでした。

私は右手で短刀を逆手に握りました。背筋をピンと伸ばし、お腹を突き出すようにしてグッと力を入れました。左手で下腹を撫ぜ廻す中に、私の胸はドキドキして来ました。左手を左下腹にピタリとつけ、平行に並んだ人さし指と中指の隙き間に、そっと切先をこすり込みました。チクリと針で刺されたような痛み、右手にグッと力を入れると、切先が肌に突き刺さったのでしよう。激痛が全身を走りまわります。大きく息をした私は、そっと左手を下腹から離しました。切先はほんの五程程皮膚を突き破っているだけなのです。これだけの痛みでたったこれだけしか突き刺さっていないとは、私は急に恐ろしくなってきました。予定通り三程も突き刺したら、痛さで失神してしまうのではないのでしょうか。もしそんなことになったら恥しい……。私は自信がなくなってきました。短刀代りの物差でやるプレイとは大分わけが違います。

こんな生ぬるいことでは切腹どころか、腹に短刀を突き立てることさえできない。よしっ、思いきってやろう。

私は短刀を両手で力一杯握り締め、切先を左下腹から十糎程離すと、吸い込んだ息を止め下腹をせり出すようにして思いきり突き立てました。

「ブスッ」

オーバーですが、そんな音がしたような感じがしました。次の瞬間、

「ウワアッ」

と叫び声をあげると、上体が弓なりにそり返りました。

夫が思わず腰を浮かします。

この痛みはもう文章では表現できません。

僅かの間に私は心の平静を取り戻すことが出来ました。でもジーンと熱っぽい痛みが感じられます。これだけ突き刺しても失神しなかったと思うと、私はまた自信が出て来ました。

右手で短刀を突き刺すように力を加え、左手で刀身の峯を押すようにして切り進みました。息づかいが段々早くなるのが、自分にもよくわかります。そして苦痛に耐えるために私はグッと歯を喰いしばりました。それでも

耐え切れず、時々

「ウウウッ、アアッ」

「アアアッ、痛っ、」

と悲鳴をあげ体をよじらなければなりませんでした。でも、その度毎に私の脳裏には、あの念願の切腹をやっているんだと云う満足感のようなものがひらめきました。

おへその下五糎ばかりの所を横一文字に二十糎ほど切るのに五分かかりました。でも私には二時間も三時間もかかったような気がしました。

短刀を抜き取った私は初めて自分の傷口を見つめました。下腹の横一文字にパツクリ口を開けた傷口、皮膚の白い脂肪層、その奥の赤い肉の断面、そしてそこからじみ出る様に流れ出す赤い血のり。その流れは私の心臓の鼓動に調子を合せているのです。そして真っ白だったふんどしは、ドブプリと赤い液体を吸い込んでいるようです。そして腰から下だけを覆っているスカートのウール地も、胫のあたりに血だまりができています。

ズキンズキンと痛みが下腹から次第に腹部、背部に伝わり、焼けつくような感じで、喉がとても乾いてきました。

ここで止めておけばよかったのかも知れま

せん。でも、何とか一文字腹を切りおせたいと私は少し欲を出してしまったのです。とどめの一突きをおへそにと思ったのです。

私は膝に力を入れスカートの許す限り左右に開けて立ち膝になりました。体を動かした途端、傷口が動いたのでしょうか。

「ウウム」

と思わずうならなければならぬひどい痛みが全身に走りました。

短刀を再び両手で握りしめると、立ち膝のまま刀身をねじるようにしながら、おへそのくぼみに切先をたたきつけました。だから切先はえぐるような具合でおへそに突き刺ったのです。

「ギャーッ」

けだものじみた声を立てて私はのけぞるとそのまま膝が宙をとんでお向けに倒れてしまいました。その途端、私の両手は短刀をほうり出し、血の吹き出すおへそを抑えて、お向けに転がったまま、しばらくの間は

「痛いっ、痛いっ、ウウッ」

と叫びながら体をよじり続けました。

夫がたまりかねて口を開きました。

「里江、大丈夫か」

「は、はい。痛いっ、痛いけど、我慢できま



す。ウウウツ、大丈夫、よ」

そう云うのがやっとで、やがて私は気が遠くなってしまいました。

私は直ぐに意識をとり戻しましたが、それからの後始末が大変でした。

傷口にはペニシリン軟膏を塗り、さらしの腹帯をきつく締めましたが、三日間ぐらひは断続的にかなりの出血がありました。私が横になっていた間に夫が部屋の片づけをしてくれたのには深く感謝しています。

それに新婚旅行の間中、普通の夫婦のする

ようなことは何も出来ませんでした。これも夫に済まないと思っています。とにかく切腹が終ってから三時間程した明け方には、多少発熱したらしく寒けを感じたり、翌日は、夫の止めるのを振り切って予定の旅行コースをたどったところ、乗物に揺られたり、他人に押されたりする度毎に下腹を激痛が走り、思わず呻めいたくらいでした。

#### 四、あ と が き

この最初にして最後のプレイを通じて一番

## 女性写真モデル募集

本誌の内容充実のため

奮て御応募下さい

○本誌では、更に内容の充実を計るため、広く写真撮影に応募することの出来る女性のモデルを募集いたします。

○本誌愛読の女性の方でしたら、年令、遠近は問いません。誌上発表の可否については十分御希望を考慮いたします。又、助手介添え或はプレイのみの出演御希望の方も一応御照会して下さい。

○出演又は参加御希望の方は、年令、略歴記載の上、編集部宛お申込み下されば、報酬そ

の他詳細につき、お返事いたします。

○出演並に参加報酬については、十分期待に添うよう考慮いたします。

○応募されました方々の個人的な秘密は固く厳守いたしますから御安心下さい。尚お好みの傾向を附記下されば好都合です。

○本誌の内容充実のため、並に皆様の文献研究資料作成のため、奮て御応募御参加下さるよう、お待ちいたします。余暇を利用しての御参加も大いに歓迎いたします。

○特に妊婦資料の作成に御協力下さる婦人とS的傾向を持ち、サジスチンとして活躍頂ける女性を求めています。撮影可能の方は、遠近に拘らず御一報願います。

△奇ク編集部▽

感じたことは、本当の切腹が如何にむずかしいかと云うことです。特にお腹の皮の厚い女性の場合、腸がとび出す程深く切るなどと云うことは不可能なのではないでしょうか。大抵はその前に失神してしまいそうです。ですから女性の場合の切腹は形式だけで、胸とか候を突いて致命傷を与えない限り死にきるのは至難の業と云えましょう。

傷の全治には約一カ月もかかりました。傷口を縫ったりしなかったので、傷の両側の肉が盛り上り、巾三程程の皮膚の色の変った痕が残ってしまいました。お風呂屋さんでこんな傷痕や形のくずれたおへそを他人に見られるのが恥しかったのですが、半年以上も経った今では全く平気で、姿見の鏡に傷痕を映してみたりしています。

でも考えてみるとずいぶん、むちゃなことをしたと思います。あんな狂気じみた行為をみて夫はさぞ驚いたことでしょうに、傷痕を見ても、さり気なく眼をそらすだけで、何もいいません。いま私はこの気持の大らかな夫に心から感謝し、チョッピリ後悔しながら幸福感に酔っています。

☆

☆

☆

☆

☆

☆

## 舟田コンサルタント事件簿 NO・1

## 秘 東京情報 (後篇)

夜 乃 探 郎

二人の女性の受難を、舟田コンサルタントが傍観している筈がなかった。初め、靈元教の調査を調査部に命じた所長の舟田秀彦は、若い男子部員に代って、二人の娘がそれを行っているという聞いて驚愕した。しょせんこういう調査は女手には無理なことが判りきっている。しかも相当の危険が伴う場合もあるのだ。舟田所長がみゆき達の行動と、彼女等が事務所を出てから三時間も連絡を断っていることを知ったのは、退社間際の午後五時であった。

「とにかく、平山君。君は彼女たちの直接の上司として、さらに、彼女達の申出を承認し

て、危険な仕事におもむかせた責任がある。直ちに靈元教に潜入するよう努力してくれ給え」

「はい、承知しました」

若いやり手の平山は、責任の重大さに蒼白な顔をしてうなずいた。

「それから、調査部全員で、その附近をパトロールすること。特に、車の出入に注意して、ナンバーを控えておくこと」

「車と申しますと？」

「靈元教はこれから電話や直接、問合せをする。もちろん警察にも協力を求めるから、それらの動きが教団側にわからない筈はな

い。とすると彼等は次にどう出るか？」

「――」

「おそらく、本部に置いてはまずいもの、つまり書類とか、彼女たちを他の安全な所へ移そうとするに違いない。それをキャッチしなければならぬのだ」

「警察の方は？」

「まだ誘拐と決ったわけではないから、警察はすぐには動いてくれないだろう。しかも靈元教は政財界の大物とつながっているというから、容易には動けないだろう」

「畜生！」

平山は口惜しそうに唇を噛んだ。



「いいか、諸君。今夜は徹夜どころか、みゆき、由里子両君の無事な顔を見るまで、不眠不休を覚悟してもらいたい」

「はい」

舟田秀彦は重大な決意をそのまじりに秘めて、部員を激励した。

「まさに、事は重大である。舟田コンサルタントの致命傷になるかも知れないだけでなく、若い女性の生命、純潔にも関わる一大事なのだ。」

——舟田コンサルタントが総力を上げて、霊元教との対決に活動を始めたところ、例の一室では、二人の娘たちがさまざまに恥かしめに精も魂も尽き果てて死んだようになって倒れていた。

「由里ちゃん、由里ちゃん」

みゆきがささやくように由里子を呼んだ。

彼女たちは今も後ろ手に縛られたままの裸身である。ただ、由里子のアミパンティだけが、彼女たちの身につけた唯一の下着であった。

「なに？、みゆきさん」

「気がついたのね。今、何時頃かしら」

「そうね、もう夜じゃないかしら」

「事務所じゃ心配してるでしょうね」

「わたしたちを、助けに来てくれるかしら」

二人の希望は、それだけだった。そして、それは希望というよりは確信であった。精鋭を選びすぐった舟田コンサルタント。そして行動派のチャンピオンとして斯界に名声をさせている舟田秀彦。彼等がこのまま手をこまねいている筈はないのだ。みゆきも由里子も舟田の鋭利な洞察力とスーパーマン的な活躍を幾度も眼のあたりに見ていた。だからこそ、彼女らは舟田に対して限りない尊敬と、あこがれを抱いているのだ。

「きつと来てくれるわ。だから、それまで頑張りましょう。弱気になっちゃ駄目よ」

「ええ」

二人ははげましあいながら、その心の片隅で、なにか奇妙な親密さを感じていた。お互いの被害者意識が、同僚や友人というよりもっと力強い同類意識を芽生えさせていたのである。それはあるいは一種の同性愛的感情の起点だったのかもしれない。

「由里ちゃん」

みゆきは無性に由里子をいとしいと思い、裸身をすり寄せた。縛られていなければ、彼女はきつと由里子を抱き締めていただろう。

——誰にも云えないような恥しい責めを受け、その上、みゆきの顔は、さっきシートでこするように拭うまでは、由里子の生理のそれで彩られていたのだ。それはたしかに二人にとって不浄なものに違いなかったが、一度でもそういう異常なつながりを持つと、それがかえって二人の友情を強めたいらしい。

「みゆきさん、さっきはごめんなさいネ」

「いいのよ。わたし、ちっとも気にしてないわ。それどころか、なんだか由里ちゃんがとっても、好きになっちゃった」

それはただの強がりではなかった。そして由里子も同じ気持だった。二人は、いざり寄って肌が触れ合うように体をすり寄せた。なぜか一途に体中が火照っていった。

「もう夜かしら？」

「そうね、お腹すかない？」

「すかない。それより、わたしトイレに行きたいわ」

「わたしもよ」

——二人にとって、さっきまでの身をよじるような絶望よりも、今は身近かな生理的要求をどう始末するか、の方が重大事だった。

「困ったわ」

「もう少し我慢出来ない？、今に誰か来る

わ

「でも人が来ると、また嫌らしいことするんじゃないでしょう」

「だけど、その辺へしちゃって、あとでエッチなことされるよりいいかも知れないわ」

「それもそうね。わたしは生理の方もあつし……」

「でも、由里ちゃん是不幸中の幸いだったわ。メンスのおかげで、おかしいことされなくて済みそうだし……。わたしはまだ一週間もあとだから……」

——苦労を通り越すと、それ以上はどんな苦労も感じなくなってしまう。二人の娘も絶望と不安を通り越してかえって冷静さを取戻していた。身に薄物一つまとわず、誰にも見せたことのない乙女の肌をあますところなく灯の下にさらしながら、みゆきも由里子も、羞恥の感情を置き忘れたようだった。

「早く、誰か来ないかしら」

とうとうみゆきは、我慢しきれないように可愛い尻を振り始めた。その時、突然ドアが荒々しく開いた。

「さあ、お嬢さん。めし持って来たぜ」

入ってきたのは、井を両手に持った吉村。

その背後から巫女スタイルのさっきの女。男

たちから主任と呼ばれる勝村洋子である。

「どう、あんたたち。もう正直に云ってくれろ？、あらあら、二人ともみっともない恰好して。おや、こっちは生理なの？」

みゆきは黙ってそっぽを向いたが、由里子はいついなずいて、あまえるように、

「すみませんけど、手をほどこいて下さい。わたし、お手当てしないと……」

「お気の毒ね。だけどその手をほどこいてあげるわけにはいかないのよ。でも、手なんて使わなくても食事は出来るでしょ。犬や猫は手を使わないわ」

床の上へ井を置くと出て行く吉村の後から女も去ろうとするので、みゆきはあわてて体の向きを変え、女に声をかけた。

「お願い。トイレに行かせて」

「あら、そう云えば午後から全然行ってなかったわね。大きいのか、小さいのか？」

「どっちもよ。ネ、お願い、この手を……」

「わたしも、お願いします」

「ふふ」

女は冷笑した。

「手はそのままよ。女だって、逃げ出そうと思えば、なにをやるかわかったものじゃないから。でも、トイレは何か持ってきてあげる

わ。そのへんに、そそうされたんじゃないか困るから。手なんて使わないでする工夫をすることね。吉村さん、何かいらなくなった洗面器でも持って来て」

吉村は五分とかからぬうちに、ホーローのはげかかった洗面器を持ってあらわれた。

「じゃ、明日までね。早く白状すれば楽にさせてあげるのに。でも、わたしたちも忙しいからね、明日お相手してあげるわ」

皮肉な笑みを浮べて二人は去った。

二人の若い女性は今にも云う氣力をなくして沈黙していた。尿意は一層激しくつづいてくる。みゆきがたまらなくなつて尻をもぞもぞ動かし始めると、由里子も釣られたように腰を振りはじめた。

「みゆきさん、どうしよう」

「仕方がないわ。誰も見ているわけじゃない、それへするしかないわ。でも、手がこれじゃ……」

「わたしが始末してあげるわ」

「そうね、わたしもあなたにしてあげるわ」

二人はなんとなく火照った体をもてあますようにベッドに起き上った。

「じゃ、由里ちゃん、早く」

「いいの、わたし後で。みゆきさんこそ」



いくら同じ境遇で恥かしい姿を見せ合っている同性とはいえ、ことがただけにやはりあまり悪さが先に立った。しかし、いつまでもゆずり合っているわけにはいかなかった。みゆきは激しい羞恥心をふり払うように腰を上げた。

「じゃ、頼んでよ。わたし、我慢出来なくなっちゃった」

彼女はつとめて明るく無難作に云うと、ひよいとベッドから降りた。誰に見られているわけじゃなし——彼女は部屋の隅に投げ出されている洗面器をまたいだ。しかし、彼女等は安心しきっていたが、その姿を覗いている好色な眼があったのだ。女主任がみゆきたちに皮肉そうな笑みを投げかけていった意味——みゆき達の監禁されている部屋から見ればなんの変哲もないモザイクの壁飾りが、隣り合った密室からは絶妙な覗き窓になっていたのだ。そして、今もそこには、靈元教の陰の部分の同志である五十年輩の男が三人、グラスをかたむけながら、みゆきたちの姿に淫らかな眼を向けていた。

若い娘が排泄しているなまなましい光景に続いて、背中に廻された手を使って、なんとか友だちの始末をしてやろうとしているパン

ネットの娘——だが、通り一遍のやり方で、うまくいく筈がなかった。とうとうみゆきは床に這いつくばり膝を心持ち広げ臀部をピラミッドのように持ち上げてやっと成功した。

由里子はパンネットをはいているだけ、みゆきの場合よりもなお厄介だった。それでも彼女たちはまるで恥かしさを忘れたようにアクロバットの的な姿態をとり、やっと後始末を終えたのだった。——その一挙手、一投足に至るまで、男たちのなぐさみものになっていたのだが……。みゆきも由里子も、それを知らない。

若い、汚れを知らない処女二人にとっての屈辱的な一夜が明けた。娘盛りの美しさも、一皮むけば生臭い動物であり一匹のメスでしかなかったことを思い知らされたみゆきと由里子。——彼女たちがせつないほど待ち望んでいた救いの手は遂に現れなかったのだ。

青春の夢に胸をはずませていた、昨日の朝とあまりにも一変した今朝。みゆきも由里子も、やがて訪れるだろう淫らな世界を思うと無意識のうちに体が慄えるのだった。彼女たちの人生はもう彼女たち自身の手で切り拓くことのできないものとなってしまったのだろ

うか。

朝、始めに現れたのは勝村洋子だった。彼女はやや陰のある美貌の持ち主だが、相変らず冷やかな口調で、

「どう、何か云いたいことあって？」

「……」

「相変らず強情ね、優しい顔してるわりに。ま、貴女たちが何の目的で来たか知らないけど、靈元教は簡単に、ツブされたりしないわよ。だから、今更黙否権なんて使ったって無駄というものよ。だいたい貴女たちがウロチヨロしたって問題にしてないのよ」

「それなら、帰して頂戴！」

「帰してあげたいわ、でも駄目。今ここではね、処女が払底してるのよ。だから貴女たちは貴重な商品でわけ。せいぜい稼がせてもらう寸法なのよ」

みゆきが思わず唇を噛んだ時、ドアを開けて北見が入ってきた。

「主任、用意ができました。荷物はこれで全部です」

ベッドの上へ投げ出された物を見てみゆきも由里子も期せずして眼を輝かした。華やかな色彩——それは彼女たちのハンドバッグやスーツだった。

「さあ、いくらなんでも、そんな恰好じゃカタなしだわ。早くこれを着なさいよ。これから外出してもらうからね」

北見は毛布をひきはがし、あわてて身をすぼめる二人の娘の後ろ手に縛ってある細紐を解きはじめた。嫌応なしに桃色の水々しい肌を男の眼にさらし、昨日の責めを思い出し、みゆきはぶるぶる体をふるわせた。しなやかな肩、くびれた胴、そして可愛らしく盛り上った臀部のふくらみ。

北見はなめるように女体の隅々を見据え、故意にあちこちに手を触れたりしながら、紐を解いた。

やっと自由を取戻した二人が、あわただしく服を着て、久し振りに人心地がついたようにほっとしたのも束の間、彼女等は追いつてられるように、裏の車庫へ連れて行かれた。勝村洋子の指示で、北見と吉村が監視役をとめた。

「なんだか、この教団のまわりをウロチョロしているへんな連中がいるんでね。あんたたちは一応支部の修練場へ移ってもらうのさ。向うはこと違ってお仲間がたくさんいて、馴れれば結構楽しいわよ」

トヨペットコロナのライトバンが差し当っ

ての護送車であった。二人は、後部の荷台に載せられたルームクーラーの空箱の中へ押し込められた。

「じゃ頼むわよ。——へんなやつが後をつけるようだったら、うまくまいちゃってネ」

運転は北見。吉村は助手である。目的地は福島県、甲子高原にある霊元教修練場であった。

真紅のコロナバンは四号国道を北に向って疾走していた。時間は午後一時近く。すでに福島県へ入っている。

「北見さん、そこらで一休みしませんか」

「あと一時間で修練場だ。向うへ着いたらゆっくり休めるじゃないか」

「そのかわり、このスケたちとも、お別れでしょう。ねえ、北見さん、ここでお別れのヌードでも拝ませてもらいませんか？」

若い吉村の脳裡に昨日展開された二人の乙女の露骨極まりないショーの光景がよみがえった。

「俺は、あのはねっかえりの娘、痔があるのは艶消しだけど、ああいうタイプの女はいいね」

「しかし、いくら裸にしたところで、それだけじゃ仕方ねえだろ」

「まったく、本部も罪なこといやがる。据膳食っちゃいけねえってんだから。でもね、北見さん、車をスッ飛ばしたお蔭で三十分から一時間は早く着くんだ。だから、少し位眼の保養をしたって……」

吉村に執拗に云われると、もとより北見も好色な点では人後に落ちない男である。しかも、これほど美しい娘を思いのままにいたぶることなど、二度とないかも知れないのだ。

「よし、じゃ、そこで休むとするか」

「オーケー。横道へ入って、山の中へでも車を止めようや」

吉村は期待に眼を輝かせた。

「おい、ねえちゃんよ。休ませてやるぜ」

後部の段ボール箱の方へ呼びかけたが、返事はない。

「聞えねえのか？ それとも窮屈でノビちまったのかな」

しかし、箱の中の二人に聞えない筈はなかった。みゆきも由里子もチャンス到来とばかり胸をときめかしていたのだ。この機会を逃してはならない。うまく逃走はできなくてもSOSの連絡ぐらいは出来るかも知れない。そのために彼女らは箱の中の四時間を有効に使っていた。コンパクトの中や、ハンカチ、



それにアンネナプキンにまでも、口紅を使つて書いた。——「助けて、警察へ、京橋舟田コンサルタント、みゆき、由里子」と。

車が止った。県境の山の中、四号国道である。人一人位しか通れない小径が左側に上に向って伸びている。

「北見さん、横道へ入らなくても、大丈夫かな」

「構わねえよ。通行がとだえたら、その道を上って行こう」

「よっしゃ」

吉村は道傍へ降りて車の後部へ廻った。前後を見渡すと、車も人も見えない。

「ねえちゃんよ。一休みさせてやろうか」

一休み、というのがどういうことなのか、百も承知しながら、みゆきは答えた。

「お願い、休ませて。トイレに行きたいの」  
「なるほど、朝から全然やってねえんだな。よし、よし」

吉村は思わずニヤリとした。みゆきのすんなり伸び切った薄桃色の裸身が眼に浮ぶようだ。みずみずしい乳房、可愛い乳首。ようやく車から降り立ったみゆきと由里子。膝がガクガクふるえて、やっと立っているだけだが降りしきる陽光を浴びると、なんとなくファ

イトがあふれてくる。——頑張るわ、頑張らなくちゃノ

二人はめいめいにハンドバッグを固く抱きしめた。その中には例の連絡用の小道具がつまっているのだ。

「さあ、歩けよ」

運転席から降りた北見は左手に黒光りするブローニングをかざし、二人をうながした。

「早くしろノ」

なるべくぐずついで車の通るのを待ちたい二人だが、北見の凄惨な形相に思わず足が出てしまう。

吉村の先導で四人の男女はシダに覆われた緑のトンネルをくぐり、上へ昇って行った。

「ここでもいいだろう」

そこは雑木にかこまれた五メートル四方程の平坦地である。国道から二百メートルも離れているだろうか。車のクラクションが遠くに聞える。もちろん、みゆき達が泣いてもわめいても、どうにもならないだろう。

「さあ、手を後ろへ廻せよ」

吉村は用意したロープを両手でしごいてみせた。

「いや、それだけは勘忍して。——逃げたりしないから」

ここで自由をうばわれたら百年目だ。みゆきはつぶらな瞳をキツとみひらいて、必死の表情である。しかし、飛びかかった吉村の腕から逃れようにも、長い時間、窮屈な場所に押し込まれていたためか四肢の自由がきかなかった。彼女はわずかにいやいやをするような弱い抵抗を示しただけで、もろくも後ろ手にくくられてしまった。勝気なみゆきがその始末なのだから、由里子の方は反抗の気構えこそは燃えたぎっているのに、体が云うことをきかず、これもあっけなく自由をうばわれてしまった。

「お願い、トイレへ……」

「ああ、そうか、お前達我慢してたんだな」  
「だから、ちょっとだけこの手をほどいて」

みゆきは演技だけでなく、シンから哀れっぽく吉村を見上げた。もう我慢の限界が近づいているのだ、その真剣な眼の色や、腰つきが尋常ではない。

「ぜいたくを云うなよ。——俺が手伝ってやるから安心しな」

「いやノ」

みゆきは泣きだしそうな声を上げた。いくらなんでも、こんな男にノと思うと体中がぶるぶるふるえた。

「ね、お願い、手を！」

「駄目だ。そら、ぬがしてやらあ」

吉村は彼女の背後から、スラックスを降しにかかった。形のいいヒップを包んだ純白のパンティがあらわにされる。

「ああ、やめて！」

必死にさからう彼女の体の動きをよそに、みゆきは遂に、あられもない姿にされてしまった。

「早くやれ！ あんまり我慢していると体に悪いぜ」

吉村は、みゆきの正面に立っている北見と顔を見合せて皮肉そうな冷笑を浮べた。

「ひどい！ ひどいわ！」

みゆきはあふれ出る涙をどうすることも出来ない。悪党！、エッチ！、助平！、ありとあらゆる悪罵を胸の中で吐きつづけながら、彼女はあることを考えはじめていた。

——どうせ何も彼もこの男たちの眼にさらしてしまっただけなのだ。いくら恥かしがっても口惜しがっても空しいのだ。それよりも、この男たちの云うがままになって、少しでも油断させた方が利口かも知れない。そう思うと、彼女はなんとなく気が軽くなった。無論娘盛りの羞恥心がなくなったわけではない。

恥かしさを押し殺すいじらしい決意が、彼女を大胆にした。

——激しい音を立ててほとばしる水滴。一瞬、男たちの視線はそこに集中した。彼等は思わず息を呑んだ。

「やった！」と声には出さないが、吉村は心中快哉を叫んだ。——ざまを見る、きたならしいアマめ！、手前なんて、ちっとも美しくねえぞ。なんだ、そのざまは！、——美しい処女を思い切り汚し、いたぶることが、恋人のいない吉村にとっての欲求不満を解消する最高の手段だったのかも知れない。

由里子はみゆきのあられもない姿から、眼をそむけ、さっきから一心に祈りつづけていた。——神様、早くわたしたちを助けて下さい。

「終りか？ ふいてやろうか？」

「……」

みゆきは睨目したままそれには答えない。彼女はしゃがんだまま、左右にひろげた膝を閉じようともしなかった。凝視されていることに、奇妙な、くすぐったいような快感じみたものがあつた。

彼女は、はいつくばるように、凝視している男に対して、かえって憐れみのような優越

感さえ覚えはじめていた。排尿を終えた生理的な解放感が、たとえ一瞬ではあっても羞恥を忘れさせた。彼女は薄目をあけて吉村を見た。そして男がまるでよだれでも流しそうな表情を崩さず、みつめているのを知ると、意を決したように下腹に力をこめた。

——白日のもとに、それは人間として当然の生理的な営みではあったが、このような形であばかれると、たちまち醜悪で、しかも目くらめく魅惑を伴った見世物になった。

——重苦しい沈黙のなかで、四人の男女は静止してしまつたフィルムの一コマのようにしばらくは動くことを忘れていた。最初に動いたのは吉村だった。彼は、みゆきの妙にさっぱりとした表情とは逆に、彼の方が被害者であるかの如く、顔を醜くゆがめていた。

「……」

彼は無言のまま、起き上ると、尻のポケットからチリ紙を取り出した。みゆきはまるで別人のように平静だった。さっきまでの彼女ならこの場合、進退きわまって大声で泣き叫んだかも知れない。しかし、今、彼女は至極当然のように、吉村の作業に協力するように両脚をピンと伸し、豊かな臀部を突き出したのである。



みゆきの心理に、微妙な変化が起きたことは、それを嫌応なく見せつけられていた由里子の胸にも伝わっていた。そうだが、みゆきさん、偉いわ。汚れるのはわたしたちじゃなくて、この男たちなのだから。

「お願い、わたしも……」

その声は流石にかすれていたが、その言葉を発したことで、由里子は何となく今までの苦しみや絶望が嘘のような、楽な気持ちになった。

「ね、早く。我慢が……」

彼女は、まるで母親にあまえる子供のよう

に、腰をくねらせた。

「う、うむ。……」  
ノドがカラカラに乾いたように絶句したのは、もちろん由里子ではなく、北見の方だった。彼は無器用な手つきで、由里子の背後に廻りスカートをまくった。薄もののスリッパを透して見える可憐な脚がさわやかな色気をまき散らした。

ほどなく由里子は、まるで人形のように無表情のまま、そこにしゃがんだ。彼女は体に似合わない派手な音をたてて終えた。

「もうおしまいだわ、お願い」

「紙はハンドバッグだったな」

そう北見にきかれて、由里子はギョツとして我にかえた。いけない！ バッグがあげられたらおしまいだ。ナプキンにはあれが書いてある――。

「いいの。――すみません」

そう云いながら、由里子は、今までの落着きが音をたてて崩壊してゆくを感じた。すると、忘れていた羞恥心が竜巻のように彼女の全身によみがえってきたのである。

彼女の顔だけでなく露出した二つの丸いふくらみや太腿まで、パツと朱に染った。彼女はもうどうしようもなかった。男の手がパンティを元通りにするのを待ちかねたように、身をよじらせ、二三步後退した。それが男たちの情欲に錯乱した頭脳をもとに戻したのだろう。北見は一瞬われに返って、由里子に跳びかかった。

「吉村、油断するな。このアマ、ふてえヤツだ。俺たちをたらしこんで、逃げようって吐かせ」

「なに？！」

吉村はみゆきの顔を両手ではさんで、穴のあくほどにらんだ。

「貴様、ほんとか？！」

「何云ってるのよ、こんな姿で、わたしが逃

げられると思って？」

みゆきは努めて、ふてくされたような口調で云った。たしかに身につけているものは、可愛い臍までのぞかせている短いブラウスだけ、こんな姿で、若い娘に何が出来よう。

「それもそうだな。北見さん、ビクつくことはないよ。たとえ一人位逃げ出したところであとの一人がいるんだ。いいかお前たち」

吉村はみゆきと由里子を交互に見た。

「どっちか一人でも逃げてみる。あとに残った仲間がどんな目に会わされるか、俺は知らねえよ」

「逃げません、わたしたち絶対に逃げたりなんかしませんから、この手だけほいで……」  
みゆきはさっきからの成行きから、なんとなく吉村に、組しやすいものを感じている。が、彼女の淡い期待も一言のもとにはねつけられてしまった。

「ぜいたく云うな、おいネエちゃん。そのままでも結構用が足せたじゃねえか。綺麗に拭いても貰ったしさ」

吉村は背後からみゆきをギョツと抱きしめると、ブラウスの中へもどかしそうに手を突っ込んだ。

「うう……」

彼女のうめきをよそに、その汗ばんだ掌は固い蕾つぼみのような胸のふくらみを容赦なくいたぶり始めた。

「あ、あ……やめて！」

みゆきは上半身を覆ったブラウスも、首のあたりにまでまくり上げられた。責めるというよりも、それは明らかに、愛撫の変型だった。みゆき自身、始めは死にたくなるようないやらしい行為と置いていたものが、いつか体中をかきむしられるような奇妙な感情に変わって、無意識のうちに、悩ましいうめき声を吐き出していた。

「いや、やめて……」

彼女は弱々しく首を振ったが、その言葉さえ彼女は無意識のうちに発したものだ。

「吉村、いい加減にしないか。貴様、我慢出来なくなるぞ」

たまりかねて北見が声を掛けたが、吉村は熱中して忘我の表情である。

「だい……じょ……うぶだ。もうチット泣かしてやりあ……いいんだ！」

「そりゃそうだが、もう時間がないぜ」

「……」

吉村は何か答えたが、それは、声にならな

彼が何物かにつかれたように次の行為に移った時、北見は慌てて彼を制止しようとした。

「やめろ貴様、本部の命令を忘れたのか！」

北見の怒声を浴びながら、吉村は手をぶるぶるふるわせている。

「やめろ、吉村！」

北見は遂に吉村の背後から組みついて制止しようとする。吉村が手を離れた時、体中の力が抜けてしまったように、よろよろとそこに崩れ落ちたみゆきも、本能的に身の危険を感じてかたつむりのように体をちぢめたが、それでも安心できず、不安定な足取りで二、三步後退した。

「北見さん、大丈夫だ、やりやしねえよ。だから離してくれ！」

吉村は顔を醜くゆがめた。

「本当だな」

「ああ」

次の瞬間、そこに展開した生臭い光景に、北見は眼をそむけた。

流石に色蒼ざめたみゆきと由里子を中には

さんで、北見と吉村は山道を下りはじめた。

彼等の妙な罪の意識から、二人の娘はよく縄を解かれ、両手の自由を回復していた。

淫らで、あさましい行為のお相手という、若い処女にとって耐えられない犠牲の代償として、彼女等がせつないほど待ち望んでいたチャンスがやってきたのだ。

みゆき達にとって更に幸運だったことは、被害者の彼女たち以上に、二人の男は疲労困憊したように、放心している。

小道が急激に開けて国道に連なる所で、まず、みゆきが隠し持ったブローチをさつと道傍に投げた。由里子のナプキンは鼻をかんだチリ紙と一緒にアスファルトの上に――。

「お願い、顔を直させて」

みゆきに哀願されて、その顔をみじめに汚した当事者の吉村はあっさり許しを与えた。彼女は車の側にうずくまり、化粧を直すふりをして、彼らの油断を待った。

真紅のコロナバンが音もなく走り去った後に、日光の反射を受けてきらめく銀色のコンパクト。その鏡の表面に、――助けて、警察か京橋の舟田コンサルタントへ――みゆき、由里子。

霊元教修練場は甲子高原といっても奥まった福島、栃木の県境にある。緑に囲まれた丘の上のビルは、近代的なクリーム色の高級マ



ンションといった外観だが、その内部では、想像を絶した悦楽の儀式が日夜をわかつた行われているのである。つまり、東京の本部での宗教的な活動の蔭で、信者の中からピックアップした美しい女性や、性的不満にもだえる人妻、未亡人などを、ひそかにこの修練場に送りこんでコールガールを育成するのだ。彼女等は送り込まれて旬日を待たず、麻薬中毒患者となって、もうこの世界からぬけ出そうなどとは二度と考えなくなってしまう。

——ビルの地上三階は、もっともらしい布教の場になっていて、何も知らない善男善女がせっせと信仰にはげんでいるのだが、秘密の地下二階は豪華な酒池肉林の歓楽境となっている。

午後三時、——ここへ送り込まれたみゆきと由里子は、地下一階の奥まった拘禁室へ。コンクリートの壁で囲まれた室内には古ぼけたベッドが一台あるだけだが、蛍光灯は痛いほどまぶしかった。二人はまるで囚人のように、バッグやベルトなどを取り上げられ、着のみのままではうり込まれた。

「みゆきさん。いったい、この先どうなるのかしら……」

たとえ救出の手を信じてはいても、可弱い

女同志、つい弱音もはきたくなる。由里子はベッドの端にちょこんと腰かけ、不安そうにみゆきを仰ぎ見た。

「そうね」

みゆきは立ったまま腕組みをして、その掌で顎をちよいとつまんだ。ふだんからの彼女の得意のポーズである。そんなしぐさが自然に出るのは、彼女が心に余裕を持った一つのあらわれであろう。

「あのSOSは、早ければわたし達があそこを発った直後、おそくても今頃は誰か人の手に渡っていると思うの。そうすると、その人が警察へ連絡するのに永くても一時間あれば充分よ」

「でも、もし子供か誰か拾っちゃったら」

「大丈夫よ。あの国道はドライバー以外は、そんなに人は通らないから」

「そうね、そうすると、わたしたちの事務所にも、もう照会が行く頃ね」

「そうよ。だから、もうすぐ助けに来てくれるわよ。おそくても、今日中よ。頑張らないうよ、ね」

みゆきは自信満々である。あれほど、処女として最大の恥かしめという犠牲を払ったのだもの、成功しない筈はない！

みゆきのはげましに、由里子もやっと顔色をとり戻した。

「でも、ここは地下室らしいけど、先生たちにわかるかしら」

「わかるわよ、舟田センス、そこいらの凡ク（ほん）ラとは違うわ」

「……それまで、この部屋へ誰も来なければいいけど」

「そうね、またあんなこと……」

二人は昨日の気狂いじみた凌辱の記憶をよみがえらせて、思わず体中がカッと火照るのを覚えた。みゆきにとって、由里子の血に染った肉体の生々しい感触は、どうにもならない強烈な印象として忘れることはできなかったし、由里子も自分の女の秘密をすべてさらけだした姿を思い出すと、口惜しさ恥かしさを通り越して情なくなってくるのである。しかも、そんなあさましい運命がいつまたやってくるか知れないのだ。

「でも、もうあんなことはしないとわ」

「そうね、あの二人、相当の変りものだったのよ。ことにあの若いヤツ。男が皆あんなにケダモノみたいなら、わたし絶望だわ」

たしかに、肉体こそみずみずしい女そのものに違いないが、心は夢見勝ちの少女にすぎ

ないのだ。男性に対する知識も、知識というよりあこがれといった方が適切なロマンチックな娘であった。みゆきは、考えるだけでたまらなくなり、両手で顔を覆った。

「いやだわ、ほんとに、いやらしい！」

早く、またあんなことのないうちに、助けに来て。——しかし、彼女たちの希いは空しかったようだ。

重々しい音と共に開かれたドアの背後から姿を現わした三人の男。一人は北見だが、あとの二人は二十才前後、背広の仕立工合からも、北見よりずっと上役らしかった。

「この娘たちが、スパイだというのかね」

「そうらしいんです。一応、宣教師で調べたんですが、なにしろ強情な女たちで白状しないんです。しかし、持物に小型カメラやトランシーバーなど、女の持物にしちゃ変なものがあつたんで、間違いないと思います。それに、この女達<sup>たち</sup>の消息をききに、警察やら何やら正体不明の男が出入りするんで……」

「なるほど、相当容疑は濃いわけだな」

メガネをかけた瘦身の男は、みゆきたちを見てニヤリと笑った。その視線に、北見や吉村と同じ色を感じて、みゆきは思わず身をすくめた。

「いったい、どんな訊ね方をしたのかね。相手が若い娘なので手加減したのではないか」  
「いえ……」

北見はちよつとどきまぎしたが、

「かなりきつくやっではみたんですが、とにかく今時の娘にしちゃ珍らしい位、口が固いんで、手こずりました」

「感心していちゃいかんよ。われわれの敵の正体を早いとこつきとめなければ対策の立てようがないんだ。無視してもかまわぬ程度の相手ならまだしも、もしモミ消し工作が必要だとなると、一刻も早くしなければいかんだ」

「……」

「とにかく後はこちらでやる。北見君、ご苦労でした」

北見が去つた後、二人はあらためてみゆきと由里子<sup>（とうぜん）</sup>を傲然と見下し、

「さて、なかなか強情で、ご立派なお嬢さん方。君たちがいくら沈黙を守ったところで、運命は変らない。どんなことが起ろうとも、君たちはここから帰ることは許されない。ここで一人前のコールドガールとして生れ交ってもらうことになっているのだ」

「いやです、そんなこと。そんなことになっ

たら、わたしたち死んでやる」

みゆきの決意をみなぎらせた言葉も男は馬耳東風に聞き流して、

「どうぞ、どうぞ。今年になって、バカな女が三人自殺した。闇から闇へ消えて、誰も悲しむ者もない。ただそれだけだ」

「……」

「しかし、その他のほとんどの女たちは、ここが楽しくて出て行けといつても絶対に出て行かない。ここはこの世の極楽だからだ。君たちにも、やがてそれがわかる」

「いいえ。わたしたちは、どんな辛い目にあつても負けやしないわ。きっと逃げて見せるわ」

「なかなかかけなげな覚悟だ。しかし、ここでは辛い目などに会わせやしない。その代り、死にたくなるほど楽しくさせてやるだけなのだ」

男たちは顔を見合せてうなずきあつた。みゆきはその表情から、これから彼女たちに対して行われることが、昨日から今日にかけて体験した責めと同様の淫らなものであることを知った。

「しかし、それも君たちの態度一つでは、そんなことにせず、やさしい事務担当に廻して



もいいのだ。どうだね、お嬢さん」

おどしたり、すかししたり、そんな男たちの言葉の端から、霊元教が相当神経質になっていることを察して、彼女たちは、自信を持った。二人は眼と眼で誓いあった。——もう少しよ、頑張りましたよ。

「とにかく、君たちにいいものを見せよう。

それでも見れば気が変わるかも知れない」

二人はその部屋からトンネルのようなせまい通路をよこぎり、別室へ連行された。

そこは上品な旅館か料理屋を思わせる日本間であった。正面の襖をとり払うと次の間には桃色のシェードにむせぶような寝具が敷かれて、この部屋の使途は一目瞭然である。ただ片側の壁一面が大きな鏡でふさがれているのが奇異な感じであった。思わず眼をそむけて片隅に肩を寄せ合ってうずくまるみゆきと由里子。彼女らの小羊のようなおのきを冷然と見ながらメガネの男は命令を下す。

「山木君。一応、お嬢さん方が暴れないように、縛ってもらいましょうか」

「ハイッ」

軍隊式に直立していた、山木と呼ばれた男は、馴れた様子でみゆきの傍へ近づくと、抵抗する余裕も与えず、その可細い腕を背後に

ねじ上げた。

「やめて、お願い」

友の危急を救おうと山木の腕にしがみついた由里子も、パネのように弾き跳ばされてしまふ。——二人の娘がおそれていた事態が早くも現実となったのだ。

わずか十数分の後。襖を払ったあとの鴨居からぶら下るように縛りつけられた二人。それも、薄物のパンティ一つにむかれた無惨な姿である。

「どうかね、まだ気は変らないかね？」

みゆきも由里子も、なんのこれしき、と歯を食いしばった。たしかに、昨日の気狂いじみた拷問に比べれば、この程度は物の数ではない。かつては、男の眼に肌をさらすことなど、死ぬよりもつらかった筈だったが、一度でもそういう体験を持ったことで、みゆきたちはそれほど苦痛を感じなくなっていた。

「なかなか度胸のいいお嬢さん方だ。いずれはこの楽園でヌードショーでもやってもらいましょうか」

メガネの男——布教部長の原口は相変らず紳士ぶった口調を崩さない。

「お二人とも、いい体だ。肉づきと云い、肌のキメと云い……」

なめまわすような男の視線を体のあちこちに感じて、みゆきは不意に羞恥心を呼び醒された。

「いや、見ないで……」

彼女は今までの平静さが嘘のように裸身をもだえさせた。かすかに汗ばんだ桃色の肌がいつの間にか朱をさしたように紅く染った。急激に早まった動悸も、おさえようとすればするほど高鳴って、彼女はせつなくあえぐ。

——大きく波打つ乳房。艶めかしく、くねる腰。それらが女の色気をむんむんと発散させてはじめた。

「ふふふ。——どうしたね、急に。こんなところを汗でぐっしりにして」

原口はみゆきの傍に寄り、汗に濡れて光るような脇のあたりをつついた。

「ここがこれでは、ずいぶん気持が悪いだろうから、すっかり乾かしてあげましょうかね」

男の手が彼女の薄物にかかると、みゆきはこらえきれなくなって悲鳴を上げた。

「勘忍して、ね、お願いよ」

「じゃあ、貴女の背後関係を話してくれますか？」

「……………」

「それが嫌なら、こうするまでです」

原口はそう云いながら、わざとゆっくりした手付きで、彼女の願いを退けにかかった。

「あ、あ、あ……」

——抵抗してみたところで、どうにもならない。みゆきは汗ばんだ肌をヒクヒクけいれんさせながら嗚咽した。

「山木君。そっちのお嬢さんも涼しくしてあげたら？」

「ハイ」

齒がみして耐えていた由里子も、みゆきに釣られてしゃくり上げはじめた。男の手は容赦なく、彼女をアミパンティ一枚の姿にむいてしまった。

「部長、これは？」

「ふむ、生理なんだろうね、このお嬢さん。」

——まあ、そっちは、それでいいだろう。こっちの一人で充分だ」

由里子はちょうど、その期間にあった神の摂理に感謝した。と同時に、そのためみゆきにかかる災難が一層ひどくなることにあやまりたい気持だった。

——みゆきさん、許して。

しかし、由里子の感情の起伏とは無関係にみゆきに対する淫らな拷問は開始されたので

ある。

原口

は、女

の扱い

には馴

れてい

るとば

かり、

みゆき

に執拗

な責め

を加え

はじめ

た。――

——いたぶりを重ねる毎に、豊かな胸は大きくあえぎ、肉づきのいい腰はびくんびくんと、はじかれるように踊った。

「どう？ いい気持でしょう、お嬢さん。君はなかなか運動神経がいいじゃないの」

彼は冷笑さえ浮べながら、もだえるみゆきの表情から眼を離さなかった。

「よして、……そんな、こと」

荒い呼吸の下から、ときれ勝ちにみゆきは哀願する。

「じゃあ、正直に云ってくれますか」



「……………」

「肝心な点は黙否権。敵ながら天晴れだよ、お嬢さん。——山木君、そのテーブルを持ってきてくれないか」

「ハイ。どうなさるんです？」

「その脚へこの娘の両脚を縛るのだ。——こう、力一ぱい暴れられたんじゃ、仕事がやりにくいんだよ」

「あ、あっ、やめてえ——」

みゆきは彼等の意図を察して猛烈に脚をバタつかせたが、それも束の間の抵抗にすぎな



かった。彼女のすんなり伸びた脚は思い切り開かれ、固定されてしまうと、もう情ないくらい無防備な姿をさらけ出した。

「おや、お嬢さん、なんだかんだと口で嫌がっても、身体の方は万更でもなさそうだね」

原口は自分の一言一句が針のようにみゆきの胸を突き上げるのを予期して、楽しむようになぶるのだった。

「おぼこ娘にしちゃ、ちょっとひどすぎるようだねえ。——それとも、常習犯でえところですかね」

「許して、もう許して……」

「ふ、ふ……、女はすぐ許してなどと云うが実は、もっと苛めて、と云っているのさ」

原口の手は、傍で見ている山木が感歎するほど巧妙に動き廻り、熱い汗を吹き出している彼女は、かつての若々しい夢見勝ちな娘ではなかった。

やがて——

「どうだね、お嬢さん、まだ頑張るかね？」

若い女のあられもない姿態を目撃して流石に顔を紅潮させながらも相変らず意地の悪い微笑を絶やさず、二人の男はみゆきをひやかす。

「考えてみりゃ、正直にしゃべるよりも、黙

っていて、もっと責めてもらいたいんじゃないですか」

山木が原口に云った。

山木に頬をつつかれて、みゆきは絶望的な顔をそむけた。あ、あ、もう駄目だ。わたしは墮落しちゃった！ 彼女は自分の体が無性に汚ないものに思えた。そして、彼女の心を包みはじめたのは、自責や羞恥というより、もっと空しい虚無感であった。

「さて、まだ素直になつてくれないらしいから、次のコースに進みましょう。これから見るのは、いづれ貴女にも覚えて貰わなきゃならんものだから、よく見ておくことだね。」

——山木君、もう始まっているだろう、灯りを消してくれないか」

由里子を再び鴨居に吊して、山木が電灯のスイッチをひねった。一瞬間室内は暗闇になったが、壁面の鏡の部分だけは皎々と輝いて、よく見るとそこには隣室の光景がハッキリと浮び上っているではないか。これも、霊元教本部の密室に飾ってあったマジックミラーの一種なのだ。明るい側から見れば普通の鏡だが、暗い方から見れば単なるガラスでしかない。今も、そのガラスを透して、隣接した広間の情景が手に取るようにわかった。——ガ

ラスのすぐ前はフロアになり、そこで肌も露わなアクロバットダンサーが踊り狂い、その向う側では、思い思いに踊りを見ながらグラスをかたむけ、談笑し、なかには堂々と抱き合っている数組の男女。

男は黒いマスクをつけ、パジャマや浴衣を着ているが、女たちはいずれもすき透った薄もののネグリジェだけ、胸のふくらみも、豊かにゆれ動くヒップも露出したあられもない姿で、男にしなだれかかっているのだ。

「あっ」

あさましい情景にわれを忘れて眼をそむけようとしたみゆきは、その女の中に黒田マリ子の顔を発見して驚愕した。——あの人だわ！ 調査部で示めされた写真の主。みゆきたちの悲しいアバンチュールの発端、その目的の人、黒田専務の令嬢マリ子が、彼女等なめている辛酸も知らぬげに、全身に媚をみながらせて男に抱かれているのだ。

みゆきの体から何かが音を立てて崩れていった。——なにもかも無駄だったのではないか。こんなに言語に絶する恥かしめを受けてまでマリ子の消息を尋ねる必要があったのだろうか。たしかにマリ子の顔には不安や悲哀の影はミジンもない。それどころか満足しき

った表情のように見えるのだ。しかし、とみゆきは思い直した。

——あの人だって、始めからあんなではなかった筈だわ。きっと人には云えない恥かしめや苦しみの果てに、あんなになってしまったのだわ。

みゆきはもう一度心をひき締めた。絶望も虚無も、羞恥も苦痛も、いっさいを乗り越えて行こうと彼女は内心で誓った。そんな彼女たちの前で、淫蕩な空気をみなぎらせたショーが続いている。——黒いびったりした衣裳をつけたダンサーだが、その衣裳にしても、普通の劇場なら隠さねばならない部分をことさら切抜いて、隠さなくてもよい肩や腕や脚を包んだ奇妙なものなのだ。

豊かな乳房は揺れ、くぼんだ臍は悩ましい起伏をくり返し、ダンサーの曲技まがいの肢体の運動につれて、想像し難い微妙な伸縮を露呈するのである。それは単なるアクロバットではなく、女性の最も女性らしい部分を思いきって誇示しようとしたものであることに間違いはなかった。だから、ダンサーは激しい回転や倒立などをはぶいて、股を一直線にひろげたまま静止したり、美しく化粧した顔を密着させたりするのだった。

嫌がるみゆきと由里子の髪を掴み、閉じようとする喉に指を当てて嫌だにこのショーを見せつける男たちですら、何回か見馴れている筈なのに呼吸を荒らげはじめたほどの強烈なショーは、それから尚も刺戟の度を強めていった。

ダンサーはやがて踊り疲れて体の動きを止めた。だがそれはショーの終幕ではなく次の段階への準備だった。彼女はフロアの上で露骨な姿勢を取り、その露わな肌にかたわらの小箱からすくった黄色いものをぬりこみ始めた。それがバターであったことは、彼女の次のショーが開始された時、観客の男たちにもそしてみゆきにも、由里子にも諒解できた。

——数分の後、ダンサーは美しい顔をゆがめ、蛇のようにのたうち廻っていた。彼女を情欲の固まりに突き落したのは、小牛ほどもある、一匹のオス犬だったのである。

猥雑なショーが終って、室内は再び明るさを取り戻した。

「どうしたね、お嬢さん。そんな真ッ赤な顔をして。よく見てご覧。この中には誰一人悲しんでいる者はないだろう。皆、楽しみ幸福に酔い痴れている。これが靈元教なのだ。靈元教はちっとも悪いことはしていない。それ

どころか快樂や幸運をもたらせるのだ。君だってそうだろう。君はさっき、飲みに身をふるわせた。だから君たちがどういう目的でスパイにきたか知らないが、そんなことは初めから無意味で間違っているのだ。人間の幸福のために働いている靈元教を、邪教視するのは、とんでもないことなのだ」

原口は熱っぽい口調で続けたが、度重なるいたぶりに理性を失いかけるみゆきと由里子ではあっても、その我田引水的な一人よがり説得される筈はなかった。

「だから、私は君たちが一刻も早く、誤った道德観念を捨てて、真実の快樂のために過去を精算することを願うのだ。どうかね。ここらでなにかも打明けてくれないか。そうすれば私もこれ以上君等に嫌な思いをさせなくて済むというものだ」

「……………」

「このままでいると、次にどんなことをされるか教えてあげようか。今、君等が見た踊り子と犬のショーを、今度は君たちに実演してもらおうことになるのだ」

原口は狡猾こうかつそうな眼で、みゆきをじっと見た。みゆきは愕然として唇を噛んだまま一言も発しない。



「君はあの踊り子と同じことをするのだよ。ただし、アクロバットは出来ないだろうからそのかわりバターを全身にぬって貰う。どうだい、嫌なら今のうちに知っていいことを皆吐き出して、さっぱりすることだナ」

みゆきは体の内部でふつふつと燃えたぎるオコリのようなものに、身をふるわせながらも、なんとかこの危急から逃れるための思考をまとめようとしたが、落着こうとすればするほど、露わな全身がガタガタふるえるだけである。

鴨居にぶら下るように縛られたみゆきの全身はもうふき出る汗で艶やかな光沢を帯び、なまなましい女の匂いをみなぎらせていた。

「それにあの踊り子と同じに、今度は大勢のお客さんに見て貰うのだ。——この部屋を暗くすると隣が見えるように、隣りのライトを消せばこの部屋は舞台のように明るく見通しになる。君もわかってるように、ナイトクラブだ。そこで遊んでいる男や女が皆、君の狂ったような裸を見たがっているのだ」

いつか酔ったように長舌をふるう原口の声も、しかし、みゆきの耳には半分も入らなかった。

「勘忍して、お願い！ なんでも……」

「知ってることを、話すというのか？」

みゆきはガックリとうなずいた。もうどうなったってかまやしない、というのが、その時の彼女の偽らざる心情だった。

——たしかに、うら若い処女に、このようなただれた拷問に耐えよということ自体が無理なのだ。むしろこれまでの数々の責めに屈しなかった気力こそ不自然ではなかったか。これ以上は人間業ではない。狂気と錯乱、それ以上のなものでもないだろう。

敗北感というよりも、なにもかも終りだという無力感が、ドッとみゆきの全身を襲い、彼女の体から、今まで張りつめた気持を急激に失わせていった。それと同時に、彼女の四肢を支えていた力も泡のように消えた。

「そうか。それでは楽にしてやろう」

原口は、それまでみゆきたちの被虐の情景に、われを忘れて立ちすくんでいた山木をかえりみた。

「縄を解いてやりたまえ」

鴨居に吊られた両手首を解放されて、さっきから痴呆のようになっていた由里子は、やっと人心地がついたらしく、畳の上にうずくまると、白い背中をふるわせて泣きだした。

だが、みゆきは手足を自由にされても、ドタ

リと仰向けになったまま動こうとはしなかった。脚をすばめようにも、思い切り開いた股のあたりから内腿までの筋肉が痛くて、どうすることも出来ない。わずかに丸く締った胸と腹を波打たせるだけである。

「さあ、君、早く言ってご覧」

原口は昂ぶる感情をおさえて、みゆきの頭の上にしゃがむと、別人のような猫撫ぜ声を出した。

「その方が、あんたも楽になるだろう」

みゆきは観念して、長いまつ毛をふるわせながら、小さな口を開いた。

「わたしたち、あの人、……黒田マリ子という人を探していたの」

「うむ、黒田というところの女か。——誰に頼まれて？」

「黒田のお父様」

「警察じゃないのかね」

「違うわ、わたしたちは舟田コンサルタントから来たの……」

舟田の名を出した時、彼女の胸は痛んだがもうここで止めるわけにはいかない。

「舟田コンサルタントが、そんなこともするのかね」

「そうよ。わたしたち調査部なの」

「それで、コンサルタントの目的は、ほんとにそれだけなのか？」

「そう。黒田マリ子さえ探せばいいのよ」

「それにしちゃあ……」

原口はみゆきのつぶらな眼をじっと見据えて、その表情から何かを探り取ろうとした。

「これだけのことを、なぜ今まで黙っていたのか、え？ 君たちがひどい目に会っても黙っていない程、重大なことではないじゃないか」

云われてみれば、そうなのだ。行方不明の女性を探す、ただそれだけのことに、いったいどれだけの意味があったのか。霊元教がその事業の性質から、外部の動きに神経質になるのは当然である。しかし、みゆきたちまでこれほど強情に目的を秘す必要があったかどうか。——彼女の頭脳は混乱してそれ以上進もうとしなかった。ただ、たしかなことは、みゆきはこの時、自分や由里子が、たまらなくむなしかったのである。しかし、原口にとっては、みゆきの返答はあまりにも呆気なかった。これだけのことで、若い女がすべてを賭けるだろうか。それこそ常識では考えられぬことである。何かがある、もっと何かがある。原口はなんとなくバカにされたような腹

立たしさを覚え、つかれたようにみゆきの髪を掴んだ。

「おい、そんなことで、ゴマかされやしないぞ。もっとかくしていることがある筈だ。云え！ 云わないか」

その形相に本能的な危険を感じ、思わず顔をそむけるみゆき。

「知らないわ。それ以上のことは、なんにも知らないわ」

「嘘を云え。貴様のような小娘にコケにされてたまるか」

次の瞬間彼は再び残忍な凌辱者に返った。

「おい、山木。ショーの支度をしろ」

今までにない激しい口調で云うと、みゆきの顔に憎々しげな視線を浴びせた。嗜虐的な行為で彼女をいたぶってきた原口だったが、みゆきの持つ天性の魅力ともいうべきその愛くるしさ、豊かさ、みずみずしさなどに、いっとなく男心をゆすぶられ、妙な感情を抱きはじめていたのだ。可愛さあまって憎さが百倍の心境になったのも、身勝手な話だが致し方あるまい。

「駄目。それだけはやめて……」

みゆきはビクンと体を起し、すがるように両手を差し出した。

「ふん、ヘンなポーズはやめろ！」

原口の顔には、また元通りの冷やかな微笑があった。

「山木君、そっちのメンスの娘は目ざわりだから、向うの部屋へ連れて行きませう。それから照明の用意を」

「みゆきさん！」

「由里ちゃん！」

その声もせつなく、いたずらに彼女たちの胸に絶望的なひびきを伝えるだけである。たとえ、おたがいにとりあうこともできない立場におかれた二人であっても、一緒にいるというだけで、なにか、心強いものがあつた。しかし、今、この部屋にはみゆきだけしかいない。

「ああ……」

みゆきは打ちひしがれたように膝をつき、肩を落した。——もう駄目だわ、あんなにひどいことをされたら、わたし、きっと気が狂ってしまうわ。

彼女は美しい顔をゆがめ、体中の悲しみをしぼり出すように身をよじった。——ああ、舟田センセ、何してるの？ みゆきは、みゆきはもう死んじゃう……。



しかし、彼女の悲哀にむせぶ心とは別に、打ちふるえる背中や、量感のこもった臀部の丸いふくらみは、娘盛りのあでやかさで原口の劣情をそそった。——みゆきの不運は、いわば彼女が二十一才の愛くるしい女のコであったことだ。

原口はしゃくりあげるみゆきの背後に近づき、その二の腕をギュッと掴んだ。

「あっ」

思わず顔をのけぞらせ、次いでいやいやを

するように首を振るみゆき。

「お願いよ。——わたし、みんな云ったんじゃないの。だから、もういじめないで」  
「ところが、わたしは、そうは思わないんですよ、お嬢さん」

原口は容赦なくみゆきを後ろ手に縛りはじめた。みゆきは抵抗する気力もなく、ただ、ちんまりと盛り上った胸を波打たせ、あえぐだけだ。

「だって、わたし、それ以上、なにも知らない

いもの……」

「それが、こちらには物足りないんですよ」  
「そんなこと云ったって……知らないものは仕方ないでしょ」

「そう、仕方がない。仕方がないから、ショーをやって貰うのですよ」

みゆきは沈黙した。どんな抗弁も哀願も役に立たない。真実などというものは、ここでは無用なのだ。あきらめが、彼女の心の重荷になっている絶望や羞恥や悲しみを霧のように包んだ。それは逆境に立った時の、精神的な苦痛から幾分でも逃れるための、人間の生理であつたかも知れない。

みゆきの小さな胸を占領しているのは、惑乱、ただそれだけだった。だから彼女は、原口の導くまま、鏡に正対しても、ことさら羞恥にふるえることもなく、まるで人形のように立っていた。

「こういう風にね」

原口の手が足首にかかり、ぐいとひろげた。彼女は開いた両膝を立て、尻をペタンと畳におろしたポーズをとらされても、意志のない人形のようにさからわなかった。

「部長さん、用意が出来ましたよ」

ドアを細めに開けて、バターを床に置くと

## 新発足 懸賞／告白、手記、体験／原稿募集

### ☆賞金☆

優作	一篇につき	参万円
秀作	一篇につき	五千元
佳作	一篇につき	二千元

### ☆規定☆

一、本誌の内容刷新、充実を期して、ここに新しく、「告白、手記、体験」の原稿を広く懸賞募集いたします。

一、従来、「告白」の分野で文獻味豊かな告白特集を度々刊行して、輝やかしい金字塔をうち樹てた本誌が、あらゆる傾向の告白をもつて誌面を飾る考えであります。

一、真実味溢れる告白、万人の共感を得る

手記、数奇な体験、どうしても誌上に発表したいという熱意のこもった原稿を求めます。どうか奮って御応募下さい。

一、文章の巧みさとか、表現や描写のうまさとは求めませんから、実際に体験されたもの、事実の裏付のあるものが大切だと思えます。従って必ず自作の未発表のものに限ります。

一、枚数に制限はありませんが、一回の掲載分としては、三十枚乃至五十枚が適当です。用紙はなるべく原稿用紙をご使用下さい。締切日は毎月十日。翌月号に発表。

一、入選作には掲載誌発売後賞金をお送りいたします。応募原稿は読者原稿と区別するため「告白懸賞」とお書き下さい。

山木はすぐ姿をかくした。

「OK」

その背中へ声をかけながら、原口はバターをみゆきの側に運んだ。おそらくその頃、隣室の灯は消え、きらめく照明を浴びたみゆきの、均整のとれた裸体が、哀れな姿体となつて、隣室の暗闇にうごめく男女の、淫らな視線を集めはじめただろう。

シヨ―は開始された。みゆきは絶対絶命である。――彼女の縄目にせかれた腕のツケ根へ、原口の掌は蛇のように這いまわり、バターをぬり込んで行くのだった。

「あ、あ、もう沢山……よして」

みゆきは呻きながら、ドサリと両足を下した。彼女の意識は混濁し、あさましい見世物の対象として、男たちの目にさらされている危機感もなく、まして羞恥や屈辱の悲哀を感じる余裕もなかった。みゆきはもう、明るく機智に富んだ魅惑的な乙女ではなかった。この愛くるしい美少女のどこに、これほど凄まじい官能の芽がひそんでいたのか。彼女は狂乱し、もだえ続けた。

その時だった。けたたましい警報が鳴りひびき、一瞬室内は暗黒と化した。建物の全体は異常な空気と緊張がみなぎり、どこかで、

「手入だ！」「逃げろ！」などと叫ぶ声がしたのも、彼女の耳には入らなかった。

数分の後、室内がもとの明るさを取戻した時、みゆきは、そこに舟田秀彦のいたましげにみつめる視線を感じて、今度こそ完全に失神したのである。

霊元教事件ほど近頃世間の耳目を衝撃させた事件はない。みゆきと由里子のアバンチュールが、一大邪教の正体を暴き、大規模な人身売買と麻薬密売団を摘発したばかりか、政財界の汚職にまで発展したのである。しかし可憐なヒロイン達はジャーナリズムの追手を逃れて、どこかへ姿をかくしてしまった。

――彼女たちの体験は、白日にさらすにはあまりにも無惨なものであったからだ。

記者団の質問に答えて舟田秀彦は云った。

「事件の解決のイトグチは、彼女等の気転をきかした、コンパクトのSOSでした。しかしもう暫らく、二人をそっとしてやって下さい。彼女等はその人生の大部分をあの日二間で燃焼しつくしてしまった程、疲れているんですよ」

そして彼は帰りかける記者団の背に、次のようにつけ加えた。

「お目出たい話だから、これは話してもいいでしょう。――川辺由里子くんはこの秋、当社のホープ平山君と結婚します」

「すると、もう一人のお嬢さん……中田みゆきさんは？ 所長さんと結婚するって噂がありますか？」

「いや、それは……。まあいつか、みゆき君から直接お聞き下さい」

――そのみゆきは、舟田の配慮で伊豆の小さな温泉宿にいた。彼女は二カ月の休暇を貰って、ここに来ていたのだ。

初めの数日は食事もノドを通らぬほどショックを受けていた彼女だったが、事件後十日経った今では、徐々にではあるが元の明るさを取戻している。

彼女はひなびた温泉の浴槽に、生れ変わったような羞らい多い裸身を沈めて、ふと物思いにふけていた。

「いくら、あんなことでも、舟田センセにして貰うんなら、きっと素晴らしいんだけど」その意味は、賢明なる読者の推察にまかせよう――。

(終)



## M 漫筆

## 馬のり娘

鞍 良 人

## (一) 女子のうま跳び

三月十四日——忘れられそうにない日。この日僕はまぎれもなくこの目で見ました。それは夢ではありませんでした。長い間、空想の中だけのイメージでした。それが現実に実在したのです。奇しくもその現場に通じあわせたのでした。よく晴れた春の夕刻。K中学の校庭！

わが想いうつつとなれりまざまざと

K中学の午後のひととき

K中学の裏道は、J寺に至る場合にしばし

ば通る道です。その様な折、時として女子生徒が運動をしている姿を見かけることがあったものです。彼女らは揃いのユニフォーム姿で球技などに熱中しています。白い長そでの運動ブラウス——黒の運動ショーツのスタイル。以前、体育祭の出しものとしての人間競馬のイメージについて申したことがありましたが(34年新年号、41年11月号)、あの女子騎手のスタイルと同様です。ピッチリと穿いた短いショーツをはち切らすばかりの健康色の若い腿。のびやかな新鮮な素脚。活発な躍動美。

勇ましい揃いの姿ユニフォーム

女子の部員が練習はげむ

去年の秋ごろでしたか、やはりここを通りあわせたとき、バレーボールの女子部員達が練習を終ってネットを取り片付けようとしておりました。一人の少女がネットを張る棒杭に向って背をかがめました。すると別の少女がその背中にピョンと跨がりました。一瞬乗られた方の少女がぐらついて支え切れなくなりました。そこで交代して、最初潰されかかった子が乗り手に廻りました。乗られる方は子は、今度は両手を地面についてもっと低い

姿勢をとりました。乗り手の子が馬の首の方から跨がったところで、馬の方が徐々に立ち上がり、そのまま肩車が成功して無事にネットを外すことができました。なに気ないこの様な所作の中にも、彼女らのちょっとした馬のり動作が見られますので、天気の日、ここを通りかかることは一つの楽しみになるのです。

友の背に馬のりとなり網はずす

バレーボールの女生徒部員

一度などは、バレーボールの練習を終って引き上げて行く際、一人の子が、もう一人の子におぶさろうとします。重いものをおぶるのもトレーニングの内なのでしょうが、前の子は、それを嫌って逃げようとしています。しかしおぶさりかかる方の子は、あくまでも追跡を止めずに後から襲いかかります。ひとときしてやろうという意味なのでしょうが、とうとう逃げきれなくなった子は地面に倒れてしまいます。おぶさりかかられるのを、どこまでも逃がれるためでしょうか。どうせあなた様の御魂胆は私を地上に押し倒してしまおうというにあるのですから、もうこの通り倒れているので御容赦願います、降参いたしますという意味なのでしょうが。追いかけてい

た方の子は、「なによ、だらしのない。バカタレめ!」といった風に倒れた子の上にまた襲撃を加え、大体腰のあたりに馬のりになりしばし跨がったまま何か文句を言っていました。そして「早く立ちなさいよ! コラッ!!」というように叱咤しながら下になっている相手の子の背をビシッとひと叩きして立ち上がりました。地面の上に敷かれていた子も立ち上がりました。

プロの女子レスリングなどは別として、女の子が友達を地べたに抑えつけているような現場を、あんまり見たことありませんでしたし、殊に黒ショーツの運動部の子が逞しい太腿むき出しのままの恰好で友達の上に暫時馬のりしているというに至っては全く初めての事で、珍しい限りでした。中学三年位の子でしたか、相当大きな、体格のよい子でした。あんな勇猛果敢な子なら、人間競馬の競技に出場するのに持って来いだと思いました。

強い子がしごきを逃げる子を追って

遂に追いつめ取り押さえたり

美少女が逃げた仲間を懲らしめに

馬のりとなり押さえつけてる

股下に抑えた友を懲らしめる

少女の腿のヴォリューム見事

あんな子が出現すればふさわしい

体育祭の馬の騎手で

三月十四日の夕方近く、僕は例の道にさしかかりました。大通りから折れてその道にさしかかったばかりの地点では、まだ校庭の全貌は手前の建物のかげになって見えません。しかし、近づくにつれて人のいる気配が感じられて来ました。そのうち青いトレーニング用のユニフォームを着た十人ばかりの男子生徒がかけ声をかけながら一団となって走って行くのが見えました。そのかけ声の間隙からなにやらキャーキャーという少女の悲鳴のようなものが聞きたれました。校庭にはきつと女子生徒もいるなどの予感がしたのです。やがて視界が開けて校庭の全貌が見渡せる地点まで進んだ刹那、キャーキャー声の源が確かめられたのでした。そしてその瞬間、僕は事の意外さに唖然としたものでした。一瞬、目を疑ったと同時に、こののがすべからざる瞬間に、自分がカメラを持っていないことをこよなく残念に思ったのでした。

どうだろうわれ唖然たりその刹那

これがうつつか学びの庭の

まぎれもなくバレーボールの部員の女子生徒達です。皆、見事に発達した太腿をキリッ





と穿いた黒の運動ショーツから惜し気もなくむき出しにしている健康優良児のような女の子ばかりです。

二十五、六人前後の人数でした。彼女らがうま跳びをしているのです。どういう経緯でそうなったかは別として、とにかくどれくらい大うま跳びをしていたのです。ローティーンとはいえ、なにしろ満十三、四才（初めてそっとブラジャーの一つも買って見る年頃なの

でしょう）——成熟への兆が漸く見えはじめた年頃の女の子たちばかりが、かくも大勢で、下駄も露わな運動のユニフォーム姿で、白昼（正に五時少し前）堂々と、誰はばかりとところもなく、大胆な馬のりプレイを演じている壮観さ。

大勢で大うま跳びを始めたり

露わな娘誰はばかり

長い馬を二列作っておりました。女の子だけあって、しかも運動部の子だけあって、馬の列も実に、整然と作っておりました。練習後の体ならしとして一斉にこのプレイを始めたものと考えられます。つまりトレーニングの規律の下の一つの運動課程として部員一同が揃ってやっていたのでしよう。前の人のつき出されたお尻の股ぐらに順序正しく次々に頭を突っ込んでいる彼女達はユニフォーム姿ですから、本当に整然と美しかったのです。一方の列の方が長く、十人

位も長々と連らなって、馬を作っておりました。この上に乗り手の女の子が勢よく走って来て飛び跨がります。三人も跨がらない位のうちに馬が崩れます。下駄にされた方も、潰した方もキャーキャー言っています。馬の前部の方を形成していた人が順次交代で乗り手に廻るのでしようか。そして残りの人は再び馬を整然と立て直しにかかります。なにしろ乗り手が跨がり始めますとたちどころに馬がち切れたり、潰されたりしますので、乗り手が連なりをなして馬上豊かにしつかりと乗り並ぶという状態がなかなか現出しません。

連らなりて友が作れる馬の背に

乗り手の乙女飛んで跨がる

非常に長い馬を作っておりますから、乗り手はどれだけでもできる限り、前方へ飛ぶというのが、この運動の狙いなのかも知れませんが、そうなれば、どうしても力一ぱいの勢で飛んで来ることになるわけでしょう。とにかく元気のいい女の子達が走り幅跳びか跳び箱でもする時の様な勢で思いきり、ドシン、ドシンと跨がってくるのですから、とてつもなくすさまじいことになるわけです。

馬を作っている方の人、バレー訓練の一課程としてそういう衝撃的な重みに堪える力

をやしなっているのでしょう。一たび乗り手に廻った時には、下半身ショート一枚のまま思い切り一挙に、乗り潰してしまうのですから、その時の勝利感、征服感といったものは最高にすてきなのではないのでしょうか。爽快感の極致なのでしょう。

思いきり飛んで一気に乗り潰す

乙女の気持まさに最高

残念なことに、このまたと見られない素晴らしい光景も、僕が現場にさしかかるのが遅すぎたためか、一唾のんで、これから充分に見物しようと思っている矢先にあっけなく終りを告げてしまったのです。五時になったからでしょうか。彼女らは、僕が到着しない前に、もう幾回かの乗り手の順番が廻って来ていたのでしょう。そうであれば、彼女らはこのあられもない、そしてそれだけに愉快きわまりないプレイに充分堪能しきっていたのでしょう。円陣まがいのようなものを作って、「ファイト！ファイト!!」といったかけ声でしめくくりの氣勢を上げながら、また一方ではネットを取りはずして片付けながら解散して行きました。

うま跳び遊戯につきましては、元女子短大馬術部選手であった慶子という女性の経験談

を引用しました際に（34年新年号馬化白書）

説明致したことがありました。慶子という娘は、馬のり好きの活潑な女性で、乗杉家に同居していたのです。身長一メートル六二、バスト八九センチ、体重五五キロの発達した体格を誇る彼女でしたが、彼女が、貴代子夫人の練習馬の役目をするために同家へやって来た工藤敬之青年に乘ろうとて言ったせりふに「おばさま、どういう風にお乗りになったのかしら、私は高校生と馬とび遊びをしたけど跨がりながらジャンケンに勝つ気持悪くなかったわ……」というのがありました。（32年12月号）

うま跳びの馬上得意な慶子嬢

跨がったままジャンケンに勝つ昔、「ガメツイ奴」かなにかの大当り芝居に出ていた頃、子役の中山千夏が銀座の泰明小学校に在学していて、校庭で友達たちとうま跳びをしていました。そういう写真が週刊誌に出ていたのを覚えています。彼女や、太った女の子が乗っておりました。

校庭で幼き女優たわむれる

馬を作る友の背の上

うま跳びの先乗りの子を鞍にして

なおその上に少女跨がる

以前、グーチョキパーという連続もののテレビ番組（週一回）があつて、たまたま妻とコタツにあたりながら見ていたのですが、その日は「太くんの馬っこ作戦」というものでした。最初かなり大勢の子供がおもてで遊んでいるわけですが、そのうち「うま跳び」をはじめました。二手にわかれ、各グループとも円陣をつくって作戦を練り気合をかけ合つてゲームが開始されます。一方のグループが順に並んで馬を作れば、他方のグループが後方から一人ずつ走って来て勢よく順々に飛び乗ります。全部乗ると一番尻馬に乗った子が馬の前立ちの子とジャンケンをしました。妻は言いました。「ああいうの面白いのよね。

私たちもよくやったわ。うちの方じゃ女の子達も一緒にやったわよ。私ぜったい潰れなかった。乗る時なんか一番先に乗るのに廻ったことあった。最初に乗る人がうんと先の方に飛ばないと後の人が乗れなくなるので大変なのよ」妻からその経験談を聞いたのは初めてで、子供の彼女がそういう荒っぽい遊びをしている有様をしみじみ想像致して見た次第です。背中に一ぱい折り重ならながら、潰れまいと懸命に頑張っている様子、また勢よく飛んで跨がる様子、股下の馬にぎゅうぎゅう



圧力を加えてのしかかっている様子、皆のあとから乗って先乗りの子をかまわず鞍がわりにお尻の下敷きになっている様子、そして無残に下敷きされている子のあわれな様子等々。

子らさわぐ横の空地をふと見れば

うま跳び遊び始めたるなり

わが妻も子供るときに遊びけり

馬となったり馬に乗ったり

馬の上先乗りの子を鞍に敷き

折り重なりて妻が跨がる

鞍として下敷きされた先の子は

押し潰されてひどい目に会う

36年12月号で、「おんな上位で遊びましよう」という写真のことを紹介致したことがありましたが、あの同じ「女の画報」という雑誌に「制服の処女の寄宿舎日記」という写真があつて、十七才になる女子生徒が五人で共同生活をしています。この生徒達が室内で、

「うま跳び遊び」を始めました。パンティー

一枚だけの裸の子がベッドに両手をついて馬をつくると、つづいて白スリップの人がその後に連らなって馬をつくります。すると黒スリップの女がエイッとはかりに前馬に打ち跨がりました。続いてパンティーだけの子が後馬に跨がりました。そして後を振りむいてい

ますから画面には出ていませんがもう一人の子が今飛んで来ようとしているのでしよう。

その子の乗る余地がありません。前の子がもっと前方に詰めなければ、すべり落ちてしまうかも知れません。やっとしがみついて乗ったとすると、なにしろ二人馬の上に体格のいいハイティーングラマーが三人跨がるのですから、下手をすると馬の方が押し潰されてしまう恐れもあります。殊に後馬は二人の重みをともに支えなければなりません。いずれにしても、どたんばたん、キヤーキヤーとあられもなくてすごいものです。

寄宿生五人集まり馬ごっこ

二人が馬で残りが乗り手

馬側の一人の下着白色で

乗り手の一人下着黒色

馬側が潰されたならまた馬で

乗り手落ちれば人馬交代

この子達とはにかく、まだパンティー一枚でも穿いておるわけですが同じうま跳び遊びをするにしても、六人の娘達が一糸もまとわない真ばだかの姿でやっている場合もあるのですから、もっと徹底しています。その模様が「画報実話雑誌」(36年6月号)の写真に出ています。この雑誌は先の「女の画報」を

改題したもので発行所は同じく三世社です。

「女のレジャータイム・入梅時に遊べる楽しい室内遊戯」というところに、出ているのです。床の間の正面で、壁を背にした一人のハイティーン裸女が馬の前立ちをすると第二裸女がそれに向って頭を押しつけて馬を作ります。第三裸女がその後連らなって更に馬を作る。第四裸女以下、第六裸女までの三人が乗り手です。いよいよ第四裸女の乗馬ノ彼女は思いきり飛んで第二裸女の上にデンとはかりに打ち跨がりました。続いて第五裸女が第三裸女の前部に跨がります。そして最後に第六裸女が第三裸女の腰のあたりに跨がり前の第五裸女にしがみつきました。馬達は潰されまいと懸命に踏んばって、持ちこたえています。乗り手の方は、そのまま一気に乗り潰してしまおうと皆でドシンドシン体はずませています。馬も意外としっかりしててなかなか潰れません。あんまり暴ばれて下手をしたのではかえって落馬しかねないと見たのでしょうか。最初に乗った第四裸女が、向きあっている第一裸女とジャンケンしました。第一裸女がチョキを出し、第四裸女がグーを出しました。乗り手がまた勝ったので馬上の第六裸女は大喜びの体です。この若い素肌の

肉体と肉体との重なり合うすごいゲームがいつ果てるともなくキャーキャーと繰り返えされて行きます。この写真は、僕が秘蔵しているものの中でも最も好きな一つです。

室内でレジャーを楽しむ乙女らが

全裸となりてうま跳び始め

うまどもの素肌の背なにびったりと

乗り手の股がじかに被さる

尻り馬は二人一緒に跨がられ

約百キロの重みに堪える

ジャンケンに跨がったまま騎手勝てば

次も再び乗り手に廻る

体重にものを言わせてのしかかり

お尻の下にうま押し潰す

## (二) 婚前乗馬

女性が生き物の上に乗る跨がってしまうことの喜びについて、これまでに幾度か触れましたし、乗杉女史などが自らの経験を詳しく語りました。女性が経験する乗馬の爽快感については一応理解できないこともないのですが、何としても解らないのは、彼女らが馬に気の毒な感じを持つことがないのかという点です。馬だって苦しいでしょうに、自分がその上に得意になって乗ったまま散々無理

無体に虐げたり苦しめたり思いのままのし放題だというその暴虐な女性乗馬者の気持が本当にわかりかねるわけです。それが楽しいというのであれば、相当な気遣いなのではないか。一体どういうことなのでしょう——そういった点、彼女らに憐れみの気持というものがないのでしょうか？

美しきやさしかるべき乙女らが

なぜにか馬を虐待すべき

去る38年11月号に「跨がる女性」というのが掲載されましたが、その第一項の中で「火星ちゃん」の妃探しの記事を、紹介致しました。「プリンスが妃の候補探さんと騎馬令嬢の試合に臨む」という場面でした。その後、果して義宮は「騎馬令嬢」を奥さんの候補に選んだのですから驚きました。

目指す妃が騎馬令嬢の中にあり

ついに首尾よく見つけい出せり

去る36年12月号で「美智子妃も馬の稽古に励むらしいよい殖えん騎馬する女性」と述べて、皇太子妃の馬上姿が雑誌を賑わすようになるかも知れない問題を取り上げたのですが、その後一向に、それが実現しませんでした。学習院短大の馬術部主将であった津軽華子は馬のりの名手で、この人が義宮妃とし

て選ばれることになりました。彼女の乗馬写真を紹介しますと、まず『女性セブン』39年7月1日号にある筈です。筈というのは、これを僕は所有していないからです。多分義宮と一緒にのものであったと思います。その時はまだ婚約時代で、当時の快感を彼女は次のように読んでいます。

夕風をきりて御園生をかけめぐる

馬上のわれはたのしかりけり

(津軽華子)

いかにも乗馬運動が好きでたまらない様子がうかがえます。

『週刊女性』誌39年9月2日号というのを見ますと、表紙からして津軽華子の肖像です。

「湖のほとり義宮さまをひとり想う旅——華子さん独身最後のバカンス」というのが特集記事であるらしいのです。表紙をめくって更に四枚ぐらい行くといきなり、華子の馬上姿を正面から撮った写真（「佐藤勝也撮影」）の頁が出ます。そして次の様な説明記事が見えます。「十九日、華子さんは朝早く自動車で軽井沢へおでかけ同行者はメイのルミ子ちゃんとお友達の前原直子さんそれにお母さんら6人。浅間高原では早速馬に乗ったり澄みきった初秋の空の下で散歩をされたり……。」



次の頁を見ますと、誰か女の人が馬に跨がっていて、その手綱を、側でワンピース姿で立っている華子が手を挙げてつかんでいます。「朝十時、華子さんはジーパンに半そでシャツ姿で別荘を出てこられた。別荘の前には栗毛が一頭待っている。華子さんは、馬のところでまで馳けだして行って、やさしく何か話しかけたり、ホホずりしたり。たづなをとって五分ほど足ならしをしてから、馬にのって浅間高原へ。」軽井沢で馬に乗れるなんて思わなかったわ久しぶりだから上手に乗れるかしら……浅間高原は、ススキが初秋の風になびいている。その中を思いっきり馬を跳ばした。約三十分、シャツの背中が汗でビッシヨリ」という記事が続きます。更に数枚めくると、いよいよ本文記事に入り、「秋めく高原にお母さまと独身最後の旅を」というところが出ます(20頁)。21頁には、津軽姉妹の乗馬写真がまた出ています。「カメラの放列の前で、松風号と松福号はたじろいだ、華子さんと美枝子さんはみごとな手綱さばきで突っ切られた」と書いてあります。次の22頁を開いても、また彼女の乗馬姿の写真が出ました。ガッポリぎゅうぎゅう鞍上に打ち跨がっています。「午前十時の朝風を切つて糸杉の

林を馬で駆られる」と説明があります。

次は、『週刊明星』誌の39年9月6日号です。開巻劈頭に「初秋の軽井沢——高原の休日を楽しめる津軽華子さん」という頁があって、両腕がつけ根から露わなワンピースの華子が馬の白い鼻づらをなでています。馬の背には誰だかわかりませんが女の人が跨がっています。総天然色写真です。次の頁をめくると、今度はジーパン姿になった、華子が馬上に乗っております。側面から写した写真です。「華子さんの見事な手綱さばきスポーツ・レディの面目躍如というべきだろう」と説明されています。次の頁の写真は、一頁をフルに使った大写真のものでやや右寄り正面から撮っております。(撮影川合一夫・馬淵満太郎)赤いサンダルを無造作につっかけて打ち跨がっています。豊かに威張った姿勢でガッポリ跨がっちゃっていますね。「略装だがサッソウとした乗馬姿、やがては夫君義宮さまとクツワをならべて……」と書いてあります。馬さん馬さん馬のりされてどんなお気持ち? というところであります。

婚前の乗馬たのしみ軽井沢

ススキ蹴散らし令嬢の行く

40年になりますと、もう結婚しておりますし

て、常陸の宮ご夫妻ということになっていきます。従って婚前乗馬ではありませんが——、

『週刊平凡』誌40年4月15日号を開けますと「遠乗り——常陸宮ご夫妻——」という写真の頁が二頁に亘っております。「うらうらと晴れた日ご夫妻は結婚後はじめての遠乗りにおでかけになった——埼玉県流山橋から江戸川堤を鍋小路までの約八キロ……」というところであります。軽井沢の婚前時代とは違って、ここでは全くのフォーマルスタイルであります。相当ムチを振るいそうな気配が致します。とにかくテンデすごいですね、勇ましくて。たまらないです。お宅では宮様も華子妃のお尻の下でぎゅうぎゅうな目にあわされていますかしら。なにしろ、馬上のわれはたのしかりけり」でありますからかないません。

馬のりの好きなきさは背の君を

四つ這いさせてお馬の稽古

さんさんに乗り廻されて宮様は

きさきの尻に押し潰される

出典が不明ですが、週刊誌から取り外したグラビア(カメラII和木光二郎)がありまして「ブームに乗る——華子さんにあやかる乗馬熱——」となっております。最初の頁は馬

に跨がろうとしている一人の女の子が左足をアブミにかけ、右足で地面を勢よく蹴ったところ。「義宮の婚約者、津軽華子さんが乗馬の名手である、ということから近ごろでは皇太子ご夫妻のテニス・ブームから乗馬ブームに変わって来たそうさ。中でも若い女性たちの間で乗馬熱が盛んで、都内の乗馬クラブは連日満員の大盛況という。頬をなでる心地よい春風に吹かれてさっそうと馬に鞭をあてる姿は「カッコいい」ということに相成る。その上ちよっぴり豪華なムードも味わえて、しかも皇族方と同じ趣味を持っている、となればムードに弱いヤング・レディーたちにとっては不可欠のお遊びというところ」と書かれています。次の頁は馬場で女性が乗馬しているところを女の人達が柵によりかかって見物している風景が写されています。「高いところからあたりをへいげいすれば優越感もまたひとしお」とのことです。次の頁は、馬上の婦人を右寄り正面から写したところ。「サッとひと鞭あてればウマは心得たもの、はてはかくの如きさっそうたる、馬上姿と相成る次第」だそうです。次の頁には、「このウマに乗るのも決してお安くはない。乗馬ズボンが二千円から八千円ぐらい長グツが一万円前後も

する。その上入会金などを入れれば、そうおそれと気軽には乗れない。にもかかわらず都内の各クラブには現在一万人近い乗馬人口が登録されている。しかもその半数以上が女性と来ているから、華子さんの影響は明らかだろう」とあります。最後の頁では四頭の馬に打ち跨がった四人の騎馬女性が春の陽ざしを一ぱいに浴びながら並んでこちらへ進んで来ます。ぎゅうぎゅうと鞍の軋む音が聞こえて来るようです。デンと打ち跨がられてしまった馬さん達、なんとも気の毒にギョウギョウパカパカヒンヒンピシピシ彼女らの横暴な重圧にあえいでいます。乗ってる方はまるでいい調子。

乗っている馬上の姫は良かれども

馬は重くてたまらざるなり

### (三) 下敷きの繁さん

作家山本周五郎が亡くなりましたが彼の作品に「青べか物語」というのがありました。映画にもなりましたので御存知の方が多いと思います。僕自身も、最初は原作を知らずに映画を見てから、認識を新たにしたものでした。その原作を見ますと「第13章 ごったくや」(文芸春秋新社版96頁)というところが

あります。「栄屋」というところで、はからずも主人公の「私」は逞しい体軀をした女の子に押し倒されて身動きもならぬように馬のりされてしまいました。その次第がそこに描かれて居るのです。

「はたせるかな、と云ってもいいだろうが、私と友人が坐るとまもなく、潮やけのした逞しい体軀の女性が三人、手に手にビールを二本ずつ持ってあらわれた。(略)右側にいる小柄な女中に向って、君がビールを一本だけ持ってこっちははいって来い、「君だけ」であり、ビールは「一本だけ」であり、ほかのお嬢さんもビールも絶対に不要である、と極めて明確に宣言した。まあこの人は、と選ばれた小柄な一人が云った。そんな憎たらしいこと云って承知しねえだぞ。そうしてこっちへ踏込んで来ると、私を押し倒して馬乗りになった。両手で私の手を押え、両の腿で私の胴を、そしてその腰部で私の腰部をというぐあい、字義どおりの馬乗りであって、若い女性からそんな挑戦を受けたことのない私は、その屈辱的な姿態の恥かしさに狼狽し、はね返そうとしてできるだけのことをやってみた。あとで聞いたところ、彼女は十六才だそうで、しかも五尺そこそこの短軀であるの



に、信じられぬほど逞しい固太りの腕や、火のように熱い太腿の力は無類なもので、私のあらゆる反抗に対してびくともしなかった」

映画で見たときは、この「屈辱的な姿態の恥かしさに狼狽」する役を演ずるのが森繁久弥でした。この俳優は、36年12月号で紹介しました様に、「痴人の愛」のナオミの役をした叶順子とピンキー対談した際、下着一つになつた順子に跨がってもらつて、馬をしたいとの希望を述べていました。それからまた、「新・夫婦善哉」という映画(38年)の中で、雷鳴の日でしたか、下着姿の淡路恵子に馬のりされてしまう場面を演じておりました。そ

## 四人の美女の縛られポーズの代表的作品集 女体緊縛写真のアルバム 限定版グラビア印刷写真集

豊満と清楚

限定版頒価一部一〇〇〇円(送共) 略号「限二」  
〔モデル〕 長野 良子——大塚 啓子——五月亜紀子——新井マリ子

この「緊縛女体アルバム」は、若々しい豊満な肉体を誇る長野良子、大塚啓子の二人の女性の美しさ最高度に發揮した縛られポーズの大胆奔放な素晴らしい場面のかずかずを、画面いっぱいに所狭ましと活躍させました。特に写真に迫力を増すためとグラビア印刷の効果をフルに運用するためにも

んなどころから推して、何か彼は女性のお尻に下敷きされる男のムードを持っている感じですか。この森繁を着物姿のまま乱暴に押し倒し、おお向けざまになったところをすかさず飛び込む様にしてデンと馬のりしたのは左幸子の演技でした。うま跳びでもするかのようにはずみをつけてボンと跨がるその身のこなしの鮮かさが、如何にも何かもの慣れた趣きがあったのに大へん感心させられたものでした。一生けんめいはねかえそうともがいている相手を、馬のりのまま、まるで受けつけないみたいにしつかと敷きひしんでいる左幸子は昂然と言ったものです。「だらしない」

写真面を一きわ大きくしました。

前記二嬢の豊満美と対照的に、更に清楚にして純情な初々しいフェイスと伸々とした若鹿のような肢体の持主である五月亜紀子と新井マリ子の両嬢の痛々しいばかりの可憐な緊縛裸身を以て誌面を飾りました。

女に組み敷かれてもはね返せないなんて男の風上にも置けやしない」

この場面は、それ程短いものではありませんでしたので大いに愉快でした。

森繁は左幸子に倒されて

屈辱的な懲罰を受ける

磐石の重みをかけて抑え込む

左幸子は馬のりとなり

根かぎり抵抗すれど効果なし

乗ってる女無類の強さ

淡路恵子がやはり森繁に乗るところの写真は『週刊事件実話』というものの38年9月24日号巻頭にありました。彼女の両足で森繁の首を挟みつけている場面などを含む、散々ないたずら振りを四頁に亘って紹介しています。その三頁目を見ますと、おお向けに倒された森繁の立てた両膝の上に恵子が大股ひろげて跨がっています。映画では、このところで雷鳴がとどろくか何かして、恵子は何か叫びながら、そのままピンと前へ一はね致します。そして繁さんの胸板の上にドスンとお尻を落して馬のりとなりましたから、繁さん不覚にも一見組み敷かれてしまったような不ざまな恰好。

不覚にも下着姿の姐さんに

馬のりされて不ざまをさらす

# 稿談 性風俗資料入門 戦後篇 (2)

『好色文学批判』 『末摘花』の解禁  
『奇書』と『稀書』について

斎藤夜居

昭和二十七年五月のことである。新緑の草木が青くさい濠端の白日の道路を行く中年の紳士がいた。九段坂の方から来たらしく、竹橋を過ぎるとしばらく立止まって考えていたが、そのまま真直ぐに進み右に曲った。頭の中に書いた地図を辿っている様子だった。彼の目指す建物は其処にあった。国際文化会館というのだが、それは旧軍隊の兵舎とおぼしき二階建てで、古びた大きな棟割長屋という感じだった。彼は苦笑した。△国際▽とか△文化▽という流行語の意味を考えれば、これが今の日本に最もふさわしい姿だと思った。敗

戦後からの崩れた国家を辛うじて支えている△文化▽の正体を見届けた訳だ。「旧軍営交じて秘密出版所となるか」……と、つぶやいた。

この国際文化会館の二階の片隅に、正確には東京都千代田区代官町二番地に、図書出版「作品社」「ロゴス」があり、この出版社で昭和二十三年に刊行した堀口大学の詩集『乳房』表紙局紙装岡本太郎画本文特アート限定九百部や、青柳瑞穂訳詩のヴェルレヌの秘稿詩集『女友達』限定五百部は愛書家の間に知られていた。そして此処の事務所の机の上

に郵便受一箇が置いてあって、その箱が彼が遠路上京して尋ねた目的の「東京限定版クラブ」だったのである。

部屋の中には机と椅子があるだけの殺風景きわまる事務所で、三十くらいの男と、二十五、六の青年がいた。チラリと鋭い警戒の視線を走らせたが、用件を聞き、紹介者の国文学者の名前と、地方支店長だが一流銀行の彼の名刺が疑惑を解いた。彼は規定によって入金金五十円と誌代六カ月分として五百円を納入して、本会は限られた真摯会員の文化的研究会ですから、低級な要求や希望には応じら



れないと重ねて云われ、赤い表紙の雑誌『奇書』創刊号を手に入れることができた。

「直接お出でくださらなくても、大丈夫ですから……今後は通信でご連絡ください」

と青年は言った。ドア一枚で隣は居間になって世帯道具が置いてあり、その青年の妻らしい若い女がいた。お互いに警戒心がうすれ、気持がほぐれた所で、彼は若い頃学生時代から軟派本漁りが趣味であること、無茶な戦争は負けてよかったこと、赤城元町の梅原北明や神保町の横丁にあった温古書屋坂本書店からも珍書を購入した話。じぶんは書物愛好癖が甚だしいので、本が傷むのが嫌いなので、昔から刊行所へ直接出掛けて買うことにしているなどと語った。話柄はしだいに主客転倒のかたちで、事務所の二人は蒐集談を傾聴させられていた。三十代の男は口数が少なかったが、彼は何となくホモセクシュアルの眼を感じた——彼は男色文献蒐集をも手がけていたから、ふとそうした予感がしたのだが、後になって知ったことだが、果してその通りその男こそ男子同性愛機関アドニス会の主宰者だった。

扱て、この頃の書誌的解題をはなれて前置が少し長くなったが、この東京限定版クラブ

が同居するロゴス出版に『好色文学批判』といういかめしい題名の小冊子がある。斯学入門解説書として好適な書であり、現在でも入手し易くよく見掛けるので次に述べる。現在古書価は三〇〇円から五〇〇円くらい。

# ◇ ◇ ◇

元来優れた資料価値のある性風俗文献の出版には、特殊な性格の人物の精力的な活動が必ずともない、その論旨に刊行書の色彩に、一種の体臭を帯び、例えば刊年不詳の秘版であっても具眼の士が手に取る時大体の年代の推定やら刊者の見当が附くように、知らず識らずのうちにその匂いや味わいを感じ取れるもので、それ程に斯道に於ける出版者というのは個性が強い。造本における背革に、印刷面の活字の配列に、本文用紙の好みに、挿絵の位置に、更には一枚の資料写真カメラのアングルに至るまで、明らかにその人を感じさせる要素を持つ——。処が、「ロゴス」「作品社」系の刊行書には体臭がうすい。ガラスのような哲理と皮肉で不敵なわらいが潜んでおりながら、飽までもそれは伏在するだけのもので体臭というには当たらない。強烈な文献の匂いがあるだけなのである。資料文献の紹介、翻刻、翻訳に正確さがあり、資料尊重に

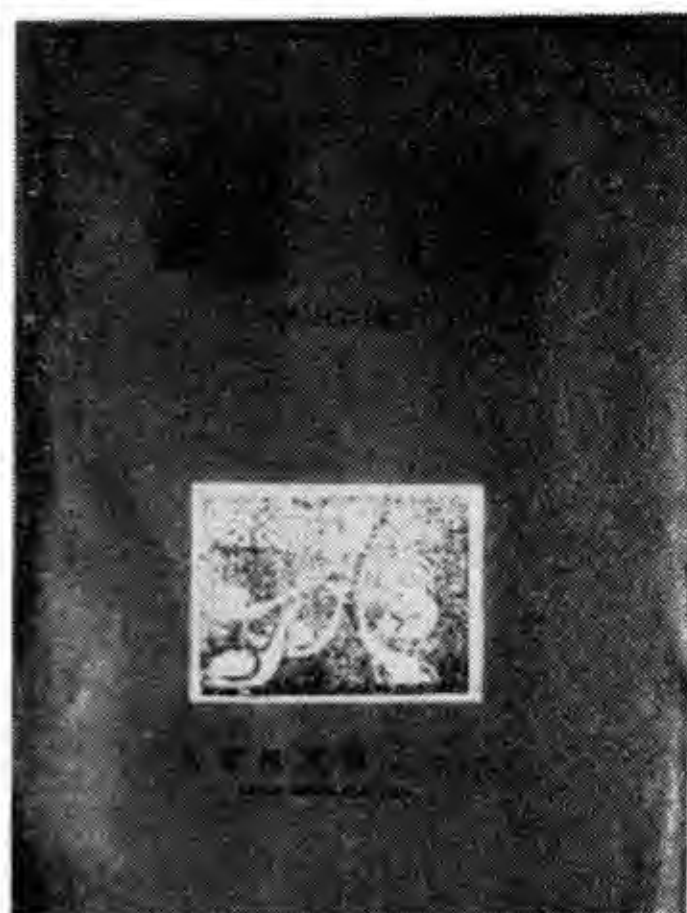
留意する点が多かった——これが此の派の人々の特色ともなった。

『好色文学批判』昭和二十三年九月、A5判一三三頁、定価八十円。編纂兼発行者松川健文、発行所ロゴス。

内容——艶笑記事の公開性限界、金森徳次郎。芸術作品の猥褻性、植松正。デカメロンの文学的価値、柏熊達生。接吻の詩人ロンスール、佐藤輝夫。カザノヴァの回想録矢野目源一。ゲーテの艶情詩日記帖、菅谷恒徳。バルザックの滑稽譚、小西茂也。ボードレール悪の華裁判、佐藤朔。モーパッサンとエロティック、丸山熊雄。シュニツレルの輪舞、丸木砂土。ジョイスのユリシーズ、安藤一郎。ロレンスのチャタレー夫人の恋人、本多顕彰。サルトルのエロティシズム、河合亨。金瓶梅覚書、奥野信太郎。西鶴と春水、暉峻康隆。誹風末摘花の本質、柳田良一。明治自然派の猥褻描写、日夏耿之介。永井荷風の好色趣味、吉田精一。肉体文学について、青野季吉。猥褻性に就いて、夏川文章。

この書の編纂発行の意義については、最近では低俗なエロチック文学が流行して、そのため検察当局の取締も漸次強化されている。や

## 『奇書』創刊号表紙



がては以前のように封建主義的検閲制度下に経験したように、人類の文化的遺産たる文学作品までも再び不当な制約拘束を蒙らぬとは断じられぬ。文学作品と猥褻文書との限界は

何処か？ 猥褻と判定する基準は何か？ ここに東西古今の文学におけるエロチシズムを取上げ、斯界の権威に依拠し厳正なる批判を加え、何を芸術とし何を猥褻とするかの課題にいささか寄与せんとするもの——だ、と云っている。各分野（文学、法律、書誌）の専門家たちによって充実した解説が行われてい

は至っていないが、実に明解に「猥褻」の意味が説明されている。

## ◆ ◆ ◆

松川健文はこの頃（昭和二十三年四月）葛城前鬼という筆名で、やはり筆名柳田良一（東京都古川柳研究会主宰、後に近世庶民文化研究会）と共著の『新註 誹風末摘花』が発禁処分（起訴）されていた。

「末摘花」そのものに就いては既に説明の要は無いと思うので省略する。古川柳艶句集成

る。最も主要の論考は巻末の夏川文章こと松川健文つまりこの書の発行者の「猥褻論」である。該博な知識に満ちた長論であるが、約めて云えば、男根も女陰も共に神でもなければ悪魔でもないこと、性交は神聖でもなければ非道でもなく、それは生理的な愉快で有用であり必要な行為であって、人類に於ける猥褻性とは社会生活における慣例に矛盾するところのある種の表現様式を意味するに過ぎない——と強調したかったらしい。

で、前記柳田良一こと岡田甫も——末摘花とはどんな本か？ という質問に応えて、エロティックな川柳を集めた世界一おもしろい本である。といっている（『人間探究』昭和二十五年五月）——この裁判は二年有半をついやし、東京地裁に於て十余回の公判を重ね、昭和二十五年八月、猥褻文書に非ずとの明確な判決を得て発行者は無罪が確定した。末摘花は旧内務省検閲時代から折紙附の伝統的悪書とされ、研究者のための原文覆刻すら許されなかった暗黒書だったが、この時初めて青天白日下に大手を振って通行を許されるに至った。まさに本邦出版史上「新紀元」を劃した記念碑ともいふべき本である。

文芸裁判というのは多く敗退におわるか、然らずんば泣き寝入りか、うやむやのうちに押れ合いにおわることが常識みたいになっている。新聞紙上に報道された禁書問題で、その終末を知ることは実にすくない。吉田健一訳の河出版『フアン・ヒル』発禁の件なども、ごく最近のことでありながら、その経過の報道を私たちは知らないのである。「末摘花」が発売当初猥褻文書の疑いありと検察側に取り調べられた時、発行者松川健文は警視庁留置所に十数日も入れられたがその精神的



拷問にもよく堪え、五百円の罰金をはらえばそれで八猿襲事件Vとすれば簡単に済むことだったが、爾来二年有余、公判廷で無罪を主張して美事に勝った。当時の費用でも数十万円今日に換算すれば数百万円に相当する私費を投じて法廷で争ったのである。勇気のある人だった。その判決文には、いたずらに金儲けの為に出版したものではなく、文献資料研究のための良心的意義ありと認めたから、という言葉が記されてあるという。

さきに記した八四疊半事件Vと云い、この八末摘花事件Vでも、艶笑出版事件というのは、事件発生当時の華々しさにくらべて、当事者にとっては長い忍耐の時間が残され苦痛の多い事柄となる——末摘花解禁によって得た風俗文献研究それは学問の自由であるが、その利益は莫大なもので、おかげで江戸庶民生活における人間研究が活発となり、読者たちは遠いおや達の情感性愛生活の営みを自由に知ることができるし、調べることもできるようになった。

『好色文学批判』において刊者松川がゲートを含めて世界の艶笑文献解説を試みたことはこの「末摘花事件」のために援軍を動員したものと見るべきで、我国における艶笑文学の

科学的研究の第一歩を印した事柄であった。

# ◇ ◇ ◇

「この二年ばかりの間に昔だったら到底目の見なかっただろうと思われる著作や、翻訳が続々と矢継早に刊行された。全く何と云って喜ぶべきか、或は憂うべきかその言葉を知らない。というのは人類の一つの世界的な財産価値のある作品が、徒らに闇の中に葬られ、消え去ることなく、堂々と刊行されることの喜びであるが、それが相当歪曲され抄略され、或いは改変されてしまふと新しい読者がそれを見た時に、何んだこんなものかという失望感を与えるのではないかという不安……」

雑誌『奇書』発刊の主旨は秘文献の正確な紹介にあった。創刊準備号というたった八頁の孔版冊子だがそのように宣言している。この東京限定版クラブの『奇書』は毎号三十四頁前後の薄い包み表紙の雑誌だったが、通刊十六号通し頁で五八八頁まで発行し珍書や性文献の紹介につとめた。勿論会員配布の雑誌で、発行実数三五〇部くらいであったから入手し難い雑誌となってしまう。私がこれの全冊を通覧できたことは、この章の始めに記した、現在は田園に閑居しておられる蒐書家

のご厚情によるものだが、この雑誌は寄稿家にも刊行末期には送本がなかったというから揃物は珍品である。書物の蒐蔵家は文献の保護者でもある——過去において、我国における艶笑文献の出版・翻刻の最盛期は昭和二十五年末頃より昭和三十年迄で、内容の充実した刊行が多く、珍書愛好家は次から次へと送金が忙しかったと共通して語っている時代である。この雑誌『奇書』に紹介された主要文献のみを次に記録する。

## 第一号

歌麿の秘画

吉田咲二

ゴンクール之歌麿に紹介された枕画

原 浩三

艶本解題会本枕地気志

原 浩三

北回歸線(連載)

ヘンリ・ミラア

## 第二号

バイロスの艶笑画

原 浩三

末摘花の版木は残っている

岡田 甫

「ファニー・ヒルについて

K L M

『歌姫日記』の女主人公

原 浩三

私家本「腕くらべ」考(連載)

註。これは通行本中で最も流布され入手し易い、角川・創元・新潮の各文庫本の組版に準じて秘文を挿入できるようにした極く

親切な資料。

### 第三号

この号の本文記事は特色なし。別刷孔版の挿み込みに「張形小説」高田嘉太 があり珍具研究で特別図譜三図附。

### 第四号

ダンヌチオの楽慾文学

日夏耿之介

ポンペイのお土産写真

原 浩三

おしゃれ女工と学生さん

アンリ・モニエ

秘本「花の幸」<sup>みゆき</sup>原文紹介（連載）

### 第五号

フランスの伊達男について

松村喜雄

辨才天難考

原 浩三

### 第六号

ミラア事件の顛末（文学表現の自由と猥褻の問題）

ヴェルレエヌ寄宿生

青柳瑞穂

艶本紹介「センリキヤウ」

新選古今枕大全（原文紹介）

### 第七号

ミラボオ伯爵の艶情文学

松村喜雄

### 森山太郎氏

（芋小屋山房主人）

宮尾しげを氏筆



坊チャンまゝいところ落着の  
前座か、大神宮のお札売り、  
てなもんでせうな。

生来の超楽家、気が向くと熱海まで風呂へ入りに行つたり、仙台までお茶を呑みに出掛けたりして年中行方不明になると云う風来坊。

前身が、坊主で、医者で、

ブンヤで、MPで、飛行機も

操縦すれば、ラチオも組立て

る、建築もやれば、料理もお

手のもの、酒は一滴も駄目だ

が、女にかけちゃーというシ

タタカモノ

現在、浦和の片隅に晴耕雨

耕、稀書珍籍をながめたり、

郷土玩具をコレクションした

りして、悦にいつている当代

の奇人

梅原北明のこと（遺稿）

花房四郎

艶本紹介「御覧男女姿」中巻

凸版複刻

この号の挿み込みに前号の「絵本センリキヤウ」に就いて花咲一男が更に詳細な解説を追補した。

第八号

ハンスカルヴェルの指環

夏川文章

川柳漫々考

花咲一男

### 第九号

秘戯銭

伏見冲敬

奇怪なる情熱（鞭打）

松村喜雄

日本艶話類聚

中野栄三

艶本紹介「牡丹燈籠快夷」（原文絵入）

### 第十号

南回歸線の性慾描写

松浪信三郎

ふらんす隠語考

小田 一誠

文学と猥褻

ヘンリ・ミラア

### 第十一号

荷風「ひとりごと」秘稿

昭和末摘花

宮仲串助

艶本紹介「美通能詠」（原文絵二図）

小松百亀「貝づくし」

原 浩三

### 第十二号

特輯 江戸趣味と荷風秘版

この号が雑誌奇書のうちで最も内容が充実している。花咲一男の「とんだ霊宝」東妻

雄兎子作・歌川派女好楼画の珍本紹介と、

「真袖枝折」の原文紹介。

「荷風の『門外不出書』をめぐって」J・

S署名の稿には四疊半襖の下張の肉筆原本

より凸版にした、荷風筆蹟と信すべきもの

二図が出ている。荷風真筆版『机辺の記』



(青燈社刊) など一見したことがある者なら一応くびをかしげざるを得ない書体である。

## 第十三号

第二の性から見た第一の性 松浪信三郎

詞華集プレクサスより 夏川文章

女子同性愛の研究 モル原著秘文紹介

艶本研究 はまと大和絵 猿目 透

## 第十四号

艶本「好色旅枕」全文紹介

「三国女夫意志」について 猿目 透

戦後艶本漫筆

間 義勇

## 第十五号

四季の詠・秋冬の巻

原 浩三

艶画四季時計解題

岡 緑郎

江戸時代の見世物

岡田 甫

## 第十六号

国芳の艶画

原 浩三

夫婦和合十訓

西島 実

異常性欲の種々相

川本汐二

尚、雑誌『奇書』を通じ配布された江戸文献資料は、「於佐名那志美」「姫小松恋若草」「逢夜雁之声」「偶定連夜好」があり孔版小冊子で毎回分冊配布して完結を見た

ものに「歌姫日記」「乱れ雲」「むき玉子」がある。活版では「セックサス」上巻と、「四季時計」「艶情版画」があった。

## ◇ ◇ ◇

『奇書』は昭和二十七年五月に創刊号を発行し、第十号までは刊行年月日を印刷してあるが以後は無記号ばかりである。廃刊の年月は従って不明だが、昭和二十九年に終わっている様子である。「東京限定版クラブ」と「会員配布第何号」と印刷された奥附が残され、発行者は不明。

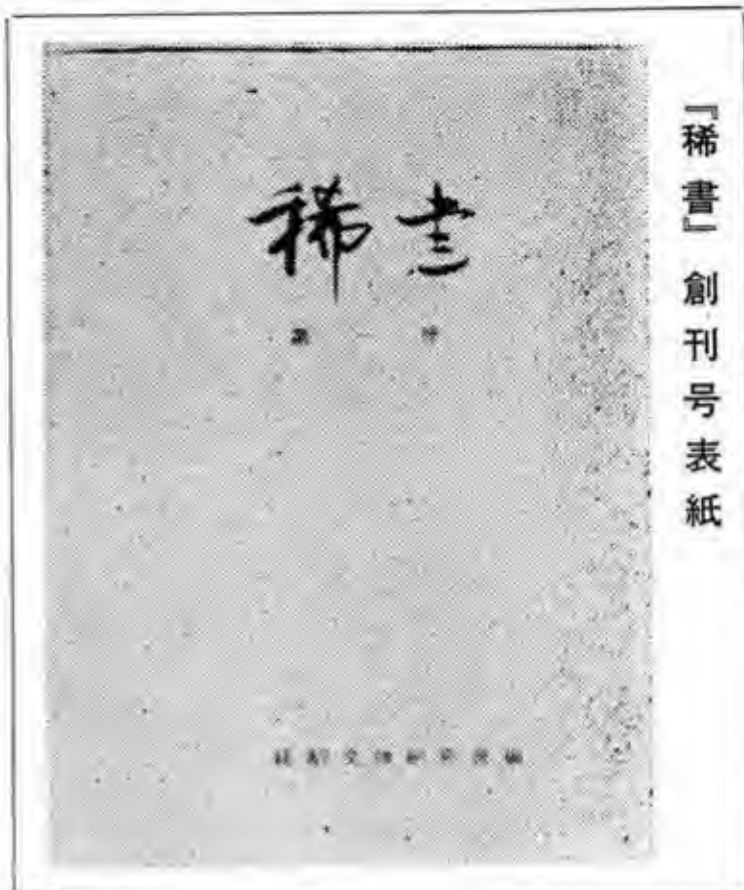
この特異な文献資料雑誌『奇書』創刊号が発行された五月には、吉田内閣が日共の計画的に行うたび重るデモ騒ぎに手を焼き、破壊活動をおこなった団体活動の制限、解散、処罰などを定める破防法をこのときの通常国会に提出したため、総評はこれに対抗して反対ゼネストをくりひろげ、その不穏な空気が一挙に爆発したのがこの時のメーデーで、デモ隊五千名対警官隊五千名が、皇居前広場で市街戦しながらの乱闘を演じ、火えんびんを投げ、駐車中の米軍自動車十三台を焼き、米兵を壕に投げ込み、死者一、重傷二〇〇、軽傷四〇〇、最高検察庁は一〇〇〇名を大量検挙したという大事件があった――『奇書』発行

所の千代田区代官町とデモ現場は指呼の間にあった、つまり呼べば答えることができるほど近い距離にあったが、現実の世相と風俗文献発行という精神距離のへだたりその余りの遠さを発行者は、どのように考えて居たであろうか？もうもうと立ちのぼる黒煙の中で、まるで戦場のような広場からすこし離れた所で『奇書』発行者は何かを考えながらさまざまじい乱闘を眺めていたように思う。勿論、彼が何を考えていたかそれを知ることとはできないけれど……。『奇書』がロゴス、作品社系の出版だったことで編集・発行を同社と断定することはできない。飽までも「東京限定版クラブ」であって、それ以外の事実を今日では知ることが出来ない。

ロゴスの松川健文は書誌研究家（特にフランス文学）であると同時にニヒリストとしての性格もあり、その後の一部の日共党員の如くハモグリストVの性格も多分にあっただろう。そのフランス文学の素養も戦時中の海外植民地仕込みの実学派であったが、その人間的性質には自由人としての正義感があった。数すくない同好の士を糾合して貴重な性文献をうけ継ぎ次代に伝えた功績は大きい。

## ◇ ◇ ◇

## 『稀書』創刊号表紙



『奇書』という誌名は何となく書物愛好家を魅惑させる要素を含み、刊行者にも読者にも亦むかしから好まれていた。戦前にも、『奇書』（昭和三年文芸資料研究会）があり、前記の東京限定版クラブの『奇書』があり、更に次に述べる芋小屋山房の第一組合稀観文献研究会編の『稀書』があった。この芋小屋山房で上梓した『女礼讃』はゲテ装の珍本として知られている。これらの発行者は森山太郎で別図にその似顔と自己紹介文を掲出した——『週刊サンデー』昭和二十八年十月二十五日——趣味家で開放的な人柄で性格も明朗で

あった。書誌研究者・造本家としても少雨莊斎藤昌三の系統に属し、よく珍本マニアの蒐集心理に喰い込むカンドコロやそのツボを心得ていたことは御本人自身が相当の愛書家であったことを証明している。暢気な人物であったのに問題後は消息不明のまま数年過ぎている。雑誌『稀書』の創刊の辞のなかに、「我国の艶本その他の風俗資料や重要な記録などでも、何等の保存の記録も残さずに、やがて散佚の運命にあるものが尠くない、然も之等に対して只秘事と云う事のみで敬遠されていくことも、真面目に考えてそれが日本の文化に大きな役割を果す事を思えば、敢えて現状に黙し難いところがある」と云っている。相変らずの決り文句だといえ、それ迄の話だが、此処にも文献の保護と数すくない貴重本を復刻して次代へ仲介しようとする熱意があった。また森山太郎は趣味の造本家として優れたセンスを持ち、例えば一枚の刊行案内にしても細く神経のよく行き届いた印刷で、現在芋小屋山房本の古書価が高価を呼んでいるのに不思議はない。従って森山編集発行の雑誌『稀書』には文献物の他に好事家・趣味

家をよるこばせ堪能させる記聞にも富み特色を成していた。

『稀書』は全十冊で廃刊。B6判。毎号六十頁から八十頁で会費年間一〇〇〇円だった。創刊号は昭和二十七年一月、第十号は昭和二十八年八月。次にこの雑誌の内容に就いて、

## 第一冊

当世にせ本づくり

千里 巖

仕掛本漫言

水曜荘主人

ちやぶ屋女給の日記

斎藤昌三

日本史伝川柳狂句（連載）

岡田三面子（遺稿）

小野徒玉茎號字尽（原文紹介）

南名散史

小断年表（連載）

宮尾しげを

艶本書目集成（連載）

研究会編

## 第二冊

大笑い考

藤沢衛彦

（註。これはセックス小ばなしで落して笑わせる艶笑的な地口を集めたもの）

春色忍ヶ岡 艶本紹介

中野栄三

後岩津々志（男色書誌）岩田準一（遺稿）

紹介 江戸川乱歩

## 第三冊 艶本特集

口絵 大焦熱開地獄

全盛七婦久腎 全文複刻



年中交合故事 図譜複製

他に記事には南名散史の「お馬と経帯」「秘薬雑録」紹介の艶本は凸版で原本どうりに複製した。この号の内容が最も充実している。

#### 第四冊

カストリ雑誌浮沈譚

陰名「話の泉」

#### 第五冊

後塵記

艶本紹介 穴相撲四十八手

#### 第六冊

Y字形の民俗

猿も自慰をする

艶本紹介 女大らく宝開

#### 第七冊

ワイセツを否定する

葉末余滴

堕胎の立会

艶本紹介 しめしこと雨夜の竹かり

#### 第八冊

猥褻とは何か

艶本紹介 陰陽てごとの巻

新稿艶本目録(一)

#### 第九冊

艶本紹介 鳥襷十二双歌合

同 小犬つれづれ

「桃源華洞」補遺

(註。これは奇書刊行会活字本より省略された「地名に現われた女陰」を孔版原本より補遺。「桃源華洞」は陰名語集成で昭和初期の好事家の労作)

#### 第十冊

艶相雑考

性的雑言

艶本紹介 艶色二葉源氏

同 色道無限算開記

同 艶姿娯集余情

艶本作者戯号抄

◇ ◇ ◇

芋小屋山房・森山太郎は浦和市駒場に住んでいた。少雨莊流の造本家として終始しても

無事に過せた人であったが、逸脱の艶色文献刊行者として、後に行方不明となってしまうた。然かも妻子をも置去りにして……。稀書

珍籍のほかに民芸品や郷土玩具を愛好したというから、その資性もまた愛すべき人柄であったのに。

『稀書』発刊趣意書のなかで——「女礼讃」

「袋法師詞書」「逸著聞集」「はこやの秘言」

等の複製をして参りましたが、当局の不当な

弾圧を受け、過般その解決を見るまでの間

洵に遺憾ながら一時事業を停頓するの止むな

きに至った、と述べ「あなおかし」「柳の葉

末(艶笑柳句集)」の上梓を以って第一期の事

業を了え、第二期刊行着手としてこの雑誌の

発行を企画したと云っている。この時代の艶

笑出版の華やかさは未曾有の現象で、その詳

細は別の項目において書く予定だが、斯道文

献出版者たちはまるで何かの熱に浮かされた

ように法網を尻目に、勝手な秘密出版を続け

た。それは、一種の「使命感」ともいえるべき

呪縛にも似た思想でもあった。——『稀書』

第九冊の編輯後記を次に写す。心の乱れのあ

とも見えるが、其処には悲痛で滑稽な人生の

泣き笑いも見える。自縄自縛の悲鳴もきこえ

る。

△空白半歳、全くやりきれない気持でした。

次から次へと不愉快な事件ばかりで、どう

にも始末にこまりました。「カンゴクにブ

チ込むぞ」なんてオドカサレテ、毎日逃げ

て歩いたり、借金取りに追廻されたり。し

かし、実際のところ良い薬になりました。

俺はズボラで気狂いだ、なんて詰らないも

のを売物にして、独りでいい気になってい

たもんですから、ヒトリヨカリとは將にこの事、何の事はない、性的自慰だけの人生ですヨ。しかし、罰金もどうにか納めたし嫌なモロモロの雑件も片付いたし、これからは専念して珍本作りにポットウ出来るでしょう。そんなこんなで、予定がスツカリ狂って会員各位には何とも御詫びの言葉もない程御迷惑を及してしまいました、捲土重来、計画を確実に進めるべく、出来る限

りの努力を続けて居ります。「ニセ本は嫌だ」という気持だけで仕事を続けて行きたい。「本物を作って何故悪い」という信念でどこまでも押して行きましょう▽  
『稀書』はこの後記を書いた次の号第十冊でおわってしまった。芋小屋主人は罰金と借金に追われて逃げ廻り、残された妻子は路頭にまよう程のことにもなり、その妻は友人たちの好意で銀座のさる民芸品店の売子になった

という消息をきいたが、その後どうなったかわからない。『奇書』『稀書』共にこれを綴く時に、△性▽における生活の犠牲と涙も紙背にあったことを人は知るべきである。尚これら雑誌の寄稿家には匿名だが法学博士・文芸家・美術評論家・病院長・外務省高級職員・風俗研究家・書家・新聞記者・等々あり多彩な顔ぶれであったことを附記する。

## 或る派出婦の告白

「十七の娘に浣腸」

近 藤 映 子

昨日からの雨は今日になっても止まず、私達は会の待機部屋で、お得意先からの電話を待っています。仲間といっても、私と未亡人の峯子さん、一人暮らしのみどりさん、夫と別れた春代さんの四人です。私は今年三十六才で八年前の二十八才の時、夫に死別してか

らずと派出婦として働いております。この会にいる人達も皆生活の為に働いているので、容貌や年齢に自信のないため水商売に行けない人や、最初から水商売に向かない女性の人達です。各家庭へ派遣されております時には嫌なことや、又びっくりさ

せられることもあります、気がおけない仲間同志で、電話を待ちながら話し合っていると、皆それぞれ色々面白い経験もあるものだと感じさせられます。

私達の派遣されるお家は、やはり何んといっても臨時なのです。病気の人の時が一番多いのです。だから看護婦の資格こそありませんが、病人の看護をすることが多く、浣腸などは手ぎわよくやれるようになっています。

この前伺ったお宅は、五十才過ぎの婦人と十七才ぐらいの娘さんとの二人暮らしで、娘さんが消化不

良とかで寝ているので私が呼ばれたのでした。親娘かと思っていましたが、そうではなく遠縁の娘さんとかでお手伝さんとして中学を卒業してから、この家に勤めているのだそうです。

そんなわけで仕事といって別に忙しくもなかったのですが、日に三回も四回も、主人の命令でその娘さんに浣腸をさせられるのが日課のようになっていました。その婦人は自分でガラスの浣腸器にグリセリンを吸いあげながら、「映子さん、驚いたでしょう。実はね自分でも変わっていると思うのです



けど、この娘に浣腸してやるのが楽しくてたまらないんです。今日後は後で私にも貴女にして頂きたいんです。こんな齡でとお笑いになるでしょうが仕方がないですわ。

さあ、この子の足を押さえて下さいな。そう、いいわ」と、私に介添えさせるのです。

私は夢中で娘さんの足首を持ち上げ左右に押しひろげました。私にも二十年程前には、この娘さんぐらいの時代があったのです。さぞかし恥かしいだろうと同情されるのですが、何んだか、可哀いそうだという気持とは逆に、もっともっと、いじめてやりたいと思う気持がするのが不思議です。

婦人は二回続けて注入した後、私にオシメを当てさせてゴム引きのカバーをつけさせました。娘さんは股の筋肉をびくびくとふるわせて便意をこらえています。

「ううう、くく、もう、もう、うう、ダメダメ……出……るう……」  
「我慢するの、出来るだけ我慢す

るのよ。苦しいの、わかるわ。でも我慢しなきゃ」

娘さんは、もう真蒼な顔で、見ている私までが便意を催してきそうになります。

やがて……ブチブチ……という秘めやかな音、娘さんは、もう顔を掩って消え入りたいたような風情です。そんな小娘の有様を、わざと意地わるく眺めやるのでした。

女も中年になると、このように意地悪くなるのでしょうか。可愛いい娘さんの恥かしがる姿に、何かしら、心の底からつき上げてくるような快感を覚えるのでした。

この家には一ト月半ばかりいましたが、女二人だけのところへ私が入るのでしたから、本当に仕事らしい仕事とってあるわけではありませんでしたが、これが家政婦仲間という「骨休め」で、ガメツクこき使う家があるかと思うと中には、このように天国のような仕事場に当ることもあるのです。そんなとき、私達は十分に羽を

のぼし、時には閑を見はからって

外出させて貰って、買い物をして映画を見たりするのです。この家では、娘さんに対する浣腸やオシメを当てて排便させたりするのが、大きな仕事でしたが、それとても私は只介添えするだけで、殆どの準備は、五十才ぐらいの婦人がしてくれるのです。さすがに、オシメの洗濯まではしてくれませんが、それも赤ン坊ではないのでそう何回も何回もというわけではありませんので楽でした。

その娘さんに浣腸を施したあとで、私はきまって、その婦人に浣腸させられました。婦人のときはオシメを当てないで、自分でトイレへ行きました。日に三回も四回も浣腸するものですから、そのうち、娘さんのお腹がきれいになつて、もういくら浣腸しても排便しなくなりしました。一々オシメの中へ排出した便を検査していた婦人は、私に薬局へ行ってイルリガートルを買ってくるように命じまし

た。

それから、イルリガートルで大量の微温湯を時間をかけて、ゆっくり注入するという方法に変わりました。娘さんも最初のように嫌がったり恥かしがったりしなくなりました。この奇妙な日課を待ちわびてくつくり時間をかけて注入し、その有様をよく観察することに、一つの楽しみを覚えました。

そのうち、婦人と相談して、いろいろな恰好に娘さんをさせて多量の浣腸をすることを考えたり、また液を排泄するときの状態や器具などを交えたりしました。その頃が最も激しいときで、娘さんは寝たきりで浣腸ばかり受けているといった有様で、私も結構楽しい思いをいたしました。

やがて娘さんも起きれるようになりしましたし、私も会の方から、やいやい言ってこられましたので惜しいながら、この派出先とも別れを告げたのでした。

## 鬼六談義

## 三文SM人生論

団 鬼 六

SとMの差は、山賊と海賊みたいなもの。

山と海の差こそあれ、どちらも同じ賊であり山賊から海賊へ転向するような事は考えられないが、両者とも色々と共通した所を持っている、という風に私は考えている。とにかくSにせよ、Mにせよ、こうした性情は、一体どうして人体に芽生えたものなのか、Sとは何ぞやMとは何ぞやという事よりも、こういう我々マニヤの、大袈裟ないいかたかも知れないが、宿命、因果というものを、私は全く不可解なものとして考える事がある。

現在、私の友人、知人の中には、この種のマニヤが何人かいて（花と蛇のファンだという事で知り合った人もいるが）時々逢って、

罪のないSM談義をかわしつつ、一杯飲むのだが、分類してみると、Sの人が五人、Mの人が三人で、仔細に観察してみると、Sの人とMの人との間には面白い性格の相異がある事に私は気づくようになった。血液型によって、人間の性格は大体見分ける事が出来るともいうから、マニヤの趣向によって、その人間性を判断してみるというのも面白い方法かも知れない。

私の知り合いである、この八人のマニヤを観察し、発見したS派の人とM派の人との共通点は、両者とも、なかなか頭は切れ、学生時代の成績も優秀であるという事である。智能を使う職業の人にマニヤは多いという事を

よく聞くが、どうやら、それは事実らしい。

私の見た所では、Sの人は一芸に秀いでた人が多く、Mの人は多芸に長じた人が多いようだ。といっても、これは、私の友人知人だけを見て感じた事であるから、あまり当てにはならないが、両者の相違という事になると、S型の人は、俗悪なる現世主義者、会社内では真面目で精励で、事務的に色々な仕事をスラスラ処理していく才能があり、胃の調子が少し変だと思えばすぐに好きな酒や煙草をぴたりと断って、何ら憂鬱な顔をする事なく何とか上役の氣に入られようとして氣を使い、会社内での不平不満は同僚と共に安酒場でまぎらわせるものの、会社にとって俺は如何に



重要な人間かという事を同僚に向って、自慢する事を忘れない。表面は豪放に飾っているものの、会社内では実に小心で、そのくせ人一倍甘い汁を吸いたがり、出世欲に燃えていて、家庭内では暴君である。という風な書き方をする、何だかS派の人をこきおろしているように受取られるだろうが、身近にいる人々を見ての感想だから、S型の人なら誰にも当てはまるものだとは決して思っていない。つまり、S派には、積極的な現世主義者が多いという事をいいたいだけなのだ。

S型に属する五人の知人の中の一人は、映画会社のフィルムの編集を十年もつづけており、また、一人は、印刷会社の写真植字というのを八年もくり返している。また一人は、SMも一芸に入るのかも知れないが、十年以上もSMに関する雑誌だけに寄生して生計を立てているという人もいる。自分達の置かれている場所に懷疑を持っていても、そこからぱっと抜け出して、一丁ドカンとやってこましたるか、という勝負根性はない。街気満々としていても、実践力が伴わないのである。それに比べて、M派の人達は——もっとも私の知る限りでは、わずか三人だが——文字通り、M的な弱々しさが表面にあっても、人生

の勝利者たらしんとする執念のようなものを口には出さねど内に燃やしているようだ。M型の人と個人的に親しくなる以前では、私には想像出来ない事であったが、彼等が、勝負根性を持ち、時折、あつというような大胆な行動をとるのを見て驚かされた事がある。同じ人生に対する積極さでも、S型とM型は、内容はかなり違うようだ。たとえば、私の知っているこのM派の三人は揃って投機的な事を好む。相場も張るし、競輪、競馬、麻雀、花札等知らぬものはなく、大体において博打好きだが、ところが、五人のS派は全く賭事をやらないのである。囲碁、将棋、麻雀すら、やらないというより知らないのだから、おか

しな話だと思うのである。マゾヒストと賭事については後で話すが、一口にいうと、S派はリアリスト、M派はロマンチストという事になるのではないだろうか。S派（私の知人の）にいわせれば、勝負事の如き不合理なものを生活の刺激にしているような輩は、生きる事の情熱に欠けた哀れな奴という事になるのだが、M派（私の知人の）にいわすれば、その言葉は、むしろ逆で、勝負事の痛快さを知らない輩は一体、何が楽しみでこの世に生きているのか、という事になる。とにかく、

S派が賭事嫌いで、M派が賭事好きという事は、奇異な感じがする。それに、今いったM派の三人は、すでに数度職業を変えているのだが、S派の五人は、十年一日の如く、単調な会社員生活を送っているのである。するとこういう事も考えられるのである。

S派の連中は、セックスに関してはS的であるが、社会生活においてはM的（女性的）な生き方をしており、M派の連中は、セックスに関してはM的であるが、社会生活においてはS的（男性的）な行動をとっている。いや、これは、うつらうつら仮睡しながら考えてみた私だけの珍論であるが、私の知ってる範囲ではS派の連中はリアリストであって、大言壮語型であり、M派の連中は、ロマンチストであって、誇大妄想型である。そして、S派は、大言壮語型であるが誇大妄想ではなく、M派は誇大妄想型であるが大言壮語はない。

Sを男性的、Mを女性的と一般論的に見たなれば、私のいっている事は逆説のように受け取られるだろうが、私はMに属する友人に、男性的な頼もしさを、しばしば感じた事がある。口では大きな事をいっても、実際は小心で、というよりも石橋をたたく程の慎重派で

あるS型と違い、M型の友人は見かけは小心そうに見えるが、実際は肝っ玉が太く、無謀なくらいに、行動力があるようだ。つまらない例だが商売女と遊んだ後で女に金をやる場合でも、S型は妙にケチくさいやり方をするが、M型は、実に気前のいい、金の渡し方をするようである。彼等がキャバレーへ遊びに行くのを見ていても、S型はテーブルについてたホステスに対して、滅多にチップなどおかないが、M型は始めて席についたホステスに対して、多額のチップを渡したりするようだ。遊ぶ金があるないにかかわらず、それが両者の性格のようである。現実派のSは、遊ぶにしても、効果のない無駄な金の消費が馬鹿馬鹿しいのであり、浪漫派のMは、無駄金を使わねば、遊んだ気になれないという所があるようだ。などと並べれば、Mが気前が良く、Sがケチで、私が盛んにSの仲間をけなしているように思われるだろうが、変ないい方だが、中味の濃いS、中味の濃いMの何人かを私が観察してしゃべっているだけで花と蛇の愛読者などは、決して、今いったSの部類には入らないのである。というのは、花と蛇的な世界を楽しめる人は、純粋なSでも、またMでもなく、Sが六〇、Mを四〇位の割

で含有している人であり、今まで私がいったS型の性質とM型の性質をチャンポンに持っていると思うのだがどうだろう。

何時か私が話したシナリオ青年のY君がついこの間もやって来て、何月号かの花と蛇にしびれて、トルコ風呂へ行きましたよ、というので、私が質問したのだが、トルコ風呂へ行くにせよ、自分で体を慰めるにせよ、その気分浸る時、自分を川田や鬼源に置きかえて情景を妄想するか、それとも、静子夫人や小夜子に置きかえて空想するか。これに対して彼は眼をパチパチさせて考えるのである。そして、おかしいですね、トルコ嬢にサービスされる時は、性を倒錯させて、自分を責められる女に置き変えてしまっています、といい出した。これが花と蛇マニヤの複雑微妙な所である。Sだと思っていたY君も一皮むけばMになってしまうのである。

その夜は、Y君を誘って、海岸の小料理屋で一杯やりながら、SとかMとかは生れつきのものかどうか、また、SMは遺伝という事もあるのかという話題になったのだが、なかなか結論が出ないのである。この種の問題に解答を与えてくれねばならぬKK誌が、矢鱈にむづかしい論文を発表するだけで、肝心の

事には触れてくれない不平をこぼし合ったわけだが、Y君も私も不思議に思う事は、我々の親、兄弟、親類に一人もマニヤはいないという事である。Y君がいうのには、これは恐らく先祖よりの遺伝ではなく、民族的な遺伝ではなからうかという。だが民族といってもSMは日本人東洋人の特有のものではなく、アメリカだって、フランスだって、マニヤはいるのだから、これは大民族的遺伝になるのではないか、と奇妙な話になり出した。ではSMは先天的なものか後天的なものか、これに対し、私は酔ってきた故もあって、珍論を発表した。幼児の頃には、SとMを均等に持ち合わせていて、長じて、S派とM派に形が極まる者、極まらない者に別れるのだが、子供の頃、Mの形をとって来た者は、長じて、Sとなり、Sの形をとって来た者は長じて、Mになる。と自分でもはっきり要領を得ない事をしゃべった所、Y君は、しばらく考えてそういえば思い当る所があるというのであった。彼は、子供の頃は、探偵ごっこなどして仲間の子供に縛られ、押入れに投げこまれて快感を覚えた記憶があるというのだ。

SMというはっきりした形をとらなくても人間にはその成長期に性を倒錯させる時があ



る。西鶴の好色一代男を読んでも、あの好色な世之助がやはり子供の頃には稚児遊びに血迷い、男の尻を追ひ廻し、つまり、女形時代があるのだが、別に世之助でなくても、昔は少年が性を倒錯させて男と寝るのは少しも不自然ではなく、この順を踏んで性的に成長するのである。だから、Sだって、Mの時代があった筈なのだ。

話は飛躍したけれど、とにかく、こういうSMの問題も、煮つめて考えれば複雑怪奇、優れた研究家や専門家の一人や二人、出て来ても良さそうなものと思われる。

さて、先程の話に戻るが、現在、私の知っているS派の人間、M派の人間の性格は以上の如しで、リアリスト対ロマンチスト、節約家対浪費家などという風に大ざっぱに区別出来るのであるが、どちらが人間的に面白いのかといえばM型であり、人間的に信用出来るかといえばS型になると私なりに考えている。

これも、その時、Y君と酒の席で話し合ったことであるが、誘拐犯罪を見ても、ほとんどが身代金を目的にしたものばかりで、一度位マニヤ向きの美女誘拐事件は起らぬものだろうか、病、膏盲に達したマニヤが、一瞬の快楽のために事成就すれば自殺する覚悟で、

綿密に計画をたて、山本富士子なり吉永小百合なりの天下の美女を誘拐し、山奥の隠れ家などに幽閉して、徹底的な羞恥責めを加える——しかし、うまく出来ているもので、先に話したように、S型の男性は見かけとは逆に大体において小心であるから、そして、現実主義者であるから、そういう理性を失った犯罪に、手を出すことは、まずないと見るべきであろう。ところが、M型の方になると、一丁、間違えば何をやらかわからないという危険性を多分に有しているのである。M型の男性は犯罪者になり得る素質を持っているといえ、たしかにいいすぎだが、公金を拐帯して女を連れ、日本中を遁走して廻る男にM型の人間が多いのを、読者はご存知だろうか。そんなに昔の話ではないが、貿易の仕事で詐欺を働き、外国へ逐電したある若い詐欺師も、M型に属す男であった。官憲に捕まっても、牢舎につながれるということ、まさかMの興味を持って、最初から計算に入れていたということはないだろうけれど、見かけとは逆に大胆不敵なことをやってのける素質をM型の男性は持っている。と私は見ているのである。

マニヤからいって、理想的なカップルは、

S型の男に対し、Mの女性、また、M型の男に対し、Sの女性ということになるだろうがこれは、男と女の場合に限らず、同性の場合においても、つまり、性には関係なく、友情という見地から見ても、SとMは、妙にうまく合うようである。普通、S型の男から見ても、M型の男は、性の趣向というのが逆であるところから、何となく嫌な野郎に思え、また、M型の方からSの男を見ても、同じく、気分のいい相手ではない筈だが、それは、生理的なものだけであって、交際してみると、馬鹿に気分が合うので驚くことがある。私自身、マニヤの友人の中で、不思議とうまが合い、もう十年近く、親しい交際をつづけているのはM派の人である。仮にM氏と呼んでおくがこれから物語ろうとするこのM氏と私とは、共同で翻訳の仕事をやったこともあり、水商売をやったこともあり、最後に相場に手を出してお互にペチャンコになってしまったけれど、とにかく相場などに共同戦線をはるまでは何をやっても、うまくいったようである。

よく事業の上で、女房役を務めるとか、片腕になるとかいう言葉を使うが、S型の男に対してM型の男が、M型の男に対してS型の

男が、女房役を務めるのが最もふさわしいと私は思うのである。国定忠次がSなれば日光の円蔵がM、木下藤吉郎がMなれば竹中半兵衛がSという具合に、S型とM型のコンビによって、事業が円滑に運ぶ場合がある。それは、陰陽の原理にもとづいているもので、何かことを起そうとする二人があつて、それが相方共S型であるなれば、互に大言壮語し合うだけで、結果、小心者同志であるだけに、小田原評定、一步も現実から脱却し得ないという例を私は幾つか見て来ているし、M型同志の二人が、その着想があまりにも飛躍し過ぎていたため、仕事に手を出したのは良かったが、またたく間に頭打ちになったということも見聞している。だから、たしかに、珍説だろうけれど、共同事業をする場合には、SとMがコンビになれば、一番、うまくいくのではないかと私は思うのだ。

M氏と私が個人的に親しくなったのは、趣向は違うが双方とも、この種のマニヤということだけではなく、互に勝負事好きな性質で小豆相場を密かに研究し合っているというところからである。一時、私は、小豆相場の魅力に完全にとりつかれ、こういう面白い金儲けの方法を知らない人々は一体何が楽しみで生

きているのか、などという罰当りなことを考えていた時期があつた。M氏と知り合うようになってから、相場の野線について色々と指導を受けたし、勝負事のコツについて教えられたものだが、彼は、負け戦を楽しむようにならなければ、一人前ではないというのである。勝負事で負けても、相手に金を一時預けておくという気持ちになって、ニコニコしていればよい、というのが、私のような凡人には、なかなか真似の出来ないことである。しかし、不思議なことには、M氏は、たしかに勝負事で負ければ負ける程、いやに落着き出し、楽しそうにしている風にも見えるのである。得意冷然、失意淡然というか、なかなか胆のすわった男だと思つていたが、よく観察してみると、彼は敗北感をM的境地に立って楽しんでいような所があるのだ。相場の立合が終つてから兜町にある料理屋の二階で、ビールを飲みつつ、私はM氏より碁や将棋の挑戦を受けたものだが、自慢ではないけれど私は、碁も将棋も、アマチュアの有段者であり、二級や三級ぐらいのM氏が太刀打ち出来る筈はないのだが、彼は、一局、一局、惨敗を楽しんでいるような所があるのだ。将棋などで、自分の王が私の駒に追い立てられ、陣

地から飛び出して、孤立無援のまま、歩の上へひよこひよこ逃げ出し、あと二、三手とどめをさされるという所までに至ると、彼は性的に興奮し出すといい出し、私は驚いたことがある。

パチンコで打った玉が次から次と穴に入り出し、チーンジャラジャラが鳴り続けるとSの人間は性的に興奮し出すということを誰かに聞いたことがあつたが、Mの場合は、打ても打ても玉が入らぬといった時に、性的興奮が起ることになるのかと、M氏に聞いた所、そういうこともあり得ると彼は答えるのであつた。

M氏は、博学多才、六本木で喫茶店を営み、ほとんど毎晩、赤坂のナイトクラブで遊んでいるM型のプレイボーイでもあり、一見ニヤけた公卿華族の感じがし、アルコールが廻り出すとわざと英語を使って私に話しかけてくるという、何となくキザな奇妙なくせを持つ人物だったが、仕事に関しては実にやり手で、頼み甲斐もあり、私は、この人の忠告と資金援助で、幾度も相場の危機を乗り越えたことがあつた。

そのうち、私は、M氏に相談しないと相場に手を出すのがこわくなって来たぐらいで、



何時の間にかSの私はMの彼に対して、女心めいた親愛感を持ち出すようになっていたのである。

ところが好事魔多しで、或る男の情報を信じて、M氏が乾坤一擲の大勝負を打つ事になりそれに私もつい乗ってしまったのである。

先にのべた珍論からいうとS型の人間は小心であるから、私もややその方に属す人間として、もう少し慎重に事をかまえるべきであったが、勝負事というものは人間の常識を麻痺させるものがあるらしい。店から何からすべて担保に置き大きな建玉をしたところ、全くだが外れて、惨敗を喫ってしまった。元も子も吹っ飛んでしまい、俄成金の俄乞食というやつで、無一文になっただけならとにかくかなりの借金まで背負う事になってしまったのである。そうになると、人間の性格がむき出しになるもので、俗悪な現世主義者も、怠惰な享楽主義者に変じてしまい、雨に濡れようと泥水がはねかかろうと気に病まなくなり、現実的な望みなど、嘘みたいにはかなく消えて、酒と女だけに溺れきりたいという情ない気分になってしまふのである。

その時はM氏も悲惨であった。喫茶店も人手に渡さねばならなくなり、妻子も一旦、実

家へ戻さねばならぬ破目に至ったのである。

だが、彼は自分の事より私の身を案じて、夜の盛り場をあっちへ転がったり、こっちへ傾いたりしている私の行方を探し始めていた。

所持金が切れて、私は何日かぶりかで家へ電話し、M氏よりの伝言を家人から聞いて、新宿の場末の酒場で、久しぶりにM氏と逢う事になったのだが、頭や胸に無数の瓦礫が詰ったよう<sup>がれき</sup>で、私は心身ともに疲労の極に達していた。だが、M氏の方は普段と変らぬ顔つきで、ニコニコし、以前より肩入れしていた安キャバレーのP子という、眉毛が太く眼尻の垂れ下がった、どうも鼻眼に見ても醜女の部類に入る太ったホステスを伴って姿を見せたのである。

M氏は、高級なナイトクラブで、エレガントな美女と遊ぶ反面、こうした場末のキャバレーで西郷隆盛みたいな顔つきの奇妙なホステスと交渉を持つおかしな所があつて、いや高級な場所の美女とはあまりうまくいかず、智能の低い、不細工な女とのプレイの方が、円滑にいくようであつたが、M氏が教養高き紳士という面があるだけに、この点、どうも私には納得出来ないものがあつた。しかし、デコボコした醜女にしいたげられるという所

にも、マゾヒストの悦びがあるのかも知れない。M氏にいわすれば、いくら変り者のMであつてもプレイの相手は美人に越した事はなけれど、こっちの要求を呑みこんで、満足させてくれる美女がいなかったから仕方がない。大体、Mは、美人にはそももてないように、出来ているというのであつた。そういうば、私の知っている範囲では、S型の友人が連れて歩いている女より、M型の友人の女は大分、容貌、スタイルにおいて見劣りがするように思われる。普通、女性<sup>S</sup>は、男性のSはさほど異常と思わないが、男性のMは完全に異常と見て、気味悪がり、敬遠する場合があるから、M氏が美女にもてないといふのはわかるような気がする。

それはさておき、場末の酒場で久方ぶりに逢つたM氏と私とは、敗軍の将、兵を語らずと、どちらからともなくいい出して、相場で惨敗した事については、一切、愚痴はこぼさなかつたが、M氏がいうのには、この惨敗で一切の財産が無くなり、女房には愛想をつかされ、仲間の失笑をかい、日夜、債鬼に責めたてられ始めると、マゾヒズムの極致なのか、これまでに経験した事のない最高の性的興奮を覚えたというのである。この現実が

もつともつと、崩壊し、無茶苦茶になっていけばいいと秘かに運命の転落をけしかけているような所が自分にはあるようだ、と奇怪な事をいい出すのであった。

とにかく、M氏も私も、今後の見通しは全く立っていない。ただわかつていいるのは、これで二人とも当分相場は出来ないという事と近く都落ちせねばならぬという事であった。

私の方は、漠然とではあるが、地方で教育委員をやっている親族のすすめで、田舎高校の英語講師をやり、しばらく頭を冷やせ、という親族達の意見に従うより仕方のない状態であちこち放浪しながらでも、昼間は二日酔いのズキズキする頭を手でもみつ、寝ぼけ眼で、保健所へ行き、身体検査を受けて、講師に必要な書類を仕様ことなしに揃えていたのだが、一方、M氏の方は、四国で材木屋をやっている実兄に手紙を書き、ほとぼりのさめるまで、兄の仕事を手伝って、四国で暮す予定になっていた。だから、何日か後には、M氏と私とは、訣別せねばならぬのである。

M氏は、私と一緒に聞こうと思って買ってきた、といい、P子に持たせていたレコードを店のパーテンに渡して、電蓄にかけさせるのである。それは、その頃、かなり流行して

いた北帰行とかいう唄で、歌詩もはっきり覚えていないが、北へ帰る旅人、只一人、明日は何処の町か、というような哀愁のこもったもので、M氏は非常にこの曲が気に入っていた。勝負に破れた二人が、場末の酒場で、また何時か、逢うやら逢えぬやら、といった別れの盃をかわし合う、こうした場面を彼は、センチメンタルな効果をそこへ盛上げようとして、演出するのである。M氏は、こういう事が実にうまい人であった。私は、この時、考えたのだが、M型の男というのは、女のセンチメンタリズムをくすぐるのは下手くそでも、男のセンチメンタリズムをくすぐるのは上手なのではないだろうか。度が過ぎると、たしかに嫌味になってしまうけれど、勝利の感激に酔う時、失意のどん底にあえぐ時、こうした場合、喜び、悲しみをうたい上げるのに、これ以上、適切な表現はないというような言葉を口にするのである。教養があるといえ、まあ、それに違いないけれど、一種の殺し文句を心得ていて、それをとりまぜ、話術、会話の妙を心得ているようだ。比較すれば、小説家にはSの傾向を持つ者が多く、シナリオライターにMの傾向を持つ者が多いのを私は以前から気づいていたけれど、文筆の

方でもこうした差があるというのは、おかしいものである。

酒場の閉店も近づき、明日は、早朝から、借金取と対決しなくてはならないので、とM氏は立上る。M氏の連れて来たP子は、それでもパーテンに、生野菜が食べたい、とか、スパゲティを作ってよ、とか、あれこれ意地汚く食物をねだって立とうとはしない。彼氏が大変な苦境に立たされているのに、何て、のんきな女だろう、と私の方が腹立たしくなってきた、モグモグ口を動かして、ソーセージを噛っているP子を見ながら、M氏が四国へ去ったら、この豚は誰に餌をもらうのだろう、などと考えていたが、M氏は、楽しそうな表情で、口に食物をつめこんでいるP子を立てたまましばらく眺めているのであった。私には、どうしても黒豚としか見えぬP子であるが、M氏にとっては、虞美人の如く思われるらしい。絶体絶命の窮地に立たされ、数日後には、このP子とも別れなければならぬ運命にあるM氏の脳裡には、四面楚歌に立つて作った項羽の有名な詩が浮かんできたようだ。

力、山を抜き、気は世を蓋う、時に利あらず  
 雖逝かず、雖逝かざるを如何にせん。虞や



虞や汝を如何にせん、——と口ずさみ、M氏はP子の頭に手を乗せ、そのまま末練を断ち切るように、酒場の外へ出て行ってしまったが、そのあと、愚不美人のP子は、眼をパチパチさせて、私の方を見、あの人、何いってんのかしら、おかしい人、といい、クスクス笑い出すのである。私は、M氏の心情を思うと、胸が熱くなり、妙にセンチな気分になってしまったものだ。

色々な人達と私も付合ったが、M氏のように、多少、芝居がかっていても、男のセンチメンタリズムをくすぐれる人は珍らしいと思う。

男の友人で、妙に懐かしくなり出し、逢ってみたくなるのは、こういうタイプの人ではないだろうか。ところが不思議な事に、M氏は、女のセンチメンタリズムをつく事は、あまりうまくないのだ。男と女の泣き所というのは違うのであろう。逆に、女性のセンチメンタリズムをつき、女性をフワフワした気分にする能力のある男は男性のセンチメンタリズムをつくのは下手なようで、いわゆる、ドンファンとか色事師とかいわれる男は、男の仲間から嫌な野郎に思われ勝ちである。女にもてる男が、男にもてない例はよくあ

る事で、また、男に好かれる男が、女に好かれないう事もなく見受けられる。男性女性、双方から慕われるという男も数多いが、かといって、それが男性女性双方のセンチメンタリズムをゆさぶる能力のある男というわけではない。こういう恵まれた男性は、それだけに条件も揃ってはいなくてはならず、ハンサムで性的魅力もあり、男にも女にも親切でマニヤではない。映画俳優などにあるタイプである。

よく、すばらしい美人の亭主が、今、流行の怪獣みたいな容貌をしているの発見して、驚く時がある。その亭主と付合ってみても、つまらない男に思え、どこに男性的魅力があるのかわからない。ところが彼を酒場などに連れて行き、何人かのホステスをはばらせてみると、たしかに女心をくすぐるような素質があるのに気づき、成程と合点がいく事がある。だが、また、その逆に、二枚目的な容貌した男がデコボコオカメの女房を連れ歩いてゐるの見て、不思議に思う時もあるが、概して、不美人を妻にしている男は、付合ってみると、妙に親近感のわく人間である場合が多い。感じのいい男というものは、大抵、オカチメンコの嫁さんを持っているといえ、屁

理屈もはなはだしいと笑われるにきまつてゐるが、或る程度、そういう事も本当なのである。では、女の泣き所、男の泣き所は（セックスにあらず）どこかというところ、下手の長談義になりそうだからやめるが、とにかくそれは、似ているようであり、まるきし、違っているようでもある、いわば、SとMぐらいの差があるともいえる。

私の家は、都心からかなり離れていて、東京から遊びに来た人には、強制的に酒の付き合いをさせる事になっているので、来客は大抵二階の六畳に泊る事になるのだが、そこにはお粗末な電蓄が置いてあるので、就寝前、若い客はレコードをかけしばらく楽しむようだ。階下から聞いていると、彼等のかけるレコードは大抵きまっている。網走番外地というやつで、ひどい奴になると一人でウイスキーを飲みながら夜中の二時頃まで、こればかりをかけつづけているのだ。そのレコードは、遊びに来た友人の一人が置いていったものだが二階の泊り客は、窓の外に見える近くのゆるやかな山容とその上に出た青白い月を眺めながら、このレコードを聞き、一種の感興に浸っているのである。どうして、男は、こういう種の物悲しい旋律が好きなのだろうと思

議になる。第一、歌詩にしたって、姓は誰々名は誰々、その名も網走番外地、などと全くわけのわからぬ、ふざけたものに思えるのだが理屈は抜きで、じーんと胸に来ると、若いサラリーマンの友人達はいうのである。男性のセンチメンタリズムは網走番外地であるようだ。ところが、何人かの女性に聞いてみるとこの曲は、そんなにピーンと来ないそうである。彼女達の琴線をゆさぶるのは、湖畔の宿のような曲だそうで、山の淋しい湖に一人来たのも淋しい心、と、これは、歌の文句も筋が通っているが、男性にいわせれば、そんなのは歯が浮くみたいで、鼻持ちならぬというようだ。これが男女のセンチメンタリズムの差であろう。しかし、ドンファン型の男性は、この、湖に一人来たのも、淋しい心、という女のセンチメンタリズムの理解者であるから、仕事がうまくいくのである。姓は誰々名は誰々、の男のセンチメンタリズムを理解する女性もない事はないだろうが、滅多に肉眼にかかれるものではない。随分と話が脱線したついでに、もう少し、脱線するが、女を書くのがうまいという男の小説家は、男性読者に喜ばれるように女をうまく書く人と、女性読者に喜ばれるように女をうまく書く型と

があるようで、女をうまく書くからといっても女性ファンがつく作家とつかない作家がある。それは、女流作家にもいえる事で、熱烈な男性ファンを多数持っている女流作家はまづいないと思うがどうだろう。真に男を泣かせるような小説は女流に書ける筈はない、というのが私の持論で、つまり、男は女を泣かし得ても、女は男を泣かすのは、むづかしいと、それがいいたいわけだけれど、先にいった美男のオカチメンコの細君などが案外男のセンチメンタリズムに迫る女性で、それ故に美男の夫を獲得したのではないかと想像出来るのだ。

何だか S M の話から遠く外れて、奇怪な話になってしまった。M 氏のその後について、もう少し語りたかったのだが、また次の機会に譲るとして、三文作家として、最後に一言、花と蛇に触れるが、この珍小説も色々な読者に批評して頂き、中には、作者の私が顔を出す余地もない位、適確な解説をして下さる方もいて、恐縮する時もあるが、最近号では九鬼氏の言葉で、見事に的を射た評論で嬉しくなった。今まで私が書き続けた花と蛇もまたこれから書き進める花と蛇も、帰する所は九鬼氏の「私論」に間違いはない。そして、彼が

言及した如く、この珍小説は、理屈は色々つけられるだろうが、一口に言えば、美人が責められ、汚されていくだけの話に過ぎず、描写も類型的、常識的なものであるが、そうした類型的、常識的なものになければ、この種の S M 小説（Y 本でもいい）は成功しないと私は思っている。ハードボイルド式にバリバリやつけては、この種の小説の狙いは完全に外れてしまう。そして、花と蛇を書くに当って、一番、骨の折れる仕事は、この常識的、類型的に書かねばならぬという事である。私は小説でもシナリオでも、十行でいう所を、三行でいい現わすという方を好む性質で、学生の頃、菊地寛の真珠夫人を読んでその類型的な形容にあきれ返り、小説家ちゅうのは阿呆と違いかいな、とシナリオの方を読むのが好きになったという珍妙な時代があった、商売用のシナリオを書くようになってからも、卜書のないシナリオを書いて自慢した時もある。まだ、そういうくせが残っていて、ピンクのシナリオでも、ベッドシーンなどは、ベッドの上、男と女、演じている、など書いてすましていくし、あわてた時など、ベッドの上、男と女、やっている、と書いて映倫に叱られた事もある。ところが、花と蛇



においては、そんな調子で、ベッドシーンを通過させるわけにはいかない。たしかに、いい加減といえる状況の設定の中において、肝心の個所だけは、随分とネチこく、克明に描写したりする。そして類型的な書き方をするという事が如何にむづかしいかを思い知るわけだが、単にサワリの場合だからといって馬鹿に出来ない。これがまたむづかしいのである。その昔、類型的常識的な、その場面形容、女体形容などを熟読し、勉強していた人ならとにかく、いや、たとえ、そういう人であっても、花と蛇の如く、一回一回、肉体描写、愛欲描写を、阿呆の一つ覚えのようにくり返していたら、忽ち数回で行詰ってしまうにきまっている。私など、前篇だけで参っているのだが、書いたあとから書いた事を忘れてしまっているもので、救われているといえるかも知れない。

そして、私の意図としては、花と蛇をマニヤだけではなく一般の助平に、いや、失言、その道の愛好者に御理解願えればと思っている。毎月、贈呈されるKK誌を、頃を見計らって借用に来る厚釜しい友人がいるが、これはマニヤではなく、色の道を好む仲間達と回覧し合っているようだ。本屋でKK誌を立読

みしていくチャッカリした輩は、大てい目的が花と蛇だと、或る本屋の主人に聞かされた事があるが、マニヤでない好色な立読家になりこの珍本はもっているようでもある。そんな話を聞いて、ハッスルするのも阿呆な話だが、一回、一回、必ずクライマックスをつけるようになり、次回に期待を持たせるような方法をとるようになったのも、知らず知らず、そうした事の影響かも知れない。かといって、私もマニヤであり、マニヤ誌に連載しているのであるから、縛りという事を離れる気は毛頭ない。S M的なものには門外漢で、この珍書を愛読している私の友人の一人は、たまには美女達のノーマルなプレイを私に要求するのだが今後、時にはそんなのも登場するだろうけれど、それが重なるようになれば、マニヤに叱責される事は必定である。第一、マニヤからのアイデアを、聞かされた時は、作者の方もマニヤだけに成程と一種のうずきを覚えるような場合もあるが、マニヤでない友人のアイデアは、陳腐極まるものがある。色々なタイプの男性と美女達が交渉を持つ事をすすめるのだが、大鵬と静子夫人はどうか、などと吐かす奴もいるのだから、聞いていてやり切れなくなる。マニヤではないと

いっても、花と蛇を愛読する連中は、やっぱりどこかおかしいのではないかと思ったりする。つまり、普通自分はノーマルだと思っている人でも、こういう超常識の珍文を読むうち、現実のベールがひょいとめくれて、自分でもまだ気のつかなかったアブの一面がぬいと顔をのぞかせてくるのではないだろうか。大なり小なり差はあろうけれど、アブの一面がない人間は、まずいないと私は見ているのだ。

とにかく、九鬼氏のいう如く、花と蛇は美女を責めさいなむ物語、モチーフは、サドでも、マゾでもなく、デフォルメされたエロシズムである。と正にその通りだが、同時に、男なんて一皮むけば、どいつもこいつも痴漢だと思っている花と蛇の作者は、自分ではノーマルだと思っている人々を、この珍文で少しはうろたえさせてやろうといういたずら気も持っているのである。という風に、毎号毎号、臆面もなく、稚拙な語り口で花と蛇を展開させているふざけた作者であるから、もとより、これが文学とか小説とか読物とか、そんな事は誰かがいい出すまで考えた事がなかった。何をいい出すのかと正直あきれてしまったのだから始末はない。

## カメラ・ルポ

山本一章

## 「この女と」

## ／＼笹原八千子の巻

笹原八千子——五月号のカメラ・ハントの女性である。辻村氏はこの魅力ある未亡人を私に紹介してくれた。二月堂のお水取りも済んで春の気はいが駄足でやってこようという一日、私は長駆伊勢路に向った。それをルポすることは、この畏敬する先輩のハントの直後だけに、私を幾度か躊躇させたのだが、敢てペンをとることにした。辻村氏の流暢なそれと比較されて笑殺されることはもとより覚悟の上である。二番煎じに多少なりとも余香を認めていただければ幸いである。

○ 「彼女、近鉄の津駅前で、待つということ

す。一章さんの車の型とナンバーを知らせてあるから行ってみなさいよ。尤もあんたには彼女の顔は分らないから一方通行の見合いになりますかねえ。それも彼女の希望ですから悪く思わんで下さい。まあ、あんたなら合格すると思いますがね」

受話機の向うで辻村氏が軽く笑う。私の執拗な押しに、彼はわざわざ二、三度手紙を往復させて、私のためにお膳立てをしてくれたのである。私はこの人の誠実さを深く感謝する外はない。

翌朝九時、私は勇躍車を東に向けた。午後一時の約束だから、そう余裕はない。阪奈道

路を越えて古都奈良の静かなたたずまいを横目に天理市へ。快晴である。エンジンの音も快調だし私の気分も爽快である。途中、パンとチョコレート仕入れる。名阪道路に入ったら亀山のインターまでは殆んど売店やレストランがないのを経験していたし、また時間がないので車中で、それをかじるつもりである。ウィークデイの名阪は車が少なかった。余り飛ばし過ぎて白バイが鼠取りに引掛かって困るので六十キロのスピードでコンスタントに走る。途中二、三台の乗用車がビューンと音を立てて、追い抜いて行ったが自重する。恐らく百キロ近くのスピードだろう。案



の定、上野へのインターチェンジ近くの直線で、スポーツカーが、白バイに停められていた。この道路での六十キロは頗る遅い感じだが、無理をすることもないと腹を据える。

道が単調なので早速パンをかじりながら運転する。トンネルを越え亀山インターの手前で名阪道路と訣別する。名阪道路の下をくぐって車は南へ。道は舗装されているが狭くなる。ラジオが正午を告げるのを聞いて少し慌てた。最初の出会いに遅刻は許されない。しかも今日は相手まかせの見会いなのである。空しく引返すことにでもなったら泣き切れないではないか。なだらかな丘陵を越えて平野へ、三叉路の信号を右折して国道二十三号線に入る。車が多くなる。津の町に近づくにつれて、私の胸はうずき始める。カメラ・ハン

トに掲載された網パンツの強烈な姿態が頭の中に浮んでくると、益々切ない気持ちになってくる。

「彼女なら吊りもやれますよ」  
辻村氏のその言葉を額面通り受け取って、今日は吊り一本槍で行くつもりであったのだが、段々と心細くなって、兎に角会ってくれさえしたらと祈るような気持である。

津の市内は相変らず活気が溢れて自動車の

往来も激しい。駅前まで来てから、どこに駐車させたものかと困ってしまった。ナンバーを見てもらわなければならぬのだから。車を停めずにゆっくりと走らす。時計は一時五分前を指している。私は窓から駅前を行き交う人を物色するが見当のつく筈がない。こんなことなら辻村氏に強引に頼んで彼女のフोटを見せて貰って置けば良かったと後悔する。後の祭りである。駅前を二回程廻る。時計が一時を指した。どこかで彼女が私を観察しているのだろうか。それとも、もう失格になって彼女は去ってしまったのではないだろうか。焦燥感が強くなる。晴れた駅前はまだいい程明るく、それだけに自分の行動が何か道化ているように思える。

三回目の徐行にかかった時、歩道の上に立った瀟洒な和服の婦人が私の方に微笑する。私の顔に血が上る。彼女はちょっと手首を挙げて左右に振る。笹原さんに違いない。私は車をその前に寄せて飛び降りる。

「山本さん？」

「ええ、あのう笹原さんですね」

私は自分の言葉を、こんなにぎこちなく感じたことはなかった。年甲斐もない慌てようである。

「さあ、どうぞ乗って下さい。車の中で話しましょう」

笹原さんは黙ったまま、私の開けたドアから後のシートに腰を降ろす。私は急いでギアをローに入れアクセルを踏む。妙に車が重くて何度もエンストをする。

「サイドブレーキが、掛ったままじゃありません？」

ああ、何たることか。十年のベテランをもって任じている私の運転技術すら、この美人の前では片なしである。

「どこへ行きましょうか？」

「おまかせしますわ」

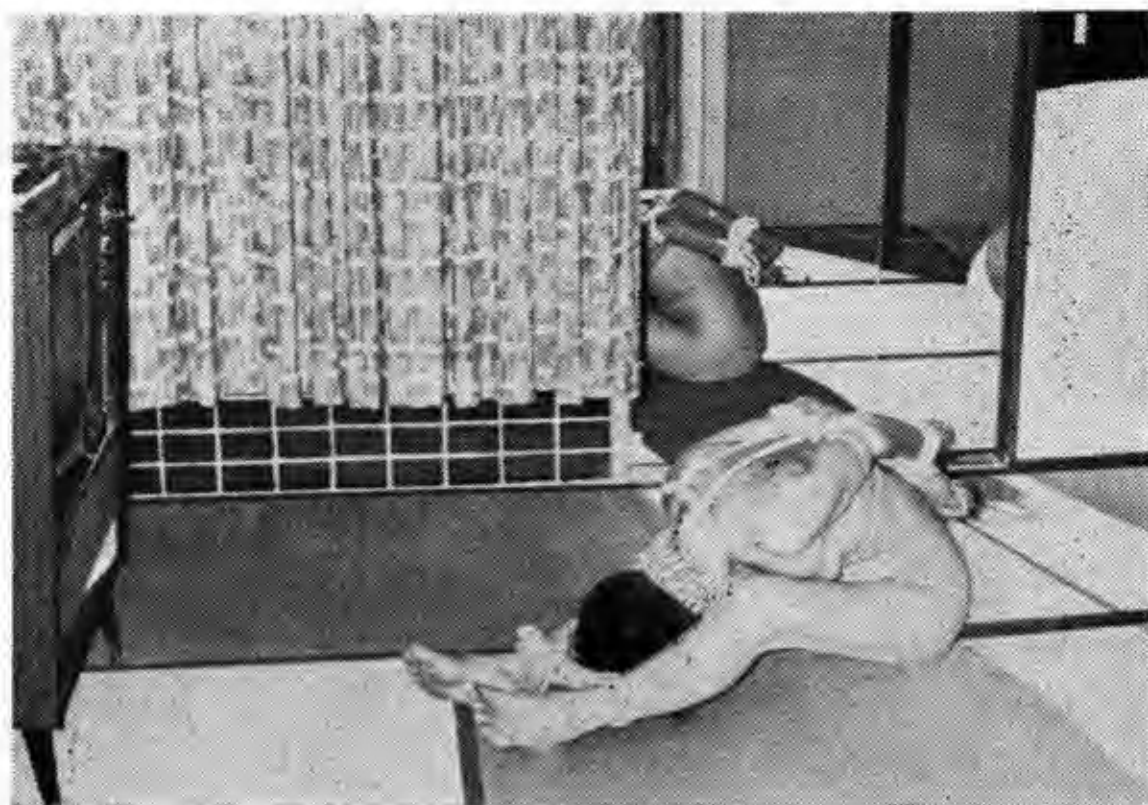
「志摩の方にしましょうか、それとも北へ行きますか？」

「どちらでも、結構ですわ」

二見か鳥羽をちょっと考えてみる。しかし真昼間から御休憩だけできるようなホテルがあったかどうか自信がないし、普通の旅館じやとてもプレイを落着いてできそうにない。

国道沿いに離れ家風のモーテルが出来ていたのを記憶してはいるが、それもやっているかどうか心もとない。こういう場合、大都会のホテルが最適である。私は国道二十三号線を右折させる。目指すは四日市である。

## 写真 Ⅷ Ⅰ



「僕ぐらいなら合格ですか？」

笹原さんは、ウフフと笑った。

「辻村さんは、お宅までお伺いしたんですよう？」

私に対して自宅へ誘わない彼女への皮肉のつもりである。

「そんなことまで、辻村さんはおっしゃっていましたの？ いやだわ。でも、今日は駄目なんです」

もうそれ以上こだわることもない。兎に角彼女は私に、その体を委ねて来たのだから、それでいいではないか。

「何時頃まで、いいですか？」

「夜になってもいいんですけど。でも余り遅いと困りますの」

「まあ、夕方までに切り上げましょう」

車は平坦な国道をぐんぐん走る。鈴鹿市を越えて国道一号線との三叉路に差しかかる。俄然自動車が多くなる。半分以上がトラックである。

「四日市まで行きますの？」

「ええ、具合が悪いですか？」

「構いませんわ」

「今日は吊りをやってみたいんですが……」

笹原さんは返事をしないが、この場合、沈

黙は拒否でないと解釈すべきである。特に辻村氏の話しでは相当経験があるということだから遠慮することもない。

「吊ってみますよ」

駄目押しをすると、笹原さんが俯向いたまま肯ずくのがバックミラーで見えた。

「こわいような気持がしますわ。余りひどいことをなさらないでね」

この言葉も反対解釈すべきであろうか？

四日市のメインストリートに入る。何度か来たことのある町だが、ホテルを探すとなれば全く見当がつかない。信号で停った私はちょっと思案する。この大きな交叉点を左折して突き当れば近鉄の駅、右折すれば国鉄の駅だが、もう少し裏通りに入った方が良さそうである。結局次の交叉点の湯ノ山への道標のあるところで左折した。道路の両側に車を駐車させることができるので、大阪に較べて楽である。

私達はいよいよ来る所まで来たのである。

○

そこは大阪などにあるものと殆んど変りない豪華なホテルだった。案内された部屋は相当広くて撮影には悪くない。私は実の所、腹が空いているので、出された茶菓子を頬張り

「よく来てくれましたねえ」

私が最初に、いつも使う言葉である。

「もっと年輩の方かと思っていましたわ。私

余り若い方は好きじゃないんです」



茶を啜る。笹原さんは手を出さないで向い合  
ったままである。

「辻村さんの時は、どうでした？」

「そんなこと言えませんか」

確かに愚問である。私は言葉に詰ってしま  
う。どうも私のフェミニストは美人の前では  
だらしない。笹原さんが落着いているだけ  
に余計に間がもてない感じである。

「お風呂に入ったら？」

「そうですね。御一緒にどうぞ？」

「僕は済んでからにしますから、どうぞ先に  
入って下さい」

彼女は立上ると、私の後で着物を脱ぎ始め  
た。帯のシュシュッと解ける音がする。誰か  
がこの音の情緒を書いていたなと、考えなが  
ら、私はやけに煙草をふかした。正直云って  
振返って見たかったのだが、そこは最初のこ  
とでもあるので辛抱する。

「山本さんって純情ね」

笹原さんの声を後に聞きながら、私は顔が  
いやに熱くなるのを感じていた。女の色気は  
この帯を解く一瞬にあるというのは真実であ  
る。彼女が私の背後から立去るのを待ってカ  
メラバッグを引き寄せる。ストロボを装着し  
コードを引く。

やがて、バスタオルを胸に巻いた笹原さん  
が、肌のむれた臭いを発散しながら私の横に  
坐る。

「もう直ぐ始めますの？」

「構わないですか？」

「ええ、私、胸に自信がないので長襦袢を着  
ましようか？」

「何もない方がいいんですが」

ここまで来てためらってはいけない。一気  
呵成に突き進む方が、お互いに良さそうであ  
る。私はバスタオルを巻いたままの笹原さん  
を奥の八畳の間へ導く。柔らかなような寝具が  
枕を二つ並べて中央を塞いでいるので、それ  
を二つ折りにして隅へ寄せる。そして膝を投  
げ出して坐らせるとバスタオルを抜き取る。

瘦身だが均整のとれた体である。首縄を掛け  
てから胸で振り分けて背中へ。合わせた後手  
首には一本の縄を全部使って、がっちり縛  
る。両肘上を後に引き絞ってから、その縄尻  
を首縄に繋ぐ。私は力を容赦せずに強く縄を  
掛けた。辻村氏から彼女が相当なマゾと聞い  
ているので加減はしなかった。

「うううっ、きつく縛るのねえ」

彼女は眉を寄せて喘いだ。

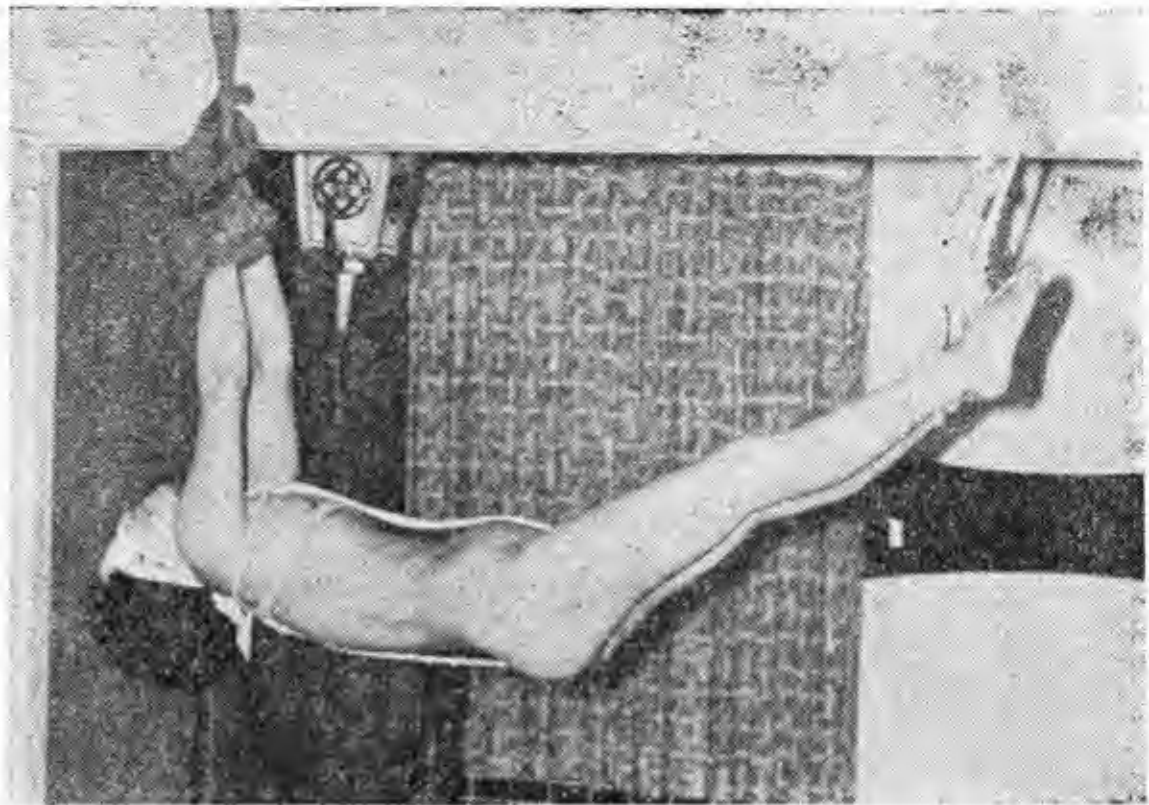
「弛めましょうか？」

「構いませんわ」

上体を縛り終えた私は彼女の背を押して前  
かがみにする。頭が開いた両足の間にすっぽ  
り入る。その柔軟さにはちょっと驚いた。私  
は一度上体を起こしてから、浴衣の帯で顔  
をぐるぐる巻きにし、再び上体を押し倒す。  
そして両足で頭を挟ませるようにして両足首  
に縄を掛けた。この姿勢では頭は足から抜け  
ない筈である。カメラを構えて、その前後か  
ら二、三発ストロボを光らせる。強烈な縛り  
である。しかし笹原さんは黙ったまま、その  
苦痛に耐えていた。向う側に押入れのような  
襖があるので、ちょっと開けて見ると、予想  
したようにそれは鏡になっていた。私は襖を  
開けたままにして、二つ折れになった笹原さ  
んの両腿に手を掛けてその傍に移動する。そ  
こで一発、二発、閃光を走らせる。その一枚  
が写真(一)である。

縄のディテールが、余りよく出ていないの  
で、印刷にどれだけ出るか疑問だが、その珍  
しい二つ折れは想像していただけたと思う。  
この後、私はそのままの笹原さんを横倒しに  
した。両足で顔を挟んだままのその姿勢は強  
烈というよりは、奇妙でさえあった。女体の  
構造上、その写真はとても公開できるもので

## 写真 真 2



はないが、貴重な縛り写真だと思っている。  
これだけの極端な縛りは、文章の上でならとも角、現実の人体に試みることは、この笹原さん以外では不可能だと思う。さすがに笹原

さんも苦しいらしく、圧迫された胸は大きく、そして苦しげに喘いでいた。

「大丈夫？」

私の問いに彼女は、かすかに顔を縦に振った。しかし彼女の肩あたりが、じつとりと汗ばんでいた。私は平手でその臀部を軽く叩いてみた。

「ウン、ウン、ウン」

帯を噛んだ口の奥から断続した呻きが洩れて来る。それは叩かれる痛さから来たものではなくて、この不自然な姿勢が限界に來ていることを示すものに違いなかった。

「苦しい？」

笹原さんはやっと肯ずく。私は急いで縄を解いた。彼女の顔は汗でびっしょりになっていた。

「少しきつ過ぎましたかねえ」

「そうね。でも……」

でも、どうしたと云うんだろう。私はその後の言葉を待つように彼女の顔を見る。

「もっと、きつく、叩いて下さればいいの

に」

ああ、彼女こそ、本当のマゾの女ではないか。彼女は腕の縄跡を撫ぜながら私の顔をじっと見つめた。その眼の中に私は酔ったよう

な濁りを見た。彼女はこの一回目の縛りで性の悦楽への記憶を蘇えらせたのに違いなかった。このままでは危険(?)である。

私は浴室へ行って顔を洗った。頭を冷やした方が良かったのかもしれないが。

前菜は終わった。いよいよ吊りを試みなければならぬ。暖房がきいてきたのか暑いので私はパンツ一枚になる。吊りを一人でやるのであれば、今までの経験上、相当な力仕事になるので、その意味からも裸になっておいた方がよいのである。

「いい体をしていらっしゃるわねえ。それに山本さんは、北の富士によく似ていらっしゃるわ」

私は北の富士が、どんな顔をしていたのかちょっと思い出せない。それに未亡人の笹原さんが、じろじろ私を見つめていると意識すると、どうもやり難い。先ず帯を口に噛まして顔に巻きつける。私が殆んどモデルに試みる目かくしと猿轡である。それから手足は自由にしたまま、両脇から乳房の上に縄を掛け、縦縄を通す。そのまま笹原さんを立たせると八畳の間と控えの間との襖を外してしまふ。その棧は二重になっていて、がっしりと丈夫そうである。



「吊りますよ」

彼女はかすかに肯ずく。手首を縄で縛って吊ると皮膚に傷つける怖れもあり、また苦痛も必要以上に強いので、私は押入れを開けて物色する。幸い丹前に使う絹の帯があったので、それを使うことにする。手首をその帯でしっかりと縛ってから、棧の下に立たせて手首を上にした半吊りにする。これからが大仕事である。私の目的は猪吊りである。両足首を揃えて縄で縛ってから、それを抱きかかえる。重い。しかし私は一気に足首を手首に寄せてから、足の縄尻を棧に廻わした。猪吊りが完成である。

「ウウウッ、アウウ」

笹原さんが激しく呻く。カメラを構える余裕がない。私は直ぐ口を割った繃帯に指を通して引張りながら尋ねた。

「どこか痛い？」

「あのう、縦の縄が……」

足を降ろさせて立たせる。縦縄を掛けてから体を屈曲させたので、縄が不自然に彼女の肌を圧迫したらしかった。私は縦縄を下へ引張りながら尋ねた。

「ここでしょう？」

「……」

彼女の顔が縦に振られる。

「一度全部解きましようか？」

今度は彼女の顔は左右に動いた。このままでは猪吊りは難しいので、両足首を逆に手から離して吊ることにした。足の縄尻を棧に掛け、左手で膝を抱えながら吊り上げる作業は重労働であった。しかし、どうにか吊り下げた。それが写真(二)である。棧の位置から見れば彼女の体が相当高く吊られていることが分っていただけだと思う。この姿勢のまま私は平手で、その臀部を叩いた。今度は力を加減しなかった。それが彼女の希望でもあったのだから。みるみる白い肌に私の掌の型が印された。

「ウウウッ」

彼女が呻く。叩く私にも叩かれる彼女にも陶酔の一刻である。掌が痛い。この写真では縦縄が弛んでいるようで感心しないが、その時には夢中で気がつかなかった。一しきり叩いてから私は下に坐る。

煙草に火を点けゆっくりと吸い込む。加虐の歓喜がじわじわと湧いてくる。彼女の自由がすべて私の意志に委ねられていることを意識することは、この上ない快感である。

「なかなかいいなあ」

彼女はじっと吊り下ったままである。その胸は大きく喘いでいる。しかし、この姿勢は被虐者にとって、そう苦痛の大きいものではないようである。私は次の吊りを考える。足の縄尻を弛めて立たせ手首の帯は、そのままにして体をぐるっと廻わす。弓吊りをやるつもりである。その時私は縦縄が弛んでいるのに気がつき、その上からウエストを縛った。彼女の掌が変色しているが続けてやることにする。彼女には尋ねない。

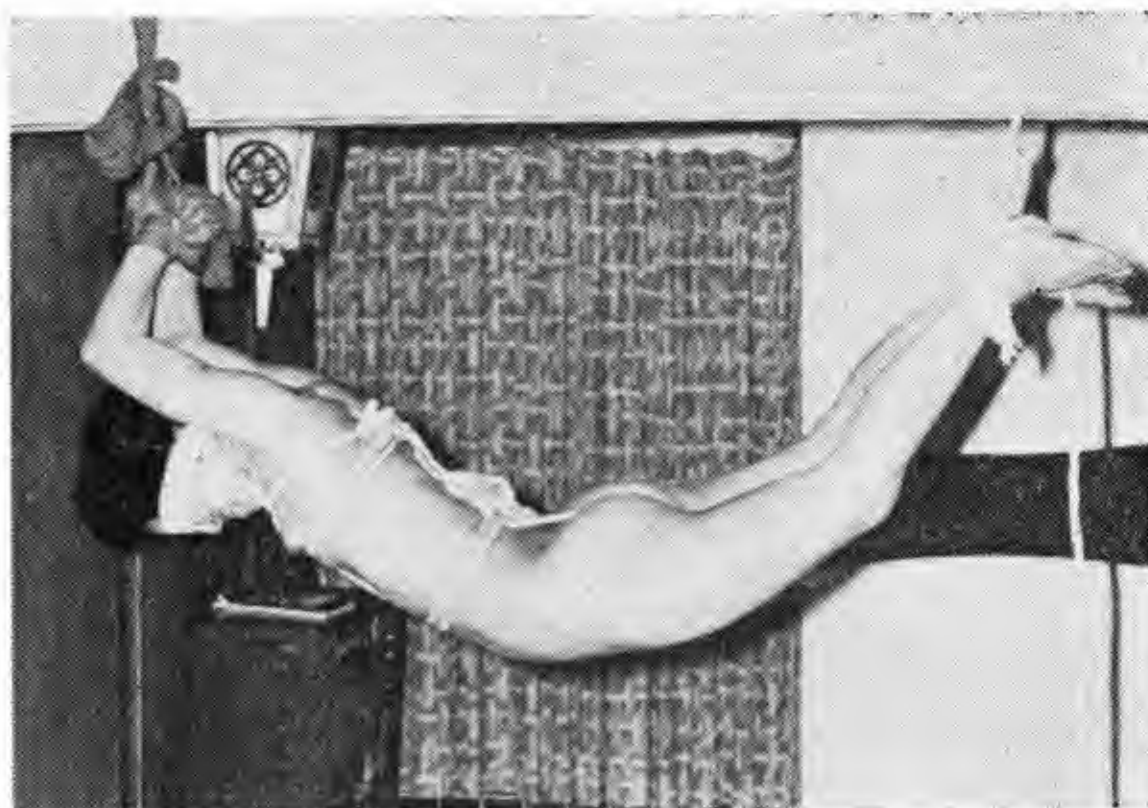
一回目の吊りで正直云って私は、ひどく疲れていたし、一旦解いてもう一度やり直すのが邪魔くさかったからである。彼女の腹部に肩を入れて担ぎ上げ、足の縄を引く。足を固定してから、そっと肩を抜く。

「ウウウッ」

激しい呻きが嚙まされた繃帯の下から洩れた。完全な弓吊りである。その歪んだ顔と呻きから相当な苦痛であることが分る。私は尻を力一ぱい叩いてから、カメラのファインダーを覗く。白い臀部にみるみる私の手型が浮んでくる。シャッターを押す。それが写真(三)である。

私が意図した程、鮮明には見えないが、臀部に少し斑点のようなものが出ているのが私

## 写真 眞 3



正真正銘の弓吊りである。よく腕や肩の関節が痛まなかったものだとなつて冷汗が出る程である。もし読者の方で、この姿勢での吊りを試みようとする人があれば、止された方がいいと思う。

吊っていた時間は、三分位であつたろうか。彼女の肩から背中にかけて汗が溢れ出した。この吊りで、さすがの笹原さんも一ぺんに疲れてしまったようである。足の縄を弛めて立たせ、口の繃帯を外すと彼女は嘆願した。

「一度全部解いて！」

縄を解かれた笹原さんは崩れるように、その裸身を畳の上に横たえた。もう羞恥心もなくなったかのように。私も疲れ切っていた。実際一人で一人の人間を吊り下げることが、どれ程難しく力を消耗するものかは、経験された方にはよく分つていただけたと思う。私も彼女の横に枕を並べての青息吐息である。しばらくは口をきくのも億却だった。笹原さんとても同じであつたようだ。

「疲れたねえ」

しばらくして私が口を切る。

「背中の骨が折れるかと思つたわ」

彼女は頻りに自分で腰をさすっていた。この吊りでは背骨が不自然に曲げられるので、そこが一番痛むことを私は初めて覚った。

「もうお止しになりますか？」

彼女は元気が回復すると私に尋ねた。私は彼女の表情から、彼女がまだスタミナを持っていることを読み取った。私の意慾も尽きたわけではないが、体力的に直ぐには応じることができなかった。横になつたまま私は返事の代りに彼女の手を握ってみた。思いがけなく反拗がある。

「山本さんは抱いて下さらないの？」

「……」

「意地悪！」

どうも空気が妖しくなってきたので私は起き上る。話題をそらす必要がある。

「コーラーでも飲みませんか？」

「そうね、いただくわ」

笹原さんもむっくり体を起した。

「辻村さんの時、ちょうどあれでしたの」

コーラーを飲みながら、笹原さんがつぶやく。そんなことを私に話して、どうなるって云うんだらう。勿論私には、その言葉を云わせたものが若い未亡人の充たされない生理であることが分っているが、最後の行為だけは

の手の跡である。この姿勢で彼女は終始呻き声を止めなかったことを報告しよう。印象にしてから実は私自身も驚いている。全体重が曲げた手と足首だけに掛っているのだから、



私は避けるつもりである。所詮は撮影者とモデルである。モデルの心までも傷つけることはないではないか。据え膳食わぬは云々の言葉もあるが、特に笹原さんの場合、火を点けることは、自分までも焼けることを覚悟しなければならぬと考える。そのためには私は余りにも憶病なのかもしれない。

ちよつと座が白ける。何か喋らなくてはいけない。

「四日市にいいレストランがありましたね。

ええつと何んと云ったかなあ——」

「どの辺ですの？」

「近鉄の駅からずつと下った……ああそうだ

笹井屋とか云った店ですよ」

「私もよく聞きますわ。でも行ったことはありませんわ。山本さん、よく知っていらっしやるのね」

「帰りに寄ってみましょう」

彼女の熱気が少し鎮まったようだった。私の元氣も回復した。次にかからなくてはならない。

「もう一度吊りますよ。いいでしょう」

「ええ、でも写真を撮るだけというのは、ちよつとつまらないわ」

「じゃどうしたらいいの？」

「……」

「うんと虐めてあげようか？」

彼女は微笑しながら肯ずく。こうなったら彼女が満足するまで責めてやるしかないようである。

「叩かれるのは好き？」

「……」

彼女はやはり微笑している。私はもう一度彼女の手を握ってみた。握り返えてくる。

「山本さんは私の体が欲しくない？」

「……」

今度は私が黙って微笑する番である。未亡人の現在望んでいるものが何であるかよく分るだけに、私は早く彼女の自由を奪う必要がある。木村洋子や大島照代に試みに逆吊りを、この笹原さんにも実行するつもりである。

私は黙って彼女の両足首に別々に縄を巻きつける。木村さんの場合も大島さんの場合も縄の下には布を巻いて痛みを柔らげたのであるが、彼女には直接縄を掛けた。私が縄を掛けていると笹原さんは自由な上体を私の体に凭れかけてきた。頭を私の肩に載せる。重くて縛りにくいが辛抱する。

「どんな吊りをなさるの？」

「逆さ吊り」

「足は開くの？」

「ああ」

「どんなことをなさってもいいわ。うんとひどいことをして、死んだって構わない」

笹原さんは酔ったようにつぶやく。マゾ特有の絶頂時の希求である。正直云って私は彼女のその言葉が邪魔になった。男って自分勝手なのかもしれない。もっともつとせがまれると厭気さえしてくるのである。私は黙って別の縄で彼女の顔を滅茶苦茶に縛った。

口を割り目を塞いだ縄は彼女の美貌をむごたらしく歪めてしまった。手は後手に手首だけを縛り縄尻を首に巻く。その時の私の気持は、この燃え上った女体を、気を失うまで責めてやろうという鬼心に占められていた。テーブルを棧の下に移動してから笹原さんをその上に仰向けに寝かす。そして先ず、胴を左腕で抱えて上に引上げ、片足の縄尻を棧に巻く。彼女の背は、テーブルに載ったままである。残った足の縄尻を先のとらうんと離して棧に廻わし、太腿を胸と左腕で抱いて上へ持ち上げながら縄尻を固定する。もう一方を前よりも上に引上げながら縄を縛り直す。

このように交互に足を引上げて行くのが、

私の経験から来た智恵である。後頭部と肩だけで倒立ちになった所が完成である。そこで肩を抱き上げテーブルを足で外す。ぐぐっと女体が伸び、ミシッと棧が厭な音を立てる。頭が床に近づく。室内での、しかも一人の力による逆さ吊りの場合、高々と吊るというのは諦めなければならないようである。滑車を使つての野外での高々とした吊りをやってみるのが私の念願ではあるが、それは他日を期さなければならぬ。いつかそれを実現してこのカメラ・ルポにしてみたいと思っているが。

兎に角、笹原八千子さんのY字型の吊りは完成した。その無残で開放的な裸身が私の目の前にある。しかし直ぐにはカメラを向けることはできない。汗みずくで息を切らした男が畳に寝ころがった。下から眺める。伸び切った両足、滑らかな腹部から乳房への線、そして縄に埋まった顔——それは最高の被虐の姿態である。

一息ついた私は、拙稿『痴人の糧』で時々使った、この姿での燭台を、試みることにする。エキサイトした笹原さんは簡単に私の意図を許した。それに点火する。蠟燭は焰を上げた。ストロボの閃光を前後から当てる。勿

論そんなフォトを発表できる筈がないので想像していただくしかないが、凄惨でショッキンクなものである。

残った縄を束にして手に持つ。一発、二発とそれで逞しい臀部を叩く。力を余り加減しなかったで、その白い肌にみるみる朱の線が引かれた。

「ムムムッ」

縄の下で呻きが洩れる。力一ぱい皮膚が破れる程、叩いてみたい気もあったが、本当に死なれては大変なので、多少の加減はしたつもりである。しかし、それにしても痛いに違いなかったであろう。笹原さんは逆吊りの体を少しそらせた。今度は軽く、乳房に当てる。ここは急所だから力を入れるわけには行かない。

「ウウウッ」

彼女の口から呻きが聞えるのに変りがなかった。縄の束を置いてから、私は彼女の背を押して離れた。女体が前後に揺れに。そして棧や柱がミリミリッと大きな音を出した。その音が余りに強かったので、私は慌てて揺れる女体を止めた。家を壊すことはできない。

「大丈夫？」

私は体がかがめて笹原さんに尋ねる。縄の

下で彼女は肯ずく。それから私が彼女の体に何をしたかは、文章にすることができないので残念である。その時、私は彼女が苦痛のために痙攣を起したのではないかと思ったのであるが、後で聞いてそれを知った。

再び汗みずくになって笹原さんの体を畳の上に降ろし縄を解く。さすがの彼女もぐったりしている。

「気分が悪い？」

「ええ少し、でも大丈夫よ」

笹原さんは体を横たえたまま、大きく喘いでいる。その横に腰を降ろした私は彼女の手首をさすりながら、その白い肌を見つめていた。疲れ切った女体は、目を閉じて何かを待っているようでもある。私は男を意識していた。沈黙が続く。息づまるような、一瞬である。私は手にした彼女の掌に唇を寄せる。

「山本さん……」

私は唇を押し当てたまま、そっと彼女の顔をうかがう。目は閉じたままである。

「山本さん、私が嫌い？」

「……」

私は返事をしない。

「あなたの好きなようになさっていいのよ」  
笹原さんは、仰向けになる。抱いてやりた



い。力一ぱい抱き締めてやりたい。しかし、私は自分を制圧した。意気地なしと笑れるかもしれないが、黙って彼女の手を放した私は浴室へ入る。彼女は入って来なかった。

入浴を済ませてあがると、笹原さんはもう着物を着て坐っていた。私は向い側に坐る。

「ひどい人！」

彼女は私の目をにらむ。しかし、その目の中に怒りがないようなのでほっとする。

「悪かったね」

「悪かったってわかっていらっしやるのね。」

## 挿絵画家募集

○本誌発表の作品にふさわしい幻想的でます。優雅な異色画を求め

○用紙は必ず白い画用紙に墨汁又は黒インクにてお書き下さい。鉛筆や青インクはお避け下さい。大きさは御自由ですがなるべく二倍乃至三倍位が適当です。

○優秀作品は本誌の最近号に発表の上、読者の反響の如何によつては、本誌専属挿絵画家として毎月執筆願います。

○従来、S画（主として女体緊縛）或はM画、女体切腹などについて多くの方々から御応募頂きましたが、残念ながら特に傑出した作品には接しませんでした。どうか奮て力作をお寄せ下さるよう、お待ちしております。御送稿は第一種便にてお願いします。

余計に罪が深いわ。辻村さんも山本さんも紳士すぎるのね。意外でしたわ」

私は彼もまたこの美しい未亡人に満足を与えなかったことを知った。この先輩は、どうしてこうまで私に似ているのであろうか。

○

外はもう暮色をただよわせていた。車を置いたまま二人は南に歩いて、四日市の繁華街へ向う。料理屋、バーなどの立並ぶ裏通りにトルコ風呂の看板が見えた。去年の春、私はここへ入って空しい思いで出て来たのを懐しく思い出す。笹井屋の二階へ上る。ここはボーイの態度もいいし、地方都市としては料理も拔群である。私と笹原八千子の二人は夫婦のように食事をとった。

「淋しいわ」

彼女がぼつんとつぶやいた。こんな時、何も云わない方がいいようである。所詮、彼女の面倒を見ることのできない私であつてみれば、無責任な慰めの言葉は反って、このうら若い未亡人を苦しめるだけではないか。食事を済ました私は、階下の店で名物の長餅を一箱求めて笹原さんに渡す。

「お子達にどうぞ」

「氣を使わしてすみません。時々ふと子供が

いなくなつたらと思うことがありますのよ。悪いお母さんですわね」

車は再び津市に向う。国道一号線はひどい混雑だった。恰度ラッシュの時間になったのである。過分の三叉路を左に真直ぐ。

「また来て下さる？」

「ええ、暇が出来たら連絡しますが、どこへすればいいのですか」

彼女はダッシュボードに載せた煙草の包装に、それを書いてくれた。

「辻村さんにも、お会いになったら、よろしくね。私、山本さんや辻村さんとなら、どんなに……」

それ以上は聞くまい。ラジオが早いテンポの音楽を流す。何となく、何となく幸わせ

もとの場所で笹原さんを降ろす。彼女は淋しげに、しかし無理に微笑を作つて手を振った。さようなら笹原さん。所詮人間は孤独で淋しがりやなんだよ。

百数十軒の夜道を、私は一人で、これから帰らなければならぬ。私はハンドルを握り直すと、キッと前方を見つめて、ゆっくりとアクセルを踏みしめていった。

（この項おわり）

はなとへびはなとへびはなとへびはなとへびはなとへびはなとへびはなとへびはなとへび

## 連載小説

# 花

はな

と

蛇

へ  
び

團  
鬼  
六

崩潰する京子

突然、誰かがドアをノックする。

京子にまといつき、気もそぞろになって、上半と下半にわかれ、京子を貴めつづけていた二人のシスターボーイは顔をしかめた。

「いやーね。こんな時に誰かしら」

夏次郎は立ち上り、ハンカチで指を拭きつ  
つドアの内鍵を外し、ドアの隙間から顔を出  
すのであった。

津村義雄がニヤニヤして立っている。

「どうしたい、一寸、中へ入れてくれよ」

「あら、だめよ、だめ」

夏次郎は、中へ身を入れようとする義雄をあわてて、ドアで外へ押し出した。

「私達も京子おねさんと一緒、こんな姿な  
んですもの。羞しいわ」

ドアの間から顔だけ見せて、夏次郎は、すねて見せるのだった。

「ええ？ハハハ、成程、そりや悪かったな」

と、義雄は、愉快そうに笑いながら、

「これから、弟達の巣くっている浅草の喫茶店に電話して、ここへ呼び寄せるつもりなんだが、お前達の仕事の方は、どうなってるかと思つてな」

続編（第三十一回）

「ホホホ、任せておいて。今、京子おねえさん、天国の近くをさまよっているわ。夕方までには完全に骨抜きにっちゃうから」

「そうかい。じゃ一つ、ここはお前達に任せ  
ておこう。こっぴどりと可愛がってやんな」

義雄は、満足げにうなずいて、引揚げて行く。

夏次郎は、ほっとしたようにドアを閉め、内鍵をかけた。

「ごめんね、おねえ様、せっかくの所に水が入って。さ、始めましょう。今度は、クリスマスちゃんの番ね」

夏次郎は、元の位置に戻って身を沈める。



京子は、苦しげに瞼を閉ざし、上向き加減に首をあげている。その美しい額には、べつとりと脂汗が滲んでいた。

シスターボーイ二人が攻撃を開始してからもう十数分はたつ。夏次郎は、最初、予告したように……に對して、執拗な攻撃を開始し、強く、優しく揉みほぐし、京子にキリキリ舞いをさせてから次に、攻撃を京子の最も恐れていた……部分に向け始めたのだ。

全身を揺さぶるような激烈な屈辱感と恐怖感がこみ上り、京子は赤い猿轡の中で、生々しいうめき声を上げた。

「フフフ、京子おねえ様、如何が、ねえ、京子おねえ様ってば」

夏次郎は、わざと、甘ったるい声を出しながら、狂おしげに首を振りつつける京子を見上げつつ、如何にも手馴れた調子で片手で……げ、片手でゆるやかな刺戟を加えつつける。それは、男勝りの気性の強い京子にとっては、何よりも苦しい、辛い責苦であるに違いない。

一方、春太郎の手に持ちあげられ、押し上げられる乳房、遮二無二、接吻される耳たぶ頬、首筋、こうした二人のシスターボーイの陰湿な攻撃の矢面に立ち、京子は、遂に、女

の弱さ、もろさというものを引きずり出されていく自分を知覚が消えて行くような中で、はつきりと感じとった。

「まあ、おねえ様、とうとう感謝の気持を現わして下さったわ。好きよ、大好き」

夏次郎は、そんな事を口走りながら、攻撃に拍車をかけ始める。

「ねえ、遠慮なさらないでいいのよ。もっともっと、ああ、おねえ様で素敵だわ」

夏次郎は、感に耐えない声を発しながら、笠にかかつて、ピッチを上げ始める。

京子は完全に二人のシスターボーイの術中にかかり、備えも、構えも一切投げ出したよう、次から次と女の生理の悲しさを夏次郎に引き出されて行くのであった。

うっうう——と、赤い猿轡の中で押し殺すような声を発しながら、京子は心持、首を仰向かせ、ねっとりとした瞳を、物悲しげに開く。それは、断末魔の近づいた事を責め手に告げるような、ぞっとするばかりに美しい京子の瞳であった。

「ね、お夏、そろそろ仕上げにかかっちゃどう？」

春太郎は、京子の乳首を……ながら夏次郎に声をかける。

そうね、と夏次郎は、身を起し、京子のすぐ前に並べられた責道具のうちから、桐の箱を取り上げた。

「全く上手に作ってあるわね」

夏次郎は、それを春太郎に見せて、ニヤリと笑う。

「今度は私と交替してよ、お夏」

春太郎は、夏次郎よりそれを受取って、位置を交替し、京子の前へ廻る。

「さ、京子おねえ様、一回目の仕上げよ。いわね」

春太郎は、そういつて、それを京子の鼻先へちらつかせる。

京子は、哀泣する一歩手前のような眼差しを春太郎に向け、嫌々をするように首を振るのだったが、それは強い拒否ではなく、自分の運命をあきらめた、如何にも頼りない、甘えかかるような消極的な拒否であった。

春太郎はそんな京子の態度を意に介せず、構えをとる。夏次郎より彼の方は、大分、残忍に出来ていて、京子を一気にそういう状態に追いこんでしまつては、むしろ、快楽を与えてやるだけで、責める事にならないとでも思ったのか、じらし抜き、京子をジリジリした気持ちのたうたせようという卑劣な計画を

立てて、周囲にそれを……廻せたり、軽く……たたいたりする。

それを見て、夏次郎は吹き出した。

「可哀そうよ、そんな事しちゃ、気が狂うかも知れないわよ」

押すと見せかけて放し、放すと見せかけて当てたりしているうち、八の字に割られた京子の肢は、さも、もどかしげに、なよなよ揺れ始める。

「ホホホ、京子おねえさん、欲しいの？ 駄目、まだお預けよ」

春太郎は、京子の内部にある女の実体をさけ出させようとして、そんな行為を執拗にくり返すのである。

シスターボーイの隠微な手練手管に京子は一層、煽られ、かき立てられ、火に油を注がれたような狂おしい思いになる。

「どうしようもないじゃや馬娘だと思ったけど、一皮むけば、やっぱり可愛い女ね。安心したわ」

春太郎は、それに気を良くして、いい汐時とばかり、それを――。

京子は、ううっ、と呻き、毛穴から血を噴きそうな思いに、白い頬を真っ赤に充血させる。もう万事休すであった。口惜しさ、羞し

さという心の抵抗とはうらはらに、それは、暴力行使者を驚かせるぐらいに、何の抵抗もなく深く……いくのであった。

「さ、うんとお楽しみになってね」

春太郎も、京子の甘美な……をゆっくりと楽しみながら、夏次郎に向って、

「ね、京子おねえ様の女らしい声が聞いてみたいわ。もういいから、その猿轡を外してあげてよ」

あいよ、と夏次郎は、京子の鼻まで覆っている赤い猿轡を解き始める。

京子の唾液を充分吸いといった猿轡が、ようやく夏次郎の手で解き外されると、京子は、切なげに大きく息を吐き、真珠のように白い歯をキリキリ噛み鳴らしつつ、もうどうしようもなくなったように大きく後へ首をのけぞらせる。琥珀の首飾りをかけられた、艶やかな首筋がくっきりと浮き立ち、夏次郎はそれに熱い口吻をして、再び、二つの見事に成熟した隆起を背後から優しく……始めた。そして、火のように熱くなった京子の耳たぶに口を寄せるのである。

「いいのよ、京子おねえ様。後の始末は私達がしてあげるわ。ね、もう……なんですよ。さ、遠慮なさらず――」

京子の顔にも、身体にも、ねっとり脂汗がにじんでいる。

春太郎がニヤニヤしながら、懊悩の極にある京子を見上げて口を開く。

「ホホホ、京子おねえ様、さっきは、随分とえらそうな事をおっしゃったけど、何よ、こんなに音を立てさせたりして。これからは、あまり生意気な事は、おっしゃらない方がいいわね」

そうした春太郎の意地の悪いからか、微塵に打ちくだかれた京子の心に、反撓を起させる事は出来なかった。更に、この道の智者であり、底意地の悪い春太郎は、京子が、感情を高め出し、ある……き出して、左右へピーンと張った両脚をたまりかねたように激しく揺さぶり始めると、もう一步という所で急に攻撃を停止し、鼻唄など唄い出してわざと京子にたまらないやる瀬なさど狂おしい気持を与えるのである。先程、京子に痛めつけられた復讐を、そんな形にして春太郎は晴らしているのだ。一気に倒さず、苦しめるだけ苦しめ、泣かすだけ泣かせてやれ、という残忍な心で、幾度もそうした手段を用い、段々と激しくなる京子の魂も消え入るようなすすり泣きを楽しみつつ、春太郎は、京子を何回



となく、上げたり、引き降ろしたりしていたが、ふと、腕時計に眼をやった。

「少し、時間を食い過ぎたようね。それじゃ思いを遂げさせてあげるわ」

それから、数分後、幾度も夢現の中をさまよわされ、口惜しい陶酔に浸りつづけていた京子は、遂に、二人のシスターボーイの軍門に下ったのだ。責めつづける春太郎が一瞬、たじろぐ程の生々しい声を発した京子は、左右にかたく縄止めされた肉づきのいい、美しい肢を電流が通じたように慄かせたと思うとがっくり首を前へ垂れ下げ、心底から絶え入ってしまったのである。精も根も尽き果てたように、京子は、濃厚な体臭を発しながら、身動きもしなかったが、……こませたままのそれだけは、ひくひくと不自然に痙攣している。

「嬉しいわ、おねえ様、とうとう私達に女である事の証拠を見せて下さったのね」

夏次郎は、俯向いたまま、口惜しい快樂の余韻に浸っている京子にまといつき、顎に手をかけ、美しい京子の顔を自分の方へ向けさせる。

京子は、心身共、完全に屈服した如く、うっとり眼を閉じ合わせ、唇を半開きにした

まま、覚めやらぬ余韻に身をゆだねているようであった。夏次郎は、京子の美しい額に二筋三筋、乱れかかっている柔らかな黒髪を上げ撫で上げてやりながら、一種の輝きを増してきたように思われる京子の美貌を心も浮き立つ思いで、しげしげと見つめている。

「よかった？ 京子おねえ様」

京子は、さっと、紅を散らして反対側に顔をそらせた。消え入るように伏せている美しい京子の頬に、初花に似た乙女の如き、初々しい羞恥の感情が現われている。

「ね、お夏、ちよいと見てごらんよ。すごいわよ」

静かに……いた春太郎は、下から夏次郎の足をつついた。

二人のシスターボーイが足下に沈むと、京子は、顔も首筋も身体も熱くして、ふと、狼狽を示す。

「まあ、ほんと、ホホホ、見かけによらず、おねえ様って、おませちゃんなのね」

「というより、本当は好きなのよ」

春太郎と夏次郎は、顔を見合わして笑い出した。

「でも、一寸、激し過ぎやしない。あと三回体が持つかしら」

「そんなこと、私達が気を使う必要はないわよ。予定通り仕事を進めりゃいいのさ」

さて、と春太郎は立ち上る。

「じゃ、今から十五分、休憩するわ。それから第二回目の攻撃開始よ。わかったわね、おねえ様」

春太郎は、勝ち誇ったような顔つきになって、京子にいい、次に、夏次郎に向って、  
「京子嬢を陥落させた報告を津村さんにしてくるわ。一度、皆んなここへ連れて来て、私達の軍門に下った京子嬢の身体検査をさせるからね。彼女はそのままにしておくのよ」  
といい残し、素早く服を来て、外へ出て行くのである。

そのあと、夏次郎はパンティだけをはき、煙草を口にしながら、京子の前に近づく。

「一旦、それをお掃除してあげたいけど、津村さん達の検閲がすんでからにするわ。がまんしてね。——どうかしたの。何か、いいたそうね」

夏次郎は、うまそうに煙草の煙を吐きながら京子のおろおろし始めた表情を眺める。

「お、お願いです。も、もうこれ以上、私を——」

京子は、ニヤニヤする夏次郎に、せっぱつ

まったような気弱な瞳を向け、唇を慄わせるのである。

「これ以上、どうしたというの」

「貴方達の責めを、受ける力はありません。先程の事は、心から謝ります。お願いです。どうか、どうか、もう許して——」

京子は、息もたえだえにそこまでいうと、美しい顔を横へ向け、咽喉をつまらせて哀泣し始める。

「あら、そんなの駄目よ。私達、そうする事によって、津村さんから御褒美が頂ける事になっているんだもの。貴女だって、男を蹴飛ばす程の鉄火娘でしょう。今更、そんな弱気になってもらっちゃ困るわ」

などといいながら、夏次郎は、京子の足元に腰を降ろし、今や、覆うべくもなく、一切の臓物を、あからさまに露出させている京子を、再び眼を細めて眺め入るのであった。

## 蝮の罠

春太郎が、川田と津村を伴い、戻って来たのは、それから十分ほどたってからである。

「お夏、とてもいい話なのよ」

春太郎は、部屋に入るや、夏次郎を手招き

し、耳元に口を寄せ、何か語りかける。

「えっ？　じゃ、私達、これから、京子嬢の調教師として、このお屋敷に住み込めるっていうの」

夏次郎は、眼をパチパチさせて、春太郎の顔を見た。

「そうさ」

といったのは、津村義雄である。

「さっき、田代社長と話したんだが、この京子嬢は、気性が気性だけに、他の別嬪さん達のように、調教がはかどらず、弱っていると事なんだ。鬼源も、五人もの女の調教じやかなり骨だろうし、そこでお前達を俺が推薦したわけなんだが、秘密を守ってくれるなら、ぜひ、お願いしたいとおっしゃる。手当ては一人前、月、十万だ。どうだい」

「うわあ、夢みたいな話」

春太郎と夏次郎は、手を取り合うようにして、小踊りする。

「実をいうとね、津村さん、私達、今まで勤めていた店、昨日で鹹になっちゃったのよ。そら、私達、時々、店のお客にこっそり実演を見せて、アルバイトしていたでしょう。あれが、マダムにバレちゃって、チョン。津村さんに相談する気で、ここへ来たんだけど、う

来ただけの甲斐があったわ」

そういつて喜ぶ春太郎の顔を義雄は、片頬を歪めて見ながら、

「それだけじゃないぜ。今、吉沢にかなりの金を渡して、京子姐さんは正式にこっちが譲り受けたんだ。といっても森田組の商品にや変りはないが、今日から、京子姐さんは、お前達二人の女房にしてやるっていうんだよ」

「えっ、私達二人の女房に——」

春太郎と夏次郎は、度胆を抜かれたような面持になって、義雄の顔を見た。

しかし、それ以上に、度胆を抜かれたのは未だ、深い、辛い余韻から覚め切れず、不明瞭な意識のまま、聞く事なしに彼等の会話を耳にしていた京子の方であろう。別の衝動に打ちのめされたよう、思わず顔を上げ、恨むような、哀願するような、悲しげな瞳を男達の方へ向けるのである。

義雄にとって、それが、弟を打ち倒し、官憲の手に引渡した京子に対する報復であるのだろう。

「弟にしても、京子が、二人のシスターボーイの亭主を持ち、毎夜、秘密ショーに出演していると知れば、きっと、溜飲を下げるだろうと思うんだ」



「わかったわ。私達としても、望む所よ。あんなきれいなおねえ様を二人の共同の妻に出来るなんて、全く、信じられない位。嬉し涙が出ちゃうわよ」

春太郎と夏次郎は、うなずき合うようにして、そんな事をいったが、

「ところで津村さん、弟さん達には、連絡がとれたの」

「ああ、とれる事はとれたんだが、今日は、大きな仕事があって、どうしても手が離せないらしい。明日の夜は必ずここへ来て、二年前の恨みを利子をつけて返す、といってる。

しかし、空手の試合だけは、まかりならぬと田代社長に釘を打たれたよ」

田代に京子と弟との二年前の事情を話したところ、復讐するのはいいが、商品が傷つく恐れのある空手仕合は困ると、彼は義雄にいったそうだ。

「そりゃそうよ。二年前と違って、京子嬢は現在、こうして、秘密ショールのスターなんだもの。そんな野蛮な遊びはやめて、京子嬢のショーでも見て、そのあと、ベッドの上で、ナイトスリングでもやりやいいのかわ」

そういつて、二人のシスターボーイは、声を立てて笑うのだった。

「お前達のいう通りさ。それじゃ、明日、弟達がここへ顔を見せたら、お前達は、京子の亭主として登場し、京子に色々な芸当をさせるんだ」

「明日？それじゃ早速、今夜、徹夜でもする覚悟で、お稽古に入らなきゃならないわね」

「そうさ、そう思って、ちゃんと用意して来たぜ」

そういつたのは、川田で、片手にぶら下げていた紙包みの中から、一房のバナナ、生卵ゆで卵等を畳の上へ置き並べるのだ。

「鬼源でも、なかなかこの女にや手古ずるようだぜ。どうだい。自信があるかね」

川田は、二人のシスターボーイの顔を見てえへらえへら笑っている。

「大丈夫、私達、素人じゃないんだからね。今、京子嬢の——の構造も充分研究したし、

明日、弟さん達が来るまでには、見事に切り落させて見せるわ」

春太郎は、楽しそうにそういつて、京子の方へ近づく。

「ね、皆さん、こっちへ来て、一寸、見てあげてよ。つい今しがた、これをピクピク動かしながら、——ちゃったのよ。ね、わかるでしょ」

義雄と川田は、ニヤニヤし、それを凝視する。

川田は、指先で軽く押しながら、

「そう何から何まで、はっきり見せつけられると、こっちの方が照れちゃうじゃねえか、え、京子」

と笑い、二人のシスターボーイに、京子の左右へ立つようにいう。

「何だ、おめえ、本物のパンティをはいているのか」

川田は、夏次郎のそれに気づき、眼を丸くする。

「いやーね、そんなこと、どうだっていいじゃない。それより、私達をこう並ばせてどうするの。記念写真でも撮る気？」

「お前達の簡単な結婚式をしてやろうと思ってな」

義雄が、そういつて、クスクス笑った。

「お春、お前は、この京子を生涯の妻とし、末長く愛する事を誓うか」

義雄がふざけた調子で、そんな事をいい出すと、春太郎は、妙に気取ったポーズをとり「誓います！」

と大声を出したので、義雄も川田も笑い出した。

「お夏、お前はどうかだ」

「誓いますとも。私、最初から、このおねえ様に惚れていたんですもの。ちよいと、肘鉄を食わされたけど」

男達の哄笑がわき上る。

「さて、次は、京子だが、おめえは自分の口から、はっきりと宣誓してもらいてえんだ。今、ここへ社長がお越しになる。その前で、ここに書いてある事を、はっきり宣誓するんだ。いいな」

川田はそういつて、先程、ホーム酒場で、義雄と相談して作成したらしい半紙に書かれた奇妙な宣誓文を京子の鼻先へ近づけた。

「社長に対して、宣誓するという事は、ここじゃ血判状みてえに絶対的なものなんだ。そのつもりで頼むぜ。それから、もし、この結婚に不同意の場合、社長も提案している事だが、ちよいと人事移動が行われる事になる。

美津子と文夫のコンビは解消させ、おめえは妹の美津子とコンビを組んだ夫婦ショー、文夫は姉の小夜子とコンビを組んで——」

川田の話がそこまで及ぶと、京子は、あまりの恐しさに思わず首を左右に振り始める。

「嫌よ、嫌、そ、そんな恐い事——」

自分が実の妹と、そして、村瀬宝石の令嬢

小夜子が実の弟と——想像するだに恐い畜生道であり、京子は川田の話を最後まで聞く勇氣はなかった。

「とにかく、おめえの決心がぐらつくと、とんだ事になるって事さ。どうでい、この結婚に異存はねえだろうな。見かけは何だか気持の悪い連中だが、とにかく、あの方にかけてや二人共天才だ。じゃじゃ馬のおめえをきつと優しい女らしい女に仕上げてくれると思うぜ。へへへ、第一、今、骨身にこたえる程、充分楽しませてもらったんだろう」

川田が、悲しげに顔を伏せつづける京子へのぞきこむようにしていうと、春太郎が、

「ちよいと川田さん。色々気を使って下さるのは有難いけど、見かけは気持の悪い連中とは何よ。失礼だわ」

「おっと、これはすまねえ、つい口が滑っちゃまったんだ」

川田は頭に手をおいて舌を出した。

「さ、一度、眼を通して見な」

川田にその宣誓文が書かれた半紙を更に鼻先へ押しつけられた京子は、もうどうともなれとばかり、力のない瞳をぼんやり、それに向けるのである。

それには大体、次のような事が書かれてい

た。

——京子は、春太郎、夏次郎の二人を本日より、自分の夫とし、永遠の愛を誓うと共に、この二人の夫を調教師として、ショーの演技に研究を積み、今後、森田組のスターとして一層の努力奮励する事をここに誓います。なお、春太郎、夏次郎、この二人の夫が要求、命令する事には一切服従を誓い、これに違反したる場合、如何なる処罰を受けようとも異存ございません——。

## 地獄の宣誓

それから、二十分ばかり後、京子は、涙を流し、声をつまらせながら、その宣誓文を田代の前で読まされていた。

吉沢と一緒にこの部屋へやって来た田代は左右に二人のシスターボーイを立たせたまま読み上げる京子を前の椅子に坐って聞く事になったのだが、その間も、好色な田代は、京子の縄に緊めあげられた豊満な乳房、くびれた胸、野性味を備えたむっちりした太腿等に眼を注ぎつづけている。八の字型に固定されているため、京子……は、息苦しいばかりの生々しさで、田代の好奇心を刺戟した。



「——この二人の夫が要求、命令する事には一切服従を誓い——」

京子は、川田が横から差し出してゐる半紙に書かれた宣誓文に泣き濡れた瞳を向けながら、声を慄わせて、読んでゐるのだ。

川田や義雄に強迫されつづけ、遂に京子は美津子と畜生道に陥るよりは、まだしも救われると、朦朧とする神経の中で考えたのだから。醜悪で陰湿で、化物のような二人の男を自分の夫に——想像するだけでも、全身が凍りつくように恐い事であったが、先程、この二人の化物に、身も心も、無残に打ち砕かれる責めにあった京子は、精神的に、肉体的に、未だそのショックから立ち直れず、どうとでもするがいいわ、といった気だるい諦感の上に乗っかってしまつてゐた。

ようやく京子が、その奇妙な宣誓文を読み終えると、田代は、満足げにうなずいて椅子から立ち上る。

「よし、それじゃ京子、今、宣誓した通り、この二人の亭主によく仕え、立派なスターになるよう修業するんだぜ。ここへ来て、もうかなりになるのに果物一つ満足に切れねえというのは情ないじゃないか」

すると、春太郎が田代に向かい、愛想笑い

しながら、

「社長、これからは心配入りませんわ。今までは違つて、今後は自分の亭主に調教を受けるんですもの。京子さんも、きつとやる氣になつて、がんばつて下さると思うわ。——

ねえ、京子さん」

春太郎は、悲しげに眼を閉ざしてゐる京子の頬を指でつつき、田代の方へ笑つて見せるのである。

「ねえ、お春」

夏次郎が眼をパチパチさせて、春太郎の方を見た。

「もし、京子おねえさんのお腹に赤ちゃんが出来たら困ると思わない。お春の子か私の子かわからないじゃないの」

それを聞くと、田代も川田も笑い出した。

馬鹿、と春太郎は夏次郎の方に向いて、

「そうなりや二人の子供として、仲良く育てていこうじゃないの。大体、あんたと私とは恋人同志でもあり、兄弟でもあり、親友でしょう。今後二人は一身同体よ。あんたのものは私のもの、私のものはあんたのもの、ちつとも、おかしな事じゃないわ」

「そうね、それを聞いて私も安心したわ」

夏次郎は、頼もしげに春太郎の顔を見、ウ

インクする。この二人は一種の両棲動物であり、それでいて女の腹を大きくする能力も持っているようだ。それを知つて川田は、たしかにこいつらあ化物だぜ、と薄気味悪い心持になり、不快な顔つきになるのだった。

「ねえ、社長」

これからは、この部屋を自分達の住家とし仲良く三人で暮したらいいだろう、と田代にいわれると、春太郎は、甘えかかるような声を出した。

「何だね」

田代にしても、この二人は、あまり氣持のいい人間ではないらしい。その道にかけての達人であり、女体の調教にかけても、鬼源とはまた違った技術を持っている、と義雄に説得され、じゃじゃ馬で手古ずつてゐる京子の調教をまかす事にしたわけだ。

「あのね、社長、私達、もう二十年近く、こういう稼業を続けて、お夏と二人、あちこち放浪して来たでしょう。何だか、この辺で、ほんとに落着きたくなつて来たの」

「いいじゃないか。俺達の仕事に協力してくれるなら、ここへ永久に住みついたってかまわないのだよ」

「そういつて頂いて、本当に助かったわ。つ

いでに、もう一つお願いしたいんですけど、私達、年の故か、最近、無性に自分達の赤ちゃんと欲しくなってきたの」

「成程」

田代は、葉巻を出して、口に咥えながら、春太郎の顔をニヤニヤして見る。

「京子さんに、私達の赤ちゃんを生んで頂いてもいいかしら」

その瞬間、京子は、はっと動揺し、首をねじ曲げるようにして、はっきり横を向いてしまふ。陰惨な、ぞっとしたもの、京子の身内を揺さぶり出したのだ。そんな京子に、川田が近づき出して、

「ハハハ、京子、シスターボーイ達が、おめえに赤ちゃんを生ませたいといってるぜ」

京子は、ひどく狼狽しながら、川田から、顔をそらせつづける。

田代も、そんな京子を面白そうに見て、春太郎にいった。

「何も、俺達に気兼ねする事はないじゃないか。京子は、君達の妻なんだ。好きなだけ生ますがいいさ」

「ほんと、社長。嬉しいわ、それに第一、こういう気性の強いじゃじゃ馬を気の優しい女らしい女に仕上げるには、子供を生ませると

いうのが一番だと思うんですよ」

「うん、それは、俺も考えていた事なんだ」

田代はうなずいて、持参したウイスキーの栓を抜き、

「それでは、三人の幸福を祈って、乾杯しようじゃないか」

部屋の隅にある湯呑茶碗を、川田が水道の水で洗い一人一人に渡して廻る。

ようやく、吉沢が京子の傍へ近寄り、

「へへへ、京子、おめえとは短い縁だったが色々楽しかったぜ。ま、これからはこの面白い亭主と仲良く暮しな。おめえが、この二人の亭主のする事にさからったりしてくれろと俺としては都合がいいんだ。今度は、おめえの妹の美津子を女に出来んだからな。嘘だと思ったら社長に聞いてみる」

京子は、ひきつった顔をして、田代の方を見た。

「吉沢のいう通りだよ。これから毎日、春太郎と夏次郎の報告を聞き、京子が宣誓文に違反するような行為をとった場合には、先にもいった通り、京子と美津子のコンビを誕生させると共に、美津子は吉沢の女にする、と取極めたわけだ。とにかく、二人の亭主には、絶体服従、わかったな、京子」

京子は、抗しがたい悪魔の決定的な宣言を脳天から聞かされた思いで、かたく眼を閉ざす。

「さ、乾杯だ」

男達は、口々に勝手な事をいいながら、茶碗のウイスキーを飲み合った。

「そうそう、忘れていた。君達に結婚のプレゼントがあるんだよ」

田代は、そういって、歩き出し、ドアを開ける。

先程から、廊下で待たされていたらしいチンピラの竹田と堀川が、一重ねの豪華な夜具を運んで来た。

「三人が一緒に寝る事が出来る特製の大きな布団だよ」

田代に指示されて、チンピラ二人は、京子が立縛りにされている前へそれを敷いたが、ふと、京子のあられもない肢態を見て、ギョツとしたよう、その場へ棒立ちになる。

田代は、京子が生々しく……させているそれを手で隠すようにしながら、

「子供はまだこんなもの見るんじゃない。早く仕事をしないか」

と、叱るのである。

夜具の上には、真新しい枕が三つ並べられ



る。ピンクのカバーで覆われた枕をブルーの枕二つがはさみ、それが、また、何とも艶めかしく眼に映じたのか、ほほう、と吉沢が口笛を吹いて、

「これから毎晩、ベテラン二人に挟まれて、お寝んねするわけか。成程、それなら、すばらしく成長するに極まってるぜ」

京子は、眼の前に敷かれた、おぞましい寝具から心死に眼をそらせている。

チンピラ二人は、別に用意して来た差込み電話を押入れの近くに配置するのだった。

「何かあった時、電話が必要だろうからな。それに毎朝、京子の成長ぶりを必ず報告してもらいたいんだ」

田代にいわれて、夏次郎は、

「電話つきの新婚ホームになったわけね。トイレがないのが玉に傷だけど——」

「フフフ、俺からのプレゼントがあるぜ」

吉沢は、一旦、外へ出た竹田が抱えて来た包みを受取り、夏次郎に渡す。

夏次郎が包み紙を破ると、合成樹脂で出来てらしいピンク色の可愛いおまるが出て来た。

「何よ、これ、子供用のものじゃない」

「そうさ、女の児用のものさ。どうでい、可

愛いいだろう、京子のおまるにゃ、ぴったりだと思ってるな」

吉沢につられて夏次郎も春太郎も笑った。

春太郎は、それをとって、京子の眼の前へ持って行く。

数々のいたぶりに、京子は、打ちひしがれたように顔を伏せている。それを春太郎に鼻先へ突きつけられても、疲れ切ったよう激しい狼狽は、もう見せなかった。

「ホホホ、前の御主人からの心をこめたプレゼントよ。感謝して、これからは、大きい方も小さい方も、これを使って、すましましうね」

凄惨な無表情さを顔に表している京子に対し、そんな事をいって笑う春太郎である。

「さて、俺達は、そろそろ引揚げよう。賭場の方も気がかりだからな」

と田代は、葉巻を灰皿に押し込み、

「最後に、仲のいい夫婦のキスを披露しろよ。それを見とどけて、俺達は引揚げろぜ」と、赤ら顔を歪ませている。

「いいわ。お安い御用よ」

春太郎と夏次郎は、再び、京子にまといつき始める。

京子の柔軟な肩に手をかけた春太郎は、

「さ、京子さん、お互いに愛をこめて、熱い口吻をかわしましょう」

春太郎が、かさかさした唇を突き出して行くと、京子は反射的に顔をそらせ、眉を寄せ、それを避けるのだ。

忽ち、川田や吉沢の罵倒を京子は浴びる。

「亭主のキスを嫌がる女房がいるかよ。モタモタしやがると承知しねえぞ」

春太郎は、京子の首に手をかけた。

「さ、京子さん、こつちを向いて。ねえ」

京子は、遂に抗しかね、春太郎の方へ顔を向ける。京子の美しい双眸は、通り雨に濡れたようキラキラ涙で光っていた。

「愛しているわ、京子さん」

春太郎は、京子のぞっとするばかりの美貌に一瞬、卒然とし、たまらなくなったよう衝動的に京子を抱きしめる。

川田が再び声をかけた。

「京子、おめえも、亭主に対し、愛しているわ、とか何とかいいな。それじゃ、愛想がなさすぎるぜ」

京子は、虫ずの走る程嫌な男に息苦しいばかりに抱きしめられながら、一切の人間感情を断ち切ったよう静かに瞼を閉じた。

「——あなた、あ、愛してるわ」

どっと、周囲から哄笑がわき起った。京子の頬に、幾筋もの屈辱の苦い涙が流れている。

遂に春太郎と唇を合わせた京子をじっと眺めている義雄は、これで弟達も浮かばれるぜといった気分になり、煙草に火をつけて、うまそうに煙を吐くのであった。同時に、先程シスターボーイを腹のように嫌い、暴れ廻った京子が、彼等のいう何とかコースとかいういたぶりを身に受け、今、衆人環視の中で彼等に唇を与えている。それが痛快でならないのだ。

川田達が再び、どっと、笑い出した。

春太郎と京子が長い接吻を始めたので、一人取り残された夏次郎は身を低め、つまむようにしながら唇を当てがったのである。

さっと悪感のようなものが全身をよぎり、京子は春太郎から唇を離して、ブルブル慄え始めたが、春太郎は、京子の体を必死に抱きしめつつ、

「暴れたら、皆んなにまた何かといわれるわよ。ね、お夏にも……せてやって」

春太郎は、取り乱す京子をなだめるようにしながら、再び、ぴったりと唇を合わせるのだった。

川田も吉沢も手をたたいて笑いこける。「成程ね。二人の亭主とキッスするのは、そういう風にしてやるのかい。こりや愉快だ」

## まんじの舞い

田代が川田や吉沢達を連れ、ようやく部屋から出て行くと、春太郎と夏次郎は、ほっとして、ドアに内鍵をかける。

「ようやく、これで三人きりになれたわね。全く、あの人達はうるさくてかなわないわ。だけど、京子さんと私達を一緒にして下さったのだから悪口いっちゃ罰が当るわね」

春太郎と夏次郎は、そんな事をいいながら相変わらず立位のまま、……に縛られている京子の前の夜具を、部屋の中央に引っ張って行く。天井の棧から細い皮紐が二本垂れ下がっている、丁度その真下へ夜具を敷いたわけだが、それは、小夜子が義雄の悪どいいたぶりを散々に受けた、いわば、小夜子の涙と脂を吸いとった恐しい皮紐であった。そういう意味をもった皮紐である事をシスターボーイ達は知るよしもないが、それを見た途端、彼等の頭には、京子をその時の小夜子と同じく、仰向けに固定する計画が出来上っていたもの

と思われる。一度、京子をああいう状態に追い込んだとはいえ、空手二段の京子に対し、思いを遂げるためには、まだまだこうした拘束具が必要だと二人は大事をとっているのである。

「なかなか気のきいたものがあって、大助りだわ」

二人は、京子の傍へ戻ると、深く首を垂れている京子の頸に手をかけて顔を上げさせ、垂れ下がる皮紐の下に敷かれた夜具を見せつけようとするのだ。

「じゃ、京子おねえ様、これから私達二人の愛を受入れて頂きますわ。あれがそのための愛のベッドよ。仰向けにお寝ねしたら、肢を大きく開いて上にあげる。私達があの紐におねえ様の足首を、しっかり結びつけますからね」

京子は、何か幻でも見るようにぼんやりと前へ視線を向けている。

「私達との初夜を前にして、そんな不服そうな顔しないでよ」

急に春太郎が高飛車になって声をあげた。先程から、黙りこみ、時々、憎悪に光る眼を自分達に向ける京子が急に腹立たしくなってきたのである。



「貴女を女らしい女に仕上げるのが私達の仕事なんだからね。いいたかないけど、貴女の出ようによっちゃ貴女の妹さんを——」

「わ、わかってます。もうその事は、おっしゃらないで——」

京子は、哀願するような気弱なまたたきをし、春太郎の方を見るのである。

「じゃ、はっきり、返事して頂戴。京子は、これから私達二人と夫婦の契りを喜こんで結んでくれるのね。私達二人の女になってくれるのね」

京子は、たまらなくなつて、首を落し、肩を慄かせて、すすり上げ始める。

「ちよいと、どうしたのよ」

春太郎は、邪慳に京子の肩を突いた。

京子は涙を振り払うようにして、顔を上げて歯を噛みしめて、冷静を装おうと努力する。

「ご、ごめんなさい。もう泣かないわ」

京子は、悲痛な覚悟を自分自身にいい聞かせながら、

「よ、よろこんで、貴方達の、女になるわ」  
必死に自分に耐えるようにして口にした。

「うわあ、よくいって下さったわ」

夏次郎は、声をあげ、背後から京子の肩からスベスベした背中、かたく縄で縛り合わさ

れている両手首、更に移向して、肉づきの白い尻にまで接吻の雨を降らしつづける。

春太郎も、京子の胸の豊かな二つの隆起に優しく口吻してやりながら、

「よくいって下さったわ。それから、これは私達からお願いなんだけど、先にもいった通り、一日も早く私達の赤ちゃんをお腹へこさえてね。私達、赤ちゃん大好きなの。生まれたら三人で仲良く育てましょうよ」

すると、夏次郎が、

「そうね。京子おねえ様に似た美しい女の子がいいわ。ただし、唐手や柔道などをお母様に似て習いたがるような女の子はいやーね」といい、楽しそうな顔をするのだ。

「ね、お願い、おねえ様もおっしゃって。京子、きつと、可愛い女の子を生みますわって。ねえ、おっしゃって、おねえ様」

夏次郎は、何かに憑かれたよう、そんな事を口走っていたが、急にとりみだして、京子の伸び切った太腿に頬をすりつけ、シクシク泣き出すのである。

「ちえっ、また病気を出しちゃって、しっかりおしよ」

と、春太郎は夏次郎を引き起しながら、京子にいう。

「このお夏はね。ちょっとした赤ちゃん気遣いな。今でも人形を抱いて寝る時があるのよ。ねえ、お夏のために、いってやってよ。必ず、お夏の子を生むってさ」

京子は、この病的な神経を持つ無気味なシスターボーイを見て、ぞっとする。全身をみみずが這い廻るような嫌悪感。そして、やがて自分は、この悪魔とも幽鬼ともつかぬ男達の子供を、本当に腹に宿す事になるのではないか、と思うと、あまりの恐ろしさに、気が遠くなるのだったが、一方、自分にとって、死を覚悟しなければならぬ段階が遂に至ったという、一種のあきらめが心の中をしめてきたのである。

今日より、この狭い部屋の中で、二人の陰湿なシスターボーイと同棲生活、そうした惨鼻な地獄の生活に、自分の神経と肉体は、何時まで持ちこたえる事が出来るだろうか、京子は、ふと、自嘲的にそんな事を考える。恐らく、何時かは狂い死する事だろうが、もうこうなれば、最後の最後まで、自分の力の及ぶ限り、美津子をかばい、美津子がこの屋敷より救出される事を祈ろう、といった気持ちに京子はなった。それには、この化物達の望むのに従って、柔順に振舞って見せねばならな

いのだ。京子にとっては、死を覚悟した悲痛な決心であった。

乳房のあたりに顔を押しつけるようにしてすすり泣きをつづける夏次郎に対し、京子はわざと甘くささやいてやる。

「ねえ、京子、貴方の子供をきっと生みますわ。だから、もう泣かないで」

「ほ、ほんと、おねえ様。可愛い女の子を生んで下さる？」

夏次郎は、京子に取りすがるようにして声を震わせる。

京子は、羞しげに眼を閉ざし、うなずいて見せるのだ。

「うわあ、嬉しいわ。ね、お春、聞いた？」

京子おねえ様が、私の赤ちゃんを生んで下さるそうよ」

春太郎は、はしゃぎ廻る夏次郎を嬉しそうに見て、

「よかったね、お夏。でも、蒔かぬ種は生えぬというじゃない。早速、おねえ様に種をつけなきゃ」

そうね、と夏次郎もいい、二人は、再び、京子の前で……になるのだった。そして、布団の方へ歩いて行き、三つの枕を縦に並べ始め、おつむを乗せる枕、これは、おねえ様が

お尻をお乗せになる枕、と楽しそうに、それぞれを配置して、

「さ、お床の支度が整いましたわ」

と、二人は、京子の傍へ寄り、京子の足首を縛った縄を解くべく、身を低める。

「今更、念を押す必要はないと思うけど、さっきのように暴れたりはいしないでね。足の縄を解かれたら、おとなしくお床に入るのよ。いいわね」

足の縄を解く前に、春太郎は、京子にも一度念を押すのである。

「わ、わかったわ」

京子は、ぐっと屈辱を呑みこむようにしながら、

「私、貴方達に、最後にお願ひがあるの」

「何なの」

「私、もう二度と貴方達にさからったりはしないわ。ですから、お願ひ、今後、妹をいたぶるような計画だけは立てないで。京子の一生のお願いです」

京子は、今にも号泣しそうになる心をこらえて、切れ切れにそういうのであった。

「わかったわ、京子おねえ様」

と、夏次郎がうつとり京子を見上げるようにしていったが、

「駄目駄目、お夏、そういう安請合しちゃ」と、春太郎は制しながら、

「それはね、京子さん。貴女がこれから私達二人を充分堪能させて下さり、二人の夫の愛をしっかり受入れて下さってからの話。一寸でも私達の気分をこわすような態度があるとそのお約束は何時でも破らなきやなりませんわ。京子さんが本当にお色気のある女らしい女になったと私が見た時、それは必ずお約束致します」

春太郎は急に相手の弱味につけこむようにわざと非情ないい方をする。

「わかったわね、京子さん」

「——わ、わかりました」

京子は、顔をのけぞらすようにし、すすり泣きつつ、返事をする。

これから、この化物二人を相手に死物狂いの努力をしなければならぬのだ。果して、彼等が望むよう積極的にふるまってみせる事が出来るだろうか。京子は、その苦痛によって自分は狂い出すかも知れないと思った。

「でも、京子さん、さっきからくらくらすると、大分、柔順になってきたようね。フフフ、その御褒美に、これから私達、京子さんが今まで一度も経験した事のない素晴らしい×××



×を夕方までの三時間、ぶっ通しで始めてあげるわ」

春太郎は、京子の横顔を見ながら、楽しそうにいい、京子の足首にかかった縄を解こうとしたが、「ああ、そうそう」と、夏次郎の方を見た。

「ね、これから三、四時間、休みなしで続くんだから、今のうち、させといてあげましようよ。さっきのおまる持って来て」

夏次郎が、それを手にして、再び、近寄って来ると、京子は、ひどく狼狽の態を示し、モジモジ顔を赤らめた。

「嫌、嫌——し、したくないわ」

京子は、その蓋を開けた春太郎と夏次郎が、二人でそれを持ち添え、そのまま、当てがおうとしたので、驚愕し、激しく身を揺すり始めた。

「駄目よ。プレイの最中、行きたくなかった」

### 「速達料金」について

○雑誌の速達料金は一部につき七十円、二部につき百円です。写真、限定版は一件につき五十円です。

○但し、雑誌と写真、限定版は同送できません故、速達料金の計算は別々にお願致します。

て許さないわよ。だから、今、すましておいて頂戴」

「こ、こんなままでしなきゃならないの」

京子は、精一杯の哀願をこめて、それを当てつけている春太郎と夏次郎に、悲しげな視線を向けるのである。

「そうよ。これからは何時もこういう方法で私達二人が始末してあげるわ。京子さんは、一切、こっちへ任していればいいの。フッフ楽でいいじゃない」

「ねえ、おねえ様、早くすまして、プレイに入りましようよ。私達、もうこんなになっちゃったわ」

夏次郎は自分のそれと、春太郎のものを指さしながら、京子を見上げ、すねて見せるのだった。

「おねえ様が、私達に見せつけているんですもの。こいつが怒るのも無理ないわ。ねえ、早くすまして、おねえ様」

夏次郎は、たまりかねたように、京子の：それをさすり出した。

「待、待って、やめて頂戴!!」

「じゃ、して下さるのね?」

「す、するわ」

京子は、悲痛な表情をし、顔を正面に向け

た。この男達の喜ぶように努める、それが自分の運命だと京子は達観した気持になったのだらうか。

一切の人間感情を投げ捨て、自ら地獄の羞恥に向い一気に飛びこもうとした京子だが、左右から寄り添い、喰い入るように眺めている二人の男に気づくと、京子は、うっと顔をそむけ、たまらない嫌悪感にブルブル全身を震わせるのだった。

「あら、どうなさったの、おねえ様、嫌、出し惜しみするなんて」

「早くすまして、早くプレイに入りましようよ、ねえ」

春太郎と夏次郎は、ついたり、さすったりしながら、ふざけている。

京子は、どうしようもない屈辱と憤怒が一つのものとなって、胸に突き上げて来て、「——か、……かかってても、知らないわよ」

と、吐き出すようにいい、美しい眉を寄せ顔をのけぞらせて、男達の張りめぐらした網の中へ身を投げて行ったのである。

✕

✕

✕

✕

✕

✕

# 映画にみる縛り

丸 木 戸 佐 渡

先日、東宝の『殺人狂時代』で、まったく突然に、思わずため息のもれるようなすばらしい縛りのシーンが見られた。演ずるのは団令子。この女優は以前にも『椿三十郎』で入江たか子と二人、実に、優雅な縛られ方をして感心させられたことがある。又、『女体』『クレイジーの大冒険』等でも拝見済みであるが何といっても、その縛られる表情に、実に色気があり、最高のマゾヒスチンではないかと思う。

この『殺人狂時代』では、わずか数カットであるが、吊りと、かたいベッドへのはりつけとの、二態を見せ、どちらもかなり派手に破れ、汚れたスリッパ姿に、髪が乱れかかり彼女の苦痛と哀願の表情が効果的で、その迫力は抜群であった。ついでに、そばにいたは

ずの犯人役の男(天本英世)に少し登場願って、ムチでもふるわせてみたかった。

小生、元来ぐるぐると縄をやたらと多く使ったものには興味がうすく、その点、堅いベッド(又はテーブル)の上に四肢を拡げられているその手首が、手錠で固定されていたのがすごく印象的だった。そして彼女の迫真の演技力によって、「縛りは露出以上に表情が迫力の強さを増すもの」という私の持論にいいよ自信を得たのであった。

小生、女の美しさは何といっても縛りであるという信念のもとに、もっぱら映画の中にその美を求めているのだが、縛りシーンは主としてピンク映画に多いけれども、ほとんどは、興味を呼びさましはしても、決して満足すべきものではなく、まだまだ研究の余地が

ある。(映倫の規制内であるにしても)

例の大作『拷問』はたしかに縛りのオンパレードではあったが、いわゆる「拷問式」(又は小森式)とも云うべき、乳首の上に結び目を作る新案特許の縛り方もバカの一つおぼえでは迫力に欠ける。ここに登場した何人かのヒロインの中で特に注目すべきは、キシシタに扮した加山恵子であろう。

彼女の唇の色気と気品は「夜ひらく花」で十分発揮されていたが、「拷問」で、伏目がちに悟り切ったようなかな微笑をうかべて、牢名主の香取環を見返りながら、引き出されていくシーンでは、そのうるんだ瞳と濡れた唇にあふれるような、色気と気品があった、小生の身体をゾクゾクさせてくれたものである。

彼女はそのシーンでは囚衣を着ていたし、引き回しの後、処刑へと移るシーンでは、例の「拷問式」の縛り方であったが、その処刑が、目かくしをして二頭の馬に両足を縛りつけての、股裂き刑であったことに、大いに満足した。一瞬、ひびきわたった彼女の叫び声が、しばらく耳について離れなかった。

その姿態、表情、気品等から、恐らく「花と蛇」の静子を演じられるのは彼女をおいて



は、先ず考えられないのではないか。その点については、四月号橘雅美氏の写真が実にうまく彼女の表情をとらえられているので、諸氏にも御賛同頂けるものと思う。

同じシーンに出た香取環は、ピンク映画では第一級のスター格であるから、かなりいろいろな縛りシーンを見せてくれている。例えば「赤いしごき」は、ほとんど彼女の独壇場で、雨の中で、薄物一枚の豊富な肉体を、荒縄でぎりぎり縛られ、地面に座らされたり、非人に襲われたり大奮闘であった。

この「拷問」でも、あぐら縛りや海老縛りで、割れ竹で責められるシーンがあったが、どうも、その表情は、MよりもSに仕立てた方が面白いと思う。例えば、三月号の『宴の館』の阿久里等のように。

さて、もう一人の大スター、新高恵子については、『あなたの留守に』のタイトルバックが印象深い。内容は面白くなかったが、巻頭全裸に近い姿を後手に縛られ、能面をつけた半裸の男に鎖で責められる幻想的なシーンがあった。冷たい鎖がソロソロと乳房の谷間や腹、太モモ等にはうたがいに身をよじり、のけぞらせて苦しむ姿はかなり楽しませた。ただその表情に、もう一つ気品が欠けるのが惜

しい。少し媚を売るような感じが強すぎるのが小生の注文に反するからか。ここにも現れた能面というのは、その点使い方によっては素顔よりも面白い。芳野眉美氏の『水中花』でも使われて効果的であるように、能面はその下にかくされた顔を想像させるだけでなく、それ自体、光や角度によって、表情が様々に変化し、冷たい気品や、あふれるような色気が表現される。

最近『艶やかな夢』の「はの章」で火鳥こずえが能面をつけていて、「これは……」と期待したが、ただそれだけで終わってしまった。失望させられた。彼女を初めて見た時、何の作品だったか、一寸思い出せないが、人妻役で、着物姿にアップの髪が似合って、縛ったらどんな表情をするかと想像をたくましくさせた。間もなく『花と蛇』に出演するのを知り、当然静子だろうと思っていたのに、あてがはずれて、以来まだ縛りにはお目にかかっていない。一度ぜひ、優雅に縛ってみたいものと思う。又、責める側の男の表情がどうしても迫力に乏しい。やはり映画ではうまく表わせないのだろうが、それだけに、幻想的な舞台に仕立てて、カラーでやると、面白いだろう。

かつて東映の時代劇で、よく鉄火女に扮して縛られていた花柳小菊や三浦光子等の気性の激しい、野性味のある表情も興味深い。まだ小生が少年の頃、荒縄で胸高にぎりぎり縛られ、柳眉を逆立て、唇をきつと結んでにらみつける彼女らの表情に、胸躍らせた記憶がなつかしい。今なら『牙狼之介』の楠侑子や『肉体の門』の野川由美子といったところだろう。この野川由美子は全裸で両手吊りに高々と揚げられ、光と影の使い方や、肌を伝う大粒の汗がすばらしかったが、外で待っている恋人の為に、仲間の掟とあっさり観念してしまつて、ギラギラ光る目や、とがった唇等が生かされなかったのが惜しい。縛り方や責め方は、その前の富永美沙子の場合が良かったが、彼女には他のズベ公達と違った大人の色気があり、ムチで打たれる時の表情が印象的だった。

思いつくまま書いていると紙数が尽きないが、仲々思いつくのに整理がつかなくて、充分に書けないのだが、今後共、表情や、設定に注目して、フィルムハントに励みたいと思う。そして、奇クを通じて同好の諸氏と共に大いにその美を追求してみたい。

## マゾ日記

早木夢二



1

彼女が済まして出てくると、入れ違いに私が入って行くのだ。

毎朝のことで、彼女は何の疑いも抱いていないようだが、よく考えて見ると私が毎朝、何度か催してくるのをせいぜい我慢しているのに気がつく筈なのだが……。

狭い密室の中に入ると、むっと臭いが私の鼻をつく。しかし、それは洋式の水洗便所だから、もう彼女の実績は、洗い流がされて仕舞って跡方はない。

白い便器の底には、透き通るような水が溢えられて、つい今さっきの波瀾の面影もなく

なっている。

下着をずり下して、腹を開いて便器の縁に尻をつけると、一瞬ひやっと冷たさが身に泌みるが、それとても、よくよく味わってみると、何か彼女が残していった体の温みが、消え切らずに仄めいている。

腹の間から下を覗くと、水は何事もなかったように静まり返っている。

しかし私の眼には、そこに、彼女のものが累々と横たわっているのが見える。

あるものは底に沈み、あるものは、宙ぶらりんの恰好で、少し斜めにふわっと浮いている。時間が経つと、段々に出て来た時の色を

失って、白茶けた、いかにも彼女の生きた体から離れると、すぐ死んで行くもののように生氣を失ってくる。臭いさえ、今はもう空間にたなびいているものを除くと、あの強烈さはさい。手を差し入れて掬うと、粘りをなくしたそれは、さらさらと、手からこぼれて行く。

私は静かな、冷やかな水の表面が、私の小水で一しきり掻き乱されると、ハッと我に返る。透明な水が、ほんのりと色づき、淡い湯気が立ち込めてくる。

しかし、彼女にも時々過ちがある。思い切り水で洗われたと思われるのに、白



い便器の内側に、所々黒褐色の小さな点がりついていることがある。

それを発見した時の私は、油然とした快感に支配されてくる。

はげしい水に洗われたであろうに、消えて行くのを拒絶するように、恰かも小さな、妖しい生物のように、白い壁にへばりついて、思いなしか、びくびくと息づいているようにさえ見える。

じっと見詰めていると、私と彼女の離れがたい結びつきのように、やるせないほどの愛着を覚えてくる。

「ああ……」

私は思わず手をさし出し、それを掻き取るうとして、次の瞬間、慌ててその手をひっこめる。

べったりとはりついたそれを、いかにも荒々しく非情に、もぎ取ろうとしているように思われて、それが彼女の体に、無礼な恥しさを加えるような気がしてくるのだ。

私は、排泄責めにかけられている彼女の姿を思い出す。排泄責めといっても、浣腸などを使うのではなく、唯縛り上げた彼女に私の眼の前で、排泄を行わせるだけのことだが、近頃の彼女は、大分慣れて来て、スムーズな

排泄ぶりを見せてくれるようになっていく。

今こうして、便器の上に跨りながら、私は下の方から、彼女の排泄の姿を、しげしげと眺めている気持になっている。

大きく口を開けて、それを待ちながら、眼はその辺りの動きを凝視している。

彼女の呻き、肉の蠢めき、破れようとして悶える動きの、切ないまでの喘ぎ……。

アフリカにいる蟻の大群の中には、女王様がいて、その女王様が排泄すると、なめ役の蟻が丹念になめて清掃するという話、ふとそんな話が私の脳裏をよぎる。

一糸も纏わず、菱縄に縛られた、彼女の体が、はげしく揺らめいてくる。

ああ、もうすぐだ。

私は張り切れんばかりに眼を開き、その一滴さえ逃すまいと、大きく口を開けている。

しかし……

私の体から、どどどと塊りが、静まり返った水の中に落下して行くのだ。

ううん、と呻いて、覗き込む私の眼の中で水はうすく濁って、私の塊りが、しばらくは居心地が悪いように、ゆらゆらと動いて、やがて各々の位置に納まって行く。

後で洗い流すと、これがどこかで、再び彼

女のものと一緒になるのか、そんなことを思いながら、私は最後の力を振り始める。

## 2

彼女が外出しようとなると、私は、ゆっくりしておいで、とやさしくいう。

月に二度か三度のことなので、彼女は素直に受けとって、つい帰りが遅くなってくる。

それだけ、私の楽しみは長くなるというものだ。

彼女が出て行くと、私は筆筒の引き出しから縄をとり出す。

何分後、私は、鏡の前に据えた金属製の便器の上に跨っている。

一糸纏わない素っ裸になって、菱縄をかけ股間にも縄を廻している。唯自分で縛るのだから、両手を後で縛る訳には行かない。

私は両手を後に廻して合せ、きっちり縛られた気になっている。

もう一枚の鏡が私の後に立てかけてある。胸を張ると、自分ひとりでかけたので、締まらない縄も、ぎゅっと裸身に喰い込んでくる。

鏡の中のそんな姿を眺めていると、私はもう堪らない快感におそわれてくる。

しばらく、あれこれと体を揺すり、縄を体に喰い込ませている。

やがて、私は後で合せた手をほどこいて、股間の縄をぐっと左右にかき分け、二つの尻の上に這わせる。

後にある鏡で、肉付きのいい尻の丸みに、ぴっちり、縄が割り込んでいるのがよく判る。

私の好きな眺めの一つなのだ。

私は、私の眼の前で、四つ這いになって、高々と尻を持ち上げている彼女に、そんな眺めを、何度楽しんだか知れない。そして、それが私を楽しませてくれることを、十分に知っている彼女が、ゆらゆらと揺り動かす尻に、私は思わず唇を近づけて行くのである。

私は、不自由な体が前につんのめって仕舞わないように気をつかいながら、尻を持ち上げる。

顔をねじって後を向くと、鏡の中に、私の持ち上げた尻が、こんもりと見える。

すでに、褐色のその部分が、縄から解き放されて、色めき立っている。

ぐわっ、ぐわっ、と盛り上っては、その目的をまだ果し得ないもどかしさに、切ない息吹きを見せながら、又ずうっと沈んで行く。

それが何回となくくり返された。  
切なさ、もどかしさに、私の顔は赤く染ま

って、のどがからからに渴いてくる。

ぐっと持ち上げ、くると回転させると、私は思わず知らず、

ああ、お役人さま。  
と口走るのだ。

いつの間にか、私は白洲で責められる囚人になっている。

彼女との拷問プレイの時に、彼女が何度となく口走る言葉が、今、私の口から洩れていく。

私は、奉行所の白洲で、並いる役人の眼の前に、そんなあられもない責めの姿を、さらけだしている羞恥と、苦痛に、身も世もあらず悶えながら、その底で何ともいえない快感をじっと噛みしめている。

朝から排泄を差し止められ、番に乘せられて奉行所にくる迄の、きりきりと迫ってくる苦痛……。

いよいよ拷問が始まり、排泄責めにかけることになる。さて便器の上に跨って、思い切り放出しようとするのに、四方八方から射すくめられる視線に怯えて、思うに任せないもどかしさ……。

私は思い切り尻をふり上げる、首を垂れてぐっといきむ。

出たな……。

皆なの視線がそういつている。

ハ、ハイ。お役人さま、出ます、出ます。

私は顔をねじ向ける。鏡の中で、最後の昂揚が盛り上っているのが見える。

……。

臭いな。

誰かがそういう。

私はぐったりと尻をおろす。

かき分けられた縄が、ぱらっと弛んで、その部分に当る。ハッと思っただが、もう遅い。べつとりと縄が汚れる。

私は自分で始末をしながら、便器の中に盛り上ったものを眺めている。

臭いが段々に広がって行く。指を出して触って、その指を鼻に持って行くと、ツンとすえたような臭いが鼻を突く。

見ている内に、形が崩れようとして、やっとな重なり合って、原形を保っている。

ああ……私は狂おしく、その重なりの中に鼻を突っ込んで行くのだ。

### 3

東京に、十何年ぶりかの大雪が降る前の数日、これは又珍らしくぽかぽかと暖かい日。  
私は私鉄沿線のある駅で下りて、附近の住宅



街を歩いていていた。

とある横町を右に見た時、私はハッと歩を止め、次の瞬間、どきどきする胸を押えながら、素知らぬ振りをして元通り少し歩いた。

それは確かに女であった。住宅街の、家の前を流れている小さな溝、郊外地の住宅街によくある風景だ。その溝の上に、その人は尻を捲って跨っている。着物の色からすると、若い女ではないらしいが、高々と捲られた尻が、柔い冬の陽に白く映えた。

私は、我ながら顔を赤らめ、さもさも落し物でもしたような恰好で、通り過ぎた道を引き返した。そしてまた元の通り歩きながら、凝視した眼の中で、突然、その女の股間を、

### 雪崎京人氏直接指導

### 天然色「女相撲」写真

モデル／大塚啓子・東浦ひかる

### 迫力投業連続動作(略号 なる)

カラープリント大手札判

十二枚一組 五〇〇〇円

御希望の方には、御申込次第、早速焼付の上お送りいたします。

白い、透き通るような一条の流が、勢いよく奔って、空間を縦に貫ぬいた。

その白さと、陽にきらきらと輝やいた光りが、私の眼を鋭く突き刺した。

静かに女は着物を下した。やっそこさといふ感じで、溝から離れると、ちらっと周囲を見廻した。やはり若い女ではない。パンティさえつけない習慣のある女であるらしい。

私は瞬間、その女と眼が合ったと思った。女の眼が理由のない怒りに燃えたような気がした。

私はそそくさとその場から立ち去った。

歩いている内に、私はふと、先ごろ読んだ古川柳の中の句を思い出して苦笑した。

垂れながらそこへ寄りなとあごで言い。

暗い露路の奥にしゃがんで放尿していた女が、それでも客を逃がそうとせず、自分の店の方をあごで示している。哀れな、それでいて可笑しい安女郎の姿。

私はまた、何年前かに、彼女と泊った宿の一夜を思い出した。

股間縄を解いてやろうとして、差し入れた手が、べっとりと濡れた部分に当たった。縄もしっとりと重みを増しているような感じだった。

立ったまま、肩からざあっと湯を流す彼女の、腰の辺りは赤く縄の跡を残していた。

彼女は、洗い桶を前に、蹲んでいる私の肩に、体を寄せてきた。

ふつくと、生温い感触が、私の肩の肉に感じられた。

いい？

やがて彼女がそういうと、突然、それは私の肩を伝い、前と後に、さらさらと流れ落ちた。私は、自分の肌を伝っている、白い透き通る流れを眺めた。かすかな臭いが立ち込めた。

量も多くな、それはまたたく間に終って仕舞った。

彼女はなお私の肩に、自分の体を押しつけている。びくびくと動く気配がした。

私は湯水と一緒に流れて、流れ去って行った跡を、名残惜しそうに眺めていた。

やがて、彼女は体を洗うと、湯の中に浸った。ほんのりと染まった顔に、満足そうな微笑が浮んでいる。

私は、今夜はどんな手で責めてやろうかと考えながら、彼女の横に身を沈めた。

(完)

# ☆新人新趣向悶悦夫人の美態競艶場面

## 若妻の魅力を発揮

大手札三枚一組 四〇〇円  
関谷富佐子 略号「へむ」  
久方ぶりに再登場した関谷夫人は相変らずの若々しさと全身にみなぎる責めムードの甘い媚態の中で、もがき身をくねらせて若妻緊縛による魅力を一杯にふりまく。

## 後手縛全裸の魅力

大手札三枚一組 四〇〇円  
関谷富佐子 略号「へめ」  
固ぶとりの裸身に肌をくびるように掛けられまま、はつきりと後手縛りの仔細を見せて、すくくと立ち上った全身、豊かな臀部を揺すっての横坐り或は中腰など。

## 猿轡の裸身を悶ゆ

大手札三枚一組 四〇〇円  
関谷富佐子 略号「へも」  
肥り肉の全裸身を後手に縛り口には猿ぐつわが厳しく噛まされた関谷夫人は、Mの恍惚の境地に浸りながら強烈なライトをその白肌に浴びて全身をくねらせるのだ。

## ムチ打ちの陶酔境

大手札三枚一組 四〇〇円  
関谷富佐子 略号「へさ」  
息つくひまもない激しいムチ打

ちは、彼女の臀部に炸裂し、もがき呻めき喘ぐ一ときが過ぎるとうっとりとした陶酔境が訪れる。虚脱した緊縛裸身のその一コマ。

## 両手吊りで痛める

大手札四枚一組 五〇〇円  
大島照代 略号「へし」  
彼女の限りなきM性が再び嗜虐の魔手を求めて、ここに更に激しい責めが展開された。それは両手を高々と吊り上げて、操り、猿ぐつわ、ムチ打ちと悲鳴を求める。

## 後手縛り竹棒責め

大手札四枚一組 五〇〇円  
大島照代 略号「へす」  
ドス黒い麻縄が後手首、二の腕から胸へと蛇のようにまといつき縄と肌との僅かな隙間には、竹の棒が情容赦なく挿し込まれて、こじられ、その痛さに泣く照代。

## 強烈開股強制縛り

大手札三枚一組 四〇〇円  
大島照代 略号「へせ」  
高々と後手首を挙げた高小手縛りで猿ぐつわ。「さあ、脚を開け」と平蜘蛛のように押さえつけ竹の棒を用い、一直線になるくらい両脚開股を強制する責の手。

## 両手吊りであえぐ

大手札四枚一組 五〇〇円  
大島照代 略号「へゆ」  
両手を揃えて梁から吊られると両脇腹が針で突かれるように痛むが、それにも増して全裸の下半身が無防備のまま晒されることである。そこへ男の視線と魔手が。

## 竹棒強制開股責め

大手札三枚一組 四〇〇円  
大島照代 略号「へた」  
もっと開けもっと開けと強要されながら、逡巡する彼女に対して最後の手段として竹の棒の両端が両方の足首に括りつけられたので淑やかな彼女は顔を真紅にする。

## 厳しき緊縛の正坐

大手札四枚一組 五〇〇円  
大島照代 略号「へち」  
首縄が胸の前でねじられて二の腕を締めつける縄にからみ、女体を小刻みにくびる本縄縛りで諦観して正坐した照代夫人の髪を掴んで引据える非情のS男の行為。

## 責めの魔手に屈伏

大手札四枚一組 五〇〇円  
大島照代 略号「へつ」  
高小手、首縄と身動き出来ない、耐えきれずにどうと横倒しになったまま、激しい息づかいで床の上でころがり回るのだった。

## 竹棒の胴絞め責め

大手札四枚一組 五〇〇円  
大島照代 略号「へて」  
お臍のあたりに当てられた竹棒は背中に背負った竹の棒と連結されて、ぎゅうぎゅう締めつけられると、瓢箪のようにくびれて喘ぐのを情容赦なく開股させてゆく。

## 竹棒開股胴絞め縛

大手札五枚一組 五〇〇円  
大島照代 略号「へと」  
二本の竹の棒で背中と腹部とをくびるように締めつけ、もういやと拒否するのを構わず、更に両足首も竹の棒で開けようとするS男の触手は休みなく続く。

## 八カ月妊婦革具責

大手札四枚一組 五〇〇円  
増田みゆき 略号「へね」  
八カ月とはいえ普通では臨月と変らぬ大きさの双胎腹に対して、全身を拘束する黒光りのする革具が、膨大な腹部を中心にして、ひしひしと締めつけてゆく。

## 九カ月妊婦首枷責

大手札四枚一組 五〇〇円  
増田みゆき 略号「への」  
便々たる九カ月の孕み腹をつきだしている妊婦に重い桎梏の首枷がその両手と共にがっちり固定している臨月間近い妊婦に対する非情きわまりない責めの実験。



## ☆〔花と蛇〕 幻想中河恵子嬢強烈緊縛

## 花と蛇静子立縛り

大手札三枚一組 四〇〇円  
中河恵子 略号「とむ」

「花と蛇」の静子夫人に傾倒する中河恵子が裸身立縛りで、そのすらりと伸びた肢体もあらわに縛り晒しにあっている有様を正面側面背面から微細な点まで捕捉した。

## 足挙げ開股羞恥責

大手札三枚一組 四〇〇円  
中河恵子 略号「とろ」

花と蛇の羞恥責でもこれ程酷い責められ方はないだろうと思われ、恵子嬢考案の強烈縛り。足の裏が頭の上になるまで高々と開股で縛られた華麗きわまりない姿態。

## 片脚挙で晒す裸身

大手札三枚一組 四〇〇円  
中河恵子 略号「とは」

スツールに腰をおろして柱に後手に縛りあげられた全裸の恵子嬢の片脚の足首に縄をかけて、じりじりと上へ引きあげてゆく有様を三葉のフォトによって解明した。

## 強烈エビ縛の苦悶

大手札三枚一組 四〇〇円  
中河恵子 略号「とに」

若々しい全裸の肢体にきびしく掛けた後手縛りで二つ折りにぎゅ

うぎゅう締めつけ、両足首を縛った縄と後手を連結、仰向けに転がすと足首はピンとはねる美しさ。

## 膝頭縛開股竹棒責

大手札三枚一組 四〇〇円  
中河恵子 略号「とほ」

両手首が逆十字になる位に背中で高々と縛り、縄尻で膝頭を思いきり締めつけて引き越すと、両足先が宙に浮いて八の字に開いてゆく花と蛇式羞恥責の一場面。

## 竹棒開股足首縛り

大手札三枚一組 四〇〇円  
中河恵子 略号「とへ」

竹の棒を使って両足首を大の字に開かせられ、或は開いた足首を背中の後手縛りと連結されて、もがきにもがけば、若肌深く縄が喰い込んで凄惨な緊縛感が出る。

## 股間縛の裸身表情

大手札三枚一組 四〇〇円  
中河恵子 略号「とち」

若鹿のように、ほっそりとしてしかもピチピチした肌の手首ももげよと締め上げた高小手の股間縛で、じつと強烈な緊縛感を味わう恵子嬢の表情を三方面から狙う。

## 菱縄縛猿轡の表情

大手札三枚一組 四〇〇円

中河恵子 略号「とり」

瘦型の胸に掛った菱縄は二の腕を恐ろしい程くびって、逆に乳房だけが飛び出したように、むっくりと縄の中から顔を出す猿轡にうるんだ哀憐の表情が美しい。

## 乱痴戯騒ぎの結末

大手札三枚一組 四〇〇円  
中河恵子 略号「とぬ」

腕も手首も痺れ上るほどの厳しい縛りで、あらゆる酷い苛められ方をされた挙句、女の誇りも操も踏みにじられた可憐な美女は、ぐったり安心して横わっている。

## 菱縄縛で床に喘ぐ

大手札三枚一組 四〇〇円  
中河恵子 略号「とる」

菱縄縛りで締めつけただけでも全身がいくつにもくびられたような緊縛感を出すのに、更に床の上に横倒しにして責めつけられれば、凄に縄目に流石の美女もあえぐ。

## 浣腸責の甘い恐怖

大手札三枚一組 四〇〇円  
中河恵子 略号「とか」

縛られた裸身は浣腸のポーズをとらされた。静子夫人が受けた幾度かの洗礼が夫人を慕う彼女に対して今まさに施されようとする甘い恐怖の瞬間を捉らえた。

## 浣腸液の注入直後

大手札三枚一組 四〇〇円  
中河恵子 略号「とま」

お尻を高々と突き出した恰好で大量の浣腸液を注入された美女はあられもなく裸身を身もだえて、只女の羞恥を爆発させないためにその強烈な便意を耐えている。

## 強制浣腸の各姿態

大手札三枚一組 四〇〇円  
中河恵子 略号「とみ」

「花と蛇」で美女責めのテーマとなっている浣腸の姿態を、かくもありなんとフアンの一人恵子嬢の意見もと入れて演じた浣腸マニア垂涎の甘い甘い浣腸のポーズ。

## 浣腸責の美態開陳

大手札三枚一組 四〇〇円  
中河恵子 略号「とめ」

このようにして縛り、このようにポーズさせれば、縄目の痛さに嫌でも応でも浣腸を易々と受け入れざるを得ない美しくも艶なるポーズが恵子嬢の熱演で展開する。

## 浣腸を待つポーズ

大手札三枚一組 四〇〇円  
中河恵子 略号「とも」

「さあ、もうこうなったら、どこからでも浣腸して」と諦めきった表情で自分だけ犠牲になって悪鬼たちのあくなき嗜虐の手にゆだねようとする、あられもなき姿態。





ゴム衣とゴム猿轡	大手札三枚一組	略号△なと	四〇〇円
木村 洋子	大手札四枚一組	略号△めえ	五〇〇円
足首縛りの表情美	大手札三枚一組	略号△あひ	四〇〇円
木村 洋子	大手札四枚一組	略号△あひ	五〇〇円
美しき足首の縛り	大手札三枚一組	略号△あは	四〇〇円
木村 洋子	大手札四枚一組	略号△あは	五〇〇円
足を縛られる快味	大手札三枚一組	略号△あふ	四〇〇円
木村 洋子	大手札四枚一組	略号△あふ	五〇〇円
生ゴムの猿ぐつわ	大手札三枚一組	略号△あふ	四〇〇円
木村 洋子	大手札四枚一組	略号△あふ	五〇〇円
白晒フンドシ着用	大手札三枚一組	略号△あふ	四〇〇円
木村 洋子	大手札四枚一組	略号△あふ	五〇〇円
相撲マワシ着用	大手札三枚一組	略号△あふ	四〇〇円
木村 洋子	大手札四枚一組	略号△あふ	五〇〇円
自刃血まみれ屍体	大手札三枚一組	略号△あふ	四〇〇円
木村 洋子	大手札四枚一組	略号△あふ	五〇〇円
血まみれ女斗場面	大手札三枚一組	略号△あふ	四〇〇円
木村 洋子	大手札四枚一組	略号△あふ	五〇〇円
山原、東浦	大手札三枚一組	略号△あふ	四〇〇円
浣腸とオシメ装着	大手札三枚一組	略号△あふ	四〇〇円
木村 洋子	大手札四枚一組	略号△あふ	五〇〇円
股間縛り恍惚表情集	大手札三枚一組	略号△あふ	四〇〇円
木村 洋子	大手札四枚一組	略号△あふ	五〇〇円
鼻責めいたぶられ集	大手札三枚一組	略号△あふ	四〇〇円
木村 洋子	大手札四枚一組	略号△あふ	五〇〇円
首縄股間膝頭縛り	大手札三枚一組	略号△あふ	四〇〇円
木村 洋子	大手札四枚一組	略号△あふ	五〇〇円
大手札五枚一組	略号△あふ	六〇〇円	
一宮百合子	大手札四枚一組	略号△あふ	五〇〇円
逆エビ責め強烈縛り	大手札三枚一組	略号△あふ	四〇〇円
木村 洋子	大手札四枚一組	略号△あふ	五〇〇円
変型後手縛り麗美裸身	大手札三枚一組	略号△あふ	四〇〇円
木村 洋子	大手札四枚一組	略号△あふ	五〇〇円
後手吊りのもたえ	大手札三枚一組	略号△あふ	四〇〇円
木村 洋子	大手札四枚一組	略号△あふ	五〇〇円
強烈縛りにうめく女	大手札三枚一組	略号△あふ	四〇〇円
木村 洋子	大手札四枚一組	略号△あふ	五〇〇円
顔面を凌辱される女	大手札三枚一組	略号△あふ	四〇〇円
木村 洋子	大手札四枚一組	略号△あふ	五〇〇円
後手柱宙浮き縛り	大手札三枚一組	略号△あふ	四〇〇円
木村 洋子	大手札四枚一組	略号△あふ	五〇〇円
大の字縛り逆さ吊り	大手札三枚一組	略号△あふ	四〇〇円
木村 洋子	大手札四枚一組	略号△あふ	五〇〇円
エビ責めに泣く女	大手札三枚一組	略号△あふ	四〇〇円
木村 洋子	大手札四枚一組	略号△あふ	五〇〇円
股間首縄縦縛り	大手札三枚一組	略号△あふ	四〇〇円
木村 洋子	大手札四枚一組	略号△あふ	五〇〇円
後手首足首連結縛り	大手札三枚一組	略号△あふ	四〇〇円
木村 洋子	大手札四枚一組	略号△あふ	五〇〇円
淫らなる開股縛り	大手札三枚一組	略号△あふ	四〇〇円
木村 洋子	大手札四枚一組	略号△あふ	五〇〇円
縄目に悶える裸身	大手札三枚一組	略号△あふ	四〇〇円
木村 洋子	大手札四枚一組	略号△あふ	五〇〇円
愛玩用牝犬の生態	大手札三枚一組	略号△あふ	四〇〇円
木村 洋子	大手札四枚一組	略号△あふ	五〇〇円
足舐めを強要する	大手札三枚一組	略号△あふ	四〇〇円
木村 洋子	大手札四枚一組	略号△あふ	五〇〇円
足舐めをたのしむ	大手札三枚一組	略号△あふ	四〇〇円
木村 洋子	大手札四枚一組	略号△あふ	五〇〇円
可憐な牝犬の調教	大手札三枚一組	略号△あふ	四〇〇円
木村 洋子	大手札四枚一組	略号△あふ	五〇〇円
前袋をさらす羞恥	大手札三枚一組	略号△あふ	四〇〇円
木村 洋子	大手札四枚一組	略号△あふ	五〇〇円
横屋 峯子	大手札三枚一組	略号△あふ	四〇〇円
横屋 峯子	大手札四枚一組	略号△あふ	五〇〇円
六尺禪のはじらい	大手札三枚一組	略号△あふ	四〇〇円
木村 洋子	大手札四枚一組	略号△あふ	五〇〇円
首枷手枷に泣く女	大手札三枚一組	略号△あふ	四〇〇円
木村 洋子	大手札四枚一組	略号△あふ	五〇〇円
美木乃々子	大手札三枚一組	略号△あふ	四〇〇円
木村 洋子	大手札四枚一組	略号△あふ	五〇〇円
双腕に喰い込む禪	大手札三枚一組	略号△あふ	四〇〇円
木村 洋子	大手札四枚一組	略号△あふ	五〇〇円
横屋 峯子	大手札三枚一組	略号△あふ	四〇〇円
横屋 峯子	大手札四枚一組	略号△あふ	五〇〇円
前袋をさらす羞恥	大手札三枚一組	略号△あふ	四〇〇円
木村 洋子	大手札四枚一組	略号△あふ	五〇〇円
横屋 峯子	大手札三枚一組	略号△あふ	四〇〇円
横屋 峯子	大手札四枚一組	略号△あふ	五〇〇円
可憐な牝犬の調教	大手札三枚一組	略号△あふ	四〇〇円
木村 洋子	大手札四枚一組	略号△あふ	五〇〇円
足舐めをたのしむ	大手札三枚一組	略号△あふ	四〇〇円
木村 洋子	大手札四枚一組	略号△あふ	五〇〇円
足舐めを強要する	大手札三枚一組	略号△あふ	四〇〇円
木村 洋子	大手札四枚一組	略号△あふ	五〇〇円
足舐め訓練の牝犬	大手札三枚一組	略号△あふ	四〇〇円
木村 洋子	大手札四枚一組	略号△あふ	五〇〇円
愛玩用牝犬の生態	大手札三枚一組	略号△あふ	四〇〇円
木村 洋子	大手札四枚一組	略号△あふ	五〇〇円
大手札四枚一組	略号△あふ	五〇〇円	
一宮百合子	大手札三枚一組	略号△あふ	四〇〇円



○ 中河恵子さん。貴女の「春の花園に遊ぶ」を拝見し、びっくりしてしまいました。私も貴女と同じ奇クのというより、はつきり申せば「花の蛇」の大ファンです。男なら誰しもが願うであろう鬼源、川田、田代ETCになりたい。貴女が余りにもはつきり御書きになられたので私は本当かしらと疑いたくなります。今迄さんざ遊びふけり、数多くの女性に接して参りましたが、貴女のような方に出会っ

た事はありませんでした。口で或る程度のことを言っても実際となるとホンの真似事程度でネを上げるか、或は他の目的の為に従う意志も表情もないお人形、私は自己満足は嫌いです。双方に欲びがあつてこそ、本当の満足が得られるのです。その点の貴女のお気持はよくわかります。これは趣味の問題かも知れませんが、縛る、縛られるという事ではなく、泣き、喚き、暴れて逃れ様とする相手も無理強いに押えつけ男の怒りをも混えて縛つてこそM女にも感激があるのでしょうか。私の場合、鬼源の様に時間や日数をかけて責める事は出来ません。時間的にそれが許されないとと思うのです。でも土日を利用してという事が許されるなら、昼夜の別ない羞恥責めで貴女を春の花園に舞う蝶の様にしておげられるのですが……。はじめての便り然も未知の男(四十一才)からにしては、内容が強烈すぎましたかしら、私の縄も浣腸そのものも、貴女を責め、苦しめ、身も世もない程の羞しめを与え、私自身の征服欲も満たす為に用いたいと思います。新幹線を使えば、すぐお会い出来る距離でもあり、せめてお話でもと思ひますが、一寸

遠いのが残念です。続いて筆をお取りになる様なので、次号を楽しみにして居ります。お暇の折お便りでも頂ければ幸甚です。(東京都・川田信雄)

○ 四馬孝先生のさし絵は何となく魅力的であり私達愛読者を楽しませて下さいます。先月号の表紙は鼻責めの画であり大変喜んでおります。私も鼻責めには目のない方で文の中に鼻という字が出ていただけで、衝動的に取りつかれる位です。もっとも鼻に関する画、文、写真等を十分に取り入れて我々鼻責ファンが一人でも多くなる様編集部諸氏に願わずにはいられません。鼻責ファンの皆さん、断乎として挙って頼もうではありませんか。私も一人身でありパートナ―は得たこともありません。自身で楽しんでおりますが、皆様の御意見、経験等誌上でお聞きたいと思ひます。(熊本・TW生)

○ 貴誌の中で小生の最も愛読してやまないものは「花と蛇」であります。せめて毎号四十頁ぐらひは欲しいものです。そして挿画をもっとふやして頂きたい。又「花と蛇」の写真画集の如きものを一冊

特集号として発行して頂ければ非常に嬉しいと思ひます。小説を読んで色々に想像して楽しく思ひ見ていますが、貴誌の専属モデルを夫々に配役して画集を作り、それに若干の説明を付して発行すれば相当の申込みがある事は間違いないと思ひます。切にお願いします。又「花と蛇」特集号の前篇の分は買いそびれたが、申込みも多い様です故、再発行しては、如何ですか。是非欲しいと思ひます。貴誌の中で「花と蛇」が最も楽しい。どうか、いついつまでも連載してほしい。それにしても小説の内容に合った、画集をほしいと思ひます。恐らく全国のファンも同じ気持ちだと思ひます。又モデルの撮影会等催してくれば、是非参加したい。当地に貴誌の女性の読者等あれば教えて頂ければ幸いです。共に大いに語り合いたいと思ひます。(京都府・春日井生)

○ 小生貴誌をもうかれこれ十年愛読しております。我々小市民が他人に害をおよぼすことなく、いや他人のため国家のためになることを念願しながら、貴誌がなくてはならぬ位楽しい存在であるということは、貴誌が人間の動物的本能



の面でいかによい影響を与え、かつ世間の潤滑油になっていくかを物語るものといえましょう。それは私生活の男女間により作用をするものと考えます。社会生活でのものうさが貴誌によってなぐさめられるのです。伊藤晴雨氏もいよいよオヤジだったと聞いております。アメリカが政治の名のもとにいかにも多くの悲劇を生んでいるかを思うとき、善良なこの本は、人間の私生活をより豊かにし、常識ある人間の間で繁栄するものと思えます。(東京・野呂間生)

○ 私事、先般、グラビア写真集の第八集「美しき縛しめを」購入しました。その女斗場面の女だけが、かもし出すエロティックでしかも女性本来の美しさを失わない躍動美に、関係者各位の努力と配慮を感じ心打たれました。又分譲写真の方では「驚づかみの乳房」が良く、「叢で止めをさす」のセッ

## ◎分譲品総目録◎

分譲品満載の豪華な目録を只今作成中です。切手五十円同封いたします。

の上、大阪市阿倍野郵便局私書函第十四号箕田京二宛御予約下されば完成次第第一号を直ちにお送りいたします。

て責めている女性の二葉が、最高の逸品。ついで「女奴隷を弄ぶ二女」も、万人のコレクションをかざるに価する秀作でした。所で、最近の分譲写真の広告を検討すると、浣腸だとか妊婦がやたらと多く、分譲品満載の豪華な目録が完成する事も考え、こころへんで、マンネリズムから脱し、獨創性・新鮮味ある新分野を開拓する意味で、次の写真を考えてもらいたいのです。それは貴社の分譲写真には未登場の「女馬責め」の分野です。四つん這いの女馬の背中に、

もう一人の女性がむんずと馬乗りに跨がり、(両者共、軽装、出来たらショーツをはいた位)(1)女馬の口に手綱をかけ、這いまわらせる。(2)髪を手綱にして情容赦なく責められ、尻の下で呻いている可憐な女馬。(3)馬乗りのまま女馬の豊かな乳房をしごき、弄ぶ冷酷な女騎手。(4)ムチが尻に炸裂し身をくねらせもだえる女馬の表情。(5)両足で女馬の首を絞め艶然たる女王。(6)強制された四つん這いのま

ま操り責められている女馬。又、女騎手を二人にして、一匹の女馬に同時に跨がり調教している所。又二匹の女馬を横に並べその背中に足を大きく広げまたがっている女騎手……etc. その重さに悶えていた女馬が遂に乗り潰され恍惚たる被虐の花園へ、そして人馬一体となってレスボスの桃源境を逍遙する……所まで押し進めたら？マンネリズムから脱却する為分譲写真関係者各位の一考をお願いします。(鹿児島・南国生)

○

「奇ク」四月号にて綾研二様提供の刺青女性雪中の緊縛拝見しました。小さい写真のため、はっきりとは判り兼ねますが左乳房の上に「クモ」の刺青をした女性をしつかりと縛り上げた見事な写真でした。この様な女性をしばって見た欲望にかられたのは刺青マニアの私一人ではないと思います。しかしこの刺青について女性の最も痛い箇所には彫られてある所から描かれたものではないかとも思います。若い女性でこの様な場所に本当に蜘蛛の刺青を入れていられるなら実に素晴らしいと思います。読者通信欄で、是非御知らせ下さい。そして若しその様な刺青女性

が居られるなら、是非御紹介下さい。又山原清子嬢の消息が此の頃トーンとありませんが、綾さんも若し同じマニアであられるなら私同様心淋しい事と思われれます。では御返事何卒御願ひ致します。(神戸・田村信一)

○

新発表の中河恵子嬢の「ねけ」は今年度の傑作、鼻責ファンにとっては誠に有難き贈物でありました。但し大写真の一葉では何故に鼻頭に指を掛けて深奥の密林をのぞかせては下さらないのでしょうか。些かもの足りぬ思いがしました。然し、あれ程の美女を鼻責めの祭壇に載せた御努力には只々感激の至りです。何とぞ次々に彼の鼻責め特写をお恵み下さい。そして鼻責めカメラロボも、いつもながらの麗筆によって活写して頂きたい。恵子嬢の恍惚とした表情を拝見すると、もっともといったためつけて……といった悲願が、伺えるのですが、どんなものでしょうか。この上は彼女の眼を無理に指で翻転してみたり、唇をめくって歯牙検査を試みたり、顔面サドの魔手を加えてみたいものです。梨花さん、大塚さんに優るとも劣らぬ中河さんの麗顔をフルに活用し

て我々を楽しませて下さい。ままになるなら中河嬢を東京に招待してその美貌を握りつぶしてみたいなど思っております。(東京・文京の鼻責ファン)

○

浦和市の中野主弥様。読者通信で拝見いたしました。小生21才になる男性ですが、貴男の記事を読み、非常に羨らやんでいます。小生も夫婦間でのSMプレイが一番良い方法だと思っております。しかし小生には相手もなし、経済的にも結婚は無理な状態です。でもゆくゆくはM的な女性と結婚したいと思っております。今、貴男は奥さんを教育中とのことですが、色々教えていただきたいと思っております。特に教育中のことなど知りたいです。小生も貴男のような、結婚をしたいと思っております。(兵庫県・竜野良一)

○

大阪府の神崎文子様、貴女の読者通信を拝見しました。今迄の人生苦に強く美しく生きて来られた神崎様の意気に感銘させられました。僕は奇クを愛読してからもう七年になり、M女性の方と文通の上、そのSMプレイの共通点を話し合い慰め合えれば、どんなに楽

しいものかと願っているのです。幸いにして貴女のようなM的傾向の強い方と親密さが深められればどんなにうれしいことかと期待しているのです。現在、神崎様が奇クの本のようなSM的な責めに特に関心を持っているとのこと、そして縛られたり、責められていじめしてほしいと望んでおりますが、この僕とは是非共お付き合いの上、そのプレイの実現を計りたいと思えますのでよろしく願います。神崎様が云われるように、縛られたり責められたりすることだけは誰にも負けずに出来ると、自信があるように、この僕だって誰にも負けずにきつと貴女の希望される以上にそのよろこびを実現させます。神崎様の思っていること、特にM的傾向になやんでいること、責められる方法についてその希望を詳しく話して下さい。お互いにMについて語り合い、又プレイを楽しむ事が出来たら、どんなにすばらしい事でしょう。僕自身プレイの経験はないけれど、マニアとして親交して下さい。貴女と文通でSMについていろいろと語り合い、プレイの実現を育て上げてゆきたいと願っています。絶対にプレイバシーの守れる方でないとい困りま

す。勿論貴女の個人的な秘密は固く守ります。貴女の詳しい御返事は神奈川県鎌倉市岩瀬一八二番地の鈴木邦雄宛へ直接下さい。尚直接の訪問と差出人の氏名は固くお断りします。(鈴木邦雄)

○

貴誌益々御隆盛の由、読者の一人として大変喜んでおります。小生此処数年来のキクの愛読者の一人です。小生も原由紀子さん岐阜の赤井茂氏と同好の志です。赤井氏とは余り遠くはない名古屋の南部に住んでおりますので一度親しく語りあいたく思っています。扱て小生が最近見ました独立プロ作品内田高子主演の「異常な体験」が強烈に印象に残りました。内田嬢一人二役の姉は華族の令嬢、一方は街の夜の女。一人の若い社長が婚約者の令嬢が身分が余りにも違うため、自由にならないので夜の女の方を金で買い切って腹いせに、いろいろ仕置をする。圧巻だったのは其の女を自分一人の女としておくため、皮のコレット型貞操帯を、はめてしまう。勿論自由にはさせぬ様鍵つきです。そのはずすところを映画はゆっくり映します。同好の志は是非御覧になるとよいと思えます。笑われる

かも知れませんが、その映画を三回見ました。小生キクでは「心傷たむ遍歴」が好きです。本文中に錠前つきサポーター、ベルト、オシメカパー、貞操帯等がよく出てきますから。今後それ等をどしどし使用する様、西条氏に強く望んでやみません。(名古屋市緑区・森辰二)

○

奇ク愛読者の皆様、お元気ですか。久しぶりにお便りさせて頂きます。五月号拝見致しました。ここ数カ月あまり満足できるようなM記事がなく少々がっかりしていましたが、五月号では迫力あるM記事、絵があり、すっかり気をよくした次第です。まず奇クサロンにある春川ナオミ画伯の二枚のM画のうち、「人間サドル」は何とすばらしいのでしょうか。春川画伯のM画は毎号たのしく拝見しておりますが、今度の「人間サドル」は最高と思います。サドルの上に仰向けにされた男の顔の上にどっしりとのせられた女性のたくましく巨大なお尻、あご、口が完全にお尻の下敷にされ、鼻がお尻のわれ目にはさまれるように跨がられている男の顔、実に実感的です。たくましい重みにおしつぶされ、



# 最新撮影総天然色 カラー・プリント写真

両手吊りに悶える女

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円  
大塚 啓子 略号八てき

後手裸身柱縛り

大手札四枚一組 略号一二〇〇円  
大塚 啓子 略号八てか

縄目にあえぐ裸女

大手札四枚一組 略号一二〇〇円  
大塚 啓子 略号八てく

豊麗な裸身をくびる縄目

大手札四枚一組 略号一二〇〇円  
大塚 啓子 略号八てこ

後手高手小手縛り

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円  
大塚 啓子 略号八てま

長襦袢の緊縛色模様

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円  
東浦 啓子 略号八てみ

緋の腰巻緊縛色模様

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円  
東浦 啓子 略号八てむ

猿ぐつわに呻く女

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円  
東浦 啓子 略号八てめ

柱宙吊り強烈縛り

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円  
東浦 啓子 略号八ても

ポリウムを縛りあげる

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円  
東浦 啓子 略号八てん

縄に苦悶する裸女を狙う

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円  
東浦 啓子 略号八てる

真紅の腰巻着用姿

大手札二枚一組 略号八〇〇円  
大塚 啓子 略号八うお

縄に悶える緊縛色模様

大手札二枚一組 略号八〇〇円  
東浦・大塚 略号八うて

真紅の腰巻着用縛り

大手札四枚一組 略号一二〇〇円  
大塚 啓子 略号八うこ

華麗なる緊縛裸身

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円  
一宮百合子 略号八るむ

みだらな開股縛り

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円  
一宮百合子 略号八るの

責めに疲れた諦観

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円  
一宮百合子 略号八るお

真紅の腰巻姿で緊縛

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円  
一宮百合子 略号八るま

羞らしいの真正面縛り

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円  
一宮百合子 略号八るけ

若肌に喰い込む縄目

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円  
一宮百合子 略号八るふ

高手小手後手縛り

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円  
一宮百合子 略号八るや

いやというほどくさい臭気を嗅がされてこのM男をうらやましく思います。次に読物では芳野氏の「男中」がすばらしいと思います。人物の沖五郎なる青年がマゾ男でないだけに一段と興味深さがあります。マゾ男でない五郎が女主人の前に暴力で圧倒され、ひどい目に合わされる描写がとても素敵です。二十貫以上もある女主人の裸のお尻の下に顔をしかれ、失神するまで責められる五郎、重圧の苦しさにもがき、強烈な臭気にむせび気を失ったことでしょう。そして便所掃除のあと、この女主人のすさまじい小水を顔一面に浴びせられ、最後にチリ紙の代りに舌で拭かせられる描写、胸おどらせてくり返し読みました。芳野氏の今後の御活躍を期待し、どうかこれからも、このようなすばらしい読物を書いて下さるようお願い致します。(大阪・並川新一)

増々充実した内容と相伴って、興趣横溢パラエティに富んだ、これこそマニアのためのマニアの雑誌奇ク。そんな奇クを手にする度に、云い知れぬやすらぎと喜びを覚えるのは一人、小生丈ではないものと確信して居ります。これも全て、編集部を終始一貫した編集方針と、優秀なスタッフの皆様の御尽力のお陰であると同時に長年に亘たる奇ク愛読者諸兄、諸姉の暖かい、そして力強い愛情と支援の成果ではないかと、心から声援させて頂きます。加えて今後も尚一層の躍進と発展を期待すると同時に、陰乍ら祈念して居る次第です。さて、毎号読者通信楽しく拝見させて頂いて居りますが、ここに始めて皆様の仲間入りさせて頂いて頂きたいと思ひ通信致しました。県下の水城、花田、水野、吉村様を始め東京の宮野、香山、原田様、関西の立石、河森様、始めどなたか小生と親しく文通して頂ける諸姉はいらっしゃいませんか？又、F、M派の諸兄も大歓迎です。文通を通してお互いに心ゆくまで語り合うことが出来たら、どんなにか素晴らしいだろうと、思い立つままこの頁を寸借した次第です。日頃の内積した、充たされ得ぬ渴きを、文通交信に依って少しでも治やすことが出来れば、ファンにとっては、何よりもかえがたい心の慰めとなり、明日への糧の一助となるのではないかとと思われまふ。勿論、プライベイトな諸点については、一切触れる

ことなく、同好の志としての、素朴な通信を主旨とし、迷惑や害悪を及ぼさぬことが前提条件であることは云う迄ありません。以上の諸点を遵守し誓言します。そして愛する奇クを熱読する傍ら、今一步積極的に文通交信することが実現するならば、ここに広くファンの皆様に呼びかけのペンを握った次第です。尚、誠に身勝手乍ら差し出し人住所氏名は、通信文内に御記名下されば何かと都合に思います。詳しくは文通の上で語り合いたいと存じます。(愛知県豊川市・小山正昭)

○ その後地味ながら、ますます御発展のよう喜んでいます。Sに興味を抱きはじめてから、二十数年。爾来さしたるM女性にもめぐり会えず、もっぱら貴誌を友として歩んで来ました。読者欄に投書したり、いろいろ注文をつけたりして箕田さんから返事を頂いたりしたのは、もう十数年も前になつてしまいました。KK通信(当時こんなものがありましたね)を見ながら、本誌の伏字を埋めていったことなど、楽しい思い出です。二十年近くも愛読しつづけていると本誌に寄稿されている常連の方

々も年来の知己のような親愛感が出てきます。まだ誰とも御会いしたことはありませんが……。三年間ほど大阪に転動していたときは発行所に出かけたい気持ちで一杯でしたが、いざとなるとなかなか勇気が出ず、また東京に帰ってきてしまいました。最近の読者欄はなかなか活気に満ちて、デパートの呼び出しアナウンスを使ってM女性と会ったり、推理小説もどきの手段でデートする勇敢な男性が現われて心づよく思っております。四月号で大阪の川野氏が提案していましたがKKクラブのようなものを作れないでしょうか。ずっと昔の貴誌に将来のビジョンとしてKK会館の設立などたのしい夢が出ていたことがあります。そこまでおおびらには出来ないまでも同好士が集まって、明るいあのしいSMプレイが出来ると切望しています。貴誌が中心になって企画すると、いろいろ誤解されることも考えられますので、貴誌がバックアップして同好の士のサークルを地域的に作って、あくまで個人的な会合にする。入会の資格は貴誌が責任を以って厳選するといった方法はどうかでしょう。別冊も含

めて貴誌の旧号も二百五十冊近く保存してありますので読書会などを開かれる際は御利用下さい。(東京・大原良)

○ 小生本年三十才になる妻帯者です。先日友人の引越しの手伝いに行き貴社発行の奇クなる雑誌をたまたま手にして読みました。この世にこんな素晴らしい本があるうとは、考えても見ませんでした。早速、市内の書店を探してみましたが、どこにも見当りませんでした。それで住所を控えておきましたのでお便りを出す次第です。小生の特に興味をもったのは妊婦に關する記事並に資料です。(長野市・大沢菊造)

○ 四月号に載っていた「美しき足を求めて」を読んで私は本当に感心しました。私も十七、八才の頃から、女性の美しい足にひかれて以来、いつも、女性の足を思い浮かべることで、気持ちを高めてきました。そんなわけで、四月号の文章や写真は、最も私を満足させてくれました。何故、このように私だけ、女性の足にばかり執着するのかと不思議に思っております。どなたか、その原因なり理

由なりを解説(誌上に)して下されば有難いと思います。私が始めて女性と交際したとき、先ず、女性の足の爪先に、目がゆきました。私はその可愛い足先を見ることがによって、始めてハッスルしたので。これからも女性の足についての文献や資料をどしどし載せて下さるようお願いします。(山口市・根山北)

○ 僕はまだ奇クを買って読んだのは二回にしかありませんが、初めて本を開いたとき、身体ふるえるのを感じました。自分でもどうしてそのようになったのか、よくわかりません。僕はその時以来、すっかり奇クのファンになつてしまいました。僕は奇クに書いてある内容について、すべて興味と関心があるような気がします。こんな僕を、どなたでも結構です。男女を問いませんから、御指導下さいませんか。僕は20才になる写真を勉強している青年です。(東京目黒・忍信一)

○ 私はこの三月、女子短大を卒業して社会へ出た一女性です。私に奇クを紹介して下さったのも、恥かしい責を私の体に教えて下さつ



たのも、二年先輩の女のひとでした。最初雑誌を見せられた時、声も出ない程びっくりしてしまいました。したが、次第に忘れなくなり、

遂にその人の云うなりになって一年余り、——同性愛と云う程深くなものではなく——楽しく過して来ました。でも毎号、その人は

### 増田みゆき双胎臨月蛙腹

大手札印画紙極鮮明焼付

〔双胎臨月蛙腹鑑賞〕

増田みゆき 大手札四枚一組 略号△りけ▽ 五〇〇円

〔明瞭な臨月の妊娠線〕

増田みゆき 大手札四枚一組 略号△りき▽ 五〇〇円

〔全裸の臨月腹鑑賞〕

増田みゆき 大手札四枚一組 略号△りす▽ 五〇〇円

〔双胎臨月腹の威容〕

増田みゆき 大手札四枚一組 略号△りて▽ 五〇〇円

〔垂れた太鼓腹の陳列〕

増田みゆき 大手札四枚一組 略号△りな▽ 五〇〇円

〔臨月蛙腹のアップ〕

増田みゆき 大手札四枚一組 略号△りひ▽ 五〇〇円

〔便々たる臨月蛙腹〕

増田みゆき 大手札四枚一組 略号△りふ▽ 五〇〇円

〔蛙腹に腹帯をする〕

増田みゆき 大手札四枚一組 略号△りま▽ 五〇〇円

〔誇示する双生児腹〕

増田みゆき 大手札四枚一組 略号△りむ▽ 五〇〇円

〔臨月腹に革具装束〕

増田みゆき 大手札四枚一組 略号△りね▽ 五〇〇円

〔臨月腹の股間しぼり〕

増田みゆき 大手札四枚一組 略号△りぬ▽ 五〇〇円

〔亀甲縛りの妊娠美〕

増田みゆき 大手札四枚一組 略号△りた▽ 五〇〇円

〔臨月後手縛り引き回し〕

増田みゆき 大手札四枚一組 略号△りし▽ 五〇〇円

〔臨月の乳房縛りで弄る〕

増田みゆき 大手札四枚一組 略号△りさ▽ 五〇〇円

〔乳房緊縛の臨月腹〕

増田みゆき 大手札四枚一組 略号△りち▽ 五〇〇円

〔浣腸される臨月妊婦〕

増田みゆき 大手札三枚一組 略号△りひ▽ 四〇〇円

〔双胎の臨月剣玉子腹〕

増田みゆき 大手札四枚一組 略号△りふ▽ 五〇〇円

〔臨月妊婦豆絞りの猿ぐつわ〕  
増田みゆき 大手札四枚一組 略号△りふ▽ 五〇〇円  
〔臨月腹に革具装束〕  
増田みゆき 大手札四枚一組 略号△りむ▽ 五〇〇円

お好みの記事にしるしをつけて、私に応用しようとするので毎号どんなものが出るのかとても不安です。その人の趣味が、そしてその為私の趣味も、乱暴な事や苦痛を与える事は好まないのですが、女の人同志のせいか、気を失いそうになる程の恥かしい始好に縛り上げられてしまいます。一度、思い切って私のその時の告白でもお送りしようかと思っています。と云いますのは、去年の暮その人は、結婚されて、私の所からはなれていってしまった、毎日、ボーと思いついてしまふ事が多くなっているから出にふける事が多くなっているからです。私は男の人に肌を見られた事もまして縛られた事もありました。が、本当は、心の中でそういう強烈な場面を想像しています。『花と蛇』は大変男の方の絶讃を博して最高の羞恥文学などと云われていますが、女性の（と云っても特種な一人の女の眼ですが）立場から感想を申しますと、どうしてズベ公とか、ヨタ者ばかりが登場しているのでしょうか。女は余り恐怖心が強いと羞恥心など飛んでしまいます。女を羞恥の極限に追い込むにはどこかやさしい愛がないと駄目です。多くの方と違い不思議にこの有名な小説に私は興奮

しないのです。余りに陰さんで、暗いイメージが私に強すぎるのは子供すぎるからでしょうか。私は山本一章さんの「この女と」と辻村さんの連続カメラ・ハントなどは、体がふるえる程引きつけられるのですが、山本さんでとても可愛い、貴公子のような方ですね。すぐく思いやりがあつて、それで四月号の魔子さんに課した、四態の縛りのポーズの様な凄惨羞恥責——私にとって思いもよらない最高の拷問図です。魔子さんを死ぬ程うらやましいと思いました。でも私にはとうてい名の上を上げる勇氣ありませんので、せめて、奇巧の誌面で慰さめています。（大宮・村まり子）

○ 貴社益々御繁栄段大慶に存じます。私は32才の妻子ある者です。始めてお便りをお寄せします。貴誌を知りましたすでに十数年になります。貴誌を知り人生の生甲斐を感じました事は本当に有難く思っております。一時期に当局の圧迫を受けられました時には不安と焦そうを感じましたが、幸い皆様のお力で再び充実した貴誌を拝読させて頂き本当にうれしく思いました。最近映画のストーリーにも活

躍、進出を誠に楽しく拝見させて  
頂いておりました。私の血が肉が  
おどりました。私は未だ女を自分  
を縛ると云う経験がなかったのも  
ですから、本当に美しさと云うか  
神秘と云うか、征服、否満足感が  
得られました。あれ以来私も第2  
の性と云いますか美の探究を身を  
以って体験したく一度の機会を得  
させて下さる所はと思つて認めま  
した。人生30数年新たな経験を得  
ると云う事は非常に困難な事か  
も知れませんが、生れたからには  
何もかも吸収したいものです。冒  
険かも知れませんが貴誌に頼りま  
して貴誌の会員なりにして頂けた  
らと思つておりますが如何がでし  
ようか。又同志がおられましたら  
紹介して頂けますか。女性の方と  
の文通も期待しては行き過ぎでし  
ようか。夢と希望を与えて頂ける  
と信じまして貴誌に身をゆだねた  
く、ここに一筆認めたしだいであ  
ります。(京都市・人生に夢を持  
つ男・王子生)

我が憧がれのスター水野香代夫  
人の艶姿が四月号に掲載され一気  
に熟読し公表されたい住所も分県  
地図でそれらしき箇所を大体探ぐ  
り、待つ事一カ月。その反響や如

何にと五月号を見れば「奇クサロ  
ン」「読者通信」に皆無。かろう  
じて瀬沼氏の見当ちがい(妊婦)  
の文中(瀬沼氏には悪いが)にサ  
シミのツマのようにたった数行と  
は……嗚呼。せめて新作分譲写真  
に夫人の名でもと思つたがこれも  
見当らず……。余りの事に筆をと  
った次第で、世の肥満女性愛好者  
の皆様もつとトキの声を上げて下  
さい。私もあきらめ四月号の夫人  
の印刷写真を切り取り画用紙で裏打  
ちし、夫人の分譲写真「切腹」と  
小生の妻(水野夫人と同程度の肥  
満女性)の「鉄火場」「切腹」(拙  
作)等のアルバムに、集録した次  
第。最後に岐阜の水野様一度拙文  
を差上げたいと思ひますが……。  
(滋賀・赤畑修造)

初めてお便りします。僕は奇ク  
を読みだしてから約二年半ぐら  
いになります。毎月北海道に住む女  
性から何か通信がのつていないか  
とページをめくるのですが残念な  
がら一度もなく、もの足りない感  
じがしてきます。僕は二十三才の  
公務員ですが、ぜひSMについて  
話し合ったり、プレーの出来る女  
性か、夫婦の方と、つき合いたい  
と思つています。僕の好きなのは

浣腸、羞恥責め、開股縛りなど  
です。僕の胸の内はいつも女性をこ  
のようにして、責めたい。又、反  
対にうんと責められてみたいとい  
う気持ちで、いっぱいです。どうか  
勇気を出してお便りを下さい。そ  
の際の個人の秘密は、かたく守れ  
る方を希望します。くわしくはお  
便りあり次第、答えます。最後に  
大好きな『花と蛇』の発展を願つ  
て失礼します。(北海道旭川市大  
町・木村一郎)

愛読者の皆さんお元気ですか、  
私も奇クの大ファンの一人ですが  
始めの一冊を手にしてから、全く  
奇クの魅力にとりつかれた次第で  
す。奇クの企画は一つの人間誰も  
が持つている潜在的な禁慾をプレ  
イと云うフランクな形で具現化せ  
しめたもので、日々空想の世界だ  
けに迷想している現代人の即効の  
ストレス解消であると云つて過言  
ではないでしょう。空想にだけ思  
い耽り悶々として、それを行動に  
現わせない事程逆に危険と云  
えましょう。奇クの皆さん方のプ  
レイ通信を読む度に何と大人のプ  
レイと云う表現が何んと小気味よ  
く感じられる事か?、現代には不  
可欠なストレス解消であると思ひ

天然色写真最近作

双胎臨月蛙腹写真  
大手札六枚一組 略号「れや」  
増田みゆき

双胎臨月腹強烈縛  
大手札六枚一組 略号「れゆ」  
増田みゆき

臨月腹裸身の媚態  
大手札六枚一組 略号「れえ」  
増田みゆき

股間縛り開股姿態  
大手札三枚一組 略号「れよ」  
中河恵子

羞らしいの股間縛り  
大手札三枚一組 略号「れに」  
中河恵子

黒縄縦縛りの媚態  
大手札三枚一組 略号「れぬ」  
中河恵子

立縛りにあう裸女  
大手札三枚一組 略号「れね」  
木村洋子

開股された股間縛  
大手札三枚一組 略号「れの」  
木村洋子

豆絞りの猿ぐつわ  
大手札三枚一組 略号「れむ」  
木村洋子



ます。奇クの益々の御発展を祈る次第です。と云ってこの私も未だプレイに於てはまだまだ駆け出しで中々同好の諸嬢も見当らずいささかがっかりしております。どなたか私(S男性)とプレイを希望される勇気のある女性はおられませんか? もちろん秘密は厳守致します。私と云う人間を確認して下さい。それから結構です。奇クの読者通信欄でも結構ですし、直接でもかまいません。お互い同好同志で資料の交換なども楽しいと思います。文通の場合は杉並局留にて封書でお送り下さい。楽しい思い出が出来ればお互いにその体験談等を諒承を得れば奇クの読者の皆さんにも読んで頂きたいものだと思っております。日々を空想にだけで、悶々としておられるM女性の方がおられれば御連絡下さい。一日千秋の思いでお待ちしています。(東京都杉並区・田中一)

○ 米子の野坂義孝様。五月号読者通信にて貴兄の一文拝見し、同好の友を得たよろこびのうちに記させて頂きます。貴兄は十数年前から奇クを愛読され春日、鷹野、長瀬、三隅各嬢の活躍された頃からファンでおられる由。小生もそ

の頃からずっと奇クに親しみ、M傾向はほぼ貴兄と同じように思われます。小生の願う所は顔を女性の豊満なお尻の下に敷かれ、その重圧に苦しめられ、その臭気をいやというほど嗅がされたいこと。今一つは女性の烈しい小水を思いきり顔にかけられたり、小水のあと拭くのに使われたチリ紙の匂いを嗅ぎ、なめたり、更に自分の舌がチリ紙の代りとなって、拭かせられたりすることです。五月号の「男中」の中の「五郎」の立場に自分をおきかえていろいろと想像にふけています。貴兄の体験なときかせて頂ければ幸いです。今後M派のため、大いに頑張ります。う。(京都市・S・T生)

○ 中河恵子嬢に拍手を。今月も、「奇ク」の発売日が近づく、今か、今かと、会社から帰ると一番に郵便受けを覗き、「奇ク」の着く日を心持ちに、今日も一直線に帰宅して見ると、見覚えの有る封書が来ていた。心持ちうわずった気持ちで封書の、厚い重みの有る感触を心地良く受け、直ぐにでも封を切りたい所では有るが、「楽しみは後に残して」と思い食事を先に取る事にした。久々に、あの

独特のかぐわしいインクの香りを楽しみながら、夢中でページを繰って行く。「奇ク」を読み初めると時間の経つのも忘れ、一息に読み通すのが常で有るが、先月に続き、今月も又、彼女の手記が私しを一瞬、そのページにクギ付けにし、私しの胸は、妖しく疼きその感激に血が激しく騒ぐ程に痛快な告白文にお目に掛り、繰り返し繰り返し読みかえし、その素晴らしい彼女の緊縛体を想像し、その感動に拙い筆を取りました。その手記と言うのは、申すまでもなく、四月号にて「初縛られの記」を書かれた、中河恵子嬢の事です。五月号でも、又々、「うごめく妖しい虫」を投稿されておられ、その勇気有る行動と言ひ文章の巧みさ。僕の心は、すっかり彼女のとりこになり、彼女の痛々しく縛り上げられた美しい姿をいとおしくも思い。又反面、彼女のすうりと良く伸びた姿態に、もっと激しい責めを加えてみたらと思う欲望にかられるので有る。中河恵子嬢に心から拍手を送るとともに、今後の活躍を大いに期待し、私したちの目を楽しませて下さる事を望みます。そして第二、第三の、恵子嬢の出現を望む。又、僕は女性の美

を、足と手に感じ、その為か、特に開股責め、吊り責め等が好きで何かの本に女性の両下肢に男性が惹かれるのは、その下肢によって母体を支えている為で、腕は、それによく似ている為と言った事が書いて有りましたが、その為か、足責め等を好むのです。それゆえに恵子嬢への思い切り開かれた下肢での受縛体には、ただただ感激のみで有る。私は、未だ女性を縛った事等有りませんが、広島市近郊の勇気有る女性の方で、一度私しの望みを叶えて下さる方がいられましたら編集局回しでお便り下さい。もちろん責任有る行動を取ります。又、こういった事に興味の持ていられる女性の方でもけっこうです。お便り下さい。(広島県・牛田俊一)

○ 河森真理子様「早く私を縛ってくれないかしら」奇ク五月号、奇クサロンの記事を拝見し、共鳴している縛りマニアの一男性です。私は三十六才になる男性で、今まで妻と二人して夫婦プレイを行っています。ゆえに夫婦プレイの写真は五六百枚はあるでしょう。又妻以外にも二、三人の女性と縛りのプレイを行なって来ました。現

小生は旧中学校時代より、雑誌  
単行本等、露仏の文学など乱読に  
近き程、読みあさり、幸い人々に  
交わって恥をかかぬ程度に、知識

〔今月の新版分譲品案内〕

開股竹棒羞恥責め

大手札三枚一組 四〇〇円  
中河 恵子 略号八ねるV  
部屋中央にある柱に両手を縛られ、両脚を竹の棒で大の字に開股させられた恵子嬢の美しくも妖しい魅力の溢れる羞恥責め姿態。

逆エビ責手足縛り

大手札三枚一組 四〇〇円  
中河 恵子 略号八ねきV  
両手首を背後で縛った縄と両足を揃えて縛った縄とを結んでぎりぎり締め上げれば剥玉子のような全裸の肌が苦痛にもだえる。

竹棒開股強烈縛り

大手札三枚一組 四〇〇円  
中河 恵子 略号八ねくV  
二の腕も窪むばかり強烈に括られた後手。僅かに自由な両脚は竹棒を利用して、両足の裏が反り返るばかり猛烈に開かせる。

鼻責めと鼻孔大写

大手札三枚一組 四〇〇円  
中河 恵子 略号八ねけV  
ツンとすました恵子嬢の鼻をめぐりあげるところのアップと鼻孔の穴の中まで覗くアップフォト。

首縄後手強烈縛り

大手札三枚一組 四〇〇円  
中河 恵子 略号八ねこV  
後手高小手に厳しく縛り上げた縄尻で首縄を掛けて締めれば、

いやが上にも両手首は挙がる。

全裸開股膝頭縛り

大手札三枚一組 四〇〇円  
中河 恵子 略号八ねさV  
高小手に縛った後手の縄を思いきり八の字に開けさせた脚の膝頭に通して縛り上げ仰向けに転がせば両足はぱっくりと開く。

菱縄縛り竹棒責め

大手札三枚一組 四〇〇円  
中河 恵子 略号八ねしV  
胸から胴へかけ規則正しい菱縄縛りで身動きも出来ない位、きつちりと締めつけられた柔肌と縄目の間に竹の棒が突っ込まれる。

柔肌に喰込む縄目

大手札三枚一組 四〇〇円  
大島 照代 略号八ねすV  
ほつてりと肉のついた柔肌にぐっと喰い込む縄目の痛さに、身によじらせる全裸の被虐ポーズ。

豊満な全裸を弄る

大手札三枚一組 四〇〇円  
大島 照代 略号八ねせV  
豊かな柔肌をぐっとくびるように縄がけし逞ましい臀部を、ふくよかな乳房をいたぶり続ける。

逆エビに痛める手

大手札三枚一組 四〇〇円  
大島 照代 略号八ねそV  
後手に厳しく縛られた全裸の女性の両足を持って、逆エビの態勢に折り曲げる男の荒々しい魔手。



の集いには最非共案内状を頂きたく今より御願ひ申します。集合場所時刻会費の点御報知下されませう。様。(幸い私も京呉服を商ひ、京阪神、山陽山陰地方。沖村れい子さんの中津川市へも行きます)赤貧洗うが如きと申しますれど、皆様の集いの席に出席致す余力はあります。何卒ノートの端切にでも御記憶下さい。大津市の中河恵子さん。もう結婚されたかも知れませんが中津川市の沖村さんは小生の念願の女性です。和服が好みなれば幸いです。京染、小紋、御召等、御礼として諸兄の申される如く、正直に小生もあく迄プレイのみの交際を申込みたいのです。長々と書き綴りましたが、交際につきまして経歴、現状職業等々又其の人の人間的に何かと約束事があれば御聞かせ下さい。早速に解答申し上げます。只今は岡山市に来ています。金曜夜には帰京の予定です。何卒勝手乍ら永年の読者の一員として末席に加えられん事。出来ればモデルの御方との連絡等、御教えを賜り度く。末筆乍ら貴誌の未永い繁栄を心より祈りつつ又御便り申します。(岡山にて・岡本一)

○

豊かな女性の乳房、これは我々男性にとって永遠の郷愁ではないでしょうか。豊満な双丘に憧れるという事は、すべての男性の夢ではないでしょうか。そのために豊胸術などの痛い目に合せて迄女性はその乳房に生命をかけているのだと思う。小生はこの女性の豊かな乳房を存分に弄び、これを賞味することに限りない喜びを抱いていました。ふとしたことで貴誌を見た小生は、その内容に大いに魅せられ、今後ずっと愛読したいと思うがただ貴誌にもう一つ望みたいことは、授乳時の女性のあの膨脹しきった乳房に対する記事を見たい。その異常なまでに張り切った乳房を責められて、たまらず乳首より乳汁をたらす表情、乳房がはりすぎて自ら乳房をもんで苦悩する表情など、乳汁の満ちた乳房をもてあます女性の写真集が出来たら、きっと全男性の憧れの的になること請合と思ひます。こういった写真を企画されては如何ですか。(静岡県浜名郡新居町・神田五郎)

オムツカバーマニアの皆さん、お元気ですか。先月号を拝見した処、マニアの方が多数投稿されて

おられました。本当に嬉しいことです。私も投稿したのですが、内容にまずい処でも有ったのか掲載されませんでした。大西良子さんにもお詫びだけでもしておこうと思つたのですが、そんなわけで、つい月が経ってしまいました。ダシロップカバーのメーカーをはっきり書かなかつた事を改めてお詫び申し上げます。しかし入手された品がお気に召した御様子で、ホッと致しました。それから私の文にありましたものは、ピンキーバンドと同じ様な品で、名前はカトレア・ショーツと言います。但し国産です。ピンキーの様にゆかぬと思ひますが。私もピンキーのメーカーを探し当てる事が出来ず、カトレア・ショーツを買ったものです。大体が夫婦生活用に使われたものですから、お気に召さかどうかかわかりませんが。自分のウエスト及びヒップを計って身体にぴったり合ったものを作って貰うわけです。もちろん型抜きの一枚ものです。女性なら必ずピタリ合うこと請合います。しかし最初は型代が必要のため、二五〇〇円位です。二回目からは半額以下ですが。私も二枚赤と黒を持って居ります。着用感はまだ良い方で

すね。もし貴女がお望みなら、大阪市西成区天下茶屋三ノ五九、K K西岡ゴム工業カトレア係宛お問合せ下さい。女性名で送ってください。私も大西さんのお便りを拝見してピンキーが欲しくて日活ビル内に問合せましたが取扱って居らぬ由、返信が有り今以て入手出来ず残念です。もし差しさわりがございませうでしたら、代理店を御知らせ願えれば幸いです。東京の有田さん、貴男の通信を拝見致し、余り私の好みと同じなので驚いております。私も女性下着、メンスバンド、オムツカバー、浣腸と欲張りなアニアです。しかし求める物が多ければ得た時の喜びも又多く、一カ月に少くとも二、三は新しいものを求めて楽しんで居ります。しかし貴男の通信に有りました生ゴム張メンスバンドは古くなり、新しいものと思つても中々入手出来ませんが、是非ともメーカーをお教え下さいませんか。オムツカバーのメーカーも合せてお知らせ願えれば、これに越した喜びはございません。尼崎市の藤田さん。男子夜尿帯も女性用夜尿帯も、東京文京区向ヶ丘弥生町3太陽医療品製作所にお問合せになってござんなさい。両方共一三〇

○円位であります。子宮帯も有り  
ますから、お求めになれます。し  
かし実際の責めやプレイには良い  
と思います。日常の着用にはゴ  
ムが少々硬い感じ。私も三種  
共持っています。責写真には良  
いアイデアとなるでしょう。(愛  
知・T O 生)

私は人に云えない私の性癖につ  
いて(普通の人から見れば)発表  
することは恥しいと思ってお  
りましたが、意を決して発表して、意  
見を求めてみることにしました。  
最近の私は先ず第一に細引類の縄  
を見ると、ゾクゾクする気分と興  
奮を感じることが、どうしようも  
ありません。こんな感じは正常と  
はいえないでしょうか。それから  
女性に縛られてみることに興味を  
感じています。それも後手縛りを  
好みます。前手縛りや其の他には  
余り興味を感じないのです。奇ク  
も欠かさず見てきましたが特に後  
手縛りの強烈で、ノウエンな写真  
を見たら、必ず買って一人でタン  
能して居ります。以前には本屋さ  
んで前を通ってみて、たくさん積  
んであるのをチラッと見て通り、  
後で買おうと思って六時頃行っ  
て、既に売切れており、あわて

て数軒の本屋さんを歴訪しても、  
遂に手に入れることが出来なかつ  
たことが何回もありました。私も  
一遍で良いから股間縛りでもエビ  
縛りでも女性からガンジガラメに  
縛られてみたいナと思つて居りま  
す。現在、一人暮らしですが、炎の  
様に心が燃える時は、我慢出来な  
い程になやみます。酒を飲んだ時  
にそんな時があるのです。五本程  
細引を買つてきて奇クを見ながら  
独り縛りも考えました。しかし独  
り縛りは興味半減な気分です。物  
足りない何物かを感じます。女性  
から縛られて自由を制されてみた  
いのが願望です。縛られてセッカ  
ンされてもみたいと思つておりま  
す。実際に経験したことがないの  
で、悲鳴を挙げずに我慢出来るか  
どうか、判りませんが、セッカン  
が、どんなに興味が増すであろう  
かと体験してみたいと思つており  
ます。女性が後手に縛られて居る  
写真を見ると、たまたま好奇心  
が湧いてきます。然し、実際には  
女性に対して、余り手荒なことを  
するのは好みません。私が女性か  
ら縛られてオシオキを受けるのは  
望む所ですが、こんな性質はいけ  
ません。こんな私のマゾ的性癖  
は私一人の秘密であつて、門外漢

黒髪をいたぶる手

大手札四枚一組 五〇〇円  
大島 照代 略号「そや」

菱縄縛りにあえぐ

大手札四枚一組 五〇〇円  
大島 照代 略号「そゆ」

縄目にもだえる女

大手札四枚一組 五〇〇円  
大島 照代 略号「そあ」

強烈後手縛の狂態

大手札四枚一組 五〇〇円  
大島 照代 略号「そき」

牝犬と奴隷の醜態

大手札四枚一組 五〇〇円  
大島 照代 略号「そよ」

全裸二つ折り縛り

大手札四枚一組 五〇〇円  
中河 恵子 略号「そむ」

菱縄しばりの表情

大手札四枚一組 五〇〇円  
中河 恵子 略号「その」

八の字開股羞恥責

大手札四枚一組 五〇〇円  
中河 恵子 略号「そか」

菱縄の全裸を晒す

大手札四枚一組 五〇〇円  
中河 恵子 略号「そえ」

奴隷捨札開股縛り

大手札三枚一組 四〇〇円  
木村 洋子 略号「きむ」

菱縄強烈開股縛り

大手札三枚一組 四〇〇円  
木村 洋子 略号「きま」

竹柱立縛り晒し者

大手札三枚一組 四〇〇円  
木村 洋子 略号「きみ」

柱宙縛り苦痛表情

大手札三枚一組 四〇〇円  
木村 洋子 略号「きめ」

猿轡股間縛り歩き

大手札三枚一組 四〇〇円  
木村 洋子 略号「きも」

の友人知人には決して知られたく  
はないのです。それは虫が良すぎ  
ることでしょうか。然し私は人に  
知られないよう実行してゆくつも  
りです。始めて奇クを見た時は、  
それは余りの突然な本の出現に驚  
きました。一面又満足を感じま  
した。世の中にこんな芸術的な本

もあつたのかと、嬉しく思いまし  
た。私は一人でいる時も時々両手  
を後手縛りの型に持つてゆきいろ  
いと空想したり実行したりしま  
す。女性の後手縛りの写真を見る  
のは大好きです。(長崎市・文屋  
雅美)



## 〔新版Mフォト分譲〕

馬乗り女王様行状記

大手札四枚一組 略号〇〇〇〇円

花田沙登子 略号〇〇〇〇円

両足の首絞め責め

大手札三枚一組 略号〇〇〇〇円

花田佐沙子 略号〇〇〇〇円

肩車の臀部に喘ぐ

大手札三枚一組 略号〇〇〇〇円

花田沙登子 略号〇〇〇〇円

女の腎臭をかかす

大手札二枚一組 略号〇〇〇〇円

花田沙登子 略号〇〇〇〇円

足舐めの強制

大手札三枚一組 略号〇〇〇〇円

花田沙登子 略号〇〇〇〇円

女王様の牝犬調教

大手札八枚一組 略号〇〇〇〇円

花田沙登子 略号〇〇〇〇円

私は此の方十年間程前から奇くの大ファンで毎月本屋で購入して拝読しております。又古本屋にしばしば出入りして奇くを見つけては五、六冊まとめて買い求めては一気に読んでしまいます。で後は又古本屋さんに売り又次のを買い求めます。それが、ここ、一、二年來、ぱったりと奇くの姿が見当らず、十日目毎に市内中の本屋に顔を出して探しますが、見当らず絶望感に取りつかれることがしばしばです。ここ四、五カ月内に岡

山市内の本屋さんでたった五冊見つけ、真先に購入し、もう以前のようには売ったりはいたしません。一度読んだ奇くでも、二、三カ月間をおいて又読むと何か新鮮さを見出し、心に夢と希望を持たせてくれます。今でも大切に大切に恋人を扱うように大事にタンスの中に保存しております。私は幼い時から偉大にして逞ましく強く美しい女性に對するやるせない憧れと夢を持っていました。いうなれば肉感派マゾヒズムとでもいうのでしょうか。今でもデパートでもその様な女性の方を見ると、特に階段や、エスカレーターを上ってゆく、その後方から見ると、ある時は真白い素足の二本の足、又ある時は小麦色のヌメヌメしたストッキングに包まれた逞ましい二本の足が、ぴったりとタイトスカートの包んでいるのが、たまらなく私の心をゆさぶるのです。美しくも逞ましい二本の巨木のような円柱、その上部の巨大なヒップ、ねっとり肉の盛り上った肩、はちきれそうな乳房、全く夢うつつでついて行きます。私は元來、そういう様な女性に魅力を感じます。そういう女性の方から強烈な太股責め、ヒップ責めにされるのが大

好きです。四月号の春川ナミオ様描く『フルネルソン』には全くうっとりとして眺め入りました。偉大な美しいビーナス女性に組みしかれている男はマゾの極致のようない感じがします。それから私は大塚啓子様、山原清子様の大ファンです。特に逞ましい太股や臀部で蹴弄され、もがき苦しむ男性モデルは羨ましい限りです。(岡山市・田中晋)

貴誌を愛読してから、もう十年近くになりますが、初めて便り致します。最近の貴誌は内容は非常によくなっております。毎月の発売日が楽しみです。私の希望を申し上げますと、一度フォトストーリーなるものを企画されては如何でしょうか。例えば女スパイが敵地にのり込んで捕えられ、ありとあらゆる拷問を受ける。最近ピンク映画でも責め場面をよく見ますが、縄の掛け方又責め方も、もう一つ満足出来るものが少いので、是非とも貴誌でフォトストーリー的なものを企画して頂きたく存じます。又五月号では河森真理子さんの「早く私を縛ってくださいかしら」を読まして頂きました。河森真理子さん、是非とも私も貴女とお逢い

致したく存じます。私の好みは全裸緊縛、開股縛、股間縛、擦り責め等で身体に傷をつける様な責めは余り好みません。是非一度貴女とプレイ致したく存じ貴女の御連絡を期待しております。又近頃のM女性の方、御便り下さい。私は二十六才の男子で身長一七六、体重六〇のやせ型です。(大阪・滝本生)

桜の花も咲き近頃は本当に春らしくなりました。私も貴誌を読み出してから、まだ三冊目ですが、私の気持ちをそのままに書いて下さっているようです。自分の口から言うのも変ですが、自分も少しMの方だと思います。他のことはしたくありませんが、大きな女性に又豊満な尻に敷かれてみたい気がします。それもゴムショーツ一枚の姿で、首から口まで馬乗りになつて、両股でぎゅうとはさみ込みほとばしる泉を腹いっぱい飲んでみたくなります。そのようにして下さる女性に、一生のうち一度でもいいから逢いたく思います。春川ナミオ様の「人間ブランコ」の画は、私のイメージとぴったりです。六月号もたくさん載せて下さいね。誌上に出てこられる女王様

ですが、私はまだお顔を見たことがありませんので一度全身の写真でも載せて下さい。それから緊縛モデルの写真ですが、もう少し下の部を見せてほしいですね。なにかしら物足らぬ思いで見えております。私は目次の画にあるような革衣を着た女性が男性に馬のりになっています。写真を見たいと思っています。女性が動物をいじめているところ、殺しているところの画など良いと思います。例えば、小犬を膝で押さえているとか大女がネズミを足で踏みつぶしているところなどです。(大阪・M生より)

初めてお便り致します。神崎文子様、貴女の読者通信楽しく拝見させて頂き、さっそくペンをとりました。小生は一度女の方を思いきり弄び恥しめてみたいと思っておりましたが、いまだ実際に女性を縛る機会にめぐまれず、最近では奇クを読むだけでは、ものたりなくなってきましたので、ぜひこの機会に私と会っていただかせんか。私はまだブレーの経験はございませんので、やってみないとどうなるかはわかりませんが、できるだけのことはやってみるつもりです。二人で協力してやれば、

うまくいくと思います……。私のこの欲求不満を満足させて頂けませんでしょうか。もしお会い下さるならば、4月28日10時に天王寺公園内にあります美術館の入口の所でお待ちしています。もしこの日にうまくお会いすることが出来ない時は5月2日に、同じ時間と同じ場所に、お待ちしております。目印に右手に白いハンカチをまいていて下さいませんか。私の方から声をかけます。では楽しみにお待ちしております。(神戸・吉田進)

「花と蛇」素晴らしいの一言につきる。美女を次から次へと、溢れんばかりのアイデアを十二分に駆使して責めぬく作者の努力を讃えたい。ここ十年来の愛読者だが、「花と蛇」は奇クを愛読しはじめてから最高の読物である。出来たら挿画ももっと、入れてもらいたい。四馬孝描くところの水もしたたる美女の責めに責めぬかれた艶やかな姿こそ、SのSたる小生の最も望むところである。又、美女の魅力の一つたる、黒髪を十二分にいたぶるのは、小生の理想である。今後とも作者の筆が、美女の髪を、鼻を、乳房を、そして……

# ☆傑作迫力Mフオト☆

二人の女性からの責め

山原清子外一名出演

男が屈伏するまで

大手札十二枚一組 略号(ふそ) 三〇〇〇円

臀の下に呻吟する

大手札十二枚一組 略号(ふた) 三〇〇〇円

二女の股責地獄にあえぐ

大手札十二枚一組 略号(ふぬ) 三〇〇〇円

逆エビとムチ打ち

大手札十二枚一組 略号(ふち) 三〇〇〇円

ムチで仕込むズベ公

大手札十枚一組 略号(ふよ) 二五〇〇円

口中の汚水処理器

大手札九枚一組 略号(ふり) 一三〇〇円

顔を玩弄する

大手札八枚一組 略号(ふわ) 二〇〇〇円

豊満な二人の馬になる

大手札七枚一組 略号(ふる) 一八〇〇円

臀臭をかがされる

大手札六枚一組 略号(ふお) 一六〇〇円

口中に汚れた布を押し込む

大手札六枚一組 略号(ふね) 一六〇〇円

縛り人形を踏みつける

大手札五枚一組 略号(ふつ) 一四〇〇円

顔を素足で踏みつける

大手札三枚一組 略号(ふな) 一〇〇〇円

あくことなく、いたぶることを祈って、ペンをおく。(北九州市・調教師志望者)

四月号では思いあまって書いた私の通信をのせていただき、それに沢山のお便りをありがとうございました。送られた読みきれないくらいの手紙に、これが本当かとおどろきました。五月号を見せてもらい、私に対するお返事があまりにも多いので、これもびっくり

してしまいました。いちいちお返事を出さなければなりませんので、字も文章も下手ですし、それになんと言いましても自分一人で生きている身ですので、お許し下さいませ。あれほど孤独の淋しさをなげいていた私でしたのに、四月号の通信をのせていただいたからは、一ぺんに沢山のお友達を知りまして、こんなにうれしいことはありません。今では身体一つなのでデートのお申込みをおこと



わりするのに困っております。皮肉なもので、そうなりますと、よけいに私の気持も静まりまして、この頃ではゆっくり家にいたくなったり、お客さんに冗談を言ったりカンパンのあとで誘われたりするようになりました。今までつまらないと思っていた、こんな私でも男の方が相手をして下さるのだと思うと、はしゃぎたいような気持ちです。先日初めてプレーというをしたときは、相手の方が余り真剣で私の身体を縛りなされるので、私も知らず知らず、その方に愛情のようなものを、感じてしまいました。その方は、「縛られるとあなたは大変美しくなる」と言われました。これから私も男の方に好かれるよう美しくなるよう努力したいと思います。まだ写真をとられる方には、おあいしていませんがもし写真をとってもらえる機会がありましたら、お礼のしるしに編集部へお送りしますから誌上へおのせ下さってかまいません。小柄でやせているので決して見よい顔かたちではありませんが、乳房だけは少しは大きいと、思っています。だからどちらかといえば裸になつて写してもらったら、と思っています。(大阪・神崎文子)

○ 歳月の歩みはおそいようで早いものです。私が奇クを初めて古本屋で見つけて読んでから大変興味が湧き今日では既に五年位になります。その後今日まで毎月楽しみに求めております中に、私も実際に縛りをやり、フोटを撮ってみたいと常々考えておりますが、相手がなく今日まで待つておりました。四月号の大阪府神崎文子さんの記事を拝読致しました。もしお差し支えなければ御社よりご住所をご内示して下さいれば、私方より天王寺は近くて交通便利ですから、早速連絡して見たいと存じます。勿論その場合の秘密厳守は当然の事ですが、その時の御社へのお礼というのですか、初めてのことで分りませんが、何程をお渡ししたらよろしいかお教え頂ければ結構に存じます。遠方の方は連絡が不十分で且つ不便ですが、幸い神崎さんは天王寺ということですから連絡に至極便利に存じます。都合よく参りましたらフोटをお送り致しますから万事宜しくお願い申し上げます。(大阪・辰巳三郎)

○ 河森真理子さん、そして魔子さ

ん。東京に遊びかたがたプレイにいらっしやい。さあ、何にやかやと、つまらぬ心配は抜きにして、新大阪駅発の新幹線であつという間、日帰りも可能です。もし貴女が上京されるとの連絡をいただいたら、まず、駅頭にお出迎え、昼間はあちこち遊んで回りましょう。陽の沈む頃に何処かで楽しく夕食。そして九時過ぎ第一回のショーが始まる頃、ナイトクラブのテーブルで向い合つて語り合ひましょう。十一時、僕の部屋に戻つて、まずは入浴。ナポレオンの香りを賞味して、さてさてプレイの時間です。一夜ゆっくり楽しんで貴女が帰阪する羽田でも東京駅へでも僕の車で送りましょう。勿論旅費その他は僕の負担にて。そうそう、僕自身に就いて述べなければいけませんね。三十才一七〇センチ、独身、セックスには全く関心のない強度のSです。もしご希望なれば条件など親書乞う。(東京世田谷・本村生)

○ 奇ク五月号三月二十二日に確かに拝受いたしました。取るものもとあえず、封を切るのも、もどかしく拝見しました。いつものことながら、毎月奇クの封を切ると

きの胸のときめきは、まるで初恋の頃のようにです。自分ながら不思議です。まず巻頭の「緊縛モデル秘奥談義」を興味深く拝見しました。さすがにベテラン辻村隆氏だけに私達マニヤのツボを心得た文章には只々感銘いたしました。山本一章氏の「この女と」は号を追う毎に充実し、今月号の大塚啓子嬢は素晴らしい写真ばかりでした。こんな立派な腕を持っていられるのに、何故もっと早く、カメラルポを書いてくれなかったかと残念です。どうか、もっともっとモデル嬢を与えて下さって、辻村氏の向うをはって、ルポして下さいよう大いに期待しています。更に、「文代嬢夢魔」「夜の徒然草」「うごめく妖しい虫」「SMカメラ・ハント」等々と、全く息もつかせず、胸ドキドキ、ワクワクさせられます。殊に新しいモデル志願者中河恵子嬢のフोटは、見事です。ね。「うごめく妖しい虫」の文章も一分のすきもなく、立派です。この文章、このフोट、私は一ぺんに中河さんに恋のような感じをいだいてしまいました。これからどのようなフोटや文章を誌上に出来るか、楽しみです。グラビヤがなくなり、一時は淋しく思い

# 次号(七月号)は、五月二十五日に発売します。

ましたが、最近の本誌を読むと、その穴を補って余りあるくらい充実して読みごたえあるのは嬉しいかぎりです。今後共ポリウムのある雑誌として発展されるよう祈ります。(大分・石川宝生)

○五月号はカケネなしに最高の出来栄でした。まことに素晴らしい！言葉のはさみようもない。五月号の作品ベストテン。一、山本章のカメラ・ルポ決定打となる。大塚啓子を登場させ、これがかつてのベテランモデルの健在を紹介すると共に、これでもって山本氏のルポも、人気の裏付けされた。第一位に推す理由。二、花と蛇の三十回記念、七十枚一挙掲載！正月号にと望んでいたが、三十回記念というタイムリーな企画ではうなった。ただし、第一位の山本氏よりは新鮮な又、現状のグラビヤ廃止という点から見たアイデアという点でルポが上で、残念ながら花と蛇は二位とした。三、入選作を大幅に採用その実現。編集のマンネリをふせぐためと、より内容の充実と新鮮さのために大いに賛

成したい。特に今回は「妖紅記」がよい。タイトルも妖しきムードとKKにピッタリ。この人はもっと書ける。ただし、会話が荒けずり。その点に注意すればたいしたもの。四、「縄のある蜜月」を押す。さし絵の新鮮さ、このさし絵はまさに素晴らしい。特に54頁のが上。独特なものを持っている。五、辻村、山本の対談。そのザックバランな会話と、そう入のフオート。5月号でもう山本氏もオプザーバーなしでも一本立で十分にルポの人氣上昇と共にやれる。次はいよいよ麒麟児氏のオブザーバーを。奇クサロンの鏗喜敬一氏の素描、アラジンの印象の絵は面白い。六位から十位まで、書けばまだまだあるが、とにかく五月号は申分なし。目次のカットも表紙も上々。芳野氏の不調をなげく。むしろ彼は一度ガン作マニヤのノートで、かつての麗筆を自由にふるって、そして現代版源氏物語(神酒ファンタジー)の大作という所を期待したい。仙台とかの古川裕子アネゴのカムバック期待。「花と蛇」の前篇の再版も、サービス

として(さし絵のみ加え)期待したい。この辺で新しい読者の要望に応えるのもよいと考えます。絶対に再版しないということも限度あり、一度位は？(夜乃探郎)

○厳しい冬も今や去り陽春の足音が音高く迫っている今日この頃です。時も時、KK誌上にて花原竜子女王様のお呼び掛けを拝見し、感激にふるえております。女王様のご英姿はつとにM特なる小冊子にて拝眼。憧憬をもって一見再見し心から拝跪いたしております。小生昨年末に始めて、東京をはなれ当地に転居、巢を移したばかりです。東京在住時代には同好の有志もあり、二、三人の女王様のご交際もあって時には充実したプレーも経験しておりますが、不馴れな当地で悶々としておりました時です。で正に干天の慈雨と勇み立っておる次第です。申し遅れましたが、当年三十六才、身長は一七三糎、体重は九十斤証券会社に勤務し、地位は最高幹部の一人です。よく女王様方より「豚」と呼ばれておりました。然し決して乱暴したり命令にそむくようなことは絶対に無い事を誓います。お呼び掛けの条件はすべて容れさせて

頂きます。ご連絡があれば早速お膝下に拝跪致してドレイの挨拶をさせて頂く所存です。何とぞご好配の程伏してお願ひ致します。謹みて女王様の弥栄をお祈りして筆を留める次第です。(京都市・別当収)

○河森真理子君。約束通り四月三日午後二時二十分より午後五時三十分迄方違神社バス停附近で待ちました。とうとう待ちぼうけをくわしましたね。当日はキャロル(プレーと青色)で行きましたが道路は駐車禁止のため、困りました。折角今迄縛った女性に使用した紐の中一番気に入ったものを二種類揃えて行ったのですが残念です。Mである貴女はどの様な服装でくるか期待しておりましたが、もし午前中雨が降っていたのでレインコートでも着ていると、早速車中ではレインコートの下は全裸になってもらい、見えない様に縛り上げ、緊縛場(ホテル)へ着くまでに気分的に馴らし、ホテルへ着けば直ちに本格的緊縛を行う予定でした。然しもしこの次会う機会があればこの罰はうけてもらいます。ただしこれは私の奴隷になった時の事です。そこで次の会



う機会ですが月曜日でなく、土曜日の午後七時頃としたいと思えます。百貨店が六時に終わっても七時では間にあうと思います。この通信がもし六月号に掲載されると四月二十九日または五月六日、場所は堺東駅前郵便局前道路上（第一銀行堺支店東側一〇米）に車をとめておきます。車はグレーと青のツートンカラーのキャロルで下二桁の番号は六三です。貴女の目印は四月三日と同じくサンガラスに女性自身を持参して下さい。午後八時まで待ちますから必ず下さって下さい、ただし覚悟しておきなさい。（神戸・前田徹男）

○ 私は奇クの愛読者ですが新刊は高くて入手をためらい、もっぱら古本屋で、旧本を漁っております。しかし近頃は逆に旧本の方が高くなり、しかも入手困難でしばらく遠ざかっておりました。最近古本屋で三月号を久方ぶりに入手し強い興奮を覚えました。私は異性対象のMと女装扮装モデルを希望します。右のような自分の傾向を自覚しましたのは、五年程前書店で本誌を購入してからです。女装の経歴はすでに18才の頃からひそかに一人で楽しんでおりました。が、その当時は特別に人と交った

性癖であるとは思っていませんでした。主に洋装の下着を着用するのが普通でした。何故、男性である私が女性の下着を着用して快感を覚えるのか、その理由はわかりませんでした。近頃では下着だけでは満足できず、実際に完全女装をしてみたいと思うようになりました。世間というオカマとかゲイボーイにもあこがれたことはありましたが、それになりきる勇氣はありませんでした。Mの方は女装させられて（下着類）縛られたり吊られたり、軽く臀部を打撲されるのを好みます。女の人に責められるのは、太股で首を締められた

り、体の各部をなめさせられたり色々あります。しかし肌を大切にしていますので、傷の残るようなプレイは好みません。本誌の女性モデルの方々では、大塚啓子様、山原清子様、それに梨花悠紀子様、山原清子様、それが梨花悠紀子様の大好きです。大塚啓子様の責めの写真を見ていたとたまらなくなりました。山原清子様のボリウムある濃厚な縛りを見てみると、山中で実際に女装して自分で自分をぎりぎりに縛ってみて山原様になったつもりになります。梨花様の吊り責め写真はもう最高のもので、私もあのようにされてみたくてありません。（大阪市・田所忠夫）

## 本誌既刊号在庫一覧表

申し上げます。

既刊雑誌在庫案内

○本誌既刊雑誌は左記一覧表の通り在庫しておりますが、39年に発行のものについては在庫の僅少なものとありますから、お早目に御注文願います。

○従来、雑誌の送料は当社にて負担しておりましたが、今後は三カ月以上予約注文以外（既刊号は含まず）は一部につき送料二〇円（の御負担をお願いします。多数一括してお求めの際は八小包Vにて発送

昭和38年12月号	(送共二七〇円)
昭和39年3月号	(送共二七〇円)
昭和39年6月号	(送共二七〇円)
昭和39年7月号	(送共二二〇円)
昭和39年8月号	(送共二二〇円)
昭和39年9月号	(送共二二〇円)
昭和39年10月号	(送共二二〇円)
昭和39年11月号	(送共三二〇円)

昭和39年12月号	(送共三二〇円)
昭和40年1月号	(送共三二〇円)
昭和40年2月号	(送共三二〇円)
昭和40年3月号	(送共三二〇円)
昭和40年4月号	(送共三二〇円)
昭和40年5月号	(送共三二〇円)
昭和40年6月号	(送共三二〇円)
昭和40年7月号	(送共三二〇円)
昭和40年8月号	(送共三二〇円)
昭和40年9月号	(送共三二〇円)
昭和40年10月号	(送共三二〇円)
昭和40年11月号	(送共三二〇円)
昭和40年12月号	(送共三二〇円)
昭和41年1月号	(送共三二〇円)
昭和41年2月号	(送共三二〇円)

昭和41年3月号	(送共三二〇円)
昭和41年4月号	(送共三二〇円)
昭和41年5月号	(送共三二〇円)
昭和41年6月号	(送共三二〇円)
昭和41年7月号	(送共三二〇円)
昭和41年8月号	(送共三二〇円)
昭和41年9月号	(送共三二〇円)
昭和41年10月号	(送共三二〇円)
昭和41年11月号	(送共三二〇円)
昭和41年12月号	(送共三二〇円)
昭和42年1月号	(送共三二〇円)
昭和42年2月号	(送共三二〇円)
昭和42年3月号	(送共三二〇円)
昭和42年4月号	(送共三二〇円)
昭和42年5月号	(送共三二〇円)

# ◎懸賞原稿募集

△体験、告白、手記▽

皆さまが自分で直接体験されたことや、自らの性癖や性向について訴えたいこと、或はこれだけは、どうしても人に話したい、書いて残しておきたいといった事柄を、どうか腹藏なくお寄せ下さい。皆さまの真実の叫びや思い出などの寄稿を心からお待ちしております。採用篇には賞金三千円以上贈呈いたします。

△創作、小説、物語▽

本誌の内容に適したものでしたら如何なる傾向のもので

も結構です。皆さまの平常抱かれています夢を文章に托してお寄せ下さい。形式も敢えて問いません。但しすべて未発表のものでも自作に限ります。若し引用する部分がありましたら、必ず出処の明記をお願いします。採用原稿に対しては賞金十万円迄贈呈します。

△感想、論評、批判▽

本誌に掲載された内容についてでも結構ですし、又関連したもので結構です。とにかく本誌を読まれて感じられたことを忌憚なく皆さまのペンにまとめて下さい。採用篇

には賞金二千円以上を贈呈いたします。

△(映画、雑誌)通信▽

映画、雑誌、演劇、新聞、週刊誌、或はその他見聞などで特に興味をお持ちになった事項の通信をお待ちします。出処は出来るだけ詳しく記載下されば幸いです。採用篇には本誌三カ月贈呈致します。◎尚、以上の採用篇に対する本誌贈呈の代りに、写真や御希望の方には、代理部分譲品の中から御指定下されば、贈呈いたします。

## ☆編集後記☆

○最も魅力的なモデルである関谷富佐子夫人を取材した「甘い鞭」は辻村隆氏の麗筆によって活き活きと描きだされて、巻頭を飾る力作として必ずやマニア諸氏の肺腑を抉るものと思う。只豊富なフオトの中、極く穏当なもの或少しばかり掲載するに止めたのは時節柄自粛徹底の故と御諒承ありたい。

○懸賞入選の「責め絵のある関係」は異色ある作品として取り上げてみた。同じく懸賞入選の「蛇性の女」と共に味読して頂ける作品だと思ふ。今月号で百万円懸賞の原稿を募集をしているので何卒御応募を願いたい。

○芳野眉美氏の贋作ものは、今月号の「男性

失格」で本来の調子を取り戻したように見受けられる。今後の進展を期待したい。黒瀧氏の「辺城の譜」は(日本婦人部隊奮迅録)の第一陣。毎月読切りにて同じテーマの作品を寄せられる由。御高評をお待ちする。

○鬼六先生の肌の温かさをじかに感じとれるような身近かな「鬼六談義」後篇に至ってクライマックスシーンを展開する「東京情報」と、読みごたえのある文章が続き、斎藤夜居氏の「稿談性風俗資料入門」は、文獻味も豊かな好読物。馬場好男氏「私のマゾ雑記帳」は久方ぶりに寄稿されたMの随筆。

○辻村氏のハントで扱った緊縛女性笹原八千子をルポした山本氏の「この女と」は、一層興味を以て御覧頂けると思ふ。

## ☆本誌御購読の榮 ☆

一月分(1冊)三五〇円△送20円▽  
三月分(3冊)一〇五〇円△送共▽  
半年分(6冊)二一〇〇円△送共▽

本誌は毎月二十五日に全国各地の有名書店にて一斉に発売いたしますが、入手困難の方は直接代金御送付の上、御予約下されば、毎月二十日前後、印刷完成と同時に厳重包装して確実に発送申し上げます。局留の方々は二十五日頃受領して下さい。

奇譚クラブ 定価 三五〇円

六月号 〔第二十一巻第六号〕  
〔通刊第二二八号〕

昭和四十二年五月二十日 印刷  
昭和四十二年六月一日 発行

編集人 箕田 京二  
発行人 吉田 稔  
印刷人 北村 俊夫

大阪市住吉区大領町四丁目六八番地

発行所 暁出版株式会社

(昭和三十一年四月二〇日第三種郵便物認可)  
(国鉄大局特別取扱承認雑誌第一二二二号)

## ☆書店の皆様方へお願い☆

○本誌は口絵、グラビヤ写真の廃止、挿絵の削減、内容の改訂等につとめ、青少年の健全なる育成に關する各条例に指定されないうような充分に注意して編集いたしておりますが、本来成人向として発行を企図しております関係上、未成年の方には絶対販売下りません。特にくれぐれもお願ひ申し上げます。